
ゼロ魔転生物一人称練習作品

Y . A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ魔転生物一人称練習作品

【Nコード】

N2108M

【作者名】

Y・A

【あらすじ】

簡単に言うと、三十歳前のサラリーマンが死んでゼロ魔の世界に転生する話です。

彼は普通のサラリーマンでしたが、鉱石・金属・宝石マニアでしたが、生まれた先が土系統の名門グラモン家だった事から運命が大きく変わります。

プロローグ

輪廻転生。

これは、確か宗教用語だったはずですが、人は死んでも、また新しい命に生まれ変わると。

初めて聞いた時には、『そんなバカな！』と思った自分ではありませんでしたが、今では信じてみたいと思います。

なぜなら……。

どうやら、自分は別の世界に生まれ変わってしまったみたいです。

私、鈴木健吾は二十九歳の独身。

恋人の存在や、勿論結婚の予定もなし。

そこそこの国立大学で資源・エネルギー工学や材料工学などを学んでから大学院へと進み、その修士課程を経てから、中途半端に財閥系の鉱業金属系のメーカーへと就職していました。

研修を終えて配属された先は、何と海外事業部でした。

仕事内容は、資源をほとんど産出しない日本に必要な資源を輸入する崇高な仕事という事になっていましたが、簡単に言えば海外で新しい金属の鉱脈を発見して、現地の政府と定期的な鉱石の輸入交渉を行うというものです。

とは言っても、勿論入社数年目のペーパーの私がそんな外国政府

の偉い人達と直接交渉するわけもなく、先輩鉱山技師達と山を歩いて岩を砕いて観察・分析しと。

普通に下働きとして働いていたのでした。

でも、金属や鉱物は素晴らしい物ですよ。

水晶や宝石のように、そのままでも綺麗な物は沢山ありますけど、ボーキサイトは加工すると、軽銀と称されるほど綺麗なアルミニウムに精製可能なんです。

ホール・エルー法と三層電解法万歳です！

おっと、話が逸れましたね。

そんなわけで、海外で岩山を探索していた我々だったのですが……。

平和な日本と違って、治安が悪い海外ですからね。

反政府武装集団な方々に襲撃され、運悪く私だけ銃弾を胸に受けてしまいました。

「鈴木！ しつかりしろ！」

上司の悲鳴のような叫び声が耳に入ってきて来ますが、私は痛みすら理解できないまま、意識を失ってしまうのでした。

「あれ？ ここは？」

絶対に死んだと思っていた自分でしたが、なぜか意識を取り戻したようです。

ですが、なぜか目が開きません。

不思議に感じていると、なぜか周囲から男性と女性の話し声が聞こえます。

「（実は助かって、病院のベッドの上なのかな？）」

そんな風に思っていた自分だったので、家族や友人とも違う聞き覚えのない声に耳を澄ますと、こんな会話が聞こえてきます。

「生まれたか」

「はい、男の子です」

「そうか。私としては、その子の誕生を大いに歓迎したいのだが、ギーシュが生まれてまだ一週間しか経っていないからな。私が大騒ぎは出来ないのだよ。その子の名前は、必ず私が付けるから」

「はい、旦那様のお気持ちは理解しております」

何とも、昏ドラみたいな話だなと感じる私でしたが、すぐに眠気が襲って来ます。

「（投与された薬の影響かな？）」

そんな風に思いながら、私は再び眠りにつくのでした。

どうも、鈴木健吾です。

あれから数ヶ月が経ちましたが、私は根本的に大きな勘違いをし

ていたようです。

銃撃されて入院していると思っていたのに、なぜか金髪の若い女性に軽々と抱き抱えられて、ティーポとか呼ばれています。

目が見えない内からお腹が空くとなぜか泣きたくなり、泣くと乳首を押し付けられています。

目が見えない内は、これは栄養補給のためのチューブだと思っていたのですが……。

他にも、下はダダ漏れとまるでボケ老人のような状態。

どうやら、自分は赤ん坊になつてしまったようです。

輪廻転生って、本当にあつたんですね。

「ティーポちゃん、お本を読んであげますね」

「あーー」

「ティーポちゃんは、本当にお本が好きなのね」

目が醒めてから数ヶ月が経ちました。

謎の金髪外人の子供として転生を果たした私は、食事が母乳だけとか、下は漏らしまくりという環境にも慣れ、赤ん坊ライフを満喫しています。

あまり深く考えても無駄ですしね。

それと、まるで行動の自由が利かない自分ですので、こうして母親から絵本を読んで貰っているのです。

これも、一種の英才教育ですかね？

一日一冊だけですけれど、絵本には謎の文字が綴られています。

あまり見た事が無い文字ですが、これは文字を習うチャンスです。食い入るように絵本を見て、母親の読みと合わせて覚えていきます。

見た事も無い文字なのに、なぜか母親の言っている事が私に通じるのが不思議です。

しかし絵本はレパートリーが少ないらしく、一週間ほどで同じ絵本に戻りますけど、文字を覚えるには最適です。

「あー（せめて、もう一冊読んで欲しい）」

「さあ、お寝んねしましょうね」

絵本を読んだ後は、母親にベビーベッドに寝かせられます。

眠るまでの間は、色々と考え事をします。

前世の生まれてから、貧乏学生時代や、安月給だった数年間の社会人時代の事まで。

暇なのもありますが、人間は常に考えておかないとすぐに知識を忘れてしまうという問題があるからです。

この周りの状況を見るに、このいかにも中世ヨーロッパ的な世界で自分はどうかやって生きていくか。

貧乏に負けて、大学院で博士課程にいかないで就職した自分ですが、ここで一から金属の研究を行えたら。

いや、本当は研究なんてどうでも良いんです。

私は、金属が作りたいたい！

そんな夢を抱きながら、退屈な赤ん坊時代を過ごすのでした、

「ティーボちゃん、お本を読んであげましょうね」

「お母様、大丈夫ですよ。自分で読めますから」

生まれてから、二年ほどが経ちました。

自分の新しい名前がティーボである事が判明した私は、一歳半ほどで歩き始め、舌足らずながらも言葉が喋れるようになりました。

今では自分で動けるようになったので、好きに本を選んで読んでいます。

「本当に、全部読めるの？」

「はい」

私は、母親に読んで貰っていた絵本を全て一人で全て読みます。彼女は、とても驚いている様子でした。

「凄いのね。ティーボちゃんは」

「ところで、お母様」

「なあに？ ティーボちゃん」

「内容に飽きたので、もつと難しい本が読みたいです」

文字さえ覚えてしまえば、絵本では満足できなくなっていました。

「そうね。旦那様に相談してみますね」

転生して前世の記憶ありなので、生まれてから二年も経てば自分の家庭環境くらいは理解できます。

どうやら、自分は所謂貴族様の家に生まれたいのですが、自分の母親は妾らしく、私は世間で言うところの庶子という存在のようでした。

その貴族家はトリスティンという国にあるグラモン家というらしく、かなり歴史の古い伯爵家らしいのです。

妾と庶子という事で日陰者なのでしょうが、それでもクラモン家の本宅の近くにそれなりの規模の邸宅を与えられて、自分も五男として認知はされているらしいです。

家には、専用のメイドもいます。

分を弁えていれば、そんなに酷い生活でもないでしょう。

そして、自分の父親であるグラモン伯爵は、一週間に一度くらいこの家に来て、自分の頭を撫でて、母とゴニョゴニョとしているらしいです。

母は、子供を生んだ風にはとても見えないまだ二十歳の美女で、没落したものの隣国の貴族家の娘であったそうです。

確かガリアという名前の国でしたね。

何かローマ帝国時代にあったような国名ですね。

何でも、次期国王争いの際に、負けた側を応援してしまって家を取り潰されてしまい。

家族と共にこの国に流れついたところを父に見初められたらしく、今母は一番のお気に入りらしいです。

その辺の事情は、あまり気にしない事にしますけど。別に自分の事でもないですし、母も特に今の生活が嫌というわけでも無いようですし。

多分私の将来は、それなりの教育を受けて領地内で家臣化するか、いつそ独立するのも良いでしょう。

幸いにして、私には鉱物などの知識があります。少なくとも、食いつばぐれる事はないはずです。

「ティーボちゃん、旦那様から許可が出たわよ。本宅で、好きな本を読んで良いそうよ」

数日後、母親から本宅にある膨大な書庫で本を読む許可を貰いました。

考えてみれば、初めて行くグラモン伯爵家の本宅ですが、庶子の私が行って大丈夫なのでしょうかね？

少し心配だった私ですが、その心配は杞憂だったようでした。

「奥様、クララとティーボです」

自宅から歩いて三分ほどの場所にあるグラモン家の巨大な邸宅には、三十歳を少し超えたくらいに見える綺麗な女性が待っていました。

彼女が、どうやらグラモン伯爵の本妻のようでした。

「この子が、ギーシュの弟のティーボなのね」

「ティーポちゃん、ご挨拶をして」

「始めまして。ティーポと申します」

「ギーシュよりも、しっかりしているのね」

「子供の成長は、個人差がありますから」

母親は、私もまだ見ぬ一週間ほど早く生まれた四男に気を使っているようです。

向こうは、本妻の息子ですしね。

「でも、二歳で絵本が簡単でつまらないと言ったんでしょ？」

「はい」

「なら、うちの書庫の本を好きに読むといいわ」

意外と、母と自分は冷遇されていないようでした。

大貴族が妾を持ったくらいで、本妻がその妾を虐めても貴族としての器量を疑われるだけ。

そういう事なのかもしれません。

それと、自分は認知されていて所詮は五男。

絶対に領地を継げるわけでもなく、頭の良い五男なら領地経営に役に立つ家臣になってくれるかもしれない。

彼女は、そういう風に考えているようでした。

「旦那様も、上の子供達も、兵法書や軍学書しか読まないのよ。いくら軍人家系でもねえ……」

軍人家系と言えば聞こえは良いですが、つまりは脳味噌筋肉な旦那や子供達に、奥方は不満があるようでした。

これは私がもつと大きくなってから聞いた話なのですが、グラモン領はトリステイン軍の元帥であるグラモン伯爵が、軍の演習や貴族同士の付き合いで見栄を張って派手に散財するために、見た目とは違ってかなり財政が苦しいみたいなのです。

ですが、領民への税金を上げ過ぎると領地の衰退に繋がるし、周囲の評判も悪くなります。

そこで、クルデンフルフ大公国なるお金持ちの国にお金を借りているようでした。

私は、貴族も色々大変なんだなと思ってしまいます。

「ギーシュも、この環境だね……。ティーボだけが頼りなのよ」
グラモン伯爵の奥方の頭の中では、既に私は有能な政治と財政を見られる家臣扱いになっているようでした。

まだ二歳児なんですけどね……。

「いつでも好きな時に来て、好きな本を読んでいいわよ。どうせ、うちの家の者は誰も読まないし」

奥方の案内で、私はグラモン家専用の書庫に入ります。

そこには、各年代のありとあらゆる書籍が置かれていて、その数は数千冊を超えているようでした。

どうやら、グラモン家代々の当主が少しずつ集めた物らしいです。

「本も、大切な資産だから。固定化もかけてあるわよ」

この世界に生を受けて二年と少し。

ここが、ただの中世に似た世界だと思っていた私ですが、どうやら魔法という物が存在するらしいのです。

詳しい事は後で調べるか聞くとして、グラモン家は代々土の系統魔法の名門として。

ちなみに、母の実家は没落する前は水系統の家系だったみたいで
す。

実際に、母も水系統のラインメイジでした。

「歴史、魔法、経済、文化、生物、植物、鉱物……」

「本当に、わかるのね。凄いわ」

順番にジャンル別に本棚に仕舞われた本を見ていくと、端の方に
一見変わった本の置かれた本棚が存在しました。

「これは……」

「ああ、何でも東方から来た書物らしいのよ。大量に商人が持つて
来て、旦那様が見栄で購入して固定化をかけてあるけど。文字ばか
りだし、何が書いてあるのか不明だし……」

この世界の住民には、サッパリなはずですが。

ですが、私には見覚えのある本ばかりでした。

『製鉄の歴史』と日本語で書かれた本をめくると、裏の表紙には
名前が書いてありました。

『鈴木健吾』と。

この本棚にある書籍には、全て見覚えがありました。少し古ぼけているものの、前世の自分が実家の部屋の本棚に置いていた。

古くは小学生の頃からの教科書や、大学院で研究のために購入した専門書や、職場の上司に進められて購入した技術書まで、他にも英語やドイツ言語の本もあつたので辞書なども置かれていて、確かに文字ばかりで読めなくてつまらない本に見えます。

私には、数年ぶりに出会った自分の相棒ですが。

本当は博士課程に行つて研究を続けたかつた自分が、未練として実家に残っていた。

いつか、再び大学院に入学するためにと残っていた本との再会だったのです。

「屋敷の者に言えば、入れてくれるからね」

「ありがとうございます」

ようやくにして暇潰しの方法が出来た私は、ある程度の時間は庭などに出て子供らしく遊び、余つた時間は全てグラモン家本宅の書庫で過ごすようになりました。

本を順番に片っ端から読み、字を覚えるからと言って貰つたペンや紙に必要な事を書いていきます。

他にも、前世で経験したり、この世界で使えそうな事を片っ端から書いて行きます。

子供の頃に読んだ絵本や漫画や小説のあらすじ。

歌の歌詞。

この世界で作ると売れそうな、主にアイデアが秀逸な物の簡単な設計図など。

日本語や英語やドイツ語も忘れたくないの、定期的に紙に自分で書いていきます。

もつとも、外国語は発音がまいちなのですが。

他にも魔法があるという話で、しかも貴族は全員がメイジで、メイジとして優れている者が貴族が尊敬されると聞いたので、魔法関連の本を探してせめて知識だけでもと学習を開始します。

郷に入れば郷に従えですし。

「グラモン家は、土の名門か。錬金の魔法。金属が作れる！」

早く魔法の練習が始めたくなるような、衝撃の情報でした。

魔法で金属が作れる。

と言う事は、本来であればボーキサイトを原料に複雑な工程を経て作らなければならないアルミニウムの生産工程を減らせる可能性があります。

この中世に似た世界で、電気を大量に使うホール・エルー法でのアルミニウムの精製など困難なので、その工程の一部を魔法で代わりとする。

魔法でも何でも使って、それでアルミニウムが出来たら楽しいだろうなと思ったのです。

なぜと言われても困るのですが、とにかく私は金属が大好きなのですから。

「ゲルマニアという国は、既にコークスの使用が。何でもいいんだ。科学的な炉が駄目なら、錬金でもいい。俺は金属を作るぞ！」

端の本棚にある学術書を数年ぶりに読み返しながら、私は早く魔法を習いたいと切に願うのでした。

プロローグ（後書き）

何となく、もう一作初めてしまいました。
こっちの更新は、あまり期待しないで……。

一話

「それでは、魔法の特訓を始めます」

二歳からの三年間を普通の子供として遊んで成長しつつ、書籍の本を読み続けて過ごした私でしたが、ようやくに父親であるグラモン伯爵から魔法を習う許可を貰いました。

一ヶ月の月日をかけて杖を作り、今日は屋敷の庭で最初の授業のスタートです。

「ティーボお坊ちやま、早速に始めましょうか」

本宅より派遣された家臣が教師役となつて、魔法の特訓がスタートします。

ちなみに、自分の兄であるギーシュも今日から特訓が始まったそうです。

本宅の庭で、他の家臣に魔法を習っているそうです。

なぜ別なのかは簡単な事で、あまりに片方に才能が偏っていた場合への配慮という事らしいのですが、そんな事はやってみないとわからないですよね。

「まずは、基本のレベテーションからです」

魔法には、土、火、風、水と、伝説の系統である虚無と五つがあるらしいのですが、虚無を除いて普通は系統は四つで表されるらしいです。

ちなみに、このレベテーションの魔法は風の系統に当たるらしいのですが、どの系統でも下級の魔法はほとんどの者に使え、魔法の特訓には最適な物とされていました。

それと、コモンマジックという更に誰にでも使える下級の呪文が存在しています。

「集中して呪文を唱えてください」

言われた通りに集中してスペルを唱えると、自分の体が30センチほど地面から浮き上がります。

初めて成功した呪文に、思わず嬉しくなってしまう私でした。

「ほう、一発で成功ですか」

向こうのギーシユの様子は知りませんが、自分は一回目のレビテーションで少しだけ宙に浮く事に成功していました。

「では、今日は魔力が尽きる寸前までレビテーションをかけ続けてください」

魔法上達と魔力を上げるのコツは、とにかく練習する事らしいです。

使えば使うほど細かい加減などが調節できて魔力の無駄遣いを抑えるのに役に立つし、詠唱の速度が速ければ戦闘でも有利となるからです。

教師役の家臣は、私にスペルの書かれた紙を渡します。

「私も、子供の頃はこれを何度も早口で読み続けました。努力する事ですよ」

「わかった」

それから一ヶ月、私はコモン・マジックや系統魔法の下級魔法を

中心に魔法の特訓を続けていました。

とにかく、魔法を限界まで唱えて魔力を鍛え、繰り返しスペルを早口で唱えて速度を上昇させる特訓を続けていたのです。

おかげで、自分でもわかるほどの成果をあげていました。

「宜しゅうございますぞ。慢心する事なく特訓を続けければ、ティーボお坊ちやまはトライアングルクラスも夢ではありませんな」

両親の影響で、得意なのは土と水の系統である事が判明した私でしたが、特に土の方が得意らしく、ブレットという魔法で作った土弾を遠く離れた的に当てたり、30 سانتほどの岩製のゴーレムを生成して、庭を走らせたりしていました。

「いよいよ、明日には旦那様への披露となるのですが……」

そこで、家臣の表情が曇りました。

どうやら、一緒に特訓を始めたギーシュは、そこまで魔法が上達していないようなのです。

「どのくらいに加減すればいいの？」

「ティーボお坊ちやま、申し訳ございません……。幼いティーボお坊ちやまに、こんな大人の事情を……」

私としては、せっかくそこその待遇を得ているのに、本妻の子供であるギーシュに恥をかかせて彼らの不興を買う必要はないと判断したので、特に気にもしません。

何しろ二回目の人生なので、大人の事情くらいはわかる子供だったからです。

そして翌日、私は兄のギーシュと一緒に父であるグラモン伯爵の前で魔法を披露していました。

彼は30サントほどの岩製のゴーレムを生成して目の前で歩かせ、父であるグラモン伯爵を喜ばせていました。

自分は、わざと遅くコモン・マジックを唱えただけです。

本当は、50サントほどのゴーレムで各種スポーツ競技やダンスなどもさせられるのですが。

「僅か一週間とはいえ、僕は君の兄だからね。負けられないよ」

普段はあまり顔も合わせないギーシュが、偉そうに兄貴風を吹かせています。

ですが、二度目の人生で精神年齢が三十歳を超えていると、特に腹も立たないというか、かえって彼を微笑ましくみてしまう自分がいるのでした。

「さて、いよいよ錬金をお教えしましょうか」

魔法の特訓を始めてから二ヶ月あまり、私は念願であった錬金の魔法を教えて貰う事になりました。

「土系統の基本中の基本なのですが、ある程度魔力が無いとゴミしか作れませんので」

家臣役の教師が見本として盛り上げた土に向かって杖を振ると、その土は青銅へと変化します。

「青銅だ！」

「良くご存知ですな」

前世では金属の研究をしていて、今でもグラモン家本宅の書庫にある書籍を読み耽っている私には、金属の見分けは可能でした。

「私は土のラインメイジなので、これで限界です」

スクウェアアークラスのメイジになると、金を錬金できる者もいるらしいのですが、やはり鉱物を精製するよりは効率が落ちるといった話でした。

「そうなんだ。錬金した金属を売って生活とか難しいんだ」

「錬金の魔法は、農地を豊かにしたり、道や用水路を整備したり、ゴミや汚物を分解したり。生活に一番役に立つ事は確かです」

錬金とは、物質の種類や形状の変化という性質を持っているらしいのですが、基礎は単純だが奥が深く。

新しい錬金技術を開発した人は、尊敬され、富も得られるシステムになっているそうです。

魔法の基本は魔力の総量と、イメージする力と、魔力の効率的な使い方に尽きるそうです。

錬金は、そのメイジの力量によっては物凄い事が出来るようですが、それを他のメイジが出来るとは限らない。

いくら凄い事が出来ても、後世に伝えられるかどうかはわからない。

この地に転生してから五年。

自分の住むこの月が二つある世界ハルケギニアの歴史は調べた自分ですが、魔法があるからこそ六千年もほぼ同じような世界が続いているようなのです。

魔法がある程度の無茶を可能にするので、勉強さえすれば誰にでも使える科学が発展しなかったのですね。

「でも、その割にはグラモン家はねえ……」

「ご存知でしたか。旦那様は、塹壕や陣地の構築においては右に出る者はありません」

つまり、平時においては一銭の金にもならない技術であり、ギィシュを除く兄達も、懲りずに同じ道を走っているとの話でした。

「とりあえず、鉄が作れたら売れないのかな？」

「鉄は、スクウェアクラスのメイジでも難しいですな」

そもそも、メイジが錬金した金属や物品には、不純物が多いという欠点があるらしいのです。

目利きの商人に言わせれば紛い物であり、金属も鉱石から精錬するよりは効率的という事で、材料としてか低品質な金属としては安く買い取ってはくれるようでした。

それと、錬金はなるべくそれに近い物質から錬金を行うと、魔力の消費を抑えられるという話でもありました。

「まずは、青銅を目指しましょう」

青銅は、古来より製造されていた銅とスズの合金です。

本来は彩度の低い緑色ですが、スズの含有量が少ないほど銅に近い色となります。

なお、お仲間には銅と亜鉛の合金の合金である黄銅（五円玉）と、銅と亜鉛とニッケルの合金である洋白（五百円玉）と、銅とニッケルの合金である白銅（百円玉）がありました。

「じゃあ、行くよ」

私は、まずは青銅の錬金を目指す事にします。

ただ、漠然とイメージと言われても困ってしまったので、大学院で研究していた際に見た元素式や、結合モデル、電子配置図や、結晶構造などを思い出しながら錬金を続けます。

すると、目の前の土の山は青銅の塊へと変化しました。

「これも、一発で成功ですか」

家臣は、生成された青銅の塊を手にとって探知の魔法を使い、その出来の良さに一人感心していました。

「出来るだけ数を作ってみてください」

その日は、五つほどの拳大の青銅の塊を錬金したのですが、家臣はそれを町に持って行くつもりらしいです。

「町の鍛冶屋に見て貰うのです。その質によって、魔法の実力がわかるのですよ」

翌日、私の手元に一枚の金貨が家臣から手渡されていました。

何でも、私の錬金した青銅はかなり質が良かったらしく、全部で二キユーで売れたらしいのです。

「それで、半分の一エキユーなの？」

「奥様に半分没収されました」

私は、グラモン伯爵家の財政が本気で心配になってくるのでした。

「鉄の錬金ですか？」

「鉱物からの錬金なら可能だよね？」

「ですが、領内に鉄鉱石を産出する山がありません」

毎日青銅の錬金を続けて結構なお小遣いを稼いだ私は、件の家臣に鉄の錬金について聞いてみます。

「砂鉄は？」

「砂鉄ならば安く入りますが……」

砂鉄は、比較的どこにも存在する物です。

砂場に磁石を落とすと、すぐに砂鉄が付くのでわかると思いますが、量は取れるが、チタンなどの不純物が多くて高炉による製鉄には不向きなのです。

鍛冶屋でも、安く買い取って質の悪い鉄に生成し、安い刃物の原

料などに行っているそうです。

「どうやら、この地にはたたら製の製法が伝わっていないようです。

ですが、私ならば砂鉄から鋼を作れるかもしれない。

そう考えたのです。」

「隣国のゲルマニアでは、コークスを用いた高品質の鋼が製造されているそうです。」

「（いいなあ。ゲルマニアで、鉄工所とか経営したい）」

ですがそれは、トリステイン貴族の息子である自分には不可能な事でした。

ならば、今はせめて出来る限りの金属を錬金したい。

そう考えて、家臣に今までに青銅を売って集めた金貨を渡します。すると、数日後には大量の砂鉄と、他にも頼んでいた少量の木炭が届いていました。

鋼の定義とは、鉄に0.2%〜3.0%程度の炭素を含んだ物です。

私は、魔法の凄さを信じて目の前の砂鉄と木炭を錬金し始めます。原子結合図を思い浮かべながら、炭素の含有量を決定し、ケイ素、マンガン、リン、硫黄等を排除していくようにイメージをします。

すると、目の前には大きな鋼の塊と、その他の残骸とが分かれて発生していました。

「やっぱり、材料があると違うね。」

「凄いですね。」

大規模な炉で生産するよりは量は出来ないし、製品の品質は全て私の魔法の精度と魔力の量に比例していいいます。

それでも、うっとりとするような品質の鋼の塊が完成していました。

「では、早速に」

家臣は他に人を呼ぶと、馬車に100リールはあるつかと言う鋼の塊を積んで、『それは、俺のだ!』という私の抗議の視線を無視して町へと移動を開始していました。

品質を見て貰うためらしいのですが、また勝手に売り飛ばされるのでしょうか。

私は、鋼に顔をスリスリしておかなかつた事を後悔します。

「ティボーお坊ちやま! あの鋼は高品質だったそうです! また作って欲しいとの事でした」

家臣は、私にエキユー金貨の入った袋を複数渡します。

「あの鋼なら、高品質の剣が作れるそうです。二千エキユーで売れましたよ」

ところが、どんなに数えても金貨は千枚しかありませんでした。

「奥様が、その……」

相変わらずの半分を搾取。

私は、グラモン家の財政状態をまた心配し始めるのであった。

二話

「ティーボ、ケーキのお替りは？」

「遠慮なく食べなさいね」

「はい……」

私、鈴木健吾改めティーボ・ド・グラモンは十歳になりました。五歳の頃より、魔法の特訓と貴族としての最低限の所作やマナー。軍人家系なので、馬の乗り方や基本的な武器の使い方など。やはり、歴史のある貴族家の子供とは、色々忙しいようです。

他にも、魔法の特訓や、軍人家系という事で戦場に出ても困らないようにと基礎的な訓練もありました。

まあ、おミソの五男で頭脳・財政担当扱いの私に従軍の可能性はゼロでしょうけど。

そこまでで時間は夕方となり、後は私の家庭教師役だった家臣にバトンタッチです。

彼は、アシルという代々グラモン家家臣の家柄の息子らしいのですが、三男という事で私付きの護衛兼付き人のような役職に納まっただけらしいです。

話は逸れましたが、一日の最後にそのアシルに用意させた砂鉄と木炭を使って鋼を錬金します。

正確には、材料の中から必要な原子だけ取り出して再結合・合成しているのですね。

この時代の人達は原子構造など理解していないので、錬金の際にただ漠然と青銅とか鉄とかと考えます。

ですが、自分は研究で原子結合図や実際に電子顕微鏡でその金属を見ていたり、イメージが大切な魔法において一歩も二歩も有利であり、それは高品質の鋼の生成に役に立っているのだと思います。不純物の正体を知っているというのも良いみたいですね。それらの物質に出て行けと念じるだけで効果が出ますし。

他にも、鋼を作った残滓の中からチタンを取り出してみたり。

このチタンという金属は、比較的どこにでもある金属なのですが、いかなせん含有量が少なく、精製にも技術力を必要とする金属ですが魔法は便利です。

大量に岩を集めてから錬金で取り出して鋼を作ったり、自分の杖を近接戦闘も可能なようにチタンジルコニウム合金製にしてみたりと、大量生産は不可能でしたが、完成したチタンのヒンヤリとした感触にウツトリとする私なものでした。

鋼を除くと、量は作れないのでこれらの物品は自分周りと母と住んでいる邸宅の備品へと回されます。

メイドが調理を行う家の調理器具は、チタン製か、最近近所の岩山で発見した採算ベースとしては厳しいですが、ボーキサイト鉱石を精製したアルミニウム製に。

私の好きなアルミニウムは、通称電気の缶詰と呼ばれるほど電気を使うので、まずこの世界では量産は不可能であり、ならばその工程のみを錬金に代行させれば良いと考え。

この世界でも、染色剤や皮なめし剤として使われているミョウバ

ンをアシルに入手させ、それと合わせて錬金を行って比較的安価にアルミニウムを生成する事に成功していました。

やはり、材料や原子配列・結合図などを知っていると、錬金では大きく優位に立てるようです。

ただ、他の人に教えるのが非常に困難で、今はまだ私しか作れませんけどね。

それに、こうして出来上がったアルミニウムも、すぐに売れるわけではありません。

誰も知らない金属ですからね。

そこで、鍋や屋敷の窓枠、エクステリア類。

実は、母は馬車も持っていたので、その主要な部分もアルミ製のフレームに変えて使っていました。

そして、それらの金属に覚えた固定化の魔法をかけていきます。

その物質の酸化や腐敗を防ぎ、あらゆる化学反応から保護される固定化は非常に便利な魔法で、金属の大量生産が不可能なこの世界では大きく役に立っています。

私としても、せっかく作った作品達が腐食していく様を見るのは辛いので、固定化万歳です。

こんな感じほど良く魔力を消費してから、書斎から借りた本を読みつつ、たまに思い付いた事を日本語や英語やドイツ語でメモしつつ、そのまま眠ります。

貴族の家の子供も、つくづく大変だなと思う私でした。

こんな感じで五年間を過ごして来た私ですが、その待遇に大きな

変化が現れました。

庶子なので、生まれてから七歳くらいになるまでは、本宅に行くのは本を借りに行く程度だったのですが、今では週に一回は呼び出されています。

理由は、魔力を鍛えるために毎日行っている、半ば私の趣味である金属の生成錬金のおかげです。

材料を揃えてから錬金というよりは抽出再合成しているので、毎日そこその量は作れる金属が高品質であると評判になり、それがかなりの高値で売れるからでした。

砂鉄と木炭を原料に鋼を。

近くのハゲ岩山から持って来たボーキサイト鉱石とミョウバンでアルミニウムを。

銅とアルミニウムで試しにアルミニウム青銅を作ったのですが、高品質の真鍮として注文が入ったり。

工芸品用に、赤銅を作って売ってみたり。

生成後の鉱石クズから、チタンを取り出してみたり。

金属ではないですが、二酸化ケイ素からガラスが作れるので、世界中に沢山あるケイ素を材料に。

とは言っても、この世界の人間にはわからないと思うので、砂や岩や鉱物の残滓に含まれているケイ素を元に、塩と空気中の酸素と木炭の炭素を原料にした炭酸ナトリウムと、魚や動物の骨と同じく空気中の酸素と木炭の炭素を原料に生成錬金した炭酸カルシウムとでソーダ石灰ガラスを生成する。

ガラスはまず平民の家では入れられず、貴族の家か教会のステンドグラスに使う程度だったので高く売れるのです。

予め作っておいた枠にガラスを流し込んで、板ガラスを作ります。

他にも、様々な金属の合成比率を微妙に変化させて錬金精製を行くと、私の毎日は、十歳の子供にしては忙しい物となっていました。

なお、私は自分と母が使う分以外は、生成錬金した素材の加工には拘りませんでした。

私は、綺麗な金属素材が出来上がる事に嬉しさを感じるタイプだったのと、その先の加工を行う余裕など無かったし、それをする職人や鍛冶屋などは世界中に沢山いたからです。

説明が長くなりましたが、こんな風な事をして銭を稼いでいる子供な私から売り上げの半分を吸い取っているグラモン家側からすれば、私は使える良い子でしょう。

最初は半分を徴収するグラモン家の事をセコいなと感じた私でしたが、グラモン家の庇護に入っていれば処々の面倒な事からは守られるし、いつの間にか自分の屋敷の横に作業小屋などが出来ていたり、始めはアシルだけであったお付の護衛兼家臣が五名にまで増えていました。

私は、領内のギルドから派遣された応援の人達から今日の注文を聞き、アシル達が昼の内に集めていた鉱石や材料を元に金属などを生成錬金します。

余裕があれば、それほど急がない物も作ります。

最後に、ギルドの人間が完成品をチェックして、『明日も宜しくお願いします』とお金を払って商品を持って帰るのです。

そして本当の最後に、売り上げの半分をグラモン家に上納します。

おかげでグラモン家の財政は一息つけたらしく、父と本妻である奥様の機嫌は上々という事で、私はオヤツのケーキを勧められました。

とはいえ、グラモン家の大量出費体質には変わりはなく、私の稼ぎでもまだ足りないらしいのですが。

「テイボーには、本当に助けられているよ。お前は、ギーシュと一緒に魔法学院に行って貰ってから、卒業後には領地の運営に関わって貰うぞ。待遇は、最高の物を用意している」

十歳の子供に話す事ではないと思うのですが、こんな世界では年齢が二桁を超えればという事なのでしょう。

ですが、居心地が悪いです。

なぜなら、隣で慥然とした表情で兄のギーシュが私を見ていたからでした。

彼はまだトッドクラスながらも、青銅製のワルキューレ型のゴレムを巧みに操って周囲の評価は高いはずです。

ですが、毎日の錬金のせいで既に魔力はトライアングルに達し、水の系統の魔法もソコソコ使える私の方が家臣達からの評価は集まるらしく、しかも財政難のグラモン家には無くてはならない存在にもなっています。

ギーシュの戦闘力ならば、上の三人の兄達の方が圧倒的に優れているのですから。

しかも、この兄達も私の事を悪くは見ていません。

自分達が軍人として名を成すために、領地で働いてくれる母親は違うけど出来の良い弟。

そういう評判になっているからです。

そんなわけで、いつの間にか一番立場の弱くなっていたギーシュが、私を良く思わないのは当然なのでした。

「そなたは、クララの新しいポーシヨンの開発にも協力したらしいな」

「ええ、まあ……」

それなりの屋敷とメイドを与えられている母でしたが、やはり家計は微妙に窮屈なわけで、没落当時は薬やポーシヨンの販売で生活をしていた母は、今も内職でポーシヨンの製作を行っていました。

出入りの商人に材料を持って来させて、それを元に薬やポーシヨンを作るのです。

それで結構な額を秘かに稼いで、やはり一定の額を本家に収めていたのです。

そこで私は、研磨剤入りの歯磨き粉とか、長時間肌に付けるのは悪いけど、紫外線を防ぐのに効果的な二酸化チタンの粉末を提供したりと、出来る限りの売り上げアップに協力していました。

おかげで、実は我が家にはお金があります。

グラモン本家ほどの華美な付き合いはほとんど無いですし、屋敷にはメイドが二名に増員と私に母に執事が付いただけ。

警備兵達は、本宅と共用ですしね。

収入に比べると維持費は極小で、屋敷の地下に作った金庫には今までに稼いだ金貨が大量に積まれています。

いくらあるんでしょうかね？
数えた事が無いので知りませんが。

他にも、まだ売ってないですけど、試しに作った物を入れてい
ます。

まずは、誰もが一度は挑戦するダイヤモンド。
炭素を高温高压で圧縮して結晶化させるアレです。

人工的に作ると、天然物とは製造時間の差で結晶に大きな差が
出るのですが、いくつもの見た目は成功作品という失敗を繰り返
して、ようやく天然物に近い結晶構造をしている作品へと到達し
ました。

ただ、これは危険なので世間にはあまり出せませんが。
万が一の際に、手形代わりに使う事にします。

製造過程で、お遊びでブルー、ピンク、グリーン、ブラックなど
のカラーダイヤモンドも作ってみました。

これは、実は不純物が混じっている証拠なんですけど、ピンクと
かは特に人気ですよ。

前世ではプレゼントする彼女もいなかったので、指輪に加工して
母にプレゼントしましたけど。

他にも、酸化アルミニウムが主成分でクロムが不純物として混じ
っているルビー。

不純物が鉄やチタンであるサファイア。

桃色と橙色の中間色のパパラチアサファイア。

二酸化チタンであるルチルが含まれると6放射の星型の輝きを
生じるスターサファイア。

希少なアレキサンドライトや、更に希少なアレキサンドライトキヤッツアイなど。

人造宝石の研究も一時期齧っていた事のある私は、書庫の専門書の原子結合図を元に、様々な宝石の錬金にも成功していました。

もつとも、宝石や金属という物は意外と構成原子の種類が少なく、

自室で、アシル達にその特徴を説明して領内中の山や川などから集めさせた鉱石の含有物を原料に、試作品の錬金して改良を行い、飽きるまで練成したら自作のジュラルミン製のケースに入れて地下室に仕舞うという事を繰り返していました。

今の私の地下室には、大型のジュラルミン製ケースに入れた大量の金貨と、大量に試作して完成した宝石類などが入れています。

盗難が心配ですが、もつともこの地下室にはかなり強力な固定化が何重にもかけてあるので、普通の盗賊では侵入は困難でしょう。

実は、地下金庫の存在は私と母しか知らず、しかも母は子供の貯金に無頓着な少し天然な方でしたので。

「（ああ、ブラックパールの錬金が早くしたい）」

父と奥様は、多分悪い人ではありません。

というか、かなり待遇は良いでしょう。

本妻の子供と同じ教育も受けられていますし。

ですが、隣にいるギーシュの視線がウザいです。

「実は、一週間ほど領内を回って欲しいのだよ」

父であるグラモン伯爵からのお願いでした。

何でも、領民の生活の様子を見たり、要望や陳情を聞いて現地で解決可能なら解決したり。

そういう事をして欲しいそうなのです。

「父上！　と言う事は、僕も亜人退治や山賊退治に参加できるのですね！」

隣で私を睨んでいたギーシュが嬉しそうに父に尋ねますが、彼はきつぱりとそれを否定しました。

「いや、まだ十歳のギーシュにそんな事はさせないさ」

子供なので危険という理由もありましたが、代々軍人家系であるグラモン伯爵家には、代々軍人で武道派な家臣達が沢山存在します。彼らは、領内に亜人や盗賊などが出たという情報を聞くと、目を血走らせながら半ば歓喜の表情でそれを討ちに行くそうです。

子供に出番など無いのです。

それと、暇さえあれば領民達に早期通報を呼びかけているので、グラモン伯爵領の治安の良さは尋常ではありません。

彼らは、常に敵を探しているのですから。

戦闘ジャンキーですね。

頭脳派の私には、正直付き合いきれませぬ。

「恥ずかしながら、我が領の財政が原因なのだ」

つまり、土系統のメイジを出して道路の整備や畑の区画整理。土手や壁の修理など。

予算ではなくて人を出すという事のようでした。

他の人に任せれば出費が発生するが、家臣や子供ならば余計な出費はゼロ。

確かに、素晴らしいアイデアですね。

微妙にセコいですけど。

「上の兄達は、魔法学院にお城務めにと忙しいのでな」

「わかりました」

私は、これからすぐにお城に戻らないといけない父に了承の返事をします。

父はトリスティン軍の元帥で、あまり領地の事には構っていられないのだそうです。

「せいぜい、足を引つ張らないようにしたまえ」

明らかに敵意を燃やす兄のギーシュに、私はどうしたものかと考え込んでしまつたのです。

三話

「予定は一週間ですので、特に領民からの要望の強い地域を中心に回ります」

父から領地巡回を依頼された翌日、私達は屋敷を出て最初の目的地である近くの村へと馬で急ぎます。

巡回団の内訳は、私ティーボ・ド・グラモンとアシルを始めとする家臣五名。

一週間早く生まれた、兄のギーシュ・ド・グラモンとお付の家臣三名。

それと、護衛の兵士達十名の合計二十名となっていました。

始めは自分の方が二名も多かった家臣が、今では逆転して私の方が多くなっています。

いくら錬金のプロでも、私は子供ですので、誰かに攫われでもしたらグラモン領は大損害ですからね。

それで家臣が多いんですけど、当然私に対して兄ギーシュの不快感が向くわけです。

奥様に自分が虐められでもすれば気分が晴れるのですが、彼女はこういうわけか妾の子供である私を気に入っています。

常に入る物よりも出る物の方が多くて、財政的に非常に厳しいグラモン伯爵領。

その中で、常にお金のやり繰りに苦労している現実的な彼女。

しかも、生まれた子供達も父親に似てお金の流れに無頓着であった。

四番目のギーシュも微妙で、駄目かと思ったところに自分で生んではないが五男が、独自の錬金理論で売るとお金になる金属を毎

日作るようになっていた。

しかも、話してみると軍事よりも内政や経済方面に才能が見出せた。

彼女は、私なら将来のグラモン領の借金体質を改善できると感じて、物凄く気を使ってくれるようになりました。

結果、四男のギーシュがおミノにされて、彼の機嫌が良く無いのですが。

「さあ、最初の村に着きましたぞ」

馬で三十分と進まない内に、最初の村に到着します。

人口は百人ほどでしょうか？

普通の田舎の農村と言った感じの村では、村長以下村の主だった人達が私達を待ち受けていました。

「ようこそいらっしやいました。グラモンのお坊ちやま方」

挨拶もソコソコに仕事が始まります。

まずは以前の大雨で大きく崩れた道の補修や、畑の区画整理の手伝いなど。

他にも、事前に刈り取ってあつた草などを錬金して肥料を作ったりと、意外にも家臣達は細々と動いています。

魔法は常に使って訓練した方が良く、ならば金の無いグラモン領の家臣達は領地を豊かにする工事で魔法を訓練した方が良い。

収穫が上がれば税収も増えるしという事のようにです。

アシルの話によると主に奥方の命令らしく、メイジの家臣達は口

ーテーションを組んで定期的に領内を回っているようでした。

「じゃあ、俺も……」

「ティーボお坊ちゃまは、なるべく魔力を温存していただきたく」

自分も手伝おうと思った私に、家臣のアシルが止めに入ります。

「今日の夕方に、ギルドから砂鉄と木炭が届くのです」

つまり、毎日の鋼の錬金からは逃れられないようでした。

「それよりも、村内の裏山をご覧になられては？」

アシルとしては、鉱石の外観を見てそれを材料に何を作れるのかすぐに理解する私に、なるべく材料にすると便利な鉱石を探してほしいようでした。

「わかった」

他の家臣達の作業を手伝っているギーシュを尻目に、私は村長の案内で村にある山へと移動します。

「いかかでしょうか？」

最近、領内から調達している鉱石の類ですが、勿論アシル達が直接ツルハシを振るって採取しているわけではありません。

近くの領民に石の特徴を見本で伝えて、それを掘らせた物を回収しているのです。

当然量や種類によって買取金額が違いますから、自分達の村の近くに私の気に入る鉱石があつて欲しいと願うのは、村長としては当然の願いなのでしょう。

「珪石か……」

樹木や草に覆われた山には、珪石が多数含まれた岩が置かれていました。

この珪石とは、簡単に言えば石英や水晶の事で、石英は地殻を構成する非常に一般的な鉱物です。

火成岩・変成岩・堆積岩のいずれにもしばしば含まれる物で、その中でも特に無色透明なものを水晶と呼び、お値段が高くなるのです。

「水晶を掘る連中がいて、ここのは売り物にならないと言われたんです」

確かに、このレベルの珪石だとセメントの材料がせいぜいで、しかも私はセメントは興味がありません。

というか、子供の内からセメント工場の経営は不可能でしょう。大人になってから考える事とします。

セメントに関する知識と、生産設備の簡単な設計図くらいは書けますが、自分はまだ子供なのでから。

「（上手く、二酸化ケイ素の結晶をイメージ出来れば……）」

私は、自分の体の倍はある珪石の塊に向かって錬金の呪文を唱えます。

すると、目の前に高さ2メートル幅50センチほどの巨大な水晶の柱が出現しました。

やはり、元の材料があると錬金も楽ですね。

「凄い！ これはいくらで売れるんだ！」

「水晶玉がいくつ取れますかね？」

錬金生成とはいえ、完全不純物無しの水晶の柱にアシルも村長も驚いているようでした。

「アシル。鉱石の代金を村長に」

「はい」

私は、村長に定期的に石英入りの鉱石を買い取りにやらせる事を伝える。

「岩を砕いて、この色の部分が多ければ多いほど良質です。なるべくそういう岩をお願いします」

「かしこまりました」

アシルから数十枚のエキュー金貨を貰った村長は、ご機嫌な表情を崩そうともせず、アシルも錬金された水晶を傷を付けないで運べと兵士達に命令していました。

「大きい水晶だな。いくらで売れるんだ？」

「さあ？ 俺らには想像もつかん」

兵士達が巨大水晶をそつと馬車に積んでいる間にも、適当な珪石

の塊を見つけた私は錬金を続行します。

普通の水晶は成功したので、これに鉄イオンを均等に加えて紫水晶アメジストに。

硫黄を加えてレモン水晶に、同じ場所に微量ながらも角閃石を見つけたので緑水晶に、どこにでも多く存在するアルミニウムイオンを加えて煙水晶スモーキークォーツに、紫水晶アメジストに放射線を加えて作れる黒水晶モーリオンに、微量のチタン、鉄、マンガンが含有しているからと考えられている紅水晶と。

他にも、紫水晶の色エネルギー準位の操作を試行錯誤しながら黄水晶シトリンや、マディラシトリンと称される深いオレンジの色相を彩るシトリンの作成も行い、水晶の中にわざと金紅石の針状結晶を入れて星彩効果を出してみたりと、気が付けば大は大人が両手で抱えるくらいから、小は拳大までと。

多くの水晶の試作品が完成していました。

「でも、夕方になってしまったな」

結局、もう一つ村を回る予定が一つになってしまい、鋼の錬金は明日に持ち越しとなりましたが、鋼を取りに来た商人は特に怒ってはいないようでした。

「凄い！ まるで天然物と違いがない！ しかも、大きくて不純物もない！ すぐに買い手を探しますので！」

商人は、私の作った水晶を全て持ち帰ってしまいました。

水晶を愛でる時間が欲しかったのですが……。

「……………」

そして、今日は真面目に道路の補修を行っていたのに、あまり目立たなかったギーシュは、私を睨み付けているようでした。

「うん、移動だけしてまるで働いてないね」

「ティーボお坊ちやまは、錬金をしていた方がグラモン領のためになりますので」

一日目の予定が遅れたので、その後の六日間は早足で指定された村や町を回り、地味に道路工事などを続ける一行でしたが、私は一切作業には加わりませんでした。

アシルと一緒に周囲の山野や川原で使える石や鉱物の選定を行い、地元の住民達に、こういう石をこれくらいの頻度でこれくらい集めると、このくらいのお金になると説明をします。

実際に錬金を現地で行って、夕方に商人やギルドの人間が商品を馬車で引き取っていく。

移動があるだけで、いつもと変わらない日々なのです。

多分、親方様のご子息二人が参加したという事にだけで意義があるのでしょうか。

それでも、量は少ないながらも色々な鉱物が採集できる場所があったのは良い事です。

詳細な記録をアシルが取っていたので、これからは色々な金属が手軽に作れるでしょう。

ケイ素を主成分とする土くれから、青銅を作るのは魔力が勿体ないのです。

主成分や構成元素を含んだ鉱石や材料を元に、本来であれば複雑な製造過程や多大な設備を使う金属や宝石・物質などを錬金に補填させて生成する。

毎日、大量の魔力を使うと次第に自分の魔力が上昇している事が理解できます。

もっと色々な物も沢山作りたいし、時間が空いたら魔法メインではなくて反射炉やガラス工房やセメント工場なども作ってみたい。

屋敷への帰り道で希望に胸を膨らませる私でしたが、完全におミソとなっているギーシュの不満は消えていないようでした。

「ティーボ！ 決闘だ！」

屋敷に帰った翌日の朝、私が朝食前の鍛錬をしているところに普段は滅多に顔を合わせないギーシュが決闘を申し込んで来ました。

グラモン家に生を受けてから十年と少し。

私は、この母親違いの兄であるギーシュとは、あまり交流がありませんでした。

私自身が、『どうせ妾の子供だから』と遠慮していたのと、他に色々と忙しかったという理由もあります。

良く本宅の書庫に行く時に顔を合わせるのですが、あまり話もし

ません。

彼には家臣の子供達がくっ付いていて、何か自分には入り辛い空気がありましたし。

五歳からは、学業に魔法に貴族としての教育に自分の知識欲を満足させる勉学に錬金と。

常に忙しかったので、彼が気にならなかったという理由もあったのです。

父や奥方様も、変にくっ付けて争うよりはという事で、無理に私達を一緒にさせなかったようです。

本妻の子供と、妾の子供。

どの世界でも、少し複雑な部分があるようです。

「ギーシュ兄様、なぜ決闘など？」

一応は気を使って兄様などと呼びますが、あまり話をした経験も無いのに、いきなり決闘はないだろうと思ってしまっ私でした。

それに、軍人家系という事で体は鍛えさせられています、十歳の子供に出来る事など高が知れていますし、私はそもそも運動神経が微妙です。

思えば、前世では運動会前日は鬱な子供でした。

今は、物凄く普通だと思います。

たまに、鉱物探しにフィールドワークをしている影響で持久力は平均よりは上だと思つのですが。

「僕は、君の存在を認めない！」

「いや、認めないと言われても……」

実際に、グラモン家に生まれて生きていますからね。

全否定は困るのです。

「先週は、領内の視察に出かけたんだぞ！ 僕が働いている横で、チマチマと錬金ばかりして」

言わんとしている事はわかりますよ。

私の錬金はグラモン家の収支には関わりますが、グラモン領の領民のためにはなっていない。

そういう事なのでしょうが、私が一定数の錬金を行うのは、これは義務ですからね。

本来日陰者の私達親子が、どうにか認めて貰うためのね。

そう考えると、自分の努力が足りない癖に、人に難癖を付けてくるこの兄に次第に腹が立つてくる私でした。

「大恥をかいても知りませんよ」

「君こそな！」

私は、二度目の人生で初めての決闘に望む事になるのです。

「行け！ ワルキューレ！」

「行け！ 名前ないや！」

秘かに屋敷の奥の普段は誰も近寄らない森の中で、私とギーシュ

はお互いに杖を振ります。

ギーシュは、バラの花の形をした杖を。

私は、チタンジルコニウム合金製の長さ80センチほどの杖を。

そして、地面からギーシュは青銅製のワルキューレと彼が呼んでいる女性型のゴーレムが。

私は、アルミニウム青銅製の金色のゴーレムを出します。

ただし、顔はのっぺら坊で、両手は存在せずに長めのランスが二本付いているだけ。

足もなくて、車輪で移動するようにしてあります。

「色は美しいが、造詣がなっていないようだね」

「戦いは、効率が全てですから」

戦場で走らせるゴーレムに、華麗な容姿や華美な装飾など必要ありません。

アルミニウム青銅製なのは、スズとの合金である青銅よりも丈夫な事と、地面には化合物の形で多く存在していて、他の材料である鉄、ニッケル、マンガンも微量ならば自然界のどこにでも存在しているからです。

しかもアルミニウム青銅は、引張り強さ、硬さが青銅より大きく腐食に強い。

青銅よりも、ゴーレムの材料としては優れているのです。

「なっ！ そんな！」

ギーシュのワルキューレの攻撃を私のゴーレムは呆気なくかわし、車輪走行で素早く後に回り込むと、そのまま二本のランスで背中を串刺しにします。

ワルキューレは、バラバラになって地面に戻って行きます。

「まだまだ！」

ギーシュ続けてワルキューレを出しますが、それも次々と私のゴーレムに撃破されていき、最後には魔力が尽きて杖を構えているだけの状態になってしまいました。

「負けを認めて貰えるとありがたいのですが」

ギーシュに、これ以上のゴーレムは出せないでしょう。

それに気が付いた私は彼に降参を進めますが、彼は杖を構えたままでした。

「意地でも降参するものか！」

「そうですか。では、これで……」

ここで強引に杖を取り上げようとして、怪我でもされたら事です。お腹も空いた私は、彼を放置して自分の屋敷へと戻ります。

「逃げるのか！」

「ええ、逃げますよ」

こんな勝負に勝敗を着ける事すらバカらしい。そう感じた私は、彼の元を去るのでした。この腹違いの兄との関係に不安を感じながら。

四話

「このアルミという金属は、軽くて銀のように綺麗ですね」

「なら、軽銀とでも命名する？」

屋敷の裏山で採れるボーキサイト鉱石とミョウバンを元に、生成錬金をして出来るアルミニウム。

この世界では、私が最初に錬金した人間のようにです。

アルミは、どこの土壌にも微量ながら存在している、実は量の多い元素なんです。

チタンもそうで、ただ精錬が難しいという事なんですネ。

アルミは、十九世紀。

チタンは、二十世紀になってようやく実用化された金属ですけど。

それとアルミは、最初は認知度が浅くて屋敷の中でだけで使っていたのですが、試しにインゴットで購入して行った商人がこれで調理器具や食器類、窓の枠や馬車のフレームなどを作ったところ大ヒットし、最近では多くの注文が入るようになっていました。

最近では、鋼はあまり作っていません。

鋼はゲルマニアでも製造されているので、アルミの方を優先して作って欲しいそうです。

裏山のボーキサイトの質と量はさほどでもないので心配でしたが、そこは商売に長けた商人。

すぐに近くの領地から、裏山よりも含有量も埋蔵量も多い岩山を見つけて来て、そこから掘り出した鉱石が屋敷の隣の作業小屋に大量に積みまれています。

そして、父に許可を貰って一部の家臣にも作り方を教えるようになりまして。

ボーキサイト鉱石とミョウバンから、アルミニウムを取り出す錬金を教えたのです。

ですが……。

「不純物が多いね。まだ売り物にはならないよ」

私ほどの純度の高いアルミを錬金できる家臣は、まだ一人も現れていませんでした。

「何が悪いんでしょうか？」

また不純物が多いアルミを錬金したアシルが、一人で首を傾げています。

私は出来る限りの説明をするのですが、私の理解の幅と質と、彼のそれとに大きな齟齬があるらしく、何度説明しても完璧な物が出上がりません。

私が前世で見た金属や宝石の様々な姿。

原子モデルから、結合模型から、電子顕微鏡で見た実際の拡大図と。

まずは、彼らに物理と科学の基本から教えるべきなのではないでしょうか、こんな子供がいきなりそんな難しい事を言い始めたら。

それにこの世界は科学よりも魔法で、魔法を伝えた始祖ブリミルとやらを讃える宗教が幅を利かせる世界です。

むしろ、余計な事は言わない方が安全でしょう。

まあ、説明しても証明する手段も無いんですけど。

「この鉱石には、このアルミが入っている。でも、他の不純物と結合しているんだよ。それをミョウバンの成分で丁寧に取り除くイメージをね」

「難しいですね」

最近になってようやく指摘されたのですが、私の錬金は今までに無い錬金だそうです。

生成する金属や物質の全ての材料を集めて抽出・結合させ、余りを捨てる。

物質が移動しているだけで、変質も量の変化もありません。ですが、魔力に余計な負担がかからないので、比較的多くの量をこなせます。

勿論近代的な工場には足元にも及ばず、鋼に至ってはゲルマニアの小さな工房レベルの量でしょうが。

つまり、全く世間の需要を満たしていないのです。

おかげで、アルミはその価格が暴騰しているようでした。

「今では、同じ重さの銀よりも高いそうですよ」

そう言えば、昔は貴金属扱いでしたものね。

アルミニウム。

ですが、工業的な生産は不可能なのです。

この世界に、電気が無いというのは絶望的でした。しかも、私には発電所の詳しい知識は無いですし。

「出来ましたよ！」

「見てわかるほど不純物が多いなあ……」

「駄目ですか……」

それでも、十名にまで増えたメイジ家臣が不純物の多いアルミを生成錬金し、それを私が錬金して不純物を取り除く。

この方法で、今までの十倍以上の量を仕上げる事に成功しています。

それに、次第に純度は上がっているので、あと数年で成功させる家臣が出てくるはずですよ。

今は、継続して錬金させるしかないでしょう。

「旦那様が、これは我が領地の特産品になると大喜びですよ。次は、チタンでしたっけ？ あれも周囲の領地に鉱石が無いか探させるそうですね」

「父上が？」

「正確には、奥様ですよ」

「だと思った」

どうやら、グラモン家の借金は次第に減っているようでしたが、アルミの生産は思うようには進んでいないのでした。

「ええと、パーティーですか？」

「そうだ。ラグドリアン湖で、各国の招待客も呼んでパーティーが行われるのだ」

私も十四歳となり、今までは領内で貴族としての教育と金属錬金の日々だったのですが、遂に社交界デビューというものをしようです。

兄のギーシュは、二年くらい前から他の貴族から招待を受けているらしいのですが、私は今回が初めてでした。

基本的には日陰者ですからね、私は。

それに、緊張するので別に必要ないとも思うのですが。

考えてみると、昔から堅苦しい事は苦手なんですよね。

でも一応は貴族なので、義務だと思って出る事にします。

「僕は、ティーボを世間に出すとグラモン家の恥だと思うけどね」

私がパーティーに招待される話は、本宅で父と奥様から聞いていたのですが、その日は一緒に招待される予定のギーシュもいて、私に早速嫌味を言い放っていました。

あの決闘から四年。

私達の仲の悪さは相変わらずです。

月に一度はギーシュから決闘に誘われ、彼が生成するワルキューレを私のゴーレムで撃破する。

彼は次第に一度の生成して操るワルキューレを増やし、戦術を改良しと努力を重ねていましたが、やはり魔力が無くなるまで私にワルキューレを撃破され続けるという結末は同じなものでした。

毎日自室に戻っても、独自の研究でギリギリまで魔法を使い続ける私は、十四歳で土のスクウェアメイジとなって父を喜ばせていましたが、ギーシュはラインの上位で、もう少しでトライアングルと言ったところ。

僅か一週間とはいえ、年下の。

しかも、妾の子供に負けたくないのですが、少し腹が立つのも事実です。

ですが、二回目の人生で既に四十歳を超えた私は、それを表に出さないようにしています。

「ギーシュ、いい加減にしないで。ティーボに何の恨みがあるのだ？」

父であるグラモン伯爵がギーシュに苦言を呈しますが、彼は自身身の存在が嫌いなので、それは無理というものでしょう。

人間、全員が仲良くなれるわけではないのです。

ギーシュとは、距離を置くしかないでしょう。

「パーティーには、アンリエッタ様もいらっしやるのだよ。なるべくなら、お前達を紹介したいものだな」

アンリエッタ様とは、私が住んでいるトリステインという国の女王様です。

国王亡き後は国の象徴的存在となり、多忙な日々を送っている彼女のみならず、実質上の宰相と呼ばれているマザリーニ枢機卿なども、新しい金属の発見と錬金に成功している自分に興味があるとの父からの話でした。

ですが、どう考えてもお姫様がアルミニウムに興味があるとは思えません。

そんな変人は、私だけだと思うのですよ。

「まあ、手ぶらでも構わないのだが、グラモン家からも何か出すが

な。ティーボも、姫様に何かを贈ったらどうかな？」

父の言っている何かとは、多分奥様の首にかかっている真珠のネックレスの事でしょう。

この世界ではいまだに養殖なども始まっておらず、天然物しか存在しない真珠は高価な宝石でしたが、私は真珠の錬金にも成功していました。

試行錯誤を重ねて数年の時を要していましたが、準備した核に、海岸に落ちていたり、食用後に捨てられた貝殻の内側に付いている真珠層を錬金の魔法で剥がして徐々に付けていくという方法で、天然物と見分けの付かない真珠の錬金に成功していました。

黒真珠やピンクパールなどの錬金にも成功し、その成果を最近誕生日を迎えた奥様にプレゼントをしていたのだ。

ちなみに、二連の直系1.5サントを超える黒真珠のネックレスは、出入りの商人に十万エキュール売って欲しいと言われるほどの傑作だったらしいです。

天然の黒真珠なんて、滅多に市場に出る物ではないですからね。ただ、作るのに丸一日を費やしてしまうのが欠点ですが。雑に作ると、いかにも人工的な作品になってしまうもので。

「そうですね。実は、サンゴと同じ色のピンクパールが在庫にありますから」

これも錬金に成功した物で、本当は母にでも贈ろうと思ったのですが、時間が無いので、母には別の物を贈る事とします。

「うむ、うちにティーボのような息子がいると知れば、あの鳥の骨も……」

父の言う鳥の骨とは、マザリーニ枢機卿の事です。

この国の国王亡き後に、実質的にトリステインの面倒を見ている人です。

外国の人で、このハルケギニアではキリスト教に当たるブリミル教の偉い人らしいのですが、立場的にあまり人々からは好かれていないようです。

ちょっと可哀想な人かもしれません。

それと、父が私を社交界に出したい理由。

代々軍人の家系で、実は裏では政治オンチ・経済オンチと陰口を叩かれる事もあった父や兄達。

その家に、私が生まれた。

最近では、クルデンホルフ大公国からの借金も大分減ったので、ここは自慢しておきたいところなのでしょう。

「二人とも、準備は怠らないようにな」

「はい」

「……………」

ギーシュが、私に鋭い視線を送るのはいつもの事です。気にせずにパーティーの準備を進めるのでした。

「やあ、グラモン元帥ではないか」

「モンモランシ伯爵か。最近はどうなのだ？」

一週間後、ラグドリアン湖で各国の招待客も招いてパーティーが行われていました。

父と奥様は、私とギーシュを連れてパーティー会場に到着し、私とギーシュを色々な貴族達に紹介して行きます。

「あまり芳しくは無いな。またクルデンフルフ大公に金を借りねばなるまい。そちらは、景気が良くて羨ましい限りだな」

父は、懇意にしているモンモランシ伯爵に挨拶をしています。

何でも、この付近に領地を持つ貴族のようで、昔の父と同じく領地経営で四苦八苦しているようです。

魔法のある世界ですから特に驚かなかったのですが、ラグドリアン湖には水の精霊が住んでいるらしいのです。

モンモランシ家は、トリステイン王家から代々精霊との交渉役に任命されていたようですが、最近交渉に失敗してその役を降ろされたく。

他にも農地の干拓に失敗して借金だけが残り、踏んだり蹴つたりの状態らしいです。

「それで、その子がそうなのか？」

「ああ、五男のティーボだ」

「ティーボ・ド・グラモンと申します」

一応、習った儀礼に従ってモンモランシ伯爵と挨拶をします。
何か緊張しますね。

「銀よりも高い金属を生み出せるとは羨ましい。うちの娘の婿に欲しいが、無理だろうな……」

「それは勘弁してくれ。ティーボがいないと、うちの領地もすぐに元通りになってしまう」

私の見るグラモン領は、そんなに悪い領地ではありません。

家臣に武道派が多いので治安は良いですし、税金も特に高いわけでもないですし、金が無いので家臣のメイジ達はすぐに道路や農地の補修に出張します。

全て父が見栄を張るために出費が多いからですが、兄に代が代わればそこまで見栄を張らないと思うので、私の鍊金するアルミとチタンだけで十分に黒字でしょうし。

それと、各種の鉱石クズから金になる金属を取り出した後のケイ素。

多少不純物があっても、実は良い焼き物の原料となります。

これにわざとアルミの成分も残し、鉄分のない植物灰と高陵石から精製された透明釉薬を掛け、高温の還元炎で焼き上げると所謂白磁という物になります。

高陵石はカオリナイトとも言い、アルミニウムの含水珪酸塩鉱物で粘土鉱物の一種です。

これも探せば見付かりますし、このレベルの鍊金なら家臣にも出ますので、最近のグラモン領は焼き物の工房やギルドが他領から引越しをして来て賑わっていました。

「さて、そろそろ行かないとな」

「鳥の骨か？」

「ああ、アンリエッタ様がティーボに会いたいのだそうさ。全く、下らない嘘を付きおつて。あの鳥の骨が」

父とモンモランシ伯の視線の先には、アンリエッタ王女と思しき美少女と痩せこけたマザリーニ枢機卿らしき聖職者の格好をした男性がいます。

「しかも、ヴァリエール公爵殿もか。犬猿の仲なのに、ご苦労な事だな」

そしてその隣には、ひよっとすると父よりも威厳のありそうな誰が見ても貴族というような人がいました。

この国で一番領地を持っている、ヴァリエール公爵だそうです。

「行くぞ、ティーボ」

「はい」

私と父は、パーティーの参加者に挨拶をしていたアンリエッタ王女と、マザリーニ枢機卿に声をかけます。

「この度は、ご招待に与り光栄にございます」

「ご苦労様です。グラモン元帥」

「この国の重鎮である、グラモン元帥が来ないパーティーなどあり得ませんからな」

アンリエッタ王女とマザリー二枢機卿が父と挨拶を交わし、いよいよ私が紹介されるようです。

「私の息子で、五男のティーボです」

「ティーボ・ド・グラモンと申します」

私は、頭を下げ二人に挨拶をします。

王族など宰相クラスの人間が相手だと、あまりに目の上な人間で気の利いた事を言うとか無理ですね。

小さな私は、緊張していますし。

「聞けば、姫様と同じ年だとかで？ その歳で新しい金属を錬金するとは大したものですね」

「錬金しか特技がございませんので」

実際に、私には錬金しか特技は無いでしょう。

軍人としてのスキルですが、運動神経は並かそれよりも少し上。

それでも、前世の徒競走万年ビリ、球技大会前日鬱よりはマシになりましたけど。

基礎の訓練は家訓なので受けていますが、考えてみたら亜人退治とかにも出た事はありません。

私が怪我をしたり死んだら困るからなのでしょうね。

グラモン家の財政的に。

頭脳は、前の世界でも名の知れた国立大学に行けるくらいの物はありません。

魔法は、土は攻撃能力は薄いですけどスクウェアクラスです。

錬金と固定化には自信があります。

水は母の血を引いているので、ラインの上くらい？
母に教わった薬やポーションや化粧品もそれなりに作れます。
風と火は、辛うじてラインくらいだと思います。

土以外の系統の上位魔法は別ですが、絶対に出来ない魔法とかは無いけど、得意という事もなく。

そんな感じに仕上がっています。

本当は、もう少し火の系統が得意だと良いんですけど。
製鉄とかに使えそうですね。

「ティーボ殿。あなたのおかげで、グラモン領は大いに栄えているとか。グラモン元帥は、素晴らしいご子息をお持ちですね」

最近では、屋敷の近くに商人やギルドが店を構えて、それが自然と町になっている状態でした。

私やその家臣達が錬金する金属類や、焼き物の原料になる土や、水晶などの人工宝石類。

それらの加工や販売などを行うために自然と町が形成され、領外からの移民も増えて、周辺の農村などでも食糧などが多く売れるようになり。

自然と、グラモン伯爵領の税収は増えていたのです。

「私は、まだ若輩者ですので」

アンリエッタ王女と私。

お互いに年齢に見合わない役割りと大仰しい会話を続けますが、あまり話が長くなってもと、準備していたプレゼントを渡します。

「これは、錬金で自作した物です。大した出来ではないのですが…」

私は、ケースに入ったピンクパールの一連ネックレスとイヤリングのセットをアンリエッタ王女に渡します。

淡いピンク色に輝く、全て同じ大きさの大粒の真珠で作られた至極の一品。

大した出来ではないは、前世で日本人であった影響ですね。謙遜という奴です。

ちなみにケースも、前の世界で見た宝石ケースを材料を揃えて自作した物です。

「綺麗……」

やっぱり、王女様も普通の女性ですね。

綺麗な宝石には弱い物です。

そして、周囲にいた貴族やその家族達からも溜息の言葉が漏れていました。

「本当に、天然物と区別が付かないな。素晴らしい出来だ」

マザリーニ枢機卿も、私の作品に珍しく感動しているようでした。

「こんなに素晴らしい物をありがとうございます。これからも、トリステインのために働いてください」

アンリエッタ王女は、そう言いながら私に手の甲を差し出しました。

いくら名門出身とはいえ、庶子である私になるので少し戸惑ってしまいました。これもネックレスの代金という事なのでしょう。

『唇だったら最高なのに』などと思いつつ、手の甲にキスをします。

その様子を周囲の貴族達は、特に違和感や反発もなく見ているようでした。

戦闘力はさほどでもないが、スクウエアメイジで錬金で大金を稼げる貴族の息子という事で、みんなどうすればその利益にあり付けるのか考えているのかもしれない。

「ティーボ、紹介しよう。ヴァリエール公爵だ」

その後も父の後に付いて、主だったトリステイン貴族や外国の貴族などと挨拶をする私でしたが、最後に一番の大物を紹介されました。

「ティーボ・ド・グラモンです」

「若いのに落ち着いているな」

「こういっ席は苦手ですけど、これでも精神年齢は四十歳を超えていますからね。」

「多少の応用は利くのですよ。」

「ところで、杖を見せて貰って良いかな？」

「はい、どうぞ」

ヴァリエール公爵は、私のチタンジルコニウム合金製の長さ80センチほどの杖に興味深そうに観察します。

「本当に、鉄では無いのか。しかも、鉄よりも強度は強そうだな」

ヴァリエール公爵は、始めて見るチタンに興味津々の様子でした。

「こんな金属が存在するとはな」

鉄よりも軽くて丈夫なチタンは、軍人でもあるヴァリエール公爵からすれば興味深い金属なのでしょう。

現に、父もこの金属の興味を持ち、アルミニウムとは違って外部には販売禁止になっています。

これで、諸侯軍の兵士達が装備する鎧や剣を作っているのです。

まだ量が少ないので、限られた幹部や精鋭達だけにしか貸与されていないそうですが。

ヴァリエール公爵は、父からの話を興味深そうに聞いていました。

「うちにも欲しいのだがな」

「すみません。鉾石が全然足りなくて」

チタンは鉄に次いで地球上に存在している遷移元素ですが、その分布範囲が広く、つまり高い割合でチタンを含む鉾石はまだ見付かっておらず、それほど量は生成できないでいたのです。

勿論、普通の土などからも生成は可能ですが、スクウェアメイジになつた私でも一日に一リールが限界で、これだと大量生産は不可能でしょう。

「そうか、それは残念だな。ならばその内に、私の領地で使える鉾石があるか見に来てくれないかね？ もし良い鉾石が出たら、そのチタンを売って欲しいものだな」

「ええと、機会がありましたら是非に」

父が何も言わないので、私は適当に話を合わせてヴァリエール公爵との話を終わらせませす。

「長い間大変だったろうに。今からは、自由に会場を移動して飲み食いしてもいいぞ」

「ありがとうございます。父上」

父と別れた私は、会場内をウロウロとしながら移動を始めます。会場内の世話係に飲み物や食べ物を貰いながら歩いていると、視線に見覚えのある奴が入ります。

一応、私の兄という事になっているギーシュでした。彼は、金髪の巻き髪が特徴の同年代の少女と一緒に話をしているようでしたが、私の存在に気が付くと舌打ちをします。

私は……。

心の中で舌打ちをして誤魔化しましたが。

「ねえ、ギーシュ。彼があなたの弟なんでしょう？」

巻き髪の少女も私に気が付き、ギーシュに紹介するようにとせがんでいるようでした。

「モンモランシー、あんな男の存在を知る必要などないさ」

「ギーシュ、それは本気で言っているの？」

弟を紹介しない兄はどうかという物と、アンリエッタ王女にあれ

だけ見事なプレゼントを贈った人物を無視するのはおかしいという、至極当然の感情を、彼女は抱いているようでした。

「始めまして。ティーボ・ド・グラモンです」

「モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシよ。宜しく」

どうやら彼女は、先ほど紹介されたモンモランシ伯爵の娘さんのようでした。

それと、ギーシュとは既に顔見知りで、私は今日になってようやく彼女の事を知った。

こつこつ部分が、妾腹の子供の待遇なのでしょうね。あまり気にはなりません。

「『錬金』のティーボか。言わせて妙ね」

「えっ？ 何それ？」

「あなたの二つ名よ」

この世界のメイジは、自分に二つ名を付ける事が多いらしいです。それは、自分で付けたり、人から呼ばれていつの間にか定着するのが普通らしいのですが、私の二つ名はいつ『錬金』になったんでしょうかね？

「『錬金』という呪文はポピュラーだけど、それを今の時点で一番極めているメイジって事らしいわよ。アンリエッタ様が、『まさしく錬金ですね』って言ったらしいの」

モンモランシーの説明に、同じくそれを知っていたが、死んでも私には言いたくないギーシュが再び舌打ちをします。

私は、彼にどれほど嫌われているんですかね？

「というわけで、あなたの二つ名は『錬金』よ」

「モンモランシー、こんな妾腹の下賤な男にいつまでも構っていないで、パーティーを楽しもうじゃないか」

私とモンモランシーの会話を、ギーシュが強引に止めます。

一部許容しかねる発言もありましたが、ここで喧嘩はご法度です。

私はモンモランシーに一礼すると、そのままギーシュのいない場所へと移動を開始します。

「（ギーシュが、俺を憎む理由は理解できる。ただ、迷惑だけだな！）」

どうせ会場内では、ギーシュの陰口が耳に入るかもしれないと思った私は、一人ラグドリアン湖の畔に佇みます。

一通り景色を眺めた後は、視線を地面に送り落ちている石を拾ってなぜか持っているハンマーで割って中身を確認します。

実は、前世でも中学生の頃からやっていた事なんです。

私、中学・高校と自然科学部だったもので。

「石英が大半か……」

ラグドリアン湖の湖岸に落ちている石は全て造岩鉱物で、そのほとんどが二酸化ケイ素や石英などでした。

少なくとも、モンモランシ伯爵領を潤わせる鉱物は存在しないようです。

特に発見も無かったので、暇潰しに石英を錬金して水晶に変えてみます。

湖岸にある大きな岩に座って石英の塊に杖を当てて錬金の呪文を唱えると、石は綺麗な不純物ゼロの水晶へと変化します。

「色でも付けて見るかな？」

そんな事を考えていると気配を感じたので視線を上げると、そこにはドレス姿の自分よりも年下に見えるピンク色の髪の少女が、私を興味深そうに見ていました。

この世界には、前の世界では信じられない髪の色をした人がいるのです。

「（幼いけど、可愛い子だな）」

彼女の髪を見て、私は水晶を紅水晶と緑水晶に錬金し、紅水晶をバラの花に見立て、緑水晶をバラの茎や葉に見立てて錬金をし直します。

以前ギーシュに、『センスがない』と言われた事に微妙に腹を立てていたので、少し合間を見て練習していたのです。

彫金が趣味のギーシュに普通に張り合っても勝てないので、錬金で花や動物などを作るようになっていたのです。

錬金なら材料が無駄になりませんし、表面も綺麗なままですしね。

「凄い……」

「あげるよ」

「えっ！ いいの？」

「ピンクのバラに錬金したのは、君の髪の色を見たからだし」

何ともキザなセリフですが、考えてみると私は実はギーシュに少し似た容姿なんですよね。

それが余計に、彼を怒らせているのでしょうが。

ドレス姿のピンク色の髪の少女は、少し顔を赤らめながら私からの贈り物を貰っていました。

「ありがとう。私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「ティーボ・ド・グラモンだ」

「知っているわ。姫様に、あんなに高そうな真珠のネックレスを贈っていたから」

何となしに、私達は自己紹介をして話を始めます。

ルイズは、先ほど話をしたヴァリエール公爵の三女だそうです。

「俺は、グラモン伯爵の五男さ。妾腹だけだね」

「そうなんだ」

「別に、不満とかは無いけどね。父は私を認めてくれているし。一人ウザイのがいるけど」

それは、ギーシュの事なんですけどね。

「でも、私と歳が一つしか違わないのに。スクウェアメイズで、姫様に二つ名まで付けて貰って凄いわよね」

「そうかな？」

私には、実は自分が凄いとかが、そういう実感はあまり無いのです。生まれ変わった世界では科学の代わりに魔法があり、これを駆使すると実は科学の力を使ったよりも凄い生成が行える。

ただ面白くて、毎日魔法を限界まで使って魔力を駆使しても、それが辛いとかまるで思わなかったのです。

あくまでも、趣味の延長線なんですよね。

「それに、私は……」

「私は何？」

「ううん……。このバラの水晶細工、大切にするわ」

そう言い残して会場へと戻る彼女を、私は『美少女は、目の保養になるな』と思いつながら見送るのでした。

そしてパーティーは無事に終了し、私は父とギーシュと一緒に領地に戻ったのですが、特に意図も無くルイズにあげた水晶細工が私のない場所で大騒動の原因となっていたようです。

「あら、綺麗な水晶細工ね。高かったんじゃないの？」

パーティーの翌日、ルイズがプレゼントされたバラを眺めている

と、下の姉であるカトレアに話しかけられていた。

「ちいねえさま、これはプレゼントなんです」

「おちび！ こんな不純物の無い高級な水晶を使ったバラ細工、あなたの婚約者にはとうてい買えないじゃない！ 嘘を付くんじゃないわよ！」

そこに長女のエレオノールが現れ、ルイズ嘘をついたと勘違いし、彼女の頬を抓り始める。

「エレオノール姉様！ この前のパーティーで、『錬金』のティーパーボに貰ったんですう！」

頬を抓られながらも、ルイズは懸命に事情を姉達に説明していた。

「ルイズ、本当なのか？」

「お父様、ええと、その……」

ヴァリエール公爵は、バラ細工を見つめながら何か考え事をして
いるようであった。

五話

「しかし、そろそろ真似する奴がいても良いはずなんだけど」

「出回っていますけど、質と量の面でまるで話にならないそうですよ」

「だからさ。不純物の処理が問題なんだよ」

「ティーボ様の仰る事は理解できるのですが、実際にやるとどうしても不純物が混じるんです」

ラグドリアン湖で行われたパーティーから約一カ月後、私はいつものように家臣達にアルミニウムの生成錬金を行わせていました。ボーキサイト鉱石とミョウバンで錬金を行って純アルミニウムを取り出す。

しかし、まだ成功した家臣は一人もいません。どうしても、不純物が多く混じってしまうのです。

おかげで、最終的な錬金を行う私の出番は一向に減りません。それと、そろそろ私の真似をして金を稼ごうとする人が現れる事を期待したのですが、これもまだ微妙なところらしいです。

アルミニウムは、どこの土壤にも微量ではありますが存在していません。

ですが、普通の錬金では効率が悪くなります。

そこで、トリスティン各地から純度の高い鉱石を購入しているわけです。

ところが、真似を始めた人達は、なまじ錬金に自信があるものだから、そこら辺の適当な岩を、私から購入したアルミを見本に錬成を行い、不純物が多くて低品質で使い難いアルミを作っていました。最初は、そのアルミに騙される商人が続出したのですが、すぐに買い叩かれるようになって、なぜかこちらに持ち込まれます。私が再錬金を行えば、高品質品に早代わりだからでしょうね。まあ、楽で良いんですけどね。

結局、グラモン家の刻印入りのインゴットしか商人達に信用されなくなつたようです。

今度は、刻印入りの偽物が出そうですけど。

アルミニウム、チタン、白磁や焼き物の材料、真珠、水晶、鋼と。他にもその時の状況に応じて、私は屋敷の隣の作業小屋で錬金を続けます。

既にメイジの家臣は十五名までに増え、他にも下働きの平民などが五十人あまり。

彼らの仕事は、私に錬金以外の仕事をさせない事にあります。

私は一日二時間ほどで今日のノルマを終えると、屋敷に戻って金属や水晶や宝石などの錬金の研究を行います。

オパール、瑪瑙、翡翠、トルマリン、タイガーズアイなど。

特に、ケイ酸塩鉱物は簡単に錬金できますね。

材料と原子結合図さえ知っていれば、工業的な工程ゼロで宝石や合金が作れる錬金魔法はチートです。

今日は、微少のナトリウムとアルミニウムを含むケイ酸塩鉱物の一種である輝石の、硬玉と呼ばれているヒスイを錬金します。

このヒスイは、古来では金以上に珍重されていました。

中国とかでは、玉と呼ぶの事が多いですね。

私は、自分の体よりも大きい鮮やかな緑色であるヒスイを錬金し続けます。

ヒスイの塊は徐々に大きくなっていき、最終的には高さ二メートル、縦横一メートルの直方体にまで大きくなりました。

「これで彫刻とか作ると、高く売れそうだな」

「いや、そんなにバカでかいヒスイを買える芸術家などおらん」

いつの間にか、部屋に父が入って来ていました。本宅にいると思ったので、少し驚きです。

「父上、急にどうなされたのですか？」

「急で悪いのだがな。ヴァリエール公爵領に行つて欲しいのだ」

「それは、急ですね」

何でも、もしチタンを含む鉱石などが見付かったら、それを大量に無料で提供するので、その代金に見合つたチタンをくれという事らしいです。

父は、相手がトリスティーンの大貴族という事で断りきれなかつたようです。

「ヴァリエール公爵領は広いからな。予定は三週間ほどになる」

「それは構わないですけど、錬金をしなくて良いのですか？」

「いや、お前はアシルと一緒に予定通りに領内の岩を見るが良い。」

錬金の材料は、他の家臣達が届けるんだ」

つまり、予定に基づいて行動している私に金属の材料を届け、現地で私が錬金を行うようです。

どうやら、いつの間にかVIPになっていたようでした。

私が仕事場に行くのではなくて、仕事場が私に付いて来るんですね。

「一日くらい作業が遅れても大丈夫だが、三週間ではギルドの連中や商人達が泣くからな」

今のところは、高品質で不純物ほぼゼロのアルミニウムは私にしか作れないですからね。

白磁と焼き物の材料は、ある程度の不純物が許容できるので、今ではアシルを始め錬金が出来る家臣も徐々に増えていきますが。

「わかりました。出かける準備をします」

「すまん。ところで……」

「はい？」

私の錬金したヒスイの柱は、父の命令を受けた家臣達によって運び出されてしまいました。

後日、ロマリアでブリミル像を作っている工房に、とんでもない高値で売れたそうです。

やはり、宗教は最強のようでした。

中世的な世界ゆえに。

「始めまして。ティーボ・ド・グラモンです」

数日後、母から借りたアルミ製フレームの馬車でヴァリエール公爵領に向かった私達一行は、領境でヴァリエール公爵の家臣や兵士達の出迎えを受けます。

私の仕事は領内の鉱石探索なので、グラモン領側から探索を開始し、途中で中心部にあるヴァリエール公爵邸を訪問。

最後に、ゲルマニアとの国境沿いで探索を終えるというのが効率的です。

さすがにわかっているようですね。

国家の重鎮ともなりますと。

「ティーボ様の領内での安全は、確実に私めが」

山賊や亜人の襲来も珍しくない場所ですからね。

特に私が行くのは、人里離れた岩場や山などです。

警備は、私を招聘したヴァリエール公爵側が責任を持ってという事なのでしよう。

「では、早速に回りましょう」

ヴァリエール公爵の家臣達の案内で、私達は順繰りに領内の岩場や山や川原などを探索して回ります。

私は、石を拾って割ってみたりするのですが、特に興味を引く石が出る場所に遭遇しません。

念のために廃鉱になった場所なども巡ってみるのですが、やはり取れなくなっただから廃鉱なんですよ。

微量の鉄や金を含む岩を見つけましたが、採算ベースには程遠いですよね。

ディテクトマジックの改良魔法で、石を探知しながら考え込みま

す。

このディテクトマジックは、本来魔力を探知する魔法なのですが、私の場合は目で見ただけではわからない鉱物の含有量を測定するために使っています。

なるべく純度の高い鉱石の方が効率が良いですから。

「どうでしょうか？」

「この金山は、いつ廃鉱になったのですか？」

「十年ほど前です」

確かに、廃鉱にして正解ですね。

今のこの金山だと、二千リール（約一トン）の岩の中に、金が良くて数グラム。

とても採算は取れないでしょうから。

この世界に魔法が伝わって六千年以上経ち、それほど生活のレベルが変わっていないらしいので、新しい鉱山を見つけるのは至難の技なのでしょう。

唯一の例外は、鉄鉱石ですか。

ただし、産地が偏っているのと、隣国ゲルマニアの製鉄技術の向上によって次第に不足気味になっているようですが。

私の場合は、今はあまり作っていないですけど、砂鉄の備蓄はさせていますけどね。

砂鉄はどこにでもあるので、領内の子供達に鍊金して作った磁石を渡して集めさせているのです。

一種のお小遣い稼ぎですね。

「ここは、チタンの含有量が多いな」

「本当ですか？」

数日後、私はヴァリエール公爵邸に近い岩場でチタン含有量の多い鉱石を発見する事に成功しました。

ただ、埋蔵量は私レベルの錬金量で十年保つかどうか。どうやら、トリステイン国内における鉱山の規模は、それほどはないようです。

鉄や銅や金や銀などは、見付ければ採掘が始まって数十年で掘り尽されてしまうレベル。

外国から輸入すれば高く付くし、戦略物資ならばその量を制限されます。

良く探せばまだあるのですが、前人未到の幻獣や亜人の巢ならば採掘に持つていくまでが大変です。

小規模ながらボーキサイト鉱石やチタン鉱石が見付かるのは、今まで誰も手を付けなかったからなのでしょう。

十日間ほどで、小規模ながら数箇所的成果をあげる事に成功しました。

「今日は、我が主の屋敷でお寛ぎくださいませ」

十日間を一緒に過ごしたヴァリエール家の家臣に案内されて、私は広大な規模を誇るヴァリエール邸に案内されます。

グラモン本邸の数倍の規模はあろうかというその屋敷に、私は啞然としてしまいます。

「グラモン伯爵家も比較的規模の大きい領地を保有していますが、

ヴァリエール公爵家とは比べるだけという事です」

アシルの説明に、私は思わず納得してしまいます。

屋敷の門を潜ってから、更に馬車で数分を移動してようやく本宅に到着した私達は、多くの召使い達やメイド達の送迎を受けます。その数や、グラモン家とは比べ物になりません。

「お館様は、軍を華美にする事を望みますので」

ある程度の屋敷があれば、後は軍の重鎮として、諸侯軍の装備品や戦闘能力に長けた家臣団の困い込みに金を使いたい。

それが、我が父グラモン元帥のようでした。

だからこそ、私がここまで優遇されているんでしょうけど。

「ようこそ、ティーボ殿」

私達は、ヴァリエール公爵直々の歓迎を受けます。

「鉱石が見付かったと聞いたが」

「ええ、暫くは困らない規模の物を数箇所」

私は、早速にヴァリエール公爵に領内半分の探查結果を伝えます。それとチタンは、鉱石は無料の代わりに錬金した半分を無料でヴァリエール公爵に渡す事と。

ボーキサイトは、適当な値段でこちらが購入する事などを伝えます。

「となると、グラモン領との道路の整備などもした方がいいな」

その日のヴァリエール公爵は、とてもご機嫌でした。

何でも、今までは軍人としては優秀なのに経済・財政オンチな父だったので、隣同士である領地の相互発展とかそういう問題にまるで無頓着であり。

しかも、兄達もその傾向を受け継いでいる。

ゲルマニアと隣し、ツエルプストー辺境伯領という代々の敵を抱えているヴァリエール公爵としては、どうにかグラモン伯爵領との交易の強化をしたかった。

これが、私が呼び寄せられた理由だったようです。

「ところで、ティーボ様。今日の錬金のお時間です」

暫くお茶を飲みながら話していると、アシルがそつと私に耳打ちをします。

私は、グラモン領経済のかなりの部分を支えている人間工房です。ヴァリエール公爵の許可を取って庭に材料などが到着したので、外に出て早速に錬金を始める事とします。

家臣のメイジや、力量不足のメイジから買い上げた不純物入りのアルミニウムから純正品を作り。

注文を受けた水晶の塊や、ここ一週間でロマリアの工房から予約が殺到しているヒスイの柱の製作を行います。

二時間ほどの作業でしたが、その作業をヴァリエール公爵は興味深そうに見ていました。

作業終了後、私はヴァリエール公爵に夕食に招待されます。

部屋に入ると、そこには彼の奥方であるカリーヌさんがいました。

「始めまして。あなたが、噂のグラモン元帥のご子息ですね」

前に会ったルイズと、同じ髪の色 of 女性に声をかけられます。その凜とした立ち振る舞いに、私は思わず緊張してしまいます。

「今日は長女のエレオノールも戻ってるので、娘を全員紹介できませぬ。ルイズとは面識があるとかで？」

「はい、ラグドリアン湖で行われた園遊会で」

「その時に、結構なプレゼントをいただいたとかで」

「いえ、まだ造形に甘い部分がありまして。専門家でもないですし」

私は、金属の純度や質には拘りますが、出来た金属の加工にはあまり興味がありません。

というか、自分で使う物やプレゼント用の物は加工しますが、あとは売った先に任せています。

彼らとてプロなのでから、高いお金で買った素材を無駄にはしないと思っています。

それに、全ての加工に関わる時間や魔力など無いのですから。

「あのバラの細工は見事な物でした。ルイズも喜んでいましたし」

「ティーボじゃないの。久しぶりね」

そこに、ルイズが入って来ます。

久しぶりとは言っても、ラグドリアン湖で一ヶ月半くらい前に一回だけ十分ほど話をしただけなのですが。

それは、気にしない事にします。

彼女は可憐で可愛いですから。

「いらつしゃいませ。あら、思っていたよりもお若い方ですね」

「ようこそ、『鍊金』のティーボ殿」

ルイズの他にも、二人の姉であるカトレアとエレオノールが現れて私に挨拶をします。

ルイズは三女で、おっとりとした感じでルイズと同じ色の髪ながらも抜群のスタイルの良さを誇るカトレアは次女で、ヴァリエール公爵と同じ金髪で少しキツイ感じはするものの、やはり綺麗なエレオノールは長女と。

この三人が、噂のヴァリエール三姉妹のようです。

家族が全員揃ったので、早速に夕食が始まります。

メニューは、私というお客さんがいるのでかなり豪華な内容になっています。

「ティーボ、あなたから貰ったバラの細工は、大切にしているわ」

隣の席になったルイズが、私に話しかけてきます。

「いや、短い時間で作ったらお恥かしい限りの出来でさ」

「そんな事はないわよ」

「そうね。トリスタニアの宝飾店なら、軽く数百エキューはするわね」

ルイズの隣に座っているエレオノールが、私に話しかけてきます。

トリスタニアにある魔法アカデミー勤務の彼女は、急遽休暇を取って実家に戻って来ていたようです。

「エレオノール姉様、売りませんよ」

「お金にも困っていないヴァリエール家の私が、売るわけないですよーが！」

「エレオノール姉様が怖い……」

ルイズは、エレオノールの迫力に怯えています。
どうやら、ヴァリエール家の長女はかなり気が強いようです。

「エレオノール姉様は、どうして急に帰省されたのです？」

カトレアからの質問に、エレオノールは簡潔に答えていました。

「実は、あなたにアンリエッタ様から伝言を頼まれていてね」

どうやら、私の何かまた仕事の一つ増えたようでした。

「真珠のネックレスですか？」

「ええ、色はピンクか黒がいいわ。二連である必要はない。それを最低でも十本」

食事を終えた私は、場所を移して紅茶を飲みながらエレオノールの話を聞きます。

何でも、私がアンリエッタ王女に贈ったピンクパールのネックレスを見て、それを欲しいと言う外国の王族や貴族が沢山いたので、トリステイン政府で贈答用に在庫を確保したいとの事でした。

「うーん。少し時間がかかりますよ」

空の貝の内側にある真珠層を錬金で剥がして、核に何層にも張り付けて完成させる真珠は、実は作るのに一番手間がかかる宝石です。大粒にしないと価値は無いし、ネックレスを作るには数が必要だし、丁寧に作らないと鑑定士が一発で見抜けるほど偽物っぽく完成する。

私の錬金する真珠の価値は、天然物と見分けが付かないという部分にあり、本当であれば完成に何十年もかかる黒真珠やピンクパールを短時間で完成させられる点にありました。

全て天然物しか存在しない真珠の中でも、黒やピンクの真珠は滅多に出ず、それをネックレスにするほど数を集めるには膨大な時間がかかるのです。

「あのピンクパールのネックレスとイヤリングは、アンリエッタ様も大層気に入っているらしいわ」

「あの野蛮なゲルマニアの皇帝が、二十万エキユーで売って欲しいと言っていたからな」

本当に完全な天然物の黒真珠とピンクパールで、あれだけの大きさと数を使ったネックレスならば、軽くその倍の値段がするので、私の錬金真珠はなかなか評価されているようでした。

「時間を見て作るの、二ヶ月は待つてください」

「二ヶ月くらいなら大丈夫よ。一本二万エキューを出すそうよ」

「王国も吝嗇になったものだな。普通に市場に出せば、その倍は軽くするのよ」

ヴァリエール公爵が、王城に対する不満を述べます。

「あの鳥の骨の私心無き部分は認めるが、貴族の功績を正當に認められないようでは国は保たないのにな。ティーボ殿も、そう思うであらう？」

ヴァリエール公爵に話を振られてしまう私ですが、前世はしがな
いサラリーマンであり、今も貴族として教育は受けているが、ど
ちらかと言うと趣味の錬金の方に興味のウェイトが偏っている私に、
貴族としての生き方や矜持という物は難しい物がありました。

「私としては、グラモン一族の人間がトリスティン王国に対して、
二十万エキュー分の働きをしたと考えるしかないのですよ」

最低でも一本四万エキュー以上で売れる真珠のネックレス十本を、
一本二万エキューで売る。

一応、王国に対して恩が売れたと思う事にする私でした。

「ティーボ殿は、やはり達観しておられるな。世に出る偉人とは、
どこか世間の人間とは違うらしいが」

「ええ、自分でも変わり者であるとは自覚しているんです」

その日の夜は、ヴァリエール公爵を始めとする家族の人達と色々な話をして夜を明かし、次の日からは残り半分のゲルマニア側の領地の探索を開始します。

「銅鉱石とか鉄鉱石は、既に採集済みか……」

そこそこの純度のチタン鉱石とボーキサイトが出る岩山を数箇所発見しただけで終わりかと思っていた私でしたが、ここで大きな発見をする事となります。

改良ディテクトマジックで、ゲルマニアとの国境沿いの岩山の石を探索していた私は、今までは微量しか発見できなかったある金属を発見します。

「（これは、クロム……）」

この岩山の石には、かなり多目のクロムが混じっていたのです。これに炭素比率の少ない鉄とニッケルを混ぜると、耐食性が強い。つまり、錆び難いステンレス鋼の完成です。

ニッケルは、まだ微量を鉱石から取り出して備蓄しているだけですけど、このクロムも備蓄しておいて損は無いかもしれません。

これも、鉱石を購入する事にします。

「うん、非常に有意義だったな」

新しい鉱石の発見に、私はヴァリエール領を訪問して良かったと思いつつ、予定の探査を終えて家へと戻ります。

途中、もう一度ヴァリエール邸に寄ったのですが、その際に緑水晶で茎と葉を、黄色水晶で花弁を、ミルキークォーツで花びらを作った百合の花細工数本と、それを挿す薄い色の紅水晶の花瓶という

作品を置いて帰りました。

あそこの家の次女であるカトレアは病弱だと聞いたので、お見舞い代わりに置いて来たのです。

ところが……。

「うーん、これは見事な水晶細工だな。普通に買えば、何千エキュースするだろうな」

「私、男性の方からこんなに高価な物を買ったのは初めてです」

「ルイズへといい、カトレアへといい。彼は、うちの娘に興味があるのかな？」

ヴァリエール公爵は、何かとんでもない勘違いをしているようでした。

「よし！ ステンレスの完成だ！」

「ステンレスですか？ ティーポの命名センスは、面白いですね」

自宅に戻り、早速クロムを使って自室でステンレスの錬金に成功した私に母が話しかけてきます。

「ところで、この鉄は何が凄いのです？」

「これはサビ難いし、酸化性にも優れているんですよ」

私は、母に懸命にステンレスの長所を説明します。

「それは凄いのかもしれませんが、普通の鉄に固定化の魔法をかければ良いのでは？」

「……」

母の指摘に、私はステンレスは前世の世界でもなかなか認められなかったんだと思いつつながら、流しなどの調理設備をステンレス製へと変えるのでした。

六話

「そうか。ギーシュも、ティーボも、もうそんな歳になったのだな」

早い物で、私も十五歳になりました。

グラモン家の五男である私は、母と共に本宅に招待されて、今日は私の誕生日パーティーが行われています。

アンリエッタ王女から『鍊金』の二つ名を貰い、私の生成鍊金した金属や宝石類や、それに付随した特産品の工房や市場がグラモン領に出来るまでになった私は、家族だけでなく、パーティーに出席した取引先の商人達やギルドの幹部達などからも、お祝いの言葉とプレゼントを貰っていました。

「ティーボ、お誕生日おめでとう」

「ティーボ、おめでとう」

他にも近隣に領地を持つ貴族や、その代理人が訪れてプレゼントを置いて行きます。

ヴァリエール公爵はルイズを、モンモンラシ伯爵はモンモランシが代理人としてプレゼントを持って来ていました。

実は、知り合ってから、彼女達にも誕生日プレゼントを贈っていたのです。

私が鍊金作る真珠や瑪瑙、オパールなどを使ったアクセサリをですけどね。

「私は、香水を持ってきたわ」

「ありがとう、モンモランシー」

前世の影響か？

私は、あまりファッションや身嗜みに興味がありません。

一応は貴族の息子なので、『変に見えなければ良いかな？』くらいの感覚です。

その日に着る服なんて、完全にメイド任せですし。

そんな私に、それほど面識がないけれどギーシュとの確執の件で心配してくれているモンモランシーは、去年から自作の香水を私にプレゼントしてくれるようになりました。

「モンモランシーオリジナルの香水は、良い香りがするから好きなんだ」

「じゃあ、切れたら買ってよね」

「とはいえ、母のライバルでもあるしね」

実は、私の母もアルバイトでポーションやら化粧品などを作っていて、自分の息子にも男性用の香水を渡していたのです。

前の世界的に言うと、私はマザコン息子なのかもしれません。

「残念」

ですが、このハルケギニアの世界では、あまりそういう概念は無いらしいです。

それと、モンモランシーの香水作りは、財政的に逼迫している実家を助ける意味合いもあるらしいです。

積極的に売りに出しているわけではないですが、自分のお小遣い

はくらいという感覚らしいのですが。

貴族なのにこんなに金を稼いでいる男は、実は私くらいなのかもしれないですね。

「（何だよ。俺を睨むなよ……）」

そんな私とモンモランシーの会話を見て、ギーシュが鋭い視線を送っています。

ギーシュはモンモランシーに気があるらしいので、気が気ではないでしょう。

私としては、彼女にまだそこまでの感情を持っていないのですが。

「はい、私もプレゼントよ」

ルイズも、私にプレゼントを渡します。

包みを開けて見ると、中身は品質の良い白いシャツと黒のスラックスでした。

「ありがとう、ルイズ。でも、良くサイズがわかったね」

「ヴァリエール公爵家の情報力を侮らないでね」

「何か、丸裸にされた感じだなあ。でも、良いシャツとスラックスだね。どんな時に着ようかな？」

「ティーボ、何を言っているの？ あなたも、年が明けてフェオの月になったら魔法学院に入学じゃないの」

「そつえば、そんな話を以前に聞いたような……」

普通に領内で教育は受けていましたし、わざわざその魔法学院とやらに行く意義を感じていない私は、以前に父からその話を聞いた時に、『ふーりん、そんな場所があるんだ』くらいにしか感じていませんでした。

それに、いくらグラモン家が重鎮でも、妾の子で五男の私がそんな名門学校に行けるとも思わなかったからです。

魔法学院は、明日のトリステインを担う有力貴族の子弟達が、その存在を他の者達に紹介し、結婚相手や友人を作って将来に役立つ所と聞いています。

金属バカの私には、不用な場所だと思っていました。

「ティーボ、あなたはアンリエッタ様から二つ名を貰ったほどの人なのよ。むしろ、行かない方がおかしいわよ」

モンモランシーが、ルイズの意見に賛同します。

確かに、そう言われるとそんな気もしますが、今の私には領内を離れられないという事情もあります。

実際に、ふと視線を周囲に送ると。

父や兄達や、商人やギルド幹部達の顔が青ざめていました。

「そうか。あなたがいないと、アルミニウムとかが出来ないんだ」

ルイズのその一言で、父に多くの家臣や商人達が殺到します。

「グラモン伯爵様！　今ティーボ様がいないと、領内の経済が麻痺しますぞ！」

「そうです！　三年間もアルミの生産が中止なんて！　今でも足りないくらいなのに！　他の連中の作った不純物だらけの紛い物など、

誰も買いませんぞ！」

「細工用の水晶柱とヒスイ柱もです！ 注文が殺到しているんです！」

「真珠は、十年待ちのお客様がいるんですよ！」

「そういえば、そうだった……。だが、ティーボが魔法学院に行かないという選択肢はないし……」

殺到する家臣や商人達に対して、父は苦悶の表情を浮かべていました。

このトリステインにおいて、魔法学院に行かない貴族の子弟とはそれなりに見られてしまうものらしく、しかも私を魔法学院に行かせない事が王城に知れたら、アンリエッタ王女やマザリー二枢機卿やヴァリエール公爵から文句が出る可能性があるとの事でした。

これは、後で父から聞いたのですが。

「何か、大騒ぎになってるわね」

「ティーボも、魔法学院に行くのよね？」

「ええと……、今の時点では何とも……」

商人達に詰め寄られて苦悶する父を見ながら、私はこれからどうなるのであろうかと、少し不安を覚えていました。

「……」

そしてギーシュは、相変わらず私に鋭い視線を送り続けるのでし

た。

「それで、工房を魔法学院の隣に移転すると。そういうわけなのじやな？」

そして誕生パーティーから一週間ほど後。

その魔法学院では、学院長であるオスマンがグラモン伯爵の訪問を受けていた。

「それほど施設に手間がかかるわけではないのです。作業用の工房と言っても簡単な建物だけです。火は使わないですから。それと、鉱石や材料や在庫を置く倉庫が数棟、荷を積む馬車などを置く駐馬車場と荷積み場。後は常駐する家臣や警備の兵士達の家屋。道の整備も必要です」

グラモン伯爵の、オスマン学院長に対する態度には非常に丁寧な物があった。

この百歳とも三百歳とも言われている老人は、グラモン伯爵が学生の頃からずっと学院長であったからだ。

自分の若い頃の過ちまで知っている恩師に対しては、それは言葉が丁寧になるはずであった。

「学院の敷地外なので、文句は言えないの。しかし、それほど凄いい息子なのか」

目の前のグラモン元帥に言わせると、軍人としての力量はまだ不明であるらしい。

だが、既に土のスクウェアメイズで、新しい錬金を駆使して混ざり物なしの金属や宝石類などを作り出し。

新しい金属数種類の錬金にも成功している。

鉱石や合金などの知識にも長けているようだ。

世間では軍人バカと評されるグラモン伯爵がここまで優遇するという事は、よほどその将来に期待しているという事なのである。

実際に、あの常に財政難にあったグラモン領は今借金を返すどころか、逆に金に困ってる貴族に金を貸したりするほどまでに領地が富裕になっていたのだから。

高く売れる物ばかり錬金する、ティーボという息子のおかげなのである。

「それと、これはマザリーニ枢機卿からの手紙です」

オスマンが手紙を読むと、言葉は丁寧であったが、『許可しないと、お前が明日から無職になっても、誰も同情しないからな!』と書かれていた。

オスマンは、苦笑するだけであった。

「息子の卒業後には、完全に撤去する事はお約束します」

「反対する理由はないがの。じゃが、手伝いは出来ぬぞ」

「それは、我が家の家臣達が行いますので」

翌日から、魔法学院の隣では、グラモン家の家臣達や雇った人足達や商人達が出した応援の人間によって各施設の建設がスタートし、それに伴って周辺の道なども広げられていました。

他にも、近隣の領主などと鉱石や金属の輸送に関する情報の交換など、私の知らぬところでアシルなどが精力的に動いているようでした。

私は普通に、毎日の錬金をこなしているだけでしたが。

むしろ、余計な事をするとか効率が落ちるんで、その手の事はアシル任せなんですよ。

彼や他の家臣達も、ここ一年ほどで私から給料を貰う直臣になっていましたし、彼らを養うという意味においても、私は金属を錬金しないといけないんです。

実は、今までの蓄えで一生養えるほどなんですけど。

工事は一ヶ月ほどで終了し、それからはずぐに私が錬金だけを行なえるように受け入れ作業が行われます。

まあ、私が直接見たわけではないんですけどね。

「父上、奥様、お母様。行って来ます」

「少し早いけど、学院の入学準備でもしていてくれ」

「わかりました」

少し早いのですが、前の世界では二月に相当するハガルの月の終わりに、私は荷物を馬車に積んで魔法学院を目指します。

屋敷に隣接していた錬金場や鉱石の倉庫などが、完全に向こうに移転してしまっただからです。

魔法学院が始まるまでの一ヶ月と少しで、学院への入学準備を行ないつつ、なるべく錬金を行なって在庫を貯めて欲しいというのが、父や商人達からの希望のようでした。

「それでは、行って来ます」

錬金の中心である私の移動のためにすっかり静かになった屋敷周辺に驚きながら、馬車はゆっくりと魔法学院を目指して進むのでした。

「ティーボ様、お待ちしておりました」

「お互いに顔馴染み過ぎて、緊張感もないか」

「まあ、そう仰いますな」

五歳の頃から私に魔法を教え、そのまま父に命じられて私付きの家臣になり、数年前からは私の筆頭家臣となっていたアシルは、既に家族と共に魔法学院横の錬金施設で私を待ち構えていました。

最初は独身であった彼も、今では結婚をして子供達までいます。本当に、月日が流れるのは早いものです。

「魔法学院では寮に入るのが決まりですが、まだ卒業式が行われて

いないので、ティーボ様の部屋は決まっていなそうです」

それでも、錬金場の隣には私が住むための家が出来ていたの、とりあえずはそこを生活の拠点とする事にします。

数名で馬車から荷を降ろして、部屋に収納をします。

「その本は、慎重に取り扱ってくれ」

「わかりました」

私が子供の頃に本宅で見付けた場違いな工芸品である、なぜか前世の私が使っていた教科書や参考書や技術書の類。

実は、これを数年前に父から譲り受けていたのです。

父は、どうせ誰も読める人もいないからという事で、興味を持つ私にくれる事になったのですが、後で揉めると困るので今までに貯めたお金で買い取る事にしました。

その額は、十万エキュー。

屋敷の地下の秘密金庫に金貨は山ほど入っているの、そのくらいは余裕で出せます。

というか、十万エキューくらいでは減りませんね。

五歳の頃から錬金で作った金属や宝石を売り、その売り上げの五割を自分が取っていて、基本的な生活費は母が出していたので、実はあまり大金を使った経験が無いからでした。

あの秘密金庫には、今でも自作ジュラルミンケースに入った大量の金貨と、作ったものの滅多に市場には出さない宝石類が無造作に置かれていました。

それと、父から購入した、私の宝物である技術書や参考書の類の

写本もです。

木の枝を大量に持って来させて側の本を錬金し、中身の文字や図柄ら写真などをマジックアイテムである魔法のペンで写本させたのです。

さすがに、五万エキュールもするペンですね。

一字一句間違えないで、正確に写本を行なっていました。

ただ、図形や写真などは無理だったので、これは錬金を改良したコピーのような魔法で対応する事となりましたが。

この魔法にも相当苦勞して、納得が出来るまでに数年を要しましたけど。

その結果無事にコピーが取れたので、固定化をかけて地下金庫に仕舞っているのです。

話が十分逸れてしまいましたね……。

「引っ越しが終わったら、早速に錬金の方をお願いしているのですが」

「わかった」

荷物を自分の家に置いた私は、完成した各設備や建物を一通り見学し、集めた家臣や警備の兵士達や、早速に金属を買いに来た商人やギルドの顔見知りのメンバー達に挨拶をします。

「場所が移動してしまっただが、三年間は我慢してくれ。それでは、早速に錬金に入る」

私の一言で、彼らは機敏に動き始めます。

移動した作業場には、既に不純物が大量に混じったアルミニウムやインゴットが大量に積み重ねられていて、私はそれを再錬金して製品を

完成させ、出来上がった物は、別の家臣が隣のギルドの倉庫へと持って行きます。

そこで、予約品は代金と交換で待っていた商人に渡され、そうでない物は、同じ建物の中にあるオークション会場で次々と競り落とされて行きます。

チタンは売りに出さないの、そのまま倉庫に仕舞われて、我が家が鉱石を提供しているヴァリエール公爵家に提供されます。

他にも、予約のあった水晶柱やヒスイ柱の錬金を行い、金属は数日分の量を一気にこなしたので、この日は八時間ほどの稼動となっていました。

「ティーボ様、疲れましたでしょう？」

「でも、暫くはこんな感じなんだろう？」

魔法学院に入学すると、一日二時間の錬金タイムが取れる保障もないという事で、この一ヶ月でなるべく在庫を貯めるという方針になっていました。

せっかくの学院生活なのに、行事や付き合いを抜けて錬金というのもつまらないですし。

「入寮は、ティールの月のティワズの週のユルの曜日からです」

簡単に言うと、三月の最後の週の月曜日ぐらいの感覚ですね。まだ一ヶ月は十分にあります。

「今日は、さすがに少し体が疲れたな。夕食を取って寝るか」

その日は、アシルが新規に雇った料理人が作る夕食を食べてから部屋で就寝します。

さすがは、私の筆頭家臣であるアシルです。

彼は、比較的何でも器用にこなす男なのですよ。

ただ、翌朝に大変な事を忘れていた事に気が付くのですが。

「おはようございます、ティーボ様」

「何で、アシルが起こしに来るんだ？ メイドは雇わなかったのか？」

「それが、綺麗サツパリと忘れていました」

「……」

朝一番に、三十歳を超えた顔の濃い男性に起こされるのは勘弁して欲しいのですが……。

「メイドを雇えばいい」

「学院が始まると、不用になりませんか？」

「いや、普通に俺付きにして、ここから通いで良く無いか？ 俺が金を払って学院の宿舎に滞在でもいい。とにかく専用のメイドが欲しい」

「拘りますね」

「俺は、朝に自分が着る服すら決められない男だ」

「全然、自慢になりませんよ。それ」

前世では、メイドなどはメイド喫茶か創作の世界の話でしたが、今世での私は、軍人一家であるグラモン家の子供としての決まった自己鍛錬や、貴族としての教育や、大量にこなす錬金や、自分の部屋に戻ってからの自己研究など。

忙しいので、メイドに身の回りの世話を任せる事に慣れてしまっていたのです。

自分でやると煩わしい事をメイドに任せて、そのメイドに給料を払えば良い。

その方が合理的だし、金はあるのだから。
そういう風に考えている私でした。

「となると、早速に行動だな」

私は、日課である朝の鍛錬を終わらせて朝食を取ると、隣の魔法学院へと向かいます。

私が生徒の癖に例外的な事をしているので、その件で学院長に挨拶をする事と、朝の鍛錬の時に学院に新人メイド達が入って行くのを目撃したからでした。

「つまり、彼女達の誰かを引き抜けばいいんだ」

「そうすると、学院が人手不足になりませんか？」

「アシル、優れた人材は高い給料に集まるんだ。彼女達の自主的な行動を止めるのは良くないな。それに、こういう場所は余裕を持つ

てメイドを集めるものだ。足りなければ、すぐに補充の利くシステムになっっているだろうし」

「それは、そうなんでしょうけど……」

私は、アシルをお供に、学院の敷地内に入ります。

衛兵に自分の身分と来訪目的を告げ、迎えの人間を待っていると、そこに学院長の秘書を名乗る女性が現れました。

「始めまして。私、学院長であるオールド・オスマンの秘書を務めております。ロングビルと申します」

「私は、この度魔法学院に入学する事になったティーボ・ド・グラモンです。彼は、私の家臣であるアシルです」

「丁寧なご挨拶痛み入ります。早速、学院長室へと案内いたしますわ」

お互いに挨拶を交わし、ロングビルと名乗った若い女性秘書の案内で学院長室に行くと、中では白髪の老人が水キセルを吹かしていました。

「おお、魔法学院にようこそ。ミスタ・グラモン」

「その呼び方ですと、該当者が二人になりますね」

「そういえば、そなたの兄も入学じゃったな」

本妻である奥様の子供で、一週間だけ早生まれの兄のギーシュ。私が、唯一苦手としている人物でした。

しかも、彼は同学年生として一緒に入学するのです。

「事情は聞いておるよ。色々大変じゃの」

「人間は、何か一つくらい不自由する事があって当然ですから。それと、これは挨拶の品です」

隣にあれだけの規模の施設を無理を言っ作っているので、私は挨拶代わりに水晶で作った五十 سانتほどの高さの竜の置物をオスマンに進呈します。

「ほう、見事な出来じゃの。では、学院内に飾らせて貰おうかの」

オスマンは、私からの贈り物を自分のポケットには入れずに、学院の財産とするようです。

どうやら、彼は見た目以上に人格者であるようでした。

「それと、もう一つお願いが」

「可能ならば、叶えてしんぜよう」

私は、自分専属のメイドの募集をここで行なって良いかを尋ねます。

「そのくらいなら、構わんよ」

メイドは、この時期には余り気味になるようです。

学院の三年生が卒業するように、メイドや衛兵達もこの区切りの良い時期に他所に転職する者や、結婚などで退職する者などがあるそうです。

引き継ぎなどがあるので過剰な数のメイドがいるし、足りなければ、予備採用の人に声がかかるようになってきているとの話でした。

「それと、入学後は専属のメイドをここのメイド用の寮に住まわせて欲しいのです。費用は負担しますので」

「それも大丈夫じゃの」

許可を貰った私は、その足でメイド達の待機部屋へと移動して、予め準備していた求人広告を張ります。

やはり、字が読める人の方が良いですからね。

「あの、貴族様が何の用事でしょうか？」

「今度入学する者だが、実は色々とあつて専属のメイドを探しているのだ」

私は、待機部屋の壁に求人広告を張ります。

虚無の日は休みで、月給は20エキュー。

衣食住は雇用主が負担。

条件は悪くないはずですよ。

むしろ良い方でしょう。

この国では、一年で百二十エキューあれば平民は普通に暮らせます。

という事は、一ヶ月に十エキューが基本となるはずなのですが、メイドは衣食住が保障されていますからね。

十エキューを割っていても、給料がそのまま残るといった利点があります。

しかも、私が出す金額は月に二十エキュー。

当然、多くの希望者が現れました。
より取り見取りですね。

「誰にしようかな？」

手を挙げたメイド達と話などをしながら、誰にしようかと考えます。

別に性的な事はしないですけど、可愛い子の方が嬉しいですね。
本当、三十歳超えのオツさんに起こされるとか無いですし。

「ティーボ様は、意外と根に持たれるのですね」

「奥さんに起こしに行かせるとか、その辺は気を使って欲しかった」

私はアシルと二人で、十分ほど考えていたのですが、そこに追加で一人のメイドが入って来ます。

「あの、何をしているのでしょうか？」

私は、そのメイドに目が釘付けとなってしまう。

なぜなら、その娘は私の前世であった日本人と同じ黒い髪と黒い瞳をしていたからです。

今の自分は金髪碧眼ですけど、彼女を見るとこころ旅愁を感じさせてくれます。

「君は、字の読み書きは出来るのかな？」

「はい、一応出来ますけど、それがどうかされましたか？ 貴族様」

「採用！」

「へっ?」

私は、黒髪のメイドの手を取ると、その手を上にあげます。
なぜと言われると困るのですが、勝者って事ですかね?
専属のメイドがその娘に決まると、他の候補者は残念そうに散っ
ていきます。

「ところで、何の話なんでしょう?」

事情の良くわからない彼女は、一人首を傾げています。

「ティーボ様、ちゃんと説明をしないと」

「そういえば、そうだった。ところで、君の名前は?」

「シエスタと申します」

「簡単に言うと、採用だ!」

「はあ……」

「ティーボ様、説明が足りません」

こうして私は、黒髪・黒瞳のメイド。

シエスタを専属のメイドとするのでした。

七話

「ティーボ様、そろそろ起きる時間ですよ」

翌日の朝、無事に専属メイドの雇用に成功していた私を、その雇った黒髪の美少女メイドであるシエスタが起こしに来ます。

その可愛らしい姿に、昨日のアシルが自分を起こしに来た暗黒の記憶を消し去ります。

「もう朝か。鍛錬に行くかな」

「お召し物は準備してあります」

私は、人に服を着せて貰うのは好きでは無いのですが、自分で服を準備するのが面倒な男なのです。

寝巻きから運動用の動き易い格好に着替えると、そのまま外へと移動します。

すると、筆頭家臣であるアシルが待っていました。

この何でもこなす器用な家臣は、私の鍛錬のコーチでもあるのです。

貴族は体を鍛えないものと思われがちですが、代々軍人家系であるグラモン家の子供や家臣やその家族は、出来る限り体を鍛えます。

私は少し毛色の違う子供なので、まず戦場に出る事はないでしょうけど、それでも父や兄達から常に体を鍛えるように言われているからです。

基礎的な体力強化の運動を行い、基本的な戦場で使える体術や、杖にブレイドをかけた際の杖捌きなどをアシルから習います。

訓練メニューは軍人の名門家系という事で、昔から効率的な物が伝わっているようです。

私は、淡々と一日のノルマをこなしていきます。

「まあまあですかね」

「俺に、腕っ節の方を期待しないように」

「あのゴーレムの出来なら、戦場で死にはしないと思うのですが」

私の前線要員軍人としての素養は、あまり高くはないようです。運動神経も普通か、それよりも少しだけ上くらいですしね。むしろ、あのギーシュの方が才能があると思います。

なぜか魔法やゴーレムを使った決闘では、一度も負けた事がないのですが、それはゴーレム戦闘限定だからでしょうね。

私達がガチで攻撃魔法を使って決闘をしたら、下手をすると死人が出てしまいますので。

「今日は、この辺で」

二時間ほど汗を流した私達は、シエスタの給支で朝食を食べます。そして、その後は昼食やオヤツタイムを挟んで、夕方までひたすら錬金を行なう。

これが、入学式までの私の大体のスケジュールでした。

「シエスタは、生まれはどこなんだい？」

「はい、タルブって村です。ワインが名産で美味しいんですよ」

その日の夕食後、私はシエスタに紅茶を注いで貰いながら、彼女と話をしていました。

「今度、買い取りに人を遣ろうかな？ 貴族だから、ワインくらい飲んどくか」

「そんな理由で、ワインを飲むんですか？」

「そろそろ、飲んでおくか的な話だな」

「ティーボ様のような貴族様は、私は初めてです」

それは、前世は日本人で小市民的サラリーマンだったからだなと思っ私でした。

「ところで、シエスタの黒髪は、タルブの村では普通なのかい？」

「いいえ、実は私の曾祖父さんがそうだったんです」

シエスタは、自分の曾祖父が自分と同じ髪と瞳の色をしていた事を話します。

「曾祖父さんは、遙か東の地より竜の羽衣に乗ってこの地に現れたそうです」

「竜の羽衣？」

「はい、今でも村に飾ってありますけど、あんなに大きな物が本当に飛んだのかはわからないんです」

「それは、興味深い話だな。観光したら面白そうだ」

「長期のお休みにでもいかがですか？ ご案内しますよ」

「いいね。夏休みにでも」

いきなり専属のメイドにさせられてしまったシエスタですが、その待遇には不満は無いようです。

彼女に面倒を見て貰うと、色々と生活が楽になります。

可愛いので、目の保養にもなりますし。

なるべく卒業まで働いて貰って、アシルが自分を起こしに来るといふ悪夢を避けたいものです。

彼には悪いのですが、朝起きて一番最初に見る顔がアレでは、いきなりヤル気が殺がれてしまうものですから。

「それでは、おやすみなさいませ」

食後は、眠くなるまで本を読んだり独自に研究を行ったりしてから、シエスタの準備したベッドで就寝します。

やはり、シーツは毎日交換で天日干しに限りますね。

それから入寮の日までは、毎日ほぼ同じスケジュールで錬金の仕事をこなします。

そして、遂に今日は入寮の日となりました。

三年生が卒業したので、空いた部屋の割り振りが終了したのです。

私は、アシルや数名の衛兵達に荷物を持たせて、指定された寮の部屋へと移動を開始します。

「あの……、私は荷物を持たなくて宜しいのですか？」

ただ一人手ぶらのシエスタが、私に申し訳無さそうに聞いてきます。

「この荷を持つという行為も、グラモン家の人間にとっては鍛錬の一種だから。むしろ、持ちますと言われる方が面倒なんだよ」

積極的に重い荷を持って体を鍛える。

これは、効率的に体を鍛える方法に長けたグラモン家の半ば掟なのです。

ただ、女性に良い所を見せようとするという、グラモン家代々の男達の下心も入った掟なのですが。

合計五名で指定された部屋に到着した私達は、大体の位置に持って来た荷物を配置して行きます。

細かい部分は、今度こそメイドであるシエスタの仕事です。

「見た事が無い字の本ですね」

「私の家宝なんだ」

数十冊にまで厳選して持って来た、例の場違いな工芸品である参考書や技術書なども本棚に仕舞い、引越しは一時間ほどで終了します。

「あとは入寮したと報告をして、鍊金でもするか」

「在庫が思ったよりも貯まっていないですからね」

「アシルが、ポンポンと売りに出すからだろうに」

「いやあ、面白いほど売れるんでつい」

この一ヶ月で三か月分の在庫を貯めようと目論んだ私でしたが、実際にはその半分ほどしか在庫が貯まりませんでした。

ここがトリスタニアに近い事から、新規の商人達がアルミなどの購入に参戦して、価格を暴騰させないために前よりも多くの量を放出してしまっただけです。

「入学すると、数日は錬金が出来ないかもしれない。少しでもやっておくか……」

そう言いながら部屋を出た私の視線に、あの人物の顔が映ります。半分だけ血の繋がった、私の兄であるギーシュでした。

「ティーボか……。隣同士とはね……」

予想は出来た事ですが、いざそうだと知ると嫌なものです。

「アシルも大変だね。グラモン家の直臣から、陪臣に格下げになっ
てしまった」

ギーシュが、アシルに同情の言葉をかけます。

確かに、世間的には彼は降格した事になるからです。

ただ、給料などは格段に上がっています。

彼は、グラモン分家の当主である私の家宰という地位にあるから

です。

私も彼も領地は持っていませんが、私は彼に下手な子爵など及びもつかない給金を与えています。

私が鍊金だけをしていられるのは、彼が様々な下準備をしているからなのですから。

「いえ、ティーボ様にはご評価をいただきまして……」

アシルが、答え難そうに話をします。

本家の息子であるギーシュに、あからさまに否定の言葉を言うわけにはいかなかったからです。

それに、今日はギーシュに従って引越しの手伝いをしている家臣も、何とも言えない表情を私やアシルに向けています。

『お二人とも、災難でしたな』

まるで、そう言っているようでした。

「兄上も忙しいようですし、私も用事がありますので……」

これ以上話を続けても余計に拗れるだけだと思った私は、その場を立ち去ろうとします。

ギーシュは私に向かって舌打ちをしていたようですが、その一行に混じっているシエスタを見つけると、再び声をかけます。

「そのメイド、僕の部屋の引越しを手伝いたまえ」

シエスタが学院のメイドであると勘違いしているギーシュが、彼女に引越しの手伝いを命じたのです。

「兄上、彼女は私専属のメイドなんですよ。ご勘弁を」

「専属のメイド？」

「色々忙しい身ですので」

「結構なご身分だね、妾の子供の癖に。少しくらい父上に目をかけられているからと言って専属のメイド？ まあいいさ。入学後に、貴族社会の厳しさを知るといいさ」

ギーシュという不安要素はありましたが、その後は順調に入学準備が進み、そのまま入学・クラス分け・授業の説明などと時間は進んでいきます。

そして、その時になってから初めてギーシュの言った言葉が現実の物となるのです。

「（男は、見事に誰も話しかけてこないな）」

クラス分けも終了し、最初の授業説明の後の休み時間。

私は、教室の中で見事に孤立していました。

いくらグラモン領発展に功績があっても、所詮は妾の子。

それに、ある人物の暗躍もあったようでした。

「（本当ならば、ここに入学できる身分ではないんだよ。きっと、あの妾が父に無理矢理頼んで入学させたんだと思うよ。本当に、困

ったものさ)」

「(でも、優れたメイジであり、錬金のプロなんだろう?)」

「(金属に宝石にと。お金稼ぎにだけ長けた、卑しい血の男なのさ。僕の弟だと思うだけで虫唾が走る)」

まるで、前世で子供の頃に見たドラマのような光景です。

本妻の子供である兄が、妾腹の弟の悪評を流すシーン。

腹が立たないと言えば嘘になりますけど、人生二回目ですからね。子供の戯言だと思って、適当に無視する事にします。

ですが、さすがはグラモン家の息子です。

ギーシュの悪口で、男子生徒達は誰も近寄って来ません。

彼ら貴族の子弟達は、実際に父に会って話をしたり私の評判を聞いた事ありません。

なので、彼らはギーシュの言葉を兄達や領内の家臣達の考えだと思ひ、私と仲良くしてグラモン伯爵家に睨まれるのは嫌という事なのでしょう。

恐ろしきかな、貴族社会ですね。

「ティーボ、言わせておいて大丈夫なの?」

「ギーシュが、あんなに陰険だとは思わなかったわ」

一緒に入学して同じクラスになったルイズとモンモランシーが、心配そうに話しかけて来ます。

一方、数年前から知り合いであるルイズやモンモランシーは、私に普通に話しかけてきます。

「言ったところで、改まるとも思えないけどな。暫く無視するしかないさ」

もし私とギーシュの立場が逆であれば、多分私も彼を恨んだと思うのです。

ほぼ同じの弟が、自分よりも父や家臣達に評価されて当てにされている。

気分が良いはずはないのです。

ですが、私はこの生き方を変えるつもりはありません。

前世で若死にしていまい、やりたい事が中途半端だったので、この世界では好きに金属や宝石を作ろうと思うのです。

科学的な方法では難しそうですが、錬金という魔法があればモリブデン鋼とか、タングステン鉱石も探してみたいですし、他にも色々金属を作りたい。

その輝きを見つめていたのです。

もっとも、見つめる前に売られて行ってしまう現実がありますけど。

「でも、それだと友達が出来ないでしょう」

「二人がいるさ」

私は、二人と話をしながら持参した10 سانت四方の石英の塊を錬金して水晶の柱へと変化させます。

何となくこういう予感がしていたので、暇潰しに持って来たんですよね。

続けて微量の鉄イオンを配合して紫水晶に色を変化させ、最後にプレスを吐く竜の細工に変化させて完成です。

最初は美術的素養が無くて苦労しましたが、最近では納得の行く作品が完成するようになりました。

「竜なの。男の子よね」

「そうね、もっと可愛い動物がいいわ」

モンモランシーも、ルイズも、私の作品をお気に召さないようです。

水晶で作った竜の置物は、私が作るの贈答品の中でも一番の人気なんです。

「じゃあ、何が可愛いんだ？」

「うーん、子犬とか？」

私は、ルイズのリクエストに答えて細工を子犬の形へと変化させます。

色も、可愛さが出るように紅水晶のピンク色へと変更です。

「こんな物で？」

「上手よね」

ルイズは、私の作品の出来に満足しているようでした。

「じゃあ、あげるよ」

「ありがとう」

私からのプレゼントに、ルイズは大喜びでそれを受け取っていました。

「私は、子猫がいいわ」

「俺は町の小物屋さんか」

「いいじゃない。ルイズにあげて、私にあげないって不公平は無いと思うのよ」

「色はどうする？」

「黄色がいいわ。黄水晶ってあるんでしょ？」

「レモン水晶ってのもあるよ。水晶は実に奥が深い」

水晶は金属イオンなどの混ざり物の影響で、その色を大きく変えます。

私は、岩石に含まれる微量の発色物質を自在に結晶に折り込み、様々な色や濃淡の付いた水晶を作ります。

「これが、レモン水晶」

「本当に、レモン色なのね。子猫も可愛いわ。ありがとう」

モンモランシーも、私から渡された水晶細工に大喜びしています。

「ねえ、私にも作って！」

「私も！」

ルイズとモンモランシーが私から貰った水晶細工の出来を見た女

子生徒達が次々と私に挨拶をして来て、更に自分達にも水晶細工が欲しいとお願いをして来ます。

若い女の子達のお願いに、既に精神年齢が四十歳を超えている私はホイホイと水晶細工を作って行きます。

まあ、最初なんで景気良くプレゼントという事ですね。

男子と仲良くなれないので、せめて女子と思ったんです。

「子グマがいいの？ いいよ、茶水晶つてのもあるし」

「ありがとう」

「渋い趣味だね、黒水晶もあるよ。水晶玉が欲しいの？ へえ、占いをするんだ。今度占ってよ」

「いいわよ」

男子生徒とは仲良くなれない私ですが、女子生徒達とは大分仲良くなる事に成功したようです。

ですが……。

「見たまえ諸君、女性を物で釣って卑しい男だ。貴族とはとても思えないね。商人の血でも引いているのかもしれない」

ギーシュは、相変わらず私に嫌味を言い放っていました。

八話

「みなさん、魔法学院への入学おめでとございます。私は土系統の魔法を教えるシュヴルーズと申します」

魔法学院へと入学した私は、入学式、クラス分け、オリエンテーション（授業内容の説明）などの行事を無難にこなし、遂に今日から授業がスタートします。

最初の授業は私の得意な土系統魔法の授業で、教師はミセス・シユヴルーズというふくよかな中年女性が担当する事になったようです。

実は、彼女。

二つ名は『赤土』で、かなり高名な土のトライアングルメイジなのです。

彼女は魔法関連の著書が多く、私も幼い頃に彼女の本で良く魔法の勉強をしたものでした。

「まずは、土系統の魔法の基本であり、その奥の深さは比類する物がない錬金から始めるとしましょうか。ですが……」

彼女の視線は、私へと向かいます。

「ひょっとすると、私はあなたに教える事が無いかもしれませんね」

ミセス・シユヴルーズは、既にスクウェアメイジになっている私に教える事があるのか不安らしいのですが、魔法においても基礎は重要ですし、私の子供の頃の教師役であったアシルは、ラインメイジの上くらいの実力です。

それに、同じ事を教わっても、教える人が変わると新しい考え方などが思い浮かんで、錬金に有利になるかも知れないのです。なので、私は授業で手を抜こうとは思っていませんでした。

「私は、ミセス・シュヴルーズの著作で魔法を勉強していましたので、楽しみにしていました」

「そう言っていただけだと幸いですね。実は先ほど、ミスタ・ギトーが残念そうな顔をしていたのですが……」

ミスタ・ギトーとは、先ほどのオリエンテーションによると風の系統魔法を教える教師であり、風のスクウェアメイジとしても有名な人物のようでした。

「今年の新生でスクウェアメイジはただ一人で、トライアングルメイジも二名とか。しかも、系統も二人が土で一人は火。風の系統魔法を教えるミスタ・ギトーとしては複雑なようですね。私は、とても嬉しいのですが」

ミセス・シュヴルーズの言う土のスクウェアメイジとは私の事で、土のトライアングルメイジは、我が兄であるギーシュの事でした。

数年前から月に一度の決闘が恒例となっていたので、私に負ける度に彼は魔法の鍛錬を続けていたらしいです。

そしてもう一人は、別のクラスにいるゲルアニアからの留学生。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーです。

彼女の実家であるツェルプストー辺境伯家は、ルイズの実家であるヴァリエール公爵家とは領地が隣同士で、戦争時には常に杖を交

えた間柄であるうえに、ヴァリエール家の恋人を先祖代々奪ってきたという因縁があるので、当然ルイズ仲が悪いようです。

後の恋人云々の話を父から聞いた際には、乾いた笑いしか浮かびませんでしたけど。

彼女は確か、火のトライアングルメイジだと聞いています。

実は、クラスが違うので遠くからしか見た事が無いんですけど、良い女みたいです。

ルイズやモンモランシーにはない、見事な二つの膨らみが見えますし。

男は、基本的に巨乳が好きです。

「本当はここで説明なのですが、錬金の魔法は既に大半の方が習得していると思いますので、実際に誰かにやって貰いましょうか。では、ミスタ・グラモン」

ミセス・シュヴルーズの呼びかけに、私とギーシュが同時に反応してしまいました。

思えば、私も彼もグラモンの苗字を持っていたんですね。

多分、ギーシュには認めたくない事実なのでしょうが。

私に厳しい視線を向けています。

「困りましたわね。では、あなたの方は『錬金』殿と呼ばせて貰いましょうか。せっかく、アンリエッタ様にいただいた二つ名です」

私がアンリエッタ王女から『錬金』の二つ名を貰った事実は、トリストイン国内では知らない貴族はいないようでした。

私は、その二つ名が実は苦手なのですが……。

「では、早速にこの石の錬金をお願いします」

私は教室の前に出て、教卓の上に置かれた石を錬金するように言われます。

ただ、私は普通の錬金はあまり好きでは無いんですね。

全く見付からない材料の錬金ならば一生懸命にやるのですが、基本は結合分子の組み換えと、鉱石からの純粋物の取り出しで魔力の消費を抑えるのがクールだと思っています。

ですが、これは授業なので錬金の呪文を石に向かって唱えます。

すると石は、純銀へと変化します。

その気になれば金も錬金可能なのですが、やはり原子変換の錬金ではそんなに多くの金を錬金できるはずがありません。

それに、魔力が完全に空になると回復に数日はかかってしまうので、毎日の日課である錬金が出来ないと辛いものがあります。

その点、小石の量程度の銀くらいならば、それほど魔力を使わないで済みますから。

「凄いな……」

「さすがは、『錬金』のティーボだな」

銀を錬金した私に、他の同級生達は驚きヒソヒソと隣の生徒達と話をしていました。

「では、お兄さんのミスタ・グラモンにもお願いしましょうか？」

ミセス・シュヴルーズは、私の錬金した銀を仕舞いながら、ギー

シュにも見本を見せるように言います。

「ミセス・シュヴルーズ、彼の錬金した銀はどうするのですか？」

「ネコババはしませんよ」

モンモランシーの指摘に、ミセス・シュヴルーズは笑みを浮かべながら答えます。

「錬金の純度を見るのですよ。錬金は、比較的簡単に誰にでも出来るようになります。ですが、その完成度には大きな違いが出ます」

不純物だらけとか、表面だけ錬金されてあとは元の石のままとか。彼女はそれを精査して、生徒の力量を理解しようとしているらしいのです。

「では、僕も銀を錬金します」

「（おーー、おーー。無理しちゃって……）」

私は、ギーシュの錬金の腕前がさほどでない事を知っていました。錬金が一番得意な私を嫌悪していたので、自然とワルキューレと自分で呼んでいる女性型ゴーレムの合成や、戦場で使える土系統魔法の習得に力を入れていた事を知っていたからでした。

「イル・アース・デル」

ギーシュがスペルを唱えると、小石は次第に銀色へと変化します。一応は、銀の錬金に成功したようです。

ですが、私やミセス・シュヴルーズから見ると、やはり少し純度

が低いように見えました。

「悪くはないですね。錬金とは、魔力の他に錬金する金属のイメージの強さも重要なのです。ミスタ・グラモンの魔力は、銀を錬金可能なレベルにはあります。後は、錬金をする際のイメージを強くする強さ。これが重要なのです。では、他の方々は、基本である銅から始めましょうか」

他の生徒達は、ミセス・シュヴルーズから配られた小石を銅や青銅に変えていきます。

私が錬金した小石を見ると、やはり人によって純度や錬金可能な金属に差があるようです。

「錬金した小石は回収いたします。純度や種類を調べて、次の授業の時に評価をお伝えしたいと思います」

錬金は、実はそんなに難しい魔法ではありません。

ですが、不純物だらけの金属や、形が歪な物品など。

そんな物をいくら作っても、ただの魔力の無駄となってしまうです。

極めるには才能と修練が必要であり、極めれば攻撃魔法など比べ物にならないほどの。

歴史に名を残す偉業となる可能性があるのです。

錬金のコツは、イメージの正確さと強さ。

これが私の出した結論ですが、そのイメージの正確さは別に物理的・化学的に正しい必要は無いみたいです。

前世の知識や勉強していた事をイメージして錬金をしている私には、物理的・化学的な知識は錬金に役に立ちますが、元素の種類や原子・分子結合について知らない人に私の知識を教えても、教えら

れた人がそれに少しでも疑問を持てば、錬金は成功しません。

多少間違っている考えでも、本人が絶対にこれが正しいと感じて錬金をすれば、完璧とまでは言わなくてもかなりの成果を出す事も可能なのです。

私は、いきなり子供が元素の話をしても信じて貰えないと思うので教えた事はありませんが、それをボカして抽象的に家臣達に教えても、いまだに満足のいく純度の金属を錬金できない点からしても、この説は正しいと思います。

このハルケギニアの世界で、魔法が六千年も主役たりえた理由。

それは、魔法は非常に便利なのだが、それを系統立てて教える事の難しさなのかもしれません。

魔法と科学は対立しないと、私は思うのです。

なぜなら、魔法で科学的な変化が発生するからなのですが。

魔法によって発生した事象が正確に理解できれば、その魔法を理論立てて教える事も可能なのですが、普通のメイジはそんな事は気にしないでしようし。

彼らは魔法の結果の良さにだけで満足してしまい、その過程やどうしてそういう変化が起こったのかを気にしないわけですから。

魔法は極めれば便利な技術ですが、たまに一部発生する天才の技を後世に正確に伝えられるかは、不確定な部分があります。

だから、魔法で作られた素晴らしい物があっても、それがなかなか量産されなかったりします。

量産がされないとその素晴らしい物の価格が下がらないので、世間に広がって大きな変化が発生しないからです。

ただ最近では、ゲルマニアのようにコークスを使った製鉄技術な

どの科学的アプローチが始まりつつあるようですが。

「あと錬金物を提出していないのは……。ミス・ヴァリエールですね」

ミセス・シュヴルーズの言う通りに、ただ一人机の前の小石を見つめるルイズの存在がありました。

「ルイズ、錬金は苦手なのか？」

「ええと……。そういつわけでも……」

考えてみると、私はルイズの得意な魔法の系統や、呪文だのという話を聞いた事がありません。

モンモランシーは、水の系統が得意なのを知っていたのですが。

「早くやらないと授業が終わってしまうぞ」

「ええ……」

私に促されたルイズが、杖を振りながら錬金の呪文を唱えます。
すると……。

何か大爆発が発生したような気がするのですが、私はそのまま意識を失ってしまうのでした。

「あれ？　ここは？」

暫くして、私は良く知らない部屋で目を醒ました。
どうやら、保健室や医務室の類である部屋のように、隣では同じくミセス・シュヴルーズがベットで眠っていました。

「目を醒ました？」

私にずっと付き添ってくれていたらしいモンモランシーが声をかけてきます。

「何が起こったんだ？」

「それがね……」

モンモランシーからの話を総合すると、ルイズの錬金の魔法で大爆発が発生して、至近にいた私はそれを防御する暇もなく直撃して気を失ってしまったとの話でした。

そして同じく突然の事に、ミセス・シュヴルーズも気を失ってしまったようです。

「そうか。日頃の訓練は、まるで役に立たなかったな」

「まさか、錬金が爆発するとは誰も思わないと思うけど……」

とはいえ、これが基礎訓練しかしていない私の限界なのでしょう。例えば、トリスタニアの王城にいる魔法衛士隊などの近衛の連中は、人間の限界を超えたような連中ばかりです。
咄嗟に、爆発による気絶を防いでいたかもしれません。

「それで、ルイズは？」

「罰当番よ。散らかった教室の掃除をしているわ」

「あら、錬金殿も気絶組ですか？」

モンモランシーと話をしていると、同じくベッドで寝ていたミセス・シュヴルーズが目を醒まします。

「あれは、避けるのが困難ですからね」

「ええ、私も大変に驚きました」

私とミセス・シュヴルーズは、同じ土の魔法を愛する者同士。先ほどのルイズの起こした事象についての話をします。

「スペルに間違った箇所はない。魔力の流れと放出先に不自然な点もない」

「なのに、錬金が爆発した。変ですよね？」

私とミセス・シュヴルーズは、一緒に考え込んでしまいます。

ルイズは、特に間違った事はしていない。

少なくとも、熟練の教師であるミセス・シュヴルーズにも見分けは付かなかった。

それでも、魔法が爆発した。

普通、魔法が失敗して爆発する事などはあり得ないし、そんな話は今までに聞いた事もない。

なのに、それが目の前で発生した。

不思議に思わない方がおかしいのです。

「難しい生徒ですわ。どう教えて良いものか」

「魔力は、ピカイチですけどね」

ミセス・シュヴルーズは再び考え込んでしまいましたが、私が改めてルイズを観察すると、彼女の魔力の量はかなりの物です。

私も、魔力の量だけで言えば近年稀にない量を持っているとアシルなどは言うのですが、私の場合には錬金で毎日大量に使っていますからね。

それに、荒事は苦手ですし。

ところが、ルイズはその私すら遙かに凌駕する魔力を持っているのです。

なのに、全ての魔法が爆発する。

不思議としか言いようがありません。

「場所を考えて、地道に特訓させるしか無いのでは？」

「確かに、錬金殿の言う通りですね。屋内での魔法は、爆発事故増大の元でしょうし」

ミセス・シュヴルーズは、そう言いながら早速に先ほどの授業で生徒達が錬金をした作品の評価を行っていました。

ディテクトマジックを改良させた、その金属の状態や純度を計る魔法を使いながら、一つずつ評価を行ってメモをします。

「さすがですね。錬金殿は。完全な純銀を錬金できるなんて。私が数ヶ月間魔力を貯めて錬金しても、これほどの純度の銀は作れません」

ミセス・シュヴルーズはメモに私の名前を書き、評価をSと書いていました。

「あなたのお兄さんの銀は……。色がくすんでいますね。銀は七割くらいでしょうか？ それと、これは表面だけで、中身は大半が真鍮ですね。やはり、錬金の精度に関しては、少し練習不足のようです」

我が兄ギーシュの評価は、Bとなっていました。

真鍮を錬金できるメイジはかなり優秀なのですが、今回は銀を錬金すると宣言しての真鍮なので評価が下がったようです。

また兄は、私に敵意を燃やす事になるのでしょうかね。

「ミセス・シュヴルーズの分析の魔法は凄いですよね。私は子供の頃に、ミセス・シュヴルーズの著書でその呪文を覚えたんですよ」

「私の本だけで覚えるとは凄いですね。それと、ミス・モンモランシーは青銅の錬金は完璧なようです。早く真鍮へとステップアップされる事を願いますよ」

結局その日は夕方まで、私はミセス・シュヴルーズと錬金や金属の話について話が弾むのでした。

モンモランシーは、途中で付き合い切れないのか、授業に戻ると言って抜け出していました。

九話

「ごめんなさい……」

授業初日にルイズの爆発魔法で気絶してしまい。

その後医務室送りになった私は、同じ医務室送り仲間になったミセス・シュヴルーズと錬金・金属談義に花を咲かせた後に、いつもの日課である作業場での金属錬金に勤しみます。

これは正確には、抽出・合成と呼ぶのが相応しいのですが、そんな細かい事を気にする人はあまりいないので、普通に錬金と呼ぶ事になっています。

今日も、予め家臣達が錬金をしていた純度の低いアルミを純アルミニウムに変える作業を行い、最近注文が増えているヒスイ柱を数个錬金してから学院の寮の戻ろうと作業場の外に出ると、そこには申し訳無さそうな表情をしたルイズが待っていました。

わざわざこちらまで謝りに来たようです。

「今日は驚いたけど、誰にでも失敗はある事だし……」

可愛い女の娘が落ち込んでるのが好きな人はいないと思うので、私は特に気にしていない風を装いながらルイズと話をします。

「私、今までに魔法が成功した事がないの……」

作業場と学院の間の草原に移動して、二人きりで話をします。

ルイズは、幼い頃から魔法が全て爆発してしまい、屋敷の使用人

達にまで同情されている立場であったそうです。

このハルケギニアで、特に伝統に拘るトリステインで一番の大物貴族の娘が魔法が使えない。

この事が公になると困ると感じたヴァリエール公爵は、その件を秘匿していたようで、私も今になって初めて知ったくらいでした。

ですが、ヴァリエール公爵の人柄を知っている私としては、彼がルイズを恥かしいと思ったから、魔法が使えない事実を隠したのだとは思いませんでした。

可愛い娘を、世間の無責任な中傷や批判から身を守りたかったのでしょうか。

ただ、さすがに魔法学院内では隠す事は不可能であったようですが。

「私、一生懸命に練習しているのに、一度も成功した事がなくて…」

彼女は、毎日懸命に魔法の練習をしているらしいのですが、それでも一度も魔法が成功した事が無いそうです。

「どんな呪文を唱えても爆発してしまうのよ」

「どの系統の、どんな呪文でも？」

「うん」

今日の錬金魔法と同じで、コモン・マジックであろうが系統魔法であろうがとにかく唱えると爆発してしまうらしいのです。

ある意味、爆発魔法の達人なのかもしれませんが。

「じゃあ、試してみるか」

私は二十メートルほど離れた草原に石製の台座を作り、そこに一個の小石を置いてからルイズの所に戻ります。

「じゃあ、あの小石を錬金して」

普通は魔力の無駄なのでする人はいませんが、実は魔力が強い人は遠距離からの錬金も可能なのです。

ただ、狙いが逸れて他の物が錬金されたり、効果は変わらないのに距離の分で余計な魔力を使うので、わざわざそんな事をする人はいないのですが。

「いくわよ。イル・アース・デル！」

私は、改良版のディテクトマジックで魔法を唱えるルイズの様子を観察します。

彼女が魔法を放つ際の、魔力の流れを観察するためです。

ルイズの放った魔法は、無事に二十メートルほど離れた小石に作用しますが、やはりなぜか爆発を起こしてしまうのです。

「じゃあ、他の魔法を」

ルイズはめげずに色々な系統の様々なレベルの魔法を唱えますが、結果は全て爆発で、最後に唱えたフレイム・ボールで私の作った石製の台座は、周辺の地面ごと派手に吹き飛ばされてしまいました。

失敗魔法とはいえ、その威力に改めて驚いてしまう私でした。

「また失敗……」

また一度も魔法に成功しなかったルイズは、再び落ち込んでしま
います。

「ねえ、どう思う？」

「そつだな……」

私は、あくまでも自分の見解だと述べて、ルイズに自分の考えを
話し始めます。

「別段、失敗する原因が見当たらない。呪文の詠唱も正確だし、杖
の先から放出される魔力の流れと量にもおかしな点は無い。でも、
なぜか作用する時になると、本来の魔法として作用しないで爆発し
てしまうんだね。俺が見た限りにおいては」

「どうした良いと思う？」

ルイズの継るような目付きに、私は困ってしまいます。

私の魔法は、家庭教師役であったアシルが教える系統立った物や、
本などから得た知識を元に独学した物。

それに、前世の知識と経験を元に独自に編み出した物です。

しかも、結果や精度を出すために数年苦勞した魔法もありました
が、基本的には失敗という経験が無かったからです。

失敗の経験が無い人間に、失敗ばかりしている人の気持ちがか
わらないのは当たり前前の事です。

それに、生まれてからずっと魔法に失敗している人に頑張れば大
丈夫とか、もっと努力すればなんて言うのは禁句でしょうし。

かえって無責任な発言でしょう。

「俺の意見は、参考にはならないかもしれないけど……」

期待するような目で見るルイズに、私は当たり障りの無いアドバイスをする事にします。

「現時点でルイズは努力しているからな。これは、継続して続けるしかないかも。もしかしたら、その内に出来るようになるかもしれない。せつかく授業料を払って学院に居るんだから、先生に積極的に質問とかしてアドバイスを貰えば良いと思う」

いくら二回目の人生でも、私の魔法歴はルイズとさして変わらないのです。

私よりも年齢が上で経験豊富な学院の教師達に、積極的にアドバイスを貰った方が良く私は思うのです。

「先生達に？」

「あの人達は、教えるのが仕事だからね。若造の俺よりもこういう事には慣れているはずだ」

「そうね……」

ルイズは、私のアドバイスに一応は納得したようでした。

「それと、その爆発を利用する手はあるな」

「えっ？ 爆発を？」

「ルイズにはただの失敗魔法にしか見えないかもしれないが、その魔法は使い方によっては役に立つからな」

もし私の父がこの魔法を見ていて、ルイズがそこいらの平メイジであった場合には、絶対に家臣にスカウトしたはずなのです。

「爆発が役に立つの？」

「特に戦場ではという条件に合致すればね。他にも、探せば応用が利くか」

どんなに簡単なコモン・マジックでも大爆発を起こしてしまうルイズの魔法は、魔力の調整による威力のコントロールと、自分が望む正確な位置に作動させる事が出来れば、こんなに役に立つ魔法は存在しないと思うのです。

わざわざ大砲を持って行かなくても、大火力がいきなり前線に出現するのですから。

詠唱時間の短い魔法を連発すれば、火力よる弾幕や阻止線を張れますし、威力の大きい魔法を放てば敵に大損害を与えられます。

撤退戦で、追撃して来る敵軍の意図を挫く事も容易です。

ルイズと少人数で先行して、敵陣に奇襲をかければ簡単に敵軍に勝つ事も可能ですし。

よくよく考えると、かなりお得な魔法ではあるんですよね。

「爆発を失敗ではなくて、爆発魔法の一種だと思って極めるという手もある」

「爆発魔法として？」

「まずは、コントロールだな。自分の狙った所に行かないと、ただの迷惑だからな」

「まずはコントロールね」

「威力の調整も細かく出来れば、もっとベターだな。それと、発射速度の調整。実は、爆発も極めるには時間がかかるんだぜ」

「わかったわ。それも、練習してみる」

ルイズは、私の役に立つのかわからない忠告を全て聞くと、そのまま駆け足で学院へと戻って行きます。

多分、いつもは夜に学院の庭で魔法の練習をしているのでしょう。

「練習だけさせてもな。実際に役に立たせないと」

私は、今度の週末にある行事を行う事を決意するのです。

「おはよう、ルイズ」

「おはよう、ティーボ」

そして、学院に入学してから最初の虚無の日の早朝。
ルイズは眠そうな顔をしながら、私の錬金作業場の前に集合していました。

「ところで、どこに行くの？」

「この近辺の山や森の搜索にだよ」

私とルイズの他にも、合計で十名ほどの家臣達や兵士達もいて、合計で四台もの馬車も準備されています。

ちなみに、アシルは今日は休日となっていました。

今日の彼は、家族と一緒にトリスタニアに観光と買い物に出かけるそうです。

それと今日の目的ですが、簡単に言えばこの近隣で使える鉱石の探索と、採集地図の作成と、サンプルの確保にあります。

事前に王城側に許可申請を出していたのですが、すぐにマザリーニ枢機卿から了承が降りていたのです。

もし、私が欲しいと思うほどの鉱石が見付かったら、それを王城側で採取して私が買い取れば税金になりますし、錬金した金属をトリスタニアを含む直轄地に店を持つ商人が売り捌いたり、職人が加工を行って販売されれば、彼らの利益からも税金も入ります。

なので、申請から僅か二日ほどで許可が降りていました。

ですが、今日の探索区域にはオーク鬼などの亜人が出没するとの事で、そのために数名のメイジ家臣達も従っていました。

しかも、彼らはグラモン領内でこれらの任務で経験を積んでいる人材です。

こういう時には、非常に頼りになる家臣達でした。

「ティーボ様、お弁当の準備もバッチリですよ」

「悪いね、シエスタ。休日なのに」

「いえ、休日手当でも出ていますし」

私の専属のメイドである、シエスタも参加しています。

何しろ男が多いので、現地でお茶くらい淹れられる人材が欲しかったからです。

なので、割り増しの休暇手当を出して彼女にも参加して貰ったのです。

「専属のメイドね……。同じ貴族でも、稼ぐ男は違うわね」

ルイズが私と誰を比べたのかは、確信は持ってませんが多分ギーシユの事なのでしょう。

彼は、意外と質素な生活を送っています。

領内の財政状態が改善したので、父は多めに仕送りをすると言ったのに、最低源の仕送りで構わないと言ったそうなのです。

多分、その増額分を稼いでいるのが私なので、貰うのが嫌だったのでしょう。

ちなみに私も、学院の入学金と毎月の仕送りはギーシユと同じ額を貰っています。

いくら妾腹でも差別はしないという父の意思によつてです。

私の資産状況や毎日の収入に比例すると、小銭のような額で無くても構わないのですが、それが父なりの私に対するケジメなのでしょう。

軍に関する件で放蕩が著しく、女好きで経済や財政に疎い父ですが、私はこの二度目父が尊敬できると心から思うのでした。

「始めまして、ミス・ヴァリエール。私、ティーボ様の専属メイドでシエスタと申します」

シエスタがルイズに自己紹介をしていると、そこに更にモンモランシー以下数名の女子生徒達が現れます。

昨日、教室でルイズと今日の件で打ち合わせをしていたら、モンモランシー達が自分も加えて欲しいと言って来たからでした。

「おはよう、ティーボ」

「今日は、連れてつてくれてありがとう」

「ピクニックも楽しみ」

まるで男子生徒に友達が出来ない私でしたが、女子生徒達には友達が多く出ていました。

前世の、男だらけの海水浴とか、花火大会とか、バーベキューパーティーとか。

それに比べると格段の進歩でしたが、それでも男同士でバカをやってみたいという気持ちも存在するのです。

それは、まだ見ぬ夢なのですが。

「護衛の人がいるから、手付かずの場所で野草が採れて万々歳ね」

ルイズ以外のモンモランシーを含む女子生徒達は、実は水の系統魔法が得意な娘達ばかりでした。

せっかくなので、大人数の護衛が付くこの状態を利用して、秘薬やポーシヨンなどの材料を無料で採集したかったようです。

モンモランシーは、元より領内の財政状態が良くなって自分で小遣いを稼いでいるようですし、他の女の子達も似たり寄ったりの状態

態との事でした。

「しっかりしてるわね」

「いいじゃないの、それに、ピクニックを楽しむって趣旨は全員共通なのよ。それよりも、今日が実戦デビューらしいわね。ルイズは？」

「えっ！」

モンモランシーの口から飛び出した衝撃の事実にも、ルイズは私の方に顔を向けます。

「魔法のコントロールは？」

「ほぼ完璧よ」

「じゃあ、うちの家臣達がフォローするから亜人が出たら、魔法で倒してね」

「でも、私じゃあ……」

貴族の令嬢として蝶よ花よと育てられたルイズに、いきなりの亜人退治は辛いかもしれませんが、彼女の爆発魔法が真価を發揮する場面ではありますね。

それに、家臣の護衛は付いているのです。

あとは勇気を持って魔法を放つだけです。

「状況はうちの家臣達が作る。ルイズは、魔法をタイミング良く正確に放つだけだよ」

「わかったわ。やってみる」

四台の馬車に分散して乗った私達は、目的地であるトリスタニア郊外にある産地へと移動を開始するのでした。

「意外と近かったわね」

「ただし、亜人が多い」

二時間ほどの移動で目的地に到着した私達は、まずはベースとなるキャンプ地の設営に入り、兵士達は周辺の警戒に入ります。

とは言っても日帰りですので、私と家臣達はルイズを除く女子生徒組とシエスタを護衛付きでキャンプに残してから、周囲の探索に入ります。

家臣の一人がディテクトマジックを応用した探知魔法で周囲を探ると、森の奥に五匹ほどの亜人と思われる反応を確認していました。しかも、大きさから考えるにオーク鬼だそうです。

私達に緊張が走ります。

「ルイズ、鍊金でいい。一番近い奴から胸の真ん中を鍊金するつもりで魔法を唱えるんだ」

手慣れた家臣達に森の外に誘い出された五匹のオーク鬼達は、私

達に向かって唸り声をあげて襲いかかって来ます。

「ルイズ、新呼吸を一回して」

「うん」

「よし、錬金を放つんだ」

私の命令で、ルイズは自分達に迫っていたオーク鬼に対して錬金を唱えます。

すると、胸の真ん中の部分で爆発が発生して、血と肉片を飛び散らしながらそのまま後ろへと倒れてしまいます。

ですが、その強靭な生命力で死には至らなかったようです。重傷のようですが、懸命に起き上がろうとしています。

「止めは家臣に任せる。次のだけど、錬金のかかりが浅いな。心臓は知っているか？」

「勿論、知ってるわよ」

「それを錬金するイメージで」

ルイズは二匹目のオーク鬼に錬金の魔法をかけます。

すると、爆発と共にオーク鬼の胴体に穴が開いていました。いくらオーク鬼でも、心臓が無ければ生きていきけません。

「私、あんなに凄い魔法を……」

「残り三匹だ。焦らずに近い奴から順番に冷静に」

「わかったわ」

ルイズは、残り三匹のオーク鬼の胸部にも穴を開ける事にも成功します。

彼女の初陣は、オーク鬼四匹を倒して一匹を弱らせるという、驚異的な戦果となったのでした。

「しかし、ルイズ様は、凄い威力の魔法を使われますな」

「あれほどの魔法は、私達には無理ですな」

数時間後、周辺を索敵を続けて更なるオーク鬼の殲滅に成功した私達ですが、時間がお昼となったのでキャンプに戻る事にしました。仲間が殺された事にいきり立って、この近辺にいたオーク鬼達が全てこちらに攻撃をかけて私達に各個撃破されてしまったので、遺体を焼却して証拠の首を麻袋に詰めてから戻って来たのです。

結局ルイズは、錬金の魔法だけでオーク鬼十八匹の胸部に爆発で穴を開けて倒し、二匹にも重傷を負わせて家臣達に止めを刺されています。

その戦果に、家臣達はルイズを尊敬の目で見ていました。

グラモン家は軍人と武人の家系なので、初陣でこれだけの戦果を挙げたルイズを心から凄いと思っていました。

「でも、慢心して一人で亜人退治とかには行くなよ」

家臣達とは違って、私はルイズに釘を刺しておく事にします。確かに彼女の魔法は凄いのですが、彼女一人でこの戦果はあり得なかったからです。

オーク鬼の索敵、他の方向からの奇襲に対する警戒、ルイズへの防御と。

手慣れた家臣達がいての、この戦果でもあったのですから。

「わかっているわ。考えてみると、私って軍人としての訓練も積んでいないし」

「毎日基礎訓練している俺でも、経験とかなくて足手纏いな部分もあるからな」

魔法だけ極めれば、戦場に出られるわけではないのです。

体力も鍛えておかないと、戦場に着いても疲労で魔法が使えなかったり、最悪退却すら出来ない事もありますし。

詠唱の間に敵に入り込まれた際に、体術や杖術などもあれば便利です。

とにかく、戦場では何が起こるかわかりません。

その備えは、私が基礎訓練で精一杯に感じるほど厳しい物でした。

「しかし、何をして来たのかは知らないけど……」

モンモランシー達の視線は、オーク鬼の返り血で血塗れな私達へと向かいます。

「おっと、これからお昼だったな」

私は錬金を応用した魔法で、戦闘に参加していた全員から血や汚れを取り去って行きます。

この魔法は、戦場や出先では便利ですね。
ただ、元日本人な私は、学院に戻ったら必ず風呂には入りますけど。

これはもう慣習と言っても良いでしょうし。

「ティーボの魔法は、便利な物が多いわね」

「その代わりに、戦闘で使える物は少ない」

私の使える攻撃魔法は、例の下半身が車輪のゴーレムを作り出す呪文。

これは、昔よりも少し改良を加えています。

車輪を安定感を持たせるために四輪にして、材質を地中に大量に存在するケイ素と空気中にある窒素で窒化ケイ素セラミックとしたのです。

この窒化ケイ素で作るセラミックスは非常に硬質なので、研磨剤やベアリング、タービンブレード、切削工具などに使われています。半導体などにも使われていますが、私では半導体は作れませんからね。

普通にゴーレムの材料にしています。

勿論、ギーシュの真鍮のゴーレムでは歯が立たない物となっています。

ただし、衝撃に弱い部分があるので複数回造りなおす必要があります。

材料が周辺に沢山あるので、魔力の消費を抑えられるのがポイントですね。

それと、地面から触手のような大きな土の手を伸ばし対象の足を掴むアース・ハンドという魔法。

私がやると、派生型は鋭いセラミック製の刃物だったりしますけど。

他にも、土礫を砲弾へ硬化してぶつけるブレットという魔法。これも、土礫は棘状の窒化ケイ素セラミック製にしています。

後は他の系統でも、風で窒化ケイ素セラミック製の刃物を飛ばしてみたり、ジャベリンの槍が窒化ケイ素セラミック製だったり。これだと、水系統の魔法にはならないですかね？

とまあ、適当に改良した魔法をいくつか使っただけですけど、実は実戦では一回も使った事がないので、その威力は未知数です。多分、私が一番戦っている男は兄のギーシュでしょうね。彼は、一度も私に勝てた試しがないですけど。

「とにかく、昼にしましょう」

私達は、シエスタが準備してくれたお昼を一緒に食べ始めます。どうやら家臣達が気を利かせたらしく、私達は学院の生徒だけで輪を作ってお昼を食べ始めます。

メニューは、サンドイッチと肉を焼いた物。

それに、カットフルーツなどがバスケットに入っていました。

これに、シエスタが沸かしたお湯で紅茶が付いて来ます。

「そちらの薬草の収集はどうだったんだ？」

「順調よ。この近辺は、オーク鬼の巣で人が近寄らない場所だったから」

本来であれば、購入しなければ手に入らない薬草類を多数ゲット

したモンモランシーはご機嫌そのものでした。

「それは良かった」

「午後からも、山の斜面でいくつか欲しい薬草があるのよ」

「俺は鉱石探したな。何か使える石があると良いけど」

「でも、今日のルイズは凄かったみたいね」

「えっ？ そう？」

「オーク鬼十八匹退治とか、どこの凄腕の傭兵なのよ」

確かに、ここがオーク鬼の巢であった事や、家臣達の援護を考慮しても物凄い戦果です。

「そういえば、オーク鬼の首があるから家臣に言って懸賞金に換えて貰うよ」

「懸賞金なんて出るんだ」

「それは、出るさ」

人間に害を成す亜人の類に対して、基本的に平民達は無力です。なぜなら、体格差やパワーなどでまず歯が立たないからです。

そこで、貴族の領地内では領主が軍を率いて退治するか、傭兵に懸賞金をかけて退治させます。

税金を収める平民達に被害があったら税収が減ってしまうので、当然といえば当然なのですが。

そして直轄地では、王軍の手が足りない分は王国が懸賞金を出しているのです。

確か、オーク鬼は一匹十エキューだったはずで、ルイズには百八十エキューが行く事になります。

「いいなあ。百八十エキューあったら、作れるポーションが増えるのに」

実家が財政的に苦しく、金銭感覚がシビアなモンモランシーらしい一言でした。

「そうよね。高価な材料が一杯買えるものね」

「そうそう」

類は友を呼ぶのでしょうか？

モンモランシーの友人達は、どうにも実家の財政が芳しくない娘が多いように感じる私でした。

羽振りの良い娘と付き合う余裕が無いから、同じ経済レベルの娘達が集まるのはどこの世界でも一緒なんですネ。

「私も、何か材料を買ってポーションでも自作してみようかしら？」

「ルイズ、材料が勿体ないわよ」

「失礼ね。材料の配合を間違ったりしないわよ」

「違うわよ。最後の込める魔法で爆発したら、高価な材料が一瞬でパーよ」

モンモランシーとしては、失敗するとわかっているのに、高価な秘薬の材料が爆発して消えるのが勿体ないと思ったのでしょうか。ルイズを強く止めに入ります。

「ルイズは、得意技の『爆殺』魔法を磨きなさいよ。そうだ！ ルイズの二つ名は、『爆殺』で決まりね」

「何よ、その殺伐とした二つ名は！」

うら若き少女なのに、二つ名が爆殺なのはいくらルイズでも嫌だったようです。

ルイズは、モンモランシーに文句を言います。

「でも、似合っているわよ」

「そうね。事実を的確に現しているし」

「格好良いじゃない？」

他の女性生徒達にもその二つ名で問題ないと言われてしまったルイズは、後にモンモランシーや彼女達に爆殺の二つ名を広められてしまい、学院内で定着してしまうのでした。

「さあて、鉱石を探すぞ」

「私達は、山の斜面にある薬草が目的よ」

昼食を終えた私達は、一応は警戒しながらキャンプ近くにある山の斜面へと向かいます。

山は、大半が草や木で覆われていましたが、場所によっては岩肌が露出している部分もあります。

「ティーボ、私も手伝うわよ」

「じゃあ、あの岩に軽く錬金ね」

「私はツルハシの代わりなの？」

「鉱山の採掘にも役に立つ魔法だな」

ルイズは、本当に一生懸命に爆発魔法の練習をしていたらしいです。

最少の魔力で錬金かけられた岩は、さほど爆発もしないで上手に砕けていました。

「どっ？」

「（微量の鉄と銅と亜鉛とチタンと……）物凄く普通の岩だね」

正直なところ、あまり錬金効率の良い岩ではありません。

岩にはケイ素が大量に含まれるので、焼き物やガラスの原料にはなるのですが、それだとあまりお金にならないですからね。

出来れば、金属を含んだ岩が欲しいのです。

ですが、結局帰る時間まで探索は続けたものの、満足の行く結果にはなりませんでした。

「私達は、手付かずの場所で沢山野草が採れたから満足よ」

「鉱石の探索とは、失敗の連続なのさ。まだ調べてない場所も沢山あるんだし、俺は落ち込んでいないよ」

「そうなんだ。じゃあ、また私達を誘ってね」

「私もまた連れてってね」

モンモランシーやルイズにお願いされ、私は週末の虚無の日に行っている鉱石探索に、複数の女子生徒達を連れて行くのが恒例となるのでした。

ルイズは、爆発の魔法を亜人や幻獣に試すために。

モンモランシーは、薬草採集という非常に現実的な理由が伴うピクニックなのですが……。

十話

「ミスタ・グラモン。まだ私達には大した縁も無いけれど、この決闘の立会人を務めてくれないかしら？ その気に食わない蒼髪をぶちのめさないと、ツエルプストーの人間としては気が済まないのよ」

「……」

とある日の夜、私はなぜか決闘の立会人を務める事になってしまいました。

それは、無事に入学に付随する様々な行事が終わり、ようやく落ち着きを見せかけた頃。

この辺は、前世での学校と同じですね。そろそろ五月病などを心配する時期です。

前世の今風に言くと、鬱病を心配するですかね？

そんなある日の夜に、学院の先輩達が主催する新入生歓迎パーティーがありました。

綺麗なドレスを着て、ご馳走と高い酒が出て、一緒にダンスとかするやつですね。

こつこつ物に誘われると、何となく自分が貴族なんだという実感が沸きます。

「ティーボ、もう少し楽しそうにきなさいよ」

「そうよ、こんなに綺麗な女の子達に囲まれているんだから」

前世の生活や性格を引き摺ってか、私はどうにもこの手のパーティーが苦手です。

妾の子という事で、社交界デビューが遅れたという理由もありま
すかね。

最低限ダンスとかマナーとかは習っているのですが、どうにも居
心地が悪いのです。

そして、そんな私にルイズとモンモランシーからのツッコミが入
ります。

それと、相変わらず私の周りには女の子しかいません。

ギーシュが私への嫌悪感を隠さないのも、まだ男子生徒達が近寄
って来ないので。

それにしても、有りもしない父のご意向に怯えてご苦労な事です
ね。

一方、女子生徒達はサバけたものです。

トリスティン貴族の娘は、大抵は卒業後に親が勧める先に嫁がな
ければいけないので、別にギーシュの背後にあると思われる父
の意向を気にする必要などなく、私と普通に接してくれます。

というか、男子生徒達がバカ過ぎですね。

父がこんな事を望んでいるわけでもないのに、勝手にギーシュの
思惑に乗っているのですから。

この学年で、将来名を成す貴族はいないのかもしれないかも
しれません。

領地とか家名以前に、学生時代からグラモン家の影にただ怯えて

いるのですから。

いつの時代も、情報を早く掴んだ方が有利な事に変わりはないよ
うですね。

早くギーシュのハツタリに気が付くと良いのですが。

「ダンスは踊ったじゃないか」

「意外と上手だったけど、義務感が漂ってたわよ」

「俺は、金属と宝石の申し子だからな」

ルイズやモンモランシーや、その他数名の女子生徒達と話してい
ると、そこに一番来て欲しくない男が現れます。

ギーシュが、数名の取り巻きの男子生徒を連れて現れたのです。

正確には同級生なのですが、私にはどう見てもギーシュの取り巻
きにしか見えませんでした。

大半が領地が少ないか、領地を持たない貴族の子息で、しかも上
手く情報を掴んでいない彼らにとっては、同じ歳でも四男でも大貴
族の息子であるギーシュは雲の上の存在です。

彼に従って損は無いと考えているのですね。

ギーシュは、気に入った女性生徒達数人とダンスをしてから、私
達の元に現れたようです。

「やあ、モンモランシー。そんな下賤な男と一緒に居ても楽しくな
いだろう。僕と一曲どうだい？」

「ギーシュ、いい加減にしなさい。何の落ち度も無いティーポに意
地悪して。そんな事が本当に楽しいの？」

「誤解だよ、モンモランシー。僕は卑しい血の人間に、自分の立場をわらせているだけなんだよ。自分の立ち位置が理解できない人間は不幸だからね」

私は、『お前は、何様なんだよ！』と心の中で思いますが、表面上は普通にニコニコしていました。

色々とテンパリ過ぎてい可哀想な事になっている奴だと思っていたからです。

「そういう発言と態度を取る限りは、私はあなたの誘いには乗らないわよ」

「それは残念だね。では、行こうか諸君」

ギーシュは、同級生達と一緒に別の場所へと移動します。

その際に、同級生達は私に申し訳なさそうな表情を見せます。

どうやら、自分達が良く無い事をしている自覚くらいはあるようです。

それをギーシュに言う勇氣は無いようですが。

同じ貴族でも、身分の差は深刻なんですね。

「私はギーシュの事を良く知らないんだけど。あいつって、あんなに嫌な奴だったっけ？」

「彼の俺に対する態度は、焦りから出ているからな」

兄のギーシュが、私に酷い嫌がらせをする理由は簡単です。

今の内に私を潰しておかないと、学院を卒業したら立場が入れ替わってしまうからです。

今は本妻の四男として、妾の五男の私よりも上の立場にいられますが、卒業後はギーシュの立場は微妙です。

四男なので領地が継げるわけでも無いですし、普通に王国軍に入って士官候補生からスタートする事になるでしょう。

実家から多少の援助があるかもしれませんが、基本的には王国からの給金で生活を送る事になるはずですよ。

家格からして見栄を張らなければならない部分も多く、多分『武士は食わねど高楊枝』の状態になると思います。

出世も、跡継ぎの長男から次男や三男の兄達が優先なので、割を食う部分も多いでしょう。

一方、私には錬金という特技があります。

もし世間一般のように実家が妾の子に敵しかったら、私は大きくなったら母を連れてグラモン家を出るつもりくらいに考えていました。

私の錬金があれば、どこでも食べて行けると思ってたからです。

ところが、私の特技はグラモン家の財政を強化するほど強力な物でした。

グラモン伯爵家は、父が軍や貴族として見栄を張ってもあまり領内を搾取する事も無く、かなりの貯蓄に成功し、借金を完全に返済して逆に仲の良い貴族達に金を貸すまでになっています。

魔法学院卒業後は、金になる金属や宝石の錬金を続けつつ、領内の政治を見る事になっています。

私には、前世でのサラリーマン時代に経験した少々の事務能力もあったので、それが父や奥様の目に止まったようなのです。

特に、自分の夫や息子達の軍務偏重ぶりに呆れている奥様からは、

何者かが突如放った魔法で会場内は大騒ぎになりますが、被害はさほどの物ではないようでした。

ただ一人を除いてのようですが……。

「ミス・ツエルプストーが！」

その唯一の被害者であるミス・ツエルプストーは、どうやら新調していたドレスを何者かの風の魔法によって切り裂かれてしまったようでした。

彼女は、曝されてしまった肌を隠すようにその場に屈んでしまします。

ところが、誰も彼女に何か身を隠す物を渡していません。

突然の事で驚いているのか、純粋に彼女の裸体に興味があるのか、彼女が外国のゲルマニアの貴族なので手を貸す事もないと思っっているのか？

仕方がないので、私は近くのテーブルからテーブルクロスを引き抜くと、それを大きな目のマントに錬金して彼女へ放り投げます。

「ティーボ、ツエルプストーの女になんて優しくしなくてもいいのよ」

実家が犬猿の仲同士のルイズが私の行動に文句を言いますが、貴族とは下らない理由で戦争を始めてしまう事もある生き物なのです。海外からの留学生である彼女には、トリステイン貴族として最低限の礼を持って接するべきと、私はルイズに説明をします。

「初めてお話をするけど。ありがとう、ミスタ・グラモン」

「その呼び方だと、怒る御仁がいるんだよね」

ギーシュが私を睨み付けていました。

せつかくの裸体鑑賞の邪魔を私がしたからという事では無く、単純に『ミスタ・グラモン』と私が呼ばれる事に不快感があるのです。

「そうなの。錬金殿も、色々大変なのね」

私が錬金したマントを纏った彼女が、私に近寄って来てお礼を述べます。

どうやら、彼女は私の事を知っていたらしいです。

年齢が一個上らしいのですが、その燃えるような赤い髪と、色っぽい仕草。

それに、時折りマントの隙間からチラチラ見える褐色の肉感的なフトモモに少しくラクラと来てしまう私でした。

やっぱり、彼女くらい居た方が良いんでしょうかね？

父が婚約の話とかを言い始めるのではないと思って、少し遠慮していたのですが。

嘘です。

私に、気の利いた口説き文句なんて無理なんです。

前世から絶対的に。

前世で彼女いない歴年齢ではなく、非童貞だった事が私の最大の奇跡だったのですから。

「誰かに恨まれてもしたのか？」

「それが、あるようで無く。無いようであるよつな……」

ミス・ツエルプストーは、入学以来多くの男子生徒から声をかけ

られ、その期待になるべく答えるように動くらしく。

ひよっとしたら、その線で誰かに恨まれてこんなイタズラをされてしまったのかもしれない。

「多淫なツエルプストーの自業自得よ」

「あら、小さくて良く見えなかったけど、ヴァリエールの娘じゃないの。全然気が付かなかったわ」

「小さくて悪かったわね！ あんたこそ、露出狂の気でもあるんじゃないの！」

「モテる女は辛いよ。色々とやっかみも受けるし。ヴァリエールには一生縁が無いと思うけど」

「私にだって、そういう事くらいあるわよ！」

「へえ、初耳ね。いつそんな事があったの？」

私を無視して言い争いを始めるルイズとミス・ツエルプストーでしたが、その日には彼女のドレスを風の魔法で裂いた犯人は見付からなかったのです。

「それで、ようやく見付けた犯人がミス・タバサである？」

パーティーの翌日の夜。

いつものように錬金の研究を行っていた私は、急にミス・ツエルプストーから呼び出され、彼女が昨日のドレス引き裂き犯だと断言するミス・タバサとの決闘の立会人を頼まれてしまったのです。

「それは、ちゃんと証拠があつての事なのか？ それと、なぜ俺が立会人を？」

「あれだけの風の魔法を起こせる人は非常に限られているわ。しかも、その子は自分の実力を隠していた」

ガリアからの留学生で、誰が聞いても偽名にしか聞こえない蒼い髪の小柄な少女タバサは、自身をトッドメイジだと偽っていたらしいのです。

ですが、入学式直後の決闘騒ぎや授業などでは、どう見てもトライアングルメイジにしか見えず、実力を隠すというのは怪しいとの結論に至ったようです。

しかも彼女の系統は風であり、その事をヴェリエ・ド・ロレーヌから教えられたとの話でした。

確かその入学式直後の事件で、ヴェリエ・ド・ロレーヌはタバサに決闘を挑んで返り討ちにあった過去があったような気がしたのですが。

ミス・ツエルプストーは、彼を怪しいとは思わないんですかね？
いかにもな、小物が他人を陥れる策ですし。

「あなたが立会人なのは、中立的な判定を下せるからよ」

私とミス・ツエルプストーは、昨日初めて話をしたくらいに縁が無かったですし、ミス・タバサに至っては話をした事すらないので

す。

ミス・ツエルプストーに集う男連中からや、いつも本ばかり読んでいるミス・タバサの知り合いを探すよりは早いのかもれません。

「では、お互いに殺傷行為は控える事。魔法の優劣のみを表に出すんだ」

「嫌がる割には慣れてるわね」

「色々あるんだよ」

昔から、ギーシュと決闘を繰り返して来ましたがね。

怪我をするとバテてしまうので、生成したゴーレムだけで戦闘を行っていたんですね。

「始めてくれ」

私が合図を出すと、ミス・ツエルプストーとミス・タバサの決闘が始まります。

最初にミス・ツエルプストーが巨大なフレイム・ボールを頭上に作り出します。

やはり、火のトライアングルメイジは伊達ではないようです。

ですが、悲しいかな彼女には大きな弱点がありました。

魔法の威力は大きいのですが、どうにも他の動きに無駄があり過ぎるのです。

どうやら、完全に実戦不足のようでした。

一方、ミス・タバサの方は見事なものです。

身構え方だけで、彼女が熟練のメイジである事がわかってしまい

ます。

更に、ミス・ツエルプストーの放ったフレイム・ボールをウィンド・ブレイクで自分から反らし、すぐに体勢を立て直して次の呪文の詠唱に入っていました。

同じトライアングルでも、ミス・ツエルプストーに勝ち目は無いようです。

すぐに、追加のウィンド・ブレイクで吹き飛ばされてしまいます。

「負けたわ」

勝負は、ミス・ツエルプストーの負けで終了しました。

彼女は完全に倒れこんで杖を離しているのに、ミス・タバサはまたすぐにでも次の攻撃に移れる。

ミス・ツエルプストーは、己の負けを悟ったようです。

「それと、私の間違いだったようね。昨日の風なんて、あなたのに比べたら全然大した事なかったし」

「そう、理解して貰えて何より」

私は、今日というか今初めて声を聞くミス・タバサとミス・ツエルプストーが握手をしている場面を目撃しています。

喧嘩して友達になるとか、結構どこの世界でも定番みたいですね。

私は、ギーシュとは微塵も仲良くなりませんけど。

「昨日のミス・ツエルプストーを襲った風は、今日のミス・タバサの風よりランクが一つ低い者の犯行だな。ラインの初歩くらの実力者の犯行だ。なあ、ミスタ・ロレーヌ」

「なぜ、わかつたんだ……」

実は、私は決闘が始まる前から、周辺に数名の人間が潜んでいる事に気が付いていました。

別に、私が気配を感じる達人とかではなく。

この決闘が行われている森をサイレントの魔法もかけないで移動すれば、草を踏む音などが丸聞こえになってしまうからです。

しかも、数は複数。

私くらいにでも簡単に気が付いてしまいます。

「ミス・ツェルプストーが言っていただろう。ミスタ・ロレーヌから聞いたと。第一証言者は疑うのが、この手の犯行の常識だぜ」

私の話に更に動揺するロレーヌ。

そしてその後ろには、数名の女子生徒達の姿が見えました。

「ふーん、話が見えて来たわね」

「どういう事だ？ ミス・ツェルプストー」

私の質問に、ミス・ツェルプストーが答えます。

つまり、ミス・ツェルプストーにメロメロになった彼氏達を奪われた女子生徒達が、彼女に復讐するために、同じくタバサの風の魔法で破れて彼女を恨みに思っているロレーヌを唆して相討ちを狙ったというのが事の真相のようでした。

着眼点は悪くないと思うのですが、色々とボロがあり過ぎて子供のイタズラレベルですね。

「ああ、わかっているとは思っけど」

「お返しは」

「させていただくわ」

下らない用件で夜の貴重な時間を潰された私と、濡れ衣を着せられかけた上に無意味な決闘に巻き込まれたミス・タバサと、公のパティーの場で新調したドレスを切り裂かれ、しかもまるで関係の無いミス・タバサと決闘をさせられたミス・ツエルプストーと。

彼らが、無事に済むはずはないのでした。

「何だ？ あいつら？」

「一晩中吊るされていたのか？」

翌日の朝、学院の生徒達はミス・タ・ローヌと女性生徒達数名が校舎の屋根に吊るされ、近くにその罪状が書かれた縦看板が設置されている光景を目撃する事となるのでした。

「やれやれ、下らない事件に巻き込まれたな」

更に翌日の朝、私が授業前に頼まれていた瑪瑙の錬金を行っている時、自分に話しかけてくる女性がいました。

良く見ると、それはミス・ツエルプストーとミス・タバサでした。

「昨日はありがとうね」

「俺は大した事はしてないよ」

瑪瑙の錬金を続けながら、私はミス・ツエルプストーと話をします。

これは、大切なお得意さんへの品なので、最後の仕上げに手を抜いてはいけません。

ここで手を抜くと、普通のメイジが錬金したように作り物感が出てしまうのですから。

私の錬金する宝石は、天然物との違いがわからないという特徴こそが売りなのですから。

「でも、本当に瑪瑙なんて錬金できるのね」

「本当、綺麗」

これで声を聞いたのが二回目というミス・タバサも、やはり普通の女の子のようで、私の錬金する瑪瑙を興味深そうに見ていました。

「私、あなたに鞍替えしようかしら？ 思っていたよりも頭が良いし。強そうだし。稼ぐ男って、ゲルマニアでは良い男の証なのよ」

「男が聞くと萎える発言だな。ミス・ツエルプストー」

「最初のきっかけはそうでも、ゲルマニアの女はちゃんと男に尽くすのよ。私の事はキュルケって呼んでね」

「ツエルプストー！ 他所の教室で何をしているのよ！」

そこに、私に抱き付くキュルケを目撃したルイズが、叫び声をあげながらこちらに來ます。

「あら、ヴァリエールじゃないの。私はダーリンと大切な話があるから、静かにしてくれないかしら？」

「あんたは、自分の教室に戻りなさいよ！ ティーボは、あんたなんかに靡かないわよ！」

「そんな事はわからないじゃないの」

「ティーボは、あんたなんて好みじゃないの！」

「じゃあ、どんな子が好みなの？」

「ええと……、それは……」

実家が宿敵同士である二人の口論は続くのですが、私に言える事は一つ。

瑪瑙の納品期限が迫っているので、鍊金をさせてください。

これだけが私の願いです。

そして私には、また新しい友人が出來たのですが、それはやはり女子生徒でした。

そろそろ男友達欲しいと、真剣に思ってしまう私でした。

十一話

「おはよう、ミスタ・ロレーヌ」

「ギーシュ、君か……」

先のパーティー会場での事件の首謀者である事と、事件の真相が暴露されて学院中で大恥をかいたロレーヌは、いきなりギーシュに話しかけられていた。

「君のしでかした事については何も言わないよ。それは、自分で反省して律する部分だからね」

「そうだな」

風系統の魔法の名家に生まれたにも関わらず、外国からの留学生に負けたとあつてはトリステイン貴族としての名折れ。

そう考えて色々と企んだ拳句に、タバサ、キュルケ、ティーボによつてお仕置きを受けてしまった自分はただ反省するしかなかった。ここで余計な事を言つても、余計に恥の上塗りだからだ。

「だが、一人許せない男がいるな」

ギーシュの予想外の指摘に、ロレーヌはその表情を大きく変えてしまう。

「わからないかい？ ティーボの事だよ」

ギーシュのティーボ嫌いは筋金入りであつた。

一週間早く生まれた自分が兄なので、たまに仕方なしに話す時は、ティーボは自分を『兄さん』とか『兄上』と呼ぶのが普通であった。

だが、本当はあんな男を自分の弟だとは認めたくなかったのだ。彼に『兄さん』と呼ばれる事すらおぞましく、だからギーシュはティーボを名前で呼ぶし、その才能を認める事など出来なかったし、学院に居る内にその立場を悪化させようと出来る限りの努力はしていた。

生来の女性に声をかける癖は治らなかったが、男子生徒達のリーダー的な立場となり、彼に友人が近付いて派閥のような物が形成されるのを防いでいた。

たかが学生の友達ゴツコであったが、学生時代の友誼が将来も続く可能性はかなり高かったからだ。

ギーシュは積極的に友人を作り、ありもしない父の意向や影響力を利用して彼らを縛り、ティーボの悪評を流して友人達に話しかけないように説得をしていた。

彼のイメージが少しでも悪くなるためには、どんな事でもしたのだ。

そして今も、ティーボが不利になる半ば讒言を行おうとしていた。「考えてもみたまえ。僕達はトリステイン貴族なのだよ。このトリステインを統治するように神に選ばれたね」

「ああ、そうだな」

「今回の件は、関係者同士で手打ちとするべきだったんだ。それを、ティーボが無駄に大きな騒ぎにした」

これは、大きな嘘であった。

ほぼ全生徒が参加していたパーティーの席でゲルマニアからの留学生であるキュルケのドレスを斬り割り、その罪をガリアからの留学生であるタバサに押し付けようとした罪の罰にしては軽い方であった。

下手をすると、外交問題にもなりかねない事件であったからだ。

だが、自分の罪を心の奥では否定したくて堪らないロレーヌは、完全にギーシュの話術に嵌っていた。

「所詮は、妾の子供なのさ。金儲けばかりが上手くて、貴族の何たるかをわかっていない」

「そうだな。いくらスクウェアメイジでも、傲慢に過ぎる！」

ティーボへの暴言を吐き始めたロレーヌを見たギーシュは、自分の誘導が上手く行った事を知って心の中で笑みを浮かべる。

「それに、僕は君の気持ち可以理解できるね。いくら学生とはいえ、ここはトリステインの学院なんだ。外国からの留学生は、もう少しトリステインの伝統や風習を尊重すべきだと思うのだよ」

「確かに、ギーシュの言う通りだな」

ギーシュは、ティーボへの憎しみを利用してヴィリエ・ド・ロレ

―又を自分の側に引き込む事に成功する。

そして、次はどうやってティーボを陥れようかを懸命に考え始めるのであった。

「あの人は誰だ？」

「ティーボ、知らないの？ 王宮勅使のモット伯爵よ」

「そうなんだ」

とある日の放課後に、私がルイズとシエスタを連れて廊下を歩いていると、正面から中年の男性貴族が歩いて来ます。

礼儀として会釈はしたのですが、誰だかわからなかったのでルイズに聞いてみたのです。

「かなりの有力諸侯なのよ。領地が中央に近くて広いし。それに、数年前の園遊会で顔を合わせたんじゃないの？」

「見事に忘れてた。だって、興味ないし。必要な時に覚えれば済むし」

「ティーボらしいわね」

ルイズは、私に呆れていました。

昔から、必要な事は平均よりも早く覚えられますが、興味のない事はすぐに忘れてしまふんですね。

普通の人はそうなのでしょうが、私の場合は特にそうです。人の名前と顔を一致させて覚えるのが苦手なんですよ。

それと話は変わりますが、王宮勅使という役職です。

王家の意向を他の貴族などに伝える役職ですが、これはかなり名譽な職務ですし、報告後に彼が対面した貴族の態度の悪さや不手際を報告すれば、その貴族が窮地に立つ事もあります。

よって、役職以上の役得も色々あるらしいとのルイズからの話でした。

「お父様も、変な報告をされないように色々と気を使ったり、贈り物も欠かさないらしいわ」

モット伯爵は、王城からの使いで定期的にトリストインの重鎮であるヴァリエール公爵の所にも訪れているらしく、下手に彼の機嫌を損ねて『ヴァリエール公爵に謀反の兆し有り』などと報告されたら堪らないので、それなりに気を使っているとの話でした。

つまり、ご苦労様と言って付け届けをするんですね。

それと領地の富裕さで、彼はかなりの財を貯め込んでいるようでした。

「とはいえ、俺にはまだ縁がないか」

「私もよ」

私とルイズはすぐに彼の事を忘れてしまつのですが、すれ違ったモット伯爵の視線はなぜか私達の方へと向いていたようです。

「……、これは、使えるね」

そして、ギーシュがその様子をたまたま目撃している事にも私達は気が付かなかったのです。

「始めまして、モット伯爵。私は、ギーシュ・ド・グラモンと申します」

いつものようにオスマン学院長への用事を済ませたモット伯爵は、学院内で一人の少年に声をかけられる。

その人物とは、当然ギーシュの事であった。

「グラモン……、おおっ、君はグラモン元帥のご子息なのか」

「はい」

会話の端を掴む事に成功したギーシュは、モット伯爵に本題を振る事にする。

「あのメイド、欲しくはないですか？」

「確かにあの子は魅力的だな。平民にしておくには惜しい器量を持っている。だが、あの子は君の弟専属のメイドなんだろう？」

ギーシュは自分の女好きであったので、同じトリスティン貴族で

あるモット伯爵に関する噂も知っていた。

気に入った美しい平民の娘を、夜の仕事兼用のメイドとして雇い、飽きたら暇を出すという事を行っていたのだ。

だが、モット伯爵はバカではない。

貴族であるティーボが専属としていたメイドを奪い取るようなりスクの高い真似は、決してしなかった。

シエスタは気に入ったが、その情報を聞いてすぐに諦めるくらいの理性は持っていたのだ。

「ですが、もし手に入れば欲しい。違いますか？」

「それはそうだが……」

「そもそも、父は今のティーボの現状を嘆いています」

「そうなのか？ 非常に評価していると聞いているが、君の兄君達もだ」

アンリエッタ王女に『錬金』という二つ名を貰ったティーボの評価は王城でも高かったし、グラモン元帥も自慢の息子であると良く褒めていた。

それに、自分も彼の作る宝飾品を購入している。

なので、彼と余計な騒動を起こすのは御免蒙りたいモット伯爵であった。

「そんな心配をされませぬ。たかが平民のメイド一人。兄の私が頼めば、ティーボはすぐに差し出しますよ」

「そうなのか？」

「はい、明日にはご領地に送り出しますので、安心してお待ちください」

モット伯爵と別れたギーシュは、一人学院の裏庭で洗濯物を干しているシエスタに声をかける。

「君は、確かシエスタという名前だったよね」

「はい」

「僕は、ティーボの兄でギーシュと言うんだ。それで、君に相談があつてね」

「はあ……」

ギーシュの策は、非常に単純なものであった。

ティーボに知られない内に、シエスタを騙してモット伯爵の元に送り出してしまい、激怒したティーボとモット伯爵を対立させる。

まだ学生で身分の低いティーボなど、いくら多少錬金で王国に貢献していても、王宮勅使であるモット伯爵に頭が上がらないであろうし、上手くいけば不興を買って処罰される可能性もあった。

「君は、モット伯爵の元に行きたまえ」

「あの、私はティーボ様のメイドなので……」

「知っているぞ」

普通に考えれば、シエスタがギーシュの言う事を聞く道理などな

い。

そんな事は百も承知なギーシュは、彼女が色々と考え始めないように、ティーボに直接に聞きに行かないように、畳み掛けるように話を進めていた。

「モット伯爵は王宮勅使でね。大きな権力を持たれる方だ。その彼が君を所望している。勿論、ティーボがその事実を知れば怒るだろうが、彼の兄である僕が許可をしているのだ。君の家族がこの国で平穩に暮らすためには、君が涙を飲んで彼の元に行くべきだと思わないかい？」

ギーシュのこの一言が止めとなり、シエスタは彼の提案を秘かに了承する事となる。

ギーシュはシエスタにティーボへの口止めも要求し、夜にモット伯爵が迎えの馬車を寄越すので、それに乗ってモット伯爵の屋敷へと向かうように命令する。

シエスタはその日は動揺を隠しながら仕事を行い、夜陰に紛れて魔法学院を後にするのであった。

だが、その様子をそっと伺ういくつかの影の存在も確認されるのであった。

「ティーボ様、おはようございます」

翌日の朝、私がベットの上で目を醒ますと、そこにはいつものシエスタではなくてアシルの歳相応の顔がありました。

寝起きもへったくれもない、朝から目覚めの悪い光景です。

「アシルよ。俺は、君が素晴らしい能力と忠誠心を備えた家臣である事は重々承知しているよ」

「それは、ありがとうございます」

彼は、特に表情を変える事なく礼を言います。

「だが、君に唯一向いていない仕事がある。それは、私を起こす仕事だ」

「ですが、シエスタには色々と事情が発生しました」

私は、なぜかこの場にはいないシエスタの事情とやらをアシルから聞きます。

というか、ギーシュが下らないイタズラを考えたらしいのですが、あまりに穴だらけの策なので、私は呆れるしかありませんでした。

「昨日、王宮勅使のモット伯爵が来られた事をご存知ですか？」

「ああ、実際に目撃したな」

「彼には、あまり良く無い悪癖がございまして……」

長年トリステインの重鎮貴族に仕えて来たアシルは、色々他のトリステイン貴族について詳しいようです。

だからこそ、私に付けられたという理由もあるようですが。

「綺麗な平民の娘を見つけると、夜の仕事込みのメイドとして雇い入れるのです。飽きたら、口止め料を渡して解雇するという、まあ良くある話なのですが……」

モット伯爵だけではなく、ハルケギニアでそういう事をする貴族や商人、神官などは多数存在します。

まあ、どこの世界でもある事のようにすね。

「一つ疑問があるのだが」

「はい、何でしょうか？」

「シエスタは、そこいらを歩いている綺麗な平民の娘ではないぞ。俺に既に雇用されている立場だ。モット伯爵とはバカなのか？」

これが、一番の疑問でした。

シエスタは、若造とはいえ我が父グラモン伯爵の息子である私に雇われている立場なのです。

平民が彼女を雇用をしていたのならそれに割り込む事は容易なのでしょうが、私は一応は貴族です。

それに、実家はグラモン伯爵家です。

些細な件ですが、両家の争いにならないと考えなかったのでしょうか？

私は、それをアシルに聞きます。

「いえ、かの御仁は決してバカではありません。例の悪癖も、彼の政治家としての能力とは別ですから」

政治家としては優秀で王宮勅使として過分無く務めている彼が、わざわざ私のメイドを横取りした。

その意図を、知りたくなってくる私でした。

「となると、なぜ彼はそんな事をした？」

「彼に余計な口を利いた人物がいます」

「誰だ？」

「ギーシュ様です」

私は頭が痛くなって来ると同時に、モット伯爵の意図も理解できました。

更に、我が兄ギーシュのバカさ加減にもです。

彼は、モット伯爵の悪癖のみに目を付けて私のメイドを差し出し、それに激怒した私とモット伯爵との対立を煽るつもりなのでしょう。

もし実際にその策が上手くいけば、父は王国内での立場を悪くさせるばかりでなく、私を処罰しなければいけなくなるかもしれないから。

「ですが、生兵法は怪我の元とは良く言ったものです」

モット伯爵は、したり顔で自分に話しかけてきた、バカなグラモン家の四男を舌なめずりして見ていたのでしよう。

私が、シエスタを取り戻しに強引な態度を取っても騒ぎは大きくなります。

もし私がシエスタを諦めても、モット伯爵の元にはグラモン家の息子が自分を陥れようとした証拠であるシエスタが残ります。

私が解雇もしていない彼女が、なぜかモット伯爵の元に居る。

なのに私が文句を言わなければ、彼女はグラモン家がモット伯爵を陥れるために寄越されたハニートラップとも考えられるからです。

特に今のトリステインでは、若い今はアンリエッタ王女が形式上ではトップに君臨しています。

彼女が、モット伯爵の行為に嫌悪感を現す可能性は大きいのですから。

私程度が考えられる策略を、モット伯爵のように長年貴族同士の権力闘争に揉まれて来た人物が気が付かないはずありません。

多分、逆にシエスタを証拠として、父を攻めて来る可能性がありません。

状況からして、ギーシュの単独犯行と見る者は常識的に考えてもいないので、『グラモン伯爵が、息子を使って王宮勅使であるモット伯爵を陥れようとトラップを送り込んだ』と見られても文句は言えなくなります。

これは、事実である事が重要ではないのです。

その可能性があると、王城側が判断する事に意義があるのですから。

「アシル、今日は学院の授業は休みだ。馬車を用意しろ」

「かしこまりました。それと……」

「ああ、父と上の兄さん達に手紙を出しておけ」

「かしこまりました」

私はその日の授業を欠席とし、馬車でモット伯爵の屋敷へと急いで出発するのです。

「ねえ、ティーボは？」

「お休みだそうよ。何でも、急用が出来たとかで」

「サボリなんじゃないの？」

「ティーボならありえるわね。錬金に夢中になつてたとか？」

「（僕の策通りに、モット伯爵の屋敷に向かったか。せいぜい派手にドンパチやってくれよ）」

教室でルイズやモンモランシーの話を聞き、ギーシュは一人ほくそ笑むのであった。

そしてその日のお昼頃、私達を乗せた馬車はモット伯爵の屋敷に到着していました。

軍人である父の邸宅に比べて見栄えのする大邸宅の入り口にいた衛兵達に来訪の目的を告げると、私達はすぐに屋敷の奥へと通されていました。

「俺達が来るのは予定通りなんだな」

「ですから申しました。ギーシュ様は、生兵法が過ぎると」

十分ほどで私達は、執事の案内でモット伯爵のいるリビングへと

通されます。

「グラモン元帥のご子息殿、今日は我が邸宅にようこそ」

モット伯爵の値踏みをするかのような視線に、私は無駄な駆け引きは無駄だと感じて早速に本題に入る事にしました。

余計な長話は、経験豊富な彼に付け入る隙を与えるだけでしょうから。

「ご注文の品の完成が遅くなったので、私のメイドを使いに出したのですが。予定よりも早く完成いたしましたので、直接お届けにあがった次第です」

「注文の品？」

勿論、モット伯爵は私に注文など出していません。

つまり、そういう事にして全ての事を収めて欲しいと私はお願いをしているのです。

「そうそう、あの品でしたな」

さすがは、モット伯爵です。

彼は、私の提案にすぐに乗ってくれました。

「あのメイドからは、少し遅れるという話を聞いていたのですが、完成が早まって良かった。メイドには、別の部屋で休んで貰っています。勿論一人です」

やはりモット伯爵には、己の仕事と趣味を分けるぐらいの分別はあるようです。

すぐにシエスタに手を出さずに、私が来るのを待っていたようでした。

「では、早速に商品を見ていただきたく」

私が合図をすると、アシルが数名の家臣達とで高さ2メートルほどの大きな箱を室内に搬入します。

そして外の箱を外すと、中には全長1・6メートルほどの全裸の若い女性を模った水晶製の像が入っていました。

実は、行きの馬車の中で、石英を材料にこれを製作していたのです。

女好きの彼には、相応しい商品と言えるでしょう。

現にモット伯爵は、私の作品の素晴らしさに言葉すら出ないようでした。

「モット伯爵殿、ご注文の品です」

「おおつ、そうだったな。いやあ、さすがは錬金殿ですな。アンリエッタ様の真珠のネックレスの作者だけの事があります。ところで、これはいかほどなのでしょうが？」

「一万エキューです」

「これほどの芸術品が一万エキューとはお買い得だ」

モット伯爵は、執事に代金を持って来るように命令します。

私が直接作る水晶細工の数は、実はさほど多くはありません。

しかも、私が錬金した最高品質の水晶が100%使われているのです。

市場に出せば、この五倍以上の値段は軽く付く事でしょう。

直接に賄賂を渡すのも問題だと思った私は、モット伯爵がこれを一万エキューで買えば最低でも四万エキュー儲かるという形にしています。

メイド一人に四万エキューは高いと思うかもしれませんが、この話は既にシエスタだけの問題では無くなっているのです。

グラモン家の四男が撒いた、不祥事の種の刈り取り料金なのです。

「ティーボ様」

そこに、金貨の入った袋を持った執事とシエスタが現れます。

「メイドよ。錬金殿のお遣いご苦労だったな」

いきなりそうモット伯爵に言われ、更にチップの入った袋を貰ったシエスタは状況が理解できないようでした。

ですが余計な口は挟まない方が良くと考えたらしく、モット伯爵から素直に金貨の入った袋を貰っていました。

「さて、契約は無事に終了しましたな」

これで、モット伯爵とグラモン家には何の問題も無かったという事になりました。

私とモット伯爵は、ただ商品の取り引きをしただけ。

シエスタは、商品の入荷が遅れる旨を報告しに来ただけ。

モット伯爵は、ギーシュなどとは話などしてもいないという事になったのです。

「ところで、これは独り言なのだが……」

モット伯爵は、あくまでもオフレコであると言ってから言葉を続けます。

「あの四男は、軽薄に過ぎますな。王城の兄君達とは少し違うようだ」

「これも独り言ですが、兄に対するコンプレックスが強いのでしよう」

私も、これがオフレコである事を宣言してからモット伯爵との話を続けます。

「弟にもでは？」

「私としては色々と煩わしいのですが、彼は一週間とはいえ早生まれの兄であり、彼は本妻の子供。私は妾の子供。というわけです」

「錬金殿は、己の分を弁えて上の兄君達は立てていてはいませんか」

「それが余計に、彼には腹が立つという事ですよ。人生なかなかに思うようには行かないものです」

「ですが、今回の件は致命的なのでは？」

「報告は出さざるを得ませんでしたからね。今回の件は無かった事になったので、厳罰は無いと思いますが……」

「甘ったれた子供へのお仕置きは必要かと」

「ですかね？ 私も同じ年の子供ですけど」

私達は、水晶製の裸婦像に上機嫌なモット伯爵の元を辞して、帰りの道を馬車で急ぎます。

「今日の錬金作業は、少し遅れるかな？」

「そう思って、材料を積んでありますよ。水晶柱の在庫を増やしましょう」

「アシルは、俺を扱き使うのが上手になったな」

「朝に、ティーボ様を起こしに行くのはクビになりましたけどね」

「あの……」

アシルと笑いながら水晶柱の錬金を続ける私に、シエスタが話しかけて来ます。

ギーシュにモット伯爵の元に行くように言われ、モット伯爵の元に着いたと思ったら私達に引き取られと、自分がどうなってしまうのか不安だったのでしよう。

「シエスタは、今まで通りに俺の専属メイドさ」

「私がティーボ様を起こしに行くと、目覚めが悪くなると不評なのだ」

「アシルは男だからな」

「私が女でも、文句は出そうですね」

「うわっ！ マジで想像してしまった！ 止めくれよ。錬金の精度が落ちるから」

私とアシルの掛け合いに啞然としているシエスタですが、私が続けて彼女に声をかけます。

「シエスタが将来嫁に行くまで面倒見るから、安心してメイドの仕事を続けてくれ。ギーシュにまた何か言われたら、無視して俺の所に言いに来てくれ。今日は、下らない貴族同士の駆け引きに付き合わせて悪かったな。モット伯爵から貰ったチップは、臨時収入だと思っただけであいてくれ」

「はい、ありがとうございます」

「それで、どのくらいあった？」

「1000エキューありました」

「太っ腹だな。モット伯爵は」

こうして、メイドのシエスタを巻き込んだ私とモット伯爵との初顔合わせは、何とか大きな騒ぎに発展しないで無事に終了を向かえるのでした。

そして、この件では当然あの男にも天罰が下るのです。

「仕送りの額の大幅減少だって……」

数日後、ギーシュは父親であるグラモン伯爵からフクロウ便で手紙を貰い、魔法学院卒業までの仕送りを大幅に減らす事を伝えられていたのです。

そして、更に数日後。

「最近、ギーシュの取り巻きが減ったわね。男子も女子も」

朝の教室で、モンモランシーが私に話しかけて来ます。

私も気が付いていたのですが、それもそのはず。

シエスタとモット伯爵との件の顛末を父に報告したのは、何を隠そう私なのですから。

まだ学生の分際で、グラモン家の大損失になる不祥事を起こしかけた四男への罰が仕送りの大幅減少程度で済んだのは、私が大損をして水晶細工を格安で提供したからなのです。

その額は約四万エキュー。

今のままのギーシュでは一生かかっても返せる見込みの無い金額であり、私の損失はグラモン家の損失にも繋がるという事で、彼の月の小遣いはその四万エキューを補うまでは、そこいらの貧乏貴族にも劣らない金額にまで下げられてしまったのです。

勿論、一年やそこいらでどうこうなる金額でもないので、彼は卒業するまで大貴族の息子としてはかなり小額の小遣いに嘆く事になるでしょう。

「何か父上の逆鱗にでも触れたのだろう」

「ぶーーーーん」

モンモランシーは、私が関わっているのかと疑っているようでしたが、すぐにそのまま話を続けます。

普段から、ギーシュの私に対する態度に激怒しているので、同情する気も起こらないのかもしれませんが。

実際に、仕送り減少の効果は現れているようです。

『金の切れ目が縁の切れ目』とは良く言ったもので、彼の取り巻きの大半が彼に金が無くなった事を知ると、すぐに距離を置き始めていたからです。

男子も女子も、ギーシュの近くにいる人間の数はかなり減っていました。

「おはよう、ティーボ」

「おはよう、ルイズ」

「ねえ、お仕事の依頼を受けてよ。今度、ちいねえさまの誕生日なのよ」

続けて私の元に来たルイズが、鍊金をお願いしてきます。

「何を贈るんだ？」

「宝石細工がいいわ」

「俺に頼んで、経費を節約か？ いいけど、せめてデザインくらい

は自分でしろよ」

「そっね、頑張ってみる」

「ところで、ミス・エレオノールの方にはプレゼントは贈らなくて良いのか？」

「エレオノール姉様は、歳の事を話すと……」

既に四捨五入すると三十歳になるルイズの姉であるエレオノールに、誕生日の話題は禁句のようでした。

「私も、そろそろ誕生日なのよ。期待しているからね」

「女つてのは、宝石が好きだよね」

「否定はしないわね」

「私も、何か作って欲しいな」

「私も！」

他にも数名の女子生徒達が、授業開始まで私の周りに集まって来ます。

ですが、やはり私には男の友達がなかなか出来ないようです。贅沢な悩みですが、やはり男の友達が欲しい私でした。

十二話

「さあ、夏休みに向けて在庫を溜め込むぞ！」

季節はニューイの月に入り、もう少しで学院の夏休みが始まるのですが、私にはあまり関係ないのかもしれませんが。

休みなのはあくまでも学生達だけであり、普通の大人は交代で休暇を取って故郷に帰るくらいなのですから。

それでも一週間ほどの休みを交代で取りますし、私もそのくらいの休みは取るので、その間に在庫が切れないように、こつやっつて気合を入れて錬金に励んでいるわけです。

何しろ最終工程担当者なので、私が錬金をしないと製品は売り物にならないわけですから。

学院では最初の定期試験がありました。これは上の下くらいの成績でスルーし、実技の方はかなり上位の成績でした。

一応、スクウェアメイズですからね。

試験終了後には成績表を渡されて、終業式でオスマン学院長が話をするのはどこの世界でも一緒ですね。

内容も、貴族として恥かしくない節度ある生活云々とかそんな感じですよ。

そして、大半の生徒達はそれぞれに実家に戻って行きます。

私は、戻らずに錬金工房で錬金の毎日ですが。

夏休み五日目の朝。

シエスタに起こされた私は、早朝の訓練と朝食後に工房でアルミ

ニウムの錬金を行っていました。

家臣達が錬金した混じり物の多いアルミニウムを、再び私が錬金するので。

他にも、たまに砂鉄と木炭が届くのでそれで鋼を作ったり、父やヴァリエール公爵にチタンを錬金して送ったり、水晶やヒスイの柱の錬金に、真珠やオパールや瑪瑙などの錬金を行ったりと、いつもと変わらないスケジュールで私は動きます。

休み中なので、一日八時間錬金スケジュールですね。

そして、それに合わせて家臣達も私の補佐に入るので。

「何回見ても、不思議なものね」

実は、唯一違う点もありました。

それは、夏休みに入ったルイズが飽きもせず私の錬金を観察していたのです。

「実家に帰らなくて良いのか？」

「お父様がチタンを輸送する荷馬車と護衛を寄越すから、それに便乗して帰るのよ」

「なるほどな」

さすがは公爵家のお嬢様。

実家に帰るにも、あまり身軽にはいかないようです。

「ねえ、また鉱石を探しに行くんでしょう？ 私も行くわ」

ここ数ヶ月で、ルイズは週末になると私の鉱石探しに便乗して、

例の爆発魔法を亜人や幻獣達にぶつけていました。

最初は、加減がわからずにかなりスプラッターな光景でしたが、今では彼らはすぐに血を吐いて死んでしまします。

彼女は、オーク鬼などの心臓をイメージしてそれに錬金を行い、体内で心臓が爆発したオーク鬼などが一瞬で絶命して倒れてしまうのです。

この暗殺にも向いてそんな魔法に、私はただ驚くばかりです。アシルも不思議がっていましたね。

ですが、彼女の使える魔法は相変わらず爆発だけ。

というわけで、学院の成績は筆記はトップレベルでしたが、実技はビリをひた走っていました。

爆発しか使えませんからね。

良く夜に練習で、イライラしながら爆発を周囲に響かせています。

おかげで、ルイズには『爆殺』の二つ名が付いていました。

「鉱石探しなら、私も付き合っわ」

「モンモランシーは、薬草採集が目当てなんでしょう?」

「そうよ。生えている薬草は無料なのよ」

同じく、夏休みなのに残っているモンモランシーが手を挙げます。

彼女が実家に帰らずにここに残っている理由。

それは、ずばりアルバイトです。

実家の財政が苦しく、仕送りなど期待できない彼女は、この長期のお休みでお金を稼ぐ必要があるのです。

独自の香水や化粧品、石鹸、シャンプー、傷薬、ポーションなどを作り、それを私の家臣達や、私の金属を求めて出入りする商人達に売り捌いていたのです。

人の事は言えませんが、何か哀愁を漂わせる光景です。しかも、早々と常連を掴んだりと微妙に商売が上手ですし。

「そういうティーボは、いつ実家に帰るの？」

「来月の終わりくらいかな？」

僅か数日ですが、母にも会いたいですし、父や奥様や、同じく休暇で戻る予定の兄達にも挨拶する必要があるからです。

ですが、ギーシユとあまり顔を会わせたくないのです、その期間はなるべく短くする予定でした。

特に用事も無い彼は、既に領地に戻っているのですから。

「最初の二三日は、シエスタの実家に観光旅行に行くんだよ」

「ふーん、何か変わった名物でもあるの？」

ルイズは、お茶を持って来たシエスタに質問します。

「そうですね。竜の羽衣は、この前に話しましたね。あとはワインが有名で、ヨシエナヴェという料理も名物なんです」

「ダーリンは、当然私も連れて行ってくれるんでしょう？」

シエスタが説明をしていると、そこに同じく帰省していないキュルケが現れます。

彼女が腕を組んでくると、その暴力的な膨らみが私の理性を直撃します。

「ツエルプストー！ あんたは、何で帰らないのよ！」

「そんなのは、私の自由でしょう。ヴァリエールこそ、帰らないの？」

「うるさいわね！ 私には、私の予定があるのよ！ それよりも、ティーボにしがみつくんじゃないわよ！」

「言ったでしょう。そんな事は、私の自由だって」

「ティーボの仕事の邪魔をするんじゃないわよ！ この敵国人！」

まだ私の腕にしがみ続けるキュルケに、ルイズの怒声が飛びます。私の金属鍊金がトリステインの経済に組み込まれている以上、確かに彼女のやっている行動は妨害工作の一環と見られるのかもしれませんが。

とはいえ、僅か数分の事。

家臣達は、グラマラスな美少女に抱きつかれている私を羨ましそうに見ていました。

この辺が、男と女の決定的な差なのでしょうね。

私の家臣の大半は、男ばかりなので。

「それに、私も手伝っても良いし」

「いいのか？」

「どうせ暇だから」

「そういえば、タバサは？」

私は、キュルケの友人であるタバサがない理由を尋ねます。

「里帰りだつて。私は、どうにも実家には帰り難いし」

私とギーシュの関係のような事情がキュルケにもあるらしく、それで彼女は実家に帰省しないようです。

その辺の詳しい事情にはあまり込み入らない方が良いと思うので、私は何も言いませんでしたが。

「これが、アルミニウムとか言う金属なのね。ゲルマニアでも、真似をして錬金している人がいるらしいけど、全然使い物にならないそうだし」

始祖ブリミルが魔法を伝えて六千年。

錬金で作り出せる金属は、金・白金・銀・銅・青銅・鉄などの少数に留まっていました。

それに、作り出せてもメイジの実力によって量と質はピンキリであり、時代を経て研究が進んでもなかなか錬金の精度は上がらなかつたようです。

どうやら、術者のイメージが一番質に影響するようです。

それでも、上記の金属は比較的コンスタントに作られて来ました。ですが、アルミニウム、チタン、ニッケル、クロムなどは、今まではその存在にすら気が付かなかつた金属です。

いくら現物を手に入れても、急に完璧に錬金など出来るはずもないのです。

結果、高品質品は私の一人勝ち状態でした。

「純正品は、綺麗ねえ。ゲルマニアでは軽銀って呼ばれているのよ」
「それは、俺の命名だ」

キュルケは、見本のアルミを触ってからボーキサイト鉱石を錬金しますが、やはり不純物が多くて色は濁っていました。

「やっぱり、上手く行かないわね」

「ここまで錬金してくれると、俺は楽になるけどね」

キュルケや家臣達の錬金した大量の低品質アルミを、私は纏めて錬金します。

アルミの成分だけを抽出してインゴットに作り直し、残りカスカら鉄やチタンなどの使える金属成分も抽出。

最後に焼き物に使えるケイ素を取り出すと、本当にゴミだけが残ります。

これは、後で纏めて煉瓦に練成し直して販売します。

なるべくゴミを出さない方法にしたのですが、この私の錬金の一連の流れと家臣達の効率の良い動きに、キュルケ達は驚いているようでした。

「このくらい効率的にやらないと、経済には組み込まれないからね」

「こんな事が出来るのはティーボだけよ」

ルイズが、私にツツコミを入れますが。

こうして、私の夏休みは順当に過ぎて行くのでした。

「いいねえ、長期の休みは」

「もう少しで到着しますよ」

夏休みも月が変わってアンスールの月の後半。

毎日の錬金の日々を過ごし、ようやく在庫が溜まった状況で私は一週間ほどの休みを取る事にしました。

家臣達は私と前後して交代で休みを取るので、錬金工房は常に動いている状態です。

彼らは鉱石を買い集め、私が錬金を行う材料の錬金を行い、在庫を商人達に売り捌いているのです。

多分、私が休暇から戻ると、危機的に減った在庫と大量の素材が待ち受けているでしょう。

最近、家臣達は気前良くアルミニウムを売り捌いてしまうので。

そしてお休みの私は、シエスタの実家のあるタルブの村へと馬車で向かっています。

母には悪いのですが、休暇全てを実家で過ごすという選択肢は辛かったからです。

本当に、ギーシュが邪魔で堪りません。

「食事は、地元の物がいいな」

「あまり大した物は出せませんが」

「旅とは、その地元の食材や料理を楽しむものなのさ」

まだ見ぬタルブ村に期待する私でしたが、この旅には他にも随伴者達が存在しました。

「そうよねえ。ダーリンの言う通りよ」

「ツエルプストー。あんた、しつこいわよ」

「そういうヴァリエールは、実家に戻ったんじゃないの?」

「ゲルマニアのスパイがいるから、心配しているのよ! 私は!」

随伴者その一とその二であるルイズとキュルケが、馬車の中で言い争いを始めます。

「うるさいわね、二人とも。手元が狂うでしょう」

「地元の料理、楽しみ」

他にも、随伴者その三のモンモランシーが何かの薬剤を調合していて、その四の里帰りから戻って来たタバサは、本を読みながらタルブ村で出る食事を楽しみにしていました。

やはり、私には男の友達はまだ出来ていませんでした。

「よつこぞ、いらっしやいました」

タルブ村に到着した私達は、シエスタの父親など家族達からの歓迎を受けます。

私は挨拶をしてから、食事の時間になるまでシエスタを連れて村の探索に出かけます。

その間に、家臣達が滞在費として金貨の入った袋を渡していると思いますし、ワインの買い付けにも行っているので、村人達は私達を歓迎しているようでした。

やはり貴族なので、そういう部分では景気良くお金を使わないと駄目ですよ。

普段は、全く地味なんですけど。

ついでに、このタルブ村を収めるアストン伯爵にも挨拶の使者は出しています。

「いいねえ。こうやって草原に寝転んで」

村の案内とは言っても、ワインの製造施設やブドウ畑を見たら他には大した物も無い村のようで、私は草原に寝転んで独自に休暇を楽しんでいました。

毎日が錬金の日々だったので、何もしないという休暇の真髄を楽しんでいたのです。

そして他のメンバーも、モンモランシーはまた薬草を探りに、ルイズはそれに付き合います。

タバサはシエスタの家で出されたお茶菓子を黙々と食べ、キュルケはそれを見て呆れているようでした。

「ティーボ様、この近くに竜の羽衣を祭った場所があるんですよ」

「そういえば、忘れてた。早速見に行こうか」

「はい」

私とシエスタで目的の場所に向かうと、そこには神社の鳥居に似た設備があり、中には竜の羽衣が置いてあったのですが、その正体に私は驚かされてしまいます。

「昔の戦闘機……」

「あの、ご存知なのですか？」

「いやっ！ これは凄いな！」

まさか前世に資料や映像で見ましたとも言えなかったので、適当に誤魔化す私でした。

「（えーと、戦闘機だよな。レシプロの）」

別にミリタリーオタクでもない私でしたので、この竜の羽衣が戦闘機である事は知っていましたが、正確な機種名までは不明でした。日の丸のマークが入っているのでゼロ戦の可能性が高いのでしようが、この時代の戦闘機はどれも形が似ているので判別が難しいですね。

ちなみに、ちゃんと固定化の魔法がかかっているようです。

「これが飛ぶなんて、ティーボ様は信じますか？」

「ここにそれが置いてあるって事は、何かしらの手段では飛んでいたんだろっね」

これが飛ぶ事を知っている私は、上手く言葉を誤魔化しながらシエスタの質問に答えます。

「曾祖父さんは、遙か東の地からこの竜の羽衣に乗ってこの村に不時着したそうです」

どんな因果かは知りませんが、私のように生まれ変わりではなくそのまま異世界に流れ込み、元の世界の戻る事も無く子孫を残して人生を終えた。

シエスタの曾祖父さんは、どんな気持ちで人生を終えたのでしょうか？

何となく気になってしまう私でした。

「曾祖父さんのお墓はあるのかな？」

「はい」

シエスタの案内で村の墓地に向かうと、一つだけ日本風になっているお墓がありました。

「（大日本帝国海軍少尉佐々木武雄 異界の地に眠るか……）」

「曾祖父さんは、この墓碑銘を読めた人に竜の羽衣を譲ると。そして、これを陛下にお返しして欲しいと。ところで、陛下って誰なんでしょうね？」

私の思い出す陛下は、テレビで外国の要人に会ったり、どこかの施設を訪問しているあの人ですね。

戦争当時の陛下は既にお隠れになっていますし、今の私ではまず

返す事は不可能でしょう。

ですが、何となく興味がある品ではあるんです。

どうせ、私では操縦する事は出来ないんですけどね。

前世では、車の免許しか持っていませんでしたし。

「そろそろ夕食の時間でしょうし、戻りましょうか？」

竜の羽衣見学を終えた私達は、シエスタの家で夕食をご馳走になります。

村の名物料理であるヨシエナヴェは、私に前世を思い出させてくれる物でした。

それと、この村には醤油と味噌に似た調味料までありました。

シエスタの父親に聞くと、やはり佐々木武雄氏が試作を重ねて作った物らしいです。

ただ知名度が無いので、ほとんど村内でしか消費されていないそうです。

私はラッキーだと思って、一定量の定期購入を持ちかけます。

「お買い上げいただけののですか？」

「俺は気に入りましたね。ワインと一緒に定期的に購入しますよ」

続けて、例の竜の羽衣について話をします。

「気に入られたのですか？」

「ええと、まあ。面白そうではありますよね」

「では、買っていただけませんか？」

墓碑の字がどうか言う前に、シエスタの父親から購入を打診されてしまいました。

どうやら、あの寺院がある近辺はブドウ畑などを広げるにはちょうど良い土地らしく、簡単に言うとは邪魔になっているらしいのです。

名物として置いてあるものの、観光客など来ないし、定期的に固定化をかけないといけないので維持費がかかる。

陛下に返すと言っても、そんな東の果ての陛下に誰が返せるのか？

様々な事情により、村の総意として竜の羽衣を手放したいとの事でした。

「この領主殿は、欲しいと言わなかったのですか？」

私は、タルブを治めるアストン伯爵に購入を打診しなかったのかと尋ねます。

先にこれを聞いて置かないと、勝手に買っても問題になってしまいそうだからです。

「それが、まるで興味が無いそうで……」

私は、傍にいた家臣にもう一度アストン伯爵の元に出向くように命令します。

一応許可を取っておかないと、後でイチャモンを付けられても嫌だからです。

「アストン伯爵の許可が出たら。面白そうなので、値段によっては買いますよ」

結局、500エキュールという値段で竜の羽衣は私の物になりました。

シエスタの父親は、ブドウ畑が広げられると大喜びでした。

家臣達に『何に使うのです?』と聞かれたのですが、貴族が芸術品や絵画を買うようなものだと言って、代金を払わせてこれを運搬する竜の手配も家臣達に命令します。

学院隣の錬金作業場に空きスペースがあるので、そこに安置するように命令したのです。

「あんなに大きい物を、物好きよね」

「バカね。ティーボほど稼いでいる人は、こういう時にはお金を使った方がいいのよ。そして、それが理解できる私は、ティーボに相応しいと思うの」

「戯言を言ってるんじゃないわよ！」

「ティーボとゲルマニア貴族の娘が、結婚は出来ないと思うけど…」

「お替り」

キュルケにルイズとモンモランシーがツツコミを入れている最中も、タバサは一人黙々とヨシエナヴェを食べ続けるのです。

この人、この小さい体のどこに入っているんでしょうか？

「シエスタ、残りの休暇は家族と楽しみなよ」

「ありがとうございます」

翌日、私達は馬車でタルブの村を後にします。

キュルケは学院に残るそうですが、私達を含む他のメンバーは全て実家に帰省するそうです。

「あー、帰るのはしんどいな……」

「お母さんに会ってあげないと」

「それは、そうなんだけど……」

母に会うのは大切な事なのですが、問題は本宅にギーシュがいる事なのです。

私が、現在一番鬱陶しいと感じている男ですから。

「必ず一泊はして貰いますからね」

「ジーザス!」

馬車の御者を務める家臣によって、私は強引に領地へと連れて行かれます。

そんなに記述する事も無いのですが、実家で母の歓迎を受け、本宅に挨拶に行くと兄達に混じって無然とした顔のギーシュがいて、その日の夕食会でモット伯爵に利用されかけたギーシュが吊るされと。

ほぼ予想通りの展開でした。

私は、またギーシュの怨念が積もったのだろつなと思いつながら、数日後には領地を後にするのでした。

十三話

「えへへ、竜の羽衣か。本以外で、初めての高い買い物かも」

ニイドの月の初旬。

学院の夏休みは続いていましたが、タルブ村への観光と実家への帰省を終えた私は、錬金作業場で仕事の毎日でした。

純正のアルミニウムを。

いまだハルケギニアでは私しか作れない、純アルミニウムを錬金する日々を送っていたのです。

そんな私でしたが、一つ楽しみな物が出来ました。

それは、タルブ村で購入した竜の羽衣と呼ばれる昔の戦闘機だったのです。

「結局、ゼロ戦なのか他の戦闘機なのかわからないな」

私は、広大な錬金小屋の端にある特設スペースに置かれた戦闘機に、ディテクトマジックの改良魔法で探りを入れます。

すると、この格好良い戦闘機が非常に危うい作りをしている事に気が付きます。

前世では歴史の成績が普通であった私でも、太平洋戦争当時の日本の工業技術レベルの低さは知っています。

しかも戦争が激化したために、軍部は熟練工を徴兵して前線に送り、素人の女性や学生達に兵器を生産させる始末。

他にも、輸送船の護衛を怠って資源が不足し、劣悪な代替材料を使ったりと。

この戦闘機には、その跡がハッキリと残っていました。

「（俺は機械には詳しくないからな。最低限はやるか）」

まずは、部品の一個一個を丁寧にディテクトマジックで探って行きます。

その過程で、劣悪な材質の物を良質な材料へと錬金で変換し、工作が微妙な部品を出来る限り直して行きます。

とは言っても、バリを取ったり厚みを調整するのが精々でしたが。他にも、紙巻の配線にゴムを巻いたり、この世界にはゴムが普通にあるので材料の入手は簡単でした。

最後に強固な固定化の魔法をかけてから、いよいよ燃料とオイルの錬金に入ります。

戦闘機のタンクを一度空にして、残っていたガソリンとオイルを回収。

ガソリンは、これを参考に石炭から錬金する事とします。

確かオクタン化の高い燃料が良いはずでしたが、これが高いとエンジンのノッキングが起こり難くてエンジンが長持ちするはずです。そして高オクタン化ガソリンには、添加剤としてテトラエチル鉛が含まれています。

非常に有毒な物質ですが、これがないとオクタン化が上がらないので鉛などを使って錬金する事にします。

ガソリン自体は、炭素数が4個から10個の水素との混合物なので、これは簡単に錬金できました。

硫黄や窒化物などの不純物は入れないで、ここに添加剤としてテトラエチル鉛を混合します。

更に、エンジンオイルも作成します。

ですが、私にはパラフィン系基油とナフテン系基油くらいしかわ

からないので、化学式が簡単なナフテン系炭化水素の環状構造を元に、これを同じく石炭から錬金します。

最後に品質が劣化しないように固定化をかけてから、錬金で自作したアルミニウム製のタンクに詰め込んで揮発を防ぎます。

タンクにも固定化の魔法をかけて、これで私に出来る限りの事は全て行いました。

「うん、これでよし！」

ですが、すぐに重要な事に気が付きます。

「俺には、飛行機は操縦できないんだよな……」

せっかく出来る限りの整備をして燃料やオイルまで大量に用意したのですが、肝心の私に操縦技能がありませんでした。

それに、航空機の操縦を車のように試すわけにもいきません。

飛行機での失敗は、即墜落死に繋がるのですから。

「あれれ？ 俺のした事は無駄かい？」

数日を使って一人懸命に竜の羽衣に付きつきりであった私を、家臣達は不思議そうに見つめていたのでした。

「決闘だ！ 諸君！」

「またですか？ 兄上」

ティールの月の初旬、来月には二年生となる私にギーシュが決闘を申し込んで来ます。

最近は頻度が低かったのですが、それでも決闘を挑まないと済まない性格みたいですね。

「ギーシュ、決闘は禁止されているぞ」

「レイナール、止めないでくれ」

そろそろ入学から一年です。

さすがに男子生徒達も、私達の関係のカラクリに気が付いたようですね。

一方的に私を無視する男子生徒達はほぼいなくなり、私と普通に話をするようになっていました。

例えばこのレイナールなどもそうですが、彼は私の事を王城勤めの叔父から聞いていたようです。

その叔父は、自分の甥がグラモン家の息子と親しいと聞いて喜んでいたようなのですが、双方に大きな誤解が生じているようでした。

レイナール本人は本妻の子供であるギーシュと仲良くしていて、その彼が嫌悪している私を仕方なしに無視している状態。

一方、その叔父は時にはトリスティン王国が外国や有力諸侯に送る贈答品を安く仕上げたり、アルミの販売益で国を富ませている私と仲良くしていると思っていた。

双方は、夏休みに会った時にお互いの誤解に気が付き、夏休み後からはレイナールは私に普通に話しかけてくれるようになりました。

ギーシュは苦虫を潰したような顔になりましたが、他にも男子生徒達の中から私に話しかけるようになった者達が続出し、彼の包囲作戦は半年ほどで終了する事となります。

将来への打算で話しかけて来るといふのもどうかと思うのですが、人の縁などは最初はそんな物ですし、女子生徒達も最初はそうだったのかもしれない。

「ギーシュ。君はティーボの件になると、どうしてもそこまで意地になるんだ？」

もう一人、小太りなマリコル又という男子生徒がギーシュを止めに入ります。

彼も、ある意味打算的です。

彼は比較的早期に、私の周りに女の子しかいないのを羨ましいと思っただけで話しかけて来たのですから。

それと、私が独自に作らせている料理などにもですね。

タルブの村での醤油や味噌の入手は、私に懐かしくて新しい味覚を与えてくれました。

以前から欲しいとは思っていたのですが、色々と忙しくてちゃんと探していなかったのと、自分で作れるほど知識が無かったからです。

一度材料を集めて錬金してみたら、大失敗した事がありましたね。専門の金属の原子結合式はイメージ出来ても、醤油や味噌の発酵はイメージできなかつたというわけです。

そこで、専門の人を雇って色々任せってしまう事にしました。

苦勞して手に入れた米の栽培は農家に任せてしまい、他の料理や

食材の開発も、自分で雇用した料理人達に。

参考書籍は、この世界に紛れ込んできた私の本に混じっていた、『今から始める料理』以下数冊の料理本です。

昔一人暮らしを始める時に、『自炊くらい出来ないとな』と数冊を購入したのですが、実際には全く料理などせず。

最後には、技術書などと一緒に本棚に放り込まれていたのを子供の頃に発見したんですね。

そこで、私が少しばかりして翻訳をし、『どうも、東方料理の本らしい』と言って、雇った料理人達に再現するように頼んでいたのです。

イメージさえ与えれば、餅は餅屋です。

彼らは、数年である程度まで上手く再現してくれました。

そして、その過程で出来たコンブやニボシ。

ツナやアンチョビなどの食材は、海辺に領地がある貴族に製造方法を売却して安定供給可能になりました。

貴族の宿命なのか？

学院の食堂では、朝からコツテリした料理が出ます。

それにウンザリした私は、朝は自分の料理人に食事を作らせていました。

その日は、醤油の入手により完成したコンブの佃煮とツナマヨのオニギリを味噌汁と野菜の浅漬けで食べていたのですが、それに釣られたのかいきなりマリコルヌが現れ……。

一人で十個も食いやがりました。

しかも、食堂で普通に朝食は食べていたのにです。

そしてそれ以来、彼とは良く話すようになったのです。

食事やオヤツも、良く食べに来るようになりましたが。

「とにかくだ。いきなり決闘は駄目だろう」

同じく、中立的な立場になったギムリという同級生も間に入り、決闘は回避されたようです。

私は別にどちらでも良かったのですが、ギーシュは今までは100%自分に味方していたであろう友人達の裏切りに対し、また私に鋭い視線を向けていました。

そして、他の同級生達も困惑しています。

いつもはナルシストで気障な性格をしていて、平気で女性にクサイ台詞を吐ける男なのに、私に対する時だけは人が変わったように陰険になるのですから。

「ティーボ、覚えておきたまえ。いつか化けの皮を剥いでやるからな」

ギーシュの意味不明な捨て台詞に呆れるしかない私でしたが、来月には無事に二年生へと進級する予定です。

そしてその際に、私達は使い魔召喚の儀式サモン・サーヴァントを行い、無事に使い魔の召喚に成功する事で二年生へと正式に進級する事になっています。

果たして、私にはどんな使い魔が召喚されるのか。

少しワクワクしている私でした。

「えー。次は、ミスタ・グラモン……。弟さんの方だね」

月は変わり、フェオの月の初旬。

私達は二年生に無事に仮進級してクラス替えも行われ、いよいよ今日は使い魔召喚の儀式であるサモン・サーヴァントが行われていました。

学院敷地内の中庭で、引率教師であるミスタ・コルベールが呼んだ順番に生徒達が使い魔を呼び出すのです。

なおミスタ・コルベールは、中年で頭髪が寂しい哀愁漂う男性でした。

「ああ、俺か」

「ねえ、私は大丈夫よね？」

「いや、これから召喚する俺に聞かれても……」

私達のクラスのサモン・サーヴァントは既に終盤に指しかかっており、私の出番は最後から二番目でした。

そして一番最後は、魔法が常に爆発してしまうルイズで、どうやら彼女は要注意人物として一番最後に順番が回されたようです。

それ以外は、さすがに成績順という事もないと思います。

私は、真ん中よりは上の成績を常にキープしているのですから。

「ダーリン、頑張ってね」

「……」

今回のクラス替えて同じクラスになってしまったキュルケから声

援が入ります。

勿論、彼女の事が好きな男子生徒達からは、怨嗟の視線も同時に受けていますが。

私は、どうにもああいう積極的過ぎる女性は苦手なんですけどね。

ちなみに、キュルケは火トカゲのサラマンダーを。

同じく一緒のクラスとなったタバサは、風竜の幼生を。

モンモランシーは、カエルを呼び出していました。

そして、私を敵視するギーシユは、ジャイアントモールという巨大なモグラを呼び出していました。

土の系統に相応しい使い魔ですね。

「我が名はティーボ・ド・グラモン。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、使い魔を召還せよ」

いよいよ、私の出番ですね。

あまり深く考えないで、さっさと呪文を唱えてしまいます。

すると私の前方に、巨大な銀色の鏡のような物が出現し、中から何か巨大な蛇のような生き物が現れます。

最終的には、長さは二十メートルほど。

太さは大人の身長ほどもあり、先頭にある顔の部分の大半が巨大な口になっていて、他の生徒達は一斉に引いていました。

見た目的には、かなりグロテスクな生き物です。

正直、私も引きそうです。

「ミスタ・コルベール……。これは？」

私にも目の前の生物に関する知識がなかったので、ここは知識も

経験もある先生に聞いてみる事にします。

「これは、グランドワームですね。ですが、ここまで大きいのは珍しい……」

この、前世で子供の頃にやった某RPGに出て来るサンドワームのような生き物は、グランドワームと呼ばれる生き物だそうです。

地面に落ちた木の葉や枯れた草を食べてフンを後のお尻から吐き出すそうですが、これはどうもミミズと同じような働きをしているようで、農民には益獣扱いされているそうです。

それともう一つ特徴があつて、彼らはあまり発達した消化器官を持たず、食べた物をすり潰すために体内に石などを取り込むそうです。

しかも、より硬い石を好むらしく、貴重な鉱石や宝石の原石を体内に貯め込んでいる個体もいるとのミスタ・コルベールからの話でした。

「とは言つても、普通のグランドワームはこんなに大きくないので、滅多に貴重な鉱石は取り込みませんけどね。これほどの大きさだと、地中深くに潜るでしょうから十分に期待できるでしょう。錬金の二つ名を持つ君に、相応しい使い魔ですな。では、コントラクト・サーヴァントを」

「わかりました」

私がコントラクト・サーヴァントの契約を行おうとその巨大なグランドワームに近付くと、彼？は頭を私の近くに持って来ました。

その直系は私の身長とほぼ同じで、キスをどこにして良いのかわからないほどです。

「我が名はティーボ・ド・グラモン。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

唇？の端の部分にキスをすると、今世でのファーストキスは土の味でした。

ノーカウントだと思つ事にします。

「君の名前は、グラントにしよう」

グラントワームの頭上にルーンが刻まれたのを確認した私が彼に名前を付けると、グラントは一回だけ首を縦に振りました。

どうやら、私の言っている事がわかるようです。

「次は、ミス・ヴァリエールです」

「はいっ！」

爆発魔法以外使えた試しがないルイズが、最後にサモン・サーヴァントを始めます。

ですが、一回目は失敗し、二回目も失敗と。

私も友情的に最初は真剣に見ていたのですが、次第にダレて来てキュルケ達との雑談へと突入していました。

「ティーボは、大きい使い魔を呼んだのね」

「こんなに大きいグラントワームは見た事が無い」

タバサの言う通りに、普通のグラントワームは大きくて長さ三メートルほど。

しかも、ミミズに比べればその数は非常に少なく、グラントワームの生息可能な農地は作物の実りが豊かなので、農民達は発見すると大喜びするようでした。

ですが、体内に鉱石があるので捕まえて腹を引き裂く人間がいるので、その数は余計に減少傾向との事です。

ほとんどが鉄鉱石や銅鉱石が出てくるレベルなのですが、稀に寶石の原石などを腹に入れている個体もいるので、金が欲しい人が山に入って捕まえようとするらしいのです。

勿論、これも全てミスタ・コルベールの受け売りですが。

その間にも、ルイズの爆発魔法の音が響き渡ります。

「グラントほど大きいと、もう安全かもな」

私はグラントの体をそつと撫でると、彼は尻尾をこちらに引き寄せて、肛門から何かを排出します。

よく見ると、ダイヤ、サファイヤ、ルビーなどの原石や、含有量の多そうな金や白金の鉱石でした。

過去に飲み込んでいた鉱石類を、ご主人様にくれたのでしよう。

「本当に、深く潜っているんだな。グラントは」

「いいわね。一生食いつばぐれなくて」

モンモランシーが、羨ましそうに私を見えています。

「ところで、まだルイズは挑戦しているのかな？」

私達が話をしている内に、遂にミスタ・コルベールから『今日は、

これで最後』という言葉が飛び出します。

追い詰められたルイズが気合を入れて杖を振るった瞬間に、一際大きな爆発が発生し、爆発の煙が晴れると、そこには一人の私達と同年代の若者が倒れていました。

「平民？」

「なんで？」

不思議がるキュルケとモンモランシーの横で、私はかなり動揺していました。

「（おいおい、マジかよ）」

その平民の格好は、前世では珍しくもなかったパーカー姿。

つまり、私が前世で生きていた世界と同じか似ている世界から来たという事です。

私は心の中で動揺を抑えながら、いまだに倒れている少年を見つめ続けるのです。

十四話

「（あの少年の格好は……。しかも、黒い髪に黒い瞳。日本人だよな？ 間違いなく）」

ルイズが苦勞の末に呼び出した人間の使い魔が、私には気になつて堪りませんでした。

私の前世である日本人と、同じ身体的特徴と服装。気にならない方がおかしいのです。

それと、もし彼が自分と同じ世界から召喚されたのであれば。生まれ変わって容姿まで変わってしまったので、今さら戻る気は無いのですが、前世での家族である両親や弟がどうなったのかも気になります。

そして私が色々と考え込んでいる内に、ルイズはその平民とコントラクト・サーヴァントを行い、彼の左手の甲には何となく見た事があるようなルーンが現れていました。

このルーン。

実は、アルファベットに似てますよね？

ハルケギニアの人にはわからないのでしょうか。

「では、これにて、使い魔召喚の儀を終わりにします」

ミスタ・コルベールの言葉で今日の授業はこれで終了となり、他の生徒達は各々フライの魔法で自分の寮へと戻って行きます。

その様子を、件の少年は不思議そうに見つめていました。

どうやら、私の予想通りに彼は少なくとも魔法の無い世界から召喚されたようです。

「ルイズ」

「ティーボじゃないの。あなたは、フライで帰らなかったのね」

「グラントの面倒を、家臣達に頼まないといけないからね。それに、グラモン家の男は、戦に備えてこのくらいの距離は歩くんだよ」

魔法の鍛錬も体の鍛錬も怠らないのが、軍人家系であるグラモン家の古来からの伝統なのです。

『このくらいの距離で歩く奴が、戦場でどうして役に立つのか？』

もし、フライで飛んで帰ったのを父に知られたら、絶対に怒られるはずですよ。

現にギーシュも、普通に歩いて寮へと戻るようでした。

私とは、絶対に顔を合わせないですけど。

「ギーシュはジャイアントモール（モグラ）で、ティーボはジャイアントグランドワーム（土虫）なのね。やっぱり、土の家系の名門なのね」

トライアングルメイジであり、将来はスクウェアメイジも夢ではないと言われているギーシュのジャイアントモールは、下手な牛よりも大きく、他の土系メイジ達を驚かせていました。

ですが、私のグランドワームは今までに聞いた事が無いレベルの大きさですよ。

どうやら、私はまた彼に恨まれてしまったようです。

こんな事を考えてしまう自分が嫌なのですが。

「ふえー、デカイ虫だな。虫とか、そういうレベルじゃないな」
私の使い魔であるグラントを、信じられないと言った表情で少年は見上げています。

実際に、グラントの巨大さには私でも驚いているのですから。

「しかし、一番変わっているのはルイズの使い魔だろうか？」

「服装が変わっているだけよ。こんな何の特技も無さそうな平民」

「うるさいな！ 人をいきなりこんな場所に呼び出しやがって！
人権蹂躪だぞ！ 拉致誘拐だぞ！」

「平民が、ゴチャゴチャとうるさいのよ！」

「チビ助が何を抜かす！」

「何ですってえー！」

私の前で、少年とルイズの不毛な口喧嘩が始まります。
レベルは、非常に低いと感じました。

「とにかく、先に寮に戻ってから話をすれば良いじゃないか」

「それもそうね。じゃあね、ティーボ」

「おいつ！ 俺を家に帰せよ！」

ルイズは、強引に少年を引っ張って学院の女子寮へと戻って行き

ます。

あまり焦って色々と動いても変に思われるので、詳しい事は明日以降に聞く事として、自分はこの巨大な使い魔の居場所を考えないといけません。

住む場所とか、餌の確保とか。

体が大きいだけに、その維持費は膨大な物となるでしょう。

定期的に吐き出す宝石や鉱石類で、収支の方は大幅にプラスなのでしょうが。

「これは、大きなグランドワームですな。ティーボ様は、使い魔も凄いな」

錬金作業場の入り口まで移動すると、アシルが感心したような表情でグラントを見上げます。

「グランドワームの生態とか、知っているか？ アシル」

「普通に土中に巣を作って寝るらしいですけど」

「良く知っているな」

私はアシルの忠告に従って、学院の近くにある草原にグラントを案内します。

すると、三十メートル四方の草を勢い良く土ごと食べ始め、その中心部から穴を掘って地中深くに潜っていきます。

どうやら、地下に自分専用の巣を作っているようです。

私は周囲に、通気性のある大型の倉庫のような屋根付きの小屋を錬金して行きます。

更に、雨水などが入り込まないように建物の壁の周りに排水溝を

掘り、屋根に雨樋を作ってから固定化をかけて完成です。

「気に入ったか？」

私の問いに、グラントは穴から顔を出して首を縦に振ります。

「ところで、グラントワームって何を食べるんだ？」

「落ち葉とか、枯葉とか、普通の草とか木でもいいみたいですね」

いつの間にか傍にいたアシルが、私の疑問に答えてくれます。

グラントワームは、植物性の餌を食べてから地中深くで見付けた硬い石などを飲み込んで溜めた石袋ですり潰し、そのまま消化してからフンにして出すそうなのです。

そして、そのフンが混じった畑の土では作物が良く取れるそうです。

確かに、ミミズと同じような働きをしているみたいですね。

「一日に、どのくらい食べるのだろう？」

自分の巣穴と雨避けの屋根付きの小屋を作る際に、グラントは三十メートル四方の草を全て食べてからゲップをしていました。

つまり、一回にそのくらいの量は食べてしまうという事です。

「馬車一台分くらいですかね」

「数日は、この近辺の草で間に合うと思うんだけど……」

「近隣の農家から、雑草とか伐採した草木を買いましょう。帰りにフンを持って帰る許可を出せば、安い金額でも文句は出ませんし」

グランドワームのフンには作物と良く実らせる効果があるのが有名らしいのですが、最近では石袋の中に入っている石の採集のために数が減ってしまい、農民達は嘆いていたそうです。

ミミズでも同様の効果が出るのですが、やはりパワーが違うそうなので。

確かにグラントは特別としても、普通のグランドワームでも蛇くらの大きさがありませんからね。

「では、その案で手配しておいてくれ」

「かしこまりました」

話をしている間に、グラントが穴から尻尾を出して外にフンをしました。

近くで見ると特に匂いも無く、フンというよりは腐葉土に似ている感じでした。

私の使い魔は、素晴らしくエコな奴のようでした。

「定期的に地中を移動して、石を集めて余った分を吐き出す。それが貴重な鉱石や宝石の原石で、フンまで肥料に使えるなんて便利ですね」

「確かに、便利だよなあ。ところで、戦闘とかでは使えるのかな？」

「さあ？」

私の使い魔である、グランドアームのグラントは非常に私に相応しい使い魔のようでした。

「また明日な、グラント」

サモン・サーヴァントが行われた日の夜、私が召喚した使い魔グランドワームのグラントの住処と食事の手配を行い、いつものように二時間ほどの錬金を行った私は、一人で男子寮へと歩いて行きま
す。

途中、女子寮との間にある中庭で、ギーシュが一年生らしき女子生徒を口説いているようでしたが、これは無視する事にします。

ギーシュは、私に気が付かない振りをしてその女子生徒を口説き続けますが、心の中ではまた私に敵意を向けているのでしょう。

そして男子寮の入り口に着いたところで、後から誰かが走って来る気配を感じて後を振り向くと、本日ルイズが召喚した少年が息を切らせながら立っていました。

「君は、ルイズが召喚した平民だね」

私は、この同じ世界から来たかもしれない少年に興奮を隠しながら話しかけます。

「あなたは、あのルイズとかいう女と話していた人だな。巨大な蛇を連れた」

「あれは、グランドワームという一種の益獣なんだけどな。それで、息を切らせてどうしたんだ？」

「それが……」

話を聞くと、ルイズがあまりに好き勝手な事を言うので、自分の身を案じてつい逃げて来てしまったそうです。

「その気持ちは理解できるが、君は一人になってここで生きて行けるのかい？」

「それは……」

この少年が異世界から来ている事を知っている私は、彼に厳しい質問を投げかけます。

この周囲にほとんど何も無い学院を出て夜に一人歩きするなど、危険な行為でしかなかったからです。

ここは、前に私がいた平成日本ではないのです。

野生の獣や亜人や盗賊に襲われても、すぐにお巡りさんなど来てくれないのですから。

そしてその事は、空を見上げて月が二つある事を確認した少年も気が付いているようでした。

「双方共に、暫く頭を冷やした方がいいか……。来たまえ、お茶くらいは御馳走しよう」

少年と二人きりで話をするチャンスだと思った私は、彼を自分の部屋へと誘います。

私は彼を自分の部屋に入れると、そのままドアにロックの呪文をかけ、サイレントの呪文もかけて話が外に漏れないようにします。

「本当は、メイドがお茶を淹れるんだけどね。今日は、私が淹れるとするか」

私は、自分で紅茶を二人分淹れてから、それをお茶請けのクッキーと共に出します。

ちなみに、このクッキーはシエスタが作った物です。

「ありがとう。今日は、まだ何も飲み食いしていないんだ」

クッキーを食べながらお茶を飲み、少年はようやく人心地ついたようです。

「君の名前を聞いていないな」

「そうだった。俺の名前は、平賀才人だ」

「私も、自己紹介をしていなかったな。私の名前は、ディーボ・ド・グラモンだ。ご覧の通りに貴族をしている」

「この世界では、貴族が幅を利かせているらしいな」

「ああ、魔法が使えるというアドバンテージは大きい。だから、支配者階級にある者が多いのだよ。当然、それが当たり前の感覚だから、今日のお前さんのような態度に、ルイズが激怒したりする。理解できるかな？」

「無礼討ちのような感覚？」

才人という少年は、ようやく自分が危うい位置にいる事を理解していました。

「ここは、魔法の使えない平民が貴族の癩に障るような事を言ったら、その場で殺されても文句が言えない世界であるという事をです。」

「才人君、君のいた世界では貴族はいないんだろう？」

「いても少数だし、そんなに力も無いし。どうしてわかったんだ？」

「ここと同じように、貴族が支配者階級になれば礼儀くらい身に付けるだろう。お上に睨まれて良い事など一つもないしね。」

「あんた、頭がいいな。」

才人が私に感心しながら部屋を何気なく見渡していると、ようやく本棚に入った日本語の本類に気が付いたようです。

「ここって、公用語が日本語なのか？」

「いや、それは東方から流れて来た物だと言われているな。私が、お金を出して購入したんだ。読めるのかい？」

「読める。難しいけど……。」

小学校の教科書もありますが、大学院で使っていた研究書や技術書なども置いてあるのだから難しくても当然です。

「英語とドイツ語の書籍。歯が立たない……。あれ？ 名前が書いてある。」

才人は、学術書の裏に書かれた私の前世の名前に気が付いたようです。

「鈴木健吾……。どこかで聞いたな？」

「それが、その本の持ち主なのかい？」

「ああ、確か……。思い出した！一ヶ月くらい前にニュースで見た！「カザフスタン共和国の資源調査をしていて、イスラム原理主義者のテロリスト達に銃殺されたか？」」

「どうして、そんな事をあんたが？」

ここでは自分しか知り得ない事を言おうとしたのに、先にそれを私に言われてしまい才人は驚いてるようでした。

「私は、あそこで胸に銃撃を受けて死んだはずなのだがね。なぜか、こうして第二の人生を歩んでいる。黒髪は金髪に、瞳も碧眼に、一般庶民が貴族にね」

才人は私から真実を告げられ、目を見開いたままになっていました。

「そうか、葬式では父も母も泣いていたのか……」

「ワイドショーで見たんだけど」

「死んだ時が一番メジャーって。凄いな、俺」

それから暫く、私と才人は取りとめの無い話を続けていました。私は、才人から彼が召喚されるまでの日本の出来事などを。才人には、私がこの世界の簡単な習わしなどをです。

「でも、不思議な話だな。鈴木さんが……」

「ティーボで構わん。既に、十七年近くもその名前だしな。それと、人のいる場所ではミスタ・グラモンか、鍊金殿と呼べ。平民が貴族の名前を呼び捨てにしているのを見たら、それだけで激怒する奴がいるからな」

「わかった。それでさ、地球はで一ヶ月前に死んで生まれ変わったティーボが、今は十七歳にまでなっているっておかしくないか？」

才人の疑問は、もっともでした。

前世名鈴木健吾が死んでから一ヶ月後の世界から来た才人が、既に十七歳になっている私と話をしている。どう考えても、時間軸がおかしいのです。

「多少時間軸がずれているんだろうな。実際に、シエスタの曾祖父もそうだ」

「シエスタ？」

「専属のメイドなんだが。曾祖父が、第二次大戦終了直後に戦闘機ごとここに迷い込んだらしい。当時二十歳前後の佐々木少尉が、終戦から六十年ほどで九十歳を超えて数年前に鬼籍に入っている。やはり、時間のズレがあるようだな」

私の説明に、才人は指を折って年数を数えていました。ですが、専門家でもない私達に真相の究明など不可能ですし、別にすぐに調べないと命に関わるわけでもありません。この件は、あとで時間があつたら調べる事にします。

「そうか、俺はとんでもない場所に来てしまったんだ……」

才人は、盛大に落ち込んでいるようでした。平和の国日本の高校生がいきなり異世界に一人で飛ばされて、全く帰る当てがないのですから。

「『帰りたいか?』って聞くまでもないか」

「俺は帰りたいたさ。ティーボは?」

「俺は今さらだろう。この成りで、両親や弟に健吾が戻りましたっけ言うのか? 鈴木健吾は死んだ。それで十分じゃないか」

「そうか……」

いきなり金髪の外人が鈴木健吾を名乗っても、向こうでは狂人扱いが精々でしょうし。

そもそも、絶対に戻れる保障など何も無いですしね。

「ところで、才人はどうするんだ? とは言っても、暫くはルイズの使い魔でもしてこの世界に慣れるしかないな」

多分、数日や数ヶ月で戻れるような話にはならないでしょう。

ならば、才人は暫くハルケギニアで生きていかなければならないのです。

「とりあえず、飯が食えないと死ぬな」

「えっ！ 助けてくれないのか？」

「助けてやりたいのはヤマヤマなんだが、才人はルイズの使い魔だからな。あまり俺が口を出せないんだ」

私の使い魔であれば優遇は可能なのですが、如何せん才人はルイズの使い魔であり、いくら友人でも口を出す事は不可能でした。

「粘り強く交渉して、なるべく良い待遇を受けるしかないな。時に下手に出て、時に自分を上手く売り込む。営業のような感じだな」

かなり長時間話をしてしまったので、私は残りのクッキーをお土産にして渡すと、才人に早くルイズの所に戻るように言います。

「ああ……。あの女とどうやって交渉なんて……」

ロックを外して開けたドアの前で、才人は物凄く落ち込んでいたようでした。

「でも、一人でも事情を知っている人がいて助かったよ」

「それは良かったが、俺の事は秘密に頼むぞ」

「わかってる。でも、何で教えてくれたんだ？」

「才人のその服装を見た時だな。一度終わった世界の事なのに、懐かしさと旅愁のようなものが出たんだ。それに、この世界に来たば

かりのお前が、俺の正体を高らかに叫んだらどうなると思うっ?」

「確実に狂人扱いだな」

「そついう事だ。だが、余計な事は言わずに越した事は無い」

私はルイズの部屋に戻る才人を見送ってから、色々あった今日を思い出しながらそのまま眠ってしまうのでした。

「おはよう、グラント」

翌日、私はいつものように早朝の自己鍛錬を終えてから、使い魔であるグラントのいる小屋へと向かいます。

小屋と言っていますが、雨風を防ぐ小屋の大きさは三十メートル四方もあるので、巨大倉庫か小さめの体育館レベルですけどね。

建物の周りでは、家臣達が私に頼まれた追加の固定化の魔法をかけてたり、排水溝を石製に錬金し直したりしています。

建物の中では、中心部に直系二メートルほどの穴が開いていて、私の存在に気が付いたのか、グラントが顔をニユルッと出していました。

「食事は、数日は近辺の草で我慢しれくれよ」

グラントは、無言で首を縦に振ります。

喋れないからなんですけどね。

そして実際に、近辺の草原の草を大量に食べて来たようです。グラントはゲップをしていましたし、小屋の端には大量にフンが盛られていました。

フンとは言っても、本当に腐葉土にしか見えませんけど。

「散歩は終わったのかい？」

グラントワームは、一日に一回数時間ほどを地中の散歩に費やすようです。

石袋に入れる、食べた物をすり潰す石を探しに行くんですね。

しかも、その石はなるべく新鮮な物が良いらしく、新しい石を飲み込んで古い石を排出するという行動を繰り返すようです。

昨日、ハルケギニア幻獣大図鑑で確認しました。

そして、そんな説明をしている間にグラントは一旦巣穴に戻ってしまいましたが、すぐに尻尾を出してフンでは無くて古くなった石を排出していました。

何しろこの大きさなので、余程地中深くまで潜っているのかもしれません。

石の大半は、宝石の原石類でした。

どうやら、食べた物をすり潰すのに効率が良い硬い石が好みのようです。

「グラントと一緒にいると、金持ちになれそうだな」

大き目のエメラルドの原石を眺めながら、自分の使い魔は大当たりだなと思う私でした。

その後は、家臣達にグラントのフンを外に出すように命令します。グラントのいる小屋の外に山積みしておいてから、彼の餌を売りに来た農民に配るつもりだったのです。

これは、良い肥料になりますからね。

「さて、朝飯を食べてから授業に出るかな」

シエスタの給支でご飯を主食とした朝食を取ってから学院の教室に向かうと、教室内には多くの使い魔達があります。

今日は、昨日召喚した使い魔を授業で披露する事になってるので。

「みなさん、おはようございます。どうやら、召喚は大成功だったようですね」

去年に引き続き、土系統の魔法を担当するミセス・シュヴルーズが生徒達の使い魔を見渡してから挨拶をします。

「ミス・タバサと錬金殿の使い魔は、教室には入れませんから残念でしたね」

タバサは幼生ながらも風竜を召喚していて、私は全長二十メートルを超えるグランドワームが使い魔です。

教室に入れる事は不可能でした。

ギーシュは、牛ほどの大きさのモグラを強引に教室に入れていましたが。

「サモン・サーヴァントも、コントラクト・サーヴァントも。全員が成功したと聞いています。大変に喜ばしい事ですね」

ミセス・シュヴルーズが総評をしますが、実は今までに失敗した人などいないというのが事実でもあります。

それに、教室にいる才人の存在については、不思議がつてはいるようですが、ちゃんと契約成功のルーンが結ばれていたのです、特に何も言わなかったようです。

他の生徒達の擲掬もありません。

以前であれば誰か一人くらいは言ったのかもしれませんが、爆発の魔法をコントロール可能になったルイズには、現在『爆殺』の二つ名が付いています。

更に、この一年で私の家臣達と一緒に定期的に亜人や幻獣退治に出かけていて、既に二百体を超える戦果も挙げています。

あまり怒らせない方が良いと言うのが、周囲の考えでした。

ただ、相変わらずいくら練習しても爆発以外の魔法は使えなかったのです、たまにイライラしながら練習をしているようですが。

「それでは、去年からのおさらいになってしまいますけど」

ミセス・シュヴルーズから去年と同じ錬金の課題が出され、それぞれに用意された小石を錬金していきます。

私は、去年と同じく銀を少量錬金していました。

相変わらずの、純度99.999999%な物をです。

一番の得意分野ですからね。

ギーシュも去年よりは純度の高い銀を錬金し、他の生徒達も青銅などを次々と錬金していきます。

才人は、とても驚いているようでした。

「最後に、ミス・ヴァリエルですね」

ミセス・シュヴルーズはルイズを最後に指名すると、そのまま一緒に教室の外へと出てしまいます。

才人が不思議に思っている、暫くしてから誰もいない中庭から爆発音が聞こえて来ます。

入学当初の爆発事故以来、ミセス・シュヴルーズはルイズを外で錬金させるようになっていました。

爆発以外の魔法が使えるようになりたいルイズは、授業も真面目に聞き、授業終了後も質問などを欠かさない優等生でしたが、やはり爆発以外の魔法は成功しません。

ミセス・シュヴルーズとしては、錬金の習得のためにルイズに少しでも実技をさせたいのですが、教室内でそれを行う事は危険です。そこで、誰もいない中庭で魔法を使わせるようになっていました。

他にも、風の系統魔法を教えるミスタ・ギトーや、火の系統魔法を教えるミスタ・コルベールなど。

彼らは真面目に質問に来るルイズに早く魔法を使えるようにと熱心に指導していたのですが、やはり爆発は怖いので外でルイズに練習をさせていました。

他の実技試験なども同様です。

「えー。ミス・ヴァリエールは、火薬の錬金に成功と……」

ルイズと一緒に再び教室に戻って来たミセス・シュヴルーズは、ルイズの考査表にいつもと同じ文言を書きます。

爆発のコントロールは一応できるし、努力は懸命にしている。

しかも、彼女の父親はヴァリエール公爵であるという事で、ルイ

ズの留年はあり得なかったからです。

同じくミスタ・コルベールの考査表には、『爆発に際して、火は出ているようである』であり。

ミスタ・ギトーの考査表には、『爆発の際に、風を感じた』でした。

こうして、サモン・サーヴァント翌日の午前中の授業は特に何もなく終了するのです。

「本当に、魔法だよ」

一人驚く才人を除いてですが……。

十五話

「うん、この緑茶は上手いな」

午前中のミセス・シュヴルーズの授業が終了した後。

私達は、中庭のカフェ・テラスでお茶を飲んでいました。

使い魔の召喚に成功した新二年生達が、呼び出した使い魔達との交流を行う。

お題目はそうなっていました。実際にはただのお茶会です。

仲の良い生徒達が数名ずつでグループを作ってテーブル席に座り、学院付きのメイド達から紅茶とケーキを配られながら、使い魔とはあまり関係ない話をしていました。

「あら、そのお茶は東方産なんじゃないの？」

「製法は東方産だが、茶葉は紅茶と同じだよ」

私は、ルイズ、モンモランシー、キュルケ、タバサと同じテーブルで領地で作らせた緑茶を楽しんでいました。

雇った農家にお茶の木の若葉を摘ませてから、手揉み後に乾燥させて緑茶を作らせていたのです。

父に、『せっかく稼いでいるのだから、少しはお金を使って領内に金を回せ』と言われているので、お米の栽培などと一緒に行わせているのですが、今では余剰分を市場に出しているので少し利益が出るようになっていました。

「私も欲しいわ」

私が傍にいるシエスタに目配せをすると、キュルケに新しい茶碗を用意して急須でお茶を注ぎ始めます。

この急須も私が試しに錬金をした物で、今では領内の陶工が真似て少数を出荷しています。

デザインが変わっていて、珍しい物好きの貴族達に茶碗とセットで高く売れているそうです。

「少し苦いけど、大人の味ね。飲むと口の中がスツキリとするし」

「お替り」

「私も」

キュルケとタバサとモンモランシーは、シエスタにお茶のお替りを貰っていました。

「ねえ、ヴァリエールは飲まないの？」

「うるさいわね……」

私達のグループの中で、唯一ルイズだけが不機嫌でした。

魔法が上手く行かなかったという件では、既に慣れているのでそれほどでも無かったのですが。

問題だったのは、テーブルの下で小汚い茶碗に入った水を飲んで
いる才人の存在でした。

「何か、哀れを誘うわね……」

「御主人様の事をバカにした天罰よ！」

「才人よ。人の忠告くらいちゃんと聞いておけよ」

先ほどの授業で、他の生徒達は器用に錬金をこなしたのに、ルイズは外に出て爆発音が聞こえただけなのを不思議に思った才人が、真相をしつこく聞いてしまったために彼女の怒りを買ってしまったようです。

彼女も、自分が爆発以外の魔法を使えない事は重々承知していましたが、周りも最近ではそれとなく気を使うようになったので、今さらそれをしつこく聞いて来る才人を疎ましく感じたのでしょうか。

そのまま昼食抜きで、今の時間も椅子に座る権利すら与えられずに地面の上で水を飲んでいきます。

「お腹空いたなあ」

「自業自得よ！」

私は才人を可哀想だと思つのですが、この世界に十七年もいる影響でしょうか？

余計な事をしつこく聞かなければ良いのにと、才人に対して思つてしまうのです。

「夜まで我慢するんだな」

「そんなあ……」

落ち込む才人でしたが、私達のいる場所から少し離れたテーブルでは、ギーシュが数名の男子達と妙に話が盛り上がっているようです。

した。

「ギーシュは、今誰と付き合っているんだ？」

「バラは、全ての女性を楽しませるために存在するのさ」

私に向ける陰湿な行動と感情以外は、バラの杖を持って胸元の開いた改造シャツに身を包み、気障な性格をしているギーシュなので、友人達の質問に気軽に答えているようでした。

「良かったな。楽しませてくれるってさ」

「いらないわ」

「私も」

「ギーシュも懲りないわねえ」

「……」

私が同じテーブルに座る女性陣にギーシュの話した内容を振ると、その反応は低調そのものでした。

ルイズ達は彼の私に対する態度を良くないと感じているので、ギーシュにあまり良い感情を抱いていないのです。

モンモランシーなどは、私よりも何年も前にギーシュと先に知り合いになっているのに、最近はあまり話もしていないようでした。

「ティーボも、意外と毒舌になったわね」

「もう気を使うのに疲れた。十七年も我慢してやったんだ。俺も大

概お人好しだろう。あのバカ相手に」

「くっ！」

私の本音に、ギーシュは一瞬だけ苦虫を噛み潰したような表情になりました。

ですが、また下らない女性談義に入ったので、私は無視する事にします。

男友達同士でその手の話をするのは嫌いでは無いのですが、人の話に聞き耳を立てても無駄だと感じたからです。

私は暇潰しに、使い魔のグラントが排出した宝石の原石の加工を始めます。

「グラントは、よほど地中深く潜るんだな。大きさも質も申し分ないな」

私は、拳大ほどの岩に埋もれている、親指大ほどのダイヤモンドの原石を錬金の魔法で加工していきます。

普通はカッティングの工程で無駄にダイヤの部分を削ってしまうのですが、私の錬金ならば岩の部分だけを除外してから、ダイヤ自身を削らずに形を整える事が可能でした。

原石は、すぐに菱形のダイヤモンドへと変化して綺麗に輝き始めます。

前に入手した本の中に某ティファニーのカタログがあったので、それを参考に宝石をカットしたのです。

「宝石で女性を釣るのか。下品な男だ」

「午後の時間は、使い魔に関連する事をする時間だからな。グラントの成果を発表して何が悪い」

ギーシュに嫌味に、私は彼の顔も見ないで反論してから。

他のルビーやサファイヤなどの原石も、次々に錬金で加工していきます。

テーブルの上では、十数個の宝石が綺麗に輝いていました。

「綺麗ねえ。私には、一生買えないでしょうけど」

モンモランシーの言った言葉は、このままだと本当に実現しそうなところが怖いですね。

何しろ、本当に彼女の実家は財政が厳しいらしいので。

「なら、ティーボと結婚して、結婚指輪として貰えばいいじゃない」

「私とティーボは、そんな関係じゃないわよ」

他の女子生徒達がテーブルに集まってモンモランシーをからかっていたましたが、ふと私がギーシュに視線を送ると、彼はまた一瞬だけ物凄い表情をします。

やはり、ギーシュはまだモンモランシーに未練があるようです。

ですが、私は他の一年生を口説いている場面も見ているので、やはりそういう部分はあの父の息子なのでしょうね。

なぜか私は、かなりこういふ方面に淡泊になっていますが。

既に精神年齢が四十五歳を超え、ある意味達観しているのかもしれません。

「錬金殿、モテて羨ましいな」

「稼ぐ男はってやつか？」

茶碗の水を飲みながら才人も私に声をかけますが、その際に彼が余計な事を言ってしまった事から事件は始まります。

「あのギーシュとか言うキザ男よりも、錬金殿の方が女性にモテているな」

「今、何て言っただい？ 平民の使い魔君」

才人の言った言葉が耳に入ったギーシュが、声のトーンを落とすとして才人に質問をします。

「ああ、気にしないでくれよ。貴族さん」

「平民、僕は君が言った発言が何かと聞いているんだ。答えたまえ」

「いやー、あんたより、錬金殿の方がモテるってさ……」

地球で同年代の人間をからかっている感覚で出た才人の発言でしたが、ギーシュには物凄く癢に障る物のようでした。

自らをプレイボーイだと自認している彼が、平民如きに自分の一番嫌いな弟よりも女性にモテないと言われたのです。

既に、ギーシュの顔からは笑みが完全に消えていました。

「ギーシュ、たわいのない冗談だ。気にするな」

「ティーボ、お前は黙っている！」

私の制止は、かえってギーシュを怒らせてしまったようでした。

「聞けば、君はルイズの使い魔らしいね。爆発以外の魔法が使えない落ちこぼれの使い魔か。なら、貴族に対する口の利き方がなっていないのも仕方が無いか。しかも、そんな愚かな平民を庇う僕の愚かな弟。やはり、下賤の血はどうにもならないようだね」

ギーシュは、相変わらず私には言いたい放題のようでした。ですが、ここで予想外の事が起こります。

このやり取りを聞いて、本気で怒ってしまった人物がいたのです。

「さつきから聞いていれば！ 貴族だか何だか知らないけど、何様なんだよ！ お前は！」

頭に血が昇ってしまった才人が、ギーシュを怒鳴りつけてしまったのです。

「平民君。それは、僕に対して言っているのかい？」

「他にいるか！ このバラ野郎が！」

「言ってくれるね。平民君」

次第にギーシュの顔から、全ての感情が消えていきます。

これは、本当に彼が怒っている証拠でした。

「同じテーブルに女性ばかりのティーボが羨ましい癖に、居るんだかどうかもわからない女の自慢かよ。しかも、それを指摘されて逆ギレとか。バカなんじゃねえの？」

「そうかい……」

才人の言葉をそこまで聞いてから、ギーシュはバラの形をした杖を才人の眼前に突き付けます。

「決闘だ！ 諸君！」

ギーシュは、また決闘を宣言していました。

どうやら、彼の決闘癖はどうにもならないようですね。

「ちよつと！ 決闘は禁止のはずよ！」

「ルイズ。それは、貴族同士のだろうか？ 幸いにして、彼は平民じゃないか」

「私の使い魔よ！」

「ルイズ。悪いが、新しい使い魔を呼び出してくれたまえ。もっとも、落ちこぼれの君に再び呼び出せるのかは知らないけどね」

「ギーシュ！ あんた！」

午後の平穏な時間は、ギーシュVS才人&ルイズが睨み合う光景へと変化してしまうのでした。

「とにかく、決闘なんて駄目よ！」

結局、才人とギーシュはヴェストリの広場の決闘をする約束を交わしてしまいました。

私としては、なるべく止めたかったのですが。

ギーシュが意固地になり過ぎる最大の理由に私の存在があるので、下手に私が仲裁に入ると余計に拗れる可能性があつたんですよ。

「そうですね。貴族様と決闘なんて殺されちゃいます！」

シエスタも、才人を止めに入ります。

確かに彼女の言う通りで、普通の平民が魔法という究極のアドバンテージを持つメイジに勝てる可能性はかなり低いからです。

メイジ殺しと呼ばれる平民は実在しますが、それは本当に極少数です。

彼らも、こんな真昼間に堂々と相対して戦おうとは思わないでしょう。

「それに、実際にギーシュは強いから……」

私との決闘に負け続けているギーシュですが、それは出したゴレーム同士を戦わせている限定戦の事であつて、実際に戦場で戦えば私が負けるかもしれないほどです。

身体能力的にも、攻撃魔法の実用性においても、実は彼の方が上なんですよね。

「ティーボは、あそこまで言われて悔しくないのかよ！」

二人きりでもないのに、才人が私の事を呼び捨てにしていますが、もはやそんな事を気にする人はいません。

他の人達は、既にそれどころではありませんし、私は全然気にならないので、別に構わないんですけど。

「気には障るんだが、彼も追い詰められているからな」

ギーシュの私に対する態度は、モット伯爵への件で実家からの仕送りを減らされ、次第に交友網が細まりつつある彼の焦りの一端でもありました。

自業自得なのですが、それを彼に言えばもつと怒るでしょうね。

つまり、この決闘は彼の権威回復と、ストレス発散も兼ねているわけですね。

下らない事に変わりはないですけど。

「大体、ルイズもあそこまで言われて悔しくないのかよ！」

「失礼なのは、あんたも変わらないでしょう！」

「俺は、事情を知らないのが嫌だったんだ！」

ほとんど頼る人もいない異世界の地で、才人は才人なりに自分の御主人様に関する情報を集めていたのでしょうかね。

もう少しスマートにやれば良かったのでしょうか、それは彼がまだ若いという事なのでしょう。

「とにかく俺は行くぞ！ ヴェストリの広場はどこだ？」

才人は、この状況を楽しそうに見ている男子生徒達からヴェストリの広場の位置を聞くと、その方向へと歩き始めます。

「待て、才人」

「まだ止めるのか？」

「いや、お前がどうしてもやりたいというのであれば、止めはしないさ。だが、武器も持たずにどうやって戦う？」

「そういえば……」

才人は、自分が完全に無手である事に、今になって気が付くのでした。

「遅かったね。逃げ出したのかと思ったよ」

「そんなわけがあるか。準備時間だよ」

「ふーん、ティーボが手を貸したわけだね」

「対戦相手が武器を持っていると不安か？ ギーシュ」

「まさか、僕は普通に魔法を使って戦うからね」

ヴェストリの広場では、バラ状の杖を構えて戦うギーシュと完全武装の才人が対峙をし、私達ギャラリーがそれを見守るという構図になっていました。

「お前、欲張り過ぎじゃないのか？」

「どれが使えるとかわからないからさ」

才人は私から家臣達の備品であるチタン合金製の鎧を借り、両手には長さ二メートルほどの槍を、腰には昔に自作してみた日本刀モドキの剣を二本挿し、他にも投げナイフなどを装備していました。

「そんな武装は無駄だと思うけど。君が負ける時間が伸びるだけで」

「うるさい！ とつとつかかって来い！」

才人の挑発に乗ったのか？

ギーシュがバラの杖を振るうと花びらが地面に落ち、そこから全長1.7メートルほどのワルキューレと彼が呼んでいるゴーレムが五体出現します。

「このくらいで十分だろう」

「何が十分だ！」

自分に向かって来るワルキューレ達を、才人が槍を構えて迎撃します。

しかし、槍を構えた才人の姿はまるで様になりません。

それもそのはずで、平和の国日本から来た運動系の部活もやっていなさそうな才人が、私と同じく訓練を受けているギーシュに勝てる道理が無いからです。

しかも、彼には魔法という圧倒的なアドバンテージがあるのですから。

意外と激高し易い才人が勝手に始めてしまった決闘ですが、私は上手く大怪我をしない内に止めないなどと思っていました。

「いくぞ！」

「やれやれだ。何だい、そのへっぴり腰は？ 我が領の諸侯軍に徴兵された農民以下じゃないか」

ギーシュも、才人が威勢の割には武器の扱いが素人である事に呆れています。

「やあー！ー！」

ところが、次の瞬間には全員が衝撃を受ける事になります。自分に一番接近していたワルキューレに才人が槍を突き刺すと、槍の穂先がそのままワルキューレの背中を突き抜けてしまったからです。

青銅製とはいえ金属製のギーシュのワルキューレでしたが、そのまま崩れるように活動を停止させてしまいます。

「おっ！ 俺って意外とやるじゃん！」

「君は、バカか」

ギーシュは、予想以上の戦闘能力を発揮する才人に驚きはしましたが、動揺などはしません。

すぐに追加のゴーレムを召喚して、別の方向から才人に襲いかからせます。

メイジとしてはトライアングルの上位にいるギーシュは、その気になれば数十体ものワルキューレを生成可能ですが、それではコントロールが鈍るので、一度に五体ほどに届けて四方から連続して才人に攻撃を行っていました。

才人は二体目のワルキューレを槍で撃破しますが、その動きの素人さを付け込まれて、数発の攻撃を受けていました。

かなりの部分を鎧でカバーしているようでしたが、それなりの痛覚は伝わっているようです。

才人は、少し顔を歪めます。

「基礎能力はあるみたいだね。だが、素人にもほどがあるね」

「うるさい！」

そのまま槍を使うと不利になる事に気が付いた才人は、槍を捨てると、今度は腰に差した刀を抜きます。

素人の私が作ったので切れ味などは期待できませんが、固定化がかかった刀は、ワルキューレを紙のように容易く切り裂いてしまいました。

「これなら行けるぞ！」

「その勢いが続くといいね」

それからの戦いは、完全な消耗戦へとなりました。

ギーシュは才人に倒されたワルキューレの生成を行い、才人は刀と振るい、ナイフを投げてワルキューレを潰して行く。

ギーシュの魔力が尽きるか？

時折り攻撃を食らう才人の体力が尽きるか？

「どうやって才人を助けようかと思っていた私には、完全に予想外の展開でした。」

「バカな！ 何でそんなに体力が続くんだ！」

一方、ギーシュの方も、次第に動揺を隠せなくなっていました。多少腕の立つ剣士でも、自分ほどの魔力を持つメイジのゴーレムに飽和攻撃を受けたら体力が持たずに負けてしまうはずなのに、いまだに才人が倒れずに刀を振り回していたからです。

「ええいつ！ 一気に形を付けてやる！」

「（ギーシュ、それはしては駄目だ）」

才人が無限の体力を持っているのではと勘違いをしたギーシュが、ここで大きなミスを犯します。

彼は、一度に具現化させるワルキューレの数を一気に倍の十体にしてしまったからです。

ですが、これは愚策でしかありません。

一度に十体全部が才人に攻撃できるわけでもないのです、待機させている分の魔力を無駄に消費しますし、数が増えてコントロールが甘くなる部分もあります。

それに、才人は実は限界を迎えつつあります。

鎧で防ぎきれしていない分のダメージが徐々に蓄積し始めていて、動作が最初に比べると鈍り始めたからです。

ギーシュは、焦らずに五体のワルキューレで攻撃を続けるべきでした。

「倒れる！」

「もう作り出すなよ！」

才人とギーシュの魔力と体力は、遂に限界を迎えます。

これで何十体目かもわからないワルキューレを生成した瞬間に、魔力の尽きたギーシュが気絶して倒れ。

自分を囲んでいたワルキューレが消滅して、気の抜けた才人もそのまま倒れて気絶してしまっただのです。

「両者戦闘不能だな。引き分けだ」

私は二人の状態を確認してから、この勝負が引き分けであった事を野次馬の生徒達に告げます。

「誰か、ギーシュを部屋に運んでくれないか？」

私は、気絶した才人を魔法で浮かせながら、ギーシュの友人達に彼の面倒を頼みます。

本当であれば私がそれを行うのが筋なのでしょうが、私達は他の兄弟とは違うのです。

きつと私がギーシュを運んでも、彼は喜ぶどころか激怒するだけでしょう。

「わかった。僕達で運んでおこう」

「すまないな」

「いや、仕方が無い事だよ」

同じく気絶したギーシュを魔法で運んでいるレイナールとギムリに話しかけてから、私達はヴェストリの広場をあとにします。

「おい、あのギーシュが平民と引き分けたぞ」

「ギーシュは、実は弱かったのか？」

野次馬達の噂話を背中に聞きながら、私は気絶した才人を心配そうに見つめるルイズと一緒に彼女の寮の部屋へと向かうのでした。

十六話

「やあ、おはよう。ルイズ」

「おはよう、ティーボ」

「才人は目を醒ましたか？」

「ええ」

ギーシュと才人の決闘騒ぎから二日後。

朝の教室で、私はルイズに才人の様子を尋ねます。

決闘終了後、気絶した才人にすぐに私が準備していた秘薬やポーションを投薬したのですが、結局彼は、翌日は丸一日眠りっ放しだったようです。

同じくギーシュも魔力を完全に使い切ってしまったので、前日は授業を完全に休んでいました。

「全く……。貴族となんて決闘して。あのバカ使い魔が……」

「それでも才人は、御主人様に暴言を吐いた男とちゃんと引き分けて見せたじゃないか」

「おかげで、外野が煩いけどね」

ルイズの召喚した平民が、ギーシュと決闘をして引き分けた。

この事件の後の、他の生徒達の感想には様々な物がありました。

『平民にしては、やるじゃないか』というものが一番多く。

次に、『ギーシュも案外だらしない』という意見も多いようです。父の威光を利用して、腹違いとはいえ実の弟を無理して中傷していたツケが、今ここで出ているのかもしれない。

それと、実家から仕送りを減らされて、以前ほどの勢いが無いというのもですかね。

金が減った分、明らかに交友関係が細っています。

この学院に通っている大半の生徒達はトリスティン貴族であり、最初は本妻の子供であるギーシュに気を使って、妾の子供である私を無視していたものの、次第に実情がわかって今度はどうやって私に近付こうか考えているのかもしれない。

貴族には魔法も大切なかもしれませんが、実はお金も大切ですからね。

いくら凄腕のメイジでも、金が無ければ金を持っている平民の用心棒なんて話もありますから。

実際に、私は稼いでる人間ですし。

「俺の渡した薬は、役に立っただろうか？」

「ええ、良く効いたわ」

私には、母が自作して送ってくれた物や、試しに自分で自作してみた物など。

自分や家臣用に、薬やポーションなどを備蓄していたので、それをルイズに渡していたのです。

「ティーボは、本当に器用よね」

「母に教わってね。傷薬とかはソコソコ作れる」

とはいえ、やはり大半が母から送られて来た物ですが。

私では経験が浅くて、母やモンモランシーのようには上手く行かない事も多く、どちらかと言うと材料供給面での貢献が主だったりしたので。

それに、才人が大怪我でもしていたらもっと高級な薬が必要だったと思うのですが、幸いにして鎧の効果で思ったほどの怪我はしていませんでした。

骨折でもしていたら大変だったのですが、打ち身・捻挫くらいなら私が供与した薬で十分に大丈夫ですから。

その代わりに、チタン合金製の鎧はベコベコに凹んでいました。錬金の応用魔法で、直すのはとても簡単でしたけど。

「本当に助かったわ」

「まあ、俺も少し煽った部分もあるし」

私は、そう言いながらもルイズに薬代金の請求書を渡します。市価よりは遙かに安いですが、やはりそれなりの金額が書かれています。

「えーと、ティーボは気が済んだのかしら？」

ルイズの言う気の済んだは、あのギーシュが才人と決闘をして引き分けてしまった事を言ったのでしょうか。

そう言われると、少しギーシュも哀れだなと思うのですが、それとこれとは話が別です。

特に値引きも無しに、ルイズに請求書を渡していました。

「ヴァリエール公爵のご令嬢が、値引きは無いでしょう」

「実は、予想よりも金額が低かったんだけど。今は、手持ちが無いわ」

それは、材料費しか請求していないからですね。

私は、薬で儲けようとは思わないですから。

「何も、今すぐに払えとは言っていないよ」

私も、そこまで守銭奴でもありませんしね。

というか、教室に金を持ち歩く貴族などまずいないでしょうし。

「後で払うわ」

「毎度あり」

朝はこんな感じでルイズと話をした私でしたが、放課後に錬金小屋に向かうと、そこでは才人がシエスタからオニギリを作って貰っていました。

「何だ？ 飯抜きか？」

「ルイズに、無しにされたんだよ」

「お前も、難儀な奴だな」

性別も、生まれた場所も、家柄も、文化・風習も全て違う御主人様と使い魔との生活は、色々といざこざが発生するようでした。

秘薬のせいですぐに元気になった才人でしたが、いきなり昼飯抜きの罰をルイズから受けたようです。

「何をしたんだ？」

「洗濯なんて、した事が無いからさ」

洗濯機すら碌に使った事が無い才人に、いきなりタライと洗濯板での洗濯は難しかったようです。

それで、数枚のシャツを駄目にしてお昼を抜かれましたようです。

「それで、シエスタからオニギリを貰ってたんだ。まさか、ここでこれが食べられるとは」

まだ才人がここに来てから二日ほどですが、シエスタの作ったオニギリを美味しそうに食べています。

「このお料理は、曾祖父さんもたまに作って食べていましたよ」

シエスタの話によると、シエスタの曾祖父である佐々木少尉は、数年に一度市場では滅多に出ずに高級品扱いであるお米を入手して来て、これでオニギリを作って食べていたそうです。

故郷に帰れない身なので、せめてたまの食事くらいはという事だったのでしょう。

「わざわざ栽培させているのは、俺くらいだけど」

栽培専用に農家数件を雇い、水田と水路の整備と苗を育てるハウスの建設にと、私が珍しく先頭に立って色々行った事業の一つ

でした。

市場で買い求めた種籾には長粒種とジャポニカ米の両方があり、品種改良から始めないで済んだのは幸いでしたが。

今では、麦よりも土地単位辺りの収穫量が良いので、次第に真似をして栽培を始める農家が増えている状態です。

基本的な食べ方のマニユアルを、領内の農民達に伝授したのも良かったかもしれないね。

それと、実は水田での米の栽培で一番引つかかるのは水の確保なのですが、このトリステインにはラグドリアン湖とそこに済む水の精霊との盟約があるので、実は水の確保にそれほど苦労しないで農作物が不作になり難いという好条件がありました。

ただし、ラグドリアン湖から網の目のように広がる支線の川から治水事業を行うかどうかは、その領地を治める貴族の差配一つです。グラモン領では、諸侯軍幹部の家臣達が塹壕や砦建設の訓練と称して定期的に治水工事を行っていました。

軍にばかり金を使うので、人足を雇用して公共工事が出来ないからですね。

良い事をしているのに、理由が貧乏臭いのが私の父の特徴でもあります。

「ここで、お米が食べられるとはな」

「サイトさんは、私の曾祖父と同じ場所から来たんですか？」

「多分、そうだと思うよ」

「では、サイトさんの国には竜の羽衣が一杯あるんですか？」

「竜の羽衣？」

シエスタの指差す先には、私は整備して安置している戦闘機の姿が映っていました。

「戦闘機だ」

「才人、機種はわかるか？」

才人がオニギリを完食後、私は才人にシエスタの曾祖父の持ち物であった戦闘機を彼に見せていました。

「えっ？ 日の丸だから、ゼロ戦じゃないの？」

「いや、他にも無かったか？ 隼とか、疾風とか、紫電改とか」

そこまで戦時中の戦闘機に詳しくなかった私でしたので、才人が唯一の頼りだったのですが、どうやら才人もそこまでの知識は無いようでした。

「これ、飛べるのか？」

「自分なりに整備して、固定化はかけ直した。ガソリンとエンジンオイルも作ってみた。だけど、車じゃないからな。試運転は危険だろっ」

「そつだよな」

私の話になんてしながら才人が戦闘機に触れると、突如彼の左手の甲が光り始めました。

確か、ルイズとのコントラクト・サーヴァントで浮かび上がったルーンのはずです。

「紫電三一乙型。紫電二一甲型以降の機体を紫電改と称する事が多いが、この機体は紫電二一甲型の機首に7・7mm機銃二丁を追加装備した試作機である」

「お前、急に詳しくなつたな」

「それが不思議なんだ。戦闘機に触った瞬間に、色々情報が流れて来てさ」

才人の話を総合すると、紫電三一乙型は、紫電二一甲型の試作機である13mm機首機銃装備の紫電三一型の更に派生機であったが、この機体が試作された資料は既に完全に消失しているとの事でした。

「カタログスペックは、機首7・7mm機銃二丁弾薬数七百と、翼内20mm機銃四丁弾薬数九百。最高速度594キロ。航続距離は、ドロップタンク装備で約二千四百キロ」

才人は、頭に流れてくると言う紫電三一乙型のスペックを私に教えてくれます。

「便利な能力だな」

「でも、これは飛ばないってさ。エンジンオイルと燃料が入って無

「いつて」

「ああ、それなら自作している」

私は、安置されている紫電改の隣に置かれた燃料タンクと、エンジンオイルの入ったジュラルミンタンクの存在を才人に指差します。

「おおっ！ 準備してあるな！ ところで、水メタノール噴射装置用の水は？」

「ああ、そんな物もあるんだよな」

私は、エンジンなどの技術者では無かったのであまり詳しくはないのですが。

このような、第二次世界大戦レベルのレシプロ機のエンジンを効率良く回すために、吸入気に水を噴射してその気化熱によって吸入気を冷却し。

エンジンノックを抑える装置が、水メタノール噴射装置です。

他にエンジンノックを抑える手段として、オクタン化の高い燃料を使うという方法もありましたが。

日本やドイツなどの枢軸国側ではそれを用意できなかったため、大戦後期に高馬力エンジンを使う際には、必ずこの装置が搭載されたそうです。

それと、過給機付きのエンジンの場合は、過給機によって圧縮された吸気は温度が上昇するために、特に必要とされるそうです。

航空用エンジンで用いる場合、高空での凍結を防ぐ目的でメタノールが混ぜられるために水メタノール噴射と言つのです。

ですが、これは実は私が苦労してオクタン化が高いガソリンを錬金したので必要は無いと思います。

実は、アメリカ軍のF-6の後期型の機体には装備されていたようですが、それはアメリカがお金持ちの国だったからでしょう。

この紫電改には、エンジンノック対策として私がハイオクタン化ガソリンや高性能オイルを用意しました。

それと、まず存在しないであろう高性能な敵機の存在や、水を噴射するのでシリンダーなどが早く腐食してしまう事や、整備に手間がかかる事など。

私は、次第にこの装置を上手く外せないかと考え始めていました。空いている場所に、燃料タンクを増設して航続距離を伸ばすという改造もありですね。

「あれ？ という事はデッドウェイトになるのか？ 水メタノール噴射装置」

確か、水メタノール噴射装置は100キロほどはあつたはずですが、外せば速度と航続距離の延長が望めるかもしれませんが、下手にバランスを崩すと墜落の原因にもなりかねません。

そして、その辺の事がわかるのは才人だけなのです。

「その前に、本当に大丈夫なのかどうかわからないけどな」

「と言うと？」

才人が言うには、実際に燃料などを搭載して触ってみたいとわからないそうです。

「……。ルイズに頼むか……」

私は、その日の夜にルイズに才人を貸してくれるように頼みます。

絶対に自分では飛ばせない戦闘機ですが、こうなったら本当に飛ぶところを見たいのです。

それと、自分では飛ばせなくても、後ろの乗っけて貰うという事も可能でした。

確か、操縦席の後ろには通信機が搭載されているはずですが、これもデットウェイトなのですから。

通信しようにも、通信相手がいませんし。

「えっ？ サイトを貸して欲しいの？」

「今日の朝の請求を、チャラにするからさ。洗濯や部屋の掃除は、シエスタに頼んでくれ。そもそも、才人にやらせても効率悪いだろうっ？」

「それはそうだけど……。一体、何をしようとしているの？」

「竜の羽衣を飛ばすのさ！」

私の決意を、ルイズが興味無さそうに聞いています。

本当、女性というのは夢が無くて困りますよね。

才人は貸して貰える事になったので、良しとする事にしましたが。

翌日から、私と才人は紫電改の改造と修理と整備作業に没頭するようになります。

「足は周りは、もっと強化した方が良いと思う」

「チタン合金製に変えてしまうか……。それよりも、水メタノール噴射装置はわかるか？ 正確に外さないと駄目なんだ」

「えーと、これだな」

まずは、操縦席後部の通信機を外して、そこに私が錬金で作った後部座席を取り付けて二人乗りにします。

更に、才人の能力で探し当てた水メタノール噴射装置装置を取り外し。

あまり工作精度を必要としない部品や装置の材質を、チタン合金や高品質アルミ合金に錬金で変換します。

「その内に、外部の素材を炭素素材製にしようかな。まだ研究していないけど」

「いきなり冒険しないでくれよ。俺が最初に飛ばすわけだし」

他にも、錬金の魔法を使って精密な部分の部品の摩り合わせを行います。

昔で言うところの、工作精度の低い補給品に現地の整備兵がヤスリがけをして調整をするという作業です。

ですが、この初めての作業に私は大きく苦労しました。

才人に紫電改を触ったままにして貰い、私が微妙に部品の大きさを変えたり、部品の不自然な凸凹やバリなどを取り除いていくのです。

その作業で性能が落ちたり、飛行不能になったらまたやり直します。

他にも、見落としていた部品の材質変更や不純物を取り除いて強度を上げたりといった地味な作業を繰り返すと、私はこの作業に没

頭するために三日間学院の授業をサボりました。
仕事の錬金は休めないなので、学院の授業をサボるしか無かったです。

当然、先生に怒られる事となります。

「ミスタ・グラモン。君は優秀な生徒なのに、何をして……。これは、一体何なのです？」

私を注意に来たはずのミスタ・コルベールが、同志となった瞬間でした。

「私とミスタ・グラモンで作業を分担すれば、ミスタ・グラモンが学院の授業をサボらなくても済むはずです」

四日目の放課後から、私達三人による紫電改の改造と調整が始まります。

私が事前に書いておいた、部品の工作精度や材料の不純物などの問題。

実は、私よりもミスタ・コルベールの方が上手に部品の摩り合わせを行っていました。

「1サントの一万分の一単位での部品精度に共通規格ですか。それに、このエンジンという機械の緻密な事と言ったら」

ミスタ・コルベールは紫電改に感心していましたが、実はこの時代の日本にはそれが出来ていません。

そのために、同じ機体なのに稼働率から時には性能まで違っていました。

紫電改には夢があるし、カタログスペックも悪くないのですが、もしこれがドイツやアメリカの戦闘機であつたら、私達はここまで苦勞しなかつたのかもしれない。

それでも、私達はめげずに改良を続けます。

ですが、この紫電改には一つラッキーな事がありました。

それは、本来であれば切り離すはずの落下増槽タンクが残つていた事です。

「ミスタ・コルベール。同じ物を作れないでしょうか？」

「問題は工作精度です。特に、落下増槽取り付け部とドロップタンク支持導管の大きさが違えば、燃料漏れで危険ですから」

僅かな期間で紫電改の構造や原理に詳しくなつていたミスタ・コルベールが、一番の懸念を口にします。

貴重なドロップタンクを複製のために一度バラさないといけないので、余計に慎重になつているのだと思います。

「ミスタ・コルベール、チャレンジ無くして進歩はありえませんかよ！」

「そうでした。そうでしたね。ミスタ・グラモン」

私達は、貴重なドロップタンクを分解してその構造を理解すると共に、ジュラルミン合金やマグネシウム合金などを使ってドロップタンクの錬金を行います。

数回の失敗はありましたが、何とか使えるレベルのドロップタン

クを五個製造に成功しました。

「才人、燃料が無くなっても捨てて来るなよ」

「本来は、捨てる物なんだろう？」

そしてこのタンクの内側に、被弾した際に燃料漏れを防ぐゴム張りを行って、水メタノール噴射装置を外した場所にも設置します。

これで航続距離が増えれば良いのですが。

「これならば、どうでしょうか？」

「えーと、最高速度687キロ。航続距離は二千八百キロですね」

才人が、三人で一週間かけて改造した紫電改を触ってその状態を確認します。

しかし、本当に便利な能力です。

私達の整備や改造が駄目だと、すぐに動かないと判定してくれるのですから。

おかげで、手探りながらも無事に機体の改造に成功します。

物凄く性能が上がったようですが、戦後に日本軍の戦闘機を米軍の整備と高オクタン化の燃料で飛ばしたら高性能だったらしいので、別段不思議な事でも無いと思う私でした。

「後は、武器か」

翼内の20ミリ機銃と、機首内部の7・7ミリ機銃の本隊と弾薬

も一個一個ちゃんと確認を行います。

射撃をする機会はないのかもしれませんが、終戦間近には工作精度が落ちて砲身内爆発でパイロットが無駄に死んだらしいので、明らかにバリが付いている物や、形がおかしい物を丁寧に直して行きます。

「……完成だ!」

最後に強固な固定化をかけて、次からの整備の簡略化を図ります。この固定化の魔法が無ければ、私も紫電改を稼動状態に持つて行くとは思わなかったでしょうし。

「よーし! 燃料を入れて飛ばすぞ!」

「楽しみですよ」

「なぜか操縦できる気がするんだよ!」

その日は既に日が暮れていたので、翌日の放課後に遂に紫電改を飛ばす事にします。

紫電改が置いてある錬金小屋の前の草原を錬金で全て舗装して、才人が操縦を、後にはまずはオーナーである私が乗ります。

シエスタの曾祖父が残してくれたゴーグルや飛行服を錬金で複製して着込み、ミスタ・コルベールにプロペラを回して貰ってからいよいよスタートです。

「ダーリンは、一週間もこれを修理していたのね。でも男って、こういう物が好きよね」

「本当に飛ぶのかしら?」

「本当に飛べたら、私達も乗せてね」

「興味ある」

いつもの女性陣四人も見送るなか、才人の操縦する紫電改は特に危なげもなく空に舞い上がります。

「外した装置関係のバランスも大丈夫か」

「でも、不思議だな。何で、俺が操縦できるんだ？」

「そういうルーンなんじゃないのか？」

才人は、まるでベテランのパイロットのように各種の機動操作を行います。

更に高度を上にあげるのですが、操縦席に装備されている酸素ボンベが役に立ちました。

才人は以前から装備されていた物を、私は後部座席用にミスタ・コルベールと苦勞して吸入装置を複製したのです。

中身の液体酸素は、これは簡単に空気から錬金できました。

「才人、最高速度を試したい」

「オーケー」

高度五千メートルほどで、才人は紫電改の最高速度テストを実施します。

コックピット内部のスピードメーターは徐々に上がって域、最終的には375ノット付近を示しました。

「約695キロだ」

「大成功だな！」

十分に満足した私を降ろし、才人はミスタ・コルベールやルイズ達を次々と乗せて飛行を続けます。

彼らは、紫電改のスピードに驚き満足しているようでした。

「ミスタ・グラモン。これからも、整備や燃料の錬金で協力するよ。いやあ、面白い行事に参加できたな」

大満足のミスタ・コルベールの笑顔と共に紫電改は復活を遂げ、私は他にも同じような物があれば良いなと感じてしまいます。

「（そういえば、明日は虚無の曜日か。トリスタニアの町で本でも探しに行こうかな？）」

このハルケギニアには、どういわけか東方からという名目で様々な地球の物産が入手可能なので、それを明日は手に入れようと考える私でした。

十七話

「才人とルイズは、これからどうするんだ？」

「私は、才人に剣を買うのよ」

「俺から買うと言う選択肢も……。ああ、俺のは俄か造りだったな。止めとけ」

「向こうに、良い剣が無かったら相談するわ」

私、才人、ミスタ・コルベールによる紫電改改造計画と、その初飛行に成功した次の日。

この日は虚無の曜日で学院の授業は休みであり、私は才人やルイズと一緒に馬で王都トリスタニアを訪れていました。

過去に数回、ここには頼まれた宝石類などを収めに来た事があるのですが、私用では初めての来訪です。

ですが、前世で東京に住んでいた私にとっては、ここは大した場所でもありません。

トリステイン貴族としては失格なのでしょうが、一国の首都とは思えないその狭さにこの国の将来が心配です。

父も、万が一の際には、向こうに早めに取り入ってくれと良いのですが。

向こうとは、将来トリステインに侵略してくるかもしれないガリアやゲルマニアの事です。

王家に殉じてとかしないで、早く降伏してねという事ですな。

私の中の王家像は、見栄を張るために各国の要人などに送る贈答

品を私に安く作らせている程度の認識しかありませんから。

「先代王の死後、王が不在とか国としてはフザけていますし。

一応のトップ？であるアンリエッタ王女は綺麗ですけど、世界は広いですからね。

あのくらいの美女であれば、探せばいると思うのですよ。

私とどうこうなるかは、まるで別問題ですけどね。

それに、問題となるのは彼女の統治者としての能力ですし。

才能があっても、私と同じ年の小娘ですしね。

いきなり力量発揮とかは、まず不可能でしょう。

「私達は、武器屋に行くわ」

「俺は掘り出し物を探すか」

私からの借り物ではなくて、才人に自分が購入した剣を持たせた
いというルイズ達と別れた私は、顔見知りの宝石屋でグラントが排
泄した宝石を売ってお金にし、色々な店を巡って歩きます。

良く見ると、雑貨屋に古びたコマやケンダムが売られていたりと
確かに、この世界には地球から流れ込んでいる物品が多数存在す
るようです。

さすがに武器の類は存在しないようですが、時折りどこかで見
たような物品が籠に盛られて売られています。

値段は、本当にピンキリです。

「貴族様、この服などはいかがですか？ 今ならお安くしますが…

…」

どう見ても、リクルートスーツがセットで十エキュールで売られていました。

他にも、ナース服やメイド服でもスカートがミニだったり。

セーラー服、巫女服、婦人警官、自衛隊など。

ありとあらゆる制服が吊るされています。

ここは一体、どこのコスプレショップなのでしょう？

「全部買つよ」

「まいどあり！」

他にも、私の一番の知識の源泉である本屋にも寄って帰ります。

ハルケギニアにおける本とはやはり高い物なのですが、それを上回る値段なのが、地球の文字で書かれた本でしょう。

たまにしか出回らないので貴重なうえに、何が書いてあるのかもわからないのに、好事家の貴族などに収集家が少なからず存在しているからです。

「全部買つよ」

今日は、漫画に絵本に週刊誌に芸能人のエッセイにと、ほぼ収穫はゼロでした。

それでも、後で収集家が見える書籍を持っていた時に交換用に使えるので、キープしておく事にします。

唯一の収穫は、趣味の家庭菜園入門くらいですかね。

これを翻訳すれば、グラモン領の農業の発展に役に立つかもしれませぬ。

「まいどあり」

地球産の服に本にと、今日の出費は合計で二千エキュールほど。それでも、まだグラントが探して来た宝石は余っています。本当に、彼は私に相応しい使い魔ですね。

買い物を終えて私が町を歩いていると、前からルイズと才人が姿を現しました。

「ルイズか。剣は購入したのか？」

「ええ。でも、こんなにボロい剣を選んじゃって……」

ルイズは、わざわざ才人がワゴンセール品の錆び付いた剣を選んだ事に不満があるようでした。

「でもさ。こいつ、喋るんだぜ」

「インテリジェンスソードなのか？」

前世では、コンピューターによる人工知能があったように、この世界では魔法の産物で知能があつて喋る物品などが存在します。

どうやら、ボロ剣に見せかけて掘り出し物を見つけて来たらしい才人でした。

「俺っちは、デルフリンガーってんだ。ヨロシクな、貴族の兄ちゃん」

デルフリンガーと名乗った剣は、カチャカチャと音を立てながら自己紹介をしました。

「本当に喋るんだな。初めて見た」

その後は、三人で昼食を取ってから学院へと戻る私達でしたが。

「（どこかに車とか無いのかね？）」

紫電改の影響で、自分の運転できる文明の利器が欲しくなってしまっただけで、もう私でした。

「えっ？ 使い魔の品評会？ そんな行事もあつたな」

「ダーリンは、グラントに何をさせるのかしら？」

買い物に出かけた虚無の日の翌日、私は教室でキュルケから明後日に行われる予定の使い魔の品評会の話聞いていました。それと、そろそろダーリンは止めて欲しいです。

「キュルケのフレームは、火を吐けば様になるからなあ」

「グラントが地面から出て来れば様になるわよ」

「様になると言うか、大騒ぎになる」

グラントは何分にも巨体過ぎるので、派手なパフォーマンスは禁止でしょう。

周辺に与える被害が、尋常ではないでしょうし。

それに今では、周辺の農民が持って来る草や木の枝を食べて腐葉

土を生産するグラントは人気者です。

私にも、毎日のように探して来た鉱石や宝石などをくれますし。

なので、その活動報告をすれば良いと思うのです。

もし姿を見なければ、小屋まで見に来れば良いのですから。

「別に、優勝なんてしなくてもいいし」

「ダーリンは欲が無いのね。もしかして、私を優勝させるために？」

「なぜそうなる……」

そして、その日の放課後。

学院の中庭では、多くの二年生達が自分の使い魔に芸を仕込んでいました。

唯一の例外はいましたけど。

「タバサは、練習とかしないのか？」

「私のシルフィードは、飛べば様になる」

石の壁に寄りかかりながら本を読んでいるタバサが、私の質問に答えます。

彼女は幼生ながらも風竜を召喚していたので、飛ばせば芸として十分に通用します。

「ティーボのグラントこそ、地面から顔を出せば様になる」

「キュルケと同じ事を言ってるな。それだと迷惑だから、活動報告

だけをする」

「そう」

二人で話をしていると、上空から爆音が聞こえて来ます。

「竜の羽衣」

「ルイズが貸せつてさ」

ルイズは今回の使い魔の品評会で、才人に紫電改を飛ばさせる事を計画していました。

前日に剣を買い与えていたので、剣技でも披露するのかと思ったのですが、どういうわけか才人に剣を振らせてみると、デルフリンガーの重さに振り回されてヘツポコにしか見えません。

あの能力は、実戦専用なのでしょうか？

というわけで、ルイズが燃料・整備費を負担するという条件で、私は彼女に紫電改をレンタルしていました。

才人は、紫電改の後にルイズを乗せて明日の飛行プログラムの打ち合わせでもしているのでしょうか。

「優勝するかもしれない」

「どうだろうな？」

午後の一時をタバサとの世間話で過ごす私でしたが、その様子をやはりギーシュが苦々しく見つめていました。

というか、『せめて、わからないようにやってくれよ』というの

は、私の贅沢な悩みなんですかね？
そんな事を、ふと私は考えてしまつたのです。

「アンリエッタ様のおなりいー！」

翌日、魔法学院は行幸するアンリエッタ王女を迎えるべく完璧な準備を整え、生徒やオスマン学院長を始めとする教員達が正面入り口に集合して彼女を待ち受けます。

彼女はユニコーンが引く馬車に乗り、他にも数台の護衛や随伴員達を馬車と共に我々の前に姿を現していました。

「大した事ないわね。私の方が、よっぽど美人よ」

「それは、その男性によつて答えが変わるからな」

「ダーリンは、私と姫様のどちらが綺麗だと思う？」

「答え難い事を……」

「二人とも、静かにしないでよ」

私とキュルケを制しながら、ルイズは馬車から降りるアンリエッタ王女から目を離しません。

前に聞いた話によると、二人は幼い頃から遊び友達であったそうです。

学院に入学するまでに、モンモランシーとルイズしか友達がいなかった私とは大違いですね。

私が錬金で忙しかったという理由もあるのですが。

「サイト、わかってるわね？」

「ちゃんと、言われた通りに飛ばしますですよ」

既に飛行服姿の才人が、ルイズに丁寧に答えていました。

どうやら、これでアンリエッタ王女の高評価を得られたら、自分の待遇を少し上げてくれるようにお願いしているらしいです。

そして、無事に到着したアンリエッタ王女一行は、学院の中庭に準備されている貴賓席へと移動し、そこで使い魔お披露目の品評会を見学する事になります。

「新二年生のみなさんは、準備をお願いします」

私達二年生に、使い魔の準備をするように教師達から指示が入ります。

二年生達は事前に決められた順番通りに、使い魔をオスマン学院長やアンリエッタ王女達に披露していきます。

フクロウや黒猫と言った、魔法使いの中ではオーソドックスなものから、バグベアーなどの変わったものまで。

更にお披露目は進み、ギーシュが例のヴェルダンデというモグラで塹壕を掘らせていました。

他にも、タバサがシルフィードで飛行したり、キュルケがフレイルムに炎を吐かせたりと、こちら辺になつてくると優勝候補者同士の

争いという感じになっていました。

「いいのよ。私のロビンは可愛いから」

「カエルの芸では地味だからな」

一人だけ、モンモランシーは落ち込んでいましたが。

「続いて、ミスタ・グラモン。錬金殿の方ですな」

遂に私の出番が来たのですが、やはりグラントは呼べません。

何しろ大き過ぎるので、計算もしないでそこいらに穴を開けると地盤沈下の原因になってしまうからです。

そこで、グラントに関する説明と、その効能について説明をしました。

「近隣の農家に肥料を提供し、私にもこのように宝石を与えてくれます」

私は、グラントから貰って加工した宝石類をアンリエッタ王女に見せます。

とうかが、見せるだけで済むはずはありません。

指輪やイヤリング、ブレスレットに加工された品々を献上する羽目になります。

これも、貧乏な小国に生まれて来た不幸かもしれないですね。

売れば、お金になるんですけどね。

「錬金殿の、いつもの忠誠に感謝を」

アンリエッタ王女は私にお礼を述べますが、当然それを見ている

ギーシュは不機嫌そのものです。

ギーシュは、なぜか自分の使い魔を主に戦場で役に立つ事にしか使いません。

私に対抗しての事なのでしょうが。

本当は、彼の使い魔であるジャイアントモールも宝石を捜してくる能力ではピカーなんですけどね。

ただ、グラントには勝てないので、わざと何も言わなかったのか
もしれませんが。

「続いて、ミス・ヴァリエール」

「はいっ！」

いよいよ、ルイズの順番です。

彼女は一人で会場の舞台に立ち、みんなの前で自分の使い魔の説明をします。

「人間を召喚したのですか？ ルイズ、あなたはやっぱり変わっていますね」

そう幼馴染のルイズに話しかけるアンリエッタ王女でしたが、すぐに彼女の声がかき消されるほどの爆音と共に、上空に才人の操縦する紫電改が姿を現します。

才人は十分ほど飛行を続けてから着陸し、飛行服姿のままアンリエッタ王女の前に姿を現します。

「あんなに凄い物に乗れる使い魔さんですか」

アンリエッタ王女は、ルイズと才人に賞賛の言葉を贈っていました。

「姫様。ですがこの竜の羽衣は、ティーボの所有物なんです」

ルイズは、私が竜の羽衣を見付けて来て、それを飛ばすのに必要な修理や物資の準備をした事をアンリエッタ王女に伝えます。

それと、それにミスタ・コルベールと才人が力を貸している事です。

「そうですね。さすがは、錬金殿ですね」

これで全ての使い魔のお披露目が終了し、今年の順位が決定します。

一位は、やはり紫電改の飛行でアンリエッタ王女の度肝を抜いた才人の主人であるルイズでした。

ルイズは、アンリエッタ王女自ら記念のティアラを頭の上に載せて貰って上機嫌になっています。

二位は風竜のシルフィードを飛ばしたタバサで、三位はフレームに炎を吐かせたキュルケと。

見た目そのままの順位は決定します。

「第四位は、使い魔のグラントを持つミスタ・グラモンです」

以外にも、私が入賞をしたようです。

どうやら、アンリエッタ王女の代わりに学院の外にいるグラントを見に行った家臣がいて、その口利きで入賞したらしいです。

「確かにあの大きさの使い魔では、会場に連れて来るのは無理ですね。とても珍しい使い魔を見させていただきました」

その後は、十位くらいまでの生徒の発表がありました。どうやら、兄のギーシユも入賞はしたらしいのですが、また彼は不機嫌そうな表情を私に見せていました。

それもそうでしょう。

また、弟である私に負けてしまったのですから。

ただ、そんな事を本当に気にしていたらキリがありません。適当に流す事にします。

無事に使い魔の発表会が終了し、アンリエッタ王女を乗せた馬車が王城へと戻っていきます。

その日は午後の授業もお休みだったので、いつものように錬金をして自室に戻って研究をして就寝したのですが、いきなり夜中にアシルに叩き起こされました。

「アシル、こんな夜中に何だ？」

「それが、土くれのフーケが現れたとかで。とにかく、起きてくださいー！」

土くれのフーケとは、最近トリスティンを騒がせている大盗賊の事でした。

富裕な貴族の家からお宝を盗んでメッセージを残していくのが特徴の盗賊だったので、アシルは父から注意するように言われていたらしいですね。

私の周りには、多くの貴金属や宝石。

そして、多額の金貨などがありますから。

ですが、今のところはグラモン家には被害は出ていませんでした。

武の家であるグラモン家の警備が盗賊如きに破られては恥だと、家臣達が二十四時間交代で厳重な警備に当たっているからだそうです。

当然、魔法学院隣の諸施設でも、二十四時間の警備体制が私の家臣達によって敷かれていました。

普通の盗賊ならば、わざわざメイジや衛兵が見張りをしている場所から盗みを働かないと思うので、今のところは私達の被害はゼロでした。

「うちの警備の隙を突いたのか？」

「いえ、実は被害はうちでは無いのです」

アシルに促されて外を見ると、学院の宝物庫が一部破壊され、学院の外に向かって巨大なゴーレムが歩いている場面が視界に入ります。

「もう盗まれてしまったらしいな」

「ええ、しかし大きいゴーレムですね。トライアングルの上位クラスの実力があるかと」

アシルの予測に頷く私ですが、既に魔法学院のお宝が盗まれてしまった以上は、何かをする余裕ありません。

眠い目を擦りながらモソモソと起き出して錬金小屋へと向かい、自分達の方に被害が無かったのかを確認するのが精々でした。

そして翌日、私は突如オスマン学院長からの呼び出しを受けます。

「そなたは、土くれを見たとか？」

「正確には、土くれの作った巨大なゴーレムをですわね」

オスマン学院長の質問に、私は正確に答えます。

「やれやれだ。卑しい弟は、自分の宝のみが大切で、ただ土くれを見送っただけだね」

「お前こそ、追跡はしなかったんだな」

なぜか一緒に呼び出されていたギーシュが私に嫌味を言い放ちますが、彼も土くれの追跡などはしていないのです。

ただ、夜中にたまたま起きて窓の外を見ていたという私と同じ状況だったので、目撃者という事で一緒に呼び出されていたのです。

「ところで、昨晚の宿直は誰だったかな？」

「はい、非常に申し上げ難いのですが……」

スクウエアメイジがかけた固定化によって、今まで一度も破られた事がない学院の宝物庫には、王家より預かった品々が多数収納されています。

なので、当然盗難を避ける意味で教師陣による宿直の仕事があったのですが、昨晚の当番であるミス・シユヴルーズは見事にそれをサボっていたらしいのです。

というか、今までに教師の誰もがちゃんと宿直をしていなかった

という事実が発覚したのでした。

「ミセス・シュヴルーズ、あなたがちゃんと宿直をしないから」

「ですが、それを言うともみなさんも……」

「下らない言い争いなどしている場合ではないぞ！」

責任を擦り付け合う教師達に対して、オスマン学院長のカミナリが落ちます。

「とにかく、いち早く逃走中のフーケを探し出すのじゃ」

その後、この場にはいなかったオスマン学院長の秘書であるミス・ロングビルが、タイミング良くフーケの情報を掴んで来ます。

オスマン学院長は、王家に通報している間に逃げられる可能性がある、教師達にフーケの捕縛を任せようとはしますが、自ら志願する者は誰もいませんでした。

ミスタ・ギトーやミスタ・コルベールなどがいるので、怖気付いたという事はないのですが、応援も呼ばないで教師だけにいかせようとするオスマン学院長に『ノー』で抗議しているのだと私は思いました。

預かっていた宝を盗まれたのですからこれは不祥事であり、一番責任があるのは間違いなくオスマン学院長でしょうし。

「ミス・ロングビルの情報によれば、ここより馬車で数時間の場所にある廃屋でフーケの目撃情報があったらしい。さあ、我こそはと思う者は杖を挙げるのじゃ」

ところが、教師陣で杖を挙げた者は、先ほど話に出たミスタ・ギトーとミスタ・コルベールだけでした。

「他にはいないのか？」

他の教師達は、老齡だつたり、ミセス・シュヴルーズのようによつても戦いには不向きだつたりと。

もし杖を挙げて、戦闘になつたらあまり役に立たないどころか、もしかすると、足を引つ張りかねない存在でした。

ここは、杖を挙げない方が正解かもしれません。

「二人では、何かがあつた際に困るであろうに」

「私が行きます！」

そこで、なぜか私達と一緒に呼び出されていたルイズが杖を挙げます。

昨晚の彼女は、ちょうど現場近くで魔法の訓練をしていたらしく、同じくオスマン学院長に呼ばれていたのです。

「ミス・ヴァリエール。確かに、そなたは爆殺の二つ名を持つ有名なメイジではあるが……」

爆発の魔法しか使えないものの、たまの休日には私や家臣達と一緒に出かけ、亜人退治などを行っているルイズは、次第にその二つ名が有名になりつつあります。

ですが、ヴァリエール公爵の娘を盗賊退治に出して何かがあつては困るのも事実でした。

オスマン学院長の責任問題になってしまいますし。

「それに、ミス・ヴァリエールが関わっても人数は三人じゃ。これでは厳しかろうて」

それと、彼女の使い魔である才人も入るのでしようが、彼はメイジではないという理由でオスマン学院長の中では無意識に戦力外とされていました。

いくらギーシュと引き分けたとはいえ、剣である巨大ゴーレムに立ち向かうのは危険ですし。

「オスマン学院長、このギーシュ・ド・グラモンにお任せあれ」

やはりと言うべきか。

ルイズの立候補に釣られて、ギーシュも杖をあげてしまいます。そして、オスマン学院長の視線は、なぜか私にも向いていました。

「……（俺にも行けっかよ！ お前が行けよ！ お前の責任なんだから！）」

「さすがは、武の一族であるグラモン家じゃの」

「（ジジイ、後で後悔させてやるからな！）」

結局ギーシュだけでなく、私までもがフーケ捕縛作戦に参加する事になってしまったのでした。

十八話

「正確には、フーケの捕縛が第一目標ではない。盗まれた破壊の杖を取り戻す事が第一目標なのだ」

「ですが、ミスタ・ギトー。あのフーケが噂通りの盗賊だったとして、そうすんなりと一度盗んだ物を手放すでしょうか？」

「つまりだ。結局は、フーケの捕縛を行わねばならないのだ」

オスマン学院長の命を受けて、ミスタ・コルベール、ミスタ・ギトー、ルイズ、才人、ギーシュ、私からなる、『土くれのフーケ追跡部隊』が編成され。

ミス・ロングビルが御者を務める馬車の上で、彼女が情報を聞いて来た森の奥深くにある廃屋へと向かいます。

「何で、俺が……」

ルイズが志願してしまったために、強制的に付き合わされた才人がブツブツと文句を言っています。

「あんたが、私の使い魔だからよ。使い魔は、ご主人様に付いて来るものなのよ」

「ティーボのグラントは？」

「グラントの場合は、付いて来ても色々大変だしな」

才人の質問に、私が答えます。

私の使い魔であるグラントは、常に主人と一緒にいられるようなタイプの使い魔ではありません。

いつもは、小屋の中で餌として貰った草木を食べて肥料としてのフンを排出し。

一日数時間は、地中に上手く張り巡らせた穴を通って石袋に沢山の鉱石や宝石の原石を詰めてくる。

おかげで、財政的には大分役に立っていましたが、このような任務に連れて来るのは不向きな使い魔でした。

「金稼ぎばかりのティーポにはお似合いだね」

「ギーシュのモグラも、本来は宝石の原石や鉱石の探査が得意な使い魔だぞ。ちゃんと使い魔は使いこなせよ」

「うるさい奴だな……」

ギーシュが、ヴェルダンテと名付けたジャイアントモールですが、本来であればジャイアントモールの方が鉱石の探索は上手なのです。特に宝石の原石では、ジャイアントモールは一度臭いを嗅いだ宝石の臭いは忘れないので、上手く働かせれば大金が稼げるはずなのです。

ただ、私を金の亡者として批判している手前、彼は自分の使い魔に宝石探しはさせていないようですが。

全くもって、勿体ない話ですけど。

「着きました。ここですね」

数時間で、私達を乗せた馬車は目的地である森に到着します。

私達は、馬車を置いてミス・ロングビルの案内で森の奥にある廃屋に到着します。

「ここに、フーケが？」

「情報ではそうですね」

「だが、人の気配は無いな」

すぐにミスタ・ギトーが、遠見や人の気配を探る魔法で小屋を観察します。

風の系統の魔法を使う者は人の気配などに敏感になるそうなので、こつこつという任務には最適でした。

「畏の気配も無いな」

続いて、廃屋のドアの前で素早く畏の有無もミスタ・ギトーは調べます。

さすがは、教師といったところでしょうか？

こつこつ事には慣れていらっしゃるらしく、何も言わなくてもこれらの作業を行っていました。

「次は小屋の捜索を行うべきなのだが、これは少人数の方がいいですね」

「そうですね。既にフーケが、こちらの様子を伺っている可能性が高い」

あとは小屋の中を調べないといけないのですが、ミスタ・コルベールとミスタ・ギトーは、小屋に入るの一人か二人に留めて、あ

との人間は小屋の外を見張るべきだと発言します。

「全員で素早く調べた方が良いのでは？ 外部の見張りなら、私が行いますし」

「フーケの武器は、巨大なゴーレムですからね。小屋の中に居る時に襲われると辛いですよ。そうだね、サイト君ともう一人が……」

「俺がですか？」

「では、俺も行きますよ」

「頼むよ、ティーボ君」

私と才人は、ミス・ロングビルの『では、私は周囲の警戒を』という言葉を背に廃屋へと入ります。

廃屋の内部は既に何年も使用されていないらしく、テーブルなどにはぶ厚い埃が堆積していました。

「本当に、こんな場所に盗んだお宝を隠したのかな？」

周囲を探索しながら、才人は私に話しかけてきます。

「さあな？ 普通に考えたらあるわけないけど」

もしフーケが噂通りの盗賊なら、盗んだお宝を近隣の農民に目撃されるような場所に隠すはずもないでしょうし。

私は、自分の意見を才人に説明します。

「これなんて、そうなんじゃないのか？」

「おいおい、何を見間違えているんだ？」

才人が何かを見つけたようですが、そんないきなり目的の物は見つからないでしょう。

オスマン学院長の話によると、王国の宝である破壊の杖はトリステイン王家の紋章の入ったケースに入っているらしいのですが、才人は王家の紋章など知らないでしょう。

何かのポ口箱を、破壊の杖の入ったケースだと言って差し出す可能性がありました。

「このケースは、結構新しいんじゃないのか？」

ところが、才人が持っているケースにはしっかりとトリステイン王家の百合の紋章が入っていました。

「あつたな……」

「ああ……」

まさか、こんなに早く、しかもここで見つけるとは思わなかった私と才人は思わず顔を見合わせてしまいます。

ですが、それを上回る出来事が外で発生しているようでした。

「サイト君！ ミスタ・グラモン！ 急いで外に出るんだ！」

ミスタ・コルベールの叫び声が聞こえるとの同時に、廃屋の屋根が勢い良く吹き飛び、天井の代わりに巨大なゴーレムの顔がこちら

を覗き込んでいました。

「才人！ 逃げるぞ！」

二人で廃屋の外に出たのと同時に、廃屋はゴーレムの一撃で完全に破壊されてしまいました。

外では、周囲の様子を見に行つたミス・ロングビル以外のメンバーが、杖を手にゴーレムと対峙しています。

「サイト君、ミスタ・グラモン」

「破壊の杖なら、見付かりましたよ」

サイトが両手に抱えている破壊の杖の入ったケースを見せると、ミスタ・コルベールとミスタ・ギトーは満足そうに頷きます。

「それで、どうするのですか？」

今まで、あまり目立たなかつたギーシュが二人の教師に質問しますが、いくらこれほどの巨大なゴーレムを操る盗賊でも、僅か一人でこのメンバーに対抗した時点で、彼女に勝ち目などないでしょう。

「風のスクウェアメイジが一人。土のスクウェアメイジャー人と、トライアングルメイジが一人。火のトライアングルメイジが一人。謎の爆発メイジが一人か……」

「ティーボ、謎の爆発とか言わないでよ！」

私が、指折り今日のメンバーの実力を数えていると、ルイズから文句が出ます。

「そう怒るなよ。でも、負ける事は無いだろうな……」

いくら凄腕でも、土くれのフーケに勝ち目など無いでしょう。私達は、僅かな打ち合わせで巨大なゴーレムと対峙します。

まずは、私は地面の土からセラミック製の刃物を多数錬金し、それをミスタ・ギトーが作った竜巻に乗せてゴーレムにぶつけます。竜巻に巻かれた刃物がゴーレムの身を少しずつ削り、それを回復させるとまた身を削られと。

ゴーレムは、完全にその場に動きを止めてしまいました。足の部分の岩も削られていくので、下手に動くとバランスを崩して倒れてしまうからなのでしょう。

私とミスタ・ギトーの企みは、見事に成功してしました。

「ルイズ！」

「わかつているわ！」

次に、ルイズの爆発魔法が連発でランダムにゴーレムに命中していきます。

これで更にゴーレムは体の各所を削られて、動きを封じられてしまいました。

「こんな攻撃では、倒せないのでは？」

ゴーレムにぶつける刃物の錬金を手伝っているギーシュが文句を言いますが、それにミスタ・コルベールがはっきりと断言します。

「動きさえ封じれば、あのゴーレムはすぐに土に戻りますよ」

あの巨大なゴーレムを、常に修復させながら維持するには莫大な魔力が必要です。

ならば、わざとあちこちを修復可能なレベルにまで壊し続けて、フーケに余計に魔力を消費させてしまえば良い。

これが、作戦の全容でした。

実は、ほとんどミスタ・コルベールが考えた作戦なのですが。

「早くに決着を付ける方法もあるけど」

「それを言え、ティーボ」

私は、もう一回ギーシュ達と作戦の打ち合わせをします。

「仕方が無い。それで行こう」

「偉そうに、自分で考えてからそう言う事は言えよ！」

私の合図でゴーレムに纏わり付いていた竜巻が消え、ゴーレムの身を削っていた刃物がゴーレムの体中に突き刺さります。

勿論、生物ではないゴーレムにはまるでダメージは無いのですが、他に目的があつたのです。

「「イル・アース・デル！」」

私とギーシュの錬金の呪文で、私の錬金していたセラミック製の刃を黒色火薬に、ギーシュは青銅製の刃物を油へと変化させます。

「ミスタ・コルベール！」

そして、そこにタイミング良くミスタ・コルベールがゴレーム全体に炎を纏わせると、火薬と油に着火してゴレームは大爆発を起します。

更に、私がゴレームの周りの空気に含まれる水分を水素と酸素に分解し、爆発はますます威力を増しました。

爆炎が晴れた後に黒焦げのゴレーム出現しますが、ダメージの限界が訪れたのか？

すぐに、ボロボロになって崩れてしまいました。

「破壊の杖は取り戻せたし、作戦成功だな」

結局、フーケの姿を拝む事は出来ませんでした。

その後、新しいゴレームは生成されず、しかも破壊の杖も戻って来たのでこれで作戦は終了という事になります。

周囲の偵察に出かけていたミス・ロングビルも戻ったので、私達は急いで学院への帰路へと着きます。

「今回は無事に取り戻せたとはいえ、今度からは宿直を厳にしないと駄目だな。面倒だ……」

「そうですね。誰かがちゃんと見張っていれば防げた犯行ですし……」

馬車の荷台で仕事が増える事に対して盛大に落ち込む二人の教師を見ながら、私達も暇な移動時間を会話に費やします。

「基本的に、俺は必要なかったと思うんだよな」

「あんたは、私に何かがあると困るから存在しているのよ」

「何も無かったじゃねえか」

「うるさい使い魔ね」

「俺っちも、出番が無かったしなあ」

ルイズと才人の言い争う横で、まるで出番がなかったインテリジエンスソードのデルフリンガーが落ち込んでいます。

「フーケを逃したのは惜しかったが、これはシュヴァリエ物の功績だね」

一応作戦に参加していたギーシュが、誰にでもなく今回の任務達成に対する恩賞の話をしますが、それに釘を刺したのは私でした。

「恩賞？ 出るわけないだろうが」

「ティーボ……。それは、どういう事だい？」

ギーシュが、私に鋭い視線を向けて来ます。

「俺達のした事は、マイナスをゼロにただただだからな」

私は、ギーシュに自分の考えを説明します。

学院は、責任を持って破壊の杖を預からねばならない立場です。それが、宿直をサボって簡単にフーケに盗難を許してしまいました。

私達は学院の失態を回復させたただけなので、これを功績と呼ぶに

はおこがましい物があるでしょう。

フーケを捕らえたのであれば功績かもしれませんが、あのゴーレム消滅後はどこを探してもフーケは見付かりませんでした。

痕跡すら無かったのですが、プロの盗賊であるフーケに隠れられてしまったら、それほど経験の無い私達に見つけられるわけもありませんでした。

「バカな！ これでは、骨折りではないか！」

「そこまでは、酷くないと思うけどな」

学院に戻った私達は学院長室へと直行しますが、途中宝物庫を通ると、既にフーケに開けられた穴は完全に塞がっているようでした。

多分、ミセス・シユヴルーズなどの土系のメイジ達が総出で穴を塞いでしまったのでしょう。

更に、オスマン学院長に破壊の杖を取り戻した事を伝えますが、彼の口からは私の予想通りの言葉が飛び出していました。

「オホン。破壊の杖を奪還できた事は大変に喜ばしい。今回の作戦参加者達には、ワシから報償金を出そうと思う」

「（やっぱりな）」

多分、オスマン学院長は王宮に破壊の杖が盗まれた事を報告していないのでしょう。

なぜなら、王城側からは王宮の宝物庫よりも安全だからという理由で破壊の杖他の宝を預かっているのに、見張りが宿直をサボって盗まれたなんていう報告を出来るはずがないからです。

下手をしたら、オスマン学院長の責任問題になってしまいます。

人格者のオスマン学院長ではありませんが、彼も普通の人間。自分の社会的地位は惜しいと感じているのでしよう。

「報償を一人頭五百エキュール出そう」

「思っていたよりも多いですね」

「まあ、その辺は察して欲しい」

今回の失態を王宮側に隠すつもりらしく、その口止め料も兼ねているのでしよう。

ただ、騒ぎになっている以上は完全には隠せないのです、フーケが宝物庫への襲撃を企むも、それを事前に阻止して盗まれた物は無かったという線でケリだと思えます。

事情を知っている他の教師達も、自分達が宿直をサボっていたのを暴露されるのも嫌でしょうから、自然と口を噤む事になると思います。

「ミス・ロングビル、ミスタ・コルベール、ミスタ・ギトー、ルイズ、才人、ギーシュ、私で、合計三千五百エキュールですか。高く付きましたね」

警備をサボった代償としては、かなりの大金でした。

「今までに貯めていたヘソクリが全てパーじゃな」

年齢不詳なので何年かけて貯めたのは不明ですが、領地持ちの貴族でもなければ三千五百エキュールはかなりの出費のはずでした。

「三千五百エキュールで、しがない年寄りの名誉が守られた事を良しとしようかの。これからは、万全の警備体制を敷くとしてじゃが。ところで、今日はフリッグの舞踏会じゃ。是非に楽しんでくれたまえ」

それぞれに、オスマン学院長から金貨の入った袋を貰った私達は学院長室をあとにしますが、途中で才人に声をかけられます。

「なあ、ティーボ」

「どうしたんだ？」

「ハルケギニアには、銀行は無いのか？」

「うーん、無い事も無いが……」

少なくとも、才人の考えているような銀行ではありません。

金の無い平民など客とも思っていないせし、金を預けると逆に手数料を取られてしまうのですから。

寧ろ、有料の貸金庫とでも呼んだ方がいいのでしょうか。

他には、商人の遠隔地での取り引きのために手形を保証したり。

金も貸しますが、担保の査定はかなり厳しいです。

よって、『預金を定期にすると利息が一年でいくら？』などという類の銀行ではないのです。

出所不明な才人では、門前払いされてしまう可能性もありますし。

「自前で金庫とか持ってないし」

「私の金庫を貸すわよ」

「いや、何か取られそうだし」

「何ですって！」

ルイズは才人に怒っていましたが、この何も当てに出来ない異世界での初収入を。

いくらご主人様でも。

いや逆にご主人様だからこそ、預けるのに不安を感じているのでしょう。

『誰が、面倒見ていると思っているのよ！』

この一言で奪われたら、目も当てられないですし。

「うちの金庫は、頑丈さも警備も折り紙つきだけどな」

魔法学院の隣で大々的に商売をしている私は、かなり巨大な金庫を持っています。

それに、警備も厳重でフーケも私の金庫には手を出さなかったようですよ。

「今のところは使う予定もないし、ティーボの所で預かって貰おう」

「何で、ティーボなのよ！ 私が信用できないっての！」

ルイズは余計に激怒しますが、まさか元同じ世界の出身者同士という事情を話すわけにもいけないので、才人は別の理由を考えたようです。

「ティーボは、大金持ちじゃないか。俺の金貨五百枚奪うほどケチじゃないと思うんだよ」

前世の癖で、いまだに金貨を見ると気分的に身構えてしまう元貧乏人の私でしたが、実際には実家の金庫にも、ここの金庫にも大量の財貨が入っています。

才人の金貨を奪おうとは思わないのも事実でした。

「どうせ、何か碌でもない事に使うのを知られたく無いんでしょう。本当に、男って……」

ルイズは、ブツブツと文句を言いながら私が才人の金貨を預かる事を認めますが、私は今までに碌でもない事にお金を使った事などありません。

その点を、強くルイズに抗議しようと決意します。ですが、彼女は呆れたような視線を、私と今この場に現れたシエスタに向けていました。

「メイドに変な格好をさせて、ティーボは何を考えているのかしら？」

「失礼な。俺は、研究をしているんだ」

「研究？」

「世のメイド達が、どういう格好なら優雅に効率良く仕事を出来るかね」

「専門なの？」

「全く専門ではありません！」

以前にトリスタニアの町で買い求めた婦警さんの格好をしているシエスタを見ながら、ルイズは私とシエスタに見とれている才人に呆れたような表情を向けるのでした。

「あら？ ダンスは踊りませんか？ ミスタ・グラモン。いえ、錬金殿」

そして、その日の夜。

開催されたフリッグの舞踏会に出た私は、そこでオスマン学院長の秘書であるミス・ロングビルに声をかけられました。

ちなみに、ルイズはなぜかぎこちない動きをする才人とダンスを踊っていて、他の生徒達もそれぞれにパーティーを楽しんでいるようでした。

何か、タバサが胃の容量に合わないレベルの食事をしていますが、これはいつもの事なので気にしない事にします。

「ダンスは、苦手なのですよ」

「そうですね。ですが、残念でしたね」

「何がですか？」

「土くれのフーケを捕らえ損ねました」

「ああ、その事ですか」

私は、破壊の杖が戻って来ただけでもラッキーであると考えていました。

普通なら、絶対に戻って来る事などあり得ない状態だったからです。

「凄腕の盗賊を捕らえる際に、怪我でもしたら損ですし」

軍人家系には生まれていますが、私は基本的に荒事などしたくはないのです。

それに、下手に怪我でもしたら錬金に差し支えますしね。

「錬金殿は、変わっているのですね」

「適材適所で、自分の担当をしているだけですよ」

「新しい金属の錬金ですよね？」

パーティー会場の端で、二人の会話は続きます。

私は、自分が戦闘担当ではなくてあくまでも経済担当者である事と。

自分が見つけた鉱石を元にアルミニウムとチタンを錬金していて、それを家臣達にも教えているのになかなか良い品が出来ない事など

を話します。

「そうでしたね。お稼ぎになっているのですよね」

確かに、今日貰った五百エキュー分の金貨。

平民なら四大家族が余裕で一年を過ごせますが、私なら数秒で稼げるでしょう。

それだけ、希少価値の高い物を錬金しているのです。
なので、今日のフーケ探索は私の作業効率を落とす任務でした。

「五百エキューは、大金ですよ」

「うちなら、腕があれば余裕で一ヶ月で稼げますけどね」

私は、以前から彼女に魔力を感じていたので、今のこの機会に彼女を引き抜いてしまおうと考えていました。

学院長の秘書がいかほど稼げるか知りませんが、錬金が見えるならうちの方が遙かに稼げるはずですよ。

「確かに、優秀な家臣の方々みたいですね。今日も、あなたの周りを付かず離れず」

「ああ、気が付いていましたか」

しかも、これは人をフーケ退治で扱き使ったオールド・オスマンへの意趣返しなのです。

元々彼女は使えると思っていたので、いつか引き抜こうと考えていたのですが、オールド・オスマンもかなり高名なメイジで貴族です。

その秘書をいきなり引き抜くのは、いらぬ争いの元になるでしょう。

う。

そこで、やりたくもない破壊の杖の探索を引き受けて彼に借りを作り、その借りを返して貰う名目で彼女を引き抜く。

これが、一番スマートな方法だと考えたのです。

フーケ退治は普通に考えれば危険な行為ですが、私の家臣達がそれに気が付かないはずありません。

実は今日の私達には、五名ほどのメイジの家臣達が付かず離れず、気配を消して秘かに護衛を行っていたのです。

私達に対処できない危険があったら、すぐに出てきて一緒に戦うか。

最悪は、私だけ連れて逃げるといふ命令をアシルから受けていたようです。

ミスタ・コルベール、ミスタ・ギター、ミス・ロングビルの三人は気が付いていたようですね。

私は、事前に知っていたので当然気が付いていました。

ギーシュは、まだ少し甘い部分があるので、全くその気配に気が付いていないようでしたが。

「錬金が得意なら、普通にやってもそのくらいは稼げますよ。もし、こなせる仕事が多ければ、もっと稼げますし」

「本当ですか？」

身を乗り出すようにして耳を傾けるミス・ロングビルに私は仕事の内容と待遇を説明します。

そして、翌日。

ミス・ロングビルは、突如オスマン学院長に辞表を提出するの
でした。

「そんな……。これから、私は誰のお尻を触れば良いのじゃ」

「もしお尻を触りたければ、新しい秘書の方にどうぞ」

オスマン学院長に『ピシッ！』と言い放つミス・ロングビルの新
しい職場は、私の錬金場でした。

「ほう、かなり魔力が高目ですな」

「そうですね？ 実は、使える魔法が少なくて……」

「錬金さえ使えれば十分ですよ。あなたほどの魔力があれば、大量
に仕事をこなせますからね。頑張れば稼げますよ」

「ありがとうございます（盗賊で危ない橋を渡るよりも、こっちの
方が安全に大金を稼げるね）」

アシルや私から作業内容の指導を受け、すぐにアルミニウムの錬
金を始めるミス・ロングビルでした。

それと、なぜかこの日を境に、トリスティン国内を騒がせた盗賊。
土くれのフーケの活動がピタリと止み、二度とその姿が目撃され

る事がなかったそうです。

「とほほ……。どうして、秘書の応募に男しか来ないのじゃ……」

「だからって！ 私の所に来ないでください！」

「古い先短い年寄りの楽しみを奪わないで欲しいのお。それに、触つても減る物でもないし」

「減ります！ あなたが触ると減るんです！」

「それは、加齢による衰えじゃの」

「死ね！ 今すぐ死ね！」

それと、オスマン学院長の新しい秘書が男性になってしまい、たまにここにミス・ロングビルのお尻を触りに来て、彼女に折檻を受けるのが、この鍊金小屋の風物詩となるのでした。

十九話

「ねえ、いいの？」

「何がだい？ ルイズ」

フーケに盗まれた破壊の杖を取り戻してから数日後、授業を終えた私が錬金小屋に向かおうとすると、いきなりルイズに呼び止められました。

「アレよ、アレ」

教室の端では、ギーシュが才人と楽しそうに話をしていました。

あの引き分けに終わった決闘以降、ギーシュは平民ながらも力を示した才人を認めて良く話をしているようです。

ルイズは、『どうして、あのギーシュと？』という感覚なのでしようが、私は人の交友関係にケチを付ける性分はありませんので。

「俺に言ってもな。才人はルイズの使い魔なんだ。文句があるなら、ルイズが才人に言えばいい」

「私からは、特にケチを付ける部分はないのよね」

私にはとことん陰険なギーシュでしたが、しかもたまにそれで周囲にも迷惑をかける愚か者でしたが、彼は基本的には少し小心者の善人でしかありません。

私に迷惑がかからなければ、私からは何も言う事もする事もない

のです。

ただし、何かを企んでいなければという話なのですが。

「俺は、ギーシュとはあまり関わり合いたく無いからな。失礼する」

私が学院を出て隣にある錬金小屋に向かうと、そこでは先日新規に雇ったミス・ロングビルの姿がありました。

彼女は、『早くに家が没落したので、使える魔法が少なくて……』と謙遜していたのですが、その魔力には目を見張る物がありました。

アシルが『負けた……』とすぐに思うほどで、その魔力の量はトライアングルの上位クラス。

もう少しで、スクウェアクラスに届くほどです。

しかも錬金は普通に使えるそうなので、すぐにアシルの研修を受けてアルミやチタンの錬金に挑戦します。

最初は、グラモン家独自のというか私独自のやり方に苦戦していたようですが、すぐに他の家臣達よりも不純物の少ない金属の錬金に成功して、私の作業効率を更に上げる事に成功していました。

ただ、やはり私ほどの純度は出せないようです。

ですが、出荷量は以前の倍以上に跳ね上がり、最近益々需要が増えた事により発生している慢性的なアルミ不足を、ある程度は解消する事に成功するのですが。

「ご苦労様です。ミス・ロングビル」

「ティーボ様、良い仕事を紹介していただき感謝します」

錬金の手を一旦止めてから、彼女は私にお礼を言います。

「その魔力の多さは魅力的ですからね」

学院の秘書などは別にメイジでなくても可能ですが、私達の仕事は、特に重要な部分はメイジにしか出来ません。

特に、ミス・ロングビルクラスの魔力を持っているメイジは、全メイジの中で百人に一人もいれば良いところ。

実際に成果もウナギ昇りで、私は基本給の他に出来高払いで手当てを付ける事を約束していました。

実際に彼女の給料は、このペースだと年に五千エキューを軽く超えるかもしれません。

それほど、私の指揮下に有能なメイジを組み込むと、全く生産量が変わってしまうのです。

彼女の参入を経て、錬金小屋は更なる発展を遂げていました。

トリステインの各地から、ボーキサイトやチタンなどの鉱石がここに運び込まれ、私に雇われたメイジ達がこれを錬金して第一段階の不純物入りの金属を作る。

次に、私が最後の仕上げを行い、これがグラモン家印の99.999%以上の純度を持つ金属のインゴットの完成です。

ゲルマニアのように製鉄所の欲しいところですが、学生の私が魔法だけで対処するにはこれが限界でしょう。

自分で全てをやっていた子供の頃から、最終工程だけを自分でやるように人員と体制を整える。

この方法も、暫くすれば生産量は頭打ちとなるはずですが、魔法学院さえ卒業してしまえば、領内でいくらかでも研究可能です。

貯めた資金で、製鉄所やガラス・コンクリート工場。

無理かもしれませんが、やはりアルミニウムの精錬設備の研究もしたいです。

他にも試したい合金もあります。

高張力鋼の調合比率について、独自に研究を重ねてみたいですし。タングステンなどの実用化にも、手を付けたいところです。

「（それは、本当に卒業してからだな）さてと……」

一日二〜三時間しか取れない錬金の時間を有効に活用すべく、私は最後の仕上げに腕を振るいます。

準備されていた不純物混じりの金属を次々と錬金し直し、他の水晶やヒスイ作りも行い、今日のノルマはこれで終了です。

「さすがですね。錬金殿は」

学院長の元秘書で、生徒の事情にも詳しいミス・ロングビルが話しかけてきます。

「いつもの仕事だからね。でもねえ……」

「でも、何ですか？」

私は、いくら効率化に努力をしても、魔法のみを使っているとこれが限界である事を彼女に話します。

やはり、夢は精錬所や工場の建設なのです。

「ある程度沢山作らないと、いつまでも値段が下がらない」

私の作る金属は、値段が非常に高価です。

特にアルミニウムは、いくら生産量を増やしても一向に値段が下がる気配がありません。

貴族や富裕な商人が、様々な物をアルミ製にする事が流行してしまっただけです。

実は、多少安価な不純物混じりのアルミも出ているのですが、量は少ないし土系のメイジが魔法で探ればすぐに品質の悪さが露呈して、商人に買い叩かれてしまうそうです。

当然、貴族はそんなアルミは買わないので、余計にうちのアルミを求めて価格はいまだに上昇傾向です。

早く私の真似をして、生産量が増えて欲しいのですが。

「欲が無いのですね」

「ミス・ロングビル。あなたもできるように。学院長の秘書って、そんなに高給ですか？」

私が、不思議に感じていた事です。

それだけ魔法が使えるのなら、わざわざ秘書などしなくてもいくらでも稼げそうな気がしますし。

特に彼女は土系統の魔法が得意ですし、錬金の腕前は見事なものです。

オスマン学院長に尻を触られないかを心配するよりも、よほど経済的にも精神的にも楽なはずなのですから。

「そうですね。あの方のセクハラには、大分苦労しましたし……」

確かに、あのオスマン学院長ならばやりそうな気がしますね。

セクハラとか。

「（それでも、あの学院長の下にいたし。実は、セクハラに秘かに期待しているとか？）」

「最初に釘を刺しておきますけど、もしやったら王宮に報告させていただきます」

私の考えはすぐに彼女に見破られてしまい、最初に釘を刺されてしまう私でした。

「それは、冗談という事で。でも、一つ」

「はい？」

「制服の支給があるので。明日から、それを着て仕事をするように」

「制服ですか？」

私の命令に彼女が納得したその翌日。

私が支給した制服に身を包んだ、ミス・ロングビルが出勤して来ます。

「ミスタ・グラモン。これが制服ですか？」

出勤して指定された制服に着替えたミス・ロングビルが微妙にプルプルと震えています。私は彼女が怒る理由が理解できませんでした。

その制服とは、以前にトリスタニアの店で纏めて購入した異世界

からの、前に私が居た世界ではポピュラーな服装だったからです。

ミニスカポリス。

最高なんてすけどね。

えっ？ ポピュラーじゃない？

いや、ポピュラーでしょう。

間違いなく！

受験勉強の合間に、深夜に見ていましたし。

「似合っているじゃないですか」

「スカートが短くないですか？」

「いや、以前も十分に短いでしょうに」

私が、この学院に入学してから感じた事。

それは、どういうわけか学院の女子生徒の制服のスカートが短かった事です。

それに、秘書時代の彼女のスカートも、それに負けず劣らず短い物でした。

だからこそ、オールド・オスマンの使い魔であるネズミに覗かれていたのしょうし、それとさほど変わらない今の制服に文句を言うのもおかしいと思うのですよ。

「男の人の制服は、普通じゃないですか！」

ミス・ロングビルは、ツナギの作業服の上にメイジの家臣達はマントを羽織り、平民の従業員達はそのままの格好で仕事をしている光景を指差します。

ですが、私が思うに男に多彩な制服など必要ありません。
全く効率的では無いですし。

「それに、仲間もいますよ」

私の指差した方には、家臣達に冷たいお茶を配っているシエスタ
がいましたが、今日の彼女はコレクションの一つである巫女服
姿でした。

私は彼女に、せっかく購入したので交代で制服を着るように命令
していました。

「私にも、アレを着ると？」

「ローテーションの関係で数日後には。ちなみに、給料の中には制
服手当という物がありまして」

「わかりました……」

渋谷と、これから毎日制服を変える事を認めるミス・ロングビル
でしたが、彼女は月末に給料明細を見てからは何も言わなくなりま
した。

月々の制服手当が、毎月20エキユーだったからです。

ですが、私は別に自分の目の保養のためだけに、彼女達にコスプ
レをさせているわけではないのです。

この男だらけのむさ苦しい職場に、一抹の清涼剤を。

魔法の出来は、精神的な部分が大きく関わりますしね。

実際に、彼女達が毎日替わりで制服を着るようになってから、

家臣達の錬金効率が上がったようです。

怪我の功名……。

いえ、予想通りでした！

単に仕事に慣れて効率が上がったのだという意見を、私は強引に心の奥深くに封印するのでした。

「ええと、錬金殿」

「どうしたんだ？ 才人」

とある虚無の日のお昼に私が錬金小屋で仕事をしていると、そこに才人が現れたのですが、その様子はいつもとは違っていているように感じる私でした。

「紫電改を貸して欲しいんだけど……」

私、才人、ミスタ・コルベールの手によって改良・修理を施された紫電改ですが、いつもは錬金小屋の端にある専用のスペースに置いてあります。

一応オーナーが私なのと、雨風を避けられ、整備が行え、必要な燃料やオイルなどを準備できる環境にあるのが私だけだからです。

特に、燃料の錬金が可能なのは私とミスタ・コルベールだけです。

そこで、才人が誰かに頼まれて紫電改を飛ばす際には、私の許可をえる事になっていました。

ですが、よほどの事がない限りは、私はすぐに使用を認めてしま

います。

「一つに、才人が定期的に紫電改で訓練をした方が良いと思ってる事。」

もう一つに、ちゃんと定期的に稼働させて、私やミスタ・コルベールが紫電改の整備や修理に慣れるという理由からです。

「それで、誰を乗せるんだ？」

才人が紫電改を飛ばす時には、ほとんどが後に人を乗せての飛行です。

ルイズ、モンモランシー、シエスタ、タバサ、キュルケ、ミスタ・コルベール、最後に私と。

ほとんどが女性ですね……。

まあ、それで才人が報われたという噂も聞かないので、悔しくはないんですけど。

「それがさ……」

本当に申し訳なそうな表情の才人の横から、私が一番顔を見たくない男が現れます。

半分血の繋がった兄のギーシュでした。

「これが、サイトが品評会で飛ばした竜の羽衣か。凄い物だね」

私は、いかにも板挟みで辛そうな表情をする才人を見ながら、大よその事情を察します。

異世界に飛ばされたものの、運良く私という知己を得た彼でした

が、やはりハルケギニアの世界は彼には厳しいものがあつたのでしよう。

普通なら、ホームシックにでも罹りそうですしね。

更に余計な事を口走ってしまったがために、生まれて初めてである決闘をギーシュとする羽目にまでなっていました。

これをどうにか引き分けにして終わらせた才人は、これで一人付き合い難い奴が出来たなと感じたのでしようが、なぜかギーシュは才人に親しげに話しかけるようになっていました。

平民とはいえ、自分と互角の技量を示した男に敬意を示して対等に付き合うようになった。

格好付けたがりのギーシュの行動パターンなど、私にはお見通しです。

それに、ギーシュは私以外にはそれほど悪い男ではありませんし。

あくまでも、彼が嫌いなのは私だけなのですから。

流れとしては、友人である才人に竜の羽衣に乗せて欲しいとギーシュが頼んだ。

だが、才人は私とギーシュの関係を知っているので、どうしたものと悩みながらここに来たという事なのでしょう。

「(そうだな。せっかく才人は、ここに受け入れられつつあるんだものな。ギーシュに嫌われるのは、俺だけで十分か)」

才人の苦悩を理解した私は、ギーシュにわざと憎たらしげな笑顔を浮かべながらこう言い放ちます。

「才人一人で乗るなら訓練扱いだが、ギーシュが乗るなら燃料代を出せ」

私は才人を正式には雇用していませんが、彼のパイロットとしての技能を認めています。

だから、訓練や他の人を乗せる際には一切金など取りませんし、整備などで協力した分はアルバイト代を出しています。

直接渡すのはルイズに対して失礼になるので、彼女に一旦お金を渡して、彼女から支給するような形にしてみました。

ですが、ギーシュだけは別です。

何か悲しくて、ここまで嫌がらせや嫌味を言い続けられている男に、貴重な燃料を使わなければいけないのでしょうか。

というか、お金云々言う前に心の平穏の問題ですね。

「ティーボ。兄である僕に向かって、そんな口を利くのかい？」

ギーシュは、『まずいなあ』という表情をする才人に気にしないでくれと話しかけてから、私に鋭い視線を向けて来ます。

「（才人に向けるその優しさの、十分の一でも俺に向けられたらね。俺は、素直にあんたを兄と認めていましたよ）今さら、繕っても無駄でしょう。俺達の関係は」

「そういえば、そうだったね。だが、兄である僕に対するこの仕打ち。実に不愉快だね」

「ここにある財産の優先権は、全て私にあります。何しろ、全て私が生み出した物ですからね」

何とも嫌味な台詞ですが、これは事実でした。

学院に隣接するこれら全ての設備やら、ここで動いて金庫に入っている資産やら。

当然、紫電改やその燃料なども私の私財なのです。

ミスタ・コルベールの錬金した燃料や、整備にかかった手間などは、研究費の供与という形でちゃんとお金を払っていますし。

別に、才人が学院の生徒などを乗せる事くらいで腹を立てるようなケチ臭い事はしません。

実際に、少し過重気味なマリコル又を乗せた事もありませんし、レイナーやギムリなども乗せた事はあります。

ですが、ギーシュを乗せる事だけは嫌で、もし乗りたければ金を払えと言うのが私の本音でした。

「金を払えか。卑しいティーボらしい。いくらだい？」

「百エキューだ」

「何っ！」

ギーシュは驚いています。実際に紫電改を一回飛ばすとそのくらいの経費はかかるのです。

ガソリンやオイルの原料である石炭の購入代金だけでなく、ちゃんと整備をしないといけないので、飛ばせば飛ばすほど紫電改は金喰い虫なのです。

「払えるか？」

以前ならともかく、シエスタとモット伯爵の件で仕送りを大幅に

削られた彼には、到底出す事が不可能な金額でした。

先日の土くれ退治で貰った500エキューも、ギーシュならば既に右から左に流れているでしょうし。

「サイト、悪いが急用が出来てね。では……」

表面上は優雅に振舞いながら、私に背中を向けて去るギーシュでしたが、私には彼が怒りにその身を震わせている事が全てお見通しでした。

「（少し溜飲が下がったな）」

ですが、今日のこの件と翌日に発生した事件によって、私はギーシュと遂に本気で決闘をする事態へと追い込まれてしまうのでした。

二十話

「長年の恨みだ！　ここで、全ての因果を断たせて貰うよ！」

「俺を殺す気か？」

「これは、全ての禁止事項を省いた本気の決闘だ。事故による死も大いにあり得るね」

「ギーシュ、お前……」

私が、ギーシュの紫電改への搭乗を拒絶してから二日後の夜。学院の外にある森で、二人は杖を構えて対峙してしました。

「なあ、決闘は禁止なんだろう？」

「サイト、これはお互いに魔法の研鑽をしているだけなのさ。だが、周囲に誤解する人がいるといけない。監視を頼むよ」

才人は大変な事になったと思い、自分なりに懸命に止めに入ろうとしますが。

ギーシュは、全く聞く耳を持っていないようです。

「ティーボもさ……」

「俺に言うなよ。俺が一番嫌いなのは、錬金以外で無駄な魔力を使う事なんだよ。それとな、ギーシュ。お前は事故で俺を殺すつもりらしいけどな。俺も、事故でお前を殺す可能性があるって事を忘れるなよ！」

立会人である才人以外には誰もいない深夜の森の奥で、私達はお互いに殺気を送りながら杖を構えます。

私が、このハルケギニアに生まれてから十七年。生まれて初めての、命をかけた決闘を開始するのです。

「シエスタ、お茶のお替りを頼むよ」

「はい」

なぜ争い事が嫌いな私が、ギーシュと本気で決闘をする羽目になっってしまったのか？

それは、その日の午後の時間の事です。

今日一日の授業が終わり、夕方の仕事の前に私は学院の中庭で休憩をしていました。

置かれた椅子に座りながら、シエスタの淹れてくれた緑茶を飲んでいたのでした。

ちなみに、彼女の今日の制服はどこかの高校の制服でした。

セーラー服でなくて、ブレザーなのが今日のポイントです。

確か、有名な女子高の制服だったと思うのですが、もうハルケギニアに転生して十七年です。

記憶が曖昧になって、学校名を忘れてしまいました。

これもトリスタニアの商店で見つけたのですが、一体どういう仕

組みで地球の物品が紛れ込むのですかね？

私は、そういう物品を見つけるのが楽しいので文句は無いですけど。

「そろそろ新茶の時期だなあ」

「そうですね。そろそろお茶の在庫が心許ないです」

グラモン領内で私が作らせているお茶の葉は、というか材料は紅茶などと全く同じなので、茶葉を手揉みで揉ませているのですね。

最初の数年は微妙な出来に顔を顰めました、今ではそろそろ始まるお茶摘みが楽しみになっていました。

「この緑色のお茶も、曾祖父さんはたまに購入して飲んでいたそうです。でも、お値段が相当に高かったそうで……」

私にお替りの茶を注ぎながら、シエスタが自分の曾祖父の事を話します。

過去の日本からこのハルケギニアに流れてきた佐々木少尉は、私とは違って貴族でなかったばかりに、相当に故郷の味の入手に苦労をしたようです。

それでも、貯めたお金でたまに流れて来る高価な東方産の食材を楽しむ。

多分、これが佐々木少尉の唯一の楽しみだったのでしょう。

「でも、今はそんなに高くないですよね」

「うちの領内で生産しているからね」

ハルケギニアお茶と言えば紅茶が主流ですし、実は少数ですがグラモン領内でも生産はしていました。

ただ、別にその紅茶が特別高品質というわけでもなく、あくまでも領地内での消費用として栽培され、それほど高く売れるというわけでもなかったのです。

そこで、私は領内のお茶の生産を、全て緑茶に変えるように父に進言しました。

他所とさして変わらない紅茶を細々と生産するよりは、数が少なくて希少な緑茶の方が高く売れると思ったからです。

この進言に、父は『自由にやれば良い』と言ってくれました。

ただ、父の事なので、寛大と放任が混じっている部分が多いのですが。

これには奥様も賛成してくれましたが、私に農業の知識などは皆無です。

紅茶用と緑茶用のお茶の木の微妙な品種の違いなどわからないので、以前から生産していた農家に茶畑を広げるように命令して金と人を送り。

お茶の揉み方は、前世でテレビで見た物を思い出してマニュアルを作成。

他にも、なぜか静岡の観光協会のパンフレットがハルケギニアに流れ着いていたので、そこに載っていたお茶揉みの方法を翻訳して彼らに手渡していました。

最初は苦労していたようですが、そこはプロ。

試行錯誤を繰り返して、今では私が満足する出来の茶葉の量産に成功していました。

他にも、ある程度の量が売れるように、緑茶を淹れる急須、茶碗、茶筒などの付属品も職人や陶工などに作らせ、現在グラモン領の緑茶は貴族や神官や富裕な平民などに少し変わったお茶として流行するまでになっていました。

それと、平民にも茎茶などが比較的安価に買えるようになったので、味が気に入った人は買って飲んでいるようでした。

多分、日本の最高級玉露などと比べると粗末な出来なのでしょうが、私はそこまでの舌を持っていませんし、後世になればもっと技術が上がって良いお茶が出来るようになるかもしれないね。

「さて。休憩も終えたし、仕事でもするかな」

「ティーボ様」

席を立とうとした私に、突然一人の女子生徒が話しかけて来ます。

「ええと……。君は確か……」

私は、彼女に見覚えがありました。

確か才人が召喚された日の夜に、ギーシュが懸命に口説いていた一年生だったはずですよ。

「ケティ・ド・ラ・ロッタです」

「それで、俺に何か用事なのかな？」

「ええと、スコーンを作ってきたので食べて貰えますか？ ティーボ様」

ケティの衝撃の発言に、私は思わず隣にいるシエスタに視線を送ります。

ですが、彼女も困ったような表情を崩しませんでした。

前にギーシュに口説かれて満更でもなかった彼女が、どうして私にわざわざ手作りのお菓子を持って来るのか？

前世が日本人であった私からすると、ハルケギニアの情報伝達速度はかなり遅く。

貴族でも、この学院の生徒達は入学当初は私の事を知らない人が多数存在しました。

いや、正確には、私とギーシュを混同している人が多かったのです。

グラモン元帥に、『鍊金』の二つ名を持つ優秀な息子がいて。

しかもその人物は、アンリエッタ王女から直々に二つ名を貰った人物だという。

その噂だけで考えると、保守的な面の強いトリステイン貴族達の中には妾腹の五男が『鍊金』であるという考えが浮かばなかったようなのです。

なので、彼らは最初にギーシュに従って私を無視していたようです。

勿論知っていて、ギーシュと一緒に私を影で非難している連中もいましたが。

つまり、能力などの問題ではなく、これは保守的なトリステイン貴族の子弟達による、元ガリア貴族の妾との間に生まれた私に対する拒絶なのです。

一見陰湿な行為ですが、これも古き伝統の内包物。
貴族優位社会の負の部分でもありました。

一方、女子の方はルイズとモンモランシーが私の事を知っていたので、すぐに真実が広がっていたようでした。

というか、普通に授業が始まれば、どちらが『錬金』なのかはすぐにはわかりません。

ですが、一旦無視した私に馴れ馴れしく話しかけて来る度胸のある男子は意外と少なかったようです。

それに、彼らにもプライドがあるので、自分が間違えていたなどとは絶対に認めたくないのでしょう。

ただ、ここ一年ほどで少しずつ距離を縮めようとする、一部男子生徒達の態度が滑稽でした。

唯一の例外はマリコルヌですかね？

良くも悪くも、あまり細かい事を気にしない彼は、最初からギーシュに擦り寄る事もなく。

かと言って、彼と仲が悪いわけでもないのです。

何しろ、私が変わった食事を取っている事に目を付けて話しかけて来たという、変わり者ですから。

一番興味がある事が、私は金属で彼は食べ物なのでしょうね。

話は長くなりましたが、このケティという女子生徒が私に近付いて来た理由は簡単です。

ギーシュと懇意にするよりも、私と懇意にする方が利益になる。

少なくとも、彼女の実家はそう考えたという事なのでしょう。

ですが、私はそれで彼女を責めようとは思いません。
貴族の令嬢は、いくら優雅に育てられても所詮は家同士の政略結婚の道具となる事が大半ですし。

きつと、両親から何か言われているのでしょうか。

でなければ、前世から引き続いてあまり女性に縁の無い私に積極的にアタックする女性など……。

キユルケがいましたね。

彼女は、色々と政治的に不許可なのと、私が押しの強い女性が苦手なのでパスですが。

見た目は非常にそそのものがあるのですが、非常に残念です。

「ティーボ様」

シエスタが、恐る恐る私に話しかけて来ます。

彼女の懸念している事はただ一つ。

それは、この現場にギーシュが現れないかという事です。

自分が口説いていた女性が、大嫌いな私に話しかけていたら？

考えただけでも、最悪ですね。

きつと、私が先に手を出したと決め付けて、激怒から決闘の流れに向かう事でしょう。

最近、してないですからね。

決闘。

学院の規則で禁止ですし。

「ありがとう、ミス・ロツタ。これから仕事なので、そこで食べさせていただくとするよ」

変に断るのも可哀想ですし、これ以上話を長引かせたくなかった私は、ケティにお礼を言ってから席を立とうとするのですが……。

既に手遅れであったようです。

『不味い！』という表情に変化したシエスタの視線に先には、冷たい表情をしたギーシュが立っていました。

彼のせいでモット伯爵の元に送られかけた彼女は、ギーシュが苦手で性質の悪い悪人だと思っていたからです。

まあ、誰でも同じ事をされたらそう思うのでしょうが。

「おおつ！　なんて可哀想なケティなんだ！　その卑しい男に、強引に引き止められているのかい？」

いつものギーシュらしい、大仰しい態度と口調の嫌味でしたが、彼がそう思ってくれるのであれば、私はそれで結構だと思っていました。

どうせ、私は嫌われていますね。

ところが、ケティの口から出た言葉は意外なものでした。

「あの、ギーシュ様」

「何だい？　ケティ」

「せっかくの以前からのお誘いですが。私はギーシュ様よりも、テイーボ様の方が……」

彼女の本心なのか？

実家からの命令なのか？

どうやら、彼女はギーシュよりも私を選んだようです。

私は、全く選んでいませんけど。

というか、今の時点では選ばれても迷惑ですけど。

「（おいおい、マジかよ。勘弁してくれよ）」

女性とは、何と残酷な生き物なのでしょうか？

あれだけ自分を熱心に口説いていたギーシュよりも、今日初めて話をする私の方が選ぶと言う。

しかも、今の状況でそんな事を言えば、私が被る災難の方が大きいのですから。

「ああっ！ 何て可哀想なケティなんだ！ 一部の下らない噂に惑わされて。この下賤な男のどこが良いのか？」

言いたい事を言ったギーシュは、その時は珍しく決闘とは言わずに引き下がります。

ですが、夜に一仕事終えた私が自室に戻ると、そこには果たし状と白い手袋が置かれていました。

どうやら、公にしないという事実において、私に本気で怒っているようです。

完全に彼の勘違いなのですが。

何とも貴族チックだなと思いつつも。

私は夜中に秘かに起き出すと、ギーシュの待つ学院近くの森へと移動するのでした。

「タバサ、本当にここでダーリンが決闘を？」

「間違いない。そこ」

「本当ね」

私とギーシュが互いに杖を持って対峙していると、周囲に才人以外の気配を感じます。

よく見ると、それはキュルケとタバサのようでした。

「はぁーい！ ダーリン！」

「……」

キュルケのダーリンという呼び方すら、ギーシュは気に入らないようでした。

全く視線を逸らさないまま、私への殺気を強めます。

それと、非常に巻き込まれ感が強い私ですが。

逆に、『ここで一度、ギーシュとは完全に決着を着けた方が楽なのでは？』とも考え始めていました。

今までの中途半端な決闘ではなくて、一度完璧に彼を押さえ込んでしまう。

そしてその勝利条件として、彼に二度と私にチヨツカイや嫌がらせをしないように要求する。

そのくらい考えないと、基本的にはビビリの私に決闘なんて不可能なんですけどね。

「才人、始まりの合図を」

「わかったよ……」

立場的に板挟みな才人が、合図として手を挙げます。

これで決闘はスタートですが、お互いにいきなり動くという事はあり得ません。

まずは様子見でしょうし、今回はゴーレム限定の決闘ではないのですから。

「いくぞ！ ティーボ！」

ギーシュはいつもの通りにワルキューレを出しますが、これはこちらの対応を見るためでしょう。

私は、ブレットの改良魔法で鋭利な三角形のセラミック製の刃物を生成すると、それを数方向からゴーレムにぶつけます。

ギーシュのワルキューレは、すぐに土へと戻って行きます。

私はついでに、刃物をギーシュに向けて飛ばすのですが、彼はすぐにシールドを生成して攻撃を防いでいました。

やはり、今までのように単純にはいかないようです。

「そうだ、ティーボ。君も本気でやれよ。僕も、本気でいくさ！」

「狂ってるな。お前は」

私は、ギーシュのアース・ハンドを素早い移動でかわしながら、錬金で作ったセラミック製の盾で、彼のブレードをかわし防いでいきます。

彼も魔法に独自の改良を加えているらしく、アース・ハンドは地面から鋭い岩製の棘が飛び出してくるように。

ブレードも、岩製の棘を私に突き刺さるように飛ばすという非常に凶悪な物となっていました。

しかも、棘を金属製にしないで岩製の物にするなど。

余計な手間を加えて、無駄な魔力を使わないようにしています。

更にギーシュは、最初以外は十八番のワルキューレを全く出していません。

とにかく私よりも優れた身体能力でかき回しながら、なるべく魔力を使わない。

それでも、殺傷力のある魔法を連発しているのです。

私よりも魔力の量が少ない事を自覚しているので、なるべく消費を抑えながら戦っているのでしょう。

私は、ギーシュに懐に飛び込まれてブレードが使われたらお終いなので、とにかく距離を置くために牽制の魔法を使い続けていました。

私とギーシュの、どちらの魔力が先に尽きるのか？

ですが、魔力の節約は私もやっているのです、何かが無ければ私の方が競り勝つはずですよ。

「これで何回目だろうね？」

お互いに高速で移動しながら魔法を使っている合間にも関わらず、

ギーシュは私に話しかけてきます。

「随分と余裕だな。決闘中に話しかけてきて」

「余裕？ そんな物はないさ。だから、こつという戦法で戦っている」

ギーシュが、移動と魔法を併用した戦法に私を引き摺るのは、私の持久力の無さを突いているのでしよう。

勿論、訓練はちゃんとしています。如何せん私の身体能力は普通より少し上。

訓練しているので、この学院で私以上の持久力を持つ生徒は少数ですが、ギーシュはそれほど甘くありません。

彼は、普段は気障で大仰しい奴ですが、同じグラモン家の人間なので訓練に手を抜いていないでしょうし。

「それに、俺は決闘なんて好きじゃないからな！ 全部、お前が因縁を付けてきて決闘が始まるんだ！ ウザイんだよ、お前は！」

良い機会なので、私はこの十数年で感じた思いの丈をギーシュに正直に暴露します。

「ティーボ、お前は兄に向かって！」

「俺の事を弟だと認めたくないんだろう？ 今さら何を言っているんだ？ お前は」

「……」

私は、ギーシュを逆上させて戦況を有利に持っていくべく、彼を

挑発するような言動を繰り返します。

全て事実でもあるのですが。」

「ああ。俺達には、一つだけ共通点があったな」

「聞きたいものだね」

「お互いの事が嫌いという事さ！」

「……、なるほど。確かに、僕も同じ意見だね！」

私達の戦いは続きます。

お互いに改良ブレット弾で応戦し合いながら、たまにアース・ハンドの改良魔法で足元を襲う。

ギーシュは岩製の棘を多数展開し、私もセラミック製の棘で対応する。

同じ土系統なので似たような魔法の応酬となりますが、私が魔力で向こうは体力と身体能力でと。

戦いは、ほぼ互角に進んでいきます。

「サイト、立会人も大変ね」

「ルイズには、知らせてないんだよなあ。バレたら怒られるかも…」

二人の決闘が進むなか、キュルケに声をかけられた才人は、彼女と話をしていた。

それと、才人に立会い人の話が来た理由。

やはり決闘は禁止されているので、他の生徒達になるべく露見しないようにと。

事情を知らない彼ならば、簡単に引き受けるであろうという理由からであった。

「それで。俺はこういうのは詳しくないんだけど。どちらが勝つんだ？」

「一見すると、互角よね」

「このままだと、ギーシュが負ける」

キュルケには、総合力では二人は互角と見ているようだったが、それに異を唱える人物がいた。

それは、今までは無言であったタバサであった。

実戦経験があり、シュヴァリエの称号さえ持つタバサには、一見互角に見える二人の決闘の行方が見えていたのだ。

「どうしてかしら？」

「このままだと、先にギーシュの魔力が尽きるから」

トライアングル上位のギーシュと、スクウェアでも上位にあるティーボとの魔力の削り合い。

ギーシュは、魔力の消費を最大限に抑えながら、ティーボに手数を出させて戦っている。

その努力は尊敬に値するが、それでも基礎魔力の高いティーボの魔力の方が残る事は明白だ。

タバサは、そうキュルケの質問に答えていた。

「それに」

「それに何だ？ タバサ」

「ティーボは、自分がギーシュに懐に入られたら負ける事を知っている。その彼が、容易にギーシュを近付けるはずがない」

そして、更にタバサが二人の戦いの解説を続ける。

「でも、それにギーシュも気が付いている」

確かにタバサの言う通りに、ギーシュの表情には少し焦りのような物が浮かんでいた。

それは、その手の経験が無い才人にも確認できた。

「普通にティーボの勝ちか。まあ、優秀な弟をネチネチと虐めた報いよね」

何気ないキュルケの一言でしたが、その発言はギーシュの耳に入ったようです。

まるで搾り出すかのように声を出します。

「余所者の君如きに何がわかる？」

小さくもその周囲に響き渡る声は、特に障害も無くキュルケ本人のみならず。

タバサや才人にも、十分に届いていました。

「先に嫌味な事をしたのは……。ティーボ！ お前だろうが！」

ギーシュは、全長二メートルほどの岩製の槍を生成して私に高速でぶつけながら言い放ちます。

「覚えが無いがな。常に嫌味なのはお前じゃないか！ 妾の子！ 下賤の血！ 人が大人しくしていれば、母まで非難しやがって！」

私は、自分の正面にセラミック製の壁を作って槍を防ぎます。

土中に材料が大量に存在するのでセラミックの生成は容易ですが、欠点としては、ぜい性破壊が起こり易いという事ですかね。

つまり、金属とは違って変形して衝撃に耐える事が出来ないので衝撃に弱いのです。

ガラスが割れ易いのと同じ理屈です。

その分、量産性には長けるのですが。

「貴族の癖に、金稼ぎばかりしやがって！」

「一回も稼いだ事がない癖に、偉そうな事を言つな！」

「それが、貴族の仕事か！」

「貴族にだって、それぞれに役割りがあるんだ！ テメえは、戦場で盾になって死ね！ 名誉の戦死でもしてろ！ このボケ！」

「お前は偉そうな事を言って。どうせ、戦争で負けたら新しい支配者の靴でも舐めるんだろうが！」

「さあな？ もしそうなくても、それをお前は確認できないから問題ないだろうが！」

売り言葉に買い言葉。

それに、子供の頃からの十数年に渡る恨み辛みや罵詈雑言が私達の間を飛び交います。

思えば、こいつは子供の頃から気に入らなかつたのです。いくら向こうがガキでも、私が二回目の人生で中身が大人でも。

人間、我慢にも限度があるという事です。

通常ならば抑える自信があつたのですが、決闘で脳内にアドレナリンが放出されている状態では無理でした。

「だが、この下らない因縁もこれで終わりだな！」

自分が、先に事故で死んでもと言つたのです。

もし、私の攻撃で死んでもギーシュも本望でしょう。

そう思いながら、私は自分の杖をまるで剣のように構えます。

「接近戦？」

ギーシュが不思議に思うのも当然です。

私は、接近戦が少なくともギーシュよりは苦手です。なのに接近戦を挑む理由。

それは、自分なりに勝算があつたからです。

「錬金は、応用が利く。理論もわからないまま俺に負けるんだな！」

私は錬金で素早く空気中の水分を酸素と水素に分解しながら、地面からもマグネシウムを取り出して着火を行います。

マグネシウムは酸化の際に強い光を発するので、以前はカメラのフラッシュにも応用されていました。

当然、爆発の際には強い光を発します。

それがわかっていた私は事前に目を閉じていましたが、ギーシュは水素爆発を咄嗟に防ぐシールドを張るのが精一杯のようでした。発光で一時的に目を潰されてしまい、懸命に気配だけで私を探ろうとしています。

「取った！」

私はすぐに杖にブレイド纏わせてから、ギーシュに向かって攻撃を仕かけます。

お互いに殺す殺さないと言っていました。この状況ならば杖を弾くか斬り落とせば私の勝ちです。

「ティーボ！ 何をした！ 目が……」

強い発光をモロに受けて視力がすぐに回復しないギーシュは、懸命に私の気配を探りますが、そんな達人のような真似はいきなりは出来ないでしょう。

念のためにフェイントをかけながら、私は杖でギーシュに斬りかけます。

ところが、ギーシュに接近してこれで完全に勝ったと思ったその時でした。

私のギーシュのバラの花状の杖を狙った一撃は、彼を全体的に覆うシールドによって弾かれてしまいました。

シールドは、正確ではありませんね。

常に、自分の全方位の青銅製の外殻を張ったのです。

私がいくら斬り付けても、外殻はすぐにその厚みを回復させてしまいます。

「だが、いつまでも保つわけがない！」

いくらギーシュでも、既にここまでの厚みを持つ青銅製のシールドを長時間は張れないはずだ。

そこまでの魔力は残っていないでしょうし。

ですが、私が不思議に思っている間にも、彼からは不思議な魔力の増大が確認されました。

「なぜ、一度減った魔力がまた増えるんだ！」

「成長したから」

「……えっ？」「」

私のみならず、キュルケと才人の視線が発言の主であるタバサに向いていました。

「ティーボとのギリギリの決闘で、最後の殻を破ったんだと思う」

タバサの話によると、これは魔力の成り立ちに関する根本的な精神力の問題だそうです。

実は双方は同じ物というか、精神力から魔力という流れなのですが。

だからこそ、精神力が擦り切れる寸前まで魔法を使って魔力を増やすという方法があるのです。

それと、もう一つ。

精神的な成長などで、急にメイジとしてのランクが上がるという事もあるそうです。

「ギーシュは、あなたには絶対に負けたくないと思った。だから、このピンチで最後の自分の殻を破った」

「そういう成長は、後にしてくれよ！」

私が嘆いている間に、視力の回復したギーシュは青銅製のシールドを解除すると、ブレイドを発生させて一気に私に斬りかかってきます。

彼のスピードに、私は自分の出したブレイドで鏝迫り合いをするのが精一杯でした。

「くっ！」

「こうなれば、僕の優位だ！」

「どうだかな！」

確かに、身体能力ではギーシュに分があるかもしれませんが、この魔力が無くなりかけている状況だからと言って、そのまま素直に負けるわけにはいかなかったからです。

私達はブレイドで斬り結び合いながら、足技なども繰り出しながら戦いを続けます。

普通の貴族ではあり得ない戦い方ですが、接近時の足を使つての軍用格闘技はグラモン家では必須習得科目です。

足を使つて牽制している間に、空いている両手で杖を確保して魔法を使う。

ある意味、理に叶つた戦法でした。

『訓練は厳しく、演習と行軍では豪華に、実戦では泥臭く』は父

の言葉であり、『命を惜しむな。名を惜しめ』と共に良く聞かされてきました。

何か矛盾を感じずにはいられないのですが、その辺は臨機応変という事なのでしょう。

簡単に言うと、勝利の栄光を掴めという事らしいです。

「何だ、意外と戦えるじゃないか、俺」

「手加減しているんだ」

「そんな余裕があるのか？ ギーシュ」

前世では剣道の経験すらない私でしたが、今のところはほぼ互角にギーシュと戦う事が出来ていました。

共にブレイドで斬り結んでいたのですが、双方服に破れや軽度の裂傷は出来ていたものの、大怪我はしていなかったのです。

あとは、先にブレイドの魔力が尽きた方が負ける可能性が高く、本当ならば私が優位だったのですが、まさか滅多に見れないメイジ覚醒の瞬間を。

しかも、自分の対戦相手が覚醒するとは思いませんでした。

結果、彼の魔力のキャパが上昇して、勝負の行方がまるでわからなくなっていました。

「それでも、まだティーボの魔力の方が多いはず」

ほとんどゴーレムを出さずに、真剣に戦ったこの決闘も既に二時間以上が経ち、双方共に魔力の限界に近付いていました。

ギーシュもそうでしょうが、私は明日は学院の授業も錬金も休まなければいけないでしょう。

思わず力つとなつてしまった己の迂闊さなのですが、ここで負けるわけにはいきません。

最後の気力を振り絞って、ブレイドでギーシュに斬りかかります。ギーシュもそれに対応し、既にどう殺さないかとお互いの心の中には残っていませんでした。

とにかく、目の前の敵を倒す。

お互いに目をギラギラとさせながらも鏝迫り合いを続けていきましたが、遂にギーシュの魔力の方が先に尽きました。

私の一撃が浅く彼のフリフリの派手なシャツを切り、右肩から斜めに傷口ができ。

そこから、赤い血が流れます。

「浅いか……。どうだ？ 降参するか？」

昔、十歳の頃に初めて決闘した時と同じです。

ギーシュは既にほとんど魔力が尽きています。

相変わらず杖を構えています。バラの花をあしらった杖などナイフの代わりにもならないのですから。

「降参か？」

ギーシュの顔の前にブレイドを纏わせた杖の先を突き付けながら、再び私は問います。

「しなければ、その杖を斬り飛ばすぞ」

「ふんっ！ 父上の言葉を忘れたのかい？ 『相手の力を全て奪うまでは油断するな』だ！」

次の瞬間、ギーシュは足を蹴り上げて私の杖を蹴り飛ばしました。手を離れた事によりブレイドが取れた杖は、数十メートル先の地面に突き刺さります。

「しまった！」

「まだ勝負は終わっていない！」

それからの勝負は、多分貴族としては最低の決闘内容なのでしょう。

魔力が無いギーシュと、少し残ってはいるものの杖を飛ばされた私。

決闘の内容は、完全な殴り合いへと移行しました。

「大丈夫かい？ 格闘戦が苦手なティーボ」

「人の心配している場合かよ！ この怪我人が！」

既にヨレヨレでしたが、私達は意地とプライドにかけて負けられないと感じ、泥臭い殴り合いを続けていました。

既に、洗練された格闘戦の事など頭から飛んでいたのです。

お互いに、殴り殴られ。

顔を腫れさせ、青あざだらけになって殴り合っていました。遂に限界が訪れました。

二人とも、その場に倒れ込んでしまったのです。

「ええと……」

双方が倒れている状況に、才人はどちらが勝ちなのか判断が付かずにいました。

「タバサはどう思う?」

「双方が戦闘不能で引き分け」

「キュルケは?」

「先に魔力が尽きたのは、ギーシュよね?」

「それは関係ない」

倒れこんで体が動かせない状態でしたが、タバサはキュルケの意見に反対します。

これは半ば命をかけて行った決闘であり、そこに魔法戦だけの格闘技だけの個別の優劣は関係ないのです。

最後まで立っていた者の勝ち。

ただそれだけが、決闘のルールでした。

「やっぱり、総合力では勝てないか」

魔力の量で勝ってそれで優位に立ったものの、結果は引き分け。

最後の殴り合いで、倒されないようにするのが精一杯でした。

まさか、ギーシュが魔法を使わないで殴りかかって来るとは予想できなかったものですから。

「やはり、魔力では勝てないか……」

倒れたままのギーシュが、ポツリと呟きます。

「わかついた事だけだ……。五歳の頃から……。ティーボが、父上の前でわざと手を抜いたあの時からね」

「知っていたのか」

初めて習った魔法を父に披露したあの時。

私はアシルの勧めで、わざとギーシュよりも魔法を使えないフリをしていました。

お披露目の終了後に、ギーシュは得意気に自分の魔法の力量を自慢していましたが、まさかそれが偽りであったとは。

意外な事実の暴露に、驚いてしまう私でした。

「その頃から、お前が気に入らない。悪いか？」

「ふんっ！ こっちは、お前の言う妾の子で気を使っていたんだ。

その辺は察しろ！」

私とギーシュの言い争いは、平行線のままでした。

いくら全力を尽くして決闘をしたからと言って。

漫画でもあるまいし、いきなり仲良くなるとなるわけもないのです。

それでも、もうお互いにケティの事などどうでも良く。

私は最初からどうでも良いのですが、何とか立ち上がるとそのまま寮の自室へと歩き始めます。

ギーシュも立ち上がってほぼ横並びで歩き始めますが、会話などは一切しませんでした。

寮の隣土の自室まで、意地でも倒れてなるものかとお互いを監視しながら自室のベッドに倒れ込みます。

「何をやっているんだ？ 俺は」

「何をしているんだ？ 僕は」

皮肉にも、私達兄弟は同じ事を考えながらベッド上で気絶するよ
うに眠りに付くのでした。

「体中が痛い。クソっ！ ギーシュめ！」

「傷に薬を塗らなければ……。ティーボの奴！」

そして翌日。

二人は過度の筋肉痛と体中にある傷。

そして、回復しない魔力のために授業を休んでしまうのであった。

二十一話

「本当に、酷い目に遭ったな……」

ギーシュと行った夜中の決闘の翌日。

私は一人、自室のベッドの上で寝ていました。

魔力がほとんど無くなるまで決闘を続けた結果、数時間の睡眠では精神力が回復しなかったので、学院の授業をサボって今日は休養を取る事にしましたのです。

朝、いつものように起こしに来たシエスタと、鍛錬の誘いに来たアシルは、服はボロボロで体中に細かい傷や打撲などを負っている私に驚いていました。

昨夜は、着替える間もなく気絶するように眠ってしまったので、何の処置もしていなかったからです。

アシルに事情を話すと、彼はすぐに私が今日は体調不良で授業は休む旨を学院に伝えるように他の家臣に指示します。

他にも、錬金小屋の家臣達には今日は私が休む旨を伝えと。

私の家宰らしい働きを見せていました。

「私には、事前に教えて欲しかったですね」

「すまんね。俺にも意地とかプライドがあってね。言ったら、決闘を止められたらどうし」

そのために、私もヒッソリと部屋を抜け出したのです。

まさか、もしかするとギーシュを殺すかもと言って、アシル他家臣達が素直に決闘を認めてくれるはずもありませんし。

「当然です。ですが、まだ五歳だったギーシュ様が、あの時の事を知っていたなんて……」

アシルは、初めて父に魔法を披露した際に私がわざと手を抜いたのをギーシュが知っていた事に、少し罪悪感を感じているようでした。

彼は、まだ子供で魔法を全力で披露したかった私を無理に抑え、一方でギーシュを傷付け、『今日の、私への攻撃を助長したのでは？』と考えたようです。

幼い頃の僅かな怒りが十数年で増幅されたという、どこかのドラマのような話でした。

「嘘かもしれない」

「どちらにしても、ギーシュ様は知っていたんですね。まさか、向こうが漏らすとは考え難いのですが……」

アシルの言う向こうとは、当時のギーシュ付きの家臣達だと思います。

今の彼らは、ギーシュが魔法学院に入学したので、領内で父上や奥様の命令で普通に働いています。

彼らは、アシル達とは違って父から給金を貰い、父の命令でギーシュのお付きをしていたのですから。

「とにかく、急いで治療をしませんと」

「昨晚は、ヒーリングをかける余裕すら無かったよ」

「また派手にやったものですね」

私は、体中にシエスタに魔法薬を塗って貰い、更に包帯を巻かれながら、アシルと話を続けます。

ちなみに、今日のシエスタの衣装は、運良くピンクナーズの格好でした。

「どのみち、私が怒るわけにはいきませんな。グラモン家のご子息二人が決闘をしたなんて事実が学院にバレたら大変です」

それを恐れて、わざわざ学院から離れた森で決闘をしたのだから当然です。

それに、グラモン家の息子二人が揃って停学にでもなったら、貴族社会では大きな恥になるのですから。

つまり、公式には無かった事になっている決闘の件で、私にお小言は言えないという事です。

「それにしても……。あの時の事を気が付いていらっしやっただとは……」

「アシル、年寄りみたいに二回も同じ事を言うな」

「いや、それが漏れているのは、私にとっては痛恨の出来事ですし……」

アシルは、再び始めての魔法披露の際に私にわざと手を抜かせた時の事を話します。

「私や、ギーシュ様付きの家臣数人で秘かに決めた事です。当時は、まだティーボ様の立場が鮮明ではありませんでしたから。僅か一週

間差とはいえ、兄よりも優れた弟。これは危険でしたから……」

ギーシュ付きの家臣達も、アシルも、私の事を考えて魔法を手加減させたのでしようが、それを知ったギーシュは幼いながらも私に怒りを覚えたのでしよう。

五歳の頃のその亀裂が、それから十年以上の時を経て更に広がった。

世間的には？

創作の話では良くある話です。

「それで、決闘は引き分けですか？」

「決闘中に、俺がギーシュを追い込んで壁を破らせてしまっただけ」

魔力に余裕を持って勝てると思った私に、ギーシュのスクウエアメイジとしての覚醒というアクシデントが襲います。

ギーシュにとってはラッキーですが、私にとっては不幸なアクシデントの類です。

全くタイミングが悪過ぎます。

更に、頭に血が昇ってあまり得意ではない接近戦をして、最後には魔法を使わない肉体戦を行い、勝負は引き分けにされてしまいました。

普段の鍛錬のせいで予想以上にタフになっていた私こそ、ギーシュにとっては予想外なのでしようが。

ですが、それは私も同じなのでから。

「それよりも、ギーシュも負傷しているからな。薬を渡しておけ」

浅い切り傷に、打撲に軽い火傷。

私もそうですが、当然一日で自然治癒などしません。

学院側に決闘をしたという事実を隠蔽するには、一日での完全な治癒が不可欠です。

そして、治癒には高価な魔法薬やポーションが必要です。

私はに余裕で出せますし、アシルはこれから水系統の魔法が使える家臣を呼んで私の治療を行うでしょう。

ですが、ギーシュにはそんな家臣も、薬代も持っていないのです。

「わかりました。私が手配をしておきます。ギーシュ様の性格から考えて、ティーボ様の施しなど受けられないでしょうからな」

「良くわかつているじゃないか」

ギーシュへの水系のメイジの派遣と薬剤の準備をすべく私の部屋を出ようとするアシルでしたが、最後に一言だけ私に残します。

「今日の分は、明日に錬金をお願いします。公式には無かった決闘で、貴重な在庫を削るなどあり得ませんから」

「うわあ、厳しいなあ。シエスタ、その本を取って」

「はい」

それでも、欠々に丸一日の休養を得た私は、ベッドに横になりながらダラダラと本を読んで過ごすのでした。

「誰も見舞いには来ないか。今は、授業中だしね」

一方のギーシュは、同じく一人室内で横になっていた。

ボロボロの服を捨ててから、体中に持っている薬を塗り込み。

自分で包帯を巻いて、ベッドに横になっていたのだ。

普通、貴族は従者に怪我の治療をさせるのだが、その従者がいなくなつた時の事を考えて、グラモン家の人間は怪我の応急処置くらいは出来るようになっていた。

それに、今は学生でしかない四男の自分に専属の家臣など存在しないのだ。

領地に居た時や、魔法学院入学時には臨時で付けられていたが、それは父が臨時で自分に付けているだけの存在で、本来の所属は父の家臣であった。

自分の弟のように大金を稼ぐようになったので、将来の分家化を見越して移籍しているアシル達のような者達は自分には存在しなかった。

居たとしても、雇うお金が無いのが実情であったが。

「ティーボの奴、本当に僕を殺すつもりだったようだね」

ギーシュは、左肩から斜めに浅く斬り付けられた傷を指でなぞりながら独り言を言う。

既にカサブタで塞がっているくらいの浅めの傷であったが、もしあの時に身を引くのが一瞬でも遅かったら、自分は致命傷を受けていたであろう。

そして、もしそれで自分が死んでも、あの弟は決して罰せられな

い。

全て自分の自業自得であったが、自分はあの有能な弟に嫌味を言い、嫌がらせを続けていた。

能力のあるティーボに同情する人は多いが、自分を庇う人など誰もいないであろう。

だが、それでも一度で良いから自分はその弟と本気で戦ってみたかった。

勝って、自分の能力を示したかったのだ。

「でも、それを望んだのはあなたでしょう。ギーシュ」

「モンモランシーか……」

いつの間にか、室内には数個の薬瓶を抱えたモンモランシーが立っていた。

アシルの言う手配とは、自分の部下ではなくてギーシュが治療や薬剤の施しを否定しない人物。

つまり、以前からの顔見知りであるモンモランシーという事であった。

アシルは、秘かにモンモランシーに声をかけて彼女に薬の類を渡し、ギーシュの治療を依頼していた。

「アシルさんにも、タバサにもキュルケにも聞いたわよ。関係者以外には、秘密という事になっていただけ……」

モンモランシーは、挨拶もそこそこにギーシュに傷に高価な薬を塗り、ヒーリングの魔法をかけていく。

すると、胸の斜めの傷のみならず、顔の腫れや体中の痣なども消えて行った。

「ティーボの差し金かい？」

「そうよ。明日ボロボロのギーシュが授業に出たら、決闘がバレるじゃないの」

モンモランシーは、敢えて嘘を付かなかった。

何を思ったのか？

突然命をかけた決闘を行ったギーシュに対する怒りと、それにわざわざ釣られて決闘をするその弟であるティーボに対しての怒り。

だが、ティーボの方にはそれを受け入れる土壌が存在していた。

十数年間も、ギーシュに卑しい血を持つ弟だと言われ続けていたのだから。

だが、ギーシュの方は、わざわざ決闘を挑む理由がわからなかった。

聞けば、ギーシュが声をかけていた女の子が、ティーボに声をかけたからという下らない理由らしい。

だが、それだけで命をかける理由がわからなかったのだ。

「挑発に乗ったティーボもバカだけど。ギーシュ、あなたはもつとバカよ。ティーボに何かあったら、あなた最低でも勘当されるわよ」

ギーシュに包帯を巻きながら、モンモランシーが説教をする。

グラモン領の経済の要であり、王宮からの評価も高いティーボを決闘で殺した事が知れたら、下手をすれば収監される可能性もあったのだ。

少なくとも、父親であるグラモン伯爵からは見捨てられる事が確実であった。

「あなたはいつもは気障な癖に、どうしてティーボだけにはああいう態度を取るのよ」

普段のギーシュは、気障で大仰しい態度と発言と、あまり陰湿で暗いイメージを感じさせない男だ。

ところがティーボの話になると別で、途端に普段の明るい態度や発言が一変してしまうのだ。

「モンモランシー、せつかくの君自らの手当てなのに。一緒に紡ぎ出される言葉は厳しい物があるね。せつかく、綺麗な声なのに」

いつもの口調で語るギーシュであったが、彼は突然口調を変えていた。

「僕も、聖人君子ではないのでね」

「ギーシュ、あなた……」

ギーシュは、低いトーンの声でモンモランシーに自分の思っていた事を話し始める。

五歳の頃に、弟と別々に魔法の特訓を始めた。

自分なりに上手くは行ったものの、弟の実力が気になったので秘かに様子を伺うと、弟は自分よりも上手に魔法を使っていた。

ところが、初めて父に魔法を披露する際には、彼はわざと魔法の精度を落としていた。

大きくなるにつれて、それが日陰者の子として生まれた弟なりの処世術である事は理解したが、それでも気に入らない事も事実であ

った。

そしてその内に、弟は自分とは違って錬金の魔法で大きな評価を得るに至る。

昔は自分に気を使って大人しくしていた癖に、今では自分よりも遙かに上の立場になり、自分にも暴言を吐くようになった。

余計に気に入らなかったし、それで決闘を挑んでも以前とは違ってそれを受け入れなくなっていた。

だからこそ、本気での決闘でティーボを破る。

そう考えての行動だったと。

「暴言というよりは、ティーボの堪忍袋の緒が切れたのよ」

「知っているさ。それでも、腹が立ったのさ」

「少しは、気は紛れたの？」

「少しだね。やはり、魔力では全く歯が立たない」

決闘中にスクウェアクラスへの成長を遂げた自分ではあったが、相手は接近戦闘には比較的弱いという欠点を抱えていた。

それに、メイジとしてはスクウェアでもかなり上位の魔力を持っていた。

同じクラスでも、まだかなりの差があったのだ。

「でも、ティーボは戦闘なんて嫌いだと思っわ」

「だろうね。錬金バカだし、奴が戦場に出る事はないだろう」

ギーシュとて、わかっているのだ。

もし戦争になっても、あの弟は戦場には出ないのだと。

前線に行くよりも、後で戦費でも稼いでいた方がよっぽど国家に貢献できると。

自分とは、まるで種類が違う人間なのだともだ。

「なら、お互いを認めて仲良くしなさいよ」

「モンモランシーの美しい声だからこそ、耳には入れておくよ。確約は出来ないね」

治療の終わったギーシュは、そのまま横になってしまう。

モンモランシーとしては、今回の決闘騒ぎが二人の融和に繋がればと願いながらギーシュの部屋をあとにするのであった。

「ねえ、ティーボ」

「何だい？ モンモランシー」

そして翌日。

一日で傷が癒えて学院授業に出席した私でしたが、その日は特に何も起こりませんでした。

ギーシュも同様に普通に授業に出席していましたが、勿論話す事などありません。

お互いに一瞥してから、それぞれの席に座ります。

その日の授業は淡々と進み、私達は会話もなく。

ただ唯一の違いは、ギーシュの私への陰口や嫌味の類が一切無くなつた事でしょうか？

更に放課後になり、私は昨日の分と二日分の錬金をしていると、いつも通りに才人が紫電改を訓練で飛ばし。

それを見たモンモランシーが話しかけてきます。

なぜなら、その後部座席にはギーシュの姿があつたからです。

「ギーシュを乗せてもいいの？」

「知らん。奴が勝手に乗っているだけだ」

「でも、整備とか燃料とかでお金が……」

先日、それを理由に私がギーシュの紫電改への搭乗を拒否していたのをモンモランシーは知っていたので、気になっているようでした。

「整備は定期的にやらないといけないが、今ではミスタ・コルベルの方が上手に出来る。燃料は、現在在庫を増やすべく懸命に増産している。これも、ミスタ・コルベルがメインなんだ。大した手間でもない」

ぶつきらぼうに答えながら、私は錬金の作業に戻ります。

本気で決闘して仲直りとか。

良く物語りにありますけど、一体誰が考えたんでしょうね？

私は、そんな物には影響されないので。

今回の件で、ギーシュが自分の足を引っ張らなくなった。
これで十分じゃないですか。
そう思いつつ、私は錬金の作業に没頭するのでした。

二十二話

「おかしいな？ 経験者なのに、全然勝てないなんて……」

「才人が弱いんだろうな。それも、致命的に」

「あんまり経験ないからな。アクションゲームとか格闘物なら得意だぜ」

「何よそれ？」

ギーシュとの決闘騒ぎから数日後、私は珍しく女子寮にあるルイズの部屋を訪ねていました。

いくつかの所用があったからなのですが、私が自分から女子寮の部屋になど行く事は非常に珍しいです。

変な誤解をされると困りますしね。

本当に付き合っているのなら、別に噂になっても良いんですけど。私とルイズは、そういう関係ではないので。

それで、肝心の来訪の目的の一つは、ルイズの母親であるカリィ又への贈り物の相談でした。

何歳かは怖くて聞く勇気がなかったのですが、彼女に贈る誕生日プレゼントで、私に何かの装飾品を作って欲しいそうなのです。

それと、このハルケギニアに平成日本から飛ばされて苦労している才人へのお見舞いもありました。

いくつかの、私が独自に作らせているゲームの試作品が完成していたので、それを持って部屋を訪れていたのです。

「ティーボ、このリバーシーってゲーム。奥が深くて面白いわね。あなたが考えたの？」

「いや、普通にトリスタニアの雑貨屋に売られていた。東方から流れて来た物だそうだ」

所謂オセロですが、実際にトリスタニアの雑貨屋で普通に売られていました。

ところが、置く石が半分ほどしか残っておらず、何かのゲームらしい事には店の主人も気が付いていたらしいのですが、使い方がわからないので安値で店の隅に置かれていたのです。

確かに、石の足りないオセロなど使い方が意味不明でしょうし。

私はすぐに購入して白と黒の石を錬金で増やし、領内の職人に量産して売るように命令しました。

他にも、囲碁とか、将棋とか、花札とか、軍人将棋とか、ウノだとか。

東方から流れて来た物という事になっていましたが、実際には異世界である日本から紛れ込んでいる品物は多く。

私は、それを修復して説明書も翻訳・復元して領内の職人に作らせていました。

このくらいのものであれば、見本さえ作れば職人が対応してくれるものなのです。

結果は、人気が出て注文が追いつかないので領外からも多数の職人が移住を開始。

すぐに目端の利く人間が領内で遊戯商品関連のギルドを作って、うちに上納金を納めるようになりました。

このハルケギニアの世界では、ギルドと組むと色々と商売的に有利ですからね。

閉鎖的と言う人もいますが、私は別に自由主義経済学者でもないのです。

私の死後に、歴史が進めば近代的な株式会社が出来るかもしれないせんし。

「煎餅が、美味しいなあ……」

そして才人は、試作した煎餅を食べていました。

実が数年前にもち米も見つけていたので、餅やら煎餅の生産も開始していたのです。

例のタルブの村で醤油や味噌も発見され、材料が全て揃ったのは僥倖でした。

私には、醤油や味噌など作れませんからね。

このように、私は見本を作ったり、書籍の翻訳を職人に渡して同じ物を作るように命令します。

わざわざ自分がやると時間や手間もかかりますし、素人など思ったほど上手くいくわけでもないですし。

餅は餅屋で、プロに任せの方が楽ですしね。

ヒントを与えると、彼らは意外と早く答えに到達するものなのです。

新しいアイデアを貰った彼らはグラモン領内で生産を開始し、ヒットしたら同種の職人を呼び寄せて規模を拡大。

領内のギルド組合が、下部ギルドを作って上納金と税金を集めるシステムを構築する。

この繰り返しで、グラモン領内の経済力と人口は大きく増加して

いました。

これに伴う治安の悪化や機密情報の流出などは、これは領内にいる武道派の家臣達の仕事です。

当然、諜報関係の家臣もいますので、彼らが秘かに領内を回って監視などを続けています。

私にはその手の知識が無いので、完全に父や兄達に任せているのです。

出来もしない事や、努力の割りに成果があがらない事に時間をかけても効率が悪いですし。

長年家を保たせている貴族家には、色々と表立って言えないような必要悪な暗部という物が存在しますしね。

将来的には、色々と報告を受けたり、指示くらいは出す立場になるのでしょうか。

「良く色々と考え付くものね」

「東方から流れて来たという本を、リードランゲージで翻訳しているからな。俺が考えているわけじゃない」

ルイズの発言に、才人の方がビクつとなっていました。

『ティーボ・ド・グラモンの前世が日本人で、初めから知っていたから』なんて、才人が言った時点で彼は狂人扱いでしょうからね。もしくは、私への中傷という事で処罰されかねないですし。

言わぬが華だと思っっているようです。

ところで、私は普通に読める東方産と称されるこれらの書籍類。

実は、リードランゲージというコモンマジックで容易に内容が理

解けるのですが、この世界のメイジ達はどうして本の内容を解析して役に立てようと考えないのでしょうか？

本当に不思議です。

「でも、この煎餅って変わった味で美味しいわね。ティーボが見つけた本に製法が書かれていたという事は、サイトのいた東方の出身なのね」

才人は、ルイズに自分は異世界から来たと常々言っているらしいのですが、ルイズは才人を東方から来たと思っっているようです。

信じられていませんね。

まあ、世間的にはそうしておいた方が色々と面倒が無くて良いのでしょうが。

三人で煎餅を齧って緑茶を飲みながらオセロをしていると、ルイズの部屋のドアがノックされました。

「誰か来る予定でも？」

「まさか」

ルイズがドアを開けると、そこにフードを深く被った人物が勢い良く室内に流れ込んで来ます。

見た感じで、その人は女性のようにでした。

「どちら様で？」

「どこに目と耳があるかわかりませんからね。先に、調べさせていただきます」

フードを深く被った女性は杖を出してからディティクトマジックでルイズの部屋を探ります。

目と耳って、ルイズの部屋に出菌亀や盗聴魔でもいるのでしょうかね？

ルイズタン、ハアハアですか？

ハルケニギアには……。

いないと思うんですけどね……。

「お久しぶりです……。いえ、使い魔の品評会以来ですか」

その女性がフードを取って正体を明かしますが、私達はあまりの驚きに声が出ません。

その人物は、この国の名目上のトップであるアンリエッタ王女。

つまり、私に錬金の二つ名を付けた人物でした。

「ルイズ。私、結婚する事になったの」

こんな夜中に、秘かに一人でトリスタニアの王城から離れた魔法学院に現れる。

まさか友情を確認しに極秘で来たとも思えないので、物語的には極秘な相談事でもあるのでしょうか？

実際には、物語ではなくてルイズの未来なのでしょうか。

勿論、彼女のには極秘でも、彼女がここにいる事はマザリーニ枢機卿や、魔法衛士隊にはお見通しなのでしょうが。

でなければ、彼女がここにいるはずありません。

途中で連れ戻されるのがオチでしょう。

そんな、久しぶりに見たわが国の王女様ですが。

綺麗だし、こんな彼女がいたら最高なんだろうなと普通に男として思うのですが。

所詮は高値の花ですしね。

それに、政略結婚が王族のお姫様の宿命ですから。

だからこそ、普段は贅沢な暮らしとかも可能なわけですし。

「ゲルマニアにですか？ あんな野蛮な国へどうして！」

「同盟を結ぶために仕方が無いのよ」

アンリエッタ王女は、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐらしいですね。

自分でそう話しています。

それに、ルイズはそうは言いますが、現状で小国のトリスティンが生き残るためには仕方が無いですね。

確か、レコン・キスタですか。

現在アルビオンで絶賛反乱中で、しかもかなり王族側が分が悪いとか。

どうして知っているのかですって？

それは、うちには金属を買いに来る各国の商人がわんさかいます。

少しでも安く買えるように、多く買えるように。

私達に色々と情報を落として行く商人が多いのです。

情報収集の手段は、別に非合法的な密偵だけではないのです。

商人は、金と物資の流れに敏感です。

よって、現在白の国と呼ばれているアルビオンで発生している内乱の戦況がどうなっているのか。

知らない奴は、儲ける事は不可能ですからね。

そして、不利が伝えられている王族側が負ければ、次は大陸への橋頭堡となるトリステインが狙われるわけですね。

彼らの最終目標は聖地奪還。

彼らの正義はそれしかないのです、とにかく前に進み続ける事ですか組織を維持する方法がないのです。

戦略的には結構詰んでいる祖国ですが、現状で軍人や政治家でもない私に出来る事などありません。

アシルに情報を集めさせて、父に報告するくらいです。

それと、私が錬金で金を稼ぐ事ですか。

最悪、グラモン家が残れば良いのですから。

目の前の姫様には、悪いと思うのですが。

「今のトリステインでは、単独でレコン・キスタに立ち向かう力がありません」

だからこそ、同盟と婚姻なんですよ。

戦いが嫌いな、普通の？トリステイン貴族の私からすれば、同盟は大歓迎です。

トリステインのトップが隣国に嫁いでしまうので国家消滅の危機ですが、他にも王族と血の繋がりのある貴族はいますし、最悪ゲルマニアに吸収されても、上手く立ち回ればグラモン家は安泰でしょう。

ルイズのように、ただ成り上がりの野蛮な国だと批判しているわけにもいきません。

この世界では、いくら権力者の貴族でも付く国や勢力を間違えたらすぐに一家滅亡フラグ発生ですし。

私は、卑怯にもトリステインに万が一の事があった際には、自分の特技を売りに生き残ろうと考えてしました。

「ところで、錬金殿はどうしてルイズの部屋に？ まさか、二人は付き合っているのでは？」

「どうやら、私の事を覚えていたようですね。

「一応有名人ですし、もし忘れられていたらどうしようかと思っていました。」

「姫様！ そそそっ！ そんな事はありません！」

「いや、そこまで全力で否定しなくても……」

ルイズが真っ赤な顔をしながら全力で否定しますが、男としてそれは微妙にシヨックです。

確かに、二人の関係はと聞かれれば普通に友達同士なのですが。

「そうなのですか。ところで、もう一人の方は？」

ルイズは才人を自分の使い魔だと紹介し、アンリエッタ王女は人間を召喚したルイズを珍しがっていました。

「錬金殿とは、品評会の前はラグドリアン湖の園遊会以来ですね。ほとんど顔を合わせた事がないのに印象が深いですね」

良く宝石や真珠の製造依頼は王家から受けるのですが、配達は私の家臣がやっていたので、本当にこれが三回目のアンリエッタ王女との再会であったのです。

一国の王女になんて、貴族のドラ息子がそう会えるものでもありませんし。

どちらかと言うと、マザリーニ枢機卿の方が縁深いんですよね。

彼女は、公務で毎日色々な人と会っているはずですよ。

余興で私に二つ名を付けたもの、既に忘れている可能性も考慮していました。

自分は覚えられていて当たり前とか考えると、足元を救われますし。

精神にショックを受けるでしょうから。

「あの時に貰ったピンクパールのネックレスは、大切にしていますよ」

おかげで、まるで注文が追いつかない状態ですが。

アンリエッタ王女ご愛用のせいで、変なブームになってしまったので。

天然物は値段だけでなく数が無いので、どうしても欲しい人は私に依頼すればと考えてしまっているのです。

これも家臣達に方法を教えているのですが、彼らはどうして夜店のプラスチック製の玩具のような真珠しか作れないのでしょうか？

しかも、変に魔力を消耗し過ぎてしまいますし。

ただ、一つの光明がありました。

最近雇ったミス・ロングビルが、かなり良い線の真珠を錬金していたのです。

まだ売り物にはなりませんし、他の仕事の合間の練習なので全力で訓練とはいきませんが、もし彼女が私並みの真珠の錬金に成功したら。

上手く丸投げ可能ですね。

真珠なんて面倒な物は、彼女から買い取ってしまえば良いのです。流通にかかる手間と、その他の面倒な事から彼女を保護して手数料をいただく。

うちの奥様の手法ですね。

女性で真珠を錬金可能とか、下手をすると誘拐とかされてしまいますし。

「それは、光栄にございます。では、私はこれで……」

夜に、この国の王女様が突如お忍びで来訪する。

どう考えても、この先の話は聞かない方が幸せです。

私は、継るような目付きをする才人に心の中でエールを送ってから、部屋を出ようとします。

ところが、ドアを開けた瞬間に何かが室内に倒れこんで来ました。

「ギーシュか……」

倒れ込んで来たのは、私の兄であるギーシュでした。

どうやら、室内での会話を盗み聞きしていたようなのです。

「何をしているんだ？」

「ティーボこそ、どうしてそこで席を立つ？」

質問に質問とか、本当に親の顔が見てみたいですね。

ああ、父親は同じですね。

「お忍びでわざわざいらした姫様に対し、話も聞かずに去るとは不敬の極み」

確かに世間一般的にはそうなのでしょうが、私の場合には事情が違います。

彼女が何を話すのか？

それとも、何の極秘のお願い事をするのかは知りませんが、私がそれに関わるのは良くないと思うのです。

私には毎日の錬金の仕事があるので、そんな余計な事に関わってられないのですから。

私の錬金が一日止まれば、在庫が減るのでアシルが渋い顔をします。

二日目以降から徐々に彼の顔は青みを増すでしょうが、もし一週間を超えたら彼は倒れてしまうでしょうね。

なので、私が彼女のお願いを聞くのは無しです。

個人的には美人の願いなので聞いてあげたいのですが、私の欲望と周辺の事情は全く違いますし。

「じゃあ、ギーシュが話を聞いてくれ。兄に譲るよ。俺は妾の子だし」

私は、ギーシュをアンリエッタ王女に紹介します。

彼は、王女様に会えた感動からか？

恭しく一礼をしながら、自分が彼女の相談に乗る旨を伝えます。

その所作は、本当に私の何倍も貴族らしいですね。

本当に、都合良く盾を見つける事に成功して良かったです。

「では、任せて安心という事で……」

「待ってください！」

ところが、その私を止めるアンリエッタ王女の声。
結局、私も彼女の話の話を聞く事になってしまふのでした。

「（はあ……、聞かなきゃ良かった……）」

ギーシュという乱入者のせいで話が中断しましたが、突如ルイズの部屋に現れたアンリエッタ王女は、自分の来訪目的を話し始めます。

「ある物を、取り戻して来て欲しいのです」

簡単に要約すると、現在絶賛内戦中のアルビオンの皇太子から、昔に自分が送ったラブレターを取り戻して欲しい。
そういう事のようにでした。

いかにも、世間知らずなお姫様の言いそうな事です。

何でも、そのラブレターがレコン・キスタの手によって表沙汰になると自分がゲルマニアへと嫁げなくなり。

同盟が不成立となって、トリステインが単独でレコン・キスタに立ち向かわなければならなくなるとの話でした。

「一つ宜しいですか？」

「はい」

「どうして、ラブレター如きで？」

一国の王女と皇帝の婚姻なので、これは当然政略結婚なわけですから、どこかの三角関係がウリのドラマではないのですから、アンリエッタ王女がどこの皇太子を好いていようと、そんな物は何も婚姻の障害にはならないはずですよ。

それに、このまま内乱が推移すれば、ラブレターを贈った主であるアルビオン皇太子はすぐにこの世からいなくなるでしょう。手紙も、燃えてしまいかもしれません。

「ゲルマニアの皇帝が、アンリエッタ様の過去に好きな人など気にしないとしますがね」

四十過ぎのオツさんが、十七歳の少女の過去の好きな人など気にするでしょうか？

王族や皇族は、決まった政略結婚こそが重要なのですから。

更にアンリエッタ王女は、話の中に殊更レコン・キスタが同盟締結を阻止しようと動いているので、その手紙は確実に回収されなければならぬと言っています。

それと、この件はほとんど誰にも話しておらず、そのために極秘で手紙を回収する人員を送りたい。

今の自分には、ルイズしか頼れる人がいないと。

ですが、彼女の本心はそれでないのでしょ。

彼女は、アルビオンが完全にレコン・キスタの手に落ちるまでに、ウェールズ皇太子に亡命をして欲しい。そういう事なのかもしれません。

他の家臣には言えないが、ルイズになら言える。幼馴染に甘えているとも考えられます。

それに、我々がわざわざ行かなくても。

もしウェールズ皇太子がバカでなければ、そんなラブレターは自分で始末してしまうでしょうし。

自分で燃やすか、滅びの炎の中で燃えるか。その程度の差だと私は思うのです。

「姫様が他に頼る者がいないと言っているのだ。トリスティン貴族たる我らが、ここで動かないでどうするんだい？」

気障なギーシュの意見は続きます。

彼からすれば、貴族が王族のために動くのは当たり前という事なのでしよう。

確かに、世間一般ではそうかもしれません。

ですが、私がそんな任務でアルビオンに出かけて本当に良いのでしょうか？

その間に、誰が錬金をするのでしょうか？
私の疑問はこれだけです。

一応の訓練は受けているものの、軍人としては素人で。現在のアルビオンの状況を考えると、任務は潜入というレベルにまで難しくなります。

余計に、私達にはハードルが高いのです。

「姫様、このギーシュ・ド・グラモンにお任せを」

「姫様、この私めにお任せを」

人が懸命に考えている横では、深くも考えないでギーシュとルイズがアンリエッタ王女の依頼を安請け合っていました。

いくら姫様の依頼とはいえ、学生でしかない二人が内戦中の国に潜入を行う。

こんなに危険な任務はありません。

極秘なので、アルビオン軍に捕まって情報の行き違いで殺される事もありますし、レコン・キスタに捕まれば絶対に殺されるでしょう。

戦場のドサクサで、人が死ぬ事など良くあるのですから。

「ですが、大切なお友達であるルイズを……」

そんな事を言っていますが、なら最初からここに来てルイズに頼むなよという話です。

勿論、表向きは普通の貴族である私は何も言いませんが。

才人は、『何かをやらされるのか?』という顔をしていますし、ギーシュは微妙にスルーされていますし。

「姫様! このルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールにお任せください!」

「ルイズ……」

結局、ルイズはアンリエッタ王女からの秘密を依頼を受けてしま

いました。

勿論ギーシュも無条件に依頼を了解し、私は『やっぱり何をやらされるんだな』という表情をする才人を見る事しか出来ないのでした。

可哀想ですが、私は関係ないですし。

機密ですか？

そんな危険な任務に行かなくても良いのなら、私の口はは物凄く堅いですよ。

墓場を持って行っても良いくらいですし。

「ティーボ、この任務に同行できる喜びを噛み締めたまえ」

「……」

そして翌日の早朝。

私はアルビオンへと向かうルイズ、才人、ギーシュ達の一行になぜか混じっていました。

というか、私はどうしてこれに参加させられようとしているのでしょうか？

私には、一日でも止めるとグラモン領に影響のある鍊金を毎日しているのに。

もしその極秘任務で、私がレコン・キスタに捕まったり、最悪死んだりでもしたら？

アンリエッタ王女は、実は色々と頭の可哀想な子なのかもしれま

せん。

それでも、私も任務に参加しないと駄目らしいのです。

『お友達を守って欲しい』とか言っていますが、なら最初からそんな危険な任務は頼まないで欲しいのですよ。

しかも、なまじこの国のトップで影響力があるのはいただけません。

せめて、ちゃんと物事を考えられるようになってから権力を行使して欲しいのです。

「ところで、一つ聞くのだが」

私は、元氣一杯で馬を準備しているルイズとギーシュに質問をします。

「ルイズ達は、馬で何日もかけてアルビオンに行くのか？」

正確には、ここより馬で二日ほどの場所にあるラ・ロシエールの港から、アルビオンへと船で行くのが普通なのでしょうが。

ちなみに、アルビオンは空中に浮遊している大陸です。

船も空を飛ぶ空中船となっています。

「他に手段が無いじゃない」

同じく、馬の準備をしているルイズが答えます。

「本気で言っているのか？　今まで散々にアレに乗ってた癖に」

私がルイズに言うアレとは、才人が操縦可能な紫電改の事でした。

謎のルーンのおかげで紫電改を操縦できるのですから、それに乗ってアルビオンへと行き、極秘任務を達成すれば良いのです。そのために苦勞して改良し、ドロップタンクの錬金や航続距離まで伸ばしたのですから。

「だが、あの竜の羽衣だと二人しか乗れないだろう」

「二人で、十分じゃないか」

私は、ギーシュの意見にも反論します。

素人ばかりの学生でゾロゾロと戦地に行くよりは、素早く少人数で現地に行つて目的を達成して戻つて来る。

そちらの方が効率も良いですし、情報漏えいを防げるという物もあります。

アンリエッタ王女は、その手紙がレコン・キスタに渡つたら拙いと考えているのですから、あるかもしれない敵の妨害を防ぐ意味でも、ここは極秘行動の方が作戦の成功率が高いはずですよ。

「初の長距離飛行行つてみよう！」

というわけで、私は朝から研究小屋に籠っていたミスタ・コルベールを呼び出し、錬金小屋から整備と給油を終えた紫電改を出して、臨時の滑走路の端に置きます。

「地図の見方は大丈夫かな？ サイト君」

「ええ、不思議とわかりますね」

操縦席に座る才人が、ミスタ・コルベールと最後の打ち合わせを

します。

彼はこちらの事情を察して、快く力を貸してくれました。

この人は、本当に良い先生ですね。

「なるほど。さすがは……、おっと！ コンパスの使い方も大丈夫だね？」

初めて振るう剣が上手く使えたり、経験が無いのに第二次世界大戦時の戦闘機が操縦でき、航法まで問題なく。

どうやら、才人の右手に刻まれたルーンの影響らしいのですが、事情を知っているミスタ・コルベールは私達には何も教えてくれませんでした。

操縦席に才人が、後部の座席にギーシュが乗り込みます。

そしてギーシュには、アンリエッタ王女からの使者である事がわかるように、典礼用の高級な服装をさせます。

「ティーボ。どうして後の席はギーシュなわけ？」

紫電改は二人乗りなので、置いていかれる事となったルイズが私に文句を言います。

自分がアンリエッタ王女から直接に依頼を受け、饞別に水のルビィまで貰っているのに、残るのが嫌らしいのです。

ですが、いくら爆発の魔法が使えるとはいえ。

貴族の令嬢を戦地に行かせるのは危険です。

というか、アンリエッタ王女はこの件がヴァリエール公爵にバレた時のリスクについて何も考えなかったのでしょうか？

ルイズに何かあったら、確実にヴァリエール公爵家の怒りを買う

のですが……。
下手をしたら離反フラグですし。

その点、ギーシュなら死んでも私の心も大して痛みません。
自分で行きたいと言っていますし、四男の功績稼ぎには最良の任務でしょう。

「いくら極秘任務とはいえ、女子学生の戦地行きは不可だな。それに、ルイズは使い魔の才人に命令を出した。貴族としては、これですごく十分だ」

「ギーシュはどうなのよ？」

「うちは、軍人家系だからな。ルイズが行くより数倍もマシ」

「敵地への侵入と使者の任は任せたまえ」

紫電改の後部座席で、ギーシュは胸を張って答えていました。

「死んで来てもいいぞ。任務さえ果たしてくれれば。最悪、才人に交渉の成果を持ち帰らせれば任務は成功だ。アルビオンで、ギーシュが朽ち果ててもな」

「減らず口を」

後部座席に座っているギーシュと口喧嘩をしながら、紫電改の発進準備は滞りなく進みます。

「現在の王国側の拠点は、ニューカッスルのみ。いつ滅亡しても不思議は無い状態だな。なるべく急いだ方が良い。ギーシュ、父上か

らの書状だ。身分を疑われたら、向こうの人間に渡ししてくれ」

私は多数の商人達から聞いた、現在のアルビオンの情勢を才人とギーシュに伝えます。

「いつの間に、こんな物を？」

ギーシュは不思議に思っているようですが、アンリエッタ王女が帰ってから後。

私はトリスタニアに向かって家臣に早馬を走らせ、現在王城で軍の任務に就いている父の別邸に使者を送っていました。

今回の件の詳細な報告と、自分なりのこれからの展望を伝えたのです。

すると、もし誰がアルビオンに向かってても現地の王族や貴族達に身分を疑われないように手紙を認めてくれたのです。

これと、アンリエッタ王女から預かっている水のルビーがあれば多分大丈夫でしょう。

彼女のウェールズ皇太子への手紙は、私達が中身を読むわけにはいかないのですから。

「相変わらず、知恵だけは回るようだね」

「大きなお世話だ。それと、もう一つ父上からの伝言だ」

「何かな？」

「レコン・キスタがアルビオンで止まるはずもない。次の標的はトリスティンであろう。短い滞在時間となるうが、なるべくどんな些細な情報でも良いから目に耳に入れて来いだそうだ」

「戦争か……。確かに、その可能性は高いね」

私達兄弟の話にギョっとするミスタ・コルベールとルイズをよそに、発進準備を終えた紫電改は、臨時に造成した滑走路を使って一路アルビオンへと飛び立ちます。

「上手く行ったな」

「しかし、良く考えましたな。確かに竜の羽衣のスピードなら、往復一日で済みますしね」

ルイズも入れた三人で次第に小さくなる紫電改に手を振っていると、急に後から声をかけられます。

「今朝、君達がここを出ると聞いたのだが。どうして、君達は手を振っているのかな？ それと、あの鉄の鳥は何なのだ？」

私達の後には、グリフォンに乗った貴族らしく髭を蓄えた若い男がいたのでした。

二十三話

「僕は、魔法衛士隊グリフォン隊隊長の、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドだ」

才人とギーシュの乗る紫電改がアルビオンへと飛び立つのを見送っていた私達に声をかけて来たのは、王国でもトップクラスのエリートしか所属できない、三つある魔法衛士隊の一つ。

『グリフォン隊』の隊長であるワルド子爵でした。

「ワルド様！」

「久しぶりだね、ルイズ。君はまるで羽のように軽いな」

どうやら、ワルド子爵はルイズとは顔見知りのようです。

ルイズを両手で持ち上げる様は、まるで何かのお芝居にでも出てくるかのようなリア充でした。

領地持ちの貴族で、イケメンで、若くして魔法衛士隊隊長というエリートぶり。

うん、男の敵決定です。

「ワルド様は、どうしてここに？」

再会を喜びながらも、ルイズはワルド子爵にここに来た理由を尋ねます。

「魔法衛士隊は近衛だ。トリステイン王国ではなくて、トリステイン王家に忠誠を誓っている。アンリエッタ様からの直々のお願いさ」

私は、『なら、昨日の時点で最初からそう言っておけよ。アンリエッタ』と秘かに思っていました。

もし彼が来る事がわかっていたら、ギーシュではなくてワルド子爵を使者にすれば良かったのですから。

彼ならば、力量があつて実戦経験も豊富なはずなので、アルビオンに行かせるにはピッタリな人材だったのです。

ですが、既に紫電改は飛び立っていました。完全に手遅れです。

無線機は外していますし、そもそも最初から一台しかないので通信は出来ませんし。

「まあ立ち話も何ですし、朝食でも兼ねてどうです？」

私は、滑走路の隣にある錬金小屋の更に隣。

寮に入る前には寝泊りをしていた住宅に、ワルド子爵やミスタ・コルベール、ルイズを案内します。

中に入ると、事前に言つてあつたので既に雇っている料理人が朝食を準備していました。

シエスタも、すぐに給仕に入れるように紅茶の準備をしていました。

今日のシエスタの格好は、クドナルドの制服です。

これも、東方から流れて来たとのフレーズでトリスタニアの雑貨屋に売られていた物です。

相変わらず、流れて来た経緯は不明な商品でしたが。

「まずは、お席にどうぞ。シエスタ、料理人に一人前増やすように頼んで来てくれないか？」

「はい、わかりました」

暫くして追加の朝食が届き、私達はある程度食事をしてから話を始めます。

とはいっても、内容はワルド子爵が昨晚遅くに急遽アンリエッタ王女からルイズ達に同伴するように命令された事と。

私は、今から馬でラ・ロシエールに向かってそこから空中船でアルビオンに行くよりも、ここから竜の羽衣で素早く移動した方が安全だと思い、彼らを送り出したところだという話をワルド子爵にしていました。

「ある程度の人数での正規ルートよりも、空で少人数の方が安全だと?」

食後の紅茶を飲みながら、ワルド子爵が質問をしてきます。

「ええ。アルビオンは、もうそんなに保たないでしょうからね」

それに、ラ・ロシエールから商船をレンタルして行くよりも、紫電改のスピードで強引に突入した方が敵の阻止線を突破するのは容易でしょう。

紫電改と竜では、まるでスピードが違いますし。

「それが、各国の商人達と付き合いのある鍊金殿の意見なのかい?」

私は、特別政治状況などに詳しいわけではありません。

ですが、現在アルビオンの商人がほとんど姿を現さずに、少し前に大量の金属を買い占めている姿を目撃していました。

多分、戦争が激化して船が出せなくなる事を見越しての買い占めだったのでしょう。

そして現在では、アルビオン商人は滅多に見かけなくなりました。アルビオンへの船での渡航が難しくなったので、こちらを拠点にしている商人しか見かけなくなっていたのです。

「俺も、それほど詳しいわけではないですけどね。物を作って売っているので、流通の状態からの推論です」

「いや、君の意見は正しい。今のアルビオンは滅亡寸前の状態だ」

魔法衛士隊の隊長ともなれば、色々と情報が入って来るようですね。

それに、トリステイン王国とてバカではないので、隣国の状態くらはいは調べているでしょうし。

ですが、今のところのトリステイン王国は、アルビオンの内戦へは不介入が基本方針のようです。

いくら親戚筋の国でも、これはあくまでも内戦で。

向こうからの応援要請がなければ、他国は介入できません。

内政不干渉の原則に則っているでしょうね。

それと、今のトリステインでは援軍の要請に答えられないかもしれません。

国にトップがない影響がモロに出ているでしょうし。

更に、明日は我が身という話もあります。

だからこそ、アンリエッタ王女直々の手紙回収任務なのかもしれません。

私的には、これほど下らない任務は無いと思いますが。

それと、もう一人というかもう一国バカがいます。

プライドが邪魔して援軍を呼べなかったアルビオン王家です。内戦くらい自分でどうにかしないとか。

もし援軍を頼んだとしても、その援軍へのお礼やら。レコン・キスタ殲滅後に、新たな敵になったらとか。

色々と悩み抜いた末での事なのでしようが、ここまで追い詰められる前に、どうにかした方が良かったのにと私は思います。

アルビオンを病人に例えると。

手術を恐れて病魔が体中に広がり、既に手遅れの状態でいつ死んでもおかしくない。

こんな感じでしょうか？

あくまでも、私視点ですけど。

「ここまでになる前に、どうにか出来なかったのですか？」

「第三者から見ると、誰でもそう考えそうだがね。だが、彼らはこうなる事を選んでしまったんだよ」

「これから、トリステインはもっと大変かも」

「隣に、一番危険な仮想敵国が誕生するからね。しかも、あの空軍と竜騎士隊は脅威だ」

空中大陸に存在するアルビオンは、ハルケギニアでは一番の規模と質を誇る空中船艦隊と竜騎士隊を所持しています。

もし彼らが宣戦を布告して来たら？

普段は、大した常備戦力を所持していないトリステインです。

下手をしたら、その機動力で諸侯軍を招集する前にトリスタニアを落とされてしまうかもしれません。

「君の考えている事は、当然この国のお偉方も考えているよ。ただ考えてどうにかなるものでもないが……」

朝食後、結局アルビオンへと行かなかつたルイズは学校の授業へ。私は、才人達が大量に紫電改に積んで行つたガソリンの錬金を行います。

そしてその様子を、才人達の帰りを待つ事にしたワルド子爵が見学していました。

「例の竜の羽衣を飛ばすために必要な油か。非常に興味深いね」

「たまたま少量ですが竜の羽衣の中に残っていましたね。実物があつて良かったですよ。何とか錬金可能です」

石炭を原料にガソリンを錬金しながら、私はワルド子爵との話を続けます。

勿論、私の裏の事情などは絶対に話しません。

紫電改が無事に飛んだのは、機体の中に残存燃料があつたから。整備が可能なのは、固定化の魔法がかかつていたから。でなければ、未知の構造なので複製は難しいと。

王城に余計な報告をしないように、ちゃんと誤魔化して説明をします。

ですが、もし王国がこれを持ち帰っても多分運用は出来ないですよ。

私かミスタ・コルベールがいないと、今のところは絶対に不可能でした。

「錬金殿の噂は良く聞いているよ。君の兄君達が、良く王城の中で自慢しているからね」

ワルド子爵の話によると、兄達は私がプレゼントしたチタン合金製の杖や軍用の装備品を良く部下や同僚達に自慢しているそうです。何だか、聞いていると少し恥かしくなって来る話ですが。

「それに、君の錬金は王国に深く貢献している。マザリー二枢機卿も、君の事を褒めていたよ」

ガソリンとエンジンオイルの錬金を終え、ついでにという事でアルミニウムの錬金を始めた私に、更にワルド子爵の話は続きます。

「好きでやっている事ですからね。おかげで、軍人家系の息子なのに、腕っ節の方はサッパリですよ」

「そうかな？ 今、ガソリンという油を入れているタンクという入れ物から、君は数十メートルを歩いた。その動きだけで僕はこう思った。『王城にいる下手な士官よりも、よっぽど真面目に訓練している身のこなしだ』とね」

ワルド子爵の言う通りに毎日訓練はしている私ですが、果たしてそれが本当に実戦で通用するものなのか？

魔法衛士隊隊長という事で、これも彼なりのお世辞だと考えながら私は作業を続行します。

ですが、その時は気が付きませんでした。

後にミス・ロングビルから聞いたのですが、彼が私を見ながら何かを企むような笑みを浮かべていた事を……。

「竜の羽衣が戻るぞ！ 滑走路に明かりを灯せ！」

朝早くにアルビオンへと飛び立った紫電改でしたが、さすがは文明の利器ですね。

その日の夜遅くには、大きなエンジンとプロペラの音を響かせながら魔法学院の上空に現れていました。

それにしても、便利な能力ですね。

まるで経験の無い才人が、いきなりの夜間飛行。

普通なら、まずあり得ない事です。

私は、彼らは少なくとも朝にならないと現れないと思ったのですから。

「ご苦労だったな。才人、ギーシュ」

「何とか任務はこなしただけど、あの国はもう駄目だろう」

「今にもニューカッスルの城に総攻撃が始まりそうだったら、すぐに用事を済ませて戻って来た。例の物とウェールズ皇太子から預かった品物もある」

才人とギーシュは、特に迷う事も無く地図を頼りにニューカッスルの城に無事に着陸に成功し。

その足で、たまたまいーグル号で出撃する前のウェールズ皇太子と直接会う事に成功したようでした。

「まあ、細かい話は後だ」

鍊金小屋の隣にある私の別宅に全員で移動をし、そこで食事を取

りながら二人が話を進めます。

最初は、城を守る衛兵達に紫電改を怪しまれた才人とギーシュでしたが。

ギーシュが、ルイズから預かった水のルビーと父グラモン伯爵からの書状を見せると、彼らはすぐに城内に案内してくれ。

そこで、ウエルズ皇太子と少し話をする事が出来たそうです。

『そうか、私の可愛い従妹は結婚するのか……』

彼は、そう呟きながらアンリエッタ王女からの書状を読み。

すぐに宝石で飾られた箱から彼女から貰ったラブレターを差し出し、他にもアルビオン王家の家宝である風のルビーと、始祖のオルゴール。

そして、ウエルズ皇太子からアンリエッタ王女宛への手紙と。

他にも、アルビオン国王ジェームズ1世からも書状を貰って二人は急いで戻って来たようです。

「それで、城内の様子は？」

「完全な諦めムードだね。最後に精一杯の抵抗をして、歴史に名を刻もうとかそういうレベルだ」

ギーシュは、父から言われた少しでも向こうの様子を探ってくるという任務を、一応はちゃんと果たしているようでした。

「城内が三百人。明日にも迫る敵軍は五万。大天才軍師がいても、この状況はひっくり返せない」

「そうか。それも含めて、明日に王城に報告に行かないとな」

遅めの食事を終えた二人と、彼らから話を聞いていた私達は、明日王城に向かう事になったので、早めに就寝してしまう事にします。

「ルイズ。君が、アンリエッタ王女に頼まれた仕事だ。大切に持っていてくれ」

私は、ルイズに風のルビーと始祖のオルゴールと二通の手紙を渡します。

「そうだな。いくら極秘裏に持ち出したとはいえ、これをレコン・キスタの密偵などが狙ってくる可能性がある。僕も警護に入るが、慎重に取り扱って欲しい」

ワルド子爵からも同じ事を言われ、ルイズは緊張した表情で私から先の物品と手紙を預かります。

「とにかく、明日に備えて早く眠るべきだ」

その日は、全員がすぐに就寝して明日に備えるのでした。

「出発だ！」

そして、翌日の早朝。

私達は、馬に乗ってトリスタニアの王城を目指して出発します。

メンバーは、私、ギーシュ、ルイズ、才人、ワルド子爵。それと、他にも追加で付き添ってくれた人達がいきました。

「君達は、どうして？」

「オスマン学院長の命令です。ワルド子爵殿。いくら極秘任務でも、学生を教師や学院長に秘密で外国に行かせるのは感心しません」

「さようです。そこで、我らが付き添いと護衛をする事になりました。生徒の安全は、何よりも重要なので」

ミスタ・コルベールとミスタ・ギトーの二人が、私達に同行してくれる事になりました。

「いや、これは極秘の任務なので、大人数は拙い」

「今さら二人増えたところで、そう状況は変わらないと思いますけどね」

ワルド子爵の抗議を無視する形で、二人も馬に乗って私達に同行します。

ワルド子爵は、自分の乗って来たグリフォンに乗って上空の監視を行い。

他のメンバーも、全員が馬に乗って約二時間の道のりがスタートします。

私がふと錬金小屋の方に視線を送ると、アシルが意味あり気な感じで手を振っていたので、どうやら上手くオスマン学院長に話を通してくれたようです。

いくら秘密とはいえ、何の許可も無しに学院の学生がアルビオンに向かって何かがあったらそれは学院の責任になってしまうので、私が秘かにアシルに命令して、これまでの情報をオスマン学院長に流すように命令していたのです。

アシルは細かい任務内容はボカしたようですが、アンリエッタ王女がルイズを尋ねて何かを極秘裏に頼んだ事と、それでギーシュがアルビオンへと向かった事。

無事に任務に成功して、その成果を王城へと届ける事を報告していました。

そしてその成果が、二人の教師達の同行なのでしょう。

「サイトとギーシュは任務に成功したのに、随分と慎重なのね」

馬を走らせ始めて一時間ほど。

ルイズは、教師二人の護衛を大げさだと感じているようでした。

「あのラブレターで、トリステインとゲルマニアの同盟が潰せるかは不明だが。少なくとも、レコン・キスタは格好の材料だと思っているかもしれない。用心に越した事は無い。例えば、トリスタニアに到着する前に……」「危ない！」

突然、ミスタ・コルベールの大声が響き渡り。

同時に、彼は上空へと自分の杖を向けていました。

その杖から火炎の波が発生し、上空を飛んでいた複数の何かを焼き飛ばします。

良く見ると、それらは遠方から放たれた矢のようでした。

「敵襲だ！」

一番早く敵の襲撃に気が付いたミスタ・コルベールの命令により、私達はルイズを真ん中に円陣を作って前方から来る敵に備えます。

実は一つ引つかかる事があつたのですが、それを確認する前に前方から傭兵崩れだと思われる三十名弱ほどの集団を確認します。

明らかに、善意の募金活動をしている人達の集団などには見えません。

間違はなく、我々をどうにかするのが目的なのでしょう。

「数が多いな……」

ギーシュは、敵の数の多さに困った顔をしていました。

「少し減らすか」

私は、杖を持つとすぐに一体のゴーレムを生成して、それを敵の集団に向けて突撃させます。

いつもの下半身が四輪の、見た目がいつもとは違って黒っぽいゴーレムはかなりの速度で敵と思われる連中に突っ込んでいきます。

「ミスタ・コルベール。彼らの真ん中付近で着火させられますか？」

「任せたまえ」

前回のフーケが作り出した巨大ゴーレムとの戦闘の時と同じです。ただ前回よりは改良されていて、ゴーレムは空洞になっていて中は空気中の水蒸気を水素に分解して入れてあり、外は黒色火薬と一部セラミックで作ってあるのです。

当然、火を近付ければ大爆発です。

火薬と水素の爆発。

それと、一部混ぜてあるセラミック製の破片が周囲に飛び散って、周囲の人間を殺傷するのです。

戦場用に開発した魔法ですね。

どちらかと言うと、負傷者を増やして敵軍の戦力を落とすための魔法です。

ですが、勿論近くにいれば普通に死んでしまう事もあるでしょう。現に、爆発に巻き込まれた数名の傭兵が血塗れになって倒れていました。

他にも、五名ほどの傭兵が負傷をしているようでした。

「半分にも出来なかったか。しょうがないな」

残り十名を超える傭兵達に対して、ミスタ・コルベール、ミスタ・ギトー、ギーシュが前衛に立って迎撃を。

私と才人が、ルイズを挟むようにして彼女の護衛に入ります。

ですが、私にはまだ何か引かかっている事があったのです。

「待ち伏せか。これは、他にも増援がいる可能性があるな」

ミスタ・コルベールが火炎の魔法で、ミスタ・ギトーがエアカッターで、ギーシュがゴーレムを数体生成して傭兵達と戦っているとそこにグリフォンに乗ったワルド子爵が降りて来ました。

「ワルド隊長、本職に任せます」

私は、目前にいる傭兵達の始末を彼に頼むのですが。

「どうやら、彼の考えは別のところにあるようでした。」

「敵に増援を呼ばれると面倒だな。ルイズ、君の持っている宝と手紙は何よりも重要な物だ。私と一緒に先にトリスタニアへ」

ワルド子爵の言葉に、私は違和感の正体にようやく気が付きました。

今回のこの襲撃は、私でもある程度は予想できた事です。

これには、あのギーシュも気が付いていました。

なのに、オスマン学院長が寄越した教師二人に良い顔をしなかったり。

今回の襲撃に一番最初に気が付いたのが、ミスタ・コルベールだったり。

考えれば、おかしい事なのです。

グリフォンに乗って上空から偵察をしているはずの彼が、馬で走っているミスタ・コルベールよりも敵の存在に気が付くのが遅れた。しかも、彼ほどの手練れなら何とか出来るはずの傭兵達と戦おうとはせずに、ルイズを連れて先にトリスタニアへ向かうなどと言う。

次第に、私の心の中に彼に対する疑念の感情が沸いて来ます。

そして……。

「ティーボ君！ 身を引きなさい！」

本当に突然の事でした。

不意に耳に入ったミスタ・コルベールの叫び声。

幼い頃からの訓練の成果でしょうか？

ほぼ無意識でしたが、言われた通りに自分の身を引くと、左肩に

焼けるような痛みが走りました。

「なっ！」

更に、続けて才人が飛び込んで来て私の体を押し倒します。

最初はわけがわかりませんが、すぐに才人と一緒に体を起こすとその理由が理解できました。

ワルド子爵がレイピア型の杖で、私に連続してエア・ニードルでの攻撃を仕かけていたのです。

もし、ミスタ・コルベールと才人がいなければ、私は急所にエア・ニードルを受けていたはずです。

肩だけで済んだのは、むしろ幸運とも言えるでしょう。

ですが、その肩の怪我はかなり深刻でした。

動脈の一部を傷付けられたようで、予想以上の出血が続いていたからです。

「どういう事ですか？ ワルド子爵」

「頭の良い錬金殿の事だ。大よその想像は付いているのであろう？ ルイズの持っている手紙と宝が、トリスタニアの王城に着くのは拙いという事なのだよ」

「ワルド子爵。あなたは、レコン・キスタのスパイなのか……」

「その言葉は正しくはないね。僕は、このハルケギニアの新しい秩序のために動いているのだからね」

魔法学院とトリスタニアのちょうど中間地点で、私達は裏切り者

のワルド子爵と、彼が準備した傭兵団の襲撃を受け大ピンチに陥る
のでした。

二十四話

「ワルド様……、どうして?」

「ルイズ。君なら、僕の気高い理想を理解してくれるよね?」

魔法学院とトリスタニアのちょうど中間地点。

人気の無い街道で、私達は裏切り者のワルド子爵の準備した傭兵団の襲撃を受け。

私も、彼の突然の魔法によって肩をエア・ニードルで貫かれました。

「どうして、ティーボを殺そうとしたんです!」

「彼が非常に役に立つ人間だからだよ。生きていると、我々の理想に賛同してくれるかは不明だが。死体ならば、自由に動かせる」

ワルド子爵の言っている事の意味は不明でしたが、それでも私を死体にする事を躊躇しないらしいので、急いで杖を構えて臨戦態勢に入ります。

その横では才人もデルフリンガーを構え、ルイズもワルド子爵から離れて私達の方へと走って来ます。

「もうすぐ、アルビオン王家は滅ぶ。次は、君の予想通りにトリステインなわけだが。その前に、トリステイン王家の強化を防がなければならぬ」

そのための、アンリエッタ王女がウェールズ皇太子に認めたらブレターの奪取という事らしいのですが、この状況でも私は断言でき

ます。

トリステイン王家並びに、レコン・キスタの連中のバカさ加減に
です。

過去のラブレター一つで、国家間の同盟がどうにかなるとでも本
当に思ったのでしょうか？

「君は、あくまでもついでだね」

「じゃあ、見逃して欲しいですね」

ついでで殺されては、私も浮かぶ瀬がありませんし。

「いや。だが、実際に君の鍊金を見た僕はこう思った。これは、一
つの国の運命すら変えるかもしれないと」

『人の趣味に、いちいち大げさな人だな』と思う私でした。

グラモン領の金回りは良くなったはずですが、それがトリステイ
ン王国にどの程度まで波及したかなんて、いちいち数字を調べたわ
けでもありません。

私は、経済学者ではないのですから。

「だが、こうして君が生き残ってしまった今、素直に無礼を詫びよ
う。良くあの攻撃をかわしたね」

「ミスタ・コルベールの声が無ければ死んでいたでしょうね」

いくら基礎訓練はしていても、ワルド子爵の不意討ちを防げる技
量は私にありません。

という事は、私達の後で傭兵団と戦いつつも、ワルド子爵の急速
に増大する魔力と殺気に気が付いて声をかけたミスタ・コルベール

は、ひよっとするとワルド子爵に匹敵する手練れなのかもしれない。

「あの男の同伴を、もっと強引に断れば良かったのかな？ それは後で考えるところとして、改めて君に頼む事がある。ルイズと共にレコン・キスタに来て欲しい」

いきなりの勧誘に、私達は驚いてしまいます。

多分、私は錬金の腕を見込まれての勧誘でしょうが、ルイズがワルド子爵に誘われる理由が良くわかりませんでした。

「ルイズ、君は自分の魔法を失敗だと感じているようだが、それは違う！ 君は、伝説の虚無の担い手で、その人間の使い魔は伝説のガンダールヴなのだ！」

ワルド子爵の衝撃の発言に、私もルイズも声が出ませんでした。

「根拠はあるのでしょうか？」

「その使い魔の少年の左手に付いているルーン。以前に本で見たガンダールヴのルーンと全く同じ物だった。つまり、ルイズは伝説の系統である虚無の担い手なのだ。系統魔法が失敗するのは、それらの系統に拒絶反応を示すからなのだろうな」

私を負傷させて余裕なのか、ワルド子爵の丁寧な説明が続きます。私はエア・ニードルで貫かれた肩に杖を当ててヒーリングを唱えますが、怪我の度合いが酷くてなかなか出血が止まらない状態でした。

しかも、ミスタ・コルベール、ミスタ・ギトー、ギーシュの三人

は傭兵団の相手で精一杯。

ルイズは、顔見知りのワルド子爵と戦えるとは思えず、才人はまだその戦闘力が未知数です。

私も負傷していていますし。

ギーシュと引き分けたくらいでは、魔法衛士隊の隊長に敵うとは思えませんので。

そのくらい、近衛とはエリートが所属しているものなのです。

「さあ、ルイズ。僕の元に来るんだ。彼の出血は酷い。このまま戦闘に入って僕に勝てると思うかい？ 君と彼が、僕に協力をする。これが、二人とも生き残る唯一の道だよ」

余裕の表情で、ワルド子爵はルイズに条件を提示します。

その態度は、既に自分の勝ちだと言わんばかりの態度でした。

「少し時間を稼げば、あんな傭兵連中は先生達が始末する」

「誰があの中にメイジがいないと言ったのかね？ それと、あそこにいるのが全員だとでも？」

「お前は！」

不意に後からミスタ・コルベールの鋭い声が聞こえて来ました。

「おおっ！ その温度、俺は一度とて忘れた事はない！ そうだ！ 隊長だ！ 俺の目を焼いた隊長じゃないか！」

「ミスタ・コルベール、お知り合いで？」

「昔に少し……」

ミスタ・ギトーの質問に、彼は小さな声で答えます。
年齢はミスタ・コルベールと同じで四十代くらいでしょうか？
筋骨隆々とした体格と顔の左半分を覆う火傷の跡が特徴的ないか
にも歴戦の傭兵であるメイジは、顔見知りであるミスタ・コルベ
ールと一対一で壮絶な戦いを開始しました。

その力量たるや、両者とも驚異的なものがありました。

むしろ驚いたのは、それほどの傭兵メイジと互角かそれ以上に戦
うミスタ・コルベールの方かもしれません。

普段の穏やかな彼とは比べ物にならない、本当に実戦を知ってい
る男の戦い方でした。

「これで、誰も助けに来ない」

残ったミスタ・ギトーとギーシュの二人は、懸命に十名ほどにま
で減った傭兵達と戦いを続けています。

ですが、とてもこちらに助けに来る余裕は無いようでした。

「鍊金君は、どうしてこの国に拘る必要があるんだい？ 妾の子供
として生まれた。それだけでその能力を利用され、実の兄に目の仇
にされと実に不憫な状態ではないか。こちらで自由に実力を発揮す
れば良い。クロムウエル閣下は、確実に君を優遇するだろうね」

「……」

「ティーボ！ 惑わされないで！」

まさに、世間的には悪魔の囁きなのでしょう。

ですが、確かにギーシュは気に食わない奴ですが。
今の時点で、母やグラモン家の他の人達を裏切ってレコン・キスタに付く選択肢などまずあり得ませんでした。

どうにも、肩の出血が酷くて体がダルいですが、それだけは確かだったのです。

「クドイですね。若くして要職にあると、そこまで意固地になるものなのですか？ そんな潰れるとわかつている組織に、参加するわけがないじゃないですか」

「ワルド子爵殿。まだ僕とティーボの決着は付いていないんだ。勝手に連れて行かれると困る。それに、そいつは金儲けしか出来ない奴だが、父や兄達を裏切るような男ではない」

更に、いきなり後から誰かの声が聞こえます。

「どうやらギーシュの発言のようですが、その意外な内容に私のみならず、ルイズまでが驚いていました。」

「能力の高い弟に嫉妬して、彼を虐めている君が何を偉そうに」

ワルド子爵は、私達兄弟の関係についても良く調べているようでした。

「それは認めよう。僕も聖人君子ではないのでね。常に上に行く弟に心穏やかにいられるとでも？ あなたこそ、その若さで魔法衛士隊の隊長にまでなった実力と努力には敬意を表するが、その尊大なプライドがまだ足りないと思っっている。だから、こんな卑怯な裏切りを考えるわけだ。あなたも、僕とそう変わらないと思いますがね」

操っているゴーレムで傭兵を斬り殺しながら、ギーシュがワルド子爵に反論をします。

なるほど、彼は確かに私に嫉妬していたのですね。それを認めて言えるのは大した物ですが。

「ワルド様、私もあなたに付いて行きません。どうして、この国を裏切るのです！」

私にも、ルイズにも断られた彼は、静かにレイピア型の杖を抜きながらある呪文を唱えます。

すると、ワルド子爵が合計五人に分裂しました。

そのスペルは、『ユビキタス・デル・ウインデ』。

偏在という、風のスクウエアメイジでも使える者が少ない。

自分の分身を作り出す魔法です。

しかも、この分身達はただの影法師ではなく、それぞれに分身各々が思考を持ち、杖まで分身するので魔法まで撃てるのです。

私達は、このとんでもない人と戦って生き残るしかないのです。

「良からう。説得は失敗したわけだな。ルイズ、錬金君。オマケにルイズの使い魔君。なるべく僕を手こずらせないで死んでくれ」

それからは、私達の命をかけた戦いが始まりました。

とは言っても、私はルイズを守りながらワルド子爵の分身が近付かないように魔法を連発するだけ。

空気中の水蒸気を水素と酸素に分解して着火させるだけです、その攻撃すらワルド子爵の本体か偏在かは区別が付きませんが、簡単に攻撃をかわされてしまいます。

私の攻撃が、ただの時間稼ぎにしかならないのです。

しかも、私の未熟なヒーリングでは止血できなかつた肩の傷口が

ら血が滴り落ちて服を次第に赤く染めていきます。
傷が深過ぎて、ポーシヨンなどがないと完治しなかったのです。
今は、出血をある程度抑えるので精一杯でした。

まだジワジワと血が流れますが、ここで傷口を押さえるわけには
いきません。

もし今杖を離したら、私には死ぬしか選択肢が残っていないので
すから。

「ティーボー！」

「ルイズ、もつと後に下がれ。先生達と背中合わせになるようにす
るんだ」

「でも……。えいつ！」

ルイズは、咄嗟に私達の目の前にいたワルド子爵の偏在二体に対
して錬金の魔法を連発します。

すると、彼らの服に対してかけられた錬金の魔法で偏在は大爆発
を起こし、そのまま消えてしまいました。

「本体じゃないか……」

一方、私達から少し離れた才人も、ワルド子爵に苦戦しているよ
うでした。

デルフリンガーで、ブレイドを纏わせたレイピアと鏢迫り合いを
繰り返しています。

「意外とやるな。ガンダールヴ！」

「お前は、本当に気に食わねえな！」

「ほう、なぜだい？」

「裏切り者の拳句に、人が苦勞してアルビオンから貰って来た物を奪おうとしやがって！ しかも、気高い理想だ？ 嘘つけよ！」
「僕が一番偉くなりたいんです」って正直に言え！ このヒゲ野郎！」

「平民の癖に！」

「本音が出たな！ 誰かれ構わず見下しやがって！」

才人が次第に怒りを増していき、そのままワルド子爵のブレイドを押し切り、そのまま横なぎで彼を斬り捨てます。
ところが、それはまたしても偏在のようでした。

「意外だな。剣では敵わないとは。だが！」

そこで、残り二人のワルド子爵が一齐にエアハンマーを唱え、才人のみならず私とルイズまで一緒に吹き飛ばします。

私は咄嗟にルイズを庇いましたが、そのせいで肩に更なる激痛が走り、そのまま杖を落としてしまいます。

「ティーボ！」

「おいつ！ 大丈夫か？」

「駄目だ。出血が多くて立ち上がれないな。二人で逃げてくれ」

傷による痛みと傷が広がった事による二回目の大量出血で、立ち

上がる事すら困難になった私は、二人に私を置いて逃げるように言います。

ここでジタバタしても始まりません。

また短い二度目の人生でしたが、それなりに楽しかったなどと考えてしまいます。

走馬燈というやつですか。

ただ、気に食わないギーシユの顔が出て来たので、すぐに現実に戻ってしまいますが。

「僕が、誰かを逃がすとても？」

「思わないけどな……」

私は倒れたままでしたが、肩の激痛を我慢しながら一度離れた杖を握り、アース・ハンドを応用した魔法でワルド子爵の足元から鋭いセラミック製の刃物を突き出させます。

ですが、それすら彼は簡単にかわしてしまい。

更に、私達との距離を縮めてしまいます。

「普通のメイジだったら、串刺しにされて絶命ものだね。僕には、通用しないが」

余裕綽々のワルド子爵は、私達に向けて複数のエア・カッターを放ちます。

スクウェアメイジに相応しいその大きさと威力に私が全てを諦めた時、私とルイズの前にデルフリンガーを構えた才人が前に出ます。

「才人！ 死ぬぞ！」

「一宿一飯以上の恩だ！ 見捨てるのは性に合わねえ！」

「そついう問題じゃ……」

ところが、そこで奇跡が起こりました。

ワルド子爵の放ったエア・カッターが全てデルフリンガーに吸収されてしまったのです。

私とルイズは、ただ驚くばかりでした。

「魔法を吸収した？」

「そつか！ 思い出したぜ！ サイト！」

更に、魔法を吸収したデルフリンガーが眩いばかりに輝き。

今まではボロボロの錆びた剣だった物が、綺麗な大剣へとその姿を変えます。

「俺つちの特技は、相手の魔法を吸収する事だったんだよ」

「先に言えよ！」

大切な事を忘れていたデルフリンガーに、才人のツツコミが入ります。

「すまねえ、忘れてた。それよりも、サイト。震えだ。心の震えがお前を強くする」

「震えか。良く知らねえけど……。ワルド！ テメエは気に入らねえ！」

才人のその言葉と同時に彼の右手のルーンが激しく光り、彼は両手でデルFRINGERを構えたまま。

今までとは比べ物にならない速度で、ワルド子爵へと突っ込んで行きます。

「魔法の使えない平民など！」

ワルド子爵は続けてエア・カッターを放ちますが、それも全てデルFRINGERに吸収され。

続けてもう一人残っていた偏在を前に出しますが、それも呆気なく才人に斬り捨てられてしまいます。

先ほどとはまるで違う才人の実力に、ワルド子爵の顔が歪みます。

そして……。

「でえい！」

そのまま、デルFRINGERでワルド子爵の右腕を杖ごと斬り落としました。

「貴様！ 僕の腕を！」

ワルド子爵は更に激高しますが、そこは歴戦の勇士。

すぐに自分のグリフォンを呼び寄せてから、撤退に入ろうとします。

利き腕を失い杖を落として魔法が使えないので、この判断は冷静で正しい判断でした。

ですが、私は彼をここで逃がしたくありませんでした。

「ルイズ。悪いが、彼を逃がすわけにはいかない。撃ち落してくれ」
いまだに立ち上がれない私を介抱しているルイズに、ただ一言だけ懇願します。

すると、彼女はグリフォンで上空へと逃げているワルド子爵に対してフレイム・ボールの魔法を放ちます。

ワルド子爵は、ルイズの口の動きを見て事前に回避行動へと入りますが、彼女は普通の火系統のメイジではありません。

彼女のフレイム・ボールは、火炎の軌道すら見せないでワルド子爵の至近で大爆発。

乗っていたグリフォンに致命傷を与え、ワルド子爵自身も右足とわき腹付近を負傷し、出血しながら地面へと落下していきます。

「バカな……」

先ほど、ルイズの爆発魔法を見ていた癖に油断してしまったワルド子爵でしたが、彼自身は信じられないと言った表情で地面へと落下していきます。

更に、私は彼をそのまま地面に落とすつもりはありませんでした。杖が無いので魔法も使えず、高位置からの落下なのに受身も取れず。

間違いなく致命傷を負うのですが、それでも万が一にも生存されると厄介です。

私は、最後の気力を振り絞って落ちている杖を手繰り寄せ。

彼の落下地点に、アース・ハンドの改良魔法を唱えます。

「うげっ！」

それが、魔法衛士隊の隊長として武勇を誇っていたワルド子爵の人生最後の言葉でした。

落下直前に地面から多数のセラミック製の牙が飛び出し、落下時の威力と相まって、彼の体に数十箇所も突き刺さったからです。

頭、心臓、体、手足全てにセラミック製の牙が突き刺さり、彼は何かを言う暇もなく即死していました。

現場に次第に広がる血の池に、才人もルイズも目を逸らします。

「悪いな、残酷な男で。俺は死にたくないからな」

「ううん、ティーボは悪くない。裏切った彼が悪いのよ」

それでも表情を暗くさせるルイズでしたが、もう一方でも戦いは終結しつつありました。

「同じ風のスクウェアメイジとしては、憐憫の情しか沸かないな。ワルド子爵」

ミスタ・ギターが傭兵の最後の一人をエア・カッターで斬り倒しながら呟きます。

そして、凄腕の傭兵メイジと戦っているミスタ・コルベールの方も、最終決着が付こうとしていました。

「白炎よ。お前の雇い主が死んだぞ。降伏したらどうだ？」

「残念だが、あいつがスポンサーではないよ。それに、せつかく会えた隊長殿だ。是非に、隊長殿が焼ける臭いが嗅ぎたいではないか！」

どうやら、過去に面識のある二人は互いに火炎魔法を撃ち合いな

がら、話を続けていました。

「それに、炎蛇らしくもない！ 俺を昔みたいに堂々と焼けば良いではないか！ 女子供すら容赦なく焼く隊長殿だ！ 俺など余裕だろくに！」

「本当に構わないのだな？」

「本音が出たな。だが、俺は昔とは違っぞ」

「いや、昔のままだ。最後のツメが甘い部分などは特にな」

二人は、これで最後であろう。

巨大な火炎を頭上に練り上げ始めますが、暫くするとミスタ・コルベールと戦っている傭兵メイジの体がフラフラとし始めます。

ミスタ・コルベールが更に頭上の火炎を大きくしますが、彼はそれに対抗する事も出来ず。

逆に次第に火炎を小さくしていました。

「辛いかな？ 白炎よ」

「どういう事だ！」

「ただ、私と同じ大きさのフレイム・ボールを撃ち合っていたお前には理解できないだろうな」

ミスタ・コルベールの言葉に全員が首を傾げていましたが、私には理解できました。

一ち見すると、二人は互角に魔法を撃ち合っているように見えません。

ですが、ミスタ・コルベールは巧みな足捌きで頻繁に自分の立ち位置を変えつつ。

相手の傭兵メイジの方は、同じ場所に留まり続けていました。当然、同じ場所でミスタ・コルベールの火炎魔法を受け続けているのですから、その周辺の温度は高くなっています。

傭兵メイジは大量に汗をかき、しかもそれはすぐに蒸発するので気が付かない。

つまり、傭兵メイジは脱水症状と熱射病になっていたのです。私は、それをルイズと才人に説明します。

「コルベール先生って凄いな」

一見穏やかで発明好きに見える彼ですが、彼も過去に何かを背負っているという事なのでしょう。

それでも、彼が護衛に付いてくれた事には感謝しないといけません。

「バカな……。体が……」

「もう二度と殺生をするつもりは無かったのだがな。お前が生きていると多くの人を不幸にする」

「人の事が言えるのか！」

「安心しろ。いずれは、同じ地獄で会えるさ」

ミスタ・コルベールの練り上げた火炎が、容赦なく相手の傭兵メイジを焼いていきます。

彼は、最後の断末魔をあげながら地面に倒れます。

「これで全員を倒したのか。しかし、良くこのメンバーで」

黒焦げになり、もはや木炭にしか見えなくなった対戦相手を一瞥してからミスタ・コルベールが周囲の様子を確認します。

彼が焼き殺した傭兵メイジの黒焦げの死体。

いまだに肩の出血が完全に止まらないで倒れている私と、それを介抱するルイズと才人。

そこから数十メートル離れた地面では、針山が出来ていてそこにワルド子爵が血塗れで突き刺さって死んでいて。

他にも、ミスタ・ギトーが主にエア・カッターで。

ギーシュがワルキューレの剣で斬り殺した傭兵二十名以上の死体が散乱していました。

「生き残るためとはいえ、今改めて見るとグロいな」

「ああ……」

私も、才人も、ギーシュも、ルイズも。

他の教師二人は経験がありそうですが、初めて人を殺したという事実に私達は今さらながら恐怖感を覚え始めます。

「ミスタ・グラモン。ミス・ヴァリエール。サイト君。大丈夫かね？」

そこにミスタ・コルベールが現れ、私の肩を傷を見てから自分のローブを引き裂いて止血を始めます。

やはりミスタ・コルベールはこういう事に経験豊富らしく、今ま

では止まらなかった出血がすぐに止まっていました。

「まずいな。君は私の予想よりも多く出血している。動かすのは危険だ」

襲撃された位置は、魔法学院とトリスタニアの中間点。

しかも、最初に乗っていた馬が全て逃げてしまっているので、完全に移動手段を失っていました。

どうしようかと思案しているところに、ようやく救いの神が現れます。

魔法学院方面から、一台の馬車が物凄いスピードでこちらに走って来たのです。

「ティーボ様ぁー！」

馬車を操っていたのは、真っ青な顔をしたアシルです。

「ティーボ様！ 申し訳ありません！ まさか、ワルド子爵が裏切るとは思わずに……」

アシルは、念のために私達の様子をさぐる密偵は付けていたようです。

そこに、突然の敵の襲来とワルド子爵の裏切り。

密偵は助太刀も考えたらしいのですが、冷静に応援を呼ぶ事を決断し。

情報を得たアシルが、急いで馬車を飛ばして来たらしいのです。しかも立て続けに、数台の馬車が止まり多くの家臣達が降りて来ます。

「急ぎ治療をしないと！」

「応急治療用のポーションは豊富だが、傷を完全に治す高価な薬はトリスタニアの方が豊富だ」

「では、ティーボ様はトリスタニアへ」

「そうだな。俺達には、アンリエッタ王女様に渡す物がある……」
「ティーボ様！」

ようやく助かった事を知った私は、大量の出血とそれに伴うダルさでそのまま意識を失ってしまうのでした。

二十五話

「アレクサンドル、緊急事態だ！」

トリスタニアの王城の中で、グラモン家の次期当主であるアレクサンドルは、今日ここには来る予定が無かった現グラモン家当主である父親に話しかけられていた。

「父上。王宮内では、親子の情は断つべきだと……」

アレクサンドルは、『普段公務に就いている時には、絶対に親子の会話はしないように』と言っている父が、血相を変えて自分を名前で呼んだ事に驚いていた。

だが、あくまでも決まりという事で、逆に自分の父を諫めるような発言をしてしまう。

「ティーボが負傷したのだ！ それも、ワルド子爵の手によって！」

グラモン元帥は、自分の長男にこれまでの推移を説明する。

事の始まりは、自分の息子達がヴァリエール公爵の三女と一緒にアンリエッタ王女から密命を受けてからであった。

極秘裏にアルビオンへと出向き。

秘密の手紙の回収と、ウェールズ皇太子との接触に成功した潜入員達は、そのまま無事に学院へと戻った。

直接潜入を担当したのは、アンリエッタ王女が任務を依頼したヴァリエール公爵の三女儿イズの使い魔と、自分の四男であるギーシユが行ったらしい。

何でも、ルイズ嬢の使い魔が、自分の息子が以前に買い取った竜の羽衣を使えたので、任務は比較的スムーズに進んだようだ。

そして事件は、その成果を王城に向けて届ける途中で発生した。

あろう事か、アンリエッタ王女が安全のために送った魔法衛士隊グリフォン隊隊長であるワルド子爵が裏切り、彼のエア・ニードルで肩を貫かれたティーボは大出血を起こして負傷。

現在、高価な薬剤のあるトリスタニアへと向けて馬車で移動中との事であった。

これが、グラモン伯爵やアシルが常に監視をさせている密偵から入った最新の情報であった。

「ワルド子爵がですか？ 彼は、ヴァリエール公爵令嬢の婚約者ですよ」

次期グラモン伯爵にして、王国軍大佐であるアレクサンドル・ド・グラモンは、自分の父親からの報告が信じられなかった。

王国軍の軍人としてワルド子爵とも交流もあったので、まさか彼が自分の弟を負傷させるとは思わなかったからだ。

「奴は、レコン・キスタのスパイであったようだ」

レコン・キスタの名前は、最近王国軍の情報部から良く上がって来ていた。

トリステインの隣国にして王族が親戚関係にもあるアルビオンを今にも滅ぼそうとしている組織。

貴族による共和制と、聖地奪還を主目的とする非常に危険な連中であつたからだ。

「そもそも、この危険な状況で学生をアルビオンに行かせたのですか？」

アレクサンドルとしては、まずアンリエッタ王女が自分の弟を今にも滅びそうな隣国に派遣した事実が信じられないでいた。

もし本当にそれが必要な任務であったとしても、普通は専門家に任せるのが筋であったからだ。

「ワシとて、色々と言いたい事がある。というか、言いたい事だらけだ！」

アレクサンドルは、自分の父親の顔が怒りで今までに無いほどに真っ赤に染まっているのを確認していた。

確かに、父親や兄である自分達を無視して、勝手に危険な任務に二人の弟達を就かせたのだから当然とも言えよう。

しかも、手助けに送った人材が裏切り者でティーボが大怪我をしてしまったらしい。

現在、グラモン領の経済を支えている彼がもし死んだりしたら、自分の父親はマザリー二枢機卿くらいならば、その場で絞め殺しそうな勢いであった。

「とにかく、あの鳥の骨に急ぎ取り次いで貰わぬとな！ 返答次第によっては、あの皺だらけの首をそのままへし折ってくれるわ！」

そのままマザリー二枢機卿の執務室へと向かうグラモン親子であったが、その入り口には既に先客がいるようであった。

「いくらヴァリーエル公爵様でも、いきなりの面会は不許可です！」

「ほう。私は自分の娘を死地に送ろうとした鳥の骨に会うのに、わざわざ面会の許可を得ないといけないのか？」

「それは……」

衛兵は、職務なのでヴァリエール公爵の入室を阻んでいたが、内心では恐怖でその場から逃げ出したほどであった。そして、彼に新たな不幸が襲う。

「今すぐに、マザリーニ枢機卿に会わせて貰おうか？」

怒りで顔が真っ赤なグラモン元帥と、同じく慥然とした表情の彼の長男であるアレクサンドル大佐。

衛兵は、本気で退職して実家に戻ろうかと考え始めていた。

「お待たせして申し訳ない」

「言い訳くらいは考えたのか？」

これ以上は衛兵が可哀想になったというわけでもないが、暫くしてヴァリエール公爵、グラモン元帥、アレクサンドルの三人は、マザリーニ枢機卿の執務室への入室を許されていた。

だが、それで劇的に状況が良くなるわけでもなかった。

それは、グラモン元帥の最初の一言から考えても明白であった。

「時間が勿体ない。変な駆け引きをしたらわかっているな？」

「それは、勿論です」

今回の件で、アンリエッタ王女が全くの独断でルイズにアルビオン行きを依頼したなどという事はまずあり得なかった。

一国の王女が、誰にも気が付かれずにフラフラと夜中に移動していたら、そんな国は既に終わっているからだ。

彼女は、ゲルマニアとの同盟が迫っているのに、昔にウエールズ皇太子に贈ったラブレターが現存する事に焦っていた。

当然これの回収をしなければいけないのだが、他の貴族達などには任せられない。

マザリー二枢機卿が進めたゲルマニアとの婚姻を含めた同盟締結なので、これに、『あんな成り上がりの国など！』と意義を唱える貴族達も多い。

下手な貴族に任せると、ラブレターの存在が暴露されてしまう可能性があったからだ。

結果、彼女は自分の幼馴染であるルイズを頼る事とした。

同時に室内にグラモン家の息子が二人いたので、口封じと合わせて任務に協力するようにお願いもしたらしい。

結局、今マザリー二枢機卿の目の前にいる三人は、アンリエッタ王女にもマザリー二枢機卿自身にも、まるで信用されていなかったという事なのだ。

大物貴族ゆえに、余計に王国側の弱味を握られなくなかったという事情もあって。

アンリエッタ王女に裏で手を貸したというのが、マザリー二枢機卿であったのだ。

マザリー二枢機卿は、秘かにアンリエッタ王女をルイズの元に送り出し、護衛に自分が信用していたワルド子爵を任命した。

ただし、後者には見事に裏切られてマザリー二枢機卿を窮地に追いやっていたが。

今さら嘘をついても仕方が無いので、マザリー二枢機卿は全てを正直に三人に話していた。

「まさか、お父君同士が親友同士の関係で、ルイズ嬢の婚約者であるワルド子爵が裏切るとは思いませんでしたか」

だが、一言付け加えて牽制する事は忘れなかった。

いくら優秀でも、若干二十六歳で子爵でしかない彼が魔法衛士隊の隊長に任命されている。

それには、当然ヴァリエール公爵の後ろ盾があったからだ。

過去の国境紛争で、親友の救援に遅れてワルド子爵の父親を無駄に戦死させてしまった。

この事で、ヴァリエール公爵がワルド子爵をかなり鼻屑していた事は確かであったからだ。

現在のヴァリエール公爵は、公職からは一步退いた身であったが、いまだに軍や王宮に対して絶大な影響力を持っている。

彼の口利きに反対する者などは、誰もいなかった。

ワルド子爵の努力と才能は本物であったが、能力だけで簡単に出世できるほどこの国の人事システムは柔軟ではなかった。

だが、そのワルド子爵が裏切った事実は、政治的にヴァリエール公爵を追い詰めるであろう。

影響力を持つ彼に反抗的な貴族など他に沢山いたし、実際に彼の推したワルド子爵は、反乱という一族縛り首でも文句は言えない罪を犯していた。

ヴァリエール公爵とマザリー二枢機卿は、情報交換をしながらもお互いに権力者同士の宿命である駆け引きを続けていた。

「それで、ワルド子爵はどうなった？」

「討たれましたよ。止めは、鍊金殿が刺したようです」

大失態をやらかしてしまったマザリー二枢機卿であったが、その後の処置に抜かりはなかった。

既に、負傷したティーボ達を城内に入れて怪我の治療等をはじめていたし、襲撃を行ったワルド子爵や傭兵達の死体なども全て収容している。

傭兵に数名の重傷者がいるので、喋れるようにまで治療したら尋問も始める予定であった。

多分その尋問は、自分が即死できなかった事を後悔するほど凄惨な物になるであろう。

「ティーボが、ワルド子爵を？」

アレクサンドルは、自分の一番下の弟の戦闘能力については大して期待していなかったたので、まさかワルド子爵を討ってしまうとは思わなかったのだ。

「正確には、止めだけを刺したですか」

報告によれば、ワルド子爵はルイズの使い魔である剣士に杖ごと

腕を斬り落とされ。

逃走しようとしたところで、主人であるルイズの爆発魔法で乗っていたグリフォンを殺されてそのまま落下。

地面の落ちたところをアース・ハンドの改良魔法で串刺しにされたようで、ワルド子爵の遺体は穴だらけであつたらしい。

他にも、白炎と呼ばれていた評判の傭兵メイジが学院の教師に討たれ、もう一人の教師もメイジ二名を含む十三名を討ち。

ティーボの兄であるギーシュ・ド・グラモンも、メイジ二名を含む十五名を討つたとの報告であつた。

「マザリーニ枢機卿。今回は、オールド・オスマンの配慮に助けられたな。その教師達がいなければ、お前の首は今頃繋がつておらんもし繋がつていたら、今すぐにワシが捻り切つたであろうからな。アレクサンドル、ティーボの見舞いに行くぞ」

「はい」

「グラモン伯爵、私も一緒に行こう」

「わざわざすまん」

「いや、ワルド子爵の件では、私にも責任があるからな」

マザリーニ枢機卿は執務室を出て行く三人を見送りながら、今回の件で国家の重鎮であるヴァリエール公爵とグラモン元帥に大きな借りを作ってしまった事に深い溜息しか出なかつた。

「ここは……」

大量出血で、意識と罪悪感が朦朧とする中でワルド子爵に止めを刺したものの。

そのまま気を失ってしまったらしい私は、見知らぬ天井を見ながら目を覚ましていました。

どこかのアニメで聞いたフレーズですが、非常に高級感溢れる作りをしているので、多分ここは王宮の一室なのでしょう。

「目を覚まされましたか？」

多分、王城付きと思われるメイドが声をかけて来ます。

ですが、残念な事にうら若き美少女ではありませんでした。

半世紀前くらいには、美少女だったと思われる方です。

メイドでも、偉いほうの人なんでしょうね。

「ここはどこです？」

「トリスタニアの王城にある貴賓室です。お父君と兄君様達が心配していましたよ。すぐにお呼びしますので」

年配のメイドが部屋を出てから数分後、室内に父であるグラモン元帥と一番上の兄であるアレクサンドル大佐。

次男で王国軍少佐のセザール、三男で王国軍大尉のジョルジュと集合します。

本当に、うちの家系は軍人ばかりですね。

頭にも体にも血液が不足している今、かなり濃い面子です。

しかも、隣にはヴァリエール公爵までいました。礼儀的には起き上がらないといけないのですが、今の状況から考えて無理ですね。

「父上」

「あまり無理をするな。傷は全て塞いだがな。血液が足りていないので、急に立ち上がると眩暈がするぞ。数日間は安静にしている」

「そうですか……」

ワルド子爵にエア・ニードルで貫かれた肩を触ると、確かに傷は完全に塞がっているようです。

とても少し前まで負傷していたとは思えません。

「かなり高い秘薬を使ったらしいが、ティーボの今までの貢献から考えて当然だ。費用の事などは気にするな」

父は、治療に使った秘薬は王国持ちなので気にしないようにと言います。

私としては、怪我さえ治るのであれば自分負担でも全然構わなかったのですが。

「それにしても、お前も意外とえげつない魔法を使うんだな」

「死にかけて必死でしたからね」

兄であるアレクサンドルの質問に私は答えます。

あのワルド子爵に止めを刺したと言えば聞こえが良いですが、才人に腕を斬り落され。

ルイズにグリフォンを殺されて負傷して地面に落下しと。
私は、半分死んでいた彼に念を押しただけなのですから。

戦場跡で、瀕死の兵士達を介錯するのと同じ事ですね。

「しかし、どうしてティーボがアンリエッタ様の依頼などを？」

「その時に、たまたまルイズの部屋を訪ねていまして。アンリエッタ様の姿を見てしまった以上は、最低でも秘密は守る立場になったと」

本当は、私もアルビオンに行かされるところだったのですが。

運良くギーシュも盗み聞きをしていたのと、紫電改があった事から助かったという事情も話します。

「ただ、それを届けるところでえらい目に遭いましたけど」

「それについては、私からも謝らせて貰うよ」

父達と一緒に見舞いに来ていたヴァリエール公爵に謝られてしまう私でした。

「ワルド子爵に関しては、彼は彼なりに色々と自分の考えがあったのでしょうね。ヴァリエール公爵様が、気にする事ではないと思います」

「そう言っただけで貰えると助かる。私自身は、何が彼を裏切りに走らせたのだらうか気になってな……。先代とその奥方の死など。彼は不幸な境遇ながらも、若いなりに懸命にやっついていて成果も残していたから。もはや心に傷が無いものだ、私は勘違いしていたのかもし

れない……」

若くして父を失ったワルド子爵。

ヴァリエール公爵は、その後見人の役割りを自分ではちゃんとこなしていたと思っていたのに。

結果は、彼を裏切り者として死なせてしまった。

その事で、色々と深く考えてしまっようでした。

「ですが、ワルド子爵も既に二十六歳です。自分の決断に責任を持てる年齢だと思います。ヴァリエール公爵様が気にする事はないと思います」

「確かに、君の言う通りだ。それに、後で色々と処理をしないといけない事もあるしな」

爵位を継いで以来。

ワルド子爵は領地の経営を家臣達に任せて。

自分は、魔法衛士隊に相応しい実力を付けるための訓練の日々と上上がるための碌に休みすらない公務の毎日であったそうです。

なので、ヴァリエール公爵は彼の領地経営に手を貸していました。

ですが、ワルド子爵自身が裏切り者となり。

その領地は、120%間違はなく王国に没収されるでしょう。

ヴァリエール公爵が貸している人材は引き揚げれば済む話ですが、ワルド子爵家に代々仕える家臣達へ、事実を伝えて領地を接收するという重大な作業がこれから発生するのです。

もし彼らが主人に殉じるなどと考えれば、下手をすると内乱の発生です。

彼の領地がゲルマニアと国境を接している事実などから考えても、なるべく穏便に事を進めなければいけません。

王国側としても、ヴァリエール公爵に色々と頼む事になるでしょう。

他にも、最低でも無職に。

下手をすると、ワルド子爵の共犯と認定されてしまう可能性があります。家臣達などの処置もあります。

この事件は、様々な面倒な後処理が残っていました。

「例の手紙とアルビオン王家の家宝は、ルイズ達がちゃんと姫様に献上した。ティーボ殿は、暫し安静にしていなさい」

ヴァリエール公爵にも安静にするように言われた私ですが、ふと部屋の入り口を見ると、そこにはギーシュが隠れるように立っていました。

ですが、私と目を合わせると逃げるように部屋の外に出てしまいます。

「（欠片くらいは心配したのか？ ギーシュ）」

私はそんな事を考えながら、再び部屋の天井へと視線を送るのでした。

二十六話

「ティーボ、大丈夫？」

「ああ。数日間は血が足りなくて、起き上がるとフラフラしたけど裏切り者のワルド子爵との死闘から三日後。

ようやくベッドから立ち上げられるようになった私は、こここの毎日お見舞いに来てくれているルイズと一緒に、王宮の謁見の間への通路を歩いていました。

後には、既にアンリエッタ王女との謁見を済ませているギーシュと才人もいます。

今日、負傷後初めて、アンリエッタ王女に謁見をするためです。私だけが静養中で、唯一彼女と謁見していなかったんですね。

「それよりも、見舞いに来るのが男ばかりだね。ルイズしか、女の子が来なかった」

父、兄達、ヴァリエール公爵、マザリーニ枢機卿に、他の貴族達。私の療養生活に、ほとんど女つ気は存在しませんでした。

メイドは、特に選りすぐりの技量を持つ人という事で、なぜか年齢が私の三倍以上な方々ばかりでしたし。

世話になった彼女達を女性と数えないのは失礼ですが、敢えて私は数えません。

人には、譲れない一線があるのですから。

ただ、兄達には、『元気になったら、あとで面白い店に連れて行

ってやる』と言われはしたのですが。

何でも、トリスタリアの町には、若い男が行くと楽しいお店があるそうなのです。

「姫様は、どうしてお見舞いに来なかったのかしら？」

「正確には、行けなかったんだ。父上や兄達は、それほど激怒しているというポーズを取るためにね」

ルイズの疑問に、なぜかギーシュが答えます。

今回の事件では、アンリエッタ王女の軽はずみな行動のせいで、グラモン領のみならずトリステイン王国の財政にある程度貢献している私を危うく殺してしまうところだった。

それを、姫様自らのお見舞いでチャラにしようとマザリーニ枢機卿が企み。

更にそれを防ぐべく、絶対安静だとアンリエッタ王女を部屋に近付けさせなかった父や兄達やヴァリエール公爵。
というのが、お見舞いにルイズ以外の女の子が来なかった理由だったようです。

姫様自らという部分で、偉い人の誠実さをアピールする。

現代日本とかでも、天皇陛下に直接声をかけられるとか。

普段は、『皇室なんて……』とか言っていて感動するものらしいです。

しかも、お金もかかりませんし。

きつと、マザリーニ枢機卿辺りの入れ知恵なのでしょう。

ですが、父達のおかげでその策は費えました。
おかげで私は、才人も混ぜてトランプや将棋、チェス、ウノなど
で遊び。

それに、さも仕方なしに付いて来た風を装ってギーシュも加わり
と。

何か、前世で言うところのツンデレ？

でも、ツンデレは女の子だから嬉しいのです。

ギーシュだと、微妙という他はありませんでした。

ですが、先の戦闘でかなりの实力を見せたギーシュです。

ここは適度に距離を取りつつ、上手く私の盾に使った方が得策で
すね。

「謁見の間だ」

そんな事を考えている間に、私達は入り口の衛兵にここに来た目
的を告げてから謁見の間へと入ります。

すると中には、アンリエッタ王女のみならず、マリアンヌ大后ま
でもが待ち構えていました。

ついでに、その横にはマザリーニ枢機卿も立っています。

私達は、恭しく室内に敷いてある赤い絨毯に片膝を付き、頭を下
げます。

「この度は、娘が大きな迷惑をかけてしまいましたね」

最初に声を発したのは、意外にもマリアンヌ大后でした。

亡くなった先代王である夫の喪に服し、政治に関わる事を避けて
いると評判であった彼女が、最初に自分の娘の不手際を謝って来た

のです。

「いえ。私こそ、姫様の依頼に背き。アルビオンへは行っておりませんので」

私も紫電改があるばかりに、自分ではなくて才人とギーシュを現地に派遣して任務を済ませてしまった事を謝罪します。

「それについては、あなたが謝る事はありません。貴族が、信頼する家臣や親族に任務を任せ。それが成功したのなら、あなたが任務に成功したのと同意義です。なぜなら、失敗すればそれはあなたの責任になるのですから。それよりも、あなたほどの貴族を無為に失ってしまうところでした。これも、私の不徳の致すところですよ」

続いて、アンリエッタ王女の謝罪で最初の挨拶はここで終わり、次は改めてアルビオンでの詳しい事情についてギーシュと才人から報告がなされます。

ですが、これは私自身も何回も聞いているので、ある意味確認作業のような物でした。

「ウェールズ様には、亡命をお勧めしたのですが……」

最新の報告では、最後に王党派が籠っていたニューカッスルの城は奮戦むなしく落城してしまっただようです。

なぜそれがわかるのかと言えば。

王党派に唯一残っていた戦列艦イーグル号と数隻の輸送船が、王党派貴族達の家族である女・子供などを乗せて昨日トリスティンに到着したからだそうです。

「ウェールズ様は最後まで奮戦した後に、ニューカッスルの城の奥

で……」

城内に残っていた大量の火薬に自ら着火し、数千のレコン・キスタの軍勢を巻き込み、城内は大きな破壊と炎に包まれたとの。生き残ったイーグル号の乗員達からの報告でした。

どうやら、こうなる事を見越して大量の火薬を集めたり。土系のメイジ達に錬金を行わせていたようなのです。

「そして、これがウエールズ様から……」

アルビオン王家の家宝である、風のルビーと始祖のオルゴール。あとは、ウエールズ皇太子がアンリエッタ王女に宛てた個人的な内容の手紙。

それと最後に、アルビオン国王ジェームズ1世からの手紙が、トリスティン側をある意味困惑させていました。

「アルビオンの国王陛下からですか？」

「はい。ジェームズ1世は、私の義理の兄に当たりますが、私は彼から次期アルビオン国王に指名されました」

確かに、今のトリスティンでは対応に苦慮する内容の手紙です。血筋的には、マリアンヌ太后がアルビオンの女王になる事に違和感はありません。

ジェームズ1世の一人息子である、ウエールズ皇太子が既にこの世に亡く。

弟であるモード大公に至っては、その家臣まで粛清・追放していたのでこれも王位を継げる血筋の者が残っておらず。

多分、一番血筋的には近い人物のはずです。

それに、彼女の次の王位継承者と言えば、当然娘であるアンリエッタ王女です。

ウエールズ皇太子の従妹で、ジェームズ1世の姪である彼女がアルビオンの女王になる事には更に違和感が無いのです。

多分、ガリアやゲルマニアにも口は出せないでしょう。

「ジェームズ1世直筆の手紙の他に。イーグル号には、代々のアルビオン王が被る王冠やマントなども全て積まれていました」

最後の最後でとんだ意趣返しのもりなのでしょうが、今のトリステイン王家にレコン・キスタを倒してアルビオンを取り戻す余裕があるであろうか？

という疑問も湧いて来ます。

私如きの錬金に、財政的に頼っているほどの小国。

これが、嘘偽りのないトリステイン王国の実力なのですから。

「錬金殿は、どう思われますか？」

「まずは、攻めるよりも守りですね」

マザリーニ枢機卿の質問に、私は正直に答えます。

というか、この程度の質問。

私でなくても、実際に現地に赴いた才人やギーシュの方が良く理解しているでしょう。

聖地奪還を目指す彼らがアルビオン一国で満足するわけもなく、その進路にはトリステインがあるのですから。

しかも、彼らは実際にそれを見て来ているのです。

「軍の準備を進めるしかないでしょうね。常識で考えて」

「それは、勿論始めている。軍部の算定では、少なくとも半年後には……」

早くてもその頃には、レコン・キスタ軍がトリステインに攻め入ってくるという予想でした。

私も特に軍事に詳しいわけでもありませんが、どうやらニューカッスルでいらぬ損害を受けたらしいので、そのくらいの猶予はあるのかもしれない。

ウェールズ皇太子は、付き従う家臣達と出来る限りの敵兵達を魔法で殺し。

最後の最後に、既に影腹を切っていたジェームズ1世の居る謁見の間まで後退。

事切れた父の遺骸を抱きながら、満面の笑みで大量に積んでいた火薬に火をかけたそうです。

ある程度は、想像も入っているそうですが。

これによって、浮遊大陸の端に位置していたニューカッスルの城は城を支えていた地面ごと海へと落下し。

城内へと突入したレコン・キスタ軍で生き残ったのは、レビティオンやフライが使える僅かなメイジ達だけだったようです。

火薬の大爆発と、その身を焼き尽くす火炎。

崩れる重い石製の城壁や天井。

最後に、高高度から海への落下と。

城内に突入して生き残るのは、非常に困難だったのでしょうか。

レコン・キスタ軍の特に傭兵主体の部隊は、戦闘終了後の略奪を

楽しみに城内に殺到していたらしく。

ひよつとすると、万単位の犠牲を出したかもしれないという。

イーグル号の乗組員達からの報告でした。

「どのみち攻めて来るのなら、正式に発表してしまうというのも手ですね」

アルビオン王家の正等をマリアンヌ大后が継いだという事実が知れ渡れば、現在力の関係で仕方なしにレコン・キスタ側に付いているアルビオン貴族達の離反が誘えます。

中には、戦後を見越して協力してくる者達もいるかもしれませんが、もしトリステインがアルビオンを獲れば、その頃には当然アルビオン貴族の数はかなり減っているのでしょうか。

貢献度によっては、逆に領地が増えて連合王国となったトリステインの中枢に入れるかもしれない。

そう貴族達に思わせてしまうのが良いでしょう。レコン・キスタも、背後の裏切りが気になって動きが鈍くなるでしょうし。

「本来ならば、この手の話は学生にはしないのだが。君達は色々に関わってしまったからな」

とはいえ、学生である私達にこれ以上の事は出来ません。

あとは大人達に任せて、学院に戻る事にします。

既にミスタ・コルベールとミスタ・ギトーは、褒美を貰って学院に戻ってしまったようですし。

そういえば、私も最近錬金をしていないですね。

アシルは、何をしているのでしょうか？

「最後に、錬金殿に今回の任務達成の褒美を……」

最愛の人を失ったせいかな？

少し表情の暗いアンリエッタ王女から、私は今回の件での褒美を貰う事になりました。

とはいっても、多分金貨か何かでしょう。

他の貴族達とは違って、私が作った宝石などを与えるわけにもいきませんし。

「魔法学院卒業後に予定していた子爵位への任命を行い。本来であれば、グラモン伯爵領から分与される予定であった領地を授けます。場所は旧ワルド子爵領です。ここを、グラモン分家の当主たるあなたの領地に指定します」

いきなりの領地の下賜に、私はかなり驚いてしまいます。

「そこまでの功績とは思えませんが……」

「今までの分と。今回あなたは、裏切り者のワルド子爵に止めを刺しました」

本当に止めを刺しただけですし、ここで変に私の武力に期待されても困るのですが。

それでも、一応の武功で恩賞を与えやすいという事なのかもしれない。

「旧ワルド子爵領は、ゲルマニアとの紛争で当主を失ってしまいうような位置にあります。下手な貴族に下賜するより、武のグラモン伯

爵領に加えた方が王国の利に叶う。それだけです」

それに、私の今までの功績ですか。

真珠だの、宝石だの、水晶細工だの。

私が王国に与えた利益から考えれば、国境沿いの大した産業もない子爵領など、何個でも余裕で買えるでしょうしね。

「それと、グラモン伯爵家は侯爵家に昇格する事になりました」

つまり、褒美は与えるので、今回のアンリエッタ王女のミスには目を瞑れという事なのでしょう。

実際に私が謁見している事から考えても、ここいら辺が交渉の落としどころなのでしょう。

「ティーボ・ド・グラモン殿、あなたを子爵に任じます。ますますの王家への忠勤に期待します」

アンリエッタ王女から直接に新しいマントを与えられ、直接に言葉を賜った私でしたが、正直あまり嬉しくないのが本音でした。

「良かったな。領地を貰えて」

帰りの馬車の中で、私は才人に話しかけられます。

彼も、ルイズを守り切った功績でアンリエッタ王女から金貨の入った袋を貰ったそうです。

個人的には、そっちの方が使い道が多いので羨ましいほどです。

「前の当主に止めを刺した俺が新当主だぞ。明らかに、厄介の元を押し付けられたんだ」

いくら分家領でも、今は学生で時間が無くても。

あとで必ず顔を出さないといけないのです。

私の顔を見たワルド子爵の元家臣達は、複雑な心境に陥るでしょう。

先に領地を接収する父や兄達も、面倒なので希望すれば旧ワルド子爵家の家臣達は再雇用するでしょうから。

なので、顔を合わせる可能性はかなり高いはずでした。

わかるほど私を恨んでくれれば逆に楽なのですが、下手に忠誠を誓って後で獅子身中の虫になられても困ります。

ただ、私には鍊金の仕事があるので、旧ワルド子爵領の管理は奥様が派遣した家臣達に任せる事になりそうですが。

まずは、領地を無事に接収するという。

非常にデリケートさが要求される任務が残っていますし。

「大半のワルド子爵の家臣達には、青天の霹靂だろうしな」

急に自分の主人が反逆者となり、しかも既に討たれているのです。動揺しない方がおかしいですね。

ただ、彼の意図に沿って動いている連中がいる可能性があるのです。その特定と捕縛などもこれは大変な手間でした。

「その辺は、父上や兄達に任せるよ」

実際に帰り際に挨拶をした時にも、父は兄達と何かを相談しているようでした。

ヴァリエール公爵とも何か相談をしているようでしたが、ワルド子爵領はヴァリエール公爵領とも接しているので、色々と揉め事が起こらないように話し合いをしていたのでしよう。

「せっかくの領地にケチを付けるなんて、しょうがない奴だな」

「ギーシュはいいさ。ルイズと一緒に、シュヴァリエの爵位を貰ったのだろう？」

今回の、ワルド子爵や彼が伏せていた傭兵達との戦闘で奮戦したギーシュ。

ワルド子爵に大ダメージを与えたルイズ。

他にも、ミスタ・コルベールはなぜか固辞したらしいのですが、ミスタ・ギトーはアンリエッタ王女からシュヴァリエの称号を貰っていました。

ちなみに、私も貰いましたが。

私の場合は、完全に箔付けでしょうね。

あのワルド子爵に止めを刺したという事実は、意外と重い事ですよです。

「でも、ワルド様はどうして……」

今までは、色々な事があったので考える暇が無かったらしく。今になって、ルイズはワルド子爵の裏切りについて考え込んでいました。

「昔は、私が魔法が使えなくて落ち込んでいたら、必ず慰めてくれた。私の白馬に乗った王子様だったのに……」

いくら、魔法衛士隊の隊長でも。

人の何倍も努力して、若くしてその地位に昇りつめても、それに満足できる人と、出来ない人がいる。

彼は、きっと後者だったのでしょう。

自分が最大にその実力を発揮できるのは、古い因習に囚われたトリスティン王家ではなくて、レコン・キスタという新しい組織である。

そう彼なりに考えて、裏切ったのだと思います。

私は、自分の考えをルイズに語ります。

「魔法衛士隊の隊長は、彼の野心には足りなかったんだな」

「ねえ！ ティーボはどうなの？ ティーボは、今の自分が報われていないと思う？」

身近な人の裏切りが、ルイズを不安にさせたようでした。

もし私が、更なる富と地位を求めてレコン・キスタに裏切ったら？
現に、ワルド子爵も私を誘っていましたし、確認しないと怖くなつたのかもしれない。

「俺は、金属と宝石を作るしか能が無いからな。戦場の名誉とか、聖地へ乗り込むとか、正直なところ良くわからん」

今のところは、私はグラモン分家の子爵として金属を作って生きて行くのでしょうかね？

唯一の懸念は、トリステイン王国の行く末ですが。これは、最悪切り捨てれば良い事です。

私は、そこまでの忠臣ではありませんし。

学院卒業後に、金属の研究に時間を使えるようになれば、ゲルマニアだろうとガリアだろうと構わないわけですし。

ああ、それともう一つ不安がありました。

悪いですけど、アンリエッタ王女が統治者としては微妙なところですか。

マザリーニ枢機卿は、そのうちにラーメンスープが取れるようになるかもしれませんがね。

鳥ガラのようになって……。

もっなくなっていきますか。

「俺より、ギーシュの心配をしたらどうだ？」

「そうね。ギーシュなら、『將軍にしてやる』とか誘われると裏切りそう」

「失敬な！ 僕とて、シュヴァリエの称号を貰った者！ 決して裏切りなどしないさ！」

「本当か？」

「ティーボこそ！ 『鉦山のある領地をやる』とか言われると裏切るのでは？」

「規模にもよるが、それは非常に魅力的だな」

「呆れて何も言えないね」

帰りの馬車の中で、私達の会話は続きます。

私は、いつの間にかギーシュと普通に話している事に気が付くのですが、変に突っ込んで元に戻っても面倒なので、そのまま何も言わずに話を続けるのでした。

どうやら、私の盾にはピッタリの人物らしいので。

我が兄、ギーシュは。

私は、彼の過去の暴言と下らない陰謀への怒りの代償を、その辺に求める事にして精神の安定を計るのでした。

「姫様、今回の件は本当に勘弁して欲しかったですな」

「私が、鍊金殿にもアルビオン行きを依頼した事ですか？」

「お分かりならば……」

「ですが、彼はワルド子爵と同じでスクウェアメイジですよ」

ルイズ達がいなくなった謁見の間で、マザリーニ枢機卿は今回のアンリエッタ王女の行動を咎めていた。

そもそも、どうしてアンリエッタ王女がワルド子爵を動かす事を、マザリーニ枢機卿が容認したのか？

それは、彼が優秀で信用出来る男であり。

更にルイズの婚約者でもある彼ならば、上手くルイズを宥めて彼一人で隠密裏にアルビオンへと行ってくれと思うたからだ。

彼ほどの男が一人でアルビオンに潜入するのであれば、それはさほど難しい任務でもなかったからだ。

むしろ、学生数名での潜入よりもよほど成功率は高いはずであった。

ところが、アンリエッタ王女は情報が漏れる事を恐れてであろうが。 よりにもよって、その場にいたグラモン家の息子二人までアルビオンへと行かせようとしてしまう。

しかも、一人は自分で錬金という二つ名まで付けた優秀なメイジであった。

どうやら彼女は、『錬金殿はスクウエアメイジなので、強いから親友のためになる』くらいに軽く考えていたらしい。

色々と王宮に真珠など宝石を収めていて、困窮する王国の財政をかなり助けているにも関わらずだ。

だが、良く良く考えてみると、自分はアンリエッタ王女に王国の財政状態を具体的な数字にした物など見せた事がなかった。

勿論、ティーボ・ド・グラモンがいる事で王室が受ける、具体的な利益についてもだ。

なので、たまに王城に家臣を通じて宝石を収めに来る、便利な宝石屋さんくらいに思っていたのであろう。

水晶細工も、真珠も、宝石も。

値段が高い高級品ではあるが。

世間知らずで、お金に困った事も、その価値も良くわからない彼女なので、王宮御用達の出入り商人が高級になっただけに感じているようであった。

「それでも、彼は学生ですし。同じスクウェアメイジでも、それぞれに得意・不得意な分野があるのです」

「錬金であればほどの技量を示した彼です。ルイズを守れるくらいには強いと思ったのです。実際に、かなり個性的な攻撃魔法を使っただけか」

「それは、彼が自分の戦闘技能の未熟を知性で補おうとした結果です。しかも、最低限自分の身を守るのみに特化した物。過剰な期待は、錬金の分野にのみ行い。危険に曝すなど許されざる暴挙です」

「ですが、あなたの推薦したワルド子爵は裏切りました」

今回の件での、アンリエッタ王女のミスを注意するマザリー二枢機卿であったが。

彼自身も、ワルド子爵の人と成りを見誤るといふミスをしていたので、そこを彼女に突かれてしまう。

ティーボの機転で、彼とルイズのアルビオン行きを防いで胸を撫で下ろした矢先。

今度は、その二人を護衛するはずのワルド子爵の裏切り。

一瞬、『この国の貴族は信用なりません！』と、過去に暴言を吐いたアンリエッタ王女に賛同したくなりそうなマザリー二枢機卿であった。

というか、これは王が不在なこの国において、貴族達が迷走している事の現れなのである。

「それと、今回はどうにかグラモン家とヴァリエール家の怒りを納

める事に成功しましたが……」

グラモン家には、侯爵家への昇格と新しい領地と二人の子供への爵位の進呈。

ヴァリエール家の娘にも爵位の進呈と。

勿論、これで完璧に怒りが収まるわけもなかったが、小康状態に持っていく事には成功しているはずだとマザリーニ枢機卿は考えていた。

多分明日からはまた、この傾きかけた小国の苦しい政務が始まるのであるが、最悪の展開だけは防げたと感じていたのだ。

ヴァリエール公爵家とグラモン侯爵家。

この二家に大きな借りは残っていたが、とりあえずはグラモン家の領地を増やして両家の力を拮抗させ。

双方の牽制を狙うという策は実行していた。

一方の、ヴァリエール公爵家への恩賞が少なかったが。

これはあとで、どちらかが言ってくるであろう案件を快く了承すれば恩賞の少なさは帳消しとなるであろう。

この目の前にいる、世間知らずの王女様には言えない裏の事情であったが。

「姫様、これにて秘密は守られました。あとは、心置きなくゲルマニアへと……」

「そうですね……。非常に、心が重いですけど……」

「……」

マザリーニ枢機卿は、早く引退して心安らかな生活を送りたいと真剣に考えてしまうのであった。

「ティーボ様！ 申し訳ありません！」

学院へと戻って来た私達ですが。

最初に待ち構えていたのは、護衛に不手際があつて私を負傷させたと思つているアシルでした。

彼は責任を取らないといけなくらいに追い詰められているようでしたが、そもそもワルド子爵が裏切ると予想できた人間は皆無です。

彼だけに、責任があるわけではないでしょう。

私は、気にしないように言います。

「どうせ、次からは監視が増えるんだろう？」

「はい。フィールドワークも、大人数が遠慮していただくという事で……」

金を稼ぐようになり、外国やレコン・キスタなどにも名前を知られるようになった私は、これからは厳重な警備体制が敷かれるようでした。

「堅苦しい事この上ないな」

「それに、旦那様から連絡もありました。早速、数名の家臣を領地に戻して。奥様が派遣するワルド子爵領接收部隊に参加させないと」

統治効率が落ちるので、旧ワルド子爵領もグラモン領の統治体制に編入されるのでしょうか。

名目上は私の領地なので、家臣を数名送らないといけないとアシルは報告します。

「面倒ばかりだな」

「とはいえ、これでティーボ様も領地持ちの貴族。幼少の頃に、始めて魔法を教えたあの日から……」

「アシル、まだ三十代の癖に、人生終わり間際のジジイみたいな事を言うなよ」

「そうでしたね。ですが、また家臣を増やさないと駄目ですな」

「学院を卒業するまでは、全てアシルに任せるよ。予算枠にだけは入れてくれ」

学生に、錬金に、独自の金属や魔法の勉強にと。

私は忙しいので、その辺の細かい部分はアシルに予算枠だけ与えて完全に任せていました。

「かしこまりました。ところで、これからの予定なのですが……」

私は五日間も、ギーシュに至っては一週間近くも学院の授業を休んでいたのです、これまでの経緯をオスマン学院長に説明する必要があったのです。

既にミスタ・コルベールとミスタ・ギトーが報告をしていると思われるので、これも形式的な物になる予定ですが。

「その後なのですが、既に錬金が五日間も滞り。在庫が危機的状況を迎えています」

「わかった。あとで錬金小屋の方に行く」

やはり、私から錬金の作業を無くす事はまだ暫くは不可能なようでした。

二十七話

「ダーリン、聞いたわよ。疫病神のヴェリエールのせいで、大変な目に遭ったって」

「誰が疫病神よ！」

学院に戻って来た日の翌日。

授業が終わり、錬金までの空いた時間を中庭でお茶を飲みながら寛いでいると、そこにキュルケがタバサを連れて現れました。

「だって、身のほど知らずのヴェリエールが、アルビオンにティーポを行かせようとしたんでしょ？ しかも、婚約者があのレコン・キスタのスパイだったとかで。この国って、本当に大丈夫なの？」

才人とギーシュのアルビオン行きと。

私達が、裏切ったワルド子爵と彼の準備していた傭兵団の襲撃を受け、それらを全滅させたものの負傷してしまった事實は、既に学院中の生徒達に伝わっていました。

後に色々と褒美やら爵位やら称号の授与があったので、当然それらが授与される理由は公にされるからでした。

ですが、実際の私は次第に薄れ行く意識の中で、ルイズの爆発魔法で乗騎のグリフォンを失い、負傷して地面に落下するワルド子爵に止めを刺しただけです。

人によっては卑怯の局地と言われそうでしたが、彼にまた命を狙われては堪らないと、自然と体が杖を掴み、本能が呪文を唱えたようでした。

「ダーリン、もう怪我は大丈夫なの？」

キュルケは、私を今座っている椅子から半分ズラすと、空いた半分のスペースに自分が座り、更に腕を組んで豊満な胸を押し付けて来ます。

反対側の隣の席に座っているルイズは激怒し、向かいの席に座っている才人とギーシュは、かなり羨ましそうな顔をしていました。主に、押し付けられている胸が原因でしょう。

モンモランシーは、『男って、みんなそう』と言った風な表情をしています。

どうやら、意識せずに私も顔がニヤけているようです。

「こんな災厄続きのトリステインよりも、ゲルマニアで貴族になればいいのよ」

「ティーボは、姫様直々に子爵に叙任されたのよ！ 余計な口は出さないでよ、ツエルプストー！」

ルイズの、更なる怒鳴り声が響き渡ります。

彼女からすれば、天敵であるキュルケが私と話をしている事すら不快なのでしょう。

「ティーボほどの人が、たかが子爵なのね。トリステインって、本当にケチ臭いんだから。ティーボ、ゲルマニアで貴族にならない？ ティーボなら、伯爵くらいには簡単になれるわよ」

お金で爵位を買い取るのがゲルマニアという国なので、今の私の資

産なら伯爵くらいには簡単になれそうですね。

ただ、私は領地を経営したいのではなくて、金属を作りたいだけなのでこの話は却下です。

実家であるグラモン家が、私に対するやつかみやら、多分あるであろつ外国などからの工作を防いでいるからこそ、私は錬金だけをしていれば良いのですから。

錬金以外の全てを人任せのバカ殿。

後世ではそう評されるかもしれませんが、私としてはこれで結構です。

それに、今は学業もありますし、卒業後は領内での頭を使う仕事もあるでしょう。

奥様は、それに期待して私を優遇しているようですし。

なので、それでも面倒そうなのに、一からゲルマニアで領地運営とか考えると面倒で死んでしまいそうです。

外国に亡命でもしないと危険という事ならば、その手もありなのですが。

「とにかく！ ティーボは、ツエルプストーの誘いには乗らないのよ！」

ルイズは、その小さい体からは考えられないような力で、私の椅子の半分を占拠しているキュルケを外に押し出します。

結果、私とルイズが一つの椅子に一緒に座っているような状態になりました。

そして、あのキュルケを押し出したルイズに、外野の男子生徒達と女子生徒達から感心したような声があがります。

「痛いわね。ヴァリエール」

椅子から押し出されたキュルケが、スカートに付いた草を払いながらルイズに文句を言います。

「あーーら、ごめんあそばせ。ツエルプストーのお尻があまりに大きかったので」

「言ってくれるわね」

「二人ともストップ！」

私は、今にも一触即発の二人を懸命に止め始めます。

片や火のトライアングルで、片や爆発魔法の名人。

決闘になれば、血が流れる事が確定だったからです。

「でもさ。これは、自分が好きな女が誰か言えないティーボに非があるだろう」

同じテーブル席に座り、シエスタからお茶のお替りを注いで貰っている才人が珍しく私に意見します。

そして彼の意見に、近くのテーブル席に座るマリコルヌやレイナールなどが賛成していました。

「ティーボは、周りに女の子が多い癖に、全く浮いた話を聞かない」
「確かにそうだな」

学院に入学してから、私に積極的にアプローチしてくる女子と言

えば。

隣にいるキュルケか、先に手造りのお菓子を持って来てギーシュとの決闘の要因になったケティという一年生か。

この二人だけかもしれませぬ。

ルイズだの、モンモランシーだの、タバサだのは、私からすれば異性の友人という感覚しかないのですから。

二度目の人生で、精神年齢が高いせいなのでしょうか？

前世のように、女性との関係を積極的に進めようという気が起きないので。

とはいえ、前世はちゃんと声はかけたのですが、結果がまるで付いて来ずだったのですが……。

自分でも、良く大学・院生時代に彼女がいたなと思いますしね。大学生の時は、卒論と院生試験で。

就職後には、普通に仕事が忙しくて少し放置していたら見事にフられましたけど。

『釣った魚には、ちゃんと定期的に餌をやらないといけない』というのは、前世の父親の口癖でした。

前世の母には、鼻で笑われていましたが。

「ティーボは、見た目も悪くないのにな。不思議だな」

「アレだろう。女子達はお互いに牽制ばかりして、声がかけれないんだ」

マリコルヌと才人が、無責任な会話をしています。

普通のトリスティン貴族の女子が、自分から男性に声をかける事

は少ないのが本当の理由なのですが。

ゲルマニアでは古臭いとなるのでしょうが、トリスティンでは慎ましかと言われる事が多いのです。

「僕のように、積極的に声をかければ良いんだ」

「ティーボがそれをしたら、大問題でしょう！」

「痛い！ 痛いよ！ モンモランシー！」

モンモランシーは、先日ケティという生徒の件で私とギーシュが決闘騒ぎになった事を知っているのです、お気軽に無責任な事を言ったギーシュの耳を引っ張っていました。

先日の決闘やら。

アルビオンに紫電改でギーシュを送り出した事やら。

一緒にワルド子爵に襲撃されて死ぬところだった事件やらで、一緒にいる事が増えたギーシュでしたが。

ここは、何も無かったかのように話をするのが普通なのでしょうかね？

特に害があるわけでもないし、あまりネチネチと引っ張っても仕方が無いので、私からは特に文句は無いのですが。

それに、バカな事したらアシルが完全に止めに入るでしょう。

彼は、今回の件で私に降りかかる災難はもつと早期に排除するように父から言われているらしいので。

「学生生活は、まだ十分に残っているんだ。その内に、俺にも胸を焦すような恋があるかも」

話を上手く締めようと私なりに考えて言った言葉でしたが、聞いているルイズ達には不評なようでした。

「ティーボ、そんな事を言っていると、お父様にエレオノール姉様とかを押し付けられるわよ」

「ダーリンには、最悪駆け落ちがあるじゃないの。私さえいれば、身一つでも全然生活できるし」

「ツエルプストーじゃあ、一秒も気が休まらないわよ」

「失礼ね」

ルイズとキュルケの不毛な口喧嘩が、更なる拡大をしてしまいません。

「二人とも煩いわよ」

モンモランシーが二人を止めている最中も、タバサは一人冷静にシエスタの淹れた緑茶を啜っていました。

ですが、その彼女の視線が一瞬だけ私に向いていた事実には、私は暫く気が付かなかったのでした。

「なるほど、モテる男は辛いすな。ティーボ様」

「今までの話のどこに、俺がモテる要素があるんだ？」

夕方の錬金工房で、今日の予定を終えた私とそれを伝えに来たアシルとの話は続きます。

ちなみに、今日のミス・ロングビルは、ゴスロリメイド服姿でアシルの錬金をしていました。

最近の彼女は、高額のコスプレ手当のために特に文句を言う事もなくなりました。

家臣達の士気も上がり、仕事の効率も上がって良い事です。

「今、学院にいる女子生徒達は、ティーボ様の婚約者になって玉の輿を狙うべく。かと言って、あまり積極的に行動するのにもトリスティンの女性として恥かしい。そんなところでしょうね」

自分の分の作業を終えたミス・ロングビルも、私に話しかけて来ます。

やはり、オスマン学院長の秘書をしていただけあって、彼女はかなり頭が良いようです。

それに、メイジとしての実力もかなりの物のようです。

現在の我が錬金工房では、一番の稼ぎ頭でしょう。

「あまり、そういう事は考えないようにしていたんだけどな」

十分に予想できた事態ですが、それで女性不審になるのもどうかと考えて、敢えて気が付かないフリをしていたんですけどね。

それに、今のところは錬金が忙しいですし。

というが、自室に戻ってからの自己研究がですね。

最近、マグネシウム粉末を使った野戦用の照明弾や、暴徒鎮圧用の閃光手榴弾などの研究をしていたのです。

例の紫電改に搭載するドロップタンクの一部にマグネシウム合金が使われていたので、ついでにマグネシウム合金の研究を始めたので。

ただ、耐腐蝕性が低いし、室温域での変形能が低いので、常温下での加工はほぼ不可能でした。

切り屑が燃えやすいので、何の知識も無い人に売ると危険ですし。

仕方が無いので、今では自転車のフレームに加工しています。

実は、ハルケギニアには存在しないと思われていた自転車ですが、やはり、何かの拍子にこちらに紛れ込んでいるようですね。

唯一の欠点としては、完品が一台も無いのでこの世界の住民達は、これが乗り物だとは理解していないようでした。

結局、十数台分のスクラップを手に入れ。

その中でも一番状態がマシなマウンテンバイクを、試行錯誤しながら修理していました。

ですが、たかが自転車と考えていた私を散々に苦しめる事になります。

自転車とて数百の部品から成り立っているので、不足する部品を正確に錬金して取り付ける。

特にギアの部分の複雑さは、私をかなり凹ませました。

それと、ワルド子爵の事件で中断しましたが、ミスタ・コルベールにも他の自転車の残骸を渡し。

書店で見つけた自転車関連の本を翻訳して渡したのですが、彼もかなり苦戦しているようです。

『部品が精密過ぎますね。これを今のハルケギニアで量産する事は難しい』

王城から魔法学院に戻って来て早々に、以前からの研究に紫電改を整備して見てつけた成果を合わせて自作のエンジンを授業で披露したミスタ・コルベールでしたが。

大半の生徒達が、その凄さを理解できず。

才人だけは素直に感心していましたが、私は、『量産できたら凄いのだろうな』と思ってしまうところが前世の影響を引き摺っています。

ですが、それは彼も重々承知しているようでした。

特に、私から自転車の再生を頼まれてからは、その複雑な構造と修理再生くらいならともかく、新規の量産など今のままでは不可能であると感じたようです。

『これは、最低限必要な部品を選定して、工作精度も少し下げても……。このゴムを使った車輪も、もう少し頑丈に作らないと悪路では対応できないか……。このバネという部品は、ゲルマニアでも生産は難しいでしょうね』

彼は、所謂ママチャリを再生しながら、自転車の量産計画を頭の中で考えていました。

「とりあえずは、完成か」

かなり完璧に近かった事もあり、私のマウンテンバイクも無事再生に成功していました。

試作品という事で、フレームをアルミニウムを5%含んだマグネ

シウム合金製に変換したのです。

実は、このチェンジ鍊金とも呼ぶべきオリジナル魔法も、私の特技でもありました。

元から存在する物の形を一切変えずに、材質だけチェンジするのは、です。

しかも、チェンジさせる材料を予め準備しておく、魔力の消費がかなり抑えられる点も便利でした。

これならば、比較的完品に近い場違いな工芸品の再生が、かなり楽になるはずですから。

夜にシコシコと作業も可能ですし。

ただし、欠点は存在します。

その対象物が錆びていると精度が落ちるのと、その部品が凹みなどで変形していれば、当然そのままであるという事です。

まずは、フレームをマグネシウム合金製に変更して。

少し形が違つかもしれませんが、無かった部品も他の自転車の残骸から取り出したり、自分で鍊金して接合し。

自転車の機械オイルなども、自分で自作しました。

ただ、このマウンテンバイクが一番のお買い得だった点は、サイクリングを趣味にしていた人の物だったのか？

修理用の工具ケースが、フレームにくっ付いていた事ですかね？

おかげで、同じ苦勞でも時間は相当に軽減されたようです。

ですが、自転車一台の再生でこの様です。

ハルケギニア工業立志伝は、私には不可能ですね。

ミスタ・コルベールにその気があつたら、資金的に援助する事にします。

「早速に、試運転をしないとな」

私は、夜の中庭にマウンテンバイクを持って行き、一人で久々のサイクリングを満喫します。

すると、事前に声をかけていたミスタ・コルベールも現れました。

「凄いですね。もう再生が終了したのですか」

「俺のは、かなり状態が良かったですからね」

「私としては、色々と部品や構造の研究が出来るので、あのボロの方が好都合ですがね」

最初に、ボロボロの自転車を数台彼に渡した時。

私は、少し悪いような気もしたのですが、ミスタ・コルベールはとても大喜びであった事を思い出しました。

「ミスタ・コルベールも乗りますか？」

「はい。実際に走らせて歯車の動きとかも見たいですし」

私からマウンテンバイクを受け取ったミスタ・コルベールは初めての自転車なのに、何の苦も無く乗りこなしていました。

彼は見た目以上に運動神経が良いですし、あの傭兵団との死闘で、敵の切り札であった凄腕の傭兵メイジを見事に討ち取っていました。

実戦経験が豊富らしいのですが、彼はその後口を噤んでしまった

ので、詳しい事情を聞くのを止めたという事情があります。人間、何かしら人に知られたくない、話したくない過去くらいあるでしょうし。

「馬よりは遅いですが、使い回しが便利ですね」

「馬は、世話が面倒ですしね」

自転車にも整備は必要ですが、固定化で大分緩和されますし。馬と違って、厩舎や餌や水が必要という事も無く。毎日世話をする必要もありません。

多少高くても売れるのでは？

そんな風に考える私でした。

ミスタ・コルベールが簡易量産タイプの設計と試作品の製造に成功したらの話なのでしょうが。

「エンジンと呼ばれる油を燃料とする機械に、この精密な歯車を使った自転車という機械。東方とは、非常に技術の進んだ国なのでね。是非、一度行ってみたいものです」

私のマウンテンバイクをスイスイと走らせながら、ミスタ・コルベールは今までに見た事がないほどの満面の笑みを浮かべるのでした。

私が金属バカなら、彼は科学技術バカなのですな。

「ティーボ様、旦那様から手紙が来ていますよ」

「何だろうね？」

学院へ戻ってから数日後。

私がいつものように錬金に勤しんでいると、アシルが父から送られて来た手紙を持ってきます。

作業を一旦止めて中身を確認すると、紙面には私達が王城を去った後の事が書かれています。

共同の統治機構に入るものの、形的には私に下賜された旧ワルド子爵領の接収が終わり。

特に大きな混乱もなく、旧ワルド子爵領はグラモン子爵領へとその姿を変えたそうです。

ただ、この領地には特に大きな産業も無く。時間があつたら鉱物でも探してくれないかとの、父からのお願いが書かれています。

「旦那様も侯爵になり、領地も増えて万々歳なのでしょうが。何とも急な話ですな」

アシルと二人で一枚目の紙面の内容を確認してから、もう一枚の紙面の内容を読み始めるのですが。

そこには、私を驚かせる究極の内容が書かれています。

『先日の、お前とギーシュの見送りが慌しくなってしまうって済まなかったな。実は、ヴァリエール公爵と時間を見て打ち合わせをしていて忙しかったのだ。急な話で済まないし、向こうもシヨックな出来事で婚約者を失ったばかりなのだ……』

「なあ、アシル……」

「これって、アレですよ」

二人で更に二枚目の紙面を読み進めると、最後にはこう書かれていました。

『ヴァリエール公爵の三女であるルイズ嬢と、お前の婚約が決まったのでここに知らせる事にする。良かったな。可愛い娘が婚約者で追伸、本妻はちゃんとした家の娘にしないといけないからな。胸成分が足りないと思ったら、愛人や妾にそれを求めるべきだと思う。父親からの忠告としては、という事で、拒否はありえん』

「何これ？」

「普通に考えて、ヴァリエール公爵一族とグラモン侯爵一族の連携強化でしょうな。婚姻で両家の絆を深めるわけですね」

いくら幼馴染とはいえ、アンリエッタ王女に勝手に自分の娘をアールビオンへと送られかけたヴァリエール公爵。

それと、それに巻き込まれて息子が大怪我をしてしまった父と。

二人は幼い暴走馬車のようなアンリエッタ王女と、そのフォロワーをするマザリー二枢機卿に脅威を覚えたらしく。

共同で派閥を形成して、これからも来る可能性がある王城からの理不尽な要求に対抗する事にしたようです。

これは、アシルの情報分析なのですが。

「それで、俺とルイズが婚約するのか」

突然の婚約話に驚いていると、そこに同じく手紙を持ったルイズが駆け込んで来ます。

「どうやら、同じ内容の手紙をヴァリエール公爵から貰ったようです。」

「後ろからは、何事なのか理解できないでいる才人も走って来ます。その内に、彼にも字を教えないと駄目かもしれませんね。」

「ティーボ！ 私達が婚約って話は？」

「当然、聞いている。」

私は、父から貰った手紙をヒラヒラとルイズに見せます。

「すげえ、昔の大河ドラマみたい。本物の政略結婚だ！」

「ようやく事情を飲み込めた才人が後で、他に私にしか理解できないような事を言っています。」

大河ドラマって……。

それを理解できるのは、ここでは私だけでしょうに。

実際に、ルイズとアシルは才人の発言に首を傾げています。

「貴族ならば、多少の覚悟はあったんだろう？ ルイズ」

「そりゃあ、そうだけど……」

表面上は、前の婚約者であるワルド子爵の裏切りと死のショックを感じさせないルイズでしたが、私との婚約は本当に突然の事だっ

たので、やはり少し動揺しているようでした。

「その件でらしいけど。あなたのお母様が、私とティーボに会いたいから学院に来るみたいなの。私への手紙には書いてあったわ」

「俺は、全然聞いてないぞ！」

婚約の噂はすぐに学院中に広がるでしょうし、それに合わせて私の母がルイズを見に来る。

一難去ってまた一難と感じてしまう私なのでした。

二十八話

「あのね……、ティーボ」

「多分、今日だと思うんだよ。馬車だから、多少の到着予定時刻の前後はあるかもしれないけど……」

双方が、父からの手紙で互いに婚約者同士となった事を知った翌日の朝。

私とルイズは、学院の外にある私専用のセカンドハウスで一緒に朝食を取っていました。

いきなり婚約者同士になったので互いに動揺が抑えきれず、まずは話し合いなどをという。

ルイズは仕方ないにしても、二回目の人生にも関わらず私も完全に舞い上がっている状態でした。

前世では、結婚した経験とか無かったですし。考えてみたら、自分の彼女を両親に紹介した経験も私には無かったですし。

学生時代の彼女達は、結婚したいとかそこまで考えていなかったので、実家に連れて行った経験が無かったですよね。

就職後にそれを考えた頃には、私は見事にフラれていましたし。

話していて、非常に悲しくなる前世ですけど。

しかも、私の母がルイズの顔を見に来るらしいのです。

私の母は、彼女自身はあまり気にしていないようですが、妾という存在なのでほとんど公の席に出た事がなく。

自分の息子の婚約者を、一目見ておきたいと考えたようです。

「母に関しては、普通にしていれば大丈夫だよ。かなりマイペースで天然だから。『私の息子に相応しい女性でないと!』とか、死んでも言わないだろうし」

既に食事を終え、食後のお茶を飲みながら二人で話を進めます。空の茶碗にお替りを注ぐシエスタも、今日ばかりは少し神秘的な表情をしていました。

一応、ご主人様の婚約者が決まったわけですしね。

『それが何?』と聞かれると、私としても非常に困るのですが。

それと、テーブル席で顔を合わせながら食事をして話をする私達は、やはりどこかぎこちないです。

いきなり婚約とか言われても、どう対応して良いやら困ってしまふのです。

私はルイズの事を、今までは年下の妹のような女友達としか見ていませんでした。

確かに、彼女は稀に見ぬ美少女なのですが、それと彼女に恋をするかというのは別の感覚のような気がするのです。

ですが、数年前に初めてラグドリアン湖でルイズと出会った時。

私は、彼女のその髪の色に魅かれて水晶細工を作りました。

全く恋愛感情が無いという事もないでしょう。

ですが、こればかりは、少し時間が経たないと解決しないのかもしれません。

一方、ルイズの方は私の事をどう思っているのでしょうか?

親に言われて婚約者になったから、貴族の娘として運命を受け入

れるだけなのでしょうか？

今のところは、まだ聞けるような状態ではないですね。

今はただ、今さらな気もしますが、こうやって二人で相互理解を深めるしかありませんでした。

ちなみに、家臣達の反応は上々でした。

武の家系であるグラモン家に『爆殺』の二つ名を持つお嫁さんが来るので、お似合いだと感じているようです。

それに、ルイズは彼らと一緒に亜人退治をする仲ですし。

アシルなどは、素直に『お似合いですな』と喜んでいました。

ですが、話はそれだけに収まりませんでした。

実は、今日は才人が引越しをする事になっていたのです。

理由は、簡単です。

私の婚約者の部屋に、使い魔とはいえ人間の男と一緒に寝泊りしている。

家臣達からすれば、信じられない事実だったのです。

結果、才人は錬金小屋の隣にある家臣専用の宿舎の個室に引っ越す事になりました。

最近家臣や従業員が増えてどんどん建物を魔法で作っているのです

ぐに才人に提供できる部屋があったからです。

人に今まで居た部屋から出て行けという以上は、替わりの部屋を用意するのは人として最低限の常識ですしね。

「すげえ！ 個室だし、ベッドが柔らかいな！ 前は床にワラとシ

「ツとか、酷い扱いでさ」

「ええと……。ルイズ様も、あくまでも臨時だと思っていたのでは？」

もつとも、今までは部屋の端でワラにシーツを被せて寝ていたらしく、この引越しに才人は大喜びでした。

外から聞こえる才人の喜びの声に、ルイズは少し顔を引き攣らせていました。

しかも、外からアシルのフォロー発言が聞こえて来て。

余計にルイズへのダメージが増えていました。

「部屋はあそこで。食事は、家臣専用の食堂に決まった時間に行けば大丈夫。時間外でも、コックがいれば軽食くらいは出せるそうだ」

これ以上のフォローは難しいと考えたアシルは、才人に他の設備などの説明をします。

あくまでも、私が学院に在籍している間だけという条件で建設がされた錬金小屋やそれに付随する施設でしたが、既に小さな町程度にまで規模が拡大していました。

これって、卒業後に本当に撤去可能なのでしょうか？

ここ一年ほどで、何段階にも規模が拡大した錬金小屋と各種倉庫類。

既に百人以上にまでなっている家臣達や従業員達とのその家族達の宿舎が立ち並び。

金属を買いに来た商人達専用の宿屋や、生活用品などを売る商店なども次第に増えていました。

私が場違いな工芸品を、特に書物を集めている事を知ってそれを売りに来る商人もいますし。

近隣の農民達も、食糧やグラントの餌である草や木などを売りに来て、グラントのフンを持ち帰る帰りに買い物をしてから帰る事が増えました。

この近辺の農民達は、今までは時間をかけてトリスタニアにまで行かないと買い物が出来なかつたので、近くに小さくても店が複数できた事を喜んでいました。

いつも間にか、経済の流れがここに出来ていたのです。

教師や生徒達も、たまに買い物などをしているようですし。学院のすぐ隣にありますしね。

話が、かなり反れてしまいましたが……。

「凄いですね。アシルさん」

「私達のご主人様は、家臣を大事にする人だからな。待遇は、とっても良いよ」

「俺も鞍替えしてえ」

「君はメイジではないのだろうか？ ならば、最低でも武器くらいはある程度使えないと」

グラモン家は武の家系ですので、どうしても武力に優れた人を最優先する癖があるんですよね。

勿論、他のスキルを持つ人を下に置いているというわけではないのですが、そのせいで経済オンチの名を欲しいままにしたという過

去が父にはありました。

「そういえば、あまり経験無いんだよな」

武器の扱いに長けた平成日本人というのも何なので、それは私は仕方が無いと考えていました。

あの反則的なルーンもあるので、使い方さえマスターすればまず困らないでしょうし。

「だが、ギーシュ様との決闘で引き分けたし。あのワルド子爵の片腕を杖ごと斬り落としたんだろう？ 武器の基本の型なら、うちの衛兵が見てくれるぞ。うちの警備隊長は、メイジ殺しの経験もあるし」

「達人なんですね」

「そもそも、君に洗濯とか掃除とか。ティーボ様が言う通りに非効率だしな。シエスタか他のメイドに任せれば済む問題だし。あの竜の羽衣の整備の手伝いと、ルイズ様の護衛のために武器の基本的な扱いを習う。これで、ティーボ様が給金を出すそうさ。表面上は、ルイズ様が出した事にはするがね。あとは、ティーボ様の個人的な趣味や遊びに付き合うかな？」

「給金が出るんですか？」

「ああ、あの竜の羽衣に乗れるのは特殊技術だしな。一ヶ月に五十エキユー出すそうさ」

「やったー、ここに来て大正解だな」

才人は、外でアシルと引越しをしながら話をしていましたが、ルイズは彼のハシヤギ振りに顔を赤くしていました。

自分が、才人をおざなりに扱っていたと思われてしまったからでしょう。

ですが、部屋の隅にワラは、まさか人間が召喚されるとは思わなかったからでしょう。

他の人の使い魔は大半が幻獣の類なので、給金を出すという発想からしておかしいですしね。

家臣達も、人間が使い魔という事実に関員が首を捻っていました。

「才人の引越しは、これで終了か。もし母がルイズの部屋に行つて才人がいると、いくら天然でもねえ……」

婚約者がいるのに、他の男と一緒に部屋に住んでいる娘。

使い魔だからという事情を鑑みても、普通の母親であればアウトでしょう。

「俺は男子寮の部屋で、ルイズは女子寮の部屋。卒業までは、特に変える必要もないだろうし」

いきなりの婚約で双方が動揺しているので、ここは時間を置いてというのが正解なのでしょう。

それに、トリストインでは、結婚するまでは婚前交渉かとはタブーの部類に入りますし。

特に貴族家の令嬢などは、処女でなければ結婚を解消されてしまう事もあるようですし。

私達は、別に一緒に住もうとかまるで考えていませんでした。

まだ学生ですし。

しかし、学院卒業後すぐに十八〜九歳で結婚とか。人生の墓場への到着が、非常に速いですね。

さすがは、古き伝統を守る貴族とでも言うのでしょうか？

「きっと、教室で大騒ぎになるわよ」

「いくら何でも、数日はかかるのでは？」

「ティーボは、貴族達の嗜好きを甘くみているわ。特に女子生徒はね」

ルイズは、確信を持って私に自分の予想が正しいであろう事を断言するのです。

「おはよう」

朝食後、私達が二人で午前の授業を受けるべく教室に入ると、クラスメイト達の視線が一斉に私達に向きます。

「あなた達、婚約したんですってね」

「式はいつ挙げるんだ？」

「婚約指輪は？」

ルイズの予想通りに、私達はモンモランシー以下多くのクラスメ

イト達に囲まれて質問攻めにされるのでした。

「昨日知らされたばかりだから、何も決まっていなよ。でも、どうして知っているんだ？」

「えっ？ あなたの家臣達が触れて回っていたわよ」

「何いー！」

私とルイズの結婚は、これより来たる様々な困難に対処すべく、ヴァリエール公爵家とグラモン侯爵家を婚姻で結んで、共に協調関係を作るために必要な物とされているようです。

そのために、急遽双方の当主の話し合いによって決定されたようでした。

なので、学院在籍中に他の悪い虫が双方に付かないように家臣達によって、意図的に学院内に広められたようでした。というか、貴族の嗜好きとかあまり関係ありませんでした。

「あーあ。私も、玉の輿で結婚したいわね」

実家が貧乏なモンモランシーが、ルイズに羨ましそうな視線を送っていました。

「あら。モンモランシーは、悔しくないの？」

「ティーボとは友達だけど、恋人って感じでもないのよね。キュルケはどうなの？」

「ツエルプストー家の男達は、代々ヴァリエール家の女性を奪って

来たわ。当然、私も奪っちゃうかもね。ヴァリエールが持つ、最高に価値のあるティーボを奪う。考えただけでゾクゾクしちゃうかも」

キュルケの物騒な話は、私やルイズの耳にも苦もなく入ります。ふとルイズの方に視線を送ると、キュルケに対して鋭い視線を送っていました。

「ダーリン、私がヴァリエールの魔手から救ってあげるわね」

「あなたの方こそ。それじゃあ、ただの誘拐犯よ！」

「授業を始めますよ」

教室に入って来た先生の始業の声によって、私達はいつものように授業を始めます。

ですが、私もルイズも他の生徒達の興味を視線を一身に受けて、その日はどうにも落ち着かない日々を送るのです。

「ティーボおーっ！」

「あれが、ティーボのお母様？」

「やっぱり、母親って恥かしいわ。世間的な風潮で……」

今日は母が来る予定になっていたの、ルイズと一緒に錬金小屋へと向かうと。

既に私と母専用のアルミニウム合金製フレームを使った馬車が止まっています。

私専用のセカンドハウスの入り口では、母が私の名を呼びながら手を振っていました。

私と同じく金髪・碧眼で。

あの父に見初められて妾になったくらいなので物凄い美人ですし、スタイルもかなり良いのですが。

私に言わせると、かなり天然な女だと思います。

今も、私に手とか振ってますし。

良い歳こいて……。

「若いお母さんね」

「あれでも、今年三十六歳になるんだ」

「全然、そうは見えないけど……」

転生を果たした私が最初に見た母は、十九歳で子供を生んでいるので今年三十六歳になります。

ハルケギニアの常識ではかなり良い年のオバさんなのですが、見た目は一番年上に見える人でも二十代半ばくらい。

私がどんどん成長していくのに、まるで見た目が変わらない不思議な人でした。

もしかして吸血鬼なのでしょうか？

「夏休み以来ですね。母上」

「ティーボのお嫁さん、可愛いわね」

「あのっ！ ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです」

珍しく緊張で上ずった声で、ルイズが私の母に挨拶をします。

「親同士の決めた婚約でも、旦那の母親に自己紹介をするのはなかなか緊張するようです。」

「お名前が長くて、覚えられないわ」

「……」

やはり、私の母はどこか普通の人とピントがズレているようです。非常に優秀な薬師ではあるのですが。

「普通に、ルイズだけ覚えれば良いのでは？」

「それもそうね」

緊張したルイズと、どこかピントのズレた母。

二人はお互いに自己紹介をしてから、話の場をセカンドハウス内に移します。

「私達は、コックが作ったケーキとシエスタの淹れたお茶を楽しみながら話を続けます。」

「私も、昔は長い名前だったのよ。一応は、ガリア貴族でね」

「どのようなお名前だったのですか？」

「クララ・クレール・エヌ・ド・サヴァン。久々だけと言えたわね」

私は、母がトリステインに流れて来た経緯は詳しくは聞いていないのですが、数年前に発生した新ガリア王即位に際して起こった、ガリア王弟オルレアン公暗殺と彼を支持する貴族達の追放劇。

これの先端とも言える、政争の犠牲者だったらしいのです。

つまり、数年前に大騒ぎとなったジョゼフ王派によるオルレアン公派貴族達の大粛清劇ではなく。

これの前にも、両派の陰湿な戦いは続いていたという事なのです。王家に年の近い二人の息子がいれば、その二人が生まれた瞬間から派閥が出来るのも至極当然なのですが。

「うちの实家は、サヴァン子爵家と言って。代々のガリア王家の専属薬師を務める家柄だったのよね」

母の父。

つまり、私の母方の祖父の事です。

彼は、先代のガリア王が使う薬の全てを調査している人だったようです。

王の使う薬を調査する仕事はこれ以上ない名誉ですし、それに指名されるには技量のみならず信用という物も大切です。

毒でも調査されたら大変な事になりますから、まず得体の知れない人は任命されません。

つまり、能力のみならず代々の王家の信頼を勝ち取る必要があります、当然他のメイジ達の羨望と嫉妬を受ける立場にあります。

どうやら祖父は、彼らの陰謀に巻き込まれてしまったようです。

母の説明によると、夏風邪をひいて体調がなかなか戻らない先代ガリア王に対し、祖父の薬師としての実力不足を讒訴する貴族が現れ。

それを、体調不良で判断力の低下していた先代ガリア王が受け入れた結果、祖父は王宮薬師の役職を外されてしまったそうです。

「父は、あまり深く考えて入ったわけじゃないけど、オルレアン公派だったのよ。それで、讒訴した薬師がジョゼフ派ね」

結果、そのジョゼフ派の薬師は祖父の追い落としに成功し、その後は上手く祖父の後釜に座ったそうです。

そして、更に祖父には試練が襲います。

王家専門の薬師という事で領地と爵位を得ていたわけなので、それを取り上げられてしまったらしいのです。

公式的には、王の求めた薬の調合に失敗した罪人に等しいわけですし、当然そういう結果になったのでしょう。

更に祖父には不幸が襲い、その結果私の祖母にあたる妻に離縁され。

祖父は、リュティスにある魔法学院に入学する予定であった母を連れて、国を出たそうです。

「それで、トリスタニアに流れ着いて薬を作って売っていたのよ。私は父から独学で、魔法と一緒に調合も習っていたし」

養う家臣も張る見栄も無いので、祖父は薬の製造でかなり稼いでいたようですが、それは魔法学院に行けなくなった母への教育に使われたそうです。

「私が旦那様に見初められた時には、積極的に私を送り出したわね。理不尽な讒訴で爵位と領地を取られちゃったから、私の生んだ子供が貴族になってくれればという欲が残っていたのね」

ですが、祖父は私が生まれる前に病気で亡くなったそうです。

他に兄弟や親族がいらないので、母と私がサヴェン子爵家の最後の生き残りのようですね。

しかも、サヴェン家秘伝の魔法薬やポーションの作り方を知っているのは目の前の母だけでした。

私は、あまり薬剤調合の才能がありませんね。

並よりは上らしいのですが、ただそれだけのようなので。

「だから、早く孫が欲しいわね。父からの秘伝を伝えたいのよ」

「いつになく真面目ですね」

どこか天然で抜けていて、私の作った金属の凄さに気が付いているのか疑問な感じの母なので、まさかルイズの前でこんな真剣な話をするとは思わなかったのです。

「でも、私達親子の失脚が二十年前で良かったわよ。先代王の崩御の際には、殺されてしまった貴族も多かったようだし」

「どこの国も、貴族や王族はエゲつないですね」

「そうね。貴族なんて、そんなに良い物じゃないわよ。子爵になったティーボに言うのも何なんだけど。あっ！ そうだ！ お祝いの品があるのよ」

母は、私とルイズの前に何かのポーションが入った薬ビンを差し出します。

「これは？」

「男の人がこれを飲むと、早く子供が出来るのよ。今から使っても良いわよ」

「ぶうー！ー！」

私とルイズは、飲んでいた紅茶を盛大に吐き出してしまいます。それは、世間では精力剤と呼ぶのが相応しい種類の薬なのではないのでしょうか？

「母上。結婚式とかその後の事は、卒業後ですよ」

「それもそうね。ルイズさんが学院の卒業式で子連れとか、お腹が大きいとか。それだと色々大変そうだし」

「あのですね。そういう事ではなくてですね……」

やはり、どこか普通の同年代の貴族女性とはどこかが違う母なのでした。

二十九話

「それとね。私、この学院の臨時講師になったのよ」

「「はあ？」」

突然の母の魔法学院臨時講師への就任宣言に、私とルイズはただ啞然としてしまつたのだ。

「教えるのは、基礎的な魔法薬とかポーションの調合ね」

婚約者となつたルイズの顔を見に来たはずの母クララでしたが、それだけではなくて、この学院の臨時講師として招かれていたらしいのです。

確かに彼女の魔法薬は、実家であるサヴェン家歴代の伝統と、彼女自身の能力と、私が提供した材料や情報によってかなりの高レベルです。

実際に、私が金属を作り始めるまでは、彼女の稼ぎはグラモン家ではかなり期待されていたのですから。

冷静に考えると焼け石に水状態だったのですが、それでも相当に助かっていたらしいです。

昔のグラモン家って、どれほどお金に困っていたんでしょうかね？

ですが、となるとどうして彼女は父の妾という身分を選んだので

しょうか？

いくらでも、一人で身を立てられたと思うのですが。

「下らない派閥闘争で、三千年の歴史があつた家は潰れたけど。その間に蓄積した、魔法薬やポーションに関する知識は伝えたいじゃない」

せつかく代々受け継いでいる技術なので、それを後世には伝えたい。

となると、貴族の家の方が条件は良いわけだが、今の没落した自分では貴族の正妻になるのも難しい。

あまり貧乏な貴族家に行っても働き詰めの貧乏になる可能性もあるし、トリステイン貴族は変にプライドが高いので、そこでも自分は妾にされてしまう可能性もある。

それならば、大貴族の妾の方がマシという事で、たまたま自分の作った薬を買いに来た父の誘いに乗って、グラモン領へと行ったらしいのです。

父は当時から有名な軍人で、母もその顔を知っていたらしいです。

見た目と言動がオットリとした母が話していると、一見大した事がないように聞こえますが、聞けば聞くほど過酷な人生を歩んでいるような気がする母でした。

「（それと、意外と計算高いのね……）」

母の意外な一面に驚く私でした。

「すみませんね。薬剤調合のセンスが無くて……」

私は、土の系統の次にくらいには水の系統の魔法が使えましたが、やはり得意なのは錬金であって、あまりその方面では才能を発揮できませんでした。

そこそこは作れるのですが、そこから上に行けなかったのです。

これは、土の系統の名門である父と間に子供を作ったからなのでしょうかね？

魔法の系統と遺伝の関連性など、専門家でもないのだからわかりませんけど。

それほど歴史がある貴族家だと、一人娘であった母に婿を入れる際には、同じ水系統のメイジを選ぶのが普通ですし。

「それに、昔の旦那様は格好良かったのよ。実は、旦那様が父の店に来る前に変な貴族に付き纏われてね」

「へえ……。そうなんですか……」

母の『格好良かった』という過去形の発言をわざとスルーしつつ、私は彼女の発言に相槌を打ちます。

今でも父はかなりのナイスミドルなので、母も幻滅はしていないと思うんですけど。

「同じ水系統のメイジの貴族様だったんだけど、私、『趣味じゃない』って断ってしまったのよ」

美しく若い女性に言い寄る水系統のメイジ。

どこかで聞いたような、誰かさんの行動ですね。

まあその頃は彼も若いと思いますし、他に水のメイジなど沢山いますから、私の勘違いだと思っんですけど。

「『あなたは、この波濤の妻に相応しい』って言われたんだけど。実際に独身かどうかもわからないし、ちょっと生理的に受け付けないから断ってしまったの」

「はあ……（モット伯爵じゃねえか！）」

「（断ったの！ この人、モット伯爵の求婚を断ったの！ どれだけチャレンジャーよ！）」

こうして、私の母は学院の臨時講師として着任し、私達を含む学院の生徒達に魔法薬やポーションの調合を教える事になったのだ。

「はあ……」

次の日のお昼。

私達がアルヴィーズ食堂で昼食を取っていると、溜息が近くから聞こえてきました。

その方向を探ると、マリコルヌが目の前料理を半分ほど残して溜息を連発しています。

「珍しいな……」

「ああ」

「雨でも降るのでは？」

私、レイナール、ギムリで、小さな声で話しながら食事を残すマリコルヌを観察します。

何しろ、あのマリコルヌが食事を残すのです。

何か良く無い事の前兆かもしれないのですから。

「どうしたんだい？ マリコルヌ。何か悩み事かい？」

ヒソヒソと相談をする私達よりも先に、彼の近くの席で食事を取っていたギーシュが声をかけます。

基本的に彼には、少し立ち止まって考えるとかそういう物は存在しないようです。

「いきなりストレートだなあ」

「あいつの勇氣は、ある意味尊敬するわ」

何か深刻な悩みだと困るので、後で人のいない場所で聞き出そうとかレイナールと相談していたのですが、先にギーシュが躊躇う事なく声をかけていました。

私は以前ほどの隔意を彼に感じていないので、これは嫌味ではないのですが。

ある意味、周囲の空気を読まないで堂々と本題を突く彼に感心してもいたのです。

というか、これが本来の彼の姿なんでしょうね。

「実は、ミス・サヴァンの事なんだけどね」

「ええと……。ミス・サヴァンのね……」

先ほど午前中の授業の際に、たまたま私達のクラスで魔法薬関連の授業があり、新担当講師である私の母が紹介されました。

母は、正式に父と婚姻関係を結んだわけではないので、公式の場ではミスと呼ばれるのが正解です。

それと合わせて、普段は眼鏡をかけているミス・ロングビルの方が年上に見られてしまうほどの。

『老化が止まっているのでは？』と言われるほどの若い容姿をしています。

彼女が私の母親である事を知っている極少数の人達を除いて、男子生徒達は私の母を見て目をハートマークにしていました。

授業終了後に、彼女が私に自分の先生ぶりはどうだったかと名指しで尋ねてきた時に。

キュルケの時と同じく、彼らからの視線が非常に痛かったです。

『おいっ！ この人は、俺の母親なの！』

またいらぬ嫉妬を受けなくなかった私は、すぐに彼女が自分の母親である事を伝えます。

『継母なのか？』

『違うわよ。ティーボは、私がちゃんと生んだのよ』

『あの……。ミス・サヴァンはお幾つなので？』

『今度三十七歳になるの。旦那様とティーボ以外から、誕生日プレゼントが貰えるかしら？』

天然である彼女の周囲の状況をまるで考慮しない決定的な一言で、目をハートマークにさせていた男子生徒達がガツクリと肩を落としていました。

私の母で、あのグラモン侯爵の妾。

軽い気持ちで手を出すには、とても危険な女なのです。

「僕には、諦められないよ！」

「本気なのか……」

マリコルヌの衝撃的な発言に、ギーシュの背中から冷や汗が流れていました。

実はギーシュも、この度いきなり学院に着任して来た母に困惑している一人なのですから。

私とセットで貶していた女性が急に学院の臨時講師になったのですから、その動揺は計り知れない物がありました。

しかも、彼は本心から彼女を貶していたわけではないようです。

あくまでも、私の母親であったからという理由で、本人がこの場にはいないのを利用しての悪口だったのですが、今は彼女はここにあります。

以前に言った暴言が漏れた時の事を考えて、戦々恐々としているのかもしれない。

まあ、自業自得なので全く庇う気持ちはありませんが。

「人妻でも、子持ちでも、あの美しさがあれば関係ないよ！ ティ

「ボ！ 僕をお義父さんと！」

昼時の食堂で衝撃発言を連発するマリコルヌに、横合いからルイズの蹴りが入ります。

ここ数日、私との婚約の件でモンモランシー達に捕まっていた彼女でしたが、マリコルヌがとんでもない事を言い始めたので、それを力技で止めに入ったようでした。

「私のお義母さんになる人を、邪な目で見ないでよ！」

「ルイズ、違うよ。僕は、本気なんだ」

「余計に悪いわよ！」

ルイズの蹴りから静かに立ち上がり、冷静に手櫛で髪を整えながら彼女に反論するマルコルヌでしたが、再び彼女の逆鱗に触れて蹴り倒されていました。

「でも、ティーボのお母さんは若いわよね」

「実は、私も初めて会ったのよね。ほら、あの人は社交界に出なかつた人だし」

私の母の若さに驚いているキュルケに、モンモランシーも実は初めて母に会った事を伝えます。

確かに今までは領内に籠っていた人なので、どうしていきなり学院の臨時講師になったのか？

その背景が、良く見えて来ないのです。

「でも、やっぱり身内つてのは恥かしいよな」

私がまたそんな事を考えていると、アヴィリーズ食堂の中に渦中の人物であるクララが入ってきます。

「ティーボ、うちのコックさんがケーキを焼いたそうだから、おやつ時間に食べましょうね」

「いつ、いたんですか？ 母上！」

「どうかしたの？ そんなに驚いて。ルイズさんも一緒にどうぞ」

「僕も一緒にいいですか？」

「勿論です。ミスタ・グランドプレは、熱心な生徒さんで私も助かっていますし」

マルコルヌが母の講義を真面目に受けているのは下心からなのですが、母はそれに気が付いていないようでした。

「他のみなさんも良かったら是非に。ねえ、ミスタ・グラモン」

「ケーキですか……。それは美味しそうだなあ……」

ギーシュの過去の口撃など歯牙にもかけない母は、彼にいつもの口調で話しかけ。

逆に、ギーシュの方がタジタジの状態になってしまいます。

結局、その後数日間、私もルイズも直接的にはないのですが、母にかなり振り回される事となってしまうのでした。

「ギーシュ、この僕の気持ちを彼女に伝えるには。やっぱり、詩などが相応しいのかな？」

「マリコル又、君に詩の才能なんてあったのかい？」

「いや、全然」

「じゃあ、駄目じゃないか」

「となると、何か好きな物でも贈るか。ティーボ、彼女は何が好きな物は何かな？」

「……。目的がわかってるのに、言えるわけないだろうが……。というか！ 実の息子にそんな事を聞くな！」

まるで熱の冷めていないマリコル又に、私は思わず声を荒げてしまいます。

「ティーボは、ケチだなあ……」

「いや、そういう問題ではないと思っ」

レイナールが冷静にマリコル又にツッコミを入れます。

普通に考えて、自分の母親を口説く同級生など好ましいものでもないですね。

母がこの学院の講師として赴任して来てから数日後、私達は、いまだに母に熱をあげているマリコルヌに頭が痛くなってくる日々を送っていました。

ですが、少し世間知らずで天然でしたが、私の母の魔法薬やポーションを作る技術は本物です。

なので、彼女の講師としての評価はなかり上々でした。

見た目や普段の言動とは違って、真面目に生徒達にまずは基本的な魔法薬の作り方を丁寧に指導していたからです。

しかも、彼女は実際に実技で薬を作る事を重視します。

『知識だけあっても、実際に薬が無いと何も効かない』

これが、サヴァン家に代々伝わる魔法薬製造に関する格言らしいのです。

私は、数日前に初めて聞きましたが。

そういえば、私は子供の頃からそれほど薬に関するスパルタ教育を受けていません。

あくまでも基本的な事だけでした。

その理由を尋ねると、『ティーボは錬金に夢中で、しかもそれ以身を立てられそうだったら。無理に薬の事を教えてもね。それに、あまり才能が無かったし』と言われてしまいました。

才能が無いの部分で少し凹みましたが、私に好きに錬金をさせてくれる良い母ではあるのです。

それでも、魔法の絡まない薬などでは私も材料を提供しているん

ですけどね。

特に、日焼け止めを使う二酸化チタンの粉末の提供。

多少有毒なので毎日洗い落とす事が前提ですが、魔法薬ではないにも関わらず。

これは、効果が高いのでとても良く売れているようでした。

「何を贈るかが重要ではないよね。いかにして、この気持ちを僕が伝えるか。そうだよな？ ティーボ」

「知らん！ 俺は全面的に反対だ！」

そんな事は無いとは思いますが、もしマリコルヌが私の義理の父親になつたら？

想像すらしたくない私は、彼を放置して錬金小屋へと行く事になります。

今日の分の錬金をしないといけないからです。

以前に見つけて修理したマウンテンバイクが置いてある中庭に行くと、そこにはルイズが待っていました。

「ティーボ、また後ろに乗つけてよ」

「気に入ったのか？ 自転車」

「うん」

完成に近い物がほとんど存在せず、ガラクタに近い数十台分をミスタ・コルベールと共同でニコイチどころか、十台分以上の部品をすり合わせて作った自転車でしたが、実際に使うとこれほど便利な

物はありませんでした。

以前は、学院の隣とはいえ三十分以上は歩かないと到着しなかった錬金小屋に十分とかからないで到着するのですから。

グラモン家の家訓には触れそうですが、こうやってルイズを後に乗せて漕いでいるので足腰の鍛錬にはなっているでしょう。

私達は車輪にマントが巻き込まれないように、特製の籠に入れてからマウンテンバイクを全力で走らせます。

ママチャリではないので、ルイズは後輪に付けているハブステップに足を乗せています。

本当は、自転車の二人乗りは違法なんですけどね。

ここには、お巡りさんもないので気にしない事にします。

「馬よりも遅いんだけど、楽しい」

「気に入って貰えて何よりだ」

まだ婚約者同士になって一週間も経っていない二人なので、意識して話そうとすると双方駄目なようです。

そこで、こんな前世では中学生がやっていたような、自転車での二人乗り。

後輪に付けたハブステップに立ち上がったルイズが、私の肩に手を置き。

背中に胸の感触が……。

来ないですね。

どんなに大きくても、姿勢的には来ないでしょうし。

ルイズの胸が小さいとかは、全然関係ないんですよ。

万が一にも口が滑ったら殺されるので、絶対に言いませんけど。

「到着だ（困ったな。何を話せば良いんだ？ 意識すると駄目だな）」

「馬と違って、置いておくだけだから便利ね（困ったわね、そんなに話す事なんてないし）」

錬金小屋に到着し、自転車を専用の置き場に置いた私達を、今日は意外な人物が出迎えました。

いつもは錬金で忙しいミス・ロングビルだったのです。

「あれ？ アシルは、どこにいるんです？」

「急にお客様が来たらしいですよ」

「えーと、母ですか？」

「ミス・サヴァンは、数日前の朝からいらっしやるじゃないですか。彼女にお客さんなのです」

「母に？」

「でも、そのお客さんってミス・タバサなんですよね。どうして、アシルさんがそこまで緊張するのはわかりませんが」

ですが、その数分後には、私までもが母やアシルに呼び出される事になるのです。

「よりもよって、ここですかよ」

私がアシルの寄越した衛兵に呼ばれて行った場所は、普段は使わない予備の空き家屋でした。

余計な調度品なども少なく、周りに人が詰めている施設などもなく。

盗聴が困難であり、要は密談に使うための部屋だったのです。

ただ、少なくとも私は使った事はありませんけど。

アシルに関しては、彼は父や兄などから命令を受けて色々と私が知らなくても良い部分まで担当しているようですが。

どうやら、父や兄達は私が学院を卒業するまではあまりそう言った部分に関わらせたくなくようですね。

「それで、客さんは本当にタバサなのか」

部屋に入ると、一つのテーブルを囲んで母、アシル、タバサの三人が座っていました。

「みんな、今日は神妙な顔だね」

私には特に警戒を抱かせるメンバーではなかったので、どうして三人で神妙な表情をしているのか？

それが気になって仕方ありませんでした。

「そのタバサ殿の正体は、クララ様が知っているようなので」

アシルが微妙に口を濁します。

入学当初から、私もタバサが偽名である事は知っていました。ですが、歴史と伝統があるトリステイン魔法学院では、偽名で入学する外国籍の生徒など特に珍しくも無いのです。

他国の大貴族や王族の子弟が、お忍びで教育を受けたいと考えて入学する事が多いらしいので。

なので、私もタバサがガリア出身である事しか知りませんでした。

「母上は、二十年以上も前にガリアを出て来たんですよね？」

「そうよ。でも、彼女の蒼い髪はガリアにおいては特別な意味があるのよ」

母の話によると、ガリア王家の血を引く者は、全て髪の色が蒼くなるそうなのです。

となると、歴史の古いガリアの事ですから、ガリア貴族の大半が蒼い髪になりそうですが。

一代やそこいら王族の血を入れて髪を蒼くしても、次が普通の血筋ならすぐに蒼く無くなってしまいうらしく。

しかも、傍流に行けば行くほど、誰が見てもわかるほどに蒼が薄くなって行くそうです。

という事は、タバサほどの蒼い髪の持ち主は、かなり王家の本筋に近いのでは？

私はそのように考えていました。

「ティーボの想像通りよ。彼女は、ガリア王家の方。先年に暗殺されたオルレアン公の一人娘であるシャルロット様なの」

「良くご存知でしたね」

タバサの年齢から考えて、母がガリアを出たのは彼女が生まれる前の事なのです。

なので、もしタバサがシャルロット姫だとしても、それを母が知っている事が不思議でした。

いくら蒼の髪がガリア王族の証でも、正確な正体までは突き止めるのは難しいでしょうし。

「アシルさんが教えてくれたの」

「だと思いましたよ……」

錬金しか芸の無い私が子供の頃から安全に生活できていたのは、間違いなくこのアシルのおかげなのですから。

メイジとしてはラインクラスの上程度ですが、私の家宰として申し分ない能力を持っている男ですし。

「先のミス・ロングビルといい。ティーボ様の交友関係は、危険に満ち溢れていますな」

「ミス・ロングビルが？」

「知らなかったんですか？ 彼女が、土くれのフーケだったんですよ」

「そうだったの？」

衝撃の事実の暴露でした。

あのオールド・オスマンのセクハラの対象であった優秀な若い女性秘書が、土くれのフーケだった。

フーケ探索と破壊の杖奪還を命じたオスマン学院長はおるか、参加メンバーの誰もが気が付かなかったので、そんな真実があるとは思わなかったのです。

「あの時は、遠巻きに家臣達にティーボ様の監視をさせていましたからね。彼女の動きのおかしさで、一発で理解しました」

「それで、俺の引き抜きに何も言わないって変じゃないか？」

何も知らない私が犯罪者を雇う事にまるで異を唱えなかったアシルを、私は疑問に思っています。

「彼女が、この環境下で何か企めると良いですね」

前歴はともかく、優秀な土系統のメイジではあるミス・ロングビルなので、彼女を上手く使いこなせばグラモン家にとっては利益になる。

というのが、アシルと彼の後にいる父や兄達の考えなのでしょう。

「確かに、ここで盗みは無謀だよな」

大量の財貨に錬金した金属や宝石などの在庫類。

盗賊達には、涎の出る光景なのでしょうが。

警備はかなり厳しいので、今までには盗難などの被害が出た事はありませんでした。

グラモン家の警備関係者が少し犯罪者に対して厳しいという評判も手伝つての事なのでしょう。

戦闘狂が多いグラモン家の古くからの家臣達にとって、盗賊とは対個人戦闘の相手でしかないのですから。

「それに、彼女の本命はマチルダ・オブ・サウスゴータです」

「なるほどね」

父が何を考えて、私が彼女を自分の懐に入れるのを黙認したのかは知りませんが、サウスゴータ家といえ、先年のアルビオンにおける王弟モード大公肅清の余波を食らった直臣であつたはずはです。

あの父の事ですから、戦争のネタというか武功を挙げるチャンスというか。

実際に、才人とギーシュがアルビオンから苦勞して持ち帰った手紙には、マリアンヌ太后へのアルビオン王位継承が書かれていました。

将来的に、彼女にサウスゴータの領地を返す事を約束して、アルビオンに攻め込む際の道案内を任せる可能性もあるのでしょうか。

現在の国力比的に、それは大分先の話になりそうですが。

「彼女の事は良いんですよ。向こうもバカではないですし。ちゃんと仕事分の給料を出していれば、危険な盗みなんてしないでしよう。ですがねえ……」

アシルは、タバサに対して迷惑そうな表情を隠そうともしませんでした。

「タバサ、単刀直入に聞くけど。君は何を望むんだ？」

「私が望む事は二つ。まずは、ミス・サヴァンに母を治す薬を作つて欲しい」

「病気か何かなのか？」

「母は、薬で心を壊された」

タバサの話によると。

父オルレアン公の死後、ジョゼフ王に媚を売る貴族達の差し金によって、自分の代わりにタバサの母親が心を壊す毒を飲んでしまったとの話でした。

「色々な薬を試したけど駄目だった」

当然、ガリア王家はアリバイ作りのために最高の薬をふんだんに用意したそうです。

ですが、最初から治すつもりなど皆無なので、薬は全く効かなかったそうです。

「その薬師はジョゼフ派で、二十年前に祖父を追い落とした家の者か。長年ガリアも陰湿な事をやっているんだな」

現在ガリア王を務めるジョゼフ王と、暗殺されたオルレアン公。

物心付いた頃から両派は火花を散らす争いを続け、その初期の犠牲者がそういう事には鈍感であった祖父であったようです。

先ほどの、母の出自の話に繋がるわけですね。

「薬に関してはね。色々調べてみたんだけど、心に作用する魔法薬なんて、惚れ薬を除けばエルフ絡みの物しかないと思うのよ。短時間なら、禁呪であるギアスを応用したマジックアイテムとかもあるけど、魔法薬では難しいわ。もし作れても、それには効果時間という物が付き纏うし」

「つまり？」

「完全にお手上げね。どこで手に入れた薬か知らないけど、ハルケギニアにいる普通の薬師ではどうにも出来ないと思う。作った本人にしか解毒剤は作れないはずだし」

母の回答に、タバサはガツクリと肩を落としていました。

「それで、もう一つは？」

「ジョゼフ王を討つ手伝いが欲しい」

相当に切羽詰ってのお願いなのでしょうが、むしろこちらの方が危険でした。

それに、いくら元オルレアン派だったとはいえ。

何となく所属していた派閥のせいで、祖父は国を追われています。母はどう考えているのか知りませんが、私は今のところは特にガリアに思い入れがあるわけでもありません。

というか、私はグラモン家の人間なんですよね。

母には悪いですけど、サヴァン家の人間ではないのです。

「ティーボはグラモン家の人間だし、私も最近自分がサヴァン家の人間かどうか怪しい気持ちなのよ。ごめんなさい」

母の回答に、アシルは肩を撫で下ろしていました。

ですが、自分が国を出た時には生まれてもいなかった元親玉の娘に危険な橋を渡るように頼まれても、普通は素直にハイと言っわけがないのです。

私は、グラモン分家の当主となってグラモン家本の庇護で金属を作る。

母は、自分の孫の中に薬師としての才能を持つ子を探してその秘伝を伝える。

別に、ほとんど顔も合わせた事が無いジョゼフ王に恨みなど一ミリも持っていませんし。

母も、自分の父を最終的に追い落としを実行した人物が、先代のガリア王である事は知っていました。

それに、既に死んだ人間に何かを言っても無駄ですし、子に恨みが続くのなら、タバサの父親であったオルレアン公も仇なわけですから。

「シャルロット様、本来このような集まりすら危険なのです。次からはご遠慮願いたいですな」

「わかった」

いまだに嫌そうな表情を崩さないアシルの冷たい一言に、タバサはいつものように短く答え。

そのままトボトボと部屋を出て行くのですが、可哀想だとは思ってもたかが金属バカには出来る事と出来ない事があると思ひ直し、すぐに錬金工房へと戻る私でした。

三十話

「え？ これで講師の仕事は終わり？」

「元々臨時なもの。本当は、ティーボとお嫁さんの顔を見て。虚無の日にトリスタニアで旦那様と会うだけで終わりだったのよ。でも、なぜかオールド・オスマンに頼まれてね」

母の来訪から一週間後、突如母はグラモン領に戻る旨を私とルイズに伝えます。

「どうやら、着任期間まで臨時の臨時講師だったようです。」

もつと簡単に言うと、母は私とルイズに会いに行くだけの予定だったものが。

学院への在留許可を出して貰う時に、オールド・オスマンから魔法薬調合の基本中の基本だけで良いから生徒達に教えて欲しいと頼まれたそうなのです。

週末まで学院に居れば、虚無の日にトリスタニアで父と会う事も出来ますよと言われて、臨時講師の任を受けたらしいのです。

最初のサヴァン家の伝統とか、そんな話はどこに行ったんでしょうかね？

「本当に大切な秘伝は、よそ様には教えないものなのよ。ルイズさんが生んでくれる孫が楽しみ」

母の突然の一言に、私もルイズも面食らってしまいます。

本当に、子供の頃からこの人は少し読めない部分があるのです。

「でも、本当は旦那様に言われてしまったの。戦争が始まるかもしれないって」

母が学院にいた一週間で、アンリエッタ王女が正式にゲルマニアへと嫁ぐ事が決定し。

同時に、軍事条約と不可侵条約も結ばれる事が決まりました。

それと、同じ日にアルビオンが王党派の完全打倒宣言と、新国家樹立を国外にも向けて公布しています。

神聖アルビオン共和国は、王党派を打倒した貴族達が貴族会議で政策を実行する非民主型の共和制国家で、議会の議長であるクロムウエルが神聖皇帝として国家のトップに君臨していました。

成り立ちや指導者などは今さらですが、いつトリステインに攻めて来るやもしれない危険な連中です。

だからこそ、ゲルマニアとの同盟が急がれたのでしょ。

「ルイズさんも、色々大変ね」

「結婚式の祝詞なんて、何を言えば良いのかわからないんです」

「そうよね。私なら遠慮させて貰うかも」

「（お義母さん、断るのなんて無理なんです）」

相変わらずな私の母でしたが。

既に同盟締結の翌日に、ルイズにはオールド・オスマン経由でトリステイン王国の秘宝である始祖の祈祷書が届けられていました。

何でも、アンリエッタ王女の結婚式の際に、これを道具にルイズが祝詞を読まないといけないそうです。

しかも、この始祖の祈祷書。

国宝扱いですが、中身は何も書かれていません。

ルイズが、自分自身で言葉を考えないといけないのです。

『なら、当日に渡せば良いじゃん。始祖の祈祷書』

私はそう思うのですが、いきなりの大任に緊張しているルイズはそれに気が付きませんでした。

それに、ルイズが持つ国宝はこれで二つ目です。

実は、アンリエッタ王女からアルビオン行きを依頼された時に、彼女から旅費の足しにするようにと水のルビーを預かっていたのです。

『国宝を、旅費の足しに売らせるなよ』と思った私ですが、どうせ全てマザリーニ枢機卿の掌の上だったのでしょうね。
もしルイズが売っても、すぐに回収される仕組みだったのでしょう。

本当、姫様の我侭の付き合いご苦労様です。

ワルド子爵の件では、下手を打って父やヴァリエール公爵に吊るし上げを食らっていました。

人間、何でもパーフェクトというわけにはいかないのでしょうか。

話は逸れましたが、結局ルイズはアルビオンへと行かず。

ワルド子爵襲撃事件の後に、ルイズはこれをアンリエッタ王女へと返そうとしました。

ですが、『それは、一度あなたにあげた物です』との事で、そのままルイズが指に填めていました。

「難しいわね。私、父に教わった薬に関する知識以外は疎いのよ」

実家の没落で魔法学院に行けなかった母は、貴族として必要な教養が少し足りない事を自覚していました。

だからこそ、子供がちゃんと教育を受けられるようにとグラモン家に行ったのでしょうけど。

「ティーボとも相談して、頑張ってみます」

「それがいいわ」

「いや、俺も苦手なんですけど。そういうの」

前世で理系だった影響でしょうか？

私には、歌や詩や作文や絵画などの才能がイマイチでした。

錬金での造作に関しては、これは魔法によるイメージで自分の手を動かさないからという理由で何とかなっているという感じです。

「姫様は国のために結婚するけれど、本当はゲルマニアの皇帝などと結婚したくないでしょうし……」

アルビオンのウェールズ皇太子が好きだったアンリエッタ王女ですからね。

それは理解できるのですが、政略結婚は王家や貴族家の宿命です。私ですら、いきなりルイズと婚約とかそういう状況になっていきますし……。

「それでも、任務は任務さ。それにそういう言い方は、アンリエッタ王女の決意を踏み躪る事になる」

「そうね……。ティーボの言う通りよね。私も頑張らないと」

とはいえ、同じく文才がありそうには見えないルイズです。多分、ギリギリまで苦勞する事になるでしょう。

「私、そろそろ行くわね」

「じゃあ、俺達も見送りに……」

グラモン領へと帰る母を見送るために、私達も別宅の外に出ます。すると、既にアシル達が馬車を準備していました。

「今度の長期休暇には戻りますよ」

「ルイズさんも、一緒に連れて来てね」

「はい」

私が母と別れの挨拶をしたあと。

馬車に乗り込もうとした彼女は、ルイズを軽く手招きします。

「どうやら、私にも内緒の話があるようです。」

「はい。何でしょうか？」

馬車の中から二人の声が聞こえますが、すぐにサイレントの魔法がかかって無音状態になってしまいました。

「あの……。何でしょうか？」

「女性同士だけの内緒の話よ」

「ティーボのお嫁さんになるのは嫌？」

「嫌とか、そういう事では無いんです。突然の事だったので……」

「前の婚約者である、ワルド子爵殿が忘れられないのかしら？」

「いえ。彼との関係は、子供の頃の憧れの延長だったんです。もし彼に、結婚と言われても困っていたでしょうし。それにあの時は、負傷したティーボが心配で、彼が死んでもあまり悲しくなくて……」

「もし嫌なら、ティーボに直接言った方が良いわよ。あの子は優しいから認めてくれると思うし」

「でも、この結婚は家同士で決めた婚約ですし……」

「いいのよ。うちの旦那様も女性の好みに五月蠅い人だし。もしヴアリエール家との縁談が駄目なら、他にいくらでも候補はいるから。でも、とっても良い子だから、学院を卒業するまでは長い目で見てあげて」

「はい」

数分後、ルイズは馬車から降りて来ましたが、二人の会話の内容は私には不明でした。

もっと厄介な事件が発生していたので、それどころでは無かったのです。

「ミス・サヴァン！ 僕の愛の言葉を聞いてくださーい！」

「……」

遠ざかる馬車に手を振る私達の後ろから、若い少年の叫び声が聞こえ、次第にそれが大きくなっていきます。

私の母に横恋慕した、マリコル又の魂の叫びでした。

ところが、その言葉は母が偶然にかけていたサイレントのせいです。全く聞こえません。

何という偶然でしょうか？

もしかしたら、母は狙ってやっているのでは？ とも思っています。

この一週間、彼は母に花を贈ったり食事を共にしたりと懸命にアピールを繰り返していたようですが。

母は、自分が息子と同じ年齢の少年に口説かれるとは全く考えていないので、全く彼の気持ちに気が付いていなかったのです。

「ちょっと！ いい加減に！」

ルイズが文句を言い終わった時には、既に彼は私達の数十メートル先でした。

ルイズのお小言よりも、母の馬車に追い付く方が先なのでしょう。

「他の女性なら、応援したやりたいがな。俺の母上は駄目だろう」
将来、マリコルヌを『お義父さん』と呼ぶ未来だけは勘弁して欲しいです。

「青春だなあ……」

「ティーボの母上じゃなければね」

「彼女、ミス・ロングビルより若く見えないか？ ふべっ！」

「言っではいけない事を……」

マリコルヌの暴走を止めに来た才人、レイナール、ギムリ、ギーシュの四人でしたが。

余計な発言をしたギムリが、ここにはいないはずのミス・ロングビルのアース・ハンドによって派手に転ばされていました。
女性に年の話は禁句でしょうに。
愚かな奴としか言えません。

「とにかく、マリコルヌを止めるぞ」

「何だ、手を貸してくれるのか？ ギーシュ」

「いくら何でも、アレは我が家的に拙いじゃないか」

いくら妾でも、グラモン元帥の女に手を出そうとするマリコルヌは危険です。

下手に問題化する前に、可哀想でも抑えてしまっしかありません。

「ギーシュも、そのくらいの知恵は回るんだな」

「五月蠅いな！ 今までは悪かったよ！ サイト！ レイナール！ ギムリ！ 押さえ込むぞ！」

「俺も行くぞ！」

私も含めた男五人は、母の乗っている馬車に向かって疾走するマリコル又を急いで追走します。

「あいつ、あんなに足が速かったか？」

「愛だな。うん、愛だ」

「アホな事を抜かすな！ サイト！ 抑えるぞ！」

ようやくマリコル又の背中が見えて来たので、私達は順番に相次いで飛びついて、その重量で彼の走りを止めようとしています。

「俺と、ギーシュと、才人と……。レイナール！ ギムリ！ お前達も抑える！」

「わかった！」

「しかし、凄えパワーだな」

三人では駄目だったので、五人でマリコル又を抑える作戦に変更しましたが、彼はゆっくりながらも前進を止めようとはしません。正直、どこにそんな力があるんだよという話です。

「ミス・サヴァン！ 僕と結婚してくれえー！！」

「抑えろ！ 頼むから抑えてくれ！」

「マリコルヌ！ 僕の父上の逆鱗に触れるぞ！ 彼女は父上のお気に入りになんだぞ！」

「僕のものになってくれえー！！」

「本当に、凄いパワーだな。愛だな」

「才人は、余計な事を言うな！ そのパワーを他の女性に向けてくれー！！」

その後、私達五人がしがみ付いた状態で、マリコルヌは数百メートルを前進してその愛のパワーとやらを見せ付けられるのでした。

「うん、合格だね。君は元々優等生だから、全く心配はしていなかったが」

ようやくいつもの平穏な学生生活に戻った私は、負傷したために延期していた定期考査を受けていました。

筆記と実技でしたが、私は前世の貯金でそれほど勉強しなくても、そこそこの点数が取れました。

現代日本とハルケギニアなので、内容はまるで違うものでしたが、一応は国立大学の大学院にまで進んだので、試験勉強の類のコツが体に染み付いていたのです。

更に試験教官がミスタ・コルベールだったので、何の問題も無く試験は終了していました。

本当に、前世で効率良く試験勉強を切り抜けるスキルを獲得していたのは幸いでした。

「ところで、研究の方はどうなりました？」

独自にオリジナルのエンジンを作成したり、私から貰ったボロ自転車数台の修復に励んでいたミスタ・コルベールに質問をします。

「あの自転車というカラクリは素晴らしいね。色々勉強になったよ」

試験も終了したので二人でミスタ・コルベールの研究小屋に行くと、既に三台のママチャリが完全に復元されていました。

他にも、自分なりに自転車を製造しようとしているようで、幾つかの中途半端に組みあがった試作品が見えました。

「一から作っているんですか？」

「言うほど、自分では何もしていないよ。形だけはある程度完成しているけど、肝心の部分がね……」

多くの部品から出来ている自転車でも、多少形が歪でも問題が無い部分のみ自分で作ってみたそうです。

ですが、ブレーキは構造は理解したものの量産は難しく。

ギアやチェーンの部分も同様で、自家発電で光らせるライトの部分は、電気という物が理解できていないようなので、全く手を付けていないようでした。

「量産には、多くの熟練した職人と、正確に同じ部品を作れる工作機械。それと、安定した材料供給源が必要ですな」

勿論ハルケギニアには、既に簡単な工作機械の類やノギスなどの測定器具なども存在しています。

これで、各国の軍事工廠が銃や大砲などを作っているからです。

ですが、民間レベルではいまだに一人親方など珍しくも無いですし、大半が数名の工房で少数の生産というのが大半です。

産業革命に出てくるような多くの人が働く工場や、多くの部品を共通規格化して下・孫受けの工場から部品を集めて組み立てるなどの近代化には、『あと、少なくとも百年は必要なのでは？』と考えるてしまう私でした。

ミスタ・コルベールの研究は非常に有用な物ですし、他に彼ほどの成果を挙げている者はほとんど存在しないでしょう。

ですが、彼の研究は試作品の製造でストップしています。

魔法が使えない人でも便利に使えるようにと、エンジンの原型を一から一人で製造したりと。

その能力は天才と呼ぶに相応しいものがありました。彼は肝心な事を忘れていたようでした。

それは、それらの研究成果はある程度の安価で世間に普及しないと、ほとんど世の中に普及しないという事なのです。

「確かに、この中心部品は厄介ですね」

タイヤや車輪、ハンドル、フレームなどは、丈夫でさえあればミクロン単位の精度などまず要求されません。

見本と専用のノギスを渡して、決められた数を納品させれば済む話です。

ですが、ギアの歯車や、バネなどの精密部品などはそう簡単に済む問題では無いのです。

材質の問題もあります。

アルミ合金、チタン合金、超張力鋼、マグネシウム合金。

最近の自転車では良く使われている素材ですが、ハルケギニアでこれを一定量作れるのはまだ私だけです。

実は自転車が手に入ったので、ディテクトマジックでフレームなどを調べる事が出来たのが幸いしました。

ある程度の含有量がわかったので、あとは調合比率を微妙に変えつつ。

繰り返し錬金をして、解答を見つけたのです。

根気良く繰り返し実験をするのは、研究者としては当たり前の事です。

しかもヒントがあったので、他の研究者よりも遙かに少ない試行錯誤で解答に辿り着きました。

でも、本格的に工業化が進まないと、合金の微量な含有量の違いによる金属の性質の差を理解して貰えないんですよ。

それでも、後世の事を考えてデータの記録は確実にやっているのですが。

「量産には、相当の資金と人材が必要ですね」

私は、近くにあつた紙に適当に図を描いていきます。
自転車を作るのに最低限必要な部品でも、あまり精度を必要としない物は他の工房などに委託する。

ただ、それもある程度の品質管理は必要だし、組み立ての際に必要な量を時間内に納品させないといけない。

となると、その下請け工房は、出来るだけ心臓部品を造り最終組み立てをする本工房の近くにあつた方が良いでしょう。

あまり綺麗な字ではないですが。

簡単な図や箇条書きに、ミスタ・コルベールは何度も頷いていました。

「私の研究も、いかに世間に普及させるかが鍵なんだね」

「そうですね。独自で、ここまで作り上げた力量には感服しますが……」

それも、世間に認知されて始めての成果なんですよね。

今のままだと、ただの変わり者の研究者で終わってしまいますし。

「とはいえ、今君が考えているような事を始めるとなると、スポンサーの存在が必要だね」

いつの時代もそうなのですが、この時代に金の無い才能がある人が独自の研究や活動を始めるとなると、まずは有力なスポンサーを探す事からスタートしないとイケません。

しかも、ミスタ・コルベールの本命がエンジンの量産で、オマケ

に自転車の量産などという高いハードルがあると、スポンサーが頼める人材も非常に限られて来ます。

芸術活動とかならば、小金持ちの貴族でも対応できるのでもう少しハードルは下がるのですが。

最終目標が、大規模工房群での様々な工業製品の量産ともなると、相当な資金力が無いとスポンサーにはなってくれないでしょう。

「俺が、スポンサーになるという話がありますけどね」

実はグラモン領には、それなりの規模の工房が存在していました。軍人である父は軍に関する投資は惜しまない性質なので、戦場に大砲や銃が出現するようになると、独自に調達可能なように工房の建設と職人の囲い込みをしていたのです。

それと、主に小型船と空軍の退役艦艇の再配備が主でしたが、小型空中船ならば建造可能な。

大型艦でも、どうにか修理できるレベルの造船所も持っていました。

ですが、当然お金がかかるので、奥様には私が鍊金をするまでは疫病神扱いされていました。

軍備の厄介なところは、一時期金がかかって経済を刺激しても、再生産性が皆無なところですよ。

ですが、この時代に貴族が弱いなどただの悪でしかないのです。それでも、父はやり過ぎだと周囲からは言われていますが。

「最初は、グラモン侯爵家の軍備品の量産からスタートですか……」

私の話の真意に、ミスタ・コルベールはすぐに気が付いていまし

た。

「多分、俺はあなたの望む額を出せるでしょうね。でも、世の中ってそう都合良くいかないわけでした」

アルビオンがヤバイと聞かされてから、私はこれらの工房などにある程度の資金を注入していました。

このままトリステイン軍に付くにしても、もし見限ってゲルマニアなりレコン・キスタに付くにしても、ある程度の戦力を保持していないと舐められて蹂躪されるだけですからね。

それほど専門知識の無い私には、持っている金を注ぎ込むしか策が無かったのです。

あのまま、屋敷地下の金庫に眠らせておくのもどうかと思いました。

ところが、この工房。

父の先代から数十年以上も金を注いできた割りには、技術力こそはそこそこのレベルにあるもの。

『少し効率が悪いのでは？』と思っていた私でした。

そこで、ミスタ・コルベールに銃や大砲の量産体制の確立や、新型銃などの研究も行えるように依頼したのです。

船も、船台を増やして大型船の量産も行えるようにしたいですね。

品質管理責任者、工房長、技術責任者、研究者、人員・資金管理など。

要するに、工房の規模を拡大しながら技術力と生産性と採算性を上げ、派生した技術を民間にも波及させる仕事です。

責任は重いですが、これを引き受けるのならば、他の物の研究や試験製造なども存分にしても構わない。

かなりの自由裁量を許す旨を彼に伝えます。

「軍で使う武器の生産ですか……」

「お嫌ですか？」

「あまり良い感情は抱かないね」

先日のミスタ・コルベールの活躍を見た私は、アシルに彼の正体について調べさせていました。

かつては、トリステイン王国の魔法研究所実験小隊の小隊長を務め、国家が命じる様々な汚れ仕事に従事していた。

二十年ほど前に発生した、裏の世界では様々な憶測を呼んだダングルテールの焼き討ち事件では、表向きの理由は疫病の他地域へ蔓延を防ぐために仕方なくダングルテール一帯を完全に焼き払ったが、後にその命令が当時のロマリア教皇からの要請による新教徒の弾圧だと知って小隊を脱走し、身分を隠して魔法学院の教職に収まったらしいと。

どつりで、実戦の場ではワルド子爵に劣らない力量を見せたはずでした。

ちなみに、どうしてここまで詳しく調べられたのかは、これは父のおかげです。

伊達に軍の元帥では無いのですから。

「でも、もし自転車を量産しても、最初に大量購入する先は軍の可

能性が高いですよ」

前の世界で言う中世から近代にかけての世界観を持つハルケギニアでは、もし新しい発明があったら、それはまずは『軍用に使えないのか?』と考える貴族や商人は多いのです。

そこが一番の購入層なので、これは仕方が無いのです。

自転車も、短距離の連絡用や、悪路での少数部隊の移動など。

馬や幻獣が運用不可能な場所では、重宝される可能性があります。前世でも、銀輪部隊なんて呼んで旧帝国陸軍も運用していました。

「それに、あの自動的に火を吹く機械ですか? あれも、最初は軍用でしか実験できませんよ」

あの初期のエンジンでは、車やバイクなどには到底辿り着かないでしょう。

それに、工作精度の問題もあるので、まずは大きな物で実験しないといけません。

となると、馬車などに搭載して初期的な機関車にしてしまつか、既に一般に普及している空中船に実験的に搭載するのが現実的でしょう。

機関車だと線路や運行運用で非常に手間を食いますので、古い空中船に試作品の水蒸機関を搭載して実験し、万が一の事があっても風石があるので落ちる事もない。

純粋な可燃機関であるの巨体を浮かすのは難しいので、風石との併用でも非常に高価なその使用量を減らせれば、大幅なコストダウンに繋がって優位には立てるはずですよ。

「最初に言っておきますが、どんな発明でも軍事に利用されないなんていう夢を抱いているのなら、最初から研究などしない事です」

これは、私が前世で通っていた大学の恩師が言っていた言葉です。近年に人類は、様々な合金や安価な金属の精錬方法などを発明しました。

ですが、その多くが軍用に転用されて沢山の人を殺しているのです。

そしてそれが陳腐化していくと、民用として量産されて民生品にも生かされるようになる。

腹立たしいが、それでも自分達やその先達たちは研究を止めなかつた。

止められないのだという話でした。

更に、最近では民生品と軍用品の境目すら怪しいそうです。

確かに、日本では民生品でも海外では軍用品に転用されている物など珍しくありませんでした。

僅か数年の海外サラリーマン生活でしたが、それは自分でも実際に見ていましたし。

途上国の軍の輸送車両に、TOYOTAなど別に珍しい事でもありませんでした。

「ミスタ・コルベールは、誰かが包丁で人を殺したから包丁を忌諱しますか？」

「それは……」

「要は、使う人次第なんですけどね。この世から戦争なんて絶対に無くなりませんよ。私達が人である限りは。私達に出来る事は、理

性を保つてその損害を少なくする事だけです」

「……」

ミスタ・コルベールは暫く考え込んでいましたが、次の日には私の提案を受け入れる旨を伝えて来ました。

実は、普段は変わり者でいかにも弱そうに見えた彼が、ミスタ・ギトーと共に武勲を得た事実によって、少し学院の教師としてはやり難くなったという事情もあつたのです。

そこで、私は再就職先を提示して彼を上手く引き抜く事に成功していました。

「夏休みに入ったら、そちらに行かせて貰うよ。ミスタ・グラモン。いえ、ティーボ・ド・グラモン子爵様」

こうして、ミスタ・コルベールは夏休みの始まりと共に学院を去り、グラモン領内にある軍事工房の長として再就職を果たしたのです。

勿論、いきなり元学院の教師をトップに据えたので、最初は古くからいる人達から文句は出ましたが。

私が施設と権利の半分を買い取り、更に投入する資金の半分を負担する旨を伝えた事と。

着任して来たミスタ・コルベールの能力によってすぐに静かになったのですが、それはもう少し先の話でした。

三十一話

「ねえ、ダーリン。夏休みになったら、宝探しにでも行きましょよ」

「悪いけど、忙しいし。あまり少人数で出歩かないように言われているんだよね」

定期考査も終わり、もう少しで夏休みに入ろうかという時。

授業も少なくなったので私が錬金小屋で錬金に勤しんでいると、そこにキユルケが現れて私の腕を組んできます。

「そんな大人数でゾロゾロと行ったら、旅行の楽しみが無くなるわよ」

「先日の事件絡みさ」

レコン・キスタのスパイであったワルド子爵に、私が危うく殺されかけたせいでした。

それと、今までにあまり大きな事件が無かったせいでアシルの作った監視体制に隙があったと、彼が父に怒られたせいで私には余計に多くの監視が付く事になっていたのです。

普段、学院にいる時や錬金小屋にいる時には全く気配を感じませんでした。

私ごときに簡単に勘付かれるような監視なら、そもそも付ける意味があまり無いのです。

「万が一の時は、私がダーリンを守ってあげるわ。ゲルマニアの女

は情が深いのよ」

色気があって肉感的な彼女に抱き付かれると、ついその表情に締りが無くなってしまふ私でした。

ですが、これも男の性。

他の家臣達も、『わかる、わかる』と言った表情をしていました。

「ツエルプストー！ 人の婚約者に手を出すなんて、一体どういう神経をしているのかしら！」

「当然、ルイズの逆鱗に触れる事になるのですが、それをキュルケはさも当然といった風に捕らえています。

「婚約しても、必ず結婚するという保障も無いし」

「絶対に結婚するのよ！」

ルイズの絶叫が、錬金小屋中に広がります。

響き渡る彼女の決意にも似た言葉に、家臣達はニヤニヤとした視線をこちらに送り。

ルイズは顔を真っ赤にしてしまい、私も気恥ずかしさを感じてしまいます。

そして、この事態の原因を作ったキュルケも、どこか楽しそうな笑みを浮かべるのでした。

「この地図も、インチキだったぞ」

「良くわからないガラクタと、銅貨数枚だけ。やっぱり、ワゴンセール品の地図なんて当てにならないよ」

数日後、錬金小屋に才人とギーシュが汗まみれになって入ってきます。

この二人は、動けない私の代わりにキュルケの地図を頼りに宝探しに出かけました。

この二人とキュルケとタバサで、タバサの使い魔である風竜に乗って数箇所を探索して来たらしいのですが、結果は散々であったようです。

「ギーシュも、サイトも。オーク鬼の首なんて斬り落として来るし」

同行したキュルケが、才人の持つ血の滲んだ麻袋に文句を言います。

ですが、我がグラモン家の掟では、亜人に遭遇した際には出来る限り倒すものと教えられています。

そして倒した亜人の首は獲るものと、これはDNAに刻まれたかのような決まりになっているのです。

戦果を周囲の人に示して、武の家系であるグラモン家の評判を広め。

ついでに、その首でささやかな懸賞金を得る。

一石二鳥の効果があるとの話でした。

昔から貧乏なので、それでお小遣いを稼ぐのが普通らしいのですが。

ちなみに、私は錬金が忙しかったので、亜人退治の経験はありませんでした。

父から、『お前は、錬金の腕を磨きなさい』と常に言われていたからです。

私的には、幸いだと思つて錬金ばかりしていたのですが。

「近場ばかり、五箇所ほど回つただけだ。全部、ハズレだった」

シエスタから冷たい麦茶を貰いながら、才人が宝探しの結果を報告します。

ちなみに、この麦茶も私が商品化した物でした。

更に、そろそろ暑い季節という事で、魔法で作つた氷に固定化をかけた物を入れた冷蔵庫で冷やしています。

電気を使う冷蔵庫なんて私は最初から諦めていたので、要は魔法の力で冷蔵庫を再現できれば良いと。

これも、作らせていたのです。

当然私には、氷くらいなら大量に作れる家臣も存在していますし。それと、これはポピュラーでしたが、エアコン代わりにメイジに風の魔法を使わせる事もしています。

そろそろ、本格的に暑くなつて来ますしね。

「それで、これが最後に残つただけだ」

「またガセじゃないのかい？」

才人が持つ最後の地図に、ギーシュが否定的な意見を言います。

「どうやら、男という事で常に亜人達の前に立たされて疲れているようでした。」

「場所が一番近いんだ。ティーボも誘おうかと思つて」

「これなら日帰り可能だな。俺も行くよ」

才人の持つ地図を見ながら、私も明日は宝探しに行く事を決めます。

ですが、私は別に本当に宝が見るかる事を期待しているわけではないのです。

ここのところ、先の負傷で減った分の在庫と、父から我が領は戦時体制に移行したという連絡を受けていたので、効率良く金になる物の錬金を大量に行っていて、碌に休んでいないという理由があったからです。

先に王家が滅んだアルビオンでしたが、これはトリステインとゲルマニアとの間で婚姻と軍事条約が締結された直後に、クロムウエルなる人物を神聖皇帝とする神聖アルビオン共和国の建国が宣言されました。

当然、故ジェームズ1世からアルビオン王位を託されたマリアン又太后を擁するトリステインとは一触即発となるのですが、そこは複雑怪奇なる外交の世界。

マザリーニ枢機卿は、年毎の更新協議が可能な相互不可侵及び停戦条約の締結に成功します。

これには、『すぐに戦争に突入せよ！』という現実の見えていない多くのトリステイン貴族達からの反対意見が続出するのですが。

『碌に戦争準備も出来ていない状態で、戦力の少ないトリステインがどうやってアルビオンに攻め込むのか？』

という父やヴァリエール公爵の意見で、全員が黙ってしまったそうです。

ですが、これでトリステインは準戦時体制に移行し。

同じくアルビオンも、内戦の損害を癒しながらやはり戦時体制は解いていないそうです。

双方は、いつ破られるかもしれない条約にビクビクしながらこれからの日々を過ごす事になるのです。

そして、当然の如く。

我が父グラモン侯爵も、自身の領内に戦時体制を発令して諸侯軍の準備を始めました。

しかも、今までのような直前になって軍を集めるといふ風な物ではありません。

将校も、指揮官も、兵士達も。

更に、あまり領民を徴兵すると生産力が落ちるといふ事で、父はそれは最低限に止め。

傭兵や、仕事のない王国直轄領の失業者や、果ては流民までを雇い。

彼らに訓練を行いつつ、空いた時間に彼らに野戦陣地や要塞建設の訓練と称して、彼らや彼らの家族の住む家などを建設し。

ついでに、基礎訓練の代わりという事で、領内で滞っていた開墾や治水や町の開発なども手伝わせて、そこに傭兵達の家族を住まわせました。

更に、そろそろミスタ・コルベルが着任する、グラモン家の工房に応援を送って銃や大砲などの生産を拡大し。

内戦で逃げて来たアルビオン人の保護を行う代わりに、彼らの中で空中船を扱える人材を諸侯軍の空軍に入れ。

中古で集めてきた船の改造や、新造船の建造までスタートさせと。

王城の貴族達からは、『遂にグラモン元帥はおかしくなった』と噂されるようにまでなっていました。

ですが、父は軍人バカですが戦機を見るのは得意です。多分、この軍備が後で絶対に役に立つと思つて、今までに貯めた大金を使っているのでしょう。

それに、私も持っていた金貨の大半を吐き出しましたし。

一応、債権建ての借金という形にしていますが、無期限・無利子で父にあげたに等しいかもしれません。

おかげで、我がグラモン領は空前の好景気に沸いています。大量の資金に、雇われた傭兵達とその家族と、彼らへの需要を見込んで商人や職人も集い。

軍備強化のために、私ガねじ込んだミスタ・コルベールをトップとする工房もこれから急速に拡大するので、これらの人員も増え。

現在のグラモン領には、人と金が渦巻いている状態になっています。

更に、向こうにミスタ・コルベールがいるので、私は彼にも一つ仕事を頼んでいました。

それは、転炉を用いた鋼と、本当は卒業後に行く予定にしていたコンクリート生産工場の立ち上げです。

とは言っても、それほど難しい事は出来ません。

転炉は、私の持っている製鉄の歴史の資料を翻訳して彼に渡し。

もう一つのセメントですが、実はセメントの歴史は古く。

前の世界ではローマ時代から使われ、今でも現存するパンテオンやカラカラ浴場やローマ水道が有名です。

セメントは、簡単に言えば消石灰に火山灰が地上や水中に堆積して出来た凝灰岩を砕いて混ぜると水硬性を有するようになる。つまり、水を混ぜると固まるわけですが、要はどうやってこれを効率良く量産するかなのです。

以前からガラスや焼き物の材料も作っていますし、製鉄の材料とも被る部分があるので、その合理化をミスタ・コルベールに資料を渡して頼んでいたのです。

資料は、私の持っている学術書の翻訳物でしたが。

私は、ハルケギニアにもセメントくらいはあるだろうと思っていましたが、どうやらメイジのおかげで石材の切り出しが簡単なせいで、ほとんど普及していないようでした。

近代国家の基本は、鉄とコンクリートの量なんですけどね。

普通のセメントと、ボーキサイトと石灰石から作る速乾性があるアルミナセメント。

今はこれで十分でしょう。

セメントやコンクリートの専門的な話など始めたら、本当にいくら時間があっても足りなくらいですし。

それこそ、本が何冊でも書けてしまいます。

こんな感じで、周囲からは狂乱していると思われる父でしたが。私に借金までして、領内を一個の軍事要塞かのように人と金を集めて訓練・戦備・工事・生産・開発を行う様子は。

高等法院の長であるリッシュモン伯爵をして、『反乱の準備を進めているのでは?』と言わしめるほどでした。

ですが、この流れに乗った貴族もいました。
ヴァリエール公爵と、その近辺に領土を持つ貴族達です。

どうせ、レコン・キスタ軍は攻めて来るので、その前に準備を行った方が良いでしょう。

更に、父が大量の金を領内に使っているので、その特需の分け前を狙っての行動でもありました。

ヴァリエール公爵以下、他にもグラモン領の周辺にいる貴族も合わせて二十名ほどの貴族が、父よりは規模が劣るものの。

諸侯軍の編成と、グラモン家の諸侯軍との合同訓練や、戦備品の共同調達への協力を行い。

軍の移動速度を速めるための、道路建設を共同して行ったりと。
トリステイン東部の様子を一变させているようでした。

ただ、その原資は全て私が十年以上かけて稼いだお金でしたけど。

ですが、あとで極力民生用に転用可能なようにやっているようですが、こんな無茶な体制は良くて数年が限度です。

しかも、私が効率良く金を稼いでる条件でもありません。

なので、余計に私への護衛は多くなり、行動には制限が付き。

遂には、ミスタ・コルベールに鋼やセメント工場の立ち上げを委託してまで。

私は、金になるアルミニウムや真珠、水晶、ヒスイ、各種宝石類の錬金へと特化して行きます。

勿論、夜には自由に金属の合成なども行っているのですが。

新しい合金比率の発見に成功しても、これの実用化には程遠いのが現実です。

今は、実験成果の記録と試作品の錬金のみに留めるしかありませんでした。

早く戦争が終わって、学院を卒業できる日を待つ事にします。

「とうわけで、気分転換に参加するよ。シエスタ、お弁当の準備を頼む」

「わかりました」

こここのところ、錬金に精を出していたおかげで在庫に余裕のある私は、キュルケの持っている地図で一番近場にあるお宝ポイントへと向かう事にします。

勿論、宝など全く期待していませんでしたが、場所が今までに行った事が無い山の近くにあったので、ついでに鉱石探してもしようと思ったのです。

「護衛が多いわね。仕方の無い事だけど」

そして次の日。

場所が近く参加人数が多いという事で、私達は数台の馬車に分乗して地図のポイントへと向かいます。

「今度くらい、何かがあつて欲しいよな」

才人は、六度目の正直を期待しているようでした。

ですが、普通に考えてワゴンセール品の地図に、物凄い財宝の隠し場所が書いてあるわけありませんでした。

そんなに上手い話は、滅多に存在しないからです。

「鉄の牛の墓場って書いてある」

「鉄の牛？ 墓場？」

私は最初は、アフリカ象の墓場のようなものかと思ってしまいました。

ですが、鉄の牛という事はひよっとすると考えると考えて、急いで地図に書かれている地点へと向かいます。

「地図の印のポイントはここだな」

そこには、鬱蒼と草木が生える山の岩肌と、その山腹にはいかにも何かありそうな洞窟が存在していました。

ディテクトマジックで探しても、特に罾や亜人や幻獣などの気配も無かったので、洞窟に入って中を探索する事にします。

「ダーリン、暗くて転んでしまいそう。腕を組んで欲しいの」

「灯りなら、ライトで十分でしょうが！」

「とか言いつつも、自分も腕を組むのね」

「……っ、別にいいじゃない……。婚約者同士なわけだし……」

私の両腕はすぐにキュルケとルイズに組まれてしまい、むしろ私の方がバランスが悪くて転んでしまいそうでした。

「ああ……、何だろう？ 生活の面倒を見て貰っている身で悪いけ

ど、この虚しさと腹立たしさと」

「私の場合は、ご主人様の生活の安定は大歓迎ですよ」

「あれ、安定しているか？」

「所帯を持って、家庭を作る。これには、平民も貴族も変わりはありませんよ」

「そうなんだろうけど。俺のいた場所では、学生時代に婚約者とか、二十歳前に結婚とか。あんまりいないしな」

「そうなんですか？」

その後にした才人は、弁当係であるシエスタと話し込んでいました。

「僕は別に。僕には、モンモランシーがいるからね」

「えーっ！ ギーシュと私？ そういう事を言う前に、あのケティという娘との関係を清算しなさいよ。あっ！ ヒカリゴケを発見！ これも、秘薬の材料になるのよ」

「ケティは、僕よりもティーボの方が良いそうだよ」

「随分と露骨なのね、あの娘も。でも、もうティーボにはちょっとかいは出せないでしょうけど」

言うては悪いですが、ケティは貧乏貴族のしかも跡取りではありません。

元から娘なので跡取りではないのですけど、同じ娘でも長女などの方が良い嫁ぎ先に行くのが普通で。

長女でない彼女がギーシュや私にアタックしたのは、これは彼女なりのチャレンジでもあったのです。

それといくら趣味とはいえ、自分でお菓子を作る貴族というのは、かなり実家が貧しい証拠です。

もしルイズが自宅で料理なんてしようとしたら、使用人が、『止めてください』と走って来るのが普通なのですから。

火傷でもされたら大変ですし、それは貴族が使用人やコックの仕事を奪う事にもなるのです。

私も最初は戸惑いましたが、このハルケギニアには元現代人の私にはおかしいと感じても、ここでは普通な決まりや習慣があるものなのですから。

「だから、僕はモンモランシーに全ての愛を捧げるのさ」

「ふーん。ねえ、どう思う？ シエスタ」

モンモランシーは、才人と話しながら前を歩くシエスタに声をかけます。

二人は、週末に私の鉱石探しに付いて来る事が多いので、面識があって仲が良かったのです。

「あの……。お止めになった方が安全なのでは？」

「そうよねえ」

「男性には、ティーボ様のような誠実さが必要なのでは？」

「ティーボは誠実というよりも、多分浮気とかは隠せないタイプかも」

「そうでしょうか？」

「それに、下手をすると女性よりも鉱石を取りそうな気がするし」

「それは、否定できないかも……」

シエスタは、ギーシュの過去の悪行については誰にも話していませんが、彼には辛らつな発言をする事が多くなっていました。

とはいえ、貴族と平民という絶対的な壁があるのでこの程度が限界なのですが、それでも普通であれば後で罰せられてもおかしくないレベルの事を良く言っていました。

それと、私はシエスタに『嫌なら、あいつにお茶とか出さなくてもいいよ』と言ったのですが、『それは、メイドとして出来ません』と言って、ギーシュには出廻らしを良く出していました。

ケーキなども、残り物や、小さい物や、端っこが少し硬くなっている物などを優先して出しています。

ただ、ギーシュはどうにも女性からの敵意に鈍いらしく、シエスタからの仕返しに全く気が付いていないのですが。

そして、なぜか私も意外と辛らつな事を言われているような気がします。

「うん？ 先に光が見える。洞窟が終わるのか？」

百メートルほどの大人二人が横に並ぶのが精一杯な洞窟を抜けると、私達は広々とした広場に出ました。

数百メートル四方くらいでしょうか？

自然に岩畳状になった平坦な場所で、周りは全て直角状の岩の壁で囲まれていました。

上を見上げると青い空と太陽が見えるので、どうやらここは山の中心部で、昔は火山の火口だったのかもしれない。

「なあ、あれ」

才人が指差した中心部には、一棟のプレハブ倉庫を改良したような建物が立っていました。

十数年ぶりですが、確かにあれは前の世界では良くあったプレハブ式の倉庫です。

私達が急いでその建物の入り口に行くと、そこにはやはり予想通りでしょうか？

数台の車が置かれていました。

「あつ！ 三菱パジエロだ」

才人にも、その車種がわかったようです。

他にも、普通の軽自動車が二台と、軽トラックが二台に、スクーターが二台。

更に、小型と大型の耕運機が一台ずつと。

なるほど、これを見たハルケギニアの人が、これを鉄の牛の墓場と書くのは当然なのかもしれません。

動かない、動かせない以上はこの鉄の牛は死んでいるわけですか

ら。

「うーん、どこか地方に住んでいる人の車庫みたいだな。農家とかの」

私の十数名の家臣達がこの施設の全容を捜査している横で、才人が自分なりの意見を言います。

確かに置かれている車の数からして、これは農業でもしている家の車庫が何らかの理由でここに飛ばされて来たのかもしれない。

更に調査を進めると、そこには予備のエンジンオイルやタイヤやバッテリーなども置かれていて。

最低限の整備すれば、走らせる事が可能ではありそうでした。

ただ、私にはそれほどこの手の経験が無いので、これも紫電改の時と同じく完全な手探りとなるのでしょうか。

「さて、どのくらい時間が経っているのか……」

私は、ディテクトマジックで車の様子を探ります。

少し埃は被ってはいましたが、どうやらここに飛ばされて大した時間が経っていないようです。

内部まで探りましたが、材質の劣化は特に見られませんでした。

「この古地図が、インチキなんだろうな」

続けてワゴンセール品の地図を探ると、やはり魔法で古びたように見せかけていますが、実際には新しい物のようでした。

ですが、この際はそれに感謝しないといけないのかもしれませんが、もし車が完全に朽ち果てていたら、もう二度と使えなかったのでしょうか。

「所有者は、いないようだな」

才人は、ガンダールヴのルーンで全てが稼動可能である事を確認しながら周囲の気配を探ります。

それと、ここがこんな場所であったのと。

車に、スクーターに、耕運機であった事が幸いしたようでした。

これを私達よりも見つけた連中は、これが何なのか理解できないで持って帰る気を起こさなかったようですから。

「ガソリンは入っているよ。満タンとはいかないけど」

「だろうな」

元はどこかの農家の倉庫なので、少なくとも燃料が無いと動けないはずです。

なので、これらの車などには最低限のガソリンが入っているようでした。

ですが、ハルケギニアの人間には、車を動かす際にキーが必要なのは理解できないようでした。

倉庫の壁に付けてあるボードに、全ての鍵がかけてあったのです。

「動かせるな」

「お楽しみは、これを持ち帰ってからでいいと思うぞ」

私は、倉庫内の車庫スペースにある隣の倉庫で竹箒を手にとって見ているシエスタや、紐に結わえられて詰んであった古新聞に興味深々のギーシュを目撃しました。

ギーシュは、カラー刷りの東スポを読んでいるようでしたが、あのページの捲り具合からして、風俗特集の写真でも見ているのでしょうか。

新聞の開き具合で、それがわかってしまう私も駄目なのでしょうが。

「詳細な調査は、持って帰ってから行う。みんな、固定化をかけるのを手伝ってくれ」

私の一言で、家臣達やギーシュなどがプレハブの建物や、中の車や軽トラなどに固定化をかけていきます。

「でも、どうやって持ち帰るの？」

自分が固定化をかけると、対象物が壊れてしまう事を承知しているルイズが私に尋ねて来ます。

「洞窟は狭いけど、空が空いているさ」

山腹の洞窟を抜けると、そこはドーナツ状の山の中腹部という変わった作りでしたが、これならば大型の竜を複数使えば持ち帰る事は可能でした。

私は、その命令を近くにいた家臣にします。

「金を惜しむなよ。絶対に壊さずに持って来させるように」

「かしこまりました」

その後、私達は再び洞窟を抜けて山の斜面に戻ります。

「何か良くわからない。いかにも、ティーボが好きそうな変な玩具だったわね」

手付かずの山でまた大量の薬草を摘みながら、モンモランシーが先ほど見た車やスクーターの感想を述べます。

「でも、サイトは使い方を知っているみたいよ。また、グラモン家が未知のお宝を独占ね」

なぜか薬草摘みを手伝わされているキュルケが、いかにも貴族家の令嬢らしい一言を言います。

ですが、もし自分だけでアレを見つけても何に使うのかすら不明で、しかもあの場所から大金を使って竜を雇い、実家に持ち帰る事など絶対にしないのでしょうから。

「未知のお宝？　あまり、お宝には見えないわね。ギーシュは、何か嬉しそうだけど」

ギーシュは、私から貰った東スポに丹念に固定化をかけてながら嬉しそうに中身を見ていました。

前の世界では僅か120円の新聞なので、それで機嫌が良くなつて後で使いやすくなれば。

それは、私に十分に利益になるのですから。

「だが……。鉱石が無いのは最初から覚悟していたとはいえ……」

この山の石を懸命にハンマーで砕きながら探査を続ける私でしたが、そちらでは全く収穫を得られないで凹んでしまう私でした。

三十二話

「おっ、上手いじゃん。ティーボ」

「前世では、ちゃんと免許を持っていたからな。十数年ぶりゆえに、ペーパーなわけだが」

「俺なんて、未成年で無免許だし」

「お巡りさんとかいないからな。構うまい」

キユルケがどこかのお店のワゴンセールで購入した地図を元に、私達は宝探しに出かけ。

その鉄の牛の墓場と呼ばれていた場所で、一棟の大きなプレハブ式の倉庫を発見しました。

そして、その中には数台の車とバイクが置かれていて。

更に良く調べるとほとんど劣化もしていない事が判明し、他の所有者もいないという事もあって、これを家臣達に全て持ち帰らせていました。

現在、現地から慎重に竜で運ばれたプレハブ倉庫は、錬金小屋の近くにあった空き地に全く同じに建てられ。

中には、持ち帰った車や物品が以前と同じように配置されていました。

早速に色々調べて全て稼動状態に持っていきたくところでしたが、私も色々忙しい身。

ミスタ・コルベールもグラモン領内で忙しい事もあって、あとで

色々出来るように全ての物品に固定化をかけ。

まずは、才人が一番最初に見つけた三菱パジェロのメンテを行う事にしました。

錬金したハイオクガソリンを入れ、エンジンオイルを交換して。

ディテクトマジックで、劣化した部品の修復を行います。

これは、主に酸化したバッテリーの端子の形状を元に戻すのが主でした。

最近の車なので、一部がコンピューター制御がされていて、その部品には手が出せなかったからです。

その部品は、なるべく強固に固定化をかけて劣化を極限にまで遅らせる事にしてとりあえずは解決し。

約半日ほどの整備で、無事に三菱パジェロは草原を軽快に走りま
す。

「いいねえ。前世の俺の安月給じゃあ、この車は買えなかったんだ
よ」

「それで、軽トラじゃなくてこれを最初に稼働させようとしたのか」

「それも、あるんだが……」

あれは、社会人になってから一年くらいしてからでしょうか？

社内に気になった女性がいた私は、普段は奥手な性格なのに無理
をしてようやくデートに誘う事に成功していました。

「へえ、凄かったじゃん。それで、どこに行ったんだ？」

「当時住んでいた場所に、車で一時間ドライブすると景色の良い湖

があつてな。近くに、天然水を使った蕎麦を食べさせてくれる店と
かあつて」

「大人のデートだなあ」

ところが、私はとんでもないミスを犯していました。

ちょうどその日の前日に、車を車検に出す事を忘れていたのです。

「でも、代車くらい普通は貸してくれるじゃないか」

「ああ、貸してくれたよ。でも、普通の軽自動車が無くて軽トラッ
クだった……」

親も友人達も車が空いていなかったので貸して貰えず、レンタカ
ーはナンバーでバレバレなので、仕方なしに軽トラックで彼女を迎
えに行き、『農作業にでも行くの?』と言われてしまったあの初夏
の日。

まだ私が女性に少し積極的であつた、前世での出来事でした。

「そんな漫画みたいな話。本当にあるんだな」

「あれ以来、軽トラは好かない。うん、普通に運転できるな」

次に才人と運転を替わると、彼はまるでラリーに参加するレーサ
ーのように巧みに車を運転していました。

「車は、武器の類なのかね?」

「ルーンが光っているからそうだと思う。この世界だと、人を轢く

武器になりそうだし」

「止めてくれよ。そういう事は」

「やっぱり、人を殺すのは良くないよな」

「いや、車が汚れると掃除が面倒だし、外板が凹んで壊れたら大変だし。一般の人をはねると補償が大変じゃないか」

「……」

才人は、私の意見に半分顔を引き攣らせているようでしたが、車は凶器であり、人を傷付ける怖い道具なのです。

その辺は強調しておきたい、まだ前世の感覚を引き摺っている私でした。

「ルイズ、まだ完成しないのか？」

「うつつ……、姫様の結婚というこの国家の一大事に述べる祝詞だから、物凄い物を考えないと思えば思うほど……」

来るアンリエッタ王女の婚姻に向けて、その祝詞を述べるためにオスマン学院長から始祖の祈祷書が渡されたのですが、実はこの始祖の祈祷書。

中身は白紙で、何も書いてありませんでした。

なので、中身を祝詞のヒントにするというわけにもいかず。

ルイズはここ一週間ほど、暇さえあれば紙とペンを持って唸って

いる事が多くなっていました。

しかし、この始祖の祈祷書。

本物なのでしょうか？

他にも、まるで京都の八ツ橋屋の如く、自分こそが本物の所有者だと言っている人もいますよですが。

それを証明できる人は、既に墓の中ですし。

まあ、別に偽物でも一向に構わないんですけどね。

「『雨降って、地固まる』とかは？ 俺の国の結婚式での常識だぜ」

ルイズは、男子寮の私の部屋で祝詞を考えていたのですが、そこには自分用の自転車の組み立てを試みている才人の姿がありました。何でも、私がルイズと乗っているのが羨ましくなったそうです。

私は、『自分で組み立てられたら無料でやる』と言って、才人に許可を与えていました。

私の部屋には、十数台分の自転車の部品が多数置いてあるので、その中から懸命に組み立てを行っているようでした。

一応工具は揃っているし、部品のサビ取りと修復はしていたので、根気さえあれば可能なはずですよ。

色々と自転車の種類とか部品の大きさを苦戦するでしょうが、昔に見た漫画でマッコイジイさんが言っていました。

部品は、取り付け口が合えば大丈夫だと。

まあ、失敗しても所詮は自転車ですし。

「『雨降って、地固まる』？ 何よそれ？」

「結婚式で雨だと良く無いイメージがあるけど、雨が降ると地面が固まるから最終的にはオーケーな感じ？」

「何よそれ。雨が降ったら、地面がぬかるむじゃないの。そんな言い加減な言葉はボツよ」

才人のアイデアはルイズに一蹴されていましたが、こんな諺をハルケギニア人に言っても理解不能でしょう。

私も、ルイズの意見に賛成でした。

「ところで、やけに気合を入れて自転車を組み立てているんだな」

「ああ。完成したら、シエスタに乗せてあげる約束をしたし」

いつの間にそんな約束をしたのかは知りませんが、リアル学生時代の恋愛のような話に、私は少し羨ましくなっています。

私が女の子と二人きりで出かけるとか、もはや叶わぬ夢でしょうし。

何でも最近、数名の私を伺う怪しい方々をアシル達が捕らえたようです。どこの差し金なのでしょう？

以前のタバサからの不可解なお願いとかが、あれは後でアシルが調べたらタバサの母親は、旧オルレアン公邸で軟禁生活を送っているとか。

人質を取られた彼女がジョゼフ王に反旗を翻すのも難しいでしょうから、これは向こうの様子見ではないかと言っのが、アシルの意見でした。

私や母がそれに乗って来るのであれば、その工作を叩き潰す。

断れば、取り敢えずは私がバカではない事を確認して、以前の監視体制に戻る。

いやはや、国家間の駆け引きとは大変なものです。

それと捕まった怪しい方々ですが、果たしてどうなったのでしょうかね？

多分、領地の方へと移されて色々と喋りたくなるようなプレイを強要されていると思うのですが。

あまり、よそ様の事を深く探らないほうが良いという教訓ですね。

「いつの間に、お前は……」

「ほら、俺とシエスタの髪の色は同じじゃないか。そんなところから、お話をね」

ルイズのいる手前、才人はあくまでも、世間話から自分とシエスタの曾祖父が同じ国の出身者である可能性が高い事を知ったように話します。

私の話をされると困るのでそれは良い選択肢なのですが、何か釈然としない物を感じる私でした。

モテる男が嫌いというのは、前世からの私のDNAに刻まれた業なのかもしれません。

「さてと、あとは油を点して完成だな」

「随分と早くないか？ 試運転で分解とかしたらお笑い種だぞ」

「大丈夫だよ」

ガンダールヴのルーンで、組み立てた自転車の状態を確認する才人でしたが、これも武器だと認識しているんですかね？

やはり、銀輪部隊がイメージなのでしょうか？

「じゃあ、俺は試運転に行くわ」

「俺は、ルイズに付き合うよ」

才人は、完成した自転車を引きながら部屋の外に出ようとしてしましたが、急に部屋のドアが開いてアシルが飛び込んで来ます。

「大変です！ ティーボ様！」

「何だ？ 在庫か財宝でも盗まれたか？」

「違います！ アルビオンと戦争になる可能性があるのです！」

突然の話に、私達はただ呆然とその場に立ち尽くすのでした。

「つまり、最初から戦争をする気だったのか……」

場所を錬金小屋の隣の私の別宅に移して、アシルの話は続きます。何でも半日前に、ラ・ロシエール上空にてアルビオン艦隊とトリステイン艦隊が邂逅したらしいのです。

アルビオン艦隊の目的は普通に訓練であつたらしいのですが、急

にその中の一隻である旧式の小型艦が大爆発を起こして墜落。

慌てたトリステン艦隊は、乗員の救援を行う旨を連絡したらしいのですが、アルビオン艦隊はこれをトリステン艦隊側の攻撃だと非難したそうです。

結局そのまま、トリステン艦隊はアルビオン艦隊の攻撃を受けて潰滅し、なぜかそのアルビオン艦隊の後方には他にもいくつかの艦隊が確認された。

と、ここまで言えばわかると思うのですが、最初からアルビオン艦隊はトリステインに攻め入る予定だったのでですね。

その後、王城側にはアルビオン艦艇を撃沈したトリステインへの非難声明と、宣戦布告の勅が届き、アルビオン艦隊は後方にいた援軍と合わせて侵攻中との報告でした。

「ですが、あの内戦の後でこんなに早く……」

アシルは、アルビオン側の無謀さに驚いているようですが、彼らの艦隊が確認された地点はラ・ロシエール上空です。

多分、ある程度の戦力を一気に降ろしてトリスタニアを突くつもりなのでしよう。

実際に、アシルが放っている密偵団から次々と報告が入って来ます。

「敵は、旗艦レキシントン以下十数隻からなる主力戦列艦を主体にした艦隊と、他に後方に雑多な艦で構成された艦隊からなっています！」

「後方の艦隊が、続々とタルブの村近郊に兵士を下ろしている模様。

その数は八千人に迫るとも！」

「迎撃に出たタルブ領主アストン伯爵殿が戦死！ 率いていた部隊も、ほぼ全滅！」

「兵士を降ろした船は、そのまま飛び立たないでいるようです。どうやら、風石が不足しているようです」

次々と情報は入って来るのですが、実際のところ王城側はどうするのでしょうか？

一気に、トリスタニア近くに大兵力を降ろしてケリを付ける。

悪くは無策だと素人である私には思うのですが、こんなに早くに半ば騙まし討ちに近い戦法を行うために、アルビオンというかレコン・キスタ側は相当に無茶をしているようです。

アルビオンは、内戦で両勢力が国内にあった財貨や食糧・物資、兵力、武器などを無駄に消耗して、あと半年は攻めて来られないと分析されていたのですから。

「兵士達を乗せた船が動かないのは、主力艦隊を常に浮かせる風石を確保するために回したんだらうな。それと、修理や整備もしていないのかもしれない。主に、武装関係で」

「なるほど。トリステインを落とした後で、トリステイン国内に備蓄されている風石を奪って浮かせてから、接收した設備で修理と整備を行うと。こういうのは、泥縄って言うんですよね？」

「でも、悪くない策だよ。王国の常設軍なんて数が少ないし、諸侯軍なんて召集に時間がかかるし。最悪、王都を捨てるとすると、王城内にある財貨や食糧や物資を敵に与える事となるし」

半ば捨て身の策ですが、逆にこういう作戦だと足が速い事が最大の利点となるのです。

実際に、王城側は混乱の極みにあるようですから。

「ちゃんとした戦争になるのね？」

「それどころか、トリスタニアの防衛すら怪しいですな」

確か、王国側が急遽集められる軍勢が二千人ほど。

敵軍の僅か四分の一です。

これでは、トリスタニアの防衛すら難しく、一時放棄も止む無しという意見が出るかもしれませぬ。

更に、そんな捨て身な策を採るアルビオン軍に理性を期待するだけ無駄でしょう。

トリスタニアは、殺戮と破壊で阿鼻叫喚の地獄と化す可能性があります。ります。

「ですが、トリステインを抑えたら次は他の国ですよね？」

アシルが、私の意見に異議を唱えます。

「トリステイン以降は時間がかかる。ならば、レコン・キスタは長期的視野で自分の支持者達に利益を与えなければならぬ。アルビオン本国は、参加している貴族達なども多い事からあまり荒らしたくは無いだろうし。となると、トリステインは彼らの草刈場となるだろうな。既存のトリステイン貴族達を排除して、その資産を再配分するわけだ。多少、方法は荒っぽいけど」

戦地で家を焼いて、食糧や財貨を奪い、女を犯して、子供を奴隷として売り飛ばす。

中世ヨーロッパ辺りでは、日常風景な光景でした。

しかもこのハルケギニアでは、魔法が使える貴族やメイジは圧倒的な強者です。

平民達には、これに逆らう地力が中世ヨーロッパの農民や市民達よりも少ないのです。

文句はあっても、せいぜい流民になって逃げる程度。

しかも、少し自然の多い場所に入れば、今度は幻獣や亜人達の餌食になってしまいます。

「そんな……。ねえ、ティーボ。この国は、一体どうなってしまうの？ 姫様は大丈夫なのかしら？」

ルイズは不安で仕方が無いようですが、アンリエッタ王女がどうにかなる事はまずないでしょう。

もしなっていたら、その頃には自分の身を心配しないといけませんし。

「アンリエッタ王女自体は大丈夫だろう。最悪、他国に亡命するだろうし。それにねえ……」

私は、この状況である人物が指を咥えて見ているはずがない事を確信していました。

私から、今までの蓄えを全て債権という形で持って行った、あの軍備のためならば何物をも惜しまない、希代の借金王。

わが父、グラモン元帥の存在です。

「父上は、張り切っているだろうな」

多分、父上自身はトリスタニアの王城で対策会議にでも顔を出しているのですが、長兄のアレクサンドルでも帰国させて諸侯軍の準備をしているはずなのです。

「でも、そんな急には準備できないと思うわ」

「いや、父はこんな日が来ると予感していた。きっと……」

私の予想は、見事に的中する事となりました。

ドアがノックされ、そこに父上からの使いが訪れたからです。

「旦那様よりの命令です。グラモン家の興亡はこの一戦にあり！
全ての例外なく現在進発準備中の領軍に合流されたし！」

「えっ！ 俺も？」

「はい、ティーボ様には、軍の中にあつて錬金を行っていただきました
いとどの旦那様からの伝言です」

「俺は、軍費調達係かぁー！」

私の絶叫をよそに、ギーシュも同じく父から呼び出されたそうです。
私の所にやって来ました。

「僕は、ティーボの護衛だそうだ」

「ぶーーん」

その間にも、アシル指揮の元で魔法学院隣の錬金施設は一時閉鎖され、多くの人間が荷造りを始めていました。

これでここには、残った材料などが盗まれないように監視する人員と、私の使い魔であるグラントの世話をする人間だけとなる予定です。

そして、私はまた移動式人間錬金装置となつて、グラモン領諸侯軍の戦費を稼ぐ存在となるのでした。

「ここでの商売はいいのか？」

「戦争だからな。普通の商人は来なくなるし、気合の入っている奴は、俺を追いかけてくるだろうな」

才人の疑問に答えていると、今度は学院側からの呼び出しがありました。

ルイズやギーシュと一緒に学院の講堂へと向かうと、そこにはオスマン学院長がいて集まった生徒達に話をします。

簡単に言つと、戦争が始まったので一時授業を中止するそうです。

そして、これによって軍に志願する者と一時実家へと帰る者へと別れるようです。

彼らは、それぞれに荷造りなどをしていました。

「取りあえずは、兄上と急いで合流しないとな」

日頃の訓練の成果なのか？

素早く荷造りを終えた私達は、試作した高張力鋼製のフレームを使った大型の馬車や、先日に見つけたパジェロや軽トラックなどの

一部を稼働させ。

二百人以上にまで増えた家臣や従業員達や、現地での錬金や軍として必要な物資などを積んで出発します。

「フレームの材質に改良を加えたのだよ。わかるかね？ 才人君」

「いや、全然わからねえ」

才人の運転するパジエロの助手席に座る私は、後ろから付いて来る馬車のフレームの丈夫さを彼にアピールします。

実は、ディテクトマジックでパジエロに使われている外板の分析を行い、微妙に金属の配分比率を弄ったのです。

「他にも、サスペンションを改良したりして、悪路でも揺れ難い改良をだな。この合金製の高品質のバネは、今は俺にしか造れないはずだ」

所謂、車軸懸架方式という方式で、これは地球では馬車にも用いられていた方式でした。

他にも、材質などの面で改良を加えています。

ただ、今のところは私が空いている時間に弄った分だけしか存在しません。

「そんな専門的な事を、俺に言われてなあ……」

後にグラモン家の特産となる、悪路でも揺れ難く、大量の荷を積み、商人から軍にまで大量に売れて大ヒットした大型合金製馬車の試作品なのですが、才人にはその凄さが良くわからないようでした。

「ルイズは、わかってくれるよね？」

「ええと……。悪路でも揺れ難いのは凄いわよね……」

パジエロの後部座席に座り、私の研究の偉大さを理解してくれるルイズでした。

それとなぜ彼女と一緒にいるのかと言えば、それは彼女が軍に志願したからなのです。

『何を、当たり前的事を』という話になるのですが、本当はトリスタニアにいるアンリエッタ王女に合流すると言っていたのを、私がヴァリエール公爵にフクロウ便で手紙を出して、自分の傍に置いておくのと説得してどうにか許可を得ていたのです。

私の立場から考えても、どう考えても最前線になど置かれないので、ヴァリエール公爵は渋々とはありますが承諾し。

こうして、彼女は私達に同行しているというわけです。

「でも、あの自力で動く鉄の牛の方が凄くないかい？」

同じく後部座席に座るギーシュが、パジエロの後ろを走る二台の軽トラックを指差しながら私に話しかけます。

「あんな物、維持が限界で生産なんで不可能だ」

幸いにして全く故障などしていなかったため、簡単な清掃と整備と、給油で動くようになったパジエロ以下の車両達でしたが。

これらを運転可能だったのは、私と才人だけ。

この二台の軽トラを運転している家臣達も、適正を見て一番マシな二人に一日ぶっ続けで草原を走らせていただけなので、今もおっかなびっくりで運転しているようでした。

戦前の日本では、車の運転ができる人は特殊技能者でしたしね。

まあ、馬車のスピードに合わせているので自然と安全速度で、事故も起こり難いはずなのですが。

「何にしても、これは戦功を挙げるチャンスだね」

張り切るギーシュでしたが、私はそれに釘を刺しておく事にします。

「いや、ギーシュの考えているような戦功は無理だろう」

「どうしてだ！ 僕達は戦場に行くのだろう？」

「あかさ、俺が最前線とかあり得ないわけ。わかる？」

私の任務は、少し後方で錬金をして軍費を調達するという物と、私ならば戦地で壊れた武器や兵器などもある程度は直せます。

つまり、完全な後方支援要員というです。

そして、その私を守るギーシュ。

移動式の軍補給廠と、それを守る門番。

これが、私とギーシュに課せられた今回の任務なのですから。

「そんな……。僕の活躍の機会が……」

私よりも錬金に劣るギーシュは、戦場で武功を得る事でしか戦功を稼げません。

彼にとっては、死活問題という事なのでしょう。

「チャンスが無いわけでもないけど」

「それは、本当かい？」

「無理して、アレを持って来ているからなあ」

移動中である私の部隊の一番後方には、壊れないように嚴重に梱包されて馬車に積み込まれている紫電改と、それらを動かすのに必要な物資が準備されていました。

三十三話

「いやあ。戦争で、魔法学院横の錬金工房が閉鎖されたと聞いた時には、私は心臓が止まるかと思いましたよ」

「戦争ですからね。ですが、良くこんな戦地まで」

「商人は商品以外の武器を持っていませんが、常に商売という戦争をしていますからね。では、これが代金です」

「まいどどうも。でも、これもすぐに戦費に化けるんだよなあ」

「ですが、こんな無茶をして領内の財政を破綻させないグラモン家は、ハルケギニアでは化け物扱いですよ」

「代わりに俺の自由が、ドンドンと奪われていく……」

出発から三日後、既に私達は長兄アレクサンドルの指揮するグラモン領諸侯軍との合流に成功していました。

とはいえ、私達に戦闘命令など出るはずありません。

他に合流した、ヴァリエール公爵を筆頭とするトリステイン東部諸侯連合軍の後方に移動して、そこで戦時移動式錬金工房を営んでいるだけでした。

そして、こんな私に何かがあつては困ると嚴重な警備が付けられ。私は、こんな戦地に喜んで物資や金貨を持って来る奇特な商人達への支払いに使う、金属や宝石を作り続けるのでした。

「そういえば、お父君も出陣されたそうぞ？」

「良く知っていますね」

「いやあ、商人は情報が命ですわ」

私との付き合いの長い中年の商人が、トリスタニアの最新の情報を教えてくれました。

彼は、王城に物資を納品している商人とも仲が良いらしく、その方面の情報も良く入って来るようなのです。

「突然の、タルブ来襲でしたからね。王城にいらついでいしやるお歴々は、相当に慌てふためいたようぞ……」

領主であるアストン伯爵が命をかけて時間稼ぎをしたので、領民達はほぼ全員が無事に避難をしたようぞです。

無人のタルブは占領されて、残った家財は略奪され、最後に家には火をかけられたようぞです。

その後、タルブには兵員を運んで来たものの、風石不足で動けない多数の船を守るために一部部隊が残留し。

レキシントを旗艦とする主力艦隊のエアカバーを受けながら、敵部隊はトリスタニアに向けて北上を開始。

これで慌てない人もいないのかもしれませんが、一応貴族なのですから表面上だけでも落ち着いて貰いたいものぞです。

「その様子に、アンリエッタ様が激怒なされたそうぞ」

『あなた達が出ないというのであれば、私が陣頭指揮を執ります！』

時間ばかりを使って、何の具体策も出せない宮廷雀達に激怒したアンリエッタ王女は自らが陣頭に立つ事を宣言。

『ならば、私とその露払いをいたします』と進言した父や、最近重用しているらしい銃士隊隊長のアニエスと共に。

約二千の王国軍を率いて、トリスタニアの南三十リーグの地点に防衛陣地を建設中との最新情報でした。

「理論的には、我々がタルブを取り戻して北上すれば挟み撃ちかね？」

「ただ、アルビオン側には強力な艦隊がありますので」

浮遊大陸に存在する国家なので、艦隊戦力が拡充しているアルビオンと先の奇襲で艦隊が受けた損害に顔を青くしている万年貧乏小国のトリステイン。

やはり、空軍戦力では大きな違いが存在するようでした。

ですが、グラモン諸侯軍が四千人にヴァリエール諸侯軍が五千。

それに、他の東部十数家の諸侯軍の合計が七千と。

空中艦隊の妨害さえなければ、屍を曝すのは数では不利なうえに挟み撃ちにされる敵軍のはずなのです。

「『まさか、トリステインがこんなに早く軍を展開するとは！』って感じだから、北上を急いでいるんだろうし」

「そうでうね」

物騒な世間話を続ける私とその商人でしたが、その横には心配そうな表情を隠せないシエスタの姿がありました。

実は、彼女も志願して私の軍に参加していたのです。

やはり、故郷であるタルブの村が心配で堪らないようでした。

「ちなみに、タルブの住民は？」

「近隣の領内で保護されていますが、やはり食糧やら生活物資が不足しているようですよ」

戦争で住む家を失い、持ち出せた物も僅か。

しかも、生活の糧を稼ぐ手段も無くなっているのです、その持ち出せた物もすぐに無くなってしまおうでしょう。

こうやって、人々は流民へと落ちていくものなのです。

「そうか。それは色々と不都合があるな」

私は懐から袋を取り出すと、その中に入っている大粒の宝石類をいくつか商人へと手渡します。

「それで、生活の面倒を見て現地に食い止めておいてくれ」

「復興するにも、離散されてからでは遅いですか」

他にも、タルブの村では私が毎日使っているシヨウユウや味噌の生産も委託しているのです。

前の世界との数少ない繋がりを潰すレコン・キスタは、私の中では何者にも勝る悪人になっていました。

「私は商人ですので、代価を頂いた以上は確実に」

「味噌汁とか、ネギ味噌が無いとご飯が美味しくないじゃないか。

味の薄い物は、シヨウユをかけないと駄目だし」

私はそんな事を言いつつも、横にいるシエスタが安堵の表情を浮かべたのを確認しました。

せっかく、今日は『某 ンダム種運命』の ナマリアの格好をさせているというのに、暗い表情のままでは台無しですしね。

これも、トリスタニアの雑貨屋で入手したんですけど。
侮れませんね、ハルケギニアの雑貨屋も。

「ティーボおーー！」

とそこに、私と一緒にここに留め置かれているルイズがこちらに向かって走って来ます。

何か、急いで知らせたくなるような出来事があったようです。

「何だろう？」

「あの、ティーボ様。今朝に、諸侯連合軍がタルブ奪還作戦を行うと」

私の記憶力の無さに、シエスタは呆れているようでした。

というよりも、動かない船の監視員しかいないタルブの占領に苦戦する可能性などほぼゼロなので、全く心配しなかった結果、すぐに記憶の外に追い遣られたんですけどね。

実際、ほとんど戦闘などは起こらず。

守備兵力のほとんどが降伏するか、極少数だけが逃げてしまったようです。

「サイトとギーシュが、出番が無いつて拗ねてたわよ」

一応、稼動状態にしていた紫電改をタルブ奪還作戦の際に飛ばす許可を出したのですが、やはりただ飛ばして終了してしまっただけです。

後部座席に座っていたギーシュは、余計に出番が無くて拗ねているようでした。

「となると、タルブに拠点を進んだな」

私の予想通りに、グラモン諸侯軍を指揮する兄のアレクサンドルからタルブへの移動命令が出ます。

私達は、急いでまた荷造りを始めるのでした。

「シヨウユと味噌の貯蔵庫が、地下だったのが幸いしたのか」

略奪と放火によって家屋が全て炭となり、周囲のぶどう畑も着陸した空中船で潰されてしまったタルブ村でしたが、唯一地下倉庫に貯蔵してあったシヨウユと味噌は無事だったようです。

ワインは全て奪われていたのですが、アルビオン人にとってシヨウユや味噌は未知の食材だったのでしょう。

全く手を付けられていない状態でした。

「だが、管理を怠ると品質が落ちる。すぐさま、村民を呼び戻すのだ」

「焼けた家屋はどうしますか？ 村人達には家屋が必要ですよ」

「グラモン家の家臣であるアシルが、おかしな事を聞くな。家くらい余裕で作り直せ！」

「だと思いましたよ……」

アシルは、若い頃に貧乏なグラモン家に少しでも税金を払う領民が増える事を期待して、軍の訓練と称して、魔法で領民達の家を建設した過去を思い出していたようです。

しかも、その命令を本当に出したのは奥様。

当時、工兵の訓練だと言われて普通の家を建て続けたアシルは、貧乏の不条理さを呪ったようでした。

彼も、当時は若かったですしね。

「まあ、慣れているから良いんですけど……」

「なぜ、私が……」

「ああ、うちの決まりなんでね。『軍備以外の何かをする時には、まず金を使わないで済む方法を探せ！』とね」

アシル達は家臣達を統率して、慣れた手順と手付きで木造の家を次々と建てていきます。

近隣の森から木をブレイドで切り倒し、それを材木にして錬金やゴーレムを使って家を作っていくのです。

その手際の良さに、私は感動すら覚えてしまいました。

そして、その中では新参者のミス・ロングビルも、一緒に家を建て直していました。

「大工でも食べていけるな」

「その台詞は、ティーボ様が生まれる前までは禁句でした」

グラモン家って、昔はどれほど貧乏だったのでしょうか？

「じゃあ、俺は出かけてくるから」

「ミスタ・コルベールの所ですか？」

私は、タルブ奪還直後にここに到着したミスタ・コルベールの元に向かいます。

すると彼は、兄のアレクサンドルを話をしていました。

「早いですね。ミスタ・コルベール」

「ええ、何しろあの量ですから」

私の引きで、グラモン家の軍事工廠や造船所などの責任者となった彼は、短い期間で諸侯軍にマスケット銃ながらも歩留まりの良い生産性に優れた物を供給していましたし、大砲の方も配備数を増やす事に成功していました。

そして、その彼が急遽ここに来た理由は、このタルブ周辺に着陸している大小様々な空中船の処置についてでした。

「多少は壊れていますかね。簡単に修理できますし、風石さえあれば普通に飛びますしね」

つまり、戦利品として早めに確保しておきたいというのが父や兄の考えだったのです。

勿論、他に諸侯軍を出している貴族達の中にも欲しがる人は多いはずですが、ここは先に押さえた者の勝利でしょう。

既に、一部艦艇は風石を供給され、ミスタ・コルベールの連れて来た船員によつて、グラモン領へと移動を開始しているようでした。

少し古い型ですが大型戦列艦もありますし、小型でも主力艦隊に加えられそうな船や、どんなに最悪でも武装を外して整備すれば、商船として商人に転売する事も可能なのですから。

しかし、片道とはいえ八千人を連れて来た艦隊というのはなかなか壮観な光景ですね。

「風石を供給して飛ばし、グラモン領内の造船所に移動させます。勿論、船が多すぎて全部は収容できませんが、固定化をかけて隣の空き地に置いて修理待ちをさせれば済む問題ですし」

ここは、戦死したアストン伯爵の領地なのですが、彼は既に死んでいるので文句も言えないでしょう。

汚いようですが、これが貴族社会というものですし。

「ですが、タルブが占領されて船を奪われたとなると、彼らは余計に焦りますね」

諸侯軍が編成される前に、一気にトリスタニアを落とす。

一番の前提が、私の父によつて崩されていますからね。

父の軍隊バカぶりや、いきなりのタルブの奪還は、彼らの予想の範囲外だったのかもしれませんが。

とはいえ、彼らはこちらには戻って来ないでしょう。

もし彼らがそれをしてさら更にこちらの思う壺なのですが、向こうも大バカではないので一気にトリスタニアを落として一発逆転を狙うはずですよ。

ただ、それもこちらに行動を縛られているわけですが。

「しかし、変な作戦というか。半年かけて艦隊を整備してから大軍を送ればいいのに」

「それをすると、ゲルマニアとは既に同盟済みで、父の狂乱の成果が多大に出ていますよ」

「それで、時間を取ったのか。半ば卑怯な奇襲までして」

私の意見に、兄のアレクサンドルは納得したような顔をします。

「ティーボよ。ある程度の警備を残すから、お前はミスタ・コルベールと一緒にタルブに残りなさい。後方支援を任せる」

「わかりました。でも、値の張る宝石類の量産は、価格を落とすんですけどね」

「いや、ヴァリエール公爵や、他の貴族達はアレに興味があるようだよ」

我が兄アレクサンドルの視線の先には、私達が人や荷物を運んで来たパジエロや軽トラック。

それと、高張力鋼製の大型の馬車に向いているようでした。

「馬も無いのに走るのか。不思議な乗り物だな」

「ルイズの使い魔である才人の世界では、普通に普及している乗り物らしいですよ。構造が複雑過ぎて量産は無理ですけど、どうにか維持は可能でした。その内、領地に二〜三台送ります」

「悪いな、ティーボ。しかし、ミスタ・コルベールは好きなんだな」
いつの間にか、その貴族達を押し分けるようにして軽トラックの運転を練習しているギーシュに駆け寄り、彼に冷や汗をかかせているミスタ・コルベールでした。

「そろそろ日も暮れるけど、何をするつもりなんだ？」

「そりゃあ、敵軍の足止めだよ」

その日の夕方、兄のアレクサンドルとヴァリエール公爵などが指揮する諸侯連合軍は、レコン・キスタ軍を背後から襲うべく。
既に一部警備用の戦力を置いて、タルブの村を進発していました。
当然、後方支援担当の私は置いてけぼりです。

好き好んで前線に行く気も無いので、私的にはそれでオーケーなのですが。

ですが、戦闘に参加しないとは言っていません。
その証拠に、タルブの村には臨時の滑走路が既に完成していますし。

整備も、燃料の補給も満タンの状態にしていました。

「夜間戦闘か」

「向こうには、大型戦列艦を旗艦とする艦隊がいるけどな。夜には無茶はしないさ。下手をすると衝突するし」

「俺には、無茶な気がするけど……」

愚痴る才人ですが、ガンダールヴのルーンのおかげでいきなりの夜間飛行をこなす才人なので、私は全く心配はしていませんでした。

「それと、この樽は何だ？」

紫電改にはドロップタンクの他に、両翼の下の本来爆弾を懸架する位置に木製のタルが取り付けられていました。

その数は両側に一つずつで合計二つですが、これは二個のタルを連結させてあります。

紫電改は爆弾の搭載限界量が250キロで、連結したタルは一個が約120キロ。

ハルケギニア流に言うと約240リールで、これを両側に。

タルを連結させている理由は、爆弾の懸架装置の数が二個しかないからです。

「これの中身は？」

「魔法のカクテル」

ギーシュとルイズがいるので正式な名称は言いませんでしたが、簡単に言えばガソリンを材料に精製した沸点が高めの重質ナフサに、粘稠剤としてのパルミチン酸。

これは、普通にリードやヘットに入っている物質です。これと、同じく石炭から精製錬金したナフテン酸が混ぜてあります。

ここまで言うとはわかる人も多いと思いますが、要するにナパーム弾の原型のような物を作ったのです。

「ナパームなのか？」

「似たような物だよ。ただ、信管の作成は不可能でな」

更に二人に聞かれないようにコソコソと才人に説明をしますが、実は私にも詳しい信管の原理はよくわからなかったのです。

何しろ、専門ではなかったですしね。

そこで、こういう原始的なナパーム弾になっています。

「地面に落ちると破裂するから、着火してくれ」

「俺が？」

「まさか。後ろにギーシュを乗せて行けばいいだろうが」

この点、魔法という物は便利な代物でした。

ギーシュは私と同じで土系統のメイジですが、それでも着火くらは出来るはずですしね。

「それでだ……」

私は、才人に細々とした説明を続けます。

何を標的にするのかと、多分竜騎士部隊が迎撃か追撃をして来る

と思うので、それに対しての作戦とか。

話を聞いた才人は、ギーシュを乗せて暗くなり始めた空へと飛び立ちます。

「あの二人で大丈夫かしら？」

「アルビオンでもやれたんだ。大丈夫さ」

私は、家臣達に追加の簡易式ナパーム弾の用意をさせ、燃料を準備して彼らの帰還を待つのでした。

「ティーボ様、竜の羽衣が戻りましたよ」

僅か一時間半ほど後、出撃した紫電改は無事に臨時滑走路へと戻って来ます。

才人が紫電改を着陸させてプロペラを停止させると、家臣達が取り付いて燃料を補給し、新しい簡易ナパーム弾の装填を行います。

「戦闘食ならあるよ」

「また行かせるのかよ！」

才人とギーシュが私に非難の声をあげますが、この夜の敵軍が停止している時こそが最大のチャンスなのです。

タルブの村を出発したレコン・キスタ軍は、明日にはトリスタニ

ア南部に陣取る王国軍と衝突する予定です。

多分、兄やヴァリエール公爵達の挟み撃ちの策は成功するとは思いますが、混戦に持って行くまでの敵主力艦隊からの攻撃を考えると、ここは彼らを削っておくに限ります。

とは言いつつも、私は滑走路横にテントを張って、その中でルイズと一緒にノンビリと食事を楽しんでいました。

横では、シエスタがお茶を淹れていましたし。

ちなみに、メニューは戦闘食という事でオニギリと野菜が沢山入った味噌汁と長期保存させるために味噌に漬けた魚の身を焼いた物でした。

念のために固定化をかけているので、味は新鮮なままで美味しいですけど。

「まずは、正確な報告だよ」

「わかったよ。俺達は、敵軍の馬が集中している場所にナパーム弾を落として、ギーシュが火を付けた。馬や馬を世話していた人達が、火達磨になっていたな」

ナパームですからね。

下手に水系のメイジが消火すると、かえって燃え上がるという悲劇が訪れます。

どつりで、前の世界では反戦系の方々が色々とうるさいわけです。

「それで、帰りに竜騎士の追撃を受けてね。サイトがほとんど撃ち落したよ。僕も二騎に止めを刺したけど」

やはり、スピードでも武装でも。

竜では、戦闘機に勝てないようです。

アルビオン自慢の竜騎士隊は、紫電改の返り討ちにあっていた。

「弾も、なるべく無駄遣いしなかったし」

私は、もし竜騎士の類を機銃で撃ち落とす際には、翼内の20ミリを使わないようにと才人に命令していました。

理由は簡単です。

機首の7・7ミリでも、竜騎士の乗る竜や人を十分に殺傷できるからです。

20ミリなどは明らかにオーバースペックですし、弾の直進性は7・7ミリの方が上なのですから。

「20ミリは、人に使う物じゃないよな」

「サイト、それほど威力があるのかい？」

「多分、直撃したら、人間はバラバラになる」

あまりの威力に、ギーシュは絶句しているようでした。

「でも、何で標的が馬なんだ？　ここは常識的に、食糧置き場とか将校とか」

「それも、これからやる予定だ」

食糧に関しては、私は順位を下げてしました。

何しろ、彼らはトリストニアからそう遠くない場所にいるのです。勝てば奪える物を焼いても、それほど大きなショックは受けない

かもしれません。

そこで、まずは戦場で使う馬に、次は大砲などの火器を潰すように命令します。

船で運んでいるので少ないかもしれませんが、射程の長い火力を削ぐのは有効でしょうし。

「他にも、船にも火をかけて欲しい。撃沈は無理でも、損傷は与えられるだろうし」

「俺達は、今夜は何往復するんだ？」

「紫電改が、本格的な整備が必要になるまで。簡易式ナパームも、まだ沢山残っているし」

「何でそんなにあるんだ？」

「俺が作ったから」

結局、才人とギーシュは空が明るくなる寸前まで紫電改による簡易ナパーム弾投下作戦に従事し。

彼らのみならず、レコン・キスタ軍までもが、全軍寝不足でトリスタニア攻略へと赴かなければならないのでした。

他にも、馬と大砲が不足し、多くの物資や銃に使う火薬まで吹き飛ばされ、何隻かの船はナパーム弾の火災の消火に手間取り、誘爆を恐れて大砲などの火器を捨てた船も存在していました。

以上は才人からの報告なのですが、既にレコン・キスタ軍は相当に参っているようでした。

人員の被害は意外と少ないのですが、火傷を負っている負傷者が多く。

これも、敵地にいる彼らには大きな負担となるでしょう。

「随分とえげつない後方支援要員だな」

「知らないのか？ 才人も一応は後方支援要員なんだぞ」

度々の出撃で目の下に隈が出来た才人とギーシュは、そのまま滑走路横のテントで仮眠を取り始め、私は、紫電改の仮眠を取る前の才人に言われた部分の整備を始めます。

やはり、脚部やエンジン周りなどの部品が劣化を始めていたので、その部分の細かな修復を行います。

最初はかなり苦戦した魔法ですが、今ではかなり手際良く行えるようになっていました。

「さてと、完成！」

三時間ほどの時間が経っていました。整備と補給を終えるのと同時に私はテントに行って、寝ている才人を叩き起こします。

「相棒、錬金の旦那が呼んでるぜ」

才人が抱えて眠っているデルフリンガーが、自分の主人である才人を起こそうとします。

ちなみに、私はデルフリンガーから『錬金の旦那』と呼ばれるようになっていました。

「まだ寝足りねえ……。また出撃か？」

「ああ。そろそろ、兄さん達の軍が後方から喰らい付いているはずだ。支援に向かう」

他にも、旧式艦や小型艦ばかりですが、グラモン家やヴァリエール家の持つ艦隊がタイミングを合わせてレコン・キスタ軍の主力艦隊に攻撃を仕かける予定なので、私達も支援をした方が良いでしょう。

「ギーシュ、起きろ！」

「むにゃむにゃ……。モンモランシー。これが、僕の貰った勲章だよ……」

いくら叩き起こしても、ギーシュはよほど良い夢を見ているらしく、一向に起きる気配を見せません。

「いかな。俺が行くか」

「ティーボが前線に出るのか？」

「まあ、けん制程度に出ればいいと思うんだ」

私は、紫電改の後部差席に飛び乗り、そのまま魔法でプロペラを回し始めます。

すると、今までは大人しくしていたルイズが私の膝の上に飛び乗ってきます。

「ルイズ、危ないから駄目だ」

「ティーボこそ、怒られるわよ」

「危ない事はしない予定だ」

「じゃあ、私も行くわ」

結局、私はルイズの押しに負けて彼女を膝の上に乗せて出撃する事となります。

「重量オーバーじゃないのかな？」

「マルコルヌを乗せても大丈夫だったからな。大丈夫だろう」

眠い目を擦りながら、才人は私とルイズを乗せて紫電改を発進させるのでした。

三十四話

「これは、想像以上に激戦だな……」

才人の操縦する紫電改でタルブの村を飛び立ってから僅か数十分人間の足ならば何日もかかる距離にある草原では、二つの軍が激突しているのが確認できました。

レコン・キスタ軍と思われる軍勢に、後方から兄やヴァリエール公爵の指揮する諸侯連合軍が襲いかかっていたのです。

戦況は、敵側は昨日の夜通しの夜襲で馬や火器類の大半や物資を失って負傷者も発生していて、トリステイン側は十分に休養を取ってからでしかも後ろ側から襲撃しと。

更に数でも負けているという事もあって、レコン・キスタ軍は大苦戦に陥っているようでした。

そして、そんな弱り目に祟り目なレコン・キスタ軍に、手柄の欲しい諸侯連合軍が強気に攻めていきます。

「おかしいな？ 敵主力艦隊の援護は？」

昨晚に、簡易ナパーム弾で数隻に損害を与えた敵主力艦隊ですが、勿論沈んだ船など一隻も無く。

それなのに、地上軍を援護しない事に才人は疑問を感じているようです。

ですが、その理由は簡単でした。

私達から少し離れた場所にいる、グラモン家とヴァリエール家が所持している艦隊の対応で忙しいのですから。

「でも、うちの艦隊なんて、アルビオン艦隊に比べたら……」

向こうは国家予算で揃えた、しかも以前から空軍国であった大型戦列艦を主体とした艦隊。

こちらは、小型艦や旧式艦を主力とした艦隊。

当然、まともになれば勝ち目などありませんし、それは向こうも理解しているでしょう。

敵主力艦隊と一定の距離を保ち、向こうが地上軍の援護に大砲を向けようとしたら責めかかる姿勢を見せる。

敵主力艦隊が、こちらの艦隊に攻撃を仕かけようとするとは後退して距離を置く。

このまともに戦わない戦法によって、敵主力艦隊は完全に無力化されていました。

「あつ！ 一隻沈んだ！」

ただ、全く損害なしでは無理なようですな。

今、うちの旧式艦が一隻撃沈されました。

「やっぱり、主力戦列艦は火力が違うな」

「感心している場合じゃないわよ。何とかしないと」

「何とかって言うてもなあ……」

「そうだよなあ。大型戦列艦なんて、この簡易ナパームでは沈まな

いし」

ルイズの注文に、私も才人も困ったような顔をしていました。敵主力艦隊の旗艦であるレキシントンは、一度この簡易ナパームの攻撃を受けているのですが。

搭載火器や甲板や人員に損害は受けているものの、普通に航行していたからです。

「地上軍が潰滅すれば、諦めるんじゃないかねえか？」

「才人、そう思ってその簡易式ナパームを落とすなよ。混戦状態だから、味方も燃えるぞ」

戦場で、同士討ちなど無意味ですからね。

私は、才人に釘を刺しておく事にします。

「敵の士気を落とすのに、一隻でも沈めば……」

「そのアイデアでいくぞ！」

才人は私の何気ない一言を聞くと、紫電改を敵主力艦隊へと向けます。

その中で、外縁部にいる昨晚の攻撃で損傷していた比較的小型の艦を標的として、再び急降下爆撃で甲板上に簡易式ナパーム弾を落とします。

艦上空では大砲の砲撃を喰らう心配はありませんが、甲板にいるメイジからの魔法攻撃を喰らう心配があります。

私は、以前に使った空気中の水分を酸素と水素に分解して着火する魔法を。

ルイズは、いつもの爆発魔法で紫電改を狙っていたメイジを倒し

ます。

妨害の無くなった才人は、無事に敵艦の甲板に簡易式ナパームを投下する事に成功していました。

「あれ？」

しかも、昨晚に攻撃を受けた場所に落ちたらしく、ナパームは甲板を突き破って艦内部に入り、私が空いた穴に投げ込んだ火種で艦内は火炎地獄と化したようです。

空いた甲板の穴から火炎が吹き上がり、他にも大砲が設置されている穴からも炎が吹き上がります。

更に、火達磨の人間が熱さに耐えられずに船から絶望的なダイプを行い、大砲の火薬が着火したのか艦内で爆発が連続して発生し、その戦列艦はまるで滑り落ちるように地面へと落下していきます。

とここまで書いたのですが、当然これを全て直接見ていたという事は、紫電改の全力のダイブを何回も経験したという事です。才人は平気なようですが、私は正直気持ち悪くなっています。早く何とかしないと吐きそうです。

「戦列艦一隻撃沈ね」

「ルイズ、気持ち悪くないのか？」

「そうね。火達磨の人とかは可愛そうだけど……」

「いや、そつちじゃなくて」

前世平成日本人の人が聞くと怒りそうな話ですが、私は既に人の

死に対してかなり感覚が麻痺しているのかもしれませんが。

この戦場は死に満ちていますが、あまり何とも思わなくなっているのです。

そもそも向こうは侵略者ですし、もし負けていたら残酷に殺されていたのは私達なのかもしれないのですから。

私は我が身が可愛いからこそ、こうやって残酷な武器を開発して人を殺すのです。

「でも、あまり戦況に変化は無いな」

「もう敵の地上軍はボロボロだぜ」

派手に敵の戦列艦を沈めた我々ですが、あまり戦況に変化は無いようでした。

確かに、敵地上軍は潰滅寸前なのですが、これは兄やヴァリエール公爵達の活躍かもしれませんし。

目には見えないけど、心理的な効果があったと考える事にします。

「20ミリでは、船は落ちないよなあ」

「勿体ないから使いなよ」

量産が不可能で補充の当てがない機銃弾ですので、不確定な状況では使って欲しくない私は、才人に釘を刺しておきます。

しかし、この20ミリ機銃。

意外と使い道が無いのかもしれませんが。

そんな事を考えている私でしたが、膝の上に乗っているルイズを

見ると彼女が意外な物を持っている事に気が付きます。

「始祖の祈祷書？ 何で、こんな物を？」

「これに飛び乗る前に、姫様の結婚式で言う祝詞を考えていたのよ」

「律儀と言うか、何と言っていていいやら……」

これだけの戦争が発生して、その後の戦後処理などを考えると、まず結婚式など中止となるでしょう。

しかも、今回のこの戦争では、ゲルマニアは何のクソの足しにもなっていないません。

軍事条約の相手としては格下に見られていたからこそ、アンリエッタ王女は自らゲルマニアへと降嫁する予定だったのに、トリステインは単独でレコン・キスタ軍を撃破しています。

ひよつとすると、軍事同盟はともかく婚姻は中止となる可能性があります。ありました。

アンリエッタ王女も、無理に四十歳過ぎのオツさんの下に嫁ぎたいとは思わないでしょうし。

「でも、中止にならないかもしれないし。日程が延びるだけで」

膝の上に始祖の祈祷書を乗せながら話すルイズでしたが、突然、始祖の祈祷書が青白く光り、勝手に開いてページが捲れていきます。

突然の事に驚く私と才人でしたが、始祖の祈祷書は青白い光を放ったままであるページに止まり。

そのページを見たルイズが、声をあげます。

どうやら、そのページには何か文字が浮かんでいるようです。

覗き込むと、見慣れないミミズがのたくったような文字が浮かんでいました。

「これを読みし者は、私の行いと理想と目標を受け継ぐものなり。またそのための力を担いしものなり。『虚無』を扱うものは心せよ。志半ばで倒れし我とその同胞のため、異教に奪われし『聖地』を取り戻すべく努力せよ。『虚無』は強力なり。また、その詠唱は永きにわたり、多大な精神力を消耗する。詠唱者は注意せよ。時として『虚無』はその強力により命を削る。したがって我はこの書の読み手を選ぶ。たとえ資格なきものが指輪を嵌めても、この書は開かれぬ。選ばれし読み手は『四の系統』の指輪を嵌めよ。されば、この書は開かれん。ブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリ」

「読めるのか？」

私の呼びかけに、始祖の祈祷書に浮き出た文言を音読したルイズは答えませんでした。

目が虚ろで、始祖の祈祷書しか見えていないようなのです。

「以下に、我が扱いし『虚無』の呪文を記す。初歩の初歩の初歩。『エクスプロージョン』」

続けて始祖の祈祷書の読むルイズでしたが、最後に物騒な名前の呪文を言うと共に、虚ろなままで杖を持って立ち上がります。

エクスプロージョンという呪文名は、前世で子供の頃に遊んだRPGのいかにも強力な呪文と言った感じです。

私は、立ち上がった彼女が風で飛ばされないようにその体を支え

ます。

「エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ……」

「聞きなれない呪文だな」

「そりゃあ、そうだ。何しろ、これは虚無の魔法だからな」

私がルイズを支えていると、彼女は聞きなれない呪文を唱え始めます。

更に、紫電改のコックピット内に置いてあるデルフリンガーが、その呪文の事を知っているらしく、聞きもしないのに解説を始めます。

知っていたら、もっと早く教えて欲しかったんですけどね。

「……オス・スーヌ・ウリュル・ラド・ベオースス・ユル・スヴユエル……」

「虚無の魔法は威力は抜群だが、詠唱に時間がかかってな。それを守るためのガンダールヴなんだよ」

「……カノ・オシエラ・ジエラ・イサ・ウンジュー・ハガル・ベオークン・イル」

デルフの説明が終わると同時に、ルイズの初めての爆発以外の魔法が発動しました。

私達は、ルイズを中心に発生する今までに経験がないほどの光に包まれます。

そして、それが晴れた時。

私達の視線に飛び込んで来たのは、帆が全て燃え尽き、甲板が炎上して徐々に落下始める。

レキシントン以下十数隻のレコン・キスタ軍主力艦隊でした。

「すげえ……」

昨晩に徹夜で苦勞して一隻も敵艦を沈められなかった才人は、ルイズの魔法の威力に絶句していました。

「なあ、ティーボ」

「確かに、凄い威力だ」

私は、精神力が尽きて気絶したルイズを抱き抱えながら、落下していく敵主力艦隊を眺めます。

「そろそろ、燃料が危ない。帰るか」

「ああ」

私達を乗せた紫電改は、そのままタルブへの帰路に着きますが。

その後、上空の主力艦隊を失ったレコン・キスタ地上軍は、完全に戦意を喪失して次々と白旗を挙げ。

戦いは、捕虜の確保と、僅かに残る抵抗する部隊への攻撃と、逃走を謀る敵軍への追撃などの、事後処理へとその性格を移していました。

昨晩の夜通しの夜襲で碌に眠れず、多くの物資と装備を失い、頼みにしていた竜騎士隊と主力艦隊も全滅。

しかも、数の多い敵軍の後方から攻撃されと、既に三分の一が死

傷している崩壊寸前の軍には、降伏するしか道が残されていなかったのです。

「我らの勝利だ！」

「勝ち鬨を挙げろ！」

残敵や捕虜への処理は続いていたが、予想よりも損害が少なく勝利できた諸侯連合軍からは、勝ち鬨の声が各所から上がっていた。

「これは、思ったよりもアルビオンへの進撃が早まるかもしれん……」

「そうですね。準備は怠らないようにしないと……」

家臣達に指示を出しながら話をするヴァリエール公爵とアレクサンドルであったが、戦場には更なる援軍が到着していた。

「しまった！間に合わなかったか！」

「残念です……（臆病者の宮廷雀たちですか……。グラモン元帥の言う事にも一理あるのですね……）」

レコン・キスタ軍と諸侯軍との戦いが始まったという報告を聞いて、急いで南下を始めた王国軍であったが、結局敵軍を挟み撃ちにするのには失敗していた。

諸侯軍の面々は、アンリエッタ王女が直接戦場に姿を見せた事で

更なる歓声を挙げていたが、少し出遅れた感も否めず、彼女は己の運の無さを呪っていた。

「アレクサンドルに手柄を奪われてしまうとは……」

一方、グラモン元帥の方も複雑な心境であった。

跡取り息子がすっかりと諸侯軍を率いて大活躍したのは良かったのだが、自分は全く戦いに参加できなかった事が悔しくて仕方なかったのだ。

「グラモン元帥」

「アニエス隊長か……。姫様への護衛を十分に残しつつ、捕虜の確保と敗走した敵の追撃と捕縛だ。ああ……。もう少し早ければ、理想的な挟み撃ち戦法だったのに……」

銃士隊隊長であるアニエスへの指示は的確であったが、グラモン元帥はその後もう少し落ち込んだままであった。

そして、もう一人グラモン家の人間が予想外のアクシデントに巻き込まれる事となる。

「サイト！ ルイズ！ ティーボ！ 酷いじゃないか！」

寝過ごしたために、タルブの村に置いてけぼりにされたギーシュは、昨日何とか動かせるようになった軽トラックで、戦場への道を急いでいた。

ところが、そんな彼の目の前で上空に見えていた敵主力艦隊が眩い光に包まれた後に次々と落下していく。

どうやら、自分の到着前に戦いは終わってしまったらしい。

「いや、まだだ！ 敵の士官や司令官の捕縛とか、まだ戦場は片付いていない」

無人の森の中を潜り抜けるようにして戦場への道を急ぐギーシュであったが、やはり運転に慣れていないという事もあったのである。

急に木陰から飛び出して来た人間を、一人跳ねてしまっていた。

「ティーボの言う通りだ……」

ギーシュは、自分の跳ねた人間がまるでスローモーションでも見ているかのように十メートルほど先の地面に落下する光景を目撃する。まるで、罪悪感が脳と目の処理速度を劇的に高性能化させたようであった。

「このままだと、戦場に間に合わなくなる！」

だが、放置も良くないと思ってギーシュは軽トラックを降りて自分が跳ねた人の元へと急ぐ。

すると、その人物はかなり質の良い衣装を纏っているようであった。

「こんな戦場近くで、身なりの良い人間？ もしかして、敵軍の指揮官か何かとか？ でも、聖職者だよな？ 従軍司祭とか？」

幸いにして、その人物は手足を骨折していたが、頭や内蔵にはダメージはないようであった。

とはいえ、相手は敵軍への従軍者でメイジである可能性もある。急いで持っていると思われる杖を探し、ディテクトマジックで他のマジックアイテムの有無を調べる。

「怪しいのは、この指輪だけか。指輪型の杖なのか？ いや、強力なマジックアイテムのようだ」

ギーシュは、まだ気絶しているその指揮官らしき人物からその指輪を没収すると、手足を縛って軽トラックの荷台へと放り込む。

「うわあ、こんなに前が凹んで。ティーボに言われるだろうな……」

もう既に手柄は不可能だと思いつつも、戦場へと急ぐギーシュであったが、彼はまだ自分が大きな手柄を挙げた事にまるで気が付いていなかった。

三十五話

「酷いじゃないか。僕を置いていくなんて」

「うるせえ！ 寝言でモンモランシー、モンモランシー言って、起こしても起きなかった癖に！ しかも、貴重な鉄の牛に凹みが……。誰が直すと思っっているんだ！」

「僕には無理だね。下手にやっておかしくなると、余計に問題だし」
「お前な！ 修理が終わるまでが戦争です！」

トリスティンに侵攻して来たレコン・キスタ軍を殲滅・降伏させてから二日後、私達は再びトリスタリアの王城へと呼び出されました。

その後、私達はタルブの復興を、兄やヴァリエール公爵や父達に任せてとんぼ返りで魔法学院へと戻り、急いで錬金工房を再開していたのです。

復興は誰でも出来るが、錬金工房を動かせるのは私だけという理由からでした。

取り急ぎお金が欲しいというのが、最大の理由なのでしょうが。本来、タルブの村を復興させる義務があるのはアストン伯爵なのですが、彼は既に天に召されています。

親族や子供達も、男手は全て最初にレコン・キスタ軍を迎え撃つた時に戦死していて、現在トリスタリアの別邸にいるのは女性だけ。子供も娘だけで男の子供は全員戦死と、多分領地は王国に召し上げられるとの噂でした。

命がけで防戦したアストン伯爵には残酷ですが、貴族の名誉に囚われて一人でも男子を生き残らせなかつた彼の不手際でした。しかも、公式には負けて全滅していますし。

領地は男しか継げない。

ルイズの姉であるカトレアみたいな例外的な存在もいますが、病弱な彼女は将来結婚する事もなく、死後にその領地はヴァリエール公爵領に戻るだけだから認められているのです。

でなければ、女性に爵位や領地が与えられる事は滅多に無いのがこの国でした。

残された家族は、王国から年金を与えられて生活をする事になりそうです。

ところが、そのタルブに今のところは王城側から代官が派遣されておらず、復興は父や兄達が金も人手も出して行われていました。父は、かかった費用は全て王城側に請求すると息巻いています。何か嫌な予感がするには私だけなのでしょう？

「でも、その遅刻のおかげで敵の総大将を捕らえたんだろう？ こういうのは、怪我の功名って言うんだぜ」

「なるほど。東方には、良い言葉が沢山あるんだね」

才人に慰められて上機嫌になるギーシュでしたが、こいつは本当に運が良過ぎです。

寝過ごして、勝手に拝借した軽トラックで戦場へと急ぐ途中で、逃亡中の敵の総大将であるクロムウェルを捕らえたなんて。

一体、どこの漫画なのでしょう？

しかし、どれほど自信があったのかは知りませんが、普通あんな無謀な作戦に一国の代表が参加するなんてありません。きっと、あの国は連中は頭がおかしいのでしょう。

前の世界にも、 会党とか、 産党とか、 主党とか。口先だけで、実行能力に乏しいお花畑は多数存在していましたし。

そして捕まったクロムウエルは、ギーシユの運転する軽トラックに轢かれて骨折した手足を治療しながら、現在絶賛取調べ中です。

しかも、強力な魔力を持った指輪を持っていたのだとかで。更に、自分は虚無の担い手であると宣言していた割りには、彼自身は全く魔力を持っていない事も判明しました。どうやら、かなり手の込んだペテン行為だったようです。

そして、そのペテンを助けた指輪が何であるのかを、色々と喋って貰っているようでした。もう一回骨折しない内に、正直に話してくれる事を期待しましょう。

「おおっ！ ギーシユにティーポではないか。この度は、色々ご苦労だったな」

これから叙勲の儀という事で、謁見の間に向かう私達にタルブから急いで戻って来た父が声をかけて来ます。

「いえ、私はそれほどの事は」

実際に、軍事的には大した事はしていませんしね。

戦費用に、金属と宝石と簡易式ナパーム弾と紫電改のガソリンを錬金しただけですし。

むしろ、見た目には総大将を捕らえたギーシュの方が大手柄でしょう。

「ギーシュも良くやった。敵の総大将を捕らえるなんて。ワシも、実に鼻が高い」

父に褒められて上機嫌なギーシュを置いて、父の話は続きます。

「父上、儲かりましたか？」

「まあ、ボチボチだな」

前世では、既に一部の死の商人しか儲けが出ないとされる戦争でしたが、ハルケギニアの戦争では良く利益が発生する事があります。略奪やら、戦利品やら、講和条約における賠償金など。

勿論、無駄に長期化して財政を傾ける事もあるのですが、今回は本当に早く終わってしまったので、かなり利益が出ているようです。

まずは、敵軍から奪った船の類。

新旧大小と不揃いでしたが、特に修理しなくても風石を補給すれば飛ぶ様々な船が数十隻も手に入りました。

これは、既にミスタ・コルベールが領内に回送し終わっているそうです。

それと、敵軍の持っていた財貨の類。

どうやら、レコン・キスタ軍はトリステインで物資や食糧を購入

するつもりだったようです。

多分、小国で貧乏なトリスティンには、十分な蓄えが無いと思われるのでしょう。

という事は、一応は略奪禁止だったようですが。

タルブの様子を見るに、末端の兵士達や傭兵達には通用しなかったようです。

その辺は、やはり数だけの烏合の衆という事なのでしょう？

それと、捕らえた貴族などもかなり多く存在します。

半分くらいは死んだみたいですが、生き残っている連中は身代金を取るのに使えるでしょうから、これも財源となるのです。

そして身代金を取る権利を持つのは、実際に捕らえた私達というルールもあります。

「勿論、独占は不可能だがな」

利益は、諸侯連合軍に参加した貴族達で分配という事なのですが、当然常に一番前で積極的に動いていたグラモン家が、最大戦力を出したヴァリエール公爵家と同じくらいの利益を得られるでしょう。

やはり、大貴族はこういう時に得なんですよ。

ヴァリエール家は、何気が一番兵力を出しているから文句は言えないんですけど。

勿論、先行投資をしているので、リスクも十分に被っているのですが。

「さあ、叙勲の儀が始まるぞ」

父と一緒に謁見の間に入ると、王座の横にアンリエッタ王女とマリアンヌ太后とマザリー二枢機卿が立ち、その両側に王城の文官や、今回の戦いに参加した貴族達が立ちます。

「この度のレコン・キスタとの戦。多くの忠良なる貴族・兵士達に支えられて大勝利を得る事が出来ました。その感謝と忠誠に報いるために、これより叙勲の儀を行います」

叙勲の義は、全てアンリエッタ王女自らがその褒美の内容を発表します。

とはいえ、今回の戦には大きな問題がありました。

侵略されたトリステイン側は領土を得られたわけではありませんし、更に王国軍の展開が遅れて戦利品はほとんどが諸侯連合軍に持って行かれています。

勿論、命をかけて戦った諸侯から戦利品を取り上げるなど論外でした。

下手をしたら、今度はそれが原因で内戦になってしまうからです。

恩賞は、今まで王国が溜め込んでいた財宝や、高位の勲章などがほとんどで、領地などは下賜されないようでした。

「俺も、俺が錬金した物を与えられるのか？」

「さすがに、それは無いと思うけど……」

総大将を捕らえた功績で、ギーシュは精霊勲章といくつかの宝石を褒美として与えられていました。

その宝石はどこかで見た記憶があるのですが、気のせいだと言う

事にしておきましょう。

それと、ルイズも精霊勲章を貰い、他にも金貨や宝石の褒美とアンリエッタ王女付きの専属の女官に任命されていました。

あの、敵主力艦隊を一瞬にして無力化した魔法ですが。

やはり、その下で戦っていた多くの者達に目撃されていて。

事情を知ったヴァリエール公爵が、父やアンリエッタ王女やマザリーニ枢機卿と相談して、安全策と機密保持のためにアンリエッタ王女付きにしたそうなのです。

いくら伝説でも、ああ実際にやられてしまつとルイズの虚無に気が付く人も多いでしょうし。

なお、ルイズの虚無に関しては、私の膝の上で始祖の祈祷書に文字が浮かんでルイズが実際に呪文を唱えているところが目撃されていますしね。

私の証言に、異議を唱える人はいなかったようです。

最後に才人ですが、彼は平民にでも貰える勲章を授与されていました。

昔から貴族や王族は、大活躍をしたメイジでない傭兵や、金を融通してくれた商人などに与える名誉用の勲章を制定しているものなのです。

やはり、この国では平民とメイジの壁は厚いという事のようにですね。

その代わりに、才人は竜の羽衣の乗り手としてかなりの大金を褒美として貰っていたようですが。

他にも、諸侯軍に参加していた貴族達にも、私が作ったと思われる大型の水晶細工や宝石類や真珠が送られてました。

やはり、領地が無いのは防衛戦争だったからなのでしょう。

「続いて、この戦いで一番の功績があるグラモン侯爵と、ヴァリエール公爵に……」

実質的に、今回の戦いで一番の功績者は私の父でしょう。

周囲から狂っていると言われても、私から借金をしてまで、即応可能な諸侯軍の編成と瞬時の出陣に成功していたのですから。

「グラモン元帥には、少し申し訳ないのですが……」

父がアンリエッタ王女から伝えられた褒美は、意外にも領地の下賜でした。

しかしその場所は、戦死したアストーン伯爵が持つタルブ周辺や、グラモン領と接している王国が競売を行っている領地が三つ。

全部足せば、父の領地はヴァリエール公爵とさして変わらぬ領地の広さとなるのですが。

代わりに、先ほど私が与えられた旧ワルド子爵領をヴァリエール公爵に与えるので没収という面倒な事になっていました。

「あの、旧ワルド子爵領は、分家当主のティーボの物なのですが……」

「旧タルブ領には、ラ・ロシエールも付いています。そこを、伯爵になったグラモン伯爵に任せてください」

「おーい、グラモン伯爵」

「僕じゃないよ。君だろうか？ ティーボ」

現実を直視できない私は、隣にいるギーシュに声をかけてしましますが、正直一番いらぬ類の恩賞です。

せつかく人を入れて統治の準備をしていた旧ワルド子爵領を奪われ、敵軍に荒らされて現在復興中のタルブを領地として与えられてしまったのですから。

現在、うちが王国側のツケという事にして復興の資金を出しているのですが、どうやらそれを払いたくないようです。

それと、飛び地になるのを防ぐために下賜される小さなオマケのような領地が三つ。

どれもこれも、前領主が領民に過酷な税金を課し、領地を荒廃させて改易され。

その後に入った代官も、汚職を行って逮捕された後に競売地の候補になるが、最初は持ち出しばかりが多くて利益が出るのは遠い先という、疫病神的な土地ばかりでした。

領民も、代官時代の過酷な搾取で他所に逃げてほとんど残っていないそうです。

実際、領地が増えたのにそれに嫉妬する態度を見せる貴族は一人もいませんでした。

競売に出ている、誰も買わない領地なのですから当然です。

しかも、父の領地は歪で管理が難しい広がり方になっていました。

「伯爵になって良かったじゃないか」

「お前、何も知らないんだな」

爵位が上がれば素晴らしいと考えている才人ですが、爵位だけが上がるとかえって付き合いたの見栄にお金がかかる事があるのです。それと、周囲の嫉妬や恨み辛みですか。

これは、今さらなのかもしれませんが。

「しかもなあ……」

しかも、なぜか私はグラモン家の分家当主なのに、王城ではほぼ直臣扱いです。

私を勝手に分離すると父や兄達が激怒するので、こんな玉虫色のおかしな扱いになっているようなのです。

しかし、分家当主で伯爵とか。

普通の伯爵よりは下に見てくれるので、色々都合なのかもしれませんが、本当にマザリーニ枢機卿は良く考えるものです。

やはり、坊主はどこの世界でも生臭いでしょう。

「ティーボ・ド・グラモン伯爵。これからの忠誠に期待します」

私への叙勲と報償で最後でしたが、私に与えられたのは先代王が出陣前に馬に乗っている姿を描いた肖像画でした。

何でも、高名な画家が描いていても高価なのだそうです。

とはいえ、これ売り飛ばすには相当の覚悟がいるでしょう。

父とヴァリエール公爵も、先々代の王の肖像画を買って顔を引き攀らせていました。

名誉で売れば何十万エキューにもなるが、売りたくても売れない。しかも、劣化させるわけにいかないので管理に手間がかかる。

ただ、ハルケギニアには固定化という便利な魔法もあるので、思ったほどの手間にはならないのですが、変な場所に置いておくわけにもいきません。

その辺、色々面倒な褒美なものでした。

私は、この絵をどこに置けば良いのでしょうか？

「（鳥の骨が！ 我らの仲を破綻させるつもりか！）」

「（ティーボがいなかったら、破産かヴァリエール公爵との関係悪化だったな……）」

これにて叙勲の儀は終わるのですが、その日の夜はマザリーニ枢機卿が盛大にくしゃみでもしそうなほどの、父とヴァリエール公爵の顔を私は直に目撃してしまつたのでした。

「ティーボ、二三日ワシに付き合ってくれないか？」

「はい。いいですけど、何をするのですか？」

叙勲の儀の直後、私は父に連れられて先日の決戦が行われた場所へと移動します。

とはいえ、その移動の手段は例のパジエロでした。

これだと、本当に移動に時間がかからないですよね。

本当は紫電改の方が速いんですけど、あれは着陸地点やら燃料やら整備の問題で手軽には使えないので、既に私の鍊金小屋に戻してあります。

「馬も無く走る馬車か。便利な物だな」

「とはいえ、生産は難しいです。維持が精一杯で」

「これだけ便利だとなあ……」

才人の運転するパジェロの中で、父は車内を興味深そうに見ていました。

「しかし、ルイズ嬢の使い魔の少年は、何でも器用に操縦するのだな」

「これは、俺の……。いえ、僕のいた世界では普通に走っています……」

才人は柄にもなく、元帥で侯爵でもある父に対して緊張しているようでした。

「将来、輸入でも出来れば便利かもな。さて、ついたぞ」

現地に到着した私達は、全員で車を降ります。

他のメンバーはギーシュとルイズなので、父以外はいつもの面子です。

パジェロが無いと帰るのが面倒なので、付いて来たのでしょうか。

「兵どもが夢の跡か……」

才人の言う通りに、戦場跡には落下した主力艦隊の船体が転がり、他にも兵士達が懸命に散らばった武器や残骸などを拾い集めています。

さすがに、もう死体の類は全て処分されたようです。

とはいっても、ここは元戦場で遠い異国の地。

遺髪や遺品などを残し、残りは全てその場で焼却されます。

そうしないと死体使いなどに利用される事があるので、焼却が絶対のルールとなっていたのです。

「父上、それで私に何をしろと?」

「うむ。あの船の修復をお願いしたい」

「使えるのですか?」

「ああ、大丈夫だ」

恩賞の件でマザリーニ枢機卿にやり込められた父でしたが、代わりに新しい金の種を見つけたようです。

というか、その気になれば軍事以外にも色々目敏いのに、どうして今まではそれを使わなかったのでしょうか?

「あのルイズ嬢の魔法で墜落した艦隊だな。実は、船体本体はほとんど損傷していないのだ」

ルイズのエクスペディションによって炎上墜落した艦隊でしたが、実は船内は風石の保管庫以外はほぼ無傷で、他には帆と甲板の表面が少し燃えただけ。

しかも落下は緩やかなもので、そうでなければ船員達の損害がゼロなわけがないのです。

実際、うちの艦隊で唯一撃沈された小型船からは、多くの死傷者が出たのですから。

「マザリーニの奴。ワシが売ってくれと言ったら、無料同然の値段

で売ってくれたわ」

私には、マザリー二枢機卿が兵器類に疎いのか、実は秘かに父に利益を提供しているのか判断に迷いましたが、早速に船の修理に入る事にします。

「確かに、ある程度補強して帆を張ればいけるか」

私は船の装甲や甲板で燃えた炭になったり焦げた部分を酸素を抜くイメージで錬金して行きます。

すると、黒い炭になっている部分が徐々に元の木の色に戻ってきました。

そして次に、材木や木片を持って来させて穴の開いている部分や破損箇所を埋めていきます。

やっている事は、古い寺院や仏像などを直す大工と同じような事です。

ですが、錬金の魔法を使うと補強や穴埋めに使った材料を分子レベルで同化・結合が可能なので、実際には修理跡がほとんどわからないレベルにまでなっていました。

「やはり、ティーボに任せて正解だな」

「とはいえ、全部で十四隻で、ほとんどが大型戦列艦ですよ。今日は錬金は出来ませんね」

「一日くらいは、在庫分で補うようにアシルには言っておく。ティーボは、この戦列艦を再戦力化するといくらになるのか知っているか？」

「さて、軍事には疎いんですよね」

良く貴族などが自分で所持している小型の中古艦艇ならともかく、国家が年次計画を立てて建造・戦力化している船は、実はその辺の小さい領地よりも高いのだそうです。

しかも、この世界には固定化の魔法が存在します。

当然長持ちするので、旧式化してから武装を剥いで売っても、十分に売り物になる代物らしいのです。

その浮力の元である風石を確保できる経済力を持った人にしか所持は不可能でしたが、これを自分で持つていて大量に荷を運んで捌ける商人は、そこいらの貴族など及びもつかない金持ちでした。そのくらい、空中船とは高価で金を生む物なのです。

「とりあえずは、全部直します」

「船体本体以外は、応急でいい。風石を補給して浮かせたら、領内の設備で本格的に直すから」

父にそう言われた私は、次々と船体の損傷や焦げの部分を直していきます。

ギーシュは、私の代わりに帆を錬金で作り、最後に固定化を行っていました。

「疲れたなあ……」

「船が多過ぎるんだ……」

スクウエアメイジ二人で魔法力が尽きる限界まで作業して、ようやく損傷した船は何とか見られるレベルにまで修復していました。

やはり、簡易式ナパーム弾の火災で損傷した部分が酷く、それで
王城側は自分達での修理を諦めたようなのです。

意外と内部は無事でしたが、王国の軍事工廠の技術者達はこれを
金をかけて修理したとして、どこまで直せてどれほど使えるのか？
かかる費用などと合わせて冷静に計算をして、修理を諦める決定
をしたのでしよう。

ところが、私は物が燃える現象について科学的に理解しているの
で、木や金属の還元を行う事ができます。

それと、壊れた部分を違う材木を原料にして、見た目元の状態に
する事もです。

多少手間はかかりますが、ほぼ新品に直す事が可能でした。

「でも、もう一日かかるな」

そして翌日も、私達は船体の修理に励みます。

とにかく、船体の修理が最優先です。

火災や爆発で壊れた部分を他の木材を材料に錬金で継ぎ足し、元
の状態に戻します。

他にも、焦げて使い物にならなくなった大砲なども元に戻して修
理を行い、戦場に落ちている壊れた装備なども可能な限り直してか
ら元の位置に取り付けます。

空中船は、次第に浮いていた頃の姿へと戻っていきます。

「まるで、パズルでも組み立てているようだ」

それでも、二日目の夕方には全ての船が風石を補給すれば飛び立てるようになっていました。

それと、旗艦であるレキシントンには試みに独自の改良を加えていました。

まずは、船体の外側部分ですが。

木製の外板を薄くしてから、そこいらの燃えた炭を材料に炭素繊維強化炭素複合材料製の外板装甲を錬金して張り付けたのです。

プラスチックに炭素繊維を織り込んで、それを熱処理で炭化させて作るのが炭素繊維強化炭素複合材料ですが。

軽くて丈夫で科学的にも安定し、熱にも強くて1600 までの高温にも耐えます。

ただ空気中だと450 で燃えてしまうので、炭化ケイ素などでコーティングをする事があるそうなので、地面にふんだんにあるケイ素と炭の中の炭素を原料に錬金をして三重構造とします。

本当に強固になって便利になるのかはわかりませんが、一隻だけなら実験という事で父には目を瞑って貰う事とします。

それと、他にも帆をケブラー製にします。

ケブラーは、ナイロンを開発したデュポン社が作った水と石油と空気を材料で作る丈夫な布の事です。

パラフェニレンジアミンとテレフタル酸クロリドの重合によって得られ、分子構造が剛直で直鎖状の骨格を持つために、高強度・高耐熱性であり、同じ重さの鋼鉄と比べて5倍の強度を持つ人工繊維です。

書いてて意味不明ですが、化学式を見ると結合は強固なんですけど使っている原子の種類は少ないんですね。

本当に、空気と水と石油や石炭や炭を材料にでも作れるのです。

実際は、かなり高度な生産設備が必要ですし、防弾チョッキの素材に使われるほど丈夫なので、濃硫酸に溶解することではしか成形できません。

材料があり、私の場合は原子結合図がわかれば作れる錬金は非常に便利なわけですが。

とりあえず、ケブラーの強度を決める周囲のポリマー鎖とのカルボニル基と水素間の水素結合や、ベンゼン環の結合バイケツウの部分的な重なりなどを想像しながら錬金を行います。

そして最後に、ケブラーには紫外線に弱いという欠点があったので、ギーシュに強固な固定化をかけるように頼みます。

「絹では、ないんだよね？」

「似たような物だが、錬金で作りたいければ俺に言え。今から、一日五時間勉強して五年くらいで作れるようになる」

「遠慮するよ……」

ギーシュは、私から逃げるように移動してレキシントンのケブラーI49製の帆に固定化をかけます。

以上、私達による二日間の健闘により。

王城側が、修理するくらいなら新規に建造した方がマシだと思っていた元レコン・キスタ空軍主力艦隊十四隻は、ほぼ新品に近い状

態にまで修復されてきました。

主に、私がやったんですけどね。

「これは、予想以上だな。あとは、内部の細かい改修と、完全に喪失した大砲などを搭載すれば、艦隊は完全復活だ」

父は喜んでいますが、現在我々が抑えている旧レコン・キスタ軍の拿捕艦艇の数は尋常ではありません。

修理は可能ですが、再就役には人材の確保という困難が待ち受けているのです。

「ところで、これを運用する人員はどうするのです？」

「さすがに、うちでも手に余るからな。王国軍にレンタルするのだ」

父の考えに私は納得しました。

費用効率の関係で諦めていた大型戦列艦ばかりの艦隊が、私の二日分の精神力という尊い犠牲によって復活した。

本当は返して貰いたいところだが、手に余って無料同然の額で売り飛ばしたのはマザリーニ枢機卿であり、ならば手頃な値段でレンタルしてはどうかと考えている父でした。

「数年レンタルしてから安く売り飛ばせば、うちの大きな利益になる。うちは、あの艦隊を運用できる人材が不足しているからな」

先にタルブで鹵獲した艦隊ですら、修理後に乗せる船員不足に泣いていたので、これは他の諸侯へと安く譲与するか、売却する事も考えていた父でした。

もつとも、既に船員を育てる教育施設の拡充は命令していた父でしたが。

本当に、私の稼いだ金が飛ぶように消費されていきます。

「マザリーニ枢機卿、わかっていたんですかね？」

「それは、奴を評価し過ぎだ」

私は、彼がわざとこういう流れにしたのではないかと考えていました。

あまり表立って父に過大な報償を与えると他の貴族とのバランスが崩れると思って、復興に金がかかるかケチな領地しか与えず。

実利の方は、船のレンタル料で支払う。

実際に、あれらの船を中古で購入すると、数年間のレンタルの後にトリステイン空軍が下取りをするのと。

金額に、大した違いはありませんでしたし。

「ただ、人材は王城側が抑えているからな」

諸侯軍は、捕らえた貴族の身代金を貰う権利は獲得していましたが、実際の管理は王城側がまとめて行っていました。

そうしないと、色々と混乱するからなのですが。

その捕虜になった彼らに対して、アンリエッタ王女は先に才人とギーシュが持ち帰ったジェームズ1世の遺書を公開しました。

すると、一部貴族達と平民達などを中心に、空軍の兵士や士官達がトリステイン側に付く事を宣言したそうです。

「内戦に、トリステイン侵攻で、アルビオン貴族の数は減った。そ

れとこれはまだ秘密だが、数日後にアンリエッタ様がトリステインの女王として即位される。同時に、マリアンヌ様もアルビオンの女王として正式に即位なされる」

という事は、トリステインは全力を持ってアルビオンをレコン・キスタから奪還するつもりの方でした。

正直なところ、何年かかるかはわかりませんが。

「それで、ゲルマニアとの婚姻は破棄ですか？」

「今回の戦いで、何の役にも立たなかったからな。それに、トリステインは単独でレコン・キスタ軍に圧勝した。わざわざ婚姻などしなくても、同盟するに足る相手だと思っっているだろう。向こうは」

あとは、ゲルマニアとの軍事同盟を利用してアルビオンへと攻め入るだけ。

援軍でも頼むのでしょうか、そのお礼でまたひと波乱ありそうな雰囲気ですね。

「攻め入れれば、またアルビオン貴族の数は減るからな。今の王城では、領地の少ない者や持つていない者は戦の準備に余念がないだろうな。それと、その分け前を狙うゲルマニア。ガリアの考えは不明だが、色々ときな臭くなるであろうな」

そこまで理解できているのに、経済には疎い父。

戦争は、まだこれからで。

私は、また資金稼ぎの錬金生活へと戻る事になるようでした。

三十六話

「今日は、午後からアンリエッタ女王様の即位式典が行われるそうだよ」

「一応忠実という事になっている家臣としては、参加しないわけにはいかないか」

「何か棘のある言い方だね」

「俺は、人間錬金装置扱いだからな」

トリステインが、レコン・キスタ軍の侵攻を退けてから約一カ月後。

そろそろ夏休みも後半に入り、多くの学生達が新学期に備えて学院へと戻っていたのですが。

それと合わせたように、アンリエッタ王女が正式にトリステインの女王として即位する事になりました。

同時に、マリアンヌ大后のアルビオン女王への即位も発表されます。

ここまで時間がかかったのは、アンリエッタ王女がゲルマニアの皇帝アルブレヒト3世との婚姻を破棄しつつも、先に結ばれた軍事条約を継続し、トリステインがアルビオンへと攻め入る際に援軍を得られるように、マザリーニ枢機卿が色々と交渉をしていたからです。

他にも、ガリアやロマリアへも色々と説明をしなければいけない

事も多かったようで、特に故ジェームズ1世が義妹であるマリアンヌ太后にアルビオンの王位を禅譲した件についての説明が主になっていました。

これを認めて貰えないと、トリステインがアルビオンを奪取しても後でイチャモンを付けられる可能性もあつたからです。

マザリーニ枢機卿の意を受けた外交官達は、彼の直筆の手紙や、亡命したイーグル号が積んできたアルビオン国王が被るの王冠や、国宝の実物まで彼らに見せて、その正当性を証明したそうです。

結果、ロマリアの呼びかけにより、始祖の血を絶やそうとするレコン・キスタに対抗するための『王権同盟』が締結されました。

その内容は、それぞれの国内で共和政を掲げる反乱が勃発した場合、反乱軍を四力国共通の敵とみなして残りの三力国が王政府を援助する。

言ってみれば、王権国家同士の互助会のような同盟ですね。

ただ、ガリアに関しては、レコン・キスタを押さえ込むためのアルビオン封鎖。

これは後に、『アルビオン封鎖条約』と呼ばれる事になりますが、アルビオンへの一切の貿易と人の移動を停止するという条約に参加しただけのようでした。

しかもこれと平行して、各国はこれから激増するであろう、密輸や密出入国などを取り締まらないといけないのですが、それを誠実に守るのかどうかはガリアやゲルマニア次第なのです。

本国がそれを容認しても、守らない貴族や商人が存在するのは特に珍しい事でも無いですし。

というわけで、トリステインは先の戦いで降伏し、こちらへの忠誠を誓った元アルビオン軍の船員まで国軍に編入して。

密輸の取り締まりや、密偵の送り込みや、亡命者の受け入れまで行っていました。

私が直して父がレンタルした船を、早く戦力化しようとしていたのです。

訓練がてらというやつですね。

以上そんな感じで、トリステインの貴族達はアルビオンに領土が貰えるかもしれないと活気付き。

ゲルマニアは少しでも多くの分け前をと動き、ガリアは表面上は同盟や条約を守りつつ不気味な沈黙を続けています。

この国の王が、『無能王』と呼ばれる所以でした。

「それは、仕方が無い。この狂乱の種銭のかなりの部分をティーボが稼いでいるのだから」

ギーシュに真顔で指摘されるとムカ付きますけど、それは間違いの無い事実でもあります。

父が今まで貯めていた分や、私から借りて増強を始めた諸侯軍は、先日のレコン・キスタ軍との戦いでグラモン一族の武勳と名誉を不動のものとなりました。

多分、これから始まる戦争にでも、父はその中心人物となって動く事でしょう。

しかも、そこには既に父と一緒にトリステイン東部の諸侯を纏める存在にあるヴァリエール公爵も参加する事になっています。

突如とは言えませんが、アルビオン王家の一時廃絶と、それを滅ぼしたレコン・キスタによるトリステイン侵攻。

父達は見事にそれを撃退して多くの戦果と戦利品を手に入れましたが、それは余計に彼らを新たな戦いへと導きます。

アルビオン王位を禅譲されたマリアン又大后を旗頭として、アルビオンを併合するという。

小国トリステインが、トリステイン・アルビオン連合王国となって大国ガリアやゲルマニアからの脅威に対抗し、何としても生き残るという国家百年の計というやつです。

そのために、半ば引退を宣言していたヴァリエール公爵は現役に復帰して、王城内で父と組んで色々と模索しているようでした。

何しろ父達は、マザリーニ枢機卿が嫌いです。

彼は基本的に無私なのですが、あまりに王家のために動き過ぎるので、時に貴族達が大きな理不尽を被る事があるのです。

勿論、貴族が好き勝手にするのも論外ですが、あまりに王城側の無茶が過ぎても堪らないと。

これは、お互いの立ち位置の違いから来る対立なのかもしれませ
ん。

「それで、俺も参加なのか」

「竜の羽衣を操る騎士様は、アルビオン侵攻でも大きな戦力として期待されている」

王都トリスタニアへと向かうパジェロの中で、運転手の才人が愚痴っています。

アンリエッタ女王とマリアンヌ女王即位式典は、第一部が選ばれた参加者だけによる古来よりの仕来りに則った物で。

次は、アンリエッタ女王がトリスタニアに詰めかけている民衆達にパレードでその姿を見せ。

最後に、外国からの招待客も招いたパーティー形式のお披露目会が行われる事になっていました。

そんなわけで、私達はパジェロに着替え用の正装を載せて王城への道を急いでいました。

「まさか、僕が招待されるとはね」

今日は助手席に座っているギーシュが、自分が今日のパーティーに招待された件について話します。

確かに、最初の即位式典と最後のお披露目会に招待されるトリステイン貴族は、外国からのVIPも呼んでいる事から非常に限られています。

よほどの事情が無ければ、普通は貴族家の当主か、法衣貴族でも職位が高位にある者か、軍で最低でも佐官の地位にある者くらいまでしか呼ばれません。

それと、政治の都合で元アルビオン王党派の生き残りや、先の戦いで降伏してこちらに付いた者などでそれなりの地位にある者も呼ばれています。

トリステインが、本気でアルビオンを奪還する決意を各国にアピールするのと。

トリステインが正式に開催した式典に参加させて、アルビオン奪還に協力する意思を彼らに示させる。

一度己の態度を示した以上は、再びレコン・キスタ側に裏切るのは貴族の風上にもおけないし、その意思は外国の王族や貴族達も確認しているのです、他国に逃げ込んで再仕官するわけにもいかない。

完全に逃げ道を塞いだのですね。

マザリー二枢機卿も、意外とえげつない事を考えます。

「アルビオン侵攻では、父が王国軍のトップに。ヴァリエール公爵が諸侯軍を纏める立場になるらしい。そんなVIPな父の息子である俺達が、呼ばれないわけがない」

「確かに、兄達も全員が呼ばれているね」

長男のアレクサンドルは、またグラモン領諸侯軍を纏めてヴァリエール公爵を補佐する立場に。

他の兄達も、王軍やら諸侯軍でそれなりの地位に就く予定らしく、今回の式典に呼ばれているようでした。

ギーシュに関しては、先の戦いで敵の総大将を捕らえたという功績もありますし。

噂によると、アルビオン侵攻に際して王国軍の士官が不足しているので、学院の男子生徒達に夏休み明けから即席教育を施して、臨時士官として放り込むという案も浮上しているようです。

先に戦功を挙げているギーシュを招待して、他の生徒達にやる気を出させる作戦なのかもしれません。

現に他の学院の生徒達は、式典やお披露目会が行われている時は他の解放されている部屋に集まって話をするか、もっと小物の貴族

だとトリスタニア沿道でパレードを見るだけなんて事も珍しくないのですから。

同じ貴族でも雲泥の差がある。

私も錬金という特技がなければ、そちらでパレードを見学している方だったでしょう。

そちらの方が気楽という意見もありますけど。

「うへえ。その式典が行われている部屋の隣で、招待されなかった貴族達が獵官運動を行うのか」

「まあ、そんなところだろうな」

王城側が用意した部屋で軽食などを取りながら、式典やお披露目の参加する際にそこを通る大物貴族達に自分をアピールする。他にも、自分の息子や娘の紹介をして婚姻をお願いしたりと。

政治制度や場所は違えど、どこの世界でもロビー活動が活発なのは同じようです。

元日本人の私は、こういうのは苦手なんですけどね。

「俺には、理解できない世界だな」

ハンドルを握りながら才人が自分の感想を言いますが、出来れば私もこちらに居たかったです。

何しろ、私は元日本人なんですから。

「それで、私とティーボが一緒にパーティーに参加して、グラモン家とヴァリエール家の繋がりをアピールするわけね」

膝の上に、始祖の祈祷書に乗せたルイズが最後に言葉を発します。実際に彼女の言う通りでしたし、更にアンリエッタ王女の婚姻が中止になったので、始祖の祈祷書を返しに行くという用事もあるようです。

「そういえば、モンモランシーも出席するそうよ」

「そりゃあ、彼女は跡取り娘なわけだし」

モンモランシーはモンモランシ伯爵の一人娘なので、お披露目会に出席する事になっていました。

財政的には厳しいが、アルビオンへの出兵を機に家の建て直しを図りたいモンモランシ伯爵は、一人娘であるモンモランシーに良い婿を探そうと考え、自分の随伴者としてお披露目会へと出席させるようなのです。

「ティーボは、モンモランシーとの結婚もありえたのよね？」

「いや、それはない」

なぜなら、私はグラモン分家当主として残らなければならないからです。

そんな私が、次期モンモランシ伯爵として彼女と結婚するなどありえないのですから。

「という事は、この僕の出番というわけだね。敵司令官であるクロムウェルと捕らえた功をもって、モンモランシーとの婚姻を紹介される？」

「それは、どうかな？」

「ティーボ！ 君は言ったじゃないか！ 君とルイズの結婚は、グラモン家とヴァリエール家との繋がりのため！ なら、僕とモンモランシーも！」

「だけどなあ。あの家に今必要なのは、金を持っている婿か、実家に金がある婿だし」

しかも、今のグラモン家はまた借金体質とまではいかないものの、蓄えをかなり放出している状態でした。

ギーシュ本人が金を持っていないと、他の男に持って行かれる可能性もありました。

「うぬぬ。これは、頑張らないと……」

ギーシュは変に気合を入れていましたが、空回りしない事を期待します。

何しろ、普段の服装からしてアレなので、変な意味で目立つ格好とかをしない事を祈るしかないのです。

しかし、あんなヒラヒラの付いたシャツを良く恥ずかし気もなく着れますよね。

「到着したよ」

私達は、無事にトリスタニアへと到着します。

才人が人を轢かないように王城へと車を走らせるのですが、やはり珍しいのか多くの人達がパジェロとそれに乗る私達を見ています。

「念入りに維持して、家宝にでもするか」

無事に王城へと到着して、即位式典に向けて着替えをするために指定された控え室へと向かう私達でしたが、その後私はおかしなトランプルに巻き込まれる事になるのでした。

「何か、キツイ衣装だな」

グラモン家から借りた正装に身を包んだ才人が、窮屈そうな感じ
で私の後ろを付いて来ます。

「正装だからな。才人、余計な動きは見せるなよ。竜の羽衣で活躍
したお前は、俺の従者扱いという事でこのお披露目会に招待されて
いるんだが、お前は注目されているぞ。変なマナー違反とかをする
と、下手をするとハルケギニア中にお前の恥が広がるぞ」

「えっ！ マジ？」

王城へ到着後に正装へと着替えた私達は、休む間もなくアンリエ
ツタ女王とマリアンヌ女王の即位式典に参加し、その後二人はトリ
スタニア市民達に向けてのパレードを行ってから、夕方からこうし
て多くの外国からのゲストを呼んでお披露目のパーティーを開いて
いました。

ガリアからは、王族はいないものの数名の大物貴族達。

ゲルマニアもほぼ同じで、ロマリアからも高位の聖職者達が数名
参加していました。

本当、パーティーも外交の一環なんですよね。

それと、多くの主に東部諸侯達に囲まれる父やヴァリエール公爵ですか。

大活躍で存在感を増し、派閥に人が増えてわが世の春と言った感じでしょうか。

ですが、父の頭の中は既にアルビオン戦での事で一杯なのでしよう。

父は、自他共に認める戦争バカなのでから。

「アルビオンというパイを得る権利をトリステインが獲得したからな。他の国は、表面上はそれを認めつつ、いかに分け前を奪うか。もしくは、裏で邪魔してやろうかと動く。華美で豪華なのは表層上だけさ」

早く終わらせて帰りたい私でしたが、僅かな紹介の後にモンモランシーを追いかけに行ったギーシュと違って、私は父や兄達に立ちこちに引き摺り回されていました。

「ほう。大きくなりましたな。錬金殿は」

「私も、錬金殿のような息子が私も欲しいものですな。グラモン元帥」

これからも、アルビオンとの戦争や占領・復興後の資金源の一部となる私には、多くの貴族達がこぞって挨拶に訪れます。

「彼が竜の羽衣の騎士ですか。錬金殿は、優秀な従者をお持ちのようだ」

そして、私の後ろにいる才人も、貴族達の興味を魅く存在でした。本当はルイズの使い魔なのですが、そんな事はもはやどうでも良い感じですよ。

「何で俺まで……」

「給料分だ。我慢しろ」

私は、慣れないパーティーで精神的に疲れている才人にそっと耳打ちします。

「既に、本当に夫婦のようですね。実に初々しい」

更に、私がエスコートしているドレス姿のルイズも、貴族達の大きな注目の的でした。

というか、本当は自分の娘などを嫁がせたかった貴族達の半ば嫉妬のような感情も裏では混じっているのですが。

ですがよくよく考えると、父の考えで外に婿に出られない私には、ルイズのように公爵家の三女は実に都合の良い相手なのかもしれません。

私が普通のメイジであれば、これは他家に婿に行くのは大歓迎だったのでしょうか。

妾腹なので、その前途は多難だったと思いますが。

「お二人に子供が生まれたら、是非私の孫娘と」

「いやいや、私の孫と」

そして、血と家を残す事にかけては他者の追隨を許さない貴族達は、既に終わった事はキツパリと諦めて、次の婚姻へと邁進します。私とルイズの間に子供が生まれれば、その子は私の血と私の魔法のコツを受け継ぐ存在となる可能性が高いのです。

息子だろうと、娘だろうと。

同年代の、これから生まれる自分の子供や孫などと結婚させたいと願う貴族は多数存在しました。

まだ生まれてもいない子供なんですけどね。

「私達はまだ学生でもありますので、正式な結婚とか子供はまだ先の話ですよ」

私は、上手く振り切りながらルイズの手を引いてその場を辞めるのですが、今度はルイズの父親であるヴァリエール公爵に捕まってしまう。

それと、ルイズの母親であるカリーヌさんと、その姉であるエレオノールと。

エレオノール女史は、魔法アカデミーで働いている関係でパーティーに出席していましたが、次女のカトレアは大事を取って今回は欠席をしていました。

「やあ、婿殿。この度は、大活躍だったそうじゃないか。やはり、武の一門であるグラモン元帥の血を引いているのだな」

ヴァリエール公爵は一言目に私の武勲を褒めますが、私の武勲って何でしょうかね？

基本的にはずっと後方支援担当でしたし、最後の出撃でもあの主

力艦隊を全滅させたのは、ルイズの虚無の魔法ですし。

ただ、かん口令は敷いているものの、ヴァリエール公爵達の真上でエクスプロージョンを炸裂させて誤魔化せるほど世の中は甘くは無いようで、彼は自分の娘を守ろうと懸命に王城内で動いているようでした。

特に、幼馴染である事を強調してルイズを自分に側に引き込もうとするアンリエッタ王女と、それを助けるマザリーニ枢機卿に新たな隔意を覚えているようです。

マザリーニ枢機卿とヴァリエール公爵との和解は永遠に無いというのが、王城の貴族達の意見でもあるようでした。

共に公私混同はしない人間なので、それでトリスティンが割れるという事はないと思うのですが。

「私の武勲ですか？」

「戦列艦に止めを刺したと聞いているぞ」

確かに、才人が中型の戦列艦に落とした簡易式ナパームに火を付けたのは私ですが。

あれって、武勲なんでしょうか？

たまたま一度燃えた甲板が割れて簡易式ナパーム弾のタルが入り込み、そこに私が火を付けただけなのですが。

「それに、戦場に出たルイズを良く守ってくれた」

「それは、才人の武勲でもありますよ」

私達の乗っていた紫電改を操縦していたのは、才人ですしね。特に被弾も怪我も無かったのは、彼の力量のおかげですし。

「婿殿は、あまり自分の功を誇らないのだな。普段の錬金が凄いの
で、あまり大した事ではないと思うのかもしれないが」

ヴァリエール公爵は、私にそんな話をしつつも基本的には上機嫌
のようでした。

先の戦いで父とほぼ同等に等しい功績を挙げたと評価され、小う
るさいと思っているマザリーニ枢機卿に物言える立場を手に入れた
のですから。

トリステイン王国とトリステイン貴族との立場は、微妙に違つと
いう事なのでしょうし。

「ルイズ。ここどころ色々とありましたが、ティーボ殿を未来の
旦那様として立てて、恥かしくない振る舞いをするように」

「はい、お母様」

次に、ルイズのお母さんであるカリーヌさんですけど、やはり威
厳があつて迫力もありますよね。

私が基本的にビビリなので、普通に話をするのが大変でした。

「ルイズの婚約者が決まって、本当に良かったよ。しかも、将来有
望な若者だしな」

娘三人の父親であるヴァリエール公爵ですが、彼は子供の件では
一部古参の家臣達や、親戚筋の貴族からは常に批判的な事を言われ

ている立場でした。

何でも、若い頃にメイジの力量しては優秀ながらも、家柄ではお話にならない奥さんを貰った件で反発を受け。

しかも、彼女の生んだ子供は全て女の子。

更に、長女はその気の強さから何度か婚姻を破棄され、次女は病弱でまず嫁になど行けない。

そして三女は、魔法が使えないで学院ではゼロなどというあだ名を付けられる始末。

表だってキツパリと公爵に物申す人はいませんでしたが、ヴァリエール公爵家の存続について不安を感じている人達が多かったのは事実であつたのですから。

逆に、うちのようによ男ばかりでも継がせる領地などで困る事もありませんが。

そのために、父は色々と奮闘しているようですし。

多分、次男のセザールと三男のジョルジュに領地を与える算段をしているのでしょうから。

平時ならば、自分の領地を分割相続させるのはグラモン家の力を落とす事になるのでそれは行いませんが、トリステインがアルピオンを取りに行くのであれば話は別です。

二人は領地を得られる可能性があり、他の貴族達もそう思っているからこそ、こうやってパーティー会場で獵官行動を繰り広げているのですから。

「ですが、お父様。エレオノール姉様も、バーガンディ伯爵様と…

…」

エレオノールに婚約者がいるのを思い出したルイズですが、彼女がそれを口にした途端に、ヴァリエール公爵家の人達の周囲の温度が下がりました。

「ルイズ……。その件についてはだな……」

急に口籠るヴァリエール公爵でしたが、既に手遅れであったのかもしれません。

彼の後ろからは、正確に言えば彼の後ろにいるエレオノール女史から何かドス黒いオーラののような物が吹き上がりました。

考えてみると、この場で私達にバーガンディ伯爵が紹介されていないという不思議もあったので、これはきっとアレなのでしょう。

早くに気が付かなかったのは、不幸以外の何物でもありませんでしたが。

「バーガンディ伯爵様との婚約は解消になりましたが、それが何か？」

パーティーの席なので低音でか細い声でしたが、私とルイズはヴァリエール公爵の後ろから漏れるエレオノール女史の声に、この季節にはあり得ないはずの身震いを感じてしまいます。

「ちびルイズ。あなたは、随分と大人になったようね。この姉である私に対して、嫌味を言えるなんて。さすがは、婚約者がいるだけの事はあるわね」

続いてヴァリエール公爵の後ろから聞こえる声に、私とルイズの

身震いは止まりません。

自分の婚約は破棄となり、十歳年下の妹の婚約は決まる。

これで、不機嫌にならない方がおかしいのですから。

しかも、エレオノール女史は今年で二十七歳。

ミス・ロングビルも真つ青な、嫁き遅れでした。

前世日本なら、それほど気に病む年齢でもないんですけどね。

「ねねねっ……。姉様？」

「エレオノール、いい加減にしなさい」

エレオノール女史の迫力に怯えるルイズでしたが、カーリー又さんの一言でそれは見事に納まります。

「過ぎた事を言っても始まりません。それに、そういう相手を探すためのパーティーでもあるのです。ヴァリエール公爵家の長女としての自覚を持って相手を探すように」

「わかりました」

普段はおつかないエレオノール女史ですが、やはり母親には逆らえないみたいです。

私達から離れて、パーティー会場内で婿候補を探し始めたようでした。

「ティーボ殿。確か、アレクサンドル殿以外は独身であったと思うのだが……」

「それは、事実なんですけど……」

ヴァリエール公爵は、私の兄達に何か期待をしているようですが、それは難しいとしか私の口からは言えませんでした。

次兄セザール二十四歳独身、三男ジョルジュ二十二歳独身。

姉さん女房になるうえに、全く奥さんに頭が上がらなくなるのですから。

絶対に嫌だと言うでしょうね。

それならば、自分の武功で領地を切り取ると言いかねません。

「四男のギーシュ殿は？」

「ええと……」

ヴァリエール公爵の必死さはわかるのですが、ギーシュがその話を聞いたら卒倒する可能性があります。

私は別に構わないと思うのですが、これも色々と障害があり過ぎなのです。

「お見合いでしたら、父にお願いした方が宜しいかと」

「確かに、婿殿の言う通りだな。婿殿にエレオノール事を言ってもな……」

その後、父を探しに私達の下を辞するヴァリエール公爵でしたが、その背中を煤けて見えるような気がするのは私だけなのでしょうか？

そして、私とルイズもパーティーの出席者達に挨拶をして回ります。

婚約中の二人で挨拶に回って、グラモン家とヴァリエール家の繋がり深さをアピールしつつ、多くの貴族達と仲良く話をしたりする。

いかにも貴族な感じの私が一番苦手とするお仕事でしたが、ルイズはさすがは大貴族のお嬢様といった感じで、実に無難に立ち回っているようでした。

私も、随分と助けられました。

勿論その手の教育は受けているのですが、教育と実践はまるで別物ですしね。

そして、大剣デルフリンガーを背中に持つ、竜の羽衣の操縦者である才人も貴族の興味を引く存在のようでした。

もともと、メイジではない才人ですし。

彼は私の従者扱いなので、貴族という生き物はそんな変り種の大活躍をした従者に興味深々なのです。

ある意味、強い幻獣や竜に興味があるのと同じ感覚ですが、これは仕方が無い部分もあります。

長年の風習というか、価値観の固定なんですけどね。

才人には、『適当に笑顔で聞き流せ』と言っておりますが。

両方の価値観を知る私には、実は貴族達にもあまり悪気が無いのを知っているのです。

生まれ付きそついう環境で、そついう教育を受けて生活をしていきますからね。

そつすぐには改まらないものなのです。

「おおっ！ この度は大活躍だったそうで。ミスタ・サヴァン」

最後に、外国からの招待客と挨拶をする私達ですが、あるガリア貴族の一言が会場の空気を一気に冷却化させました。

私の名前を、祖父の家名で呼んだからです。

「失礼ですが、私はグラモン家の人間です」

「今はそうなのでしょうが。将来的には、ティーボ殿はサヴァンの家を継ぐ権利がございますぞ」

この空気を読まないガリア貴族のせいで、アンリエッタ女王やマザリー二枢機卿まで難しい顔をし始めました。

「祖父の恥を話す事になりますが、サヴァンの家は正式に先代のガリア王自らによって改易された存在。ガリアに戻るなど、全くもってありえません」

この貴族は、実は旧オルレアン派なのでしょうか？

こんなお祝いの席で、わざわざ両国の関係に罅を入れるだけでなく、私がガリアに戻るなどという幻想を話し始めるのですから。

いくら理不尽な讒訴によっても、祖父は正式に改易された存在なのです。

それに、この貴族はどちら派なのか知りませんが、ジョゼフ派ならば祖父を改易しなければ済む問題でしたし、オルレアン公派なら何か手助けをしていたら済んだ問題なのです。

祖父が離縁までして母を連れて国を出たという事実は、誰も助け

てはくれなかつたという事の証拠なのですから。

「私は、生まれも育ちもトリステインですからね。今さら、ガリアには行きませんよ」

私の回答にマザリー二枢機卿などは胸を撫で下ろしていましたが、こんなお祝いの席でガリアは何を考えているのでしょうか？

これが、前世でも某大陸や某半島が日本に対して言ってきた、利益を掠め取るための言いがかりなのかもしれません。

つまり、ガリア貴族の血を半分引く私なので、権利はガリアにもあると。

「私がジョゼフ陛下に頼めば、ミスタ・サヴァンなら侯爵位くらいは貰えますぞ。領地も広大な物となりましょうし、薬師の名門サヴァン家が復活すれば……」

結局、この貴族は他のガリア貴族に窘められていましたが、これは単純にバカな貴族がいたという問題ではありませんでした。

どうして、わざとあんなバカをトリステインへと派遣したのかなのです。

私はそれほど政治には詳しくないので、せいぜい気を付けようと思っくらいなのですが、父やヴァリエール公爵やマザリー二枢機卿などは、難しい表情を崩さないままで、残りのパーティーの時間を過ごしたのです。

三十七話

「最後の最後で、おかしな動きをしましたね。ガリアの意図がわかりません」

アンリエッタ女王とマリアンヌ女王の、即位祝いパーティーの翌日。

本来であれば、とっくに学院へと戻っている予定の私達でしたが、あのガリア貴族の不用意で非常識な発言のために、なぜかその日は城内に留められてしまっていました。

VIP扱いで高級そうな部屋を宛がわれて泊まり、今日改めてアンリエッタ女王と謁見します。

『昨日は、忙しかったアンリエッタ様とあまりお話をしていないでしょう』というのがマザリー二枢機卿のお話でしたが、きっと他に用事があるのでしょうか。

今までの流れからして、あまり私の利益にはならないのでしょうか。

ですが、そんな私とは違って、ルイズは幼馴染でお友達な彼女と会ったのが嬉しいようです。

ギーシュは、本来雲の上の人で綺麗な女性である彼女と直接会えるのは嬉しいでしょうし。

そして才人は、二回目の顔合わせとなるファンタジーな世界の女王様に鼻の下を伸ばしていました。

私ですか？

私は、どうにもこのお姫様と絡むと色々と面倒な事が起きるので、少し苦手なんでよね。

私は、静かに錬金をしていたい人間ですし。

ああ、既に彼女は女王様でしたか。

「そんなに深く考える必要は無いかもしれませんが」

不意に、アンリエッタ女王の隣にいたマザリーニ枢機卿が話し始めますが、彼は何か情報を掴んでいるのかもしれませんが。

「マザリーニ枢機卿。あなたは、何か知っているのですか？」

「あのポワティエ伯爵は、以前はオルレアン派だったか？」

ようやく話の筋が見えてきました。

どうやら、ガリアは私を利用して隠れオルレアン派の排除を今も行っているようです。

先のタバサの勧誘もそうですが、もし私がガリアに戻ってガリア貴族となり、今はジョゼフ派に転向している振りをしていたり、貴族としての名を失いつつもガリア国内に潜伏している連中へ、錬金の特技を用いて稼いだ金で援助を行ったとしたら？

勿論、そんな甘い考えは、いくら無能王と呼ばれているジョゼフ王でも見逃さないでしょう。

私がガリア国内に入って、再び生きて出られる保障などありません。

というか、私がこんな策には引つかからないとわかってもしいるの

でしょう。

私が、ガリアに戻るかもしれないという風聞を利用して、昨日のポワティエ伯爵のような少しオツムが残念な方々を、合理的に排除するのが目的なのかもしれません。

「実際にポワティエ伯爵は、使節団の衛兵達に拘束されながら帰国したそうです。後日、シヨゼフ王から謝罪の言葉が届くでしょうな」

『不見識な使節を送って済みません。代わりに処分しておきますので』とこんな感じで、あのポワティエ伯爵は領地と爵位を失うでしょう。

今もタバサに希望を繋いでる隠れオルレアン派や、転向はしたが信用できなかったり、無能で領地を与えるのもバカらしい貴族など。

ガリアは、今も定期的にその手の連中を排除しているようです。

同じ無能なら、自分の派閥に属する貴族に爵位なり領地を与えた方が権力基盤は強化されますしね。

「（それなら納得できるか）」

先ほどのタバサの件といい、シヨゼフ王は旧オルレアン公派が絶滅しないと枕を高くして眠れないのかもしれませんがね。

「それと、先の戦いで捕らえられたクロムウエルですが」

なぜかあの無謀な戦いに付いて来た、神聖アルビオン共和国で神聖皇帝を自称していたクロムウエルですが、彼は神聖皇帝に相応しくないほど素直に色々と喋ってくれるようです。

何しろこの時代には、取り調べの可視化とか、弁護士を呼べとか、
黙秘権とか存在しませんからね。

少し黙れば拷問もありますし、魔法アカデミーでは心地よく全て
を話したくなる魔法や薬物なども存在するでしょうし。

そんなギアスに似た禁呪を使っても、クロムウエルが死ねば外部
には漏れません。

敵国に捕まった指導者の最後など、哀れなものです。

むしろ、刑死した方が幸せかもしれませぬ。

「彼の持っていた指輪は、鑑定の結果『アンドバリの指輪』である
事が判明しました」

どこかで聞いたような、聞かないような名前のアイテムですが。

これは、ラグドリアン湖の水の精霊が守る秘宝で、どうやらクロ
ムウエルの手によって盗み出されていたようです。

「トリステインの豊穡と水の恵みを司る精霊から、その秘宝を奪つ
たのですか。聞きだせる情報を全て引き出したら、処刑ですね」

「虚無を名乗っていた人物が、実は魔法が使えないでマジックアイ
テムで誤魔化していた。当然、全て公にして盛大に発表いたします」

虚無の担い手として、レコン・キスタに参加している人達から絶
大な支持を受けていた人物が捕まり、しかもその人物の虚無が嘘で
あった。

公にされれば、彼らは組織としての力を大きく失いかねませぬ。

多分、トップを失ったアルビオンは主導権争いで分裂し、そこをトリステインが調略を行う。

大勝利を収めたとはいえ、いまだに兵力的には不利にあるトリステインが犠牲を少なくしてアルビオンを取るためには、こう言った戦法も必要でしょう。

「それで、アンドバリの指輪はどうなるのですか？」

「当然、水の精霊にお返しします。現在、ラグドリアン湖では不可解な水位の上昇が続いているそうですが。もしかすると、その原因はアンドバリの指輪にあるかもしれせんし」

「また奪われると厄介ですけどね」

「事前に、水の精霊との交渉役を務める貴族を連絡役として派遣しましたが、『今度は自分が直接に持つので、二度と奪われる事は無い』とのお話でした」

以前は、自身を祭る祭壇にこれを置きっぱなしにしていたので、間抜けにも指輪を奪われてしまったらしいのですが。

まさか、水の精霊が同じミスを二度も起こさないであろうとのアンリエッタ女王からのお話でした。

「あとは、王国軍と、諸侯軍と、亡命したアルビオン貴族や兵士達を再編成して攻め込むだけです」

「それは、ようございませしたな」

そろそろ切り上げて帰りたいと願う私でしたが、アンリエッタ女王は話を止めませんでした。

「他にも援軍としてゲルマニアから軍を得ますが、一つ困った問題が発生しまして」

「領地ですか？」

「ええ」

ゲルマニアとてお人好しではないので、無料で援軍をくれるはずもありません。

戦後に、その戦果に応じて領土の分割を求めてくるはずですが、そんな話と私に何の関係があるのでしょうか？

その手の問題は、外交官にでも任せれば済む問題ですし。

「従って、財貨で解決する事となるのですが……」

「（また俺が作るのかよ……）」

再びアンリエッタ女王から高価な物品の錬金を頼まれる私ですが、さすがにその顔には青筋を走らせてしまうのでした。

ただ私本人は気が付かなくて、後でギーシュや才人に指摘されたのですが。

「アンリエッタ様から直々の依頼。実に名誉な事で……」

「じゃあ、替わってやるからギーシュが作れば？」

「そんなの無理に決まっているじゃないか」

王城での謁見を終えて魔法学院へと戻った私ですが、その様子は一変していました。

夏休みも終わり後期の授業が始まったのですが、国内は戦時体制のままでした。

男子生徒達は、軍に志願すべく即席の士官教育を受けるために学院の外で王城から派遣されて来た軍の士官達を教官に訓練を受けていますし。

女子生徒達も、怪我の治療方法や後方での支援活動を行うための教育を受けています。

普通の平民が戦争が怖いと言って逃げてても構わないが、貴族が戦争を怖がってはいけないわけですね。

昔に、そんな話を聞いたような気がします。

トリステインは、傭兵を雇い、諸侯軍の動員と訓練を指示し、元アルビオン貴族や軍人の部隊を再編成し、父から鹵獲後に修理・改良された船を借りたり購入して、来る将来に予定されているアルビオン侵攻に備えています。

多分、同盟相手のゲルマニアも軍を用意しているでしょうから、かなり大規模な出兵になる予定です。

「そして、その種銭の一部を俺が作るか……」

水晶柱を錬金しながら、私は再び愚痴ります。

しかし、この水晶の柱はお金になりますね。

特にロマリアなどがお得意様なんですけど、あそこの坊主達は何ほど虚栄の産物に金をかけるのでしょうか？

宗教施設に置く過去の聖人達の像を全て水晶製にしたいらしく、とにかく作れるだけ作って欲しいと注文が入っているのです。

一本十万エキューの水晶柱なんですけどね。

値段の分はオマケして全長五メートルほどあるのですが、ロマリアには随分と奮発して飾りたい偉人・聖人が沢山いるようです。

しかし、どうりで坊主ばかり肥えていて貧民が多いわけです。

同じ国家予算を使う公共工事でも、せめて治水とか道路建設でもすれば良いのですが、あの連中は始祖ブリミルから続く権威によって生きていますからね。

豪華な宗教設備の方が大切なのでしょう。

前世では普通に無宗教だった私には、永遠に理解できない考えなのでしょうが。

「遂に完成したわ。これなら、売り物になるはず……」

そして私の隣では、ミス・ロングビルが自作した真珠のネックレスの完成度に満足しているようでした。

彼女は懸命に努力して、やっとかなり高品質な真珠の錬金に成功したようです。

「ミスタ・グラモン。これならどうです？」

「ええと……」

私は、一通り真珠のネックレスをチェックしてから答えます。

「あとで微細な手直しをしますが、これで大丈夫ですね」

「あなたのように、真丸にするのは難しいですね」

それでも、売り物になる真珠を作れるようになったミス・ロングビルは安堵しているようでした。

なぜなら、彼女も先ほどその人生が激変してしまったからです。

「マチルダ様、おめでとうございます」

「マチルダ様は、さすがは土のトライアングルメイジですな」

実は、彼女は自分の本名を周囲に公表していました。

『土くれのフーケ』だった彼女を庇って雇っていた父の命令で彼女は自身の正体を明かし、父を後ろ盾にアンリエッタ女王と交渉を行ったのです。

アルビオン侵攻の際には案内役となるのを条件に、戦後にサウスゴードの領地と爵位を復活させるようにと条件を出したのです。

結果、それは見事に受け入れられていました。

ただし条件はありません。

今代限りは、マチルダ自身が爵位を継ぐものとするが、次代では男子に継がせること。

この条件により、彼女は次兄のセザール二十四歳か、三男ジョルジュ二十二歳を婿に入れる事になります。

父も、無料では後ろ盾にはならないのです。

『どちらでも良いのですが……』

そう言いながらも、彼女は次兄のセザールを選んでいました。

この時代で、姉さん女房というのは大変そうですね。

セザールなら、辛うじて一つ年上です。

そんな選び方で良いのかと私は思うのですが、政略結婚というのはそういうものなかもしれません。

それに、今の彼女には急遽お金が必要となっていたので、それどころではありませんでしたし。

サウスゴードの家名復活を聞き付けて、先のモード大公肅清の際に国外に逃げたり、他家に士官してレコン・キスタとの内戦で国外に逃げていたり、先の戦いで捕虜になっていたりと。

様々な立場の元家臣やその家族などが、ワラワラと集まって来たからです。

他にも、上手く再就職できないかと考えている人間も多いようでした。

実は、そんなアルビオン貴族は、他にもいくつが存在しています。

先に亡命者に乗せて到着したイーグル号には、幼い子供や未亡人などが多数乗っていて、トリステインの若い領地を持っていない貴族などを再婚相手や婚約者に勧めて諸侯軍の準備も任せる。

いかにも貴族らしい、血を使ったトリステインとアルビオンの結合とでも呼んだ方がいい融合策ですね。

そんなわけで、ミス・ロングビル改めマチルダ・オブ・サウスゴードさん（伯爵予定）は、この集まった人達の中から諸侯軍の編成は婚約者で次兄のセザールに任せ、自身は金を稼ぐようになっていました。

それと、家臣達の中に土系統のメイジもいたので、彼らもうちの工房で働いています。

人間、お金が無いと何も出来ませんしね。

こうなると、サウスゴード家が土系統の家系だったのは幸いだったのかもしれませんが。

グラモン家との婚姻にも、相性が良いですし。

「私は、アルビオンに仕送りもしないといけません」

「若くして、苦勞が滲み出ていますね」

「ミスタ・グラモンほどではないですけどね」

私って、周囲からどれほど不幸だと思われるのでしょうか？
多分あの女王様が原因でしょうが、いくら綺麗でも不幸を呼ぶ女は嫌ですね。

「おかしいな？ この歳で伯爵で、婚約者もいて、名声も得ている。でも、なぜか不幸な気がする」

「ダーリン、それなら亡命が一番よ。ゲルマニアは、いつでもあなたを歓迎するわよ」

そこに、本来であれば臨時教練でないはずのキュルケが現れて

私の腕にしがみ付いてきます。

やはり、その胸の感触は素晴らしいですね。

私も普通に男ですし、家臣達も羨ましそうに見えています。

「キュルケは、看護教練は受けられないのか？」

「だって、私はゲルマニアの貴族だし。父は、今回の出兵には関わっていないのよ」

同じく、キュルケの隣にはタバサの姿もありました。

この前の一件以降、彼女と話す機会が減っていたのですが、今の彼女が私の事をどう考えているのか？

なかなか表情に出さないので、いまいち良くわからないのです。

「だから、これからはいつも一緒にいられるわよ。こんなに扱き使われて、ティーボも可哀想ね。歴史だけ一流の貧乏なトリステイン貴族だったばかりに……」

「うわっ！そこは怒るべきところだけど、反論できない！」

「アルビオンを併合しても……。貧乏なんだろうな……」

今までならムキになって怒りそうなギーシュも、さすがに現実を知ったらしく何も反論しませんでした。

敵軍の総大将を捕らえたのに、彼は結局領地も貰えずに準男爵になっただけでしたし。

既に、アンリエッタ女王に対する過剰な感情は持っていないようでした。

私などは、最初から持っていないませんでしたけど。

「だから、私は自由にティーボと会えるのよ」

「そうなんだ……」

「それで、今夜なんだけど……」

私の耳に口を近付けてそっと囁くキュルケに、私は体の奥が熱くなってくるような感覚を覚えます。

彼女の二つ名は、『微熱』です。

確かに、その二つ名に相応しい、男ならば理性が飛んでしまいうな彼女の誘惑でした。

「へえ……。私がない間に、人の婚約者を口説くわけ」

ですが、次の瞬間には今度は背筋に凍り付くような寒さを感じる事になります。

臨時教練を終えたルイズが、キュルケに刺すような視線を送っていたからです。

「その二人が本当に好き合っているのなら、私如きの誘惑なんて無駄だから気にしないで」

「どういう意味？」

「そのままの意味よ。親同士が婚約を決めたのはいいけど、あなた達、キスクらいはした事あるのかしら？」

キュルケの質問に、ルイズは思わず一歩後ずさってしまいます。

確かに彼女の言う通りに、前の婚約者が死んで急遽家同士を繋げるために新たに婚約者同士となった二人なので、その辺の気持ちの整理などが付いていない部分がありました。

それに、ルイズとキスですか。

そういえば無いですし、まだハードルが高そうですね。

「そんな事を、あなたに話す義理はないわよ！」

「まあ、それはそうよね。唯一のキスの体験は、コントラクト・サーヴァントくらいでしょうし」

「うっ！」

キュルケの指摘にルイズは更に一步後ろに下がり、同時に全員の視線がそのコントラクト・サーヴァントの相手である才人へと向かいます。

どうせ、碌な話じゃないと紫電改造の整備をしていた彼は、全員が自分を見ている事に驚いていました。

「何だよ。急に？」

「あんなのはノーカウントよ！ 無効よ無効！」

「何か良く事情は知らないけど、あんなのとか言われているし……」

「ひでえ娘っ子だよな。相棒」

「本当だぜ」

いきなり異世界に呼び出された拳句に『あんなの』扱いでは、確かに才人は報われないかもしれません。

ただ、美少女とキスを出来たのだから悪くはないと考えた方が、健全な青少年としては正解かもしれません。

才人は、近くに立てかけてあったデルフリンガーに愚痴っていました。

「キスくらい、これから毎日するわよ！」

「本当かしら？ ティーボ、私となら毎日情熱的な夜を過ごせるわよ」

それは男としては非常に魅力的な提案ではありますが、ふとルイズの顔を見ると既に彼女は般若のような表情になっています。

おかしな事を言っただけで爆破されないようにするのが、安全に生きるための手段でしょう。

「邪魔が入ったわね。 ティーボ、私は毎晩待っているからね」

「永遠に、一人で待ってればいいわ！」

タバサと元に立ち去るキュルケにルイズは捨て台詞を吐きますが、私には彼女が何を考えて誘惑しているのか良くわからなくなってしまうのでした。

「キュルケの誘惑は、拙いけどあれに抗うのは難しいな」

「そうだなあ。一晩だけで終わりとか無さそうだしな」

「下手に妊娠でもさせたら、ツエルプストー辺境伯が怒鳴り込んで来たりして」

「そうだったら、ルイズの親父さんに阻止して貰えば？」

「お前ら……。人事だと思って……」

その日の晩。

私は、自分のセカンドハウスに男子生徒の友人達を案内して夕食を共にしていました。

そして、私は昼間の出来事を話すのですが、レイナル。ギムリ、ギーシュ、マリコルヌの回答は上のような感じでまるで役に立っていませんでした。

「誘惑に乗らないしか手が無いし」

「それを、一番誘惑に弱そうなお前が言うのか？」

「俺が？俺より、ギーシュの方が弱そうだな」

「それは言えているかもな」

「失礼ではないか。サイトにティーボも」

とはいえ、綺麗な女性を見ればすぐに口説き始め。

それも、同時進行可能なのがギーシュという男です。

なので、才人の考えにはレイナル達も納得したような顔をしていました。

「しかし、情けない話だね」

「何がだ？」

「ルイズとの関係だよ。そろそろ、キスくらいしたらどうかね？
婚約者同士なわけだし」

「そう言われるとな」

今までは色々な事があり過ぎた上に、私自身も結構忙しかった理由でまだルイズとはまだそんな事をしていませんでした。

世間のイケメン君達は時間がなくてもそういう事はしてそうですが、何しろ私ですからね。

ですが、それは私だけでなくも他の連中も同じはずなのです。
特に自称プレイボーイのギーシュは置いといて、残りの才人を含む残り四名。

せめて、そういう経験をしてから人の事を言うて欲しいものです。

「じゃあ聞くが、この中でキスをした経験がある者」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「俺は……」

「コントラクト・サーヴァントは無しに決まっている」

私の質問に、手を挙げた者は一人もいませんでした。

最初は才人が手を挙げたのですが、コントラクト・サーヴァントがありなら全員が拳手可能なので、それを入れるのは反則です。

それに、ルイズが才人を呼び出したのは特殊な例であり、普通ならば動物や幻獣の類がキスの相手なのですから。

常識的な思考を持つ人間ならば、ノーカウントにしたいのが人情というものでしょう。

というか、世の中にはモット伯爵のような貴族もいるのに、本当に情けない限りです。

ちなみに、今世では私も経験ありませんけどね！

「ギーシュが、経験が無いとはな……」

「ギーシュは、口説く時点で終わるからな」

その辺の事情に詳しいギムリが、茶々を入れてきます。

「薔薇の花には、まず近付くのが難しい。次に、それに直接手を触れ。最後に、その花弁に貯まった雫を飲むわけだが……」

「文学的な表現にしているが、つまり一度も成功した事がないと？」

「失敬な。週末の遠出くらいは」

それは、私もしていましたけどね。

二人きりでなくて、大人数という欠点はありましたけど。

「お前ら。貴族貴族言う割りには、意外と寂しい青春を送っているんだな」

「才人に言われたくないわ」

結局その日の夕食会でわかった事は、みんな言うほどの恋愛経験が無い事と、全員が恋人とのキスの経験も無いという寂しい事実でした。

私は……。

前世では、経験はあるんですけどね。

ノーカウントでしょうが……。

「僕は、後方の補給部隊に配属されるらしい」

「レイナールらしいな。ギムリは？」

「俺とマリコル又は空軍だな。配属先は、ティーボが直したレキシントンだ」

「僕は、サラトガだね。この従軍で身も心も鍛え直して、ミス・サヴァンに相応しい男になるんだ」

「だから！ 俺の母親を口説くな！」

日々戦争の準備に忙しいトリスティンでは、魔法学院の男子生徒達への臨時の士官教育も進み、次々と配属先も決まっているようで

した。

レイナール達は着任先で訓練を行うべく、私達に別れの挨拶に来ました。

この学徒出陣のような事実には、私は誰も知り合いが戦死しない事を祈ります。

「ところで、ギーシュはどこに配属なんだ？」

「僕は、前の時と同じさ。ティーボの護衛に徹せよとの、父上からの命令だ」

重要な資金源である私に何かがあると困るので、父はギーシュに護衛役を命じたようです。

他にも、父が選んだ凄腕の家臣達が私に付けられ、ギーシュは名目上は彼らの指揮官という事になっています。

「でも、何で俺がアルビオンに？」

「仕方ないよ。女王陛下直々の命令だし」

私の錬金は、材料があれば他に特殊な機材などとも必要ありません。そこで、父は先日にも鹵獲した船の中で、中型の中古輸送船に臨時の錬金工房を移動させ、アルビオンへと出撃させる計画を立てていました。

今回の戦争では、重要な切り札の一つでもあるルイズを出兵させたいし、その使い魔である才人も竜の羽衣と共に出陣させたい。

だが、それにヴァリエール公爵は反対するであろうから、婚約者と一緒でまた後方支援任務ならば、アルビオンに行ってくれるであ

るうと。

ついでに、アルビオンの商人に金属や宝石が売れるかもしれないし、最悪でもゲルマニア軍もいるので、その出入り商人達もこぞって買う可能性も高いと。

事実、購買力ならばゲルマニアの方が上ですからね。

それに、生き馬の目を抜く商人の世界では、戦地などという言葉には何の意味も無いでしょうし。

そんなわけで、レイナール達を送り出した翌日から魔法学院の男子生徒は、私とギーシュだけになっていました。

「僕の時代が、これから始まるのさ」

「のん気だなあ……。俺は、ただ平穏な日々を望むよ」

「数カ月後には戦争なのにかい？」

「そこにツツコミを入れないように」

ですが、私の願いも虚しく。

これからも、次々と様々なアクシデントに見舞われる事となるのでした。

三十八話

「ティーボ様、どちらに行かれるので？」

「ルイズの所だよ。婚約者同士での、コミュニケーションというやつだな」

「それは、宜しゅうございますな。将来はご夫婦になられるのですから、相互理解は必要だと思いますし」

魔法学院から、ほとんどの男子生徒達が去ってから数日後。

戦時体制という事で夜まで錬金を行っていた私は、ルイズに会うべくお土産のワインを持って女子寮の部屋へと向かいます。

ただ、この戦時体制というもの曲者でした。

なぜなら、私の場合は平時も戦時もなく錬金で作った物売って金を稼ぐだけなのですから。

しかも、その稼ぎのかなりの部分は王室に持って行かれています。私は、父に稼ぎの半分を渡す事に不満を感じた事は一度もありませんでした。

なぜなら、その見返りとして、金を稼ぐ貴族が被るであろう面倒の全てをシャットアウトして貰っていたからです。

ですが、王室が私に何をしてくれたというのでしょうか？

それなりの領地と爵位や勲章は貰いましたが、あとは戦後に兄達の領地や鉱山の権利などを寄越すという話になっていて、それは所謂『取らぬ狸の皮算用』というやつであったからです。

万端に準備はしているのですが、アルビオン奪還に100%成功すると考えるのは傲慢というものでしょうし。

「今度は、先年に亡くなった先代王の肖像画かね？　せめて、美女のヌード画でもくれればいいのに」

「ティーボ様も、案外毒舌ですな……」

江戸時代の大商人達は、大名に貸した借金を大名家の家紋入りの道具や脇差や着る物などを下賜されて誤魔化されたそうです。

名誉で誤魔化したのでしようが、どこの世界でも偉い人の考える事は同じようでした。

ちなみに、当時の商人達は金を貸しても返さないブラック大名リストを作成していたようですが、そのトップが熊本の細川家だったそうです。

後に子孫が総理大臣になって世界に恥を曝しましたが、歴史の長い名家とはそういう存在なのかもしれません。

多分、ハルケギニアの商人達が同じリストを作っても、一番のブラックはトリスティン王家なのでしょう。

ロマリアのような利権も無く、ただ小国で貧乏ですから。

「私も、ティーボ様の筆頭家臣になる前は貧乏下級貴族でしたからね。王城にいるような方々は、あまり好きではありませんでしたよ」

「ありませんでした？」

「訂正します。今も嫌いです」

父の家臣の一員であった時には何の後ろ盾も無い小物貴族の子供として、今は成り上がった私の筆頭家臣として、それぞれに嫌な部分を沢山見ているのでしよう。

「でも、急に友人が増えただろう？」

「ええ。この前、所用でトリスタニアに行った時に、子供の頃によくよつと話しただけの奴に親友扱いされました」

他にも、『俺にも、職を紹介して欲しい』とか、『懇意にしている商人に少し安くアルミを卸して欲しい』とか。

大した所用でもなかったのに、沢山の下級貴族達に押しかけられて難儀したそうです。

「俺もあつたな。子供の頃に面倒を見ていたという貴族に会ったんだが、まるで記憶に無くてなあ……」

「それ、一度会っただけだと思いますけど……」

鍊金のために色々と不精をしている私の筆頭家臣であるアシルは、表面上の身分はグラモン家の分家の家臣と、普通に考えれば誰が見ても下級貴族です。

ですが、その権限と財力は、下手な領地持ちの貴族などと比べるのも可哀想な状態です。

念のために言っておきますが、可哀想なのは勿論領地持ちの貴族の方です。

「噂によると、王室の宮廷雀達の中には、旦那様とヴァリエール公爵に先に手を打たれて、それを恨みに思っている人もいるとかで」

「恨み？」

それは、ワルド子爵の死後に、私とルイズをとつとと婚約させてしまった件のようでした。

二家が組むために、誰にも相談無く婚約を決めてしまったと。ですが、どこの世に大物貴族家とはいえ、五男と三女の結婚をわざわざ他の貴族達や王室に相談などするでしょうか？

完全に後知恵の、言いがかりに等しい文句だと思います。

「マザリーニ枢機卿も、『アルブレヒト3世との婚約が破棄になったのは仕方が無かったが、せめてその頃までティーボ殿がフリーであつたらな……』と言っていたとか」

家柄はソコソコだが、所詮は妾腹で立場が弱く、鍊金しかしないで金を稼ぐ女王の婿。

確かに、色々と都合の良い存在ではありませんね。

「アンリエッタ女王様も、見た目は麗しいお方ですしね」

「嫌だよ。堅苦しくて息が詰まるし」

それに、彼女が普通の貴族の娘で、将来の婚約者として紹介されたのなら良かったのですが、既に女王となつてしまった彼女の婿は死んでもゴメンでした。

しかも、私は彼女を少しオツムの弱い可哀想な子だと思っているので、そんな女とは結婚したくなかったです。

これも不敬罪なので、絶対に内緒ですけど。

「こう、スタイルの方もなかなかで」

「アシルも、意外と好きだよなあ……。愛人でも困ってるの？」

「しませんよ。嫁に殺されますし」

それもあるのですが、今のアシルが一番恐れてるのは他人の嫉妬なのだと思います。

アシルは私のために身を削って懸命に努力をして今の地位にいるのですが、そんな事は私や彼を非難しようと考えている連中には関係の無い事なのですから。

おかしな嫉妬から来る讒訴を信じた私がアシルを罷免する可能性や、逆にアシルの方向から私を非難して利益を得ようとする輩の存在とか。

こんな事を心配するようになったなんて、思えば本当に遠くに来たものです。

「そういうのは、バレないようにしないな。まだ結婚もしていない俺が言うのも何だけど。それと、アシル」

「はい、何です？」

「ふと考えたんだ。俺のこれから稼ぐ金額と、あの峰麗しい女王様の婿になったとして、色々といった回数を考えてだな」

「はあ……」

アシルは、私が下ネタを話している事に気が付きます。

「チクトンネ街の高級娼館にも、そんなに高い女はいないはずなんだよ」

王族という立場にありながら、人の金を当てにする女王様へのこれは一種の皮肉でもありました。

「思いつきり不敬罪ですけど、他に聞いている人もいないからいいですかね。それに、なぜかしら賛同できますし」

少しアシルと話し込んでしまいましたが、私はお土産のワインを持つと急いで女子寮へと向かいます。

「タルブ産のワインは、暫くは駄目だからな。ここも結構有名な産地だし、大丈夫だろう」

そんな事を考えながら女子寮の廊下を歩く私でしたが、その目の前に一匹のサラマンダーが現れます。

「お前……。確か、キュルケの使い魔のフレイムだよな？」

「……………」

「と聞いて、答えてくれるわけもなし……………って！ おいつ！」

私は、フレイムのその見かけ以上のパワーでマントを引き摺られ、半ば強引にキュルケの部屋へと連行されてしまうのでした。

「フレイム、ご苦労様。お肉を用意したから食べていいわよ」

「キュルケ、いきなり何をするんだ。俺は、ルイズの部屋に行こうと思っていたのに……」

「だから、私はあえてそれを邪魔したのよ」

フレイムよってキュルケの部屋に放り込まれた私は、その薄暗い室内にネグリジェ姿のキュルケを発見しました。

しかも、彼女はノーブラです。

というか、この世界にブラジャーは存在しないのですが、おかげでこの薄暗い状態でも透けて見えていました。

何が透けていたのかは言うまでも無いと思うのですが、これは後で時間があったら、ブラジャーを普及させる努力をした方が良いでしょうかね？

「キュルケ、ルイズへの宛て付けなら止めてくれ」

前世から女心が良くわからない私なので、キュルケのこれまでの行動を見ると、彼女はライバルであるルイズを怒らせるためにわざとこんな事をしているのでは？ などと考えてしまうのです。

冷静に自分を分析して、私が女性にモテる要素といえば錬金で稼いでいる部分しか思い付かず、それだけで寄って来る女性には内心では嫌悪していたのかもしれない。

そしてキュルケですが、彼女は相手の男に家柄や財産などを求め

るようなタイプには見えず、となると私とルイズの邪魔をするために誘惑でもしているのかな？ などと考えてしまうのです。

「意地悪ねえ。ティーボは」

キュルケは、私の背中に手を回しながらその豊かな胸を押し付けて来ます。

その胸の感覚に私の理性は飛びそうになりましたが、ここはぐつと我慢をして彼女の顔を見ます。

彼女は、私を上目遣いのいかにもな目線で見ていました。

少し潤んだ瞳が、私の心拍数と体温を上げます。

それと、どうして彼女が抱き付くのを拒まなかったのだなど聞かないでください。

普通の男に、これを拒否するのは難しいのですから。

「意地悪というか、俺が素で女性にモテるとは思わん」

「あなたは、自分を過小評価し過ぎなのよ。だって、微熱たる私がここまで燃え上がるのだから」

目を潤ませながら私を見上げる彼女の視線に、心臓の鼓動が早まり、体の奥から熱くなってくる感覚を感じます。

また理性崩壊の危機ですが、そんな私の頭の中に突然天使と悪魔が現れます。

どんな原理か知りませんが、心の中に私の顔をした天使と悪魔が現れて言い争いを始めたのです。

『おい！ ティーボ！ 据え膳食わぬは男の恥』って言葉を知っているか？ お前が強引に襲っわけじゃなくて、向こうの意思なんだけ！ やっちまえよ！』

『この世の若い綺麗な女性は、何よりも尊い存在です。彼女の願いを無下にはいけません』

「お前ら、争ってないじゃないか……」

「ティーボ、急にどうしたの？」

「ああ、何でもない」

私の本能は、既にやってしまえで決まっしてしまいそうになり、更にその隙を突かれて、私はキュルケにベッドに押し倒されてしまいました。

女性に押し倒される男というのは、自分ではかなり微妙です。

「あのギーシュの弟なんて信じられないわね。でも、そんなウブな所も好きよ。私が独占したくなっちゃうもの」

前世と合わせると、既に四十五歳を超えている人に言う言葉ではないと思うのですが、そんな事情は知らないキュルケはベッドに押し倒された私に唇を合わせようとしています。

あと少し。

本当に、あと1 سانت以下というところまでキュルケの唇が接近

した時。

突如、部屋の入り口のドアが大爆発を起こしました。

「なっ!」

「ちっ! 私のロックを吹き飛ばすなんて!」

「やっぱり、さっき秘かにかけていたんだな」

「だって、ダーリンとの二人きりの夜を邪魔されたくなかったんだもの」

爆発の後に発生した煙が晴れると、そこには杖を持ち、背後から何かドス黒いオーラを纏わせたルイズが立っていました。

「どうやら、爆発の魔法でロックのかかったドアを強引に吹き飛ばしたようです。」

しかし、トライアングルメイジでも上位の魔力を持つキュルケのロックを爆発で吹き飛ばすなんて、ルイズは一体どれほどの魔力を秘めているのでしょうか?

「ティーボ、帰るわよ」

「はいっ!」

いきなりの強硬手段に出たルイズに恐怖した私は、素早くキュルケを押し退けてベッドから立ち上がると、完全に直立不動状態になりました。

今までに女性に恐怖した事など無かったのですが、私の本能が今

のルイズには逆らうなと告げています。

「ちょっと！ いきなり人の部屋のドアを吹き飛ばすなんてどういう事なの！」

突然、自室のドアを吹き飛ばされたシヨックから立ち直ったキユルケが、ルイズに猛然と抗議を行います。

ヴァリエール家とツエルプストー家。

古来より対立関係にある一族の二人は、どちらもお互いに引けないよう硬直する私を挟んでにらみ合いを続けていました。

「ロツクの強制排除は、校則違反のはずよ。しかも、爆破するなんて非常識にもほどがあるわ！」

「いいわよ。オールド・オスマンに言いつけても」

ルイズのしれっとした態度に、キユルケは唇の端を噛みます。

現在のトリステインの状況を考えるに、私を誘惑しようとしたゲルマニアの生徒の訴えなど、まずもみ消されるでしょうからね。

「随分と悪辣ね。ヴァリエール」

「人の婚約者を略奪しようとする雌犬ほどではないわ。ドアの件ならば、御免あそばせ。これで高価なドアに取り替えてちょうだい」

「ちょっと！ 逃げる気なの！」

「私は、他に用事ないし」

ルイズは、持っていた金貨の入った袋をキュルケに押し付けると、彼女の抗議を無視して、そのまま私を腕を引っ張りながら部屋を出ていきます。

ようやくキュルケの部屋を脱した私ですが、ルイズの部屋へと移動する間の彼女の無言状態に、後で何を言われるのやらと恐怖を感じていました。

いくら言い繕っても、これでは浮気と疑われても仕方がないですし。

「あのさ……、ルイズ」

勇気を振り絞ってルイズに声をかけると、彼女は仏頂面のまま振り返ります。

「わかってるわ。ティーボが、自分からキュルケに部屋に入るわけがないし」

私は、自分がルイズに信用されている事に安心しましたが、やはり嫌な出来事ではあったようで、その表情は不安で一杯のようでした。

「私達は、親同士が急に決めた婚約者同士だけど……。私は、ティーボの事が好きよ。初めて会った時に、私の髪の色に合わせて水晶でバラ細工を作ってくれた。爆発の魔法しか使えないで落ち込んでいる時にも慰めてくれたし、爆発魔法の使い方をアドバイスもしてくれた。それに、ワルド子爵が裏切った時にも、自分が大怪我をしているのに私の身を案じてくれて……」

ルイズの口から、次々と私の良い部分が出てきます。

私って、実は意外とルイズに評価されていたんですね。

そして、その話をするルイズの目からは少し涙が出ていました。親同士が決めたという理由だけで、婚約者と振る舞っているのだと私に誤解されていないのかと言う事と。

もし本当にキュルケと浮気でもされたらと、不安だったのでしよう。

「俺も悪かったんだ。俺も急に父から言われたから、なかなか気持ちの整理が付かなくてな」

「ティーボ……」

「でも、数年前にラグドリアン湖で行われた園遊会の時。俺が水晶細工を作ったのは、可愛い子だからプレゼントしようって純粹に思ったからだし、今もそう思っている。それに、ルイズは魔法が使えなかった時でも一生懸命に努力していたじゃないか。俺は、そんなルイズが好きだよ」

自分で言っていて、顔から火が出そうな台詞ですね。

しかし、このような女性を本気にさせる様々な台詞で口説く世間のイケメン達。

彼らは、本当に凄いと感じてしまう私でした。

ただし、その中にギーシュは入っていません。

彼にさして成功例が無い事は先日確認しましたし、あいつは意外とボキャブラリーが少ないですからね。

「しまったな……。余計な時間を喰ったらしい。もう就寝の時間だ」

「また明日も来てくれるわよね？」

続けるように上目遣いで私を見るルイズに、私は再び心臓をバクバクさせていました。

やはり、男は可愛い女の子が好きなのです。

「勿論だとも」

私達は、別れの挨拶を交わしながら極自然とキスをしながら別れます。

この前に散々討論したキスの件ですが、思ったよりも簡単に出来ましたね。

その前に色々あったからなのでしょうが、となると私がみんなを一步リードしたようですな。

何とも、しょぼい優越感ですけど。

「あつ！ キュルケの部屋にワイン忘れた！」

自分の部屋に戻る途中でしようもない事を思い出す私は、やはりどこかセコイ部分があるようでした。

「ティーボ様、今日もルイズ様の元に？」

「そうだよ」

「それは、宜しゅうございますな。仲良き事は美しいですし」

次の日の夜、また私は女子寮にあるルイズの部屋へと向かっていました。

昨日渡し損ねたのと同じ産地のワインを片手に、彼女の部屋へと歩いていると再びサラマンダーのフレイムが私を待ち構えます。

というか、ルイズの部屋に行くにはキュルケの部屋の前を通らなといけないで、簡単に待ち伏せされてしまうのです。

「フレイム、見逃してくれよ」

自分の使い魔でもないフレイムに私の話を通じるのかは不安でしたが、彼は気のせいかもしれないが、『ごめんね』と言った表情を一瞬だけ見せてから私を再び連れ去ろうとします。

「使い魔は、ご主人様には逆らえないか……」

迫るフレイムから逃れるべく後ずさる私でしたが、そこに救世主が現れます。

「サイト！」

「俺は、確かにルイズの使い魔だよ。でも、何でこんな夜中に……」

「そんな火トカゲ！ 真つ二つにしていまいなさい！」

「それは、同じ使い魔同士の仁義としてできねえ！」

フレイムの後方からルイズと共に現れた才人は私とフレイムの間に割って入り、デルフリンガーを構えます。

ですが、彼にフレイムを斬る気などないのでしょう。

私は使い魔ではないのでわかりませんが、二人？はたまに学院の中庭で話をしながら日向ぼっこしていますし。

同じ使い魔同士、何か通じる物があるようです。

「相棒。俺っちに、サラマンダーの炎は吸収できないぜ」

「あくまでも、近付けさせないためだ」

「たまには、何かを斬って欲しいものだね」

デルフリンガーと話をしながらフレイムとの対峙を続ける才人でしたが、そこに新たな乱入者が現れます。

正確に言うと、いきなり私の頭の周囲に青白い雲が発生したので

「スリープ・クラウド（眠りの雲）か！」

もう少し気が付くのが早ければ抵抗可能だったのですが、不意を突かれたために私はその場に意識を失って倒れてしまいました。

「ティーボ！」

「ごめんね、ダーリン。ツェルプストーの恋の情熱は、時に常識の鎖をも溶かしてしまうから」

スリープ・クラウドを喰らって倒れてしまったティーボの後ろから現れたのは、杖を持ったキュルケであった。

「ツエルプストーが、スリープ・クラウドを使うなんて」

「実はね。タバサに習ったのよ」

キュルケは、事情を説明しながらレビィーションをかけてティーボの体を浮かせる。

「そんな物騒な魔法を習わないでよ！」

「あのさ、キュルケ。さすがに、誘拐は良くないと思うんだけど……」

女子寮の廊下で、同級生の男子生徒にスリープ・クラウドをかけて意識を失わせてから連れ去る。

誰が見ても誘拐なので、才人は平成日本人の常識としてキュルケに苦言を呈していた。

「誘拐？ そんな事はしないわよ。ただ、二人きりになって介抱してあげて、その後に二人きりで夜を過ごすだけ」

「そんな羨ましい事を……。いや！ それは、ティーボが望んでいないと思うぞ！」

思わず男としての本音が出かかる才人であったが、後ろから異様な殺気を感じたので、すぐに危険を感じて気合を入れてデルフリンガーを構え直す。

「ここで議論するだけ時間の無駄よね。ティーボも最初は戸惑うと思うけど、私の恋の情熱ですぐに私を忘れられなくなると思うし。じゃあ、あとは宜しくね。フレイム」

キュルケは、レビテーションでティーボを浮かせたままその場を立ち去ろうとするが、それを見逃せるはずもないルイズは、すぐに才人に追跡命令をくだす。

だが、見た目以上に素早いフレイムが再び才人達の前に立って妨害を行っていた。

「たかが、火トガゲの分際でえー！ー！」

「貴重な生物なんだろう？」

「そんなの関係ないわよ！ 排除よ！ 排除！」

「でもなあ……」

「ティーボが連れ去られるじゃないのよ！」

同じ使い魔であるフレイムへの攻撃を躊躇する才人と、次第にその姿が小さくなっていくティーボ。

焦ったルイズは、才人にキュルケ早く追いかけるように命令する。

だが、その目の前には、脅しとはいえ炎を吹くフレイムの姿があった。

「なあ、どいて……は、くれないよなあ……」

お互いに主人には逆らえない環境にある使い魔二人は、お互いに決定打を出せないでいた。

「サイト！ あのツエルプストーは、それを見越してそのトカゲを置いていたのよ！ 早く追いなさい！」

「いや、そんな勝手に決め付けるのは良くないような……」

主人への義理と、同じ使い魔同士で戦いたくない気持ちと。時間だけが無駄に過ぎていき、キュルケはレビテーションで浮かせたティーボを連れて下の階に繋がる階段へと近付いていた。

もし、このまま下の階に降るせば、完全にティーボを見失ってしまわずであり、焦ったルイズは遂に強硬手段に出る。

「逃がすわけにはいかないわ！」

「待て！ ルイズ！ こんな限定された空間で！」

ルイズの意図に気が付いた才人は、フレイムを放置して彼女を止めに入るが、それは間に合わなかった。

彼女の錬金の魔法が、キュルケの前方に炸裂したからだ。

自分の系統が虚無であり、それに目覚めた彼女はコモン・マジックは使えるようになっていたが、やはり系統魔法は爆発してしまう。階段の手摺りにかけたルイズの錬金魔法で階段付近は大爆発を起こし、キュルケは気絶をしてレビテーションが切れたティーボは床に落下してその衝撃で目を覚ましてしまう。

「あれ？俺は……。何じゃこれは！」

そして発生した爆風は、廊下を伝わって見事にフレイムと才人と魔法を唱えたルイズにも伝わり、彼女達を煤だらけにしていた。

「もうちよつと考えて魔法を使えよ！」

「ご主人様に、その口の利き方は何よ！」

「大惨事じゃねえか！」

才人の言う通りに、女子寮の廊下は全ての装飾や備品などが崩壊して煤だらけになっていた。

更に、こんな騒ぎで誰も気が付かないわけもなく、廊下には多くの女子生徒達が部屋を出て集まっていた。

「ルイズ、あんた……」

「だって……。あのゲルマニアの雌犬が、ティーボを……」

慌てて部屋から飛び出して来たモンモランシーに、ルイズは今度は萎らしくなって答えるが、どう考えてもこのままで済むわけもなく、すぐにオスマン学院長から呼び出される事となるのであった。

「もう。ティーボったら、激し過ぎよお……」

「どんな夢を見ているのかは知らないけど……」

ルイズの爆発魔法で気絶したキュルケは、制服をボロボロにさせて顔を煤だらけにしながらも楽しそうな夢を見ているようであった。

「こんな夜中に、爆発騒ぎとはのお……」

夜中に急遽叩き起こされたオールド・オスマンは、寝巻き姿のまままで私達を顔を順番に眺めていました。

「して、その理由とは？」

「このゲルマニアの雌犬が、私のティーボを攫ったんです！　これは、正当防衛です！」

自分専用の席に座り、眼光鋭い目付きで呼び出された面子に順番に視線を送るオールド・オスマンに対して、ルイズは自分には非が無い事を宣言します。

ですが、あの廊下と階段の惨状を見るに、どう考えても無罪はありえないと思う私でした。

「サイト君は、どう思うかね？」

「ええと……。もう少し穏便な方法を取って欲しかったなと……。なあ、フレイム」

「きゅわーー」

同じく関係者として呼び出された才人は、隣にいるフレイムと一緒にオールド・オスマンの質問に答えます。

なお、フレイムがこの場にどうしているのかと言う、私の疑問に答えてくれる人はいなさそうでした。

フレイム自身に聞いても、彼は喋れないですし……。

「そうよねえ。いきなり人を魔法で吹き飛ばすなんて非常識よ」

「人の婚約者を、魔法で眠らせて誘拐するあんたには言われたくないわよ！」

「だからって、吹き飛ばす事は無いでしょう！ 怪我したらどうするのよ！」

「加減はしたわよ！」

確かに、どんな原理かは知りませんが、ルイズの爆発魔法で女子寮の廊下と階段は酷い事になっていましたが、人への被害は皆無でした。

制服が、少しボロボロになったくらいですかね？

スカートが破れて少しパンツの見えるルイズと、ブラウスの胸の部分がちょうど良い按配で破れてかなり良いアングルになっているキュルケと。

私は、厳格な表情を崩さないまま、暇さえあればそこに視線を送るオールド・オスマンに気が付いてしまいます。

「二人とも、落ち着けよ」

「あんたは、どちらの味方なのよ！」

「きゅわー」

「フレイム、女には引けない時があるのよ」

言い争いを続ける二人を才人とフレイムが止めに入りますが、このままでは埒があかないと考えたのか？

オールド・オスマンが、急ぎ結論を出します。

「おほんっ！ 双方共に、二度とこんな真似をしないように。今回は不問とする」

予想以上の温情的な判決でしたが、これにはある条件が付いていました。

「ただし、壊した場所の原状回復を命じる。ミスタ・グラモンならば余裕であろう？」

「えっ！ 何で俺が？」

晴天の霹靂とは、この事です。

今回の件で、一番の被害者は私のはずなのにです。

私は、思わず大きな声をあげてしまいました。

「そなたならば、すぐに直せるからの」

「まあ、大した手間じゃないですけどね……」

新しい物を作り出す錬金ではなくて、元の状態に戻す錬金の改良魔法なのでさして手間はかからないでしょう。多分、十分もかからないはずですよ。

「ワシは、合理的に物事を進めておるのでな」

「原因が原因だから、嫉妬ですよね？」

「……、そんなバカな……」

「どうして間が空くのです？」

女性二人による、私の取り合い。

私は思わず邪推してしまいましたが、それが凶星であった事に余計に驚いてしまいます。

「とにかくじゃ！　すぐに修復を行うのじゃ」

オールド・オスマンの命令により、私は夜中にまた一仕事をする羽目になってしまつたのだ。

「とほほ……。どうしてこんな事に……」

「ティーボ、ごめんなさい……」

私が女子寮の廊下に戻ってルイズが吹き飛ばした場所の修復を始めると、少し落ち着いたルイズが私に謝ってきました。

「ルイズは、俺がキュルケに奪われるのが嫌だったんだろう？ なら、このくらい大した事ないよ」

「あつ、あのね……。ティーボ」

「どうしたんだ？ ルイズ」

「今日はもう遅いから、私の部屋に泊まれば……」

ルイズが勇気を振り絞って言ったと思われる誘いに、私は天にも昇る気持ちになりました。

女の子に部屋に泊まりに来ないかと誘われる。

前世の頃から数ええると、軽く二十年ぶり以上の奇跡でした。

「そうだな。今日も遅いしな」

余裕で廊下と階段を直してから、私はわざとらしい口調で了承の返事をしますが、そこに再びキュルケが現れました。

「ご苦労様ね、ティーボ。終わったら、私の部屋にワインでも飲みに来ない？」

「いい加減にしつこいわよ！ ティーボは、私の部屋に泊まるのよ」

「ちよっ！ そんな大きな声で！」

私の不安は的中し、ルイズの叫び声を聞いた他の部屋の女子生徒達が私達を見て楽しそうに噂話を始めます。

「しまった……」

「もう遅いな。ルイズ」

まさか、魔法による聞き耳や探知をされている中で堂々と彼女の部屋に泊まるわけにもいかず、私はその日はすごすごと自分の部屋へと戻る事になります。

「なあ、俺達の主人ってどうなんだ？」

「きゆるうーー」

「だよなあ。でも、転職とか難しいしなあ……」

そして廊下の端では、才人とフレームが自分のご主人様について愚痴り続けるのでした。

幕間 1

「アシル様、今日の作業工程ですが……」

「いつも通りに頼む。Aプランではないぞ。Bプランの方だ」

「また日が暮れるまで錬金ですか。ティーボ様も、大変ですね……」

「トリステインは戦争準備で、色々お金がかかるからな。心苦しいのだが、御身の安全のために頑張っていただかないと。最近王城の宮廷雀達がうるさくてな。旦那様から、ティーボ様を取り上げようと動いているらしい」

「恥知らずな連中ですな」

「気持ちはわからなくもないな。そんなわけなので、ティーボ様の護衛は完璧に頼む」

「了解しました」

トリステインへと侵攻して来たレコン・キスタ軍を、我々を含むトリステイン軍が撃破してから一週間ほどが経ちました。

僅か一週間ですが、私達にとっては忙しい日々の連続で、これからもそれは続きます。

私の主人であるティーボ様が、王城側から僅かな期間で領地を増・転封されたので、また一から人員の配置などを行わないといけないからでした。

人員の方は予算も潤沢ではあるので増やせますし、私達はあくまでもグラモン分家の人間であるので、統治の方は本家と歩調を合わせて効率良く行う事が可能です。

いえ、寧ろティーボ様がいつでも独立可能であると周囲に見せるのは危険なのです。

ティーボ様は、あくまでもグラモン分家の当主。

陪臣で伯爵というのはなかなか例の無い事ですが、これだけは堅持しないとイケません。

ティーボ様には、なるべく他の煩わしい仕事に関わらないで済むようにしていただき、気持ち良く鍊金を行って貰う。

これが、グラモン分家筆頭家臣である、私アシル・ド・オリヴェイラの役割りなのですから。

『父上、私に新しい役が与えられたとかで？』

『そうだ、アシル。お前は、ティーボ様付きとなる。魔法や、グラモン家の一員として恥ずかしくように、軍人としての基本などをお教えるのだ』

当時二十歳を超えたばかりの私は、父からティーボ様付を命じられました。

私の実家であるオリヴェイラ家は、昔は小さいながらも領地を持つ貴族家であったそうですが、数百年もの昔に領地を失って没落し、

少々の流転の後にグラモン家に拾われて家臣化した家だそうです。

父は、グラモン家の家臣としてはそれなりに名の通った人物でした。

メイジとしての力量は代々ラインクラスがせいぜいなのですが、馬に関する知識と扱いにおいては一流で、馬を全速力で走らせながら馬上から魔法を唱える少数精鋭のメイジ部隊を任されていたり、家臣にも銃や弓の騎射や馬上槍などを行える者が多数いたり、戦場における突進力で旦那様の信用を得ている人物でした。

他にも、私達の一族は馬の繁殖と調教などの技術も持ち、馬具や馬車などの改良にも長けていたので、財政的に苦しい者が多いグラモン家家臣の中では、かなり裕福な部類に入っていました。

とはいえ、それをあまり誇張するのも周囲からの嫉妬の原因となります。

私も、他の家臣達の子弟に交じりながら、領内の開発や治安維持活動に勤しむ日々でありました。

それに、私は三男です。

父や旦那様からは一通りの教育は受けていますが、家を継げないのでグラモン領を出て独り立ちをするか、グラモン家に雇用されて細々と生きる道を選ぶ必要がありました。

実家の方は兄が二人いますし、兄達は結婚をしているのでその奥方の一族からも応援が来るので、私はどこか居場所が無い存在だったのです。

それに、馬の扱いでも、魔法でも、武芸でも。

特に、兄達よりも秀でているわけでもありませんでした。

劣っているわけでも無いのですが、簡単に言えば平均的で没個性だったのです。

ただ、比較的物覚えは良いようで、実家での私はこれも旦那様の影響なのでしょうか？

あまり家人達がやりたがらない、細々とした書類仕事や、金勘定や、人員配置など。

効率良く作業を進めるための、縁の下の力持ちな仕事に徹していました。

私は三男なので、兄達にはメインの仕事をして貰って自分は目立たないように、しかも役に立つように動く。

これが、半ば居候に近い三男坊に相応しい身の置き方であったのです。

『確か、クララ様がお生みになったお子ですよね？ ティーボ様は』

『ああ、そつだ』

旦那様の元に妾として入った女性が産んだ五男坊で、しかもその生まれた時期が四男のギーシュ様と僅か一週間違い。

最初は家臣達の間で微妙な空気が走りましたが、それはすぐに止む事となります。

考えてみれば、貴族家における四男と五男などはどちらも似たような存在で、自分で身を立てるしかない立場なのですから。

三男の私に、妾腹の五男の面倒を見させる。
意外と適任なのかもしれません。

『どのような方なのですか？』

『かなり賢いとの旦那様と奥様からのお話だ』

『奥様がですか？』

私は、本妻である奥様が妾の生んだ子供を褒めるなんて意外だなと思っていました。

普通ならば、無理をしても同じ時期に生まれたギーシュ様を褒めるはずですし。

『三歳にもならない内から、絵本が退屈でつまらないと言って、自宅の書齋で難しい本を読んでいるらしい』

『あの書齋の本をですか？ 子供がわかった振りをしているだけなのでは？』

私も、たまに必要な知識を得るためにあの書齋の本は読みますが、その内容は、三歳の子供が簡単に読めるような物ではありませんでした。

『旦那様を真似をして、兵法書の類を見ているのでは？』

グラモン家は、古来より武人を多く排出している家系です。

なので、その書齋に眠る軍事関連の書籍のコレクションには目を見張る物がありました。

経済や財政には疎いので、世間からはあまり賢くない印象の旦那様達ですが、バカではないので良くそれらの本を読んでいたのです。

その他八割の、他分野の本は完全にスルーしていましたが。

『それが、どちらかと言うと軍事関連以外の書の方を好んで読んでいらつしやるとの話した。一応、確認のために家庭教師をしているメイファンが色々と質問をしたらしいのだが、ちゃんとあいつの質問に答えたらしい』

メイファンは既に第一線を引退した家臣の一人でしたが、年配で教養があるという事で、グラモン家のお子達に軍事以外の知識などを教える役を承っていました。

ただ、グラモン家のお子達なので、やる気はと問われれば微妙という他はありませんでした。

グラモン家の男達は、軍事に一番の関心を持ちますので。

『天才児ですかね？』

『そんなに堅苦しいお子ではないよ。一日何時間か本は読んでいるが、あとは普通に屋敷の庭で遊んでいらつしやるからな』

それを聞いて安心しました。

あまり孤高の天才児だと、色々と接するのが面倒だと思ったからです。

『母親が違うからかもしれないが、特に奥様が期待されていてな』

そういえば、他所からグラモン家へと嫁いで来た奥様は、この借金だらけのグラモン領の破産を間逃れるべく、誰よりも懸命に努力・奮闘をしている存在でした。

ですが、そんな彼女が生んだ子供が、全て父親に似て領内の財政状態に全く興味がないのですから、これは運命の皮肉としか言いようがありません。

『そこに、ティーボ様の誕生ですか。ですが、奥様がご自分のお子をその方面で期待しないとは……』

とはいえ、これまで三度期待を裏切られているので、四人目のギーシュ様にも、やはり期待などしていないのかもしれないかもしれませんでした。

『ギーシュ様も、普通にグラモン家の伝統を継ぐのであろうな。ティーボ様が行政官なり財務官として期待できるのであれば、これは跡継ぎのアレクサンドル様の助けとなるう』

『わかりました。出来る限り頑張ってみます』

父は何も言いませんでしたが、生まれが僅か一週間違いの兄がいるティーボ様の立場は微妙です。

なるべく摩擦の少ないように動いてくれよと私に言いたかったのでしょうが、この瞬間から私の人生は最初の予想とは違って大きく変化する事となるのでした。

『始めまして。ティーボ様。私は、今日よりティーボ様に魔法を教えるアシルと申します。では、早速魔法の練習をいたしましょう』

『よろしくね。アシル』

翌日、私は杖の契約を済ませたばかりのティーボ様と初めて顔を合わせます。

見た目は普通の五歳の子供で、顔は異母兄のギーシュ様に少しだ

け似ていて背は少し高いようです。

同じ年齢の本妻の子供と、妾の子供。

良くある話ですが、私は二人の才能にあまり差が無い事を祈ります。

もしくは、少しギーシュ様の方が魔法の才能がある方が良いでしょう。えも思っていました。

教師役としては不謹慎な発言ですが、その方が本当にティーボ様のためであつたからです。

『まずは、基本のレビテーションからです』

子供に最初に魔法を教える時には、まずはコモン・マジックを繰り返し練習させてから、あとで系統魔法の確定とその習得へと進みます。

どの系統が得意なのは、マジックアローとブレイドを出させれば簡単な事です。

ティーボ様のマジックアローは、茶色で土の系統。

グラモン家は代々土の系統なので、その特性を無事に継いだ事がわかります。

当たり前の事なのですが、これは重要な事です。

たまに、その家の系統から外れた子供が生まれる事があり、そういう子供は大抵は実家から冷たく扱われる事が多いのです。

下手に実家の血縁に入れると、代々の系統が狂う事がありますからでした。

女の子であれば、他の家に嫁に行かせれば済む問題なので、あま

り問題化しないのですが。

ちなみに、ギーシュ様も土の系統である事が確認され、周囲の者達を安堵させていましたが、私は次の問題に直面する事になります。

『次は、ヒーリングの呪文です』

『わかったよ。アシル』

ティーボ様とギーシュ様の魔法の特訓が始まり、二人で懸命に魔法の習得を始めたのですが、次第に双方に無視し得ない差が付き始めたのです。

ギーシュ様はようやくコモン・マジックの習得が終了したくらいなのに、ティーボ様は既に土と水の系統魔法の一部を使いこなしていました。

やはり、母親であるクララ様の影響を受けて、水系統の魔法もそこそこ使えるようなのです。

『なかなか宜しいですな。練習を怠らないようにしてください』

『わかったよ、アシル』

そして、私が魔法を教えているティーボ様でしたが、やはり普通の子供とは少し違う部分があるようでした。

初日からいきなりいくつかのコモン・マジックを成功させ、更にそれに驕る事なく毎日練習を欠かさない。

言うは易しですが、行うは難しなのです。

何しろ、いくら貴族でも五歳の子供ですからね。

遊びたい盛りですし、貴族は大身の者ほど子供を甘やかす傾向にあります。

実際にギーシュ様を教えている私の同僚は、その点で苦慮しているようでした。

子供に連続して集中させるには、色々とコツがあるものなのです。

『今日は、ゴーレム生成を行ってみましょう』

私がティーボ様に魔法を教える日々が続きますが、魔法の先生である私から見た生徒であるティーボ様は優秀でした。

魔法以前に、人から物を教わる際の姿勢が完璧なのです。

最初に、教える魔法の原理や理論や使い方のコツなどを説明するのですが。

飲み込みが早いのか？

一回の説明で、ほぼ完璧に理解してしまうのです。

その後の実技も、たまに手こずる事もありましたが、一日も練習すれば基本的な物は使えるようになっていました。

あとの威力や精度や全体的な魔力などは、これは毎日の練習の積み重ねなので繰り返し練習して貰うしかないので、多分ティーボ様であればすぐに上達するでしょう。

『ティーボ様は魔法を覚えるのが早いですが、何か心掛けている事などあるのですか？』

『特に何も無いよ。次の日の授業で習う部分の魔法書を読んで予習するのと、授業が終わったら復習するくらい』

ティーボ様は簡単に言いますが、そんな五歳児は滅多に存在しま

せん。

私にも、普通にトリスタニアで役人や軍の士官などをしている友人達がいますが、私も含めてそんな下級貴族の子弟である彼らが公職に就く際には厳しい試験があり、その試験勉強のために行く予備学校の教師達から、『予習と復習は怠らないように』と初めて言われるのですから。

現に、ギーシュ様はそんな事はしないので、授業の最初に昨日の復習から始まり、これに苦戦する事があるので二人の魔法習得度に大きな差が出ていました。

『（困ったな……。上手く調整しないと……）』

暫くして、ある程度の魔法を習得した二人が旦那様に魔法を披露する事になったのですが、私はギーシュ様に魔法を教えている同僚と相談をして、ティーボ様が披露の時に使う魔法を抑えさせる事にしました。

非常に心苦しい決断でしたが、これもティーボ様のためでした。私は、この才能を下手な嫉妬で潰したくなかったのです。

『と言うわけなのですが……』

『うん、いいよ』

やはり、ティーボ様は頭が良いようでした。

私の頼み事の意図を、正確に理解して承諾していただきました。

『ギーシュは、小さいながらもゴーレムが作れるのか。頑張ったな』

『はい、父上』

『ティーボも、コモン・マジックは大丈夫らしいな。これから系統魔法も頑張るのだぞ』

『はい、父上』

本当はギーシュ様のような小さい岩製のゴーレムとは違い、既に大人くらいの大きさのゴーレムが作れるティーボ様でしたが、私が頼んだ通りに上手く使う魔法の種類を抑えてくれました。

『（今は、これでいいんだ……）』

私は無理矢理に自分を納得させたのですが、後にすぐにこの行為が無駄である事に気が付いてしまうのでした。

『今日は、錬金を試してみましよう』

『うん、楽しみだね』

ティーボ様に魔法を一ヶ月あまり、今日はティーボ様に錬金の魔法を教える事にします。

錬金の魔法は、本当はもう少し早めに教えても大丈夫なのですが、結果的にはあまり早く教えても意味が無い可能性が高い魔法となっています。

錬金は、誰にでも簡単に使える魔法です。

下はそこいらの土を石に変えたりする程度で、上になると少量ですが金を作り出す事も可能です。

青銅や鉄を作り出す物もありますし、応用で対象物の造形などを変えらる者もいます。

ですが、共通している事は一つ。

使い物になる物が錬金できれば役に立つが、出来なければただの魔力の無駄遣いという事です。

実際に、私の錬金する青銅や黄銅は商人達にはあまり高く売れません。

不純物が多くて、効率の良い材料程度の価値でしか取り引きされないからです。

ですが、私が特に錬金の魔法が下手というわけでもなく、これが平均的なメイジの現実なのです。

むしろ、ラインメイジでも上位にある私の錬金は平均よりは少し上なのですから。

そもそも、そんなに簡単に純度の高い金属が錬金できたら、トリステインが高品質の鋼をゲルマニアから輸入するしか手が無いなどという事にはならないはずですよ。

鉱山に、精錬所に、技術力の高い鍛冶屋と。

他にも、これに火系統のメイジや土系統のメイジなどが加わり、ようやくある程度の量の高品質な鋼や銅などが精錬されるのです。

『まずは、青銅から試してみてください』

『わかった』

ティーボ様が目の前に置かれた石に魔法をかけると、その石は無事に青銅へと変化しました。

『ほう、見た目は高品質ですな』

私は見た目が綺麗な青銅の塊に関心し、それを授業後に領内の鍛冶屋へと持って行きました。

『アシル様は、腕を上げましたか？ この品質なら高く買い取れますよ』

『いや、私が錬金した物じゃないんだ』

我らグラモン家の家臣達は、日頃は苦しい財政を何とかすべく藁にも縋る思いで子供達に錬金の魔法を教えます。

ですが、大した結果は出ておらず。

むしろこれは、錬金の応用魔法である土木系統に才能を持つ者を探すのが目的となっていました。

陣地や砦などの建築に使えるメイジは便利でしたし、平時は領内の道路整備や治水・農地拡大などに使えたからです。

ところが、ティーボ様は久しぶりに錬金自体の才能をお持ちのようでした。

それから一週間ほど、ティーボ様は次々と青銅を錬金してお小遣いを稼ぐようになっていましたが、その表情には納得のいかない物が浮かんでいました。

『どうかされましたか？』

『効率が悪いと思うんだ』

『効率ですか？』

『石の構成する物質と、青銅を構成する物質はかけ離れている。これでは、使う魔力に見合う量の青銅は作れないし、青銅では値段が高が知れている』

ティーボ様はそう言つと、今までに貯めたお金を私に渡します。これで、出来る限りの砂鉄と炭を少量準備するように頼まれたのです。

『これで、鋼を作るんだ』

私は、内心では無理であろうと思っていました。

現在、ハルケギニアでは高品質の鋼を作れる製鉄所は少なく、その大半がゲルマニアに手中していたからです。

何しろゲルマニアでは、コークスという高品質な鉄を作るのに必要な燃料の生産と使用が始まっていました。

たまに錬金で作れる人もいましたが、やはり不純物は混じるものですし、量をこなせないという欠点もあったので、切れ味の良い剣が一本数百エキューもするなどという事態にもなっていたのです。

『ティーボ様、大丈夫ですか？』

『大丈夫だよ』

私の目の前で、ティーボ様は買い集めた膨大な量の砂鉄と木炭を材料に鉄を錬金します。

『完成だ』

『ですが、何かおかしような……』

私の目の前には鋼らしき金属の塊と、その残りカスのような主に岩の残骸が残っていました。

普通は、錬金をした物が二つに分離するはずがないのです。

『同じ錬金でも改良を加えたんだ。砂鉄と木炭から鋼の構成に必要な成分だけを取り出して結合して残りを捨てる。これだと材料は必要だけど、膨大な設備や人員は必要ない。そんなに大量には作れないけどね』

とは言いながらも、約200リーブルの重さの高品質な鋼の錬金に成功したティーボ様は、次第に私の予想以上の成果を主に錬金で示していきます。

『ティーボ様、この金属は？ 少し銀に似ていますが、軽いですね』

『アルミニウムと命名したんだ』

『あの裏山の石の中に、こんな金属が？』

『それがあつたんだね。魔法で探知して見つけたんだ』

後に、我が領の特産となるアルミニウムの試作に成功し。

『これは、薄いのに硬い金属ですね』

『チタンという名前にしようと思う』

『先のアルミといい、材料が同じような石にしか見えないんですけど……』

『そんな事は無いよ。ディテクトマジックの改良魔法で石を探ると、石は何十もの材料で構成されているよ。鉱山の鉱石は、その材料が多い石なんだよ』

『はあ……。なかなか難しいお話ですな』

後に、我が領とヴァリエール家の兵士達の武器の材料となるチタンという金属の錬金に成功し。

『これは、黒真珠ですよね？』

『これは骨が折れたよ。天然物っぽく錬金するのが』

『天然物と、見分けが付かないのですが……』

『じゃあ、高く売れるね』

遂には、天然物と区別が付かない真珠の錬金にも成功しと。

ティーボ様は、毎日己の魔力のキャパを上げるために大量の金属を錬金していました。

正確に言つと、各鉱物などに混じっている様々な成分の抽出なのだそうです。

普通の錬金と違ってただ石を金属にするわけではなく、石に内包されている成分の抽出・結合を行う。

これだと、あまり魔力を使わなくても大量に生産が可能であると説明するティーボ様でしたが、私も含めた家臣達はその原理に理解に大きく時間を取られる事になりました。

そして、私には大きな仕事が出来ました。

ティーボ様の錬金に必要な鉱石や材料などの入手と、それを売却する先であるギルドや商人達との交渉。

増産のために人手を増やすなど、次第に昔に実家にいた頃と同じような仕事をこなすようになっていました。

どうやら、過去の経験がここで生きたようです。

『細工用の水晶柱と水晶塊に、翡翠柱と翡翠塊に、真珠に瑪瑙か。鉱石と材料の仕入れと、その配送の手配。錬金小屋の機能拡張に、人員の増員に。新しい仕入先との交渉に……』

どんどんとティーボ様の錬金の腕が上達していき、作れる物の種類も量も品質も向上し、それに釣られるようにして顧客と収入が増大した。

次第に私の仕事は、ティーボ様の魔法の教師から、専属の家臣のようなものへと移っていきました。

それと、次第に金を稼ぐようになって、世間に知られていく予定

のティーボ様です。

当然その身を狙う輩なども増えますので、その警護人員の強化と水面下での交渉なども必要となつていきます。

『（段々と忙しくなるな……）鋼に関しては、あまり作らないようにしますよ。最近、アルミニウムなどの生産が忙しくて手が出ないのが本音ですが』

『あれは、発見したティーボ様が素晴らしいのでしょうな。それと、ほぼ純度100%まで錬金してあるので、うちでも精錬は不可能ですよ。試しにやって大失敗しましたけどね。鉄と同じ方法で精錬しても駄目なんですわ。まあ、住み分けですわ』

トリステインに纏まった量の鋼を錬金する貴族が現れ、しかも品質はゲルマニアよりも上であった。

これを既得権益への干渉だと言ってケチを付けて来た、ゲルマニア側との手打ち式を行い。

『（まさか、ロマリアの司祭が来るとはね……）アドルフ司祭殿、水晶柱や翡翠柱の割引は無理ですが、ティーボ様は大聖堂の改装に使うステンドグラス用のガラスを全て提供すると申し出ております』

『おお、ティーボ殿の錬金するガラスは透明度が違いますからね。あれを譲っていただけるのであれば、私からも猊下には良しなに伝える事も可能です』

このハルケギニアでは一番気を使って接しないといけない存在である、ロマリアのブリミル教関係者との協議を行いと。

次第に拡大していくティーボ様の錬金工房とその周辺施設などの維持・拡張と、それに伴う様々な問題の処理に私は動く事となります。

他にも、錬金の副産物である新しい焼き物の材料を目当てにやって来た焼き物職人達のギルド作りに協力したり、ガラス工房や各種職人達などの住む、ティーボ様の錬金物を加工販売するための町造りに精力的に動いたりと。

私は、今までの人生で一番忙しい日々を送っていました。

その分、待遇などは大幅に上がっていました。

最初に給金を上げる話を聞いた時には、私は物凄く驚いたものでした。

主に、その金額の多さにです。

『アシルよ。忙しいのに、呼び立てて済まなかったな』

『いえ、旦那様のお呼びとあれば』

そしてそんなある日に、忙しい毎日を送る私は旦那様から呼び出されていました。

『アシル。お前は本当は私の家臣であり、ティーボの元に派遣されている立場だが。正式に移籍して貰う事にした』

『私がですか？』

『なし崩し的に、お前にティーボの周りの様々な事をやらせていたが、もはや臨時では対処できなくなるであろうしな。ティーボは、正式に分家当主として分離する。アシルも、陪臣扱いではあるが筆頭家臣として待遇するので、オリヴェイラ家から出て別家を立てて欲しいのだ』

私としては、願ってもない話でした。

いくら直臣でも、今の居候の立場に近い三男扱いよりは、陪臣でも独立した家の当主で、ティーボ様の筆頭家臣の方が恵まれているからです。

『それでだ。これからも忙しくなるであろうから、結婚をして身を固めなさい。私が、良い家のお嬢さんを紹介するから』

『結婚ですか。最近では、忙しくて忘れていました』

『これからも、忙しいままであるうからな。それに、昔はワシもティーボは頭が良いから文官として使えると思っていたのだが、今のグラモン家の財政状態ならば外から雇う事も可能だからな。ティーボは、なるべく錬金だけをしていた方が我が家の利益となるう。そのため、アシル。お前なのだ』

確かに、旦那様の言う通りです。

今のティーボ様であれば、領内の行政や財務関連の仕事も十分にこなせる頭脳は持っているはずですよ。

ですが、そんな書類を見ている暇があったら、錬金でもして貰う方が利益となる。

文官の替わりはいくらでも探せるが、あれほどの錬金の名手はま

ず見付からないでしょう。

完全な分業体制を行うという、旦那様からの提案でした。

『一度見合いをさせるので、数日後に呼び出すぞ』

数日後、私は現在の妻と見合いをし、その後は急ぐようにして結婚式・新婚旅行への流れへと進みました。

ティーボ様の筆頭家臣となった私が独身なのは、それはそれで困ってしまうからなのでしょう。

ちなみに、結婚相手は父と同じく旦那様の家臣の娘で、子供の頃から顔馴染みの女性でした。

その点では、あまり目新しさは無いのかもしれませんが。

『そうか。アシルも、遂に結婚か』

まだ十歳くらいなのに、何かを悟ったような表情で語るティーボ様を、一瞬だけ『実は、年上なのでは？』と私に思ってしまう私でしたが、これはきつと気のせいなのでしょう。

それと、『マリッジブルーは無いのか？』と私と妻に尋ねていましたが、あまり聞きなれない言葉でした。

『古来より、結婚指輪は給金の三か月分が相場だ』

『初めて聞きますけど……』

『おかしいな？ 書物にそう書いてあったのだが……』

少し妙な事を言ってから、ティーボ様は私達に結婚指輪をプレゼントしてくれました。

『俺の自作だから、出来については文句を言わないように』

ティーボ様は、妻にダイヤモンドの付いた指輪をくれました。台座は白金製で、これは材料は外部から購入したようです。ですが、付いている宝石については微妙に口を閉ざします。

『まさか、ご自分で錬金されたので？』

『シーーーーー！』

確かに、クララ様の持つアクセサリーの類には、どこで買って来たのかわからない大き目の宝石が付いていました。

ダイヤモンド、ルビー、サファイア、他にも様々な宝石の付いたアクセサリーを日替わりで付けているのです。

『うーん、どう見ても錬金した宝石には見えませんね』

『稼いだ俺が買った事にした方が、色々と楽だろう？』

『確かに、そうですね』

こんなに完璧な宝石を錬金できる事が世間に知れたら、ティーボ様の誘拐を謀る連中が増えてしまいかもしれません。

結婚式後、屋敷地下の倉庫に大量に眠るケース入りの金貨の山や、宝石類を秘かに見せて貰った私は、ますますこれから忙しい日々が始める事を確信するのです。

私は、数少ない真実を話して貰った男として、生涯彼に忠誠を誓う決心をするのです。

私が結婚してからも、忙しい毎日が続きます。

ティーボ様が錬金だけに意識を集中させられるように、他の全ての業務を自分で行い、更に徐々に増えて行く家臣達の統制も行う。

グラモン分家は、ティーボ様が『任せる』と言って私に多額の予算を渡すので、多くの人材が集まるようになっていました。

勿論、その中には怪しい連中もいます。

外部の連中と謀って、ティーボ様の拉致・暗殺を試みる連中もいました。

果たして、ゲルマニアからのか？ ガリアからのか？ アルビオンからののか？

私は、他の家臣達と淡々と秘かに彼らを抹殺・処理をしていきます。

『ほう、お米ですか。確か、東方原産の野菜ですよ？』

『アシル。これは穀物の一種なんだよ』

『それで、これをどうするんです？』

『栽培するに決まっている！ そのために東方産の農業指南書を手した』

基本的に錬金とその研究以外にあまり興味を持たないティーボ様でしたが、唯一の例外は、新しい食材と食べ物の探索であったのかもしれません。

市場で探させたお米やお茶の栽培を農家に委託したり、書物で見つけた東方の食材や料理の研究を行わせたり。

少し普通の貴族の子供とは違う人生を送っているティーボ様の、数少ない娯楽だったのかもかもしれません。

それから年月は進み、ティーボ様の錬金は領内に多くの富を生み出してしました。

錬金物の販売から、それを加工する職人達が領内に移動し、ティーボ様が趣味で農民などに委託している新しい食材なども次第に外部に売れるようになりと。

領内の経済が大幅に膨らんだ事により、直接収入に合わせて税収がまでもが膨らんで来たのです。

おかげでグラモン家の借金は全て消え、逆に他の貴族達に対して多くの債権を持つようになっていました。

そして、ティーボ様の魔法学院入学に伴う臨時の錬金工房の移転や、物理的にトリスタニアに近付いた事によって増えた王家からの干渉など。

ティーボ様が、裏切ったワルド子爵に殺されかけて心臓が止まるかと思ったり、何も知らないで『土くれのフーケ』を雇おうとしたり、クララ様の関係で、ガリア王族が引き抜き仕事を仕かけて来たりと。

私の忙しい日々は続きますが、遂にティーボ様が領地を下賜され

る事となりました。

先にティーボ様が殺されかけたワルド子爵の旧領というのが引っかかりましたが、忙しいスケジュールをやり繰りして家臣達を送り込んだ矢先に戦争となり、今度はティーボ様は旧アストン伯領を下賜されました。

この一ヶ月あまりの成果が、全て台無しとなった瞬間でした。ですが、有力な港町であるラ・ロシエールを含むこの領地は、開発すればまだ発展の余地があります。

早くに、グラモン本家領との経済的な連結を進めないといけません。

「（きつと私は、充実した日々を送っているのだろうか。よくよく考えると、部屋住みの三男が大出世じゃないか。ほぼ直臣扱いの伯爵様の筆頭家臣なんて）」

思えば、私も既に三十歳半ば。

子供達も大きくなり、既に若者ではなくなっていました。

ふと私がそんな事を考えていると、一人の若い家臣がこちらに向かって走って来ます。

「アシル様、フレモンド商会の方が」

「また取り引きを増やせという話かな？ 今でもかなり限界なんだ

がな……」

「最近は、ガリア商人も増えて忙しいですね」

「全くだ」

「ところで、先ほどは少し考え事をしていたようですね？」

「ああ、昔の事を少しな」

私は、その若い家臣を連れて面倒そうな商談に向かう事にします。ただ、ティーボ様が鍊金だけをすれば済むようです。

それが、私の仕事なのですから。

三十九話

「ああ……、昨日は酷い目に遭ったな」

昨晩はキュルケとルイズの争いに巻き込まれ、その過程で吹き飛ばされた女子寮の廊下と階段付近の修復をする羽目になった私は、少し寝不足ながらも自室のベッドの上で目を覚まします。

「ティーボ様。今日も、鍛錬には参加いたしますよね？」

「勿論だとも」

多少寝不足でも、私が軍人として向いていなくても、いくら今が戦時体制でも。

父から、『どんな時にでも、グラモン家の男として最低限の鍛錬を怠らないように』と言われているので、私は急いで着替えてから訓練を行う事になっています。

「では、お着替えの方を」

「ありがとうございます」

「ですが、昨日は大変でしたね」

「多分、一番の被害者は俺だと思っただよ」

私はただルイズに会いに行っただけなのに、キュルケに眠らされて誘拐されかけた挙句。

そのキュルケもルイズの爆発魔法で気絶させられたので、彼女に

レビテーションで運ばれていた私は、無防備な状態で床に落下してしまいました。

ベッドから起き上がると、打った腰が少し痛みむのでとりあえずヒールリングをかけます。

この程度の打ち身なら、秘薬などがなくても普通に治りますしね。

「ミス・ヴァリエールは、きっと不安だったんですよ。ティーボ様が、他の女性に奪われてしまうのではないかと」

「なるほどね」

ルイズと同年代で同じ女性であるシエスタの意見に、思わず納得してしまう私でした。

ですが、同時に彼女を安心させる手も思い付かないでもいました。

「俺は、卒業後に彼女と結婚する。これでは駄目なのかね？」

「駄目ですよ」

「駄目なのか……」

ルイズと同じ女性視点での意見を聞くべく、私は着替えをしつつもシエスタと顔を逸らさないようにしていました。

「女性には、常にあなたが必要だ。あなたが好きだという気持ちを伝えて行動しないと駄目なんです」

「なるほどなあ……」

前世では二人の女性と付き合い、他にも数名の女性を下心ありでデートに誘った私でしたが、やはり女性という生き物は難しいものであり、なかなか理解し難い存在であるようでした。

「ミス・ツエルプストーとの友誼も大切でしょうけど、ここはきっぱりと拒否するくらいの姿勢を見せないと」

「やっぱり、そっだよなあ」

「そうですよ」

シエスタの話を聞きながら着替えを終えた私は、良い話を聞けたと思いながら外に出ようとしますが、一つ気になっていた事があるのでそれをシエスタに聞きます。

「ところで、どうして昨日の事を？」

「サイトさんに聞いたんです」

「ふーん（才人のやつ、実はモテるタイプなのか？）」

まだ異世界に来てから僅かしか経っていないのに、既に女の子と仲良くなっている才人に、私は見当違いな評価を行い、少し羨ましいなと思ってしまふのでした。

「今日は、ここまでですな」

「ふええー、疲れたなあ……。しかし、あんた達は良く毎日こんな事をやっているな」

少し前までは、私とアシルだけで行っていた早朝の訓練でしたが、今では他に数名の家臣達と、才人とギーシュも参加するようになっていました。

才人は、実用的に剣を振るえるようにと専門の教官を私が付けていて、ギーシュは父から私の護衛役に任じられているので、実戦経験豊富な家臣達から手解きを受けていたのです。

いくらスクウェアメイジでも、戦い方が稚拙なら下手をするとトッドメイジに負ける事もあるのが戦場であつたからです。

「鍛錬を怠ると、父上に怒られてしまうからね」

タオルで汗を拭いながら、ギーシュが才人の話に答えます。

「ティーボもそうなのか？」

「俺は、前線担当じゃないけどな。出来る限り自分の身は自分で守るという事さ」

朝食まであと少しの時間をタオルで汗を拭きながら話す私達でしたが、そこにシエスタが顔を出します。

「ティーボ様、朝食のお時間ですよ」

「ああ、腹減つたな」

「サイトさんも」

「悪いな、シエスタ」

シエスタの案内で、私と才人はいつも食事を取る別邸へと入りま
す。

「……」

シエスタから何も言われないギーシュも黙って入りますが、別に
彼が勝手に食事を取ろうとして入るわけではありません。

ちゃんとギーシュの分も用意されているのですが、シエスタに話
しかけて貰えないだけなのです。

まあ、あんな事をしたので当たり前と言えば当たり前なのですが。
ギーシュが、『すまないね』の意味を込めて挙げた手が虚しくス
ルーされます。

「しかし、男子生徒は俺とギーシュと一部留学生だけか。学院なの
に寂しい限りだな」

食事を取りながら、私達は話をします。

軍への志願と臨時の士官教育のせい、召集・訓練中の部隊司令
部へと向かった男子生徒達がないので、学院は閑散とした雰囲気
になっていました。

それと、一部の教員達も実家の諸侯軍に参加すべく休職したり、
王城側から召集を受けて既にいなかったりしました。

本当に、今回の戦いは総力戦の様相を呈していたのです。

「それだけ、チャンスも多いと考えれば良いんだよ」

「女はもうコリゴリだ。俺は、ルイズがいるからいい」

女性に魔法で眠らされて、かどわかされかけたなんて話。

私の中では、暗黒の歴史以外の何物でもなかったのですからね。

「僕も、モンモランシーがいれば十分さ」

「嘘くさいな」

「ああ、チャンスが多いとか言っている奴だからな」

才人と私は、そんな事を言いつつも他の女性に声をかけていそうなギーシュを想像してしまいます。

「失敬だぞ。君達」

「でも、そのモンモランシーの態度は微妙だしな。いい加減に諦めたらどうだ？」

先日のパーティーで、ギーシュは懸命にモンモランシ伯爵に自分をアピールしていたようですが、今あの家に必要なのは武勲よりもお金なので、あまり芳しい成果は無かったようでした。

ただ、他のトリスティン貴族達の中でも、年頃の息子がいてモンモランシ伯爵家を援助可能な財力を持つ家というのもなくはない。予定される出兵に必要な資金をどう工面するべきかますます苦悩しているようでした。

「気合で、金を大量に錬金してやれ。そうすれば、向こうも喜んでモンモランシーを差し出すさ」

「無茶を言つなよ!」

朝食の時間が終わり、私達はそれぞれにしなければならぬ事を始めます。

私は、ミス・ロングビル改めマチルダさん達と一緒に錬金を。

才人は、私から頼まれた紫電改や各種車両などの清掃や簡単な整備などを。

そしてギーシュは、いつアルビオンへの出撃命令が出ても大丈夫なように、グラモン分家諸侯軍の訓練などに参加していました。

まだ領地が与えられてから僅かなので、いつもの家臣達と、父からの紹介で雇った貴族の子弟達と、傭兵などから質の良い人材をスカウトして作った実戦部隊は、二百名ほどの部隊でしたが、この実戦部隊のトップに父から任命されたのがギーシュだったので。

勿論、若い彼では経験が不足しているので、私の家臣達や傭兵達が補佐を行うのですが。

そして、彼は一部隊の長である事を考慮されて、王城側から少佐の地位を与えられていました。

私の部隊が前線に出る可能性は皆無ですが、重要な絶対に失えない部隊であり、指揮官にそれなりの待遇を与えておこうという事らしいです。

ギーシュならば、ちょうどクロムウエルを捕らえた功績があったので、任命し易かったのかもしれない。

ただし、何やら色々と王国軍将校として知らなければいけない事が不足しているとかで、王国軍司令部から大量の本が贈られて来ていて、しかもそれをちゃんと読んでレポートを書かないといけないとかで、その大量の本の厚さにギーシュは絶句していました。

やはり、そう簡単には佐官にはなれないようです。

ちなみに、私も中佐の階級を貰っていました。

ですが、レポートは後で時間が空いたらで良いと言われていました。

最初は優しいお言葉だと思ったのですが、そんな物を書く時間があつたら錬金でもしているという事なのでしょう。

本当に、あまりの優しさに涙が出る思いです。

相変わらず、金になりそうな物ばかりを急いで効率重視で量産を行い、お昼になったら学院で臨時の教練を受けていたルイズと一緒に昼食を取り。

今日の午後に、いよいよ重要な錬金の作業を行います。

以前にタバサと密談をした部屋に、私とアシルとギーシュとマチルダさんが集合します。

土のラインメイジャー一人、トライアングルメイジャー一人、スクウエアメイジ二人という構成です。

そして、このメンバーで秘密の部屋に集合という部分が午後からの錬金のミソでもありました。

「言っておくけど、他所にフラフラと漏らすと命の保障は出来ないからな。それだけは、言っておく」

「私は、ティーボ様の家臣なので」

「僕は、女性の胸の中で死にたいね」

「私には、死ねない理由がありますし」

土系統のメイジが、四人で集まった理由は簡単です。

これから私が主体となってある物を作るので、他の三人にその補佐をお願いしようと思ったのです。

「それで、何を作るんだい？」

「ゲルマニアに贈ると、何万人も援軍を寄越してくれそうな高価な芸術品をさ」

私が、部屋の隅に積んである山から被せてある布を取ると、そこには大量の金貨と様々な大きさと種類の宝石類の入った袋が積んでありました。

「また、とんでもない量ですね」

元盗賊の血が騒ぐのか？

マチルダさんは、金貨と宝石の山に生唾を飲み込んでいました。

「金貨は毎日稼いでいるし、宝石はグラントの成果ですよ」

大きいので、私の外出には連れていけない使い魔のグラントですが、彼は私の作った専用の家で近隣の農民が持って来る草木を食べて腐葉土を排出し、毎日地下深くの自分で掘り進めた地下通路を巡回して集めた鉱石を吐き出して私にくれるのです。

ですが、装飾に使う同じ大きさの宝石というのは揃えるのが難しいので、実は以前に錬金で作っておいた宝石も混ぜてあります。瑪瑙と真珠と水晶以外の宝石が作れる事が知れると、色々と面倒ですしね。

知っているのは、父、母、奥様、アシルの四人だけでした。

長兄のアレクサンドルでも、それを知るのは爵位と領地を継いでからののです。

「それで、何を作るんだい？」

「簡単に言うと模型だな」

ギーシュの疑問に答えながら、私はまず縦一メートル横二メートルほどの台座を作成します。

材料は、仏像とかだと黄銅製だったりするのですが、良くわからないのでここではまだ価値の高いアルミ合金製にします。

ただのアルミだと強度が少し低いので、日本工業規格によるところの6000番台、アルミニウム・マグネシウム・ケイ素の合金を錬金して完成です。

次に、その台座の上で台座からはみ出さない大きさの空中船の船体を大量にある金貨で錬金します。

「ギーシュは、彫金が趣味なんだろう？ 綺麗に仕上げてくれ」

「とは言っても、僕は芸術家じゃないんだけど……」

ブツブツ言いながらも、ギーシュは金貨を材料に純金製の戦列艦

の船体模型を作る事に成功します。

「ほら、マストとかもだ」

「人遣いが荒いな……」

ギーシュは更にブツブツと文句を言いながらも、私達と一緒に船体模型の制作に励みます。

やはり、彫金が趣味とあって、この手の事に一番器用なのはギーシュのようです。

「アクセントにこれを使う」

「それ、白金だよね？」

白金、所謂プラチナは、ハルケギニアの世界にも存在していました。

しかし、金よりも取れる鉱山の数が少なく、しかも白金を錬金可能なメイジは金が錬金可能なメイジよりも少ないので、金よりも貴重な貴金属となっていたのです。

私は、多分何ヶ月も魔力を溜めてからならば少量の錬金は可能ではなくです。

ですが、それを試す事が許される環境にないので、これは実はグランドが持ち帰って来た鉱石を精製して製造をしていました。

「純金の船体とマストに、白金のアクセント。宝石も飾り……」

大小様々な大きさのダイヤ、ルビー、エメラルドなど。

芸術品として相応しくなるように、使っている材料費だけでも莫

大な額になりそうな模型は、四人で作業をしているせいでどんどんと形になっていきます。

まるで、大英博物館にでも飾られていそうな豪華なお宝に見えなくも……、ないのでしょうか？

「船の帆はどうするんだい？」

「こつする」

私は、まだ空けていない袋の中から銀貨を取り出して、それを細い銀系に錬金し、更にそれを編むように錬金を行って帆を形造っていきます。

「金糸や小さな宝石を使う刺繍部分は任せる」

「僕は、職人じゃないんだけど……」

とは言いつつも、ギーシュは事前に準備していた帆の設計図通りに銀糸を魔法で編み込んで帆を作っていきます。

帆は、ゲルマニアの国旗が書かれた物をイメージして作っていました。

そしてその間に、アシルとマチルダさんは船体本体に宝石を順番に埋め込んで完成に近付けていきます。

「完成だな」

「そうですね。ティーボ様」

三時間ほどの作業の後、数百万エキュー分の金貨と、大小合わせて数千個の宝石を使って作った。

長さ二メートル、幅八十センチ、高さ一メートルほどの戦列艦の模型が完成しました。

「市場に出すと、いくらくらいするのでしょうか？」

「大国の国宝クラスのお宝ですな」

「マチルダさん、アシル。まだ終わってないよ」

「まだ造るのですか？」

呆れるアシルを動かしつつ、今度は普通にケイ素を材料にして黒水晶を作り、それで新しい芸術品？を作ります。

事前に王城側から貰っていた、ゲルマニアの皇帝アルブレヒト三世の似顔絵を元に、等身大の水晶製の像を造ったのです。

「ギーシュは、芸術家になっても食えそうだな」

「ティーボの、芸術品に関する鑑定眼がお粗末なだけだと思うけどね。この程度の作品なら、ロマリアの工房に行けば鼻で笑われるレベルだ」

「ギーシュ様、これは大体できていれば問題無いんですよ」

時間と手間と財貨が大量にかかる芸術品の基礎を私達に作らせ、あとは王城に運び込んで子飼いの芸術家やメイジ達に直させるのが、アンリエッタ女王の考えですからね。

多分、トイステインでも高名な芸術家達が最後に手直しをして、使われている材料の高価さと合わせて、これを出兵に対してお礼とするのでしよう。

「金や宝石や水晶を大量に使っているので、これ自体に価値がありますからね。しかも、歴史あるトイステインがわざわざこれをゲルマニアの皇帝に贈ったという部分で、彼の権威を上げる事に協力していますし。ゲルマニア中央政府の国庫に、国宝として入れる価値はあるでしょうし」

オスマン学院長の秘書時代から有能であったマチルダさんは、やはり頭の回転が良いようでした。

「これのお礼が、サウズゴードの領地やら、兄達の領地やら、その他アルビオン国内にあるいくつもの鉱山の利権とかね」

勿論、私も父も、これほどの高価な宝物の作成を無料で行うほどお人好しではありませんでした。

グラモン家の五人の子供全員を領地持ちにする事と、私はアルビオン国内にあるいくつもの鉱山や炭鉱の利権を貰う事に行っていました。

それと、自由に国内で鉱物などを探索する権利ですね。

現在、ミスタ・コルベールに鋼を作る転炉の研究をして貰っているので、卒業後の鉱物探しが楽しみで仕方ありません。

「さて、残りも早く終わらせるか」

「まだ作るのかい？」

ギーシュは、まだ手伝わされるのかという顔をしています。

「材料が余っているしな。向こうが文句を言えないように作っておくさ」

私は、夜になるまで作業を続けるのですが、後にその事でアシルから文句を言われてしまいます。

「竜、サーペント、グリフォン、ヒポグリフ、マンティコア、ミノタウルス、オーク鬼までですか」

室内には、様々な色の水晶で作った高さ二メートルほどの像が多数乱立している状態でした。

「久々に疲れたな」

「ところで、どうしてアルブレヒト3世の像は黒水晶を？」

「ああいう人って、基本腹黒いと思って」

「身も蓋も無いですね……」

私の回答に、アシルは素で引いていました。

「作成秘話とか、まず漏れないから大丈夫だって」

制作秘話というか、これだけの財宝の材料を私が出したとなれば、また私への監視や工作などが増えて色々と面倒になるので、これらの芸術品の材料はトリストインが出した事にして貰わないと困るの

が実情でした。

これから行われる運び出しも、他の金属などと偽って秘かに行われる予定なのですから。

「まあ、それは良いんですけど。一つ問題が……」

「問題？」

「ドアが小さ過ぎて、壁を壊さないと外に出せませんな」

普段はあまり使われず、大した備品なども無い部屋の中には、私達が錬金で作った宝物や水晶細工で溢れかえっていて。

アシルから、出す時の事を考えて作って欲しいと言われてしまったのでした。

ですが、数日後。

壁を壊す事によってこれらの作品は王城へと運ばれて、トリステイン国内にいる有名な芸術家達の手によって手直しをされ、ゲルマニアの皇帝へと贈られたのでした。

『ほう、トリステインは豪気な事よな。それに、この余の等身大の水晶細工。黒というのが実に渋い。素晴らしい出来よな』

アルブレヒト3世は贈られた大量の芸術品に満足し、援軍は約束どおりに送るが、アルビオンの領土を求めない事を正式に発表するのでした。

まあ、半分金を出したに等しい行動だったんですけどね。

「おはよう、グラント」

作った芸術品を搬出した翌日、その材料の一部を持って来てくれた使い魔のグラントに会いに行く私でした。

学院にいる時には、毎日小屋までグラントの顔を見に行くのが習慣だったので、最近はつい忙しくて数日顔を合わせていなかったからです。

「グラントは、少し大きくなったかな？」

私の問いに、グラントは『さあ？』と言った感じで首を傾げていました。

ですが、排泄物が腐葉土になるグラントだったので、多くの農民達がこぞって近隣の草木を持ち込み、それを大量に食べた結果、体が一回り大きくなったような気がする私でした。

本当は少しずつ大きくなってたのかもしれませんが、ここ数日グラントを見ていなかったせいで、余計にそう感じるのかもしれない。

「もう少ししたら、小屋を大きくしようかな？ グラントはどう思う？」

私の質問に、グラントは無言で自分の隣のスペースを頭を振って指差していました。

そういえば、なぜかそこにはもう一つ巣穴用の穴が開いていたのです。

「グラント。そんな近くに、セカンドハウスかい？」

私が気安くグラントに尋ねると、突然その穴からもう一匹のグラントワームが出現しました。

しかも、その大きさは現在のグラントよりも一回り小さいくらい。私達の作った小屋が、一気に小さく感じられるほどでした。

「グラント……。奥さんなのかな？」

夫婦？して私に頭を下げるグラント達でしたが、使い魔であるグラントにも色々交友関係や家庭の都合があるのであると、私は急いで小屋の拡張を家臣達に命じるのでした。

後日、作られる腐葉土の量と排出される鉱石の量が倍になったので、小屋の増築分はすぐにペイしたのですが……。

「グラント、最近は風石を良く持って来るようになったな。鉱脈でも見つけたのかい？」

私の問いに、グラント夫妻？は首を縦に振ってしました。

四十話

「ティーボ様！ 大変ですぞ！」

「何だよ。こんな朝っぱらから急に……」

学院から大半の男子生徒達が消えてから一ヶ月あまり、最近ではキュルケのちよっかいても減り、私は学院内で士官としての軍事教育を少しだけ受けながら、午後から夜にかけては錬金を行うという日々を送っていました。

それと最近では、超特急で送られて来るボーキサイト鉱石や質の悪いアルミから精製するアルミ合金が、ゲルマニアに向けて飛ぶように売れていました。

戦前にゼロ戦などに使われた、日本工業規格によるところの7075番。

アルミに、亜鉛5.5%、マグネシウム 2.5%、銅1.6%を配合した超々ジュラルミンが、馬車の車体や、空中船の内装部品や一部外部装甲部品として爆発的に売れるようになっていたからでした。

さすがに、以前のような銀よりも高いという事は無くなっていましたが、高品質の鋼よりは高いのは事実で、超々ジュラルミンをゲルマニアに輸出して戦争で使う鋼を輸入するという流れが出来上がっていたのです。

まあ、その鋼にパジェロに使われている高張力鋼を参考に、土中やクズ鉱石に含まれているシリコン、マンガン、チタンなどの多数

の元素を配合して再錬金を行って、トリステインの軍事工廠に売り飛ばすという作業もしていたのですが。

他にも、最近ようやく初期的な転炉の運転を始めたグラモン領への助言やら、手助けやら。

更に、先日の下賜された旧アストン伯爵領の復興と再開発やら、あまり戦争に関係ないロマリアに水晶や翡翠を売り、最近取引量の増えているガリアに真珠などを売りと。

正直なところ、既に私はあまり自分の財産を正確に把握していませんでした。

貸し借りがあまりに複雑になっていたので、完全にアシルに管理を任せていたのです。

『簡単に言うと、トリステイン王家の超債務超過です。アルビオンの国土編入に失敗したら、すぐに破産すると思われます』

トリステイン王室が懸命に戦争の準備をしているのは、このような切羽詰った事情もあるようです。

「ところで、何が大変なんだ？」

「アンリエッタ様が、こちらにいらっしやるとの事で」

「せめて、邪魔はして欲しくないんだけど」

今さら、トリステイン王家が人の錬金物や金を当てにする事に対しては何も言いません。

プライドだけは一人前で、古臭い旧癖が吐き捨てたガムのようにへばり付いているのに、妾腹の私に伯爵の爵位と領地をくれたのは

良しとしましょう。

ですが、私の仕事の邪魔はして欲しくないのものです。

偉い人が来れば、それだけ警備に気を使うアシルに負担がかかりますし、私も放置するわけにはいきかないのですから。

それに使う手間は、確実に私の作業効率を落とすのです。

「ねえ、ティーボ。明日、姫様が来るそうよ」

アシルと話をしていると、そこにルイズも飛び込んで来ました。どうやら、彼女も私達と同じ情報を手に入れたようです。

多分、友人だからという理由で、アンリエッタ女王から連絡が行ったのでしょう。

ルイズは、嬉しそうに私に話をします。

「ティーボの功績がまた認められて、そのお礼に来るそうよ」

「そうか。では、迎え入れる準備をしないとね」

「私も手伝うわ」

ルイズは、親友だという事になっているアンリエッタ女王の来訪が嬉しいようでしたが、私はそもそも二人が親友同士の関係であるという事に疑問を感じていました。

一国の女王と、大貴族とはいえその令嬢の間に果たして本当に友情など存在するのでしょうか？

子供の頃であれば、そんな立場も知らずに一緒に遊べたのかもしれません。

ですが、今では二人はまるで立場が違います。

女王とは孤独な物ですし、この国に彼女と並び立つ者が存在しない以上、彼女に本当の対等な立場の友人など存在してはいけません。

なぜなら、その国の最高権力者は時に臣下を国のために犠牲にする選択をしないといけません。

本当に、友人に対してそんな選択が出来るのかと考えれば。

ルイズに『お友達』などと普通に言えるアンリエッタ王女は、本当のお花畑か、もしかすると真の悪党なのかもしれませんでした。

「どうかしたの？ ティーボ」

「いや、準備の方をどうしたものかと……」

「私がアシルさんを手伝うから、ティーボは他の仕事を背負い込まないで」

「ありがとう、ルイズ」

それと私は、自分がアンリエッタ王女に隔意を抱いている事をルイズに話していませんでした。

まだ彼女は、アンリエッタ王女を親友だと信じているので、それを無理に否定するのも可哀想だと思ったのです。

それに、隔意を抱いているから亡命でもしようかな？ などとも考えていませんでした。

私が見えるサイフだと思っている内は、私の身も安全という事ですし、父や兄達が変な真似はさせないでしょう。

「ただ、今のトリステインは戦時体制だからね。過剰に華美にする事は、かえってアンリエッタ様の趣旨に沿わないと思うよ」

「それもそうね。そうだ、オールド・オスマンにも伝えないと」

「早く知らせた方がいいよ」

「わかったわ」

嬉しそうに学院長室へと向かうルイズを見送りながら、私はまた余計な仕事が増えたと心の中で溜息をついたのでした。

「今日は、よろしく願いします」

「大したおもてなしも出来ず、臣下としては心苦しいばかりです」

「いえ、本日の視察は私の我侭から出たもの。アルビオン出兵の準備も進んでいる今、あまり形式ばったものは必要ありません」

「（なら、来んなよ！）」

私の心の声とは関係なく、翌日の朝にアンリエッタ女王を乗せた馬車が学院へと到着していました。

以前の使い魔披露の時とは違ってあまり男性のメイジ達の姿が見えず、彼女の護衛に入っているのは剣や銃を持った若い女性達が多

いよいよです。

同じ女性である、女王様の護衛をするからなのでしょいか？

そんな事を考えていると、アンリエッタ女王の方から話を切り出しました。

「あのヴァリエール公爵の後ろ盾で魔法衛士隊の隊長となり、マザリーニ枢機卿の信用も厚かったワルド子爵が裏切ったのです。他の魔法衛士隊を、すぐに信用しろというのも酷だと思いませんか？」

現在、グリフォン隊は新しい隊長、とは言っても元の副隊長らしいのですが。

その人物を隊長に、内部調査を含めた隊の建て直しを続行中であり。

それは他の二隊も同様で、とてもアンリエッタ女王の護衛に入る暇は無いとの話でした。

「今回の出兵では、魔法衛士隊は三隊全てが前線に行って貰います」

その能力と信用を疑われた近衛が、信用を取り戻すために前線に出る。

良くある話ですが、これにはもう一つの事実もあります。

この女性主体の剣と銃を使う新しい近衛が存在する以上は、お前らは用済みで前線で使い潰しても惜しくはないという事実もです。

たった一人の裏切りが、他の魔法衛士隊にも影響を及ぼしたのでしよう。

ただの一隊員にでも入隊には厳しい選考があつて、入隊後も厳しい訓練と自分を律する努力が必要な魔法衛士隊なのに。

その隊長が裏切ったという事実は、今までの努力を全て無駄にする行為だったのです。

数百年の伝統を誇る魔法衛士隊が、わずか数ヶ月で栄誉ある近衛を外される。

信用は一日して成らないものであるが、壊れるのは一日で済んでしまう。

私も、色々と参考にしないといけないのかもしれないかもれません。

「今では、アニエスが率いる銃士隊に私の護衛を任せています」

「銃士隊隊長のアニエス・シュヴァリエ・ド・ミランです」

魔法の使えない平民でありながら、『メイジ殺し』と噂されるほどの剣と銃の腕前で、シュヴァリエの称号を与えられ貴族となった女性。

凄い人ですけど、そういえば前世にもこんな人がいましたね。

男には負けられないと、バリバリと働くキャリアウーマン。

私には少し近寄り難いタイプの女性で、まさにこのアニエス隊長がそんな感じの人でした。

「隊長、周辺に怪しい人影はありません」

「グラモン家の護衛もいるからな。あまり彼らの職責を犯すなよ」

「了解です」

副隊長のミシェルさんの方が、個人的には話し易いのかもかもしれません。

ですが、職務中なのでそれは難しかったのですが。

「それでは、ご案内いたします」

私は、自身の錬金小屋やそれに付随する施設などにアンリエッタ女王を案内します。

彼女は両脇にアニエス隊長と、仲の良いルイズを従えて私から説明を受けるのですが、考えてみるとほぼ私の魔法によって出来上がる物なので、工場見学ほど面白い物ではないんですね。

見学は、すぐに終わってしまいます。

「あまり面白くなって申し訳ないです」

「いえ、非常に参考になりましたよ」

アンリエッタ女王は、私の錬金作業よりも、私が錬金を効率良く行うために改良された人員の配置や前後の作業手順の効率化などの方に興味があるようでした。

ある程度は、それまでの経験から家臣達が常に細かな作業手順や人員配置の改良を行っていたのですが、そこに意見を加えたのは私です。

前世で入社したばかりの頃、私は研修で金属を精錬する工場へと派遣されていました。

その工場では、トヨタなどでも有名ですが俗に言うところの改善活動が盛んで、それを真似て作業効率の上がる良いアイデアを出したら賞金を出す。

そんな事をやっていたのです。

「同じ人数で、他よりも効率的に結果を出す。これは、どんな場所でも利用可能ですし」

それには、下の提案を受け入れる度量も必要なわけですが、それは私の責任に属する部分ではないので何も言いません。

新女王である彼女の力量による部分ですから。

実は彼女がまだ見た事が無いアルミや水晶の錬金を見せてから、豪華過ぎず質素過ぎない昼食の後に、今度は才人が準備していた紫電改を上空で飛ばします。

「本当は、乗ってみたかったのですが……」

まず墜落の危険は無かったのですが、世の中には万が一という事もあります。

他にもアニエス隊長などの強い反対もあって、アンリエッタ女王は紫電改に乗る事が出来ませんでした。

「ところで……」

やがて時間は夕方となり、そろそろアンリエッタ女王が馬車に乗って帰る準備を始めた時、彼女は自分の馬車の中にルイズを呼び出します。

女の子同士の内緒話といった感じですが、なぜか私も呼び出されてしまいます。

「（俺もか？）ですが、アンリエッタ様の馬車の中に入るのは……」

「いえ、これはあなたに対するお説教なのです。ルイズという婚約者がありながら、あなたは他の女性にフラフラとしているとか？」

「あの……。全く、身に覚えが……」

一瞬キュルケの事が頭をよぎりますが、そんな事を考えている間に私は彼女に馬車の中に引きずり込まれてしまいます。

そしてそれと同時に、馬車の中にはサイレントの魔法がかけられました。

「さてと……。ティーボ・ド・グラモン伯爵殿。実は、あなたを狙う暗殺計画があるのです」

アンリエッタ女王の口からは、私の予想を超える発言が飛び出したのでした。

「アンリエッタ様も、年頃という事かね？　グラモン伯爵の交友関係にお説教だつてさ」

「陛下は、ヴァリエール公爵令嬢と幼少の頃からの遊び友達だそうじゃないか。グラモン伯爵に、浮気をするなど釘でも刺しているんだろうな」

「錬金で忙しいグラモン伯爵殿も災難だな」

「若い頃は、少しくらい遊んでもいいのにな」

馬車の外では、数少ない男性の衛兵達がそんな話をしていたようですが、実際の私はアンリエッタ女王から極めて内密な報告を受け

ていました。

「私を暗殺ですか？」

「はい、あなたの錬金でグラモン領と王国の経済は上向いています。ですが、それが都合の悪い人もいるのです」

多分それは、現在アルビオン封鎖条約で大陸との交易と人の流れがほぼ全て止められているレコン・キスタの連中なのでしょう。

「犯人は、アルビオンからの亡命者達に混じっているのですね？」

「それだけであれば、わざわざあなたに相談をする事も無かったですか……」

「と言いますと？」

「トリステイン政府の中に、裏切り者が存在するのです。それも、かなりの大物が……」

「どうやら、アンリエッタ女王はその人物の目処がついているようでした。」

「ですが、おいそれと追及は出来ません。今まで隠し通して来たのですから、相当に慎重深くなかなか尻尾を出さないのです。証拠も無しに貴族を裁くのは、周囲に大きな動揺を生みますし」

「つまり、どうかして現行犯でその貴族を捕らえたいという事なのでしょう。」

「ですが、女王陛下。その裏切り者が、どうしてティーボの暗殺を助けるのですか？」

「簡単な事です。その裏切り者は、鍊金殿が生きると不利益を被るからです」

「誰なんです？ その貴族は？ まさか、内緒にはしないですよね？」

「リツシュモン伯爵です」

その回答に、納得のいく私でした。

リツシュモン伯爵は王国の司法権を担う『高等法院』の長であり、約三十年近くもその職にある、先代王からもアンリエッタ女王からも信頼の厚い人物でした。

ですが、私は父から彼の他の面についても聞いていました。

『能力と人間性は、必ずしも比例するものではなくてな』

有能ではあるのですがかなりお金に汚い部分があり、その職権を乱用してかなりの財を貯め込んでいるらしく、他にも色々と腹黒い秘密もあると評判の人物でした。

ですが、彼は後任者を選び難いほど有能ですし、司法という職務の特殊性が彼を罷免し難いという現実もありました。

先代王の崩御からアンリエッタ女王の即位までの数年間で、彼は実質的にトリステインの司法を支配する男となっていました。

トリステインは貴族が統治を行う国でしたが、それでも確実に法

は存在していて、それに合わせて国は動いて行きます。

他にも、法に則って様々な権限を駆使し、その法の解釈においても彼の威光が働くとなれば、彼にお金が集まるのは当然と言えば当然でした。

貴族で『高等法院』の長である彼が、白い物が黒いと言えば黒いのですから。

多分、碌に法律書すら読んだ事もない目の前の女王様には、逆立ちしても叶わない相手なのでしょう。

私も、あまり人の事は言えないんですけどね。

私は理系人間で、法学とかは苦手で父の死蔵する本を斜め読みしたくらいですし。

「ギルド利権で、相当に恨まれているからな」

トリステインには、というかハルケギニアでは各種産業や商人達が強固なギルド組織を作っていました。

前近代的と言えばそうなのですが、あちらにはあちらの都合があり、私達も自分で販路を一から作るなど面倒なので、錬金物をギルドを通じて卸していたのです。

まあ、彼らと揉めても良い事は何も無いですしね。

そんなわけで、私達はギルドを通じてアルミなどの販売を始めたのですが、次第に増えるグラモン領での商売を見てか、彼らは次第にギルド組織の本部機能をグラモン領へと移すようになっていました。

勿論、王国側からの苦情が出るので見た目の本部はそのままですが、実質的な本部がグラモン領内になっっているギルドがかなり存

在していたのです。

「ですが、それでトリステイン中央政府の税収が落ちたという話は……」

「いいえ、むしろ税収は増えています」

ギルドの売り上げのかなりの部分がグラモン領に移って、売り上げに関する税収を父に奪われる形となったトリステイン政府ですが、全てのギルドがそういうわけでも無いですし、私の錬金した物は材料や加工品となってトリステイン中に出回っています。

むしろ、商取引が活発になって税収は増えているはずでした。

「簡単に言うと、賄賂が減ったんでしょね。リッシュモン伯爵殿は」

「そういう事です」

ギルドの分散化と、移動したギルドの面々が父と懇意となってその後ろ盾を得られた結果、無理にリッシュモン伯爵に賄賂を贈る必要が無くなったというのが、彼が私を嫌う理由でした。

父とヴァリエール公爵は、税金さえ納めれば特に賄賂など要求しませんし、その税額も特別高いわけでもありません。

更に、最近では二人で王城内で大派閥を形成しているので、ギルドも連中もいくら『高等法院』の長だからと言って、リッシュモン伯爵に無駄な経費を使う必要はないと感じたようでした。

次第に疎遠となり、賄賂を拒絶するギルドの長達。

彼らは商人ゆえに、王城内の勢力関係に敏感なようです。

それに、今の戦時体制で職権を乱用しての露骨な賄賂の要求は、父やヴァリエール公爵、それに今までは目を瞑って貰っていたマザリーニ枢機卿などに攻撃の材料にされてしまう可能性もありました。

「なら、今まで貯めた分で大人しく余生を送ればいいのに」

「人間の欲には限界が無いようですね。トリステインとしては税収が上がっているのに、例えそれを無くしても自分の取り分が欲しい。いくら有能とはいえ、良くもこんな男を信用していたものです」

「（私も、リツシユモン伯爵から見れば若造ですけどね。あなたは、もつと世間知らずのお嬢様に見えるんでしょうね）多少の賄賂くらいなら仕方が無いのかもしれませんが、そのためにレコン・キスタと手を結ぶのですか？」

「国を取るために組んだというのであれば、まだ野心に燃える貴族の本性として許せる部分があります。単純に、金のために目的が合致しているので手を結んだだけです」

人間の老いとは、恐ろしいものです。

三十年も上手く誤魔化していたものが、僅かな期間でボロを出して露見してしまうとは。

いえ、実は私は多少の賄賂くらいならば何も言いません。

実際に、アシルも何も貰わないのはおかしいので、商人やギルドの幹部からの贈り物をポケットに入れさせています。

律儀に報告に来るので、露骨に要求したり貰い過ぎなければ良いと言っているのですが、わざわざ報告に来るのです。

前世では、鉱山探索や採掘や鉱石の買い取り交渉などで、外国の

政治家や官僚が露骨に賄賂を要求すると上司が話していたので、『意外と日本人の官僚や政治家ってクリーンなのかも』と思っていたほどですが。

日本の会社も強かで、その分はちゃんと多めに利益を設定するのですが。

それに徳川家康も、賄賂が過剰なのも問題だが、何も無いのもかえっておかしいと言っていたそうですし。

「リッシュモン伯爵を、逮捕して排除するのですか？」

「はい、あんな金に汚い男を後方に残すのは不安ですから」

確かに、ガリアなどに大金を積まれたら平気でトリステインを売りそうな気配はしますが、そんなイメージを女王様に抱かれた時点で、彼の政治家としての命は終了なのでしょう。

「そのために、極秘作戦を実行するのですが……。ルイズ」

「はい。何でしょうか？」

「ティーボ殿を借りますよ」

「「はあ？」」

アンリエッタ女王の願いに、私とルイズは目を点にしてしまつたのでした。

「それで、俺はこんな民家に一人隔離されるか」

数日後、アンリエッタ女王から伝えられていた作戦が始まりました。

作戦とは言っても、別に私の出番はありません。

この事前に準備されたトリスタニア郊外にある民家に、秘かに待機するだけです。

つまり、所用でアンリエッタ女王の元を尋ねようとした私が、何者かに拉致されたというシナリオになっていました。

暗殺の対象である私が、いきなり拉致されて消えた。

レコン・キスタも、リツシュモン伯爵も。

他国でも同じような事を考えていたという可能性や、もしくはちやんと連絡が取れていない同志がいる可能性。

最後に、実はリツシュモン伯爵が裏切ったのではないかという可能性を考えて、双方が情報確認をするために接触を謀る可能性がある。

そこを、一網打尽にする作戦のようです。

現在トリスタニアの町は緊急警戒態勢が敷かれ、町の各地でも検問が行われていました。

そして、秘かにその情報を知っている父やヴァリエール公爵も、そ知らぬ振りをして人員を供出し、アシルにも同様に魔法学院から人を呼んで探索に加わらせていました。

ルイズも事情を知っているのですが、同じくアシル達の探索メン

バーに入っているようです。

「ご苦労様です。ティーボ殿」

「アンリエッタ様、どうしてここに？」

そこに、アンリエッタ女王と、先日に錬金工房に来た銃士隊副隊長であるミシエルさんが室内に入って来ました。

「アニエスは、私の命を受けて独自に動いています。私は、一緒に攫われた事にします。その方が、リッシュモンが動き易いでしょう」

という事は、この外出不許可の民家の中で女王様と二人きり……。じゃなくて、ミシエルさんも一緒ですか。

正直、息苦しい感じですね。

「それで、どのくらいここに居れば？」

「丸一日は、動きが無いかもしれません。相手次第でしょう」

私達は、そのまま三人だけの時間を過ごす事となります。

とは言っても、特に話す事も無いんですね。

それに、護衛役であるミシエルさんは部屋の隅で不動の体制を維持したままなので、正確には人数に加えられないかもしれません。時折り来る、監視の視線が厳しいですね。

美人さんがキリッとした表情をすると怖いものです。

こういう場面ではギーシュならばとも考えるのですが、あいつは

口は良く動きますけど、語彙が貧困でもし前世で合コンとかに出てもバカ扱いされる可能性がありますね。

「確かに、ここでジタバタしても仕方が無いですね」

私は、民家の部屋の真ん中に置かれた椅子から立ち上がると、事前に準備していた荷物入れの中からお茶の入った茶筒や急須、茶碗などを取り出します。

他にも、お煎餅や霰などが入った和紙製の袋を開けて同じく用意していた木製の容器に入れます。

こうなった以上は、久々に訪れたノンビリとした時間を満喫するだけなのですが、その際のお供はやはり甘い物も嫌いではないのですが、前世では大好きであったお煎餅が良いものです。

「あなたは、かなりマイペースなようですね」

「久しぶりに訪れた何もしない休日です。楽しまないと損ですからね」

私は、魔法で急須に入った水を適温まで上昇させると、そのまま三人分の茶碗にお茶を注ぐのでした。

四十一話

「ご自分で、お茶を淹れられるのですか？」

「普段は、メイド達や家臣に任せていますけどね。普通の良い歳をした人間が、お茶くらい自分で淹れられなくてどうします？」

急遽、アンリエッタ女王から自分の暗殺計画を伝えられた私は、その首謀者の一人と目されるリツシユモン伯爵を炙り出すべく、誘拐された振りをしてトリスタニア郊外にある一軒の民家に潜伏していました。

ところが、そこには作戦の成功を確実にするために、私の苦手なお姫様も同席していたのです。

ですが、そんな状況でも休日は休日です。

私は、事前に準備していた煎餅を齧りながら緑茶を啜っていました。

ここのところ忙しかったので、この国のVIPが目の前にいる程度でせつかくの休日を無駄にする必要はないと思っていたからです。

「ミシエルさん、あなたもいかがですか？」

「いえ……。私は、護衛の任務がありますので」

部屋のドアの入り口に立って警戒態勢のままのミシエルさんにお茶を勧めるのですが、彼女はそこから一步も動こうとはしませんでした。

「そのままの体勢を、一日ずっと続けるのですか？」

「それが、私の任務ですので」

彼女がそのままの体勢を崩そうとしないのを見た私は、以前にとは言っても前世で聞いた話を始めます。

「あのですね。人間が一度に集中できる時間が、どれほどだか知っていますか？」

「いえ……」

「せいぜい数分です。更に、本当に人間が集中できる時間は三つ数を数えるだけの間です」

丸一日私達を警護するために一日立ちっ放しになっていたら、もし時間が経ってから襲撃が来た際には、その人間はまず役に立たないはずですよ。

なぜなら、既に集中力を使い果たしているはずなのですから。

それと、集中力を持続できる時間については、前世で海外に行った時に政府軍の軍人から聞いた言葉です。

四六時中集中する事など不可能だからこそ、歩哨などには厳密な交代時間などがあるのだと。

ここにミシエルさんが一人しかいないという事は、外に本命の護衛達が隠れているか、ここが襲われる可能性が低いと考えて大丈夫でしょう。

「そんな、いつドアを蹴り破って来るかもしれない敵襲に備えて立

ついても体力の無駄ですよ。それに……」

「それに何ですか？」

「魔法が使えるのなら、定期的に周囲の様子をディテクトマジックで探れば良いのでは？」

「……」

私の指摘にミシエルさんは驚いたようですが、メイジがメイジの魔力を感じる事など少し慣れれば簡単な事です。

本来平民の女性しか入隊できない銃士隊のようですが、元貴族で平民に落ちたメイジも多いので、私は別に珍しいとも思っています。んでした。

「別に、無用な詮索なんてしませんよ。私だって、今はこうして色々大変ですけど、昔はただの妾の子ですし。錬金の特技が無かったら、貴族として生きていけるのかも怪しい存在でしたし」

「……」

「この状況で、肩肘を張り続けても疲れるだけですよ。冷めないうちにごうぞ」

「いただきます」

ミシエルさんは、一言だけそう言つと椅子に座つてお茶を飲み始め、それを確認した私は今度は荷物入れから材料を取り出して机の上で錬金を始めました。

休んでいないじゃないかという意見もありますが、神経を使う真珠などとは違って、一部金属や宝石などは少し『ぼーっ』としながらも作れるようになっていました。

休日にも、家で余っているプチプチなどを潰して時間を潰すのと同じ原理です。

やはり前世の影響で、欧米人形式の本当に何もしない休暇だと、時間が経つのが遅くてイライラする事があるんですね。
本当、貧乏性とは辛い物です。

そこで、ボーキサイト鉱石や、その他の見本として各地から送られて来た鉱石を使って宝石などを作る事にします。

基本的に、どんな宝石でも材料はオーソドックで手に入れ易い物が多いのです。

それが、時間の経過や温度や圧力によって変化するわけですが、魔法があると、その偉大な自然の力や高価で巨大な生産設備を吹っ飛ばせるという利点が存在します。

さすがに、ダイヤモンドやエメラルド、サファイア、ルビーなどは人前で見せるのは危険なので、まずは水酸化銅アルミニウム燐酸塩の試作を行います。

いわゆる、トルコ石という物ですね。

他にも、ヘマタイト（赤鉄鉱）は、鉄原子2個と酸素原子3個からなる酸化鉄の一種ですが、これも高品質な物は金属光沢に優れ、装飾品として使われるほどの、高級品はブラックダイヤモンドとも呼ばれています。

私も、昔はネックレスを持っていました。

色が渋いので男性に向いていますし、20カラット分の石を繋いだネックレスがサラリーマンの給料でも届くのが魅力的でした。

クリソコラは珪孔雀石とも呼ばれ、銅を含む鉱物が風化することによって生成するために銅鉱床付近で産出されます。

銅、ケイ素、酸素、アルミなどを含む水酸化化合物で、青や緑がかったガラス光沢の美しい石ですが、硬度が低いので樹脂や石英を浸透させてから宝石として使います。

更に、トルマリン（電気石）、カーネリアン（紅玉髓）、パイライト（黄鉄鉱）、スギライト（杉石）、マラカイト（孔雀石）、スノーフレークオブシディアン（黒曜石）、モスアゲート（苔瑪瑙）、ジャスパー（碧玉）、ブルーレース、ラピスラズリ（瑠璃）など。

私は、一人で黙々と持って来た鉱石を材料に宝石を作っていました。

本当は、目の前に座っている女王様とお話でもしないといけないのかもしれませんが、実は何を話して良いのかわからなかったのです。

なので、宝石の試作品作りに精を出して誤魔化す私でした。

「凄いものですね。どうやって錬金しているのですか？」

「どうって……。本物の材質を調べて、鉱石や石から同じ構成物質を取り出して組み直しました」

「聞きしに勝る天才ぶりですね。今までに数多の同じ考えの人がいましたが、今までに質の悪い錬金物の壁を越えた人は、あなただけです」

世の中には、私と同じく錬金で宝石を作る人はいますが、その出来はどうしても天然物には勝てず、仕方なしにお金の無い平民達が安価で購入しているという現実があるようです。

となると、これらの雑多な宝石類も商売になるはずですよ。

粗悪で商人に簡単に見破れる錬金物よりも高いが、天然物よりは安い。

富裕な平民層や、平均的な収入を持つ平民達にも婚姻用として売れるはずですから。

「ディテクトマジックで探れば、どんな物でも何十種類の物質で構成されている事がわかります。高品質品とは、余計な物質が極力ゼロに近い物で。それを作るのに一番効率が良いのは、同じ物質を多数含んだ材料を準備する事ですね」

元から違う原子を他の原子に変換しようとするから、魔力を無駄に使って錬金し切れない不純物が発生する。

これが、家臣達に教育を施した結果、彼らが高品質品を錬金し切れない最大の理由でした。

その構成物質の判定は、ディテクトマジックを使って感じる感覚を元に判別するのですが、この説明が非常に難しいのです。

かなり感覚的なものとなるので、私の感じる感覚と教えている人の感じる感覚の差が、実際の錬金でも解消されずに不純物が混じってしまう。

どうやら、私の教えている事はかなりの職人技に当たるものらしいようでした。

という事は、私の知っている原子や分子結合図などは、かなりの部分を秘密にして子供達だけに伝えれば、最低でも数十年。

物によっては、数百年は優位に立てるかもしれませんがね。

まあ、私が死んだ後なので結果の確認は不可能ですが。

それに、私の錬金を教えるのであれば、下手な先入観の無い子供の方が多分習得は早いはずなのですから。

「おかげで、あまり自由の無い生活ですけどね。私が錬金が好きなのが唯一の救いですか」

「トリステイン女王としては非常に心苦しく思いますが、これも国家百年の計のためです。我慢していただかないと。それに、あなたの才能を考えると、色々と縛り付ける必要もあるのです」

「私は、最悪一人でも杖さえあれば生きていけますからね」

今は錬金をする際に、家臣達を多数使って効率化して大量生産しています。私はどこに逃げて一人でも十分に生きていけます。となると、色々と私を縛り付けないといけない。少なくとも、アンリエッタ女王とマザリーニ枢機卿はそう考えているようです。

「別に、今のところは逃げる予定とかはないですねどね。多少扱き使われているせいか、心の中でちょっと不満が多いだけです」

「あなたは、正直なですね」

私は、錬金の手を止めないままアンリエッタ女王との話を続けます。

護衛役のミシエルさんを除いて一国の女王と二人きりなのですが、

なぜか二人ともかなり本音を出しての話となっていました。

これは、密室の魔力ともでも言うのですかね？

「それに、ルイズもいますしね」

私は、素直にルイズの事が可愛いと思っていましたし、既に将来は自分の妻になるものだと思っていました。

普通に考えて、ルイズは滅多に存在しないレベルの美少女でしたし。

前世では、学生時代からたまに友人などに誘われて合コンなどにも参加した事がありました。あれほどの美少女はまずお目にかかれませんでした。

あれほどでなくても、私などまず相手にされなかったのですが、それは今さらなので気にしない事にします。

それ他にも、シエスタ、タバサ、キュルケ、モンモランシー、アンリエッタ女王などもそうですが、どうやら、ハルケギニアは美少女と美女の産地のようです。

「ルイズを愛しているのですか？」

「はい」

あのキュルケの誘惑を振り切った時に、本能でフラフラと行きかけた私を止めたのは脳裏に浮かぶ悲しそうな表情をしたルイズでした。

最近、『自分は、枯れているのでは？』と感じる事の多かった私ですが、どうやらまだ女性を好きになる感情が存在していたようです。

ただの見た目は少年、中身は中年のスケベ親父でなくて良かったと思います。

「迷いませんでしたね、ティーボ殿は。以前にルイズから聞きました。ラグドリアン湖の園遊会であなたと初めて会った時に、水晶細工を貰ったのだと」

「アンリエツタ様には、真珠をお贈りしましたが」

「それは、グラモン家の息子としての王国に対する礼儀の一環ではないでしょうか。でも、ルイズには違っていたのでしょうか？」

「ええ、まあ……」

何の打算も無くルイズには水晶細工をあげた時から、私は彼女の事が気になっていたのかもしれないでした。

「ですが、他の女性にも色々と水晶などを贈っているそうですね。あなたには挨拶代わりなのでしょうが、ルイズは心配していましたよ」

私は、ルイズとアンリエツタ女王が二人きりになるとそんな話もするのかと少し感心してしまいました。

身分を越えた友情ですか。

私は絶対に無理だと考えるタイプの人間なのですが、例外もあるのかななどとも思い始めていたのです。

「あなたの考えている事はわかります。女王は絶対者であり、国内に同等の人間など存在しない。だから、友人など本当は作れるはず

はない……」

「全くゼロとは言いませんが……」

非常に、線分けが難しいという事なのです。

過去の歴史を見ると、王や皇帝に存在した友人という存在は大抵は自重が出来なくて自爆していますし。

『王の友人たる俺が！』と周囲に傲慢に出て顰蹙を買ったり、能力以上の優遇を受けて周囲との輪を乱し、自分の下に自分に懇意にしているというだけで能力の無い人間を配置して国力を落としたりと。

君臣の関係とプライベートを、完璧に分離できる。

本当に自分を律する人でなければ、かえってその人物を不幸にしてしまうからなのです。

「あなたは、心からルイズの事が心配なのですね」

「少し前までは、妹のような存在でしたからね。うちは、男ばかりでムサかったですし」

実際に、前世と合わせると四十歳を超えていますしね。

それにルイズは小さいので、少し庇護欲を誘う存在なのです。

「羨ましいですね。私には、そんな人は……。ティーボ殿は、ウエルズ様の事をどう思いますか？」

いきなりの話題チェンジでしたが、やはり彼女は想い人であったウエルズ皇太子を失った事をいまだに引き摺っているようでした。

「正直、お会いしたことがないですからね。人間としては良い人のようですけど、王族としては失格なのでしょうね」

ニユーカツスルの城に籠り、王族の意地を見せるために最後の抵抗を行う。

私には、あまり頭の良い行動には見えませんでした。

アルビオン王家の直系の血を引くのは自分だけなのですから、そこはどんな卑怯な手段を使っても亡命をするべきだったのです。

どうせトリステインに気を使っても、レコン・キスタは実際に責めて来ました。

なぜなら、それが彼らの目的だからであり、そんな事にも気が付かなかったウエルズ皇太子は、やはり世間知らずの王子様だったのでしょう。

私には、そのくらいの事しか思い付きませんでした。

「そうですね。実際に、こうして私が苦勞しています。本当に、ズルイお方です」

アルビオンとトリステインの統合も、わざわざマリアンヌ太后を引つ張り出さなくても、亡命させたウエルズ皇太子をアルビオン王として即位させてから、アンリエッタ女王と結婚させればそれで済んだ問題でした。

その前にはアルブレヒト3世との婚約もありましたが、これは結局は消えていましたし、その流れを確認するにはやはり彼は生きていなければいけなかったのです。

「泥水を啜りながらも、アルビオン王家復活のために生き延びる。彼の選択肢には、それは無かったのでしょうかね。王家の名誉のため

に、潔く最後まで戦う。評価してくれるのは、一部の歴史書だけでしようし」

私ならばきつと、国を取り戻せなくても生き延びる道を選んだでしょうし。

何しろ、元平成日本人ですからね。

滅びの美学など、全く理解できませんから。

「全く褒める要素はゼロですか……」

「迷惑をかけたくなかったから亡命をしないという優しさのみしか……。それに、結局こうしてアンリエッタ様や私達にも迷惑をかけています」

「そうですね……。迷惑などと考えないで、トリスティンに逃げて来て欲しかった……。ただ、それだけだったのです……」

最後にアンリエッタ女王の本音が聞けたような気がしましたが、その後は本当に普通の世間話をしながら、アニエス隊長がリッシュモン伯爵を捕らえる事を期待して待ちます。

「ミシエル副隊長！ アニエス隊長より、リッシュモン伯爵が捕らえられたと！」

とそこに、お待ちなかの報告が入って来ます。

小屋の外を警備していた銃士隊の隊員が、報告のために室内に飛び込んで来たのです。

「そうか！ よし！ 陛下、グラモン伯爵殿。お聞きになられたと思いますので、王城へと戻りましょう」

「わかりました」

「やっと終わったのか……」

尻尾を出したリッシュモン伯爵が無事に捕まり、私への暗殺の危機も去ったので、ミシェル副隊長の誘導で二人で民家の外へと移動するのですが、そこで私達は思わぬトラブルに巻き込まれる事となるのでした。

「ふふふつ、まさかこんな場所に二人でおわすとはな」

「リッシュモン！ あなたは！」

安全になったという話なので王城へと戻ろうと外に出た私とアンリエッタ女王でしたが。

外に出ると、その捕まったはずのリッシュモン伯爵が、彼を守る十名ほどの屈強そうな男達と、一部銃士隊の隊員が、武器を構えて私達を待ち構えています。

どうやら、私達は逆に彼に待ち伏せされてしまったようです。

「我々は、随分と古典的な罠に引っかかったんですね」

「リッシュモン！ あなたは、アニエスが追いかけて捕まえたはず！」

追っていた犯罪者に逆に待ち伏せをされるという手に引っかかって呆れてしまう私自身と、なぜリッシュモン伯爵がアニエス隊長の追跡を振り切ってここに居るのか不思議で堪らないアンリエッタ王女と。

それでも、ただ一つわかつている事は、アニエス隊長はリッシュモン伯爵の捕縛に失敗して逃げられたという事と、アンリエッタ女王の子飼いの部下達や、一部銃士隊にまで裏切り物が存在している、この場所が漏れていたという事実でした。

「あの時折り、私に鋭い視線を向ける小娘の事であろう？ あの平民ずれの似非貴族は、ワシに恨みがあるらしいからの。ダングルテールの生き残りだとか？」

「アニエスがですか！」

相手を詰問しているはずが、逆に相手に衝撃の事実を伝えられて思わず質問してしまう。

やはり、老練さではリッシュモン伯爵の圧倒的勝利のようでした。

それと、もう一つ残念なお知らせがあります。

私達の護衛をしていたミシエル副隊長でしたが、彼女も二名の部下と共にこちらに杖を向けていました。

「ミシエルさん。その両脇の小娘達は、アルビオンからの亡命者を偽ったレコン・キスタの連中かな？」

「ふっ、その世間知らずの小娘より、よほど頭が回るらしいな。グラモンの妾の子は」

「リッシュモン伯爵、今さらあなたに褒められてもですよ。しょうもない利権が理由で、あなたに暗殺されかけていますし。ところで、どうしてこんな裏切りを？」

私は時間を少しでも稼ごうと、リッシュモン伯爵に質問を続けます。

この状況で戦う事など、まずあり得なかったからです。何しろ、普通に数えて十二〜三対二の状況ですし。

「その前に、お二人には杖を捨てていただきたいものですか」

「やっぱり、駄目か」

「……」

リッシュモン伯爵に促されて、私達は杖を捨てます。

「私が裏切った経緯ですか？ 簡単な事です。沈みかけている船に貴族が何の未練がありませんか？ この国の過去数年間の出来事を思い返してみればいい」

私も、言われた通りに思い返してみます。

先代の王が予想外の若さで急死し、その後を王妃であったマリアンヌが継ぐ事を拒否し。

では、幼いアンリエッタ王女を飾りでも王位に就かせるかといえどもそれもせず、一国の王位を空位にするという異常事態。

しかも、この国は大国ではなくて両脇を大国であるガリアとゲルマニアに挟まれた状態なのです。

確かに、全く将来の展望に希望が持てない環境にはありました。

「先ほどのダングルテールですが。誰しも、好きで村など焼いて住民を根絶やしにしたいとお考えですか？」

「ダングルテールは、疫病の発生で仕方なく焼かれたと……」

「そんな甘い認識だから、私はあなたを裏切ったのですよ。いいですか？ 当時ロマリア宗教庁とアルビオンは、自国に増殖する新教徒達に次第に危機感を抱いていたのです。しかも、更にその新教徒達がアルビオンでの弾圧から逃れるべく、トリステインへと根を降ろした。新教徒の国外への輸出ですよ。そこで、我々は早めにその火種がトリステイン国内に広がらないように処分する事に決めました。女王になったのであれば、その辺の事情くらいは知っていて欲しいですな。綺麗事だけでは国は治まりませんので」

実は、ダングルテールの事件の大体の全容は、私も知っていました。

ミスタ・コルベールの事を調べさせている内に自然と判明してしまったのです。

ですが、私はこの件で何かをしようなどと思った事はありませんでした。

既に終わっている件ですし、確かに政治は綺麗事だけでは済みません。

多分、ロマリアからの圧力をかわすためと、アルビオンへと恩を売るためにダングルテールは焼かれたのでしょう。

実際に、ヴァリエール公爵や父達も知っていたようですが、口を閉ざしていたようですし。

「それで、ミシェルさんはどうして裏切りを？ やはり、この国に希望が持てないからですか？」

「違う！ 私の両親は昔は国に忠実な貴族だったんだ！ それを、無実の罪で陥れた癖に！」

「こちらは、個人的な感情に根ざしているようでした。

ミシエルさんの両親の罪状が本当に無罪なのは、今の時点では確かめようのない事でしたが、少なくとも彼女は両親を国から処刑されてそれを恨みに思っているのです。

「本当に、この国で大役にいる事は難儀でしたな。まあ、それももうすぐ終わるのですが……」

「国家の要職にいれば、どこの国でも大変でしょうに。そのご褒美であつた賄賂やら役得で捕まりそうだから、炙り出されて動いただけでしょうか？ せめて動くなら、先のレコン・キスタ軍侵攻の際に動くべきでしたな」

私の指摘というか嫌味に、リッシュモン伯爵は一瞬だけ顔を顰めさせましたが、すぐに気を取り直して話を続けます。

「強気を言っていていられるのも今の内。さあ、我らと共に来ていただきますよ。言っておきますが、抵抗はしない方が安全のためかと」

「俺は、便利な鍊金装置として。アンリエッタ様は、始祖の血筋の良い牝馬として高く売れるからですか？」

「そこまで理解しているのであれば、大人しくして欲しいものですな。鍊金殿」

「ああ、それともう一つ」

私は、私達を捕縛しようとする護衛達に命令を出すリッシュモン伯爵に対して最後に言いたい事を話します。

「世の中には、戦訓という言葉がありません」

「戦訓？ 先の戦いで的事かな？」

「いいえ。私への護衛を弱めて、ワルド子爵に殺されかけた時のですよ。アンリエッタ様、少し失礼して」

私はそう言ったのと同時に、彼女を素早く抱き抱えてから魔法のルーンを唱えます。

使った魔法は、先のギーシュとの決闘で使われた自分の体をドーム状に包んで防衛する魔法でした。

私は抱き抱えたアンリエッタ女王と共に、強固なセラミック製のドームに包まれます。

「なっ！ 杖を奪ったはずなのに！」

どうやら、老練なリッシュモン伯爵ではありませんでしたが、実践の経験では私よりも劣る部分があるようでした。

杖を失えば魔法を使えなくなるメイジが、一本の杖しか持たないなんて無防備にも程があります。

私は、日頃から付けている指輪やネックレスやベルトまで、全て予備の杖として契約をしていたのですから。

そして更に、外にいるリッシュモン伯爵達を悲劇が襲います。

矢が飛んで来る『ヒュン』という音や、連続した銃声や、多くの

人間の駆け足など。

多分、私を護衛しているアシルが、一気にリッシュモン伯爵達への攻撃を始めたのでしよう。

「ティーボ様、もう大丈夫ですよ」

外からアシルの声が聞こえたので魔法を解くと、そこにはアシル他私の家臣達と、グラモン家からの応援の兵士達に、アニエス隊長とルイズに才人という総メンバーが揃っていました。

「凄い攻撃だったな。全員、死んだのかな？」

私は、大量の矢が突き刺さり、銃創と思われる穴から血を吹き出し、魔法で体の一部が黒焦げの人間を搬出する兵士達に視線を送りながらアシルに質問をします。

「……」

「女王陛下、気分が良く無いのは私も一緒ですが。死体くらいで動揺している場面を臣下に見られないようにしてください」

無茶なのはわかっていましたが、私は彼女に対してそう進言します。

ただ、やはり無理があったようで彼女は私にしがみ付いたまま離れようとしませんでした。

「やはり、メイジなのでしょうね。二人ほど生きていましたか……」

そこには、逮捕して取調べをするつもりなのでしょう。

重傷となって治療中のミシエルさんと、既に治療しても助からな

いと思われているのか？

その場に放置されている、リッシュモン伯爵の姿がありました。

「全盛を誇った大貴族の最後としては哀れを誘いますね」

「そうかな？ お前の将来の姿だとは思わないのか？ グラモンの若造よ……」

瀕死の重傷を負いながらも、リッシュモン伯爵はしっかりと口調で私との会話を始めます。

「確かに、私は汚職政治家であった。だがな、この二代続けて政治オンチがトップのこの国では、何かがあつた際に財力が無いと潰されるだけであつたからな。例え、どんなに能力があつてもだ……」

「だからと言って、私も自分の身が可愛いですからね。あなたの実入りを元に戻すために殺されるは嫌ですよ」

「同じ事だ……。お前は、まだ他の人には出来ない方法で財を稼いでいる。そして、そのために膨れ上がった経済を己の国の力だと勘違いしているマザリーニのバカとそこの小娘……。お前は、最後は惨たらしい最後を迎えるだろうよ……」

「リッシュモン！ あなたは！」

「では、その若造が今消えたら、女王陛下はいかなる政策を持って貴族達や平民達を納得させるのです？」

リッシュモン伯爵の問いに、アンリエッタ女王は何も言えないままでした。

「王国に使い潰されるか、私と逃げて国外で錬金装置として利用されるかだ。随分と味気ない人生だな。グラモンの若造よ……」

「まだ喋るか！ リツシュモン！」

「ふん、私とスキルニルを間違えて、大死闘を演じた大バカ者の癖に……。その分、仇は取ったようだが……」

アニエス隊長は、いつの間にかスキルニルと入れ替わっていた偽リツシュモン伯爵を地下水路まで追いかけて死闘を演じて止めを刺したものの、すぐに偽物と判明してあわててこちらまで駆け付け。

魔法で大量の矢と銃弾をかわしていたリツシュモン伯爵に、致命傷となる一撃を剣で与えていました。

まだ喋り続けるリツシュモン伯爵は、胸に刻まれた斬創を指でなぞっていました。

「あなたの言う通りかもしれないですね」

「ティーボ！」

「ティーボ殿！」

ルイズとアンリエッタ女王には異論があるようでしたが、私はリツシュモン伯爵の意見に賛同している部分もありました。

歴史上で全盛を誇った人物が何かを間違えると、一気に坂道を転がって滅亡へと進んでしまう。

良くある話ではあったからです。

私もこの錬金という特技を持つ以上は、その道から逃れられないのかもしれない。

「とはいえ、これは私の人生です。人を暗殺しようとしたり、攫おうとしたあなたに、とやかく言われる筋合いは無いですね。もし危なければ自分で何とかしますよ。出来なければ、あなたが行く地獄で再会するだけです」

「ふん……、もしそうだったら、先輩として扱ってやるわ……」

そこまで話すと、リッシュモン伯爵はそのまま目を閉じてしまいます。

どつやら、これでご臨終のようです。

「ようやく終わったな……」

「ええ。これでリッシュモン伯爵だけでなく、かなりの汚職貴族を一掃できるはずですよ」

アルビオンへの出兵を控えているトリステインにおいて、財政を含めた統治の効率化は大きな問題であり、今までのような王が不在なので少しくらい好き勝手にやってもというのは許されなくなっています。

その成功者で代表者であったリッシュモン伯爵は、今こうして反逆者としての最後を迎えたのですから。

彼は優秀な政治家でしたが、それとこれとは話は別であったのです。

「ところで、ティーボ殿は……」

アンリエッタ女王は、先ほどのリッシュモン伯爵の言葉が気に入っているようでした。

私が、トリステインの政治・権力闘争の果てに散々王家に利用されて惨たらしい最後を迎える。

自分はそんなつもりは無くても、それを私が信じてしまえば亡命してしまう可能性もあるのですから。

実際に、『あなたの言う通りかもしれないですね』と言っていますし。

「今はいいじゃないですか。私はこの国に必要とされて、家族も友も婚約者もいます。将来の事なんて、誰にもわかりませんよ。リッシュモン伯爵も、わからなかったらここで屍を曝していますし」

私としては、今はグラモン分家当主として王国に貢献して日々の生活を送るしかないのですから。

「それにしても、最後の最後で酷い休日だったな」

「あら、私と二人きりの時間を過ごせましたわよ」

「あまり色気は無かったですけどね」

そこで、笑って終わりなら良かったんですけどね。

私達は、一つ大切な事を忘れていました。

周囲からの攻撃を防ぐために急いで張った防衛のための魔法で、私はアンリエッタ女王を抱き抱えていたのですが、なぜか魔法が解けてからもそのままの体勢を維持していたんですね。

死んだりリッシュモン伯爵も、偉そうな事を語りながら彼女を抱き抱える私に実は呆れていたのでしょうか？

台無しになるので、敢えて気が付かない振りをしていたのでしょうか？

「ティーボ！ 女王陛下をいつまで抱きしめているのよ！」

ルイズは、私達に駆け寄って来てからその言葉の割にはアンリエッタ女王を私から強引に引き剥がし、替わりに自分がその場所に納まっていました。

「あのさ……、ルイズ。これは、あくまでも魔法をかける際の緊急姿勢というやつでさ」

「ティーボが無事で良かったわ」

ルイズは、そのまま婚約者の権利とでも言わんばかりに私に抱き付いていました。

そして、私がふとアンリエッタ女王の方を見ると、彼女が少し残念そうな顔をしているのを見てもいます。

「（まさかな。俺は、別に彼女の事なんて……。あの表情は、必然的とはいえ彼女を抱き寄せてしまった俺の男の本能が勘違いをさせているんだ。きっと！）」

私は、これが自分の勘違いであると結論付け、その後は特に何もなく休暇になったのが良くわからない休日を終えるのでした。

四十二話

「先日の、反逆者リツシュモンの討伐の功に報いるために、アシルド・オリヴェイラ殿に準男爵とシュヴァリエの爵位を授けます」

「ありがたきしあわせ」

「これからも、鍊金殿を支えてあげてください」

「この身に変えましても」

自分の過去の罪状が暴露し、他にも私の暗殺を目論んでいたり、実はレコン・キスタと繋がっている事実が知られたリツシュモン伯爵でしたが。

彼を動揺させて尻尾を出させて処分するために、誘拐されたと偽ってトリスタニア郊外にある民家に秘かに隠れていた私とアンリエッタ女王の真意をすぐに見抜き。

逆に待ち伏せをして、私達を国外へと拉致しようと企みました。

結果は、以前よりも格段に増えた私の護衛達によって殺されてしまったのですが。

アンリエッタ女王と、その子飼いである銃士隊初の計略は、老練な彼によって見事にその裏をかがれるという結果に終わっていました。

頭に血が昇ったアニエス隊長は、リツシュモン伯爵と繋がっていた副隊長であったミシエルを二人の護衛役として派遣するというミ

スを犯して、私達の潜伏先をダダ漏れ状態にしてしまい。

拳句に、自分が追いかけて止めを刺したリツシュモン伯爵は偽物のスキルニルであったりと。

私に、アシル達や父達からの応援の護衛があつたので大事に至りませんでしたがおかげでアシルに叙勲と報償を与える羽目になっていたようでした。

とはいえ、リツシュモン伯爵以下数名のレコン・キスタと通じていた貴族達や、他にも色々と職権乱用や汚職の激しい貴族達が捕まつて領地と財産を没収され、王国の財政基盤を強くするという効果が出ていました。

戦後にこれらの領地が下賜される可能性も高く、トリスティン貴族達は誰もが気合を入れて出兵の準備に取りかかっていました。

「ここ最近、良くいらっしやられますな。女王陛下は」

「まだ五回目くらいだろうか？」

「王城でならともかく、女王陛下自ら行幸なさる事は少ないのですよ」

叙勲と報償を貰つてご機嫌なアシルが、私に説明をします。

このハルケギニアにおいて、役職のある大物や城勤めの連中を除き、地方の領地を任されている貴族やその子弟がそう簡単には女王陛下と直接は対面できないと言つのです。

「行幸は、往復の時間を考えますと非効率ですしね」

交通機関が発達していないので、余計に女王陛下自らというのは少ないのかもしれませんが。

彼女は、自分で自分の事を『籠の中の鳥』とか揶揄しているくらいですし。

「それでは、サイト殿。王城までお願いしますね」

「了解です」

ところが、その移動にかかる時間を大幅に短縮する方法が存在しました。

私の紫電改と、その操縦者である才人です。

どうやら、アンリエッタ女王はアルビオン出兵に向けて多くの貴族達に気合を入れて欲しいらしく、国内の色々な場所に顔を出すために才人を運転手代わりにするようになっていました。

ここや、国内にある兵器工廠や、造船所や、主要な貴族達の館など。

前日にフクロウ便で予定来訪時間を告げてから、王城横に造成した臨時の滑走路に才人を呼び寄せていたのです。

最初は、墜落でもしたらと多くの反対が上がったのですが、よく考えると紫電改の状態は才人が触ればすぐにわかるので、状態が悪ければ飛ばなければ済む問題なので、強引にアンリエッタ女王が捻じ伏せているようでした。

護衛も、才人はそこそこ強いですし、移動先の警備体制が確立されていない場所には行かないのでそれも問題にはなりませんでした。予定がわかつているのであれば、先行するという手もありますし。

それに、彼女が行けるのは最低でも滑走路と燃料が用意できる人物が管理している場所だけです。

自然と、行ける場所も限られてきます。

「俺はタクシー運転手みたいだな」

「せめて、専属運転手とかにしておけ」

周囲に聞こえないように、才人に小声で呟く私でした。

とはいえ、このタクシーは非常に運用コストが高いのですが、王族が使うので問題はないのかもしれないかもしれません。

ただ、それよりも困った問題が一つ発生しているのですが……。

「アシル、一休みしてから作業に入るか」

「そうですね。シエスタがクッキーを焼いたそうなので」

子供の頃から錬金を続けていて感じたのですが、精神力イコール魔力を消耗する魔法を限界まで使うと、なぜか異常にお腹が空くのです。

感覚的に言うと、大量のカロリーも持って行かれる感じですかね。だからなのでしょうか？

マリコルヌを除き、学院で朝からあんなにクドイ食事を三食取ってもあまり肥満に悩む貴族はいないようですし、ルイズはあの小さい体で見た目よりも食べます。

更に、女性という事もあってデザートにも目がありませんし。

ただ、中年以降になると基礎代謝が落ちると、段々と魔法を使

う頻度が減るので太ってくる人も多いみたいです。

モット伯爵とかがそうなのですが、彼も昔はかなりの美男子であったのですが、加齢と共に代謝が落ちてお腹周りが少し出てきてしまっているようです。

ちなみに我がグラモン家ですが、我が家で太っている人間はいません。

『肥満で動けない軍人など、何の役にも立たない』という家訓から、父が普段の節制を奨励していたからです。

現実には、経費削減のために金のかかる食事などを禁止していたのですが、その中でも例外なのは自分の金で好きな食事をしている私なのかもしれません。

とはいえ、私の好みは東方風料理と称される和食なので、あまり脂っこい物はなかったのですが……。

そんなわけで、俗に言うところの十時と三時のオヤツを食べるのですが、それに最近良く付き合う人物がいたのです。

「では、参りましょうか。ティーボ殿」

「あの……。女王陛下は、色々と予定が詰まっているのでは？」

「移動時間の短縮によって、多少の余裕が出来るのは素晴らしい事ですね」

恐る恐る聞くアシルに対して、アンリエッタ女王は特に問題ないように答えます。

紫電改をタクシー代わりに使えば、通常であれば往復に何日もかかる場所に行くのにも大幅に時間が短縮されるからです。

これからアルビオンに攻め込む予定の彼女が、自らハツパをけかけに出かける場所は非常に限られますしね。

小物の貴族がいくらそれを願っても、滑走路と燃料の準備など出来ませんし。

「今日は、夕方までに王城に戻れば大丈夫ですので」

「はあ……」

爵位と報償を貰ったのは嬉しいのですが、せつかくのお茶の時間にこの国で一番偉い人が同席する。

私と同じで小物貴族臭が抜け切らないアシルとはして、何を食べたのかわからなくなってしまふ時間となってしまうのでしょうか。

錬金小屋の隣にある私のセカンドハウスでは、既にシエスタがお茶とお菓子を準備して待っており、ルイズも私を待っていたようです。

「ルイズ、私も一緒にご相伴させていただきますね」

「そんな、女王陛下にお出しするような物では……」

今までにもあったような、いかにもな二人の遣り取りですが。

実は、最近のルイズは少しアンリエツタ女王に隔意を感じているようなのです。

私は、この前二人きりで話をした時に、同じ一人の人間として迷いながらも女王様をしている彼女の話を聞き、あまりそういう物は

感じなくなっていたのですが。

逆にルイズは、必然的とはいえ私が彼女を抱き抱えている場面に不安を感じたらしく、ここ三回ほど短い期間で私の工房に視察に来る彼女に不信感を抱いているようでした。

特に必要性もないのに、そんなに頻繁に来るには何か目的があるのではないかと。

しかも、彼女は必ず食事なりお茶を飲んでから帰るので、余計にそう感じているのでしょう。

「ルイズ。ここの食事やお茶は、王城で出されてる物とそれほど違いはありませんよ。ですよね？ ティーボ殿」

「ええまあ……」

元日本人だからなのか？

私が一番お金を使っている分野は、きっと食事に関してだと思います。

高級だとか質素だとかは関係なく、不味い物を出されるとヤル気が落ちてしまう性分なので、専属のコックを雇い、後は状況に応じてシエスタなどにも色々と作らせていたのです。

シエスタは、やはり日本人の血を引いているからなのか？

和食に関する調理が、専属のコックよりも上手だったものですから。

ただ、この食事は人によっては貴族に相応しくないと言う人も多く、余計な事を外野に言われると五月蠅いので、あまり他人に食べさせたくないんですよね。

才人は勿論、ルイズやギーシュなどは、『変わっていて美味しい』

と言って文句は言わないんですけど。

「このクッキーは、少し変わっていますね？」

「オカラを材料にしていますから」

「オカラですか？」

このハルケギニアの世界で、『冷奴』を食べたい。

前世の私は、海外に赴任していた時に休日に豆腐を自作するほど豆腐好きでしたが、冷奴には豆腐の他にもシヨウユ、鰹節、ネギ、シヨウガなどのハードルがあり、私はその解決にかなりの時間を要していました。

それでも、今ではダイエット食品として他者に販売するほど生産規模を拡大していたのですが、その製造過程で出たオカラを材料にシエスタがクッキーやドーナツを作っていたのです。

「試作品でもあります」

どこのどの時代の女性も、美容やダイエットに大きな興味がある。

そこで、このような豆腐や寒天などを使ったダイエット食品や、母と組んでの美容効果の高い化粧品の販売など。

以前のグラモン家では考えられないほど、様々な事業を立ち上げてお金を稼いでいたのです。

とはいえ、そろそろ戦争が始まるので全て左前で戦費に流れてしまっているのですが。

全額ではなくて、かなりの部分が領地開発に使われている事が唯一の救いでしょうか？

「ティーボ殿は、本当に多才なのですな」

「そんな事はありません。人間には出来る事と出来ない事がありますので」

ここ数回の三時のお茶会では、アンリエッタ女王がとにかく良く私に話しかけてくる事が多く、私は臣下の貴族としてそれに答える事が多くなっていました。

私の前世の知識も多少交えた受け答えを、彼女は興味深そうに、時には笑いながら聞いているのを見て、最愛の人であるウエルズ皇太子を失った心の痛みが少しずつではあるが癒されつつあるのを確認する私でした。

「ティーボ様も、大概この手の事に疎いというか……。女王陛下がティーボ様を見る目は……。とは言っても、それを私が指摘するのもな……。ルイズ様も感付いていて、少し機嫌が悪いのに……」

誰も居ない一室で、アシルは一人ストレスで胃に穴が空きそうになる自分に嘆くのであった。

「思ったよりも、燃えてないな」

「半分、出来レースだったからでしょうな」

そして時は飛んで、レコン・キスタ軍による、アルビオン侵攻から約二カ月後。

私は、アシルが纏めるグラモン分家諸侯軍と共に、アルビオン王国の港湾都市であるロサイスに足を踏み入れていました。

ここまでの経緯を軽く説明しますと、トリステインとゲルマニアは無事に軍事条約の締結に成功し、両軍はマリアンヌ太后をアルビオン女王として王都ロンディニウムに送り込むべく最大限の軍の動員を開始。

この二ヶ月間は、派遣する軍の準備を士官などの教育と平行して行いながら、ガリアとロマリアも参加しているアルビオン封鎖網を堅持すべく、空軍艦隊が訓練がてらに密出入国や密輸を取り締まりながら、アルビオン本国の輸送網を徐々に締め上げていました。

そうでなくても、アルビオンは先の内戦で農地などが戦乱で荒れ、トリステイン侵攻の際にも無茶な徴発な行い。

更に、この国には食糧自給率が100%に届かないという現実が存在します。

本当であれば、その程度の期間貿易を断たれても飢え死にする人などいません。

アルビオンもバカではないので、備蓄くらいはしているからです。

ですが、先の見えない他国との貿易の停止と、次第に切り崩されていく備蓄に、食糧不足を見越した商人達による売り惜しみと。

更に指導者であったクロムウエルがトリステインの獄に繋がれているという事実もあって、既にレコン・キスタ軍はガタガタの状態にありました。

一応の指導者はいるのですが、力のあるトップが存在せずに特に軍司令官などの派閥争いが激しくなっていたのです。

俗に言うところの、内ゲバ状態ですね。

当然、この状況なので秘かに潜入させた工作員達による離反工作も盛んとなり。

多くの貴族達が違う派閥への裏切りや離反や、二重スパイなどの行動を行う者も存在し、その影にはトリステイン側からの工作などの影も見えと、お互いを疑心暗鬼にさせていました。

そんな中で、つい数日前に行われたロサイス占領作戦は、事前にレコン・キスタ軍側の約半分がこちらに裏切り、残存戦力も才人が飛ばした紫電改や竜騎士母艦などから発進した竜騎士達によって無力化されていました。

実は、私の開発したタルに入ったナパーム弾が正式に採用されたのです。

王軍の技術者達は、私の作った物を見本に懸命に試作を重ねて竜騎士が持つても大丈夫な小型の物を製造。

多少、品質に問題があっても燃えれば大丈夫という事で、この戦いでは停泊中の艦船などに落とされ。

その後に艦船からの砲撃と、陸戦隊による強硬突入によって、レ

コン・キスタ空軍の艦艇は、降伏するか飛び立てないままで大半が無力化されてしまいました。

ナパーム弾は有能なメイジの使う火系統の魔法には威力は劣るものの、一端着火すると、長時間燃えて水での消火が困難であるという利点が存在し。

おかげで、レコン・キスタ側の艦艇は飛び立つ事すら出来ないまま地上で燃え続けていました。

最大の戦力を失ったレコン・キスタ側の戦意は完全に消失してその大半が逃亡か降伏し、占領確認後に私達は無事にロサイスの地に降り立っていました。

「ティーボ様。バート商会他、在アルビオンの商人達が挨拶に来ていますが」

多くの兵士達や、近郊の農村や町などから雇われた住民達がロサイスの復興と拡張工事をしている様子を眺めていると、アシルが私に客がある事を知らせます。

「早いな。ここが落ちて、まだ二日だろう？」

「商人ですからねえ……」

「俺がいるのがもう知られているのか？」

「商人だからでしょうね」

長年商人との交渉を行って来たアシルは、商人の金稼ぎにかける情熱と、そのために情報を得る労力を惜しまない部分を良く理解し

ているようでした。

「会っておいて損はないかと」

「そうだな。近隣の住民達への慰撫工作もあるからな。というか、何で俺がそんな事を気にしないと？」

父から中型の少し古めの輸送船を借りてこの地に上陸した私ですが、私には大切な任務があるそうです。

この戦いで一番重要な事は、何をおいても補給にあります。他の陸続きの敵国とは違い、浮遊大陸であるアルビオンでは既に食糧が不足気味という事もあって、軍に物資を運び込むこのロイサスの死守と機能維持が一番重要な任務となりました。

諸侯軍を含めたトリステイン軍が四万人と、援軍のゲルマニア軍が三万人。

合計七万人を食べさせるために補給を行うわけですが、このために運行する船の数は膨大です。

大量に鹵獲した船を修理して再就役させたり、ガリア商人やロマリア商人などからも買い付ける算段をしていますが、そのためにはこのロサイスの港を現在よりも拡張する必要があります。

しかも、拡張工事の間も港は機能していないと駄目なのです。

アンリエッタ女王とマザリー二枢機卿は、ここに王国が動員可能な土系統のメイジを出来る限り動員し、他にもここが陥落させられないようにかなりの数の王軍を配置していました。

そして、私たちですが……。

もうおわかりだと思いますが、港に入港する商人達への代金代わりのアルミニウムや水晶などの販売を続け、簡易式ナパームの製造や、港の工事も、これから占領する予定の拠点までの道路拡張工事の手伝いなど。

やはり、完全な後方支援要員となっているようでした。

アシルが集めた合計五百名ほどのグラモン分家諸侯軍に、グラモン本家からの援軍としてあまり荒事が得意ではない土系メイジ達などの応援人員など。

更に、道案内として父や兄達に付いて行く予定のマチルダさんから預かった同じく土系統のメイジ達と。

どう考えても、『お前は、錬金してる』と言われている感じでした。

少し時期尚早な感じもしますが、この時期になったのには当然他の理由もあります。

上でも説明しましたが、そろそろ麦の収穫時期なので早めに橋頭堡を確保してから占領地の麦を買い取ってしまおうという算段のようです。

まるで豊臣秀吉のような策ですが、『そんな資金があつて宜しいですね』などと思っていいたら、その金稼ぎに私が期待されているようなのです。

いい加減に、二十歳前の若造を扱き使うのは止めた方が良くないと考えてしまう私でした。

「そつと降ろすんだ！ 壊したら、クビじゃ済まないぞ！」

「燃料の入ったタルだから壊さないでくれ。引火したら大惨事になる」

人員が降りた後の私がチャーターした船が係留されている棧橋では、ギーシユと才人が紫電改の荷降ろしを指揮していました。

三日前には、私の領地になっていたラ・ロシエールから臨時発進を行って、ロサイスの港にナパームを落として戻るという任務に参加し、その後は船に補給物資ごと積み重ねられてロサイスに到着していました。

才人はロサイスに私と一緒に居残り、上からの命令があれば出撃をする事になっています。

ドロップタンクを付けた紫電改ならば、ロサイスからアルビオン各地への援護が可能ですね。

「滑走路の建設は？」

「格納庫の建設と合わせて、急ピッチで行っています」

「急いでくれ」

結局、その日の内に臨時の分も合わせた数箇所の滑走路が完成し、ロサイスの港も日々その規模が拡大していきます。

これにより、ハルケギニア大陸とロイサスの間の安全な輸送・流通経路と、ロサイス周辺のアルビオン南部地域の支配権が完全に確立され、トリステイン・ゲルマニア連合軍は全力で北上を開始するのです。

そして、既にそれを止める力はレコン・キスタ側には存在せず、

僅か数日後にはロサイスとロンディニウムを繋ぐ交通の要衝サウス
ゴータがほぼ無血で占領されたのでした。

「あんまり戦闘とかなかったな」

「これは、そういう類の戦争じゃないからな」

以前のレコン・キスタであれば苛烈な戦闘もあったのでしようが、
先のトリステイン侵攻で多くの戦力と財貨と物資と兵士を失い、し
かもリーダーであるクロムウエルまで囚われていて、最後にアルビ
オン自体が完全に封鎖されて貿易すら行えない状態だったので、彼
らは戦力の温存のためにロンディニウムまで撤退する必要があった
のです。

ある意味、彼らは戦う前から負けていたのです。

「ふーーん、兵站が勝負を決したわけだな」

「才人、お前わかってて言っているか？」

「失礼な。大体理解しているさ」

現在のトリステインは、領土拡大のためのアルビオンの合併と国
内の改革を同時に進行させています。

普通に考えれば無謀の極みですが、それに参加している当事者達
は希望に溢れていました。

自国の領土が増えて経済も良くなり、自分達にも領地が与えられ
る可能性がある。

そのための借金ならば、これは前向きな借金であろう。

トリスティン貴族や商人達は、目の色を変えてこのアルビオン侵攻に邁進していたのです。

本当、景気の気は気分の気なのですね。

「ところで、ティーボ」

「何だ？ ギーシュ」

「父上が、気合を入れて錬金してくれと言っていた」

「だと思ったよ……」

まあ、その熱狂の資本のかなりの部分は、私が錬金して売った物なのですが……。

とにかくも、トリスティン・ゲルマニア連合軍によるアルビオン侵攻作戦は、その第二段階の最終目標であるサウスゴードの占領に成功していました。

「ところで、ティーボ様」

「どうかしたのか？ アシル」

「ティーボ様におきましては、アルビオン女王であるマリアンヌ様からロサイス太守に任命されましたそうで」

現在、正式にアルビオン国王に即位しているマリアンヌ女王から、

王国直轄地であるロサイスの太守に任命されてしまう私なのでしたが、戦争はトリスティン側が優位とはいえまだ道半ばの状態でした。

早くアルビオンの鉾山を調べたいものです。

四十二話（後書き）

転職、新規プロジェクト、震災対応でパソコンすら開けない日が続いて更新が……。

次の更新も、かなり遅れるだろうな……。

四十三話

「……」

「あの、ティーボ様？」

私は、ただその頂に感動していました。

この世に住まう全ての人間で、その半数を占める女性が必ずは持つその二つの頂。

まあ、ぶっちゃけると胸なんですけどね。

昔から良く巨乳好きの男性はマザゴンとか言われたりしますが、そうなるこの世の多くの男性はマザゴンなのかと。

あまり極端でなければマザゴンでも良いと思うんですけど、私の場合は生まれが特殊ですから、今の母は母として敬愛していますが、少しその距離間が普通の親子と違って……。

いや、私はそういう事を言いたいのではないのです。

目の前に物凄い巨乳が出現した！

しかも、それはハーフエルフの少女であった。

この世界では、エルフは精霊魔法という強力な魔法を使う存在として、更に人間の聖地到達を邪魔する存在として恐れられているらしいのですが、私としては、実際に見た事がないエルフを必定以上に恐れたり忌避する必要性を感じません。

むしろ、前世で中学生の頃に読んだ『ードス島戦記』とかに出てくるエルフって素晴らしいとも思っていました。

何か神聖な感じがするんですよね。

でも、そのイメージだとエルフって少し華奢な感じがするんですよね。

体系も細身で、それに合わせて胸も慎ましやかというか。

ところが、私の目の前にはあのキュルケすらノックアウト可能な無限の可能性を秘めたブツが存在していました。

前世の年齢も合わせてだからなのか？

周囲から女性に関して少し醒めているとか、下手をすると枯れていると言われる事の多い私ですが、私だって普通の男です。

町を歩いていて綺麗な女性と遭遇すれば、自然と視線はそちらに向きますし、胸の大きな女性と出会えば自然と視線はそちらに向かうのです。

ですが、私もそれなりの人生経験を積んだ身。

両隣のバカ三人とは違って、あまり露骨に視線を向けないように見える特技を使って対処していました。

「サイトさんのバカ！」

「シエスタ！ これは男の本能なんだよ！」

「ギーシュ様……」

「アシルこそ！ 奥さんに言い付けるぞ！」

才人は露骨にハーフェルフ巨乳に視線を向けて鼻の下を伸ばしてシエスタに怒られ、ギーシュとアシルはお互いにお互いを貶めあっています。

私は、人の心の醜さに少し嫌悪感を覚えてしまいます。

「ねえ、ティーボ」

「どうかしたのか？ ルイズ」

「上手く誤魔化しているつもりらしいけど、いつまでニヤニヤしながらその娘の胸を見ているのかしら？」

私は、ルイズの冷たい視線に曝されてその場で冷や汗を流し続けるのでした。

「とりあえず、お茶でも飲んで話をしますか」

「すぐにお茶とか言って、ジジ臭いのかナンパなのか……」

「才人には、出廻らして十分だな」

「それは酷い！」

ロサイス占領から一ヶ月あまり、周辺地域を含めたアルピオン南

部の平定と統治は順調に進み、トリステイン・ゲルマニア連合軍はロンディニウムを完全に包囲している状態でした。

しかも、敵側であるレコン・キスタ側には援軍の充てもなく。

逆にトリステイン・ゲルマニア連合軍側は、いつでもロサイスやサウスゴード経由で万全な補給が受けられと。

ロンディニウムを力攻めで落とさないのは、無駄に犠牲を出さないようにという配慮からだっただけです。

そして私ですが、形式的にはいえロサイスの太守として、港の拡張や、入港する軍民を問わずに船の管理などを行い……。

まあ、全部は出来ないのですがそれは父から借りた家臣達に任せて、やっぱり錬金ばかりしています。

色々と作って、私の領地のあるラ・ロシエール、父の領地であるグラモン侯爵領、婚約者であるルイズの父親であるヴァリエール公爵領、ロサイス、サウスゴード。

これらの中で金と物資と人を派手に動かして、躍進する経済という物を作っていたのです。

『戦争中なのに食料などの物資も十分で物価も安定しているし、ロサイスにいる若い貴族様はいつも仕事を募集していて、しかも賃金も良い。言う事なしだな』

占領しているロサイス周辺の住民からも好評だったのですが、実はこの狂騒の原資は全てトリステインの借金です。

まあ、私が返すわけでもないのに特に気にもしていないのですが、むしろ私は返される方ですし……。

以上、説明が長くなりましたが、こんな風にロサイスが落ち着きを取り戻した頃に、父グラモン侯爵の道案内をしていたマチルダさんから一人保護して貰いたい少女がいるとの手紙を受け取っていたのです。

そして、手紙通りに現れた金髪の美少女でしかもエルフという事実に皆は最初は普通に驚き、次にその巨乳ぶりに驚いていました。

「初めての人ばかりで緊張すると思うけど、まずはお茶とお菓子でどうぞ」

「ありがとうございます」

金髪巨乳エルフっ娘は、初めて見る湯飲み茶碗に驚きながらそれを恐る恐れ啜り、お茶請けの羊羹を食べていました。

「(うん、巨乳エルフっ娘最高!)遠慮しないで食べてくれ。君の身柄は、マチルダさんからちゃんと頼まれているから、安心してここで暮らすと良さ。それに、もう少ししたらマチルダさんも戻って来るし」

無事に自分の父親の領地を奪還したマチルダさんは、もう道案内も必要ないという事で、もう少しでロサイスに戻って来る事になっていました。

彼女も土メイジなので、ここで私の手伝いをした方が効率が良いという事情もあったのです。

再編後に婚約者である兄セザールが指揮しているサウスゴード伯爵家の諸侯軍にロンディニウム包囲を任せて、明日にはここに戻っ

て来る予定です。

「ええと……。ティファニアは、今まではサウスゴード近くの森に住んでいたんだよね？」

「はい」

「マチルダさんとは、どういう知り合いなのかな？」

「ええと、マチルダ姉さんは……」

「ティーボさん、ティファニアさんは私の従妹なのです」

とそこに、突然アンリエッタ女王がアニエスを護衛として現れました。

全くの予告無しの登場にギーシュや才人などは動揺していましたが、私は『また何か頼みに来たのかな？』くらいにしか感じていませんでした。

人間、何事も慣れなのかもしれません。

「女王陛下とティファニアさんが従姉妹同士なのですか？」

トリスティンの女王陛下と、巨乳エルフツ娘が従姉妹同士だという事実には、私達は全員で首を傾げてしまいます。

「彼女は、モード大公の娘なのです」

モード大公とは、先に亡くなったアルビオン国王ジェームズ1世の弟であり、確か過去に何らかの不興を買ってその取り巻きである

貴族達と共に粛清されたはずです。

「その不興の原因が、ティファニアさんとそのお母様だったのです」

王家に連なる人物が、事もあろうにエルフを愛妾にして子供まで生ませていた。

確かに不興は買うでしょうし、粛清されてしまつかもしれませんでした。

更にアンリエッタ女王の話は続き、ティファニアとその母親はモード大公の家臣であったサウスゴード伯爵に匿われたものの、そのまでもが王軍によって襲撃され、彼女は母親を殺されてしまったとの話でした。

「それで、サウスゴード伯爵の娘であったマチルダさんが、他の家臣の孤児達と一緒に森の奥に匿って面倒を見ていたと？」

「はい、そういう事です」

そのために、彼女は盗賊業で稼いでいたようでした。

それなりの子供達を養うとなると、普通に仕事の稼ぎでは足りなかったようです。

「ところで、女王陛下はどうしてその事実を？」

「マチルダさんから聞きました」

いくらエルフとはいえ、アルビオン王家に連なるティファニアの安全の保証を、マチルダさんは直接アンリエッタ女王に掛け合い、それが認められたという事なのでしょう。

「ティファニアさんの正式な処遇は後で考えるところとして、今はこのロサイスでティーボ殿の庇護下に入ると宜しいかと」

「私のですか？」

いくらアルビオン王家に連なる者でも、いきなりハーフエルフを自分の傍に置くのは危険である。

アンリエッタ女王陛下の考えは、間違いではないとは私も思いません。

ですが、どうして私なら大丈夫なのでしょう？

そこに疑問を感じてしまう私です。

もしかして、私が巨乳エルフっ娘に萌えている事実気が付かれたのでしょうか？

「ロサイスは既に後方拠点化していて安全ですし、明日にはマチルダさんも来ます。だからです。そんなに難しい理由はありません」

そう笑みを浮かべながら答えるアンリエッタ女王でしたが、一応私は信用されているという事なのでしょう。

「畏まりました。プリンセス・オブ・モードは、私が責任をもってお預かりします」

こうして私の元に、普通に考えると騒動の原因になりかねない元アルビオン王族で、しかもハーフエルフで、最後にとんでもない二つの頂を持つ美少女を預かる事になるのです。

「ティーボ様、テファを保護していただいております」

「そんな大仰な事はしていませんよ。ただ預かっているだけです」

翌日、いつものように錬金をしていると、そこに前線であるロン・ディニウムから戻って来たマチルダさんが顔を出し、私にテファを受け入れてくれたお礼を言います。

とはいえ、私は別に何か特別な事をしたわけでもありません。

ハーフエルフという事で最初は私の家臣達も緊張していたのですが、テファと一緒に保護された孤児達の面倒を良く見る優しい女の子であり、しかも飛び切りの美少女で、あの究極の目の保養になる胸の持ち主です。

『周辺に綺麗で若い女性がいると、精神が落ち着きますな』

さすがは、武と女好きの家系を誇るグラモン家の家臣達です。ハーフエルフでも、綺麗な女性は正義という事のようにでした。

「ところで、テファはどこにいますか？」

「ああ、今勉強中ですよ」

「勉強？」

私は、アンリエッタ女王からも一つお願いをされていました。

アルビオン王族でもあるテファには、高級貴族や王族の子弟が必ず行く魔法学院に通って貰いたいとの事で、その準備のために私の家臣から勉強などを教わっていたのです。

「あの子が魔法学院ねえ。大丈夫なのかしら？」

「東方に、『可愛い子には旅をさせる』という言葉があるそうです。テファにも、広い世界を色々知って貰わないと」

アンリエッタ女王がテファを親戚の王族として扱う以上、今までの閉鎖されたサウスゴードの森の奥以外の事も知って貰わなければならず、そのためには手っ取り早く学院に通うのが良いであろう。

私も、その意見にはすぐに賛成していました。

「そんな言葉があるんですね」

「才人から聞きました」

実際には、前世の知識からですけど。

「何にしても、これで一安心だね」

無事に保護されたテファの状態に安心して安堵の表情になるマチルダさんでしたが、その様子はまるで母親のように見えました。

「ティーボ殿、私はあくまでも姉代わりですから」

「勿論、そう思っていますよ」

釘を刺されて、私は少し『ドキッ』としてしまいます。

「ここには同年代も多いですし、すぐに打ち解けて友達も出来ますよ」

「だと良いんですけどね……」

「何か心配でも？」

私がマチルダさんの視線の先を見ると、予定の勉強を終えて彼女に会いに出たテファの胸に注目しながら鼻の下を伸ばす才人とギークの姿がありました。

確かに、彼女の保護者であるマチルダさんにはまだ心配の種は尽きていないようでした。

「ティーボ様、プリンセス・オブ・モードも無事に落ち着いて万々歳ですね」

とっても良い子で、とっても美少女なテファは、すぐにロサイスでの生活に馴染んでいきます。

まあ、ほとんどの男性がまずはテファの胸に視線が行くという欠点があるのですが、これは『男の性』というしかありません。

何しろ、私もアシルでもそうなのですから。

「とりあえず、テファの事は置いておいてだ。戦況はどうなっているんだろっかね？」

開戦から二ヶ月あまり、既にロンディニウムを完全に包囲されたレコン・キスタの運命は風前の灯となっていました。

アルビオンは、ロサイスを中心としてサウスゴードからロンディニウム以南の地域は既に連合軍側の勢力圏になっています。

簡単に言うと、ロサイスを拠点とする物資・金・人の流れが完全にアルビオン南部をトリステインの経済圏に取り込んでしまったのです。

実は、これを防ぐ手段がレコン・キスタには存在していません。

それは、豊富な空軍力を使って制空権を保持するだけで良かったのですが、あの大失敗したトリステイン侵攻と開戦当初に発生したロサイス占領時における攻撃によって彼らは多くの船を失い。

残された空軍力も、次第に鹵獲品を修復されて新しい人員が送り込まれるトリステイン空軍によって次第に数を減らし、今ではロンディニウム上空に訓練目的で交代で遊弋しているのを、ただ指をくわえて見ている有様でした。

彼らは、まだ完全にトリステインの影響力が及ばないアルビオン北部において、残された数少ない船や竜騎士などを温存して反撃に備えているようです。

ですが、それも毎日のように定期便を飛ばしている才人の紫電改によって爆撃されて数を減らしていました。

トリステイン空軍では、アルビオンを合併すると必要となる空軍力の強化を現在懸命に行っていて、それには竜騎士隊の増員も含ま

れています。

彼らは、訓練メニューの一環としてアルビオン北部に偵察を行い、それで得た情報を元に才人がナパーム弾を落として行ったので

す。
敵の竜騎士達もたまに勢い勇んで紫電改に挑んで来るようでしたが、それは彼らの寿命を大いに縮める行動となっていました。

「無理攻めは犠牲を増やすので、このまま包囲して弱らせる方向のようです」

「連中、降伏とかするのかな？」

「出来るだけ、意固地で殲滅しないと駄目な連中は少なくしたいと思うで」

あまり強硬に責めて多くの犠牲を出したり、ロンディニウムを廃墟にする作戦行動は避けたかったらしく、ここ数週間はトリステイン・ゲルマニア連合軍はただ大軍をもって城を包囲していただけなのです。

それと数日前に、籠城している彼らは変な作戦を実行していました。

何でも、ご禁制の品である惚れ薬を使って包囲している連合軍を裏切らせようとしていたのですが、それはメイジ比率が高いトリステイン側に察知されてすぐに防がれてしまったようです。

昔からそんな手を使う連中は多かつたらしく、その対抗策くらいメイジの多いトリステインでは準備していたという事なのでしょう。

レコン・キスタ側は日々落ちる士気と戦力のなかで絶望的な籠城戦を行い、味方は日々増える戦力と圧倒的な兵站能力をもつてして敵の息切れを待つ。

その圧倒的な兵站の要因が誰なのかは、もはや語るまでもないのですが。

「噂では、レコン・キスタ軍は一ヶ月と保たないとかで」

「最後の切り札とか、トリステインがアルビオンを合併するのが疎ましいゲルマニアとかガリアの邪魔とかないのかな？」

「多少はあるかもしれませんが、今のところは」

アシルの言う通りに、作戦は恐ろしいほど順調に進んでいます。とにかくレコン・キスタ側の戦意が脆く、簡単に降伏するか壊滅してしまうのです。

それと、私のような元平成時代で歴史を知る人間ならば勘ぐってしまう外国勢力の妨害行為でしたが、大方はほぼ予想通りの物で、あとはゲルマニアはトリステインから贈られた大量の美術品や財貨で満足していて、ガリアに至ってはなぜか大量に私の作る金属を大量に購入していました。

特にゲルマニア産の鋼に成分調整を行った特殊鋼や、純度の高いケイ素を含む焼き物材料など。

特殊鋼は、これは空中船の装甲材料として初期のグラモン家諸侯軍の船に装着していましたが、今ではトリステイン、ゲルマニア、ガリアなどで競うように購入して装備していたのです。

「ガリアには、自慢の両用艦隊がありますからな。それに新しい装甲を装備したいでしょう」

それが理由なのかは知りませんが、ガリアは恐ろしいほど協力的に自国とレコン・キスタ勢力圏との貿易を阻止してくれています。積極的な戦闘はゼロでしたが、その圧倒的な偉容が弱体化したレコン・キスタ軍艦隊に隙すら与えないでいたのです。

「ガリアは、本当に良くわからない国です」

「何にしても、あのハルケギニア一の大国と張り合うにはアルビオンを組み込んで力を蓄えるしかない」

「国際政治ですね。その前途は困難に満ち溢れています……」

確かに、アシルの言う通りにトリスティンがアルビオンを組み込んで、その国力比はいまだにかなりの差があるのが事実なのでした。

それから一週間後、遂にロンディニウムの城は落城します。

何でも戦況に絶望した城内で反乱が起きて、これから先どう攻めるかと対策会議をしていた父達をも啞然とさせてしまう呆気ない最後だったらしいのです。

とはいえ、これから混乱したアルビオン国内の建て直しや、一国を得て完全に舞い上がっている貴族達への恩賞、いまだにレコン・キスタ残党が潜んでいるアルビオン北部などへの進駐など。

その前途は、かなりの困難が予想されたのです。

「一番の難題は、ティーボ様からしている借金でしょうけどね」

「家臣のいち貴族から借金する王家とかな」

「それは、言わぬが華でしょうな」

とはいえ、ここに約三ヶ月間にも及んだアルビオン戦役は終了し、トリステインはアルビオン・トリステイン連合王国へとその正式名称を変更するのでした。

「ところで、俺はいつロサイヌ太守から逃れられるので？」

ロンディニウム城の落城から数日後、私は急遽マザリーニ枢機卿から呼び出しを受けていました。

なぜかルイズも呼び出されていたので、私は紫電改の後部座席で彼女を膝の上に乗せて目的地へと直行します。

始めてみるロンディニウムのお城でしたが、多少の損傷は目立つもの思ったほどの被害は受けていなかったようで、既に城内は綺麗に掃除されていました。

とはいえ、内部とその周辺は各諸侯軍や王軍の嚴重な警戒下にありません。

まだ北部の接収とレコン・キスタ残存部隊の討伐が残っているので、軍は暫くは臨戦態勢にあつたからです。

「ティーボ殿がロサイス太守だったのは、そこにティーボ殿がいたからです。戦争が終わって魔法学院に戻るとなると、その任は別の人物に引き継がれるかと」

なるほど、私がロサイスで錬金をしていたからこそ、便宜上ロサイスの太守に任じていたが、魔法学院に戻るとなるとまたあの錬金工房が私の居場所となる。

何か利用だけされているようにも見えますが、私としては早く日常の生活に戻りたいですね。

学院を卒業しなければならぬ以上は、静かに学業と錬金をこなしていたいのです。

「そこで、ティーボ殿への恩賞なのですが……」

これも、非常に難しい問題のようでした。

トリステイン王家は、グラモン家からというか私から多額の借金をしている状態です。

その額は、先に討たれたリッシュモン伯爵曰く粛清を心配されるレベルです。

となると、私に贈る恩賞としてはアルビオンにある領地という事になるのですが、実はこれには多くの問題が存在します。

なぜなら、私はグラモン分家当主なので、基本的に本家よりも大身にはなれないのです。

下克上の世の中でもないので、本家よりも領地の多い分家はおか

しいですし、別に私は父や兄達に含む物を持っているわけでもありません。

それに、面倒な事は父や兄達に任せられた方が私は楽に錬金が出来るので。

正直、余計な面倒を背負い込む利点を感じないので。

「ティーボ殿は、侯爵の地位といくつかの勲章とヨークシャー全域を領地としてという案が出ています」

イギリスに良く似た地名が多いアルビオンなので、やはりヨークシャーという地名は存在していました。

しかも、産業構造も炭鉱と鉱山と大麦を主に作る農村地帯と羊毛のための牧畜などが盛んと。

これも、イギリスのヨークシャーと同じようです。

広さが、およそ岩手県くらいなのも同じなようでした。

ですが、この地域はまだトリスティン王家側の勢力圏にはありません。

これから正式に制圧・接收してから譲渡という事になるのでしよう。

まあ、どちらにしても私は学院卒業までは領地の管理など出来ません。

またアシルに、代官の任命や家臣団の編成を任せる事になるでしょう。

「それと、ラ・ロシエールを含む今の領地はグラモン侯爵に任せる事になりました」

戦争が無事に勝利に終わり、マザリー二枢機卿は多くの法衣貴族達と共に貴族達の再配置に苦慮しているようでした。

この戦争で活躍したトリステイン貴族達には加増を、逆にリツシユモン伯爵のような悪徳貴族達の摘発は今も続いている、彼らには資産と領地没収を。

アルビオン貴族達は、主に空軍関係者ですが活躍した者と、当主や配偶者にトリステイン貴族の子弟を迎え入れて加増する家や、逆にこれまでの戦争で死亡して領地没収となる者など。

結果的にはあまり領地を持つ貴族家の数は増えていませんでしたが、その裏では過酷な生存競争があったのです。

「基本的には、少領の貴族を減らそうと思ひまして」

人口数百人の少領となると、これは行政効率が落ちるだけでしょうし。

特にアルビオンの鉱物や羊毛などを産業として拡大させるとなると、その流通の効率を落とす少領の貴族達などなるべくいない方が良いでしょう。

通常の状態では既得権益とかの関係で難しいこれらの改革ですが、戦争のドサクサでというのは、どこの世界でも一緒のようでした。

「それと、加増を餌に転封ですか？」

「それは受け入れて貰わないと。断れば、それを原因に領地を与えないという選択肢も出来ますので」

「そうですね」

とはいえ、いきなりヴァリエール公爵や父を転封させる事など出来ません。

この点、ここまで大物だと貴族も得なのでしょうが、両者は無事に加増されてトリステインの守りを期待されているようでした。

「私は、マリアンヌ女王陛下と共にアルビオンを活動の主拠点とします。こちらでは、ティーボ殿の兄君達にお手伝いを頂きますので」

次男のセザールは軍の要職に就く事となり、同時にマチルダさんと結婚してサウスゴード伯爵の配偶者としてアルビオンを活動の拠点とする事になります。

三男のジョルジュは、ランカシャーの鉱山の多い地域を領地として貰い、爵位も子爵へと進んでいました。

ここが領地になったのは、私がいるので鉱山の産物をお金に変え易いと感じたからなのでしょう。

他にも、テューダー王家発祥の地で王家の直轄地であったウェールズ地方に多数存在する鉱山の利権。

主に一部の権利と、他者に優先して安価で鉱石を購入できる権利も得ています。

おかげで、名目上は父で実質的に私が持つトリステイン王家への債権は全てチャラになりました。

トリステインではヴァリエール公爵に匹敵し、しかも大きく膨張した父の領地に、兄の一人はアルビオンでは大領を持つ貴族家に婿入りして、もう一人の兄もアルビオンで領地を得ている。

そして私には、更なる爵位の上昇と原則に触れるので正確に測ってはいない事になっている新領地の下賜と。

要するに、私の領地の広さが父を超えていると都合が悪いとの判断から来る通達ですけど、どう考えても私の領地の方が広いでしょう。

それに、本家当主が侯爵で分家当主が侯爵なのも変な話ですが、これも言わぬが華という事にしておきます。

でも、どうやってこの広大な領地を統治すれば良いのか？

この難題に直面している貴族達は、かなりの人数になっていると思います。

他にも、先祖代々の土地を離れて転封が予定される貴族も多いので、アルビオン・トリステイン両国の状況が落ち着くには少なくとも数年の時間がかかるでしょう。

そして他にも、ギーシュが準男爵と勲章と金貨を。

才人も紫電改での多彩な活動が認められて、この度例外的にシュヴァリエの爵位が授けられる事となりました。

平民としては極めて例外的なのですが、あまりに叙任される人が多かったのと、同じくアニエスにもシュヴァリエの爵位が授けられていたので表面上は大きな騒動になっていませんでした。

「領土は倍になったのに、以前と領地を持つ貴族の数は大して変わらずですか。王家直轄地が増えて万々歳ですね」

私の指摘に、マザリー二枢機卿が苦笑いを浮かべます。

他にも、トリステインはアルビオンの多くの港湾施設や造船所などを直轄下に置いていますし。

鉱山や精錬所や工房なども押さえていました。

ここ数年を乗り切れれば、トリステイン王家はかなりの財産家になるはずなのです。

「王家の力が強い方が、ティーボ殿も安心でしょう？」

「ええ、リッシュモン伯爵の予言が現実の物となったら嫌ですし」

所謂、『狡兔死して良狗煮られる』という韓信の言葉です。

私は、今ではかなりの有名人です。

しかも、名目上の貸主は父になっていますが、トリステイン王家に大量に金を貸している私の存在は大き過ぎるので、それをトリステイン王家が力技で全てチャラにしてみました。

それでも、グラモン一族には多くの領地や鉱山・港湾などの権利が与えられている。

だが、それを効率良くお金に換えるにはそれなりの資金と手間とノウハウが必要である。

グラモン家には将来自分達を超えそうな分家の存在があり、大量の領地を得たものの、代わりに大量の財貨を王家に奪われてしまった格好となった。

何とも問題の先送りか、玉虫色の解決策なのでしょうか。

こういうのは、いかにも坊主出身のマザリーニ枢機卿が得意そうな分野でした。

まあ、何にせよ私の将来の方針は決まりました。

今は学生をしながら錬金を続けてまた資金を稼ぎ、卒業後に本格的に領地の統治と、同じく父や兄達の領地との経済の連結や交易の

促進などを行う。

所有者となったり、優先的に権利を与えられている鉱山の数が増えたので本格的な製鉄事業もミスタ・コルベールと一緒にやりたいものです。

今は、完全に彼に任せるしかないのですが。

「正式な叙勲の儀は明日ですので……」

翌日、まだ一部戦闘は続いているものの、ロンディニウムの城の謁見の間でマリアンヌ女王とアンリエッタ女王が『トリステイン・アルビオン連合王国』の建国を宣言し、マリアンヌ女王は自分の後継者にアンリエッタ女王を指名します。

簡単に言うと、将来的には両国の王位は兼任されるという事であり、最初と違って国名がトリステインの方が前になっていたのは、そういう細かい事を気にする連中から指摘を受けてという事のようにでした。

前世での、『共同開催ワールドカップで、どちらの国名が前にくるのか?』くらい下らない指摘でした。

「ティーボ、また大活躍だったな」

「父上」

叙勲の儀が終了後、父はいち早く私に話しかけていました。

「ですが、私は後方にいただけです」

「いや、お前の功績は大きい。確かに、アルビオンでの戦いでは幾つかの激烈な戦闘が発生した。だが、基本的にレコン・キスタ軍はこちらの兵站能力と経済力に呑まれたのだ」

無謀なトリステイン侵攻の失敗に、各国が行った大交易封鎖網。そして占領された南部では、私が作り出してバラ撒いた錬金物や金貨などによって彼らはゲリラ的な活動さえ行えなかった。

ここでレコン・キスタに手を貸しても生活が貧しくなるだけなので、占領下にあるにも拘らず、住民達は誰もレコン・キスタに協力しなかったからです。

逆に、怪しい人物を通報すると賞金が出たので、多くのスパイや敗残兵などが私達の下に突き出されていました。

「予想よりも、遥かに上手く行ったな。だが……」

「だが、何ですか？ 父上」

「これから数年は、トリステインは攻勢には出られない」

「この状況で、兵を出す敵なんているのですか？」

父は、トリステインの状況が落ち着くまで暫く戦争が出来ない事を嘆いていました。

確かに、私の今までに稼いだ財貨を除いて犠牲は少なく領土を増やしたトリステインでしたが、新領地であるアルビオンの完全把握と統治、司法・行政・立法・経済などの結合と。

これらの手間を考えると、他の国との戦争どころではなかったの

です。

相手が攻めて来た時には防衛しないと駄目でしょうが、それが起こらない事をただ祈りたい心境だったのです。

「今回の件では、ガリアはただ静かに利益を掠め取って行ったな」

両用艦隊でレコン・キスタ軍艦隊を牽制して、封鎖条約も紳士的に守ってくれたガリアに対して、確かにトリステイン側は利益を提供していました。

多くの食料をかなり高めに購入していましたし、逆に私の錬金する金属や宝石などは少し安めに売っていたからです。

この程度で大国ガリアが大人しければ万々歳なのですが、ガリアには私の母の実家の件もあって、確かにあまり静かなのは不気味とも考えられました。

しかも、その軍は全く損害を受けておらず、両用艦隊には私の売った特殊鋼が装甲として装着されて強化されています。

軍事利用可能な物を販売する際にはとか、これは前世でも良く言われていましたが、私もトリステイン王家側から『少し安く売れ！』と言われた以上は逆らえないのです。

「ですが、ガリアもバカでないのですから、いきなりトリステインに攻め込むとは思いません」

それに、アルビオンを併合したトリステインでは、現在最盛期のアルビオン艦隊を上回る戦力を整備しています。

戦闘、哨戒、船団護衛、訓練、戦力強化と。

全てを泥縄式に行っているのですが、次第に旧アルビオン空軍の士官や兵士達も増えていたので何とかなっているようでした。

あと数年我慢すれば、数は勿論、質の面でもガリア両用艦隊に負ける事はないはずだ。

最悪、ルイズの虚無の魔法と才人の紫電改もありますし。

「そのはずなのだが、何か嫌な予感がしてな」

確証はあるわけではないが、何か嫌な予感がする。

これは、理論的な物ではなくて長年戦場に出ている父の勘だったのかもしれない。

ですが、数カ月後に父の予言は現実の物となってしまうのでした。

四十三話（後書き）

ご心配をかけたようです。

関東地方在住の私なので震災の被害がなかったんです。

でも、新規商品の開発が……。

発注した部品のかなりの部分が東北地方のメーカーだったんだ……。

大切な部品の供給工場が津波の被害に……。

大企業優先で、うちには必要数が……。

実際に被災された方々は大変なんでしょうが、こっちも精神的にガクッと来てしまいました。

四十四話

「久しぶりに学院に戻って来たな」

アルビオンにおける戦争の処理が終了した私達は、約三ヶ月ぶりに魔法学院へと戻って来ていました。

アルビオンなどの戦後処理が終了したとは言っても、それはあくまでも基本的な部分だけなのですが、残りの仕事に私が関わるのはあくまでも学院を卒業してから。

今は父や奥様やアシルに任せて、学生生活に早く戻る事を目指している私でした。

「あんな広大な領地の管理はどうするんだい？」

「父のツテでその手の事に強い貴族を雇うし、現地でも採用を行うさ」

何しろ恐ろしいほど広大な領地を与えられたので、私は今はその現実から逃れる事にしました。

精神衛生上、それが宜しいと思ったからです。

ですが、実際の統治は待つてはくれないので、そこは父や奥様やアシルに丸投げです。

父や奥様から、トリステイン貴族で使えそうな連中を家臣にして領内の仕事を任せ、今は現地に代官として着任しているアシルがアルビオンで使える人間を家臣として採用し続けています。

何しろ、この戦争で没落したアルビオン貴族の数は多いので、家臣になってくれそうな連中には事欠きません。

完全な買い手市場なので、優秀な人材をゲットし易いのです。

他のアルビオンに転封したトリスティン貴族達は、金が惜しいのかえらく買い叩いているようでしたが、私は優秀な人材には金を出す主義です。

アシルは、『思ったよりも、早くに家臣団を編成できそうです』と手紙を送って来ていました。

「なるほど」

ギーシュは納得したような表情をしていますが、彼が目指すモンモランシーとの結婚が実現したとなると、同じくかなり広大なモンモランシー伯領を統治する必要がありますのです。

しかも、かの領地は開発の失敗で大損失を出していて、その負債は相当な物です。

よほど統治能力に長けていないと、いつ破産してもおかしくない状況なのです。

更に、今回の戦争でモンモランシー伯爵は気合を入れて諸侯軍を編成しました。

同じく、戦後に領地や褒美の下賜を期待して身の丈以上の諸侯軍を編成した貴族も多く、その割に戦果が挙げられなかった貴族達は余計に借金を増すという結果になっています。

今回の戦争では、アルビオン貴族だけでなくトリスティン貴族の選抜も進んでいたのです。

優秀な人材は国が大きくなったトリステインで重用されていき、能力がない人材は没落していく。

別に、貴族階級に対する革命が起こったわけではありません。

ただ自分の国の女王陛下が、隣国を平定して家臣である貴族達の再配置と再配分を行っただけで、このように出世する者と没落する者とに別れる。

魔法など、何も関係ないのかもしれませんが。

と、難しい話は続きましたが、何にせよ私は領地の管理を代官に任命したアシルに任せて、魔法学院へと戻っていたのです。

何しろ私達は基本的に学生ですし、魔法学院のカリキュラムを終えて卒業する事はこれはもう義務に等しいのですから。

大貴族が魔法学院中退では、格好が付かないという事なのです。

「僕は引き続きティーボの護衛さ。父に再び頼まれてね」

今回の一連の戦争では、トリステインの際立った強さなどという物は実は発揮されていませんでした。

ただ膨大な兵力と資金でアルビオンを封鎖し、強引にレコン・キスタなる反乱軍を押し流しただけ。

ところが、その敵を押し流す資金源のかなりの部分を私が用意したという事で、その身を守るようにとギーシュは父から言われているでしょう。

勿論、彼だけではなく護衛の家臣の数も増えているのですが。

「何にしても、普通の生活に戻れるというのは素晴らしい。さてと、早速に岩石の調査にでも……」

ここ数ヶ月以上、私は自分の好きな近隣の岩山などの調査活動を自粛していました。

なので、久しぶりにこれを行おうと思っていたのです。

「それは、許可できません」

「なっ！ 急にビックリしたな！」

突然、後ろから一人の中年男性が姿を現します。

アルビオンに残ったアシルの代わりに私付きになったシプリアンという人物で、彼の一族も古くからグラモン家の家臣として働いていたのです。

旧ワルド子爵領から、ラ・ロシエールを含む旧アストン伯爵領を経て、アルビオンのヨークシャー全域と。

領地の拡大と移転が一年と経たずに続いていたので、これに対応する信用できる人材として父がかなり多くの家臣達を私の方に転籍させていたのです。

「危険だからか？」

「はい。それに、もしティーボ様が誘拐でもされたら、我がグラモン家は大変な事になってしまいますので」

ついでに言うところステインも大変な事になるでしょうし、今度は逆に誘拐した側の方に多大な利益を与えてしまう事になるでしょ

う。

欲の皮の突っ張った国や組織などが、私をどこかに軟禁して錬金装置にしてしまう。

このようなゾットとする未来を避けるために、私への護衛は一層強化されていたのです。

「仕方がないか……」

「それと、早速に錬金の方をお願いします」

「言われると思ったわ」

ようやくに戻った私の日常でしたが、やはりそれにはいつもの錬金が含まれていました。

「グラント、久しぶりだね」

毎日の日課である錬金後、私が久しぶりに自分の使い魔であるグラントの元に顔を出すと、また一回り大きくなったような気がする彼が巣穴から又つと顔を出します。

更に、隣の同じくらいの大きさの穴から、彼の奥さんも顔を出して私に一礼していました。

「これはどうも」丁寧に

元日本人の癖なのか？

私は、グラントの奥さんに丁寧に挨拶をします。

何しろ、彼女は私の使い魔ではないにも関わらず、今までの倍の量の宝石や風石や鉱物などを提供してくれるのですから。

その餌である草木などを集めるのはひと苦労らしいのですが、彼らの糞は優秀な肥料となるので、近隣の農民達がこぞってそれらを持って来てくれるのです。

「グラントが沢山集めてくれた風石が役に立ったよ」

急速に鹵獲・降伏艦艇で空軍を巨大化した影響で、トリステイン軍やグラモン諸侯軍などでは風石が不足するという事態に陥っていました。

外国から購入するとはいっても、ガリアは自国も風石の大量消費国ですし、同じく産出国であるアルピオンも最近になってようやく落ち着いたばかり。

そんな理由で、私はグラントが集めてくれた風石を大量に提供していたのです。

とはいえ、いくら格安とはいえこちらのコストといえばグラントの餌代くらい。

実は、莫大な利益を得ていた私でした。

「うん？　どうかしたのかい？　グラント」

使い魔と主人は、意思の疎通が簡単に行えます。

どうやら、グラントは私に大切な話があるようです。

「小屋を広げて欲しいのかい？ それは大丈夫だけど、急にどうして？」

私はその理由を問うと、グラントの奥さんの巢穴から二十匹ほどの小さいグランドワームがワラワラと姿を現しました。

それに、小さいとは言ってもその大きさは全長五メートルほど。太さも、人の胴回りくらいありました。

「子供が生まれたのかい？」

私の問いに、グラントは首を縦に振ります。

更に、子供達は私の前に自分で取って来た宝石や鉱石などを置いていき、それはすぐに小山のような状態になっていました。

というか、私の使い魔であるグラントは当たり前としても、グラントの奥さんや子供達はどうして私に宝石を差し出すのでしょうか？

「じゃあ、急いで小屋を拡張しないとね」

それから夕食まで、私はグラントと取り留めない話をしながら『グラント一家』のために小屋の拡張を行い、家臣に近隣の農民達にもっと餌である草木を持って来て貰うようお願いをするのでした。

「えっ、またグラントに家族が増えたの？」

「グラントは、一家の大黒柱になったんだね」

小屋の拡張工事終了後、大きな二つの巣穴に比較的小さめの巣穴が二十個以上も整然と並び、それを見たルイズは啞然とした表情をしてみました。

「お金つて、集まる人の所に集まるのね」

ルイズは、グラントの子供達が集めた宝石類を手にとって見ながら話を続けます。

まだ小さいので父親ほど深い所には潜れないためか、その質は少し劣りますが、それでも宝石は宝石。

その価値は、かなり高価なものになっていました。

「でも、グラントは明らかに普通のグラントワームじゃないと思う。普通のグラントワームの子供なんて、せいぜいミミズくらいの大きさだよ」

「良く知ってるな」

「図鑑で見たもの」

魔法が不得意な分、勉強はちゃんとしているルイズは、グラントワームに関する知識を持っていました。

確かに、このグラントの子供達は異常かもしれませんが。

というか、普通のグラントワームですらこの子供達よりも遥かに小さい存在なのですから。

「ティーボの保護を受けて大繁殖する巨大グラントワーム一族か……。将来は、人類は滅ぼされるかも……」

「変な本の見過ぎだ。才人」

前世の私や才人のいた平成日本では小説で書かれそうな話でしたが、ここはハルケギニアですし、そもそも人間とグランドワームは共存可能です。

グランドワームは自分に害が無ければ人間なんて襲いませんし、彼らの食料は草や木や落ち葉なので、農作物に手を出す事などまず無かったからです。

「餌を不足させないようにしないと。まあ、近隣の農民達も雑草や雑木で最高の肥料が貰えるから、不足する事はないんだけど」

グランドの糞は、化学肥料とは違って短期間で劇的な効果は出ないものの、長期間土壤に滞留してその土の性質を安定させ、農作物の収穫量を緩やかに上昇・安定させてくれます。

他にも連作障害への効果もあったので、農民達はこぞって草木を刈り取って持ち込み、代わりにグランドの糞を持ち帰っていました。

本当は、空気中の窒素を固定したり、リン鉱石などを精製して化学肥料でも作れば良いのですが、これは育てる作物などによって撒く肥料の種類や量が異なるので、専門外の私は手を出していませんでした。

それだけ、グランドの糞が万能に近いという事なのでしょうが。

「グランド、ご飯の心配はしなくて大丈夫だから」

安心したように無言で頭を下げるグランドと別れ、その日は早めに屋敷に戻って休む事にする私達でした。

そして、私達と同じくアルビオン戦役に従軍していた他の生徒達も、次第に動員を解かれて学院へと戻って来ていて、ようやく普通の学生生活に戻るようになったのでした。

「と安心してみたものの、後期の授業にはサツパリ出ていないので、これは進級試験に梃子摺るのでは？」

学院に戻って、やっと普通の授業が行われた日の放課後。

中庭の席で午後のティータイムを楽しんでいた私達でしたが、その中でギーシュー一人が、分厚い魔法理論の教科書を広げながら苦悩の表情をしていました。

「魔法理論とか、もう実戦でいくらでも使っているんだけどね」

「言ってる。従軍していたから、実地試験は免除してくれないかな？」

ギーシューが広げている教科書を覗き込みながら、補給部隊を率いて功績があり勲章を貰ったレイナルと、戦列艦に士官として乗り込んで同じく勲章を貰っていたギムリが自分の意見を述べます。

「僕も大活躍だったんだ。それよりも、この戦争で僕は大人になってミス・サヴァンに相応しい男になったと思うな」

いまだに私の母を諦めていないマリコルヌに、私とルイズは同時に顔を顰めさせていました。

ルイズも、何かの間違いで彼を『お義父さん』などとは死んでも呼びたくないでしょうし。

「マリコルヌの成長云々は知らんが、人の母親に邪な感情を抱かないように」

「つれないな、ティーボは……」

「そんな事よりも、試験対策をして落第しないようにしないと」

「その辺は、多少は便宜を図ってくれと思うけどね」

ギーシュの言う通りに、トリステインが無事にアルビオンを併合した現在、それに多大な貢献をした魔法学院の生徒達が試験で落第する事はないと思うのですが、我々の本分は学生なのであまり酷い成績なのもどうかと思うのです。

この辺は、前世の影響を引き摺っているのかもしれない。

「ダーリン。私は従軍もしないで真面目に勉強していたから、夜に二人きりで教えてあげても構わないけど」

「危険に満ち溢れているわね」

そんな私に対して、いつの間にかお茶の席に加わっていたキュルケが勉強を教えてあげても構わないと発言するのですが、つい数ヶ月前の事を思い出すと決して首は縦には振れませんでした。

さすがに、ルイズも呆れ返っているようです。

「ツエルプストー、あんたねえ……。さすがに空気を読みなさいよ」
今の時点で、キュルケが私を誘惑してゲルマニアに引っさらって行ったら、それだけで国際的な大問題になってしまふからです。

「あら、ヴァリエールは知らないの？ ツエルプストーの女は、恋愛に関しては権力とか財力とか一切気にしない生き物なのよ」

「しなさいよ！」

そんないつものような言い争いを再開する二人を尻目に、タバサは一人黙々とお茶を啜っていました。

ガリア王族の彼女が、ジョゼフ王に何を命令されているのかは知りませんでした。今の所は私に積極的に何かをするつもりはないようです。

まあ、私に付いている護衛の数を見れば、普通の人は諦めるのでしょうが。

「学院のお勉強って、難しいんですか？」

最後に、私の隣の席に座っているテファが心配そうに聞いて来ます。

結局、アンリエッタ女王から私に預けられたテファは、一ヶ月後の新学期に合わせて新一年生として魔法学院に入学する事となりました。

今の彼女は、その準備のために私の屋敷に寝泊りしているのですが、今までアルビオンの森の奥に住んでいた彼女は、貴族の子女と

しての振る舞いや、基本的な部分を除く勉強などに触れていなかったために、学院でやっていけるのか心配しているようなのです。

「いや、実はそんなに難しくもない。ただ、何ヶ月も放置していたから範囲が広くて困っているんだ。試験への準備期間も短いし」

前世でかなり有名な国立大学の大学院にまで進んでいた私は、ここにいる誰よりも試験勉強という物については慣れている存在だったからです。

それに正直に言えば、魔法学院の勉強の基本は浅く・広くで、そこまで専門的な知識を習うわけでもありません。

先の専門的な勉強は、それぞれの職場や上位の専門的な学校で学ぶのですから。

魔法学院に行く目的とは、あくまでも貴族の子弟として最低限恥ずかしくないレベルの知識を習得するという部分にあり、だからこそアンリエッタ女王はテファをここに入学させるのです。

「これが、難しくない？ ティーボはどんな頭をしているんだ？」

ようやくハルケギニアの文字を習い始めた才人は、私が開いている教科書を覗き込んでゲンナリとした顔をしていました。

とはいえ、これは文字を習い始めたばかりの才人だからこそ難しいと感じるのであって、実は平成日本の高校数学や物理の教科書の方がよほど内容は難しかったのですから。

「別に未来永劫暗記するわけでもないし、要は試験に受かればいいんだ。後で必要な知識なら、また勉強してまた覚える事にするよ。一度覚えてしまえばある程度は頭に残るものだし」

「ティーボさんって、頭が良いんですね」

まだ入学はしていませんでしたが、アンリツタ女王から贈られた制服に身を包んだテファは入学の準備をしつつ、時折り私の鍊金を見学したり、事前に貰った教科書の内容などを質問したりしていました。

先輩にわからない部分を訪ねるというありふれたシチュエーションでしたが、制服の上からでもわかる『巨乳美少女エルフツ娘』に健気に質問をされると、さすがの私にでも『萌え』という感情が理解できるようになっていました。

しかも、彼女は勉強を教える私に対して素直に尊敬の視線を向けてくれるので、これは癖になりそうな快感だったのです。

この状況にギーシュや才人などは残念がっていましたが、ここは耳学問でも勉強の出来る男の勝ちでした。

前世で、高校時代に彼女ゼロでも真面目に勉強した甲斐があったというものです。

『俺のバカ！ ちゃんと勉強する習慣を付けておけば！』

『サイトさん、私に教えてくださいよ』

『俺とシエスタじゃあ、まだ俺の方が教わる事が多いし』

私と才人は、以前に『ティーボが前世で行っていた学校って、俺の学力とかじゃ絶対に無理！ 都内の私立の超名門じゃねえか！ 大学も、何年浪人しても無理だと断言できるわ！』という話を二人だけでしていて、それが上の発言に繋がっていました。

『僕も、人に教えてあげるレベルとか言われると難しい』

『ギーシュは、あまり人に教えるのは向いていないしね……』

比較的上位の成績を有しているギーシュでしたが、彼はあの気障な性格と言動のせいで人に物を教えるのにまるで向いておらず、その点をモンモランシーに指摘されていました。

「そんなわけで、俺がテファに……」

「ティーボは忙しいんでしょう？ 私が教えてあげるから」

「悪いね……、ルイズ……」

どうも、私の少しだけ抱いているというか、湧き上がって来ている男の本能というか、そんな感情がルイズにはバレているらしく、結局テファが一番長く勉強を教えていたのは彼女でした。

本当は、私が教えたかったのですが……。

これでも、前世の学生時代には、家庭教師のバイトとかもしていましたし……。

「ちょっと！ この学院にはどうしてエルフがいるのよ！」

無事に学年末試験を突破した私達は三年生となり、それと同時に新しい一年生が入学してきました。

その中には、勿論テファの姿もありました。

彼女は最初はエルフの最大の特徴である耳を帽子で隠していたのですが、室内で帽子を被り続けるというのもなかなか難しく、結局アンリエッタ女王の庇護下にあるという事で、他者に文句を言わせないという方法を選択していました。

最初は彼女の耳にギョっとしていた生徒や職員達も、すぐに慣れて特に気にしなくなっていました。

確かに、エルフに関する伝承にはあまりイメージの良い物はなかったのですが、実際のところ今の時代にエルフの恐怖を直に感じた人間など生きてはおらず。

しかも、どう考えてもテファが他人に危害を加えるとかは考え難く、次第にそんな事を気にする学院関係者はいなくなっていたのです。

ところが、これに唯一ケチを付けて来た人間がいます。

「ミス・クルデンホルフ。テファは、アンリエッタ女王陛下の庇護下にあるアルビオン王族にも連なる人物なのですよ。それを一方的になじるのは、貴族として如何なものかと?」

「あなたは、何者なの?」

今回の新一年生の中に、クルデンホルフ大公の娘であるベアトリス嬢がいた事から騒ぎは大きくなっていました。

先々代のトリステイン国王から大公の位を授けられ、軍事面を除

いてその豊かな財力を背景に半ば独立国状態であるクルデンホルフ大公は、その豊富な資金を多くの貴族に貸していて、かなりの影響力を保持していました。

勿論、お金に常に苦勞していた父グラモン侯爵も、クルデンホルフ大公からかなりの借金をしていたのですが、今では無事に私からの借金だけとなっていましたし、逆に他の貴族にお金を貸すようにもなっていたのです。

その原資は私からの借金なのですが、別に私からすれば戻って来なくてもまるで痛くないお金でしたし。

「始めまして。私は、今度三年生になるティーボ・ド・グラモンと申します」

「何よ、グラモンの下賤の血は、エルフを庇い立てするのかしら？」

えらく久しぶりに聞いた私への非難の言葉でしたが、これは致し方ない事だと思っていました。

名目上は独立国とはいえ、空中装甲騎士団以外にあまり大した兵力を持たないクルデンホルフ大公国は、トリステイン貴族に金を貸して借りを作る事でそれを安全保障の一部としていました。

ところが、父の資金源が豊富になった影響で、次第に借金を借り替えるトリステイン貴族が続出していたのです。

名目上とはいえ、トリステインから独立した外国の貴族に金を借りるよりは、同じトリステイン貴族である父から借りた方が恥ずかしくない。

それに、王城から変な目で見られる事も減るであろうと。

『借金のせいで、トリステインを裏切るのでは？』

そう思われたくない彼らは、かなりの数借金を父の方に切り替えていました。

おかげで、クルデンホルフ大公から借金をする貴族が減って、それで影響力が落ちた彼はどうしたものかと苦慮しているはずなのですから。

多分、彼女はクルデンホルフ大公が困っているのと、その元凶が私である事に気が付いているのでしよう。

「どうして、エルフと一緒に勉強なんてしないといけないのよ！
エルフなんて存在自体が異端じゃない！」

「とはいえ、この状況を知って現状を認めているのはアンリエッタ女王陛下ですから」

私は非難されるテファを庇いつつ、ベアトリスとその周りにいる空中装甲騎士団の連中と睨み合いを始めます。

しかも、私に付いている護衛達や、ギーシュ、ギムリ、レイナーなどの従軍経験ある男子生徒までもが、彼らと睨み合いを始めていたのです。

どうやら、またひと波乱発生しそうな雰囲気のようにです。

四十五話

「なあ、あのツインテールのツンツン娘は、どうしてあんなに偉そうなんだ？」

テファへの攻撃姿勢を崩さないクルデンホルフ大公国のお姫様であるベアトリス嬢でしたが、その時はこれからすぐに授業が始まるという事で、一端その場での争いは終了となっていました。

ですが、あの騒ぎが何もしないでそのまま完全に収まる道理もありません。

ベアトリス嬢は、早速に自国出身の法衣貴族の子女や、いまだにクルデンホルフ大公から金を借りているトリスティン貴族の子女などを取り巻きとして、彼女達も使ってテファに嫌がらせを始めるつもりなのでしよう。

ちなみに、テファに対する異端云々と言った話ですが、それはルイズの鋭い一言によって止められていました。

『あんだ、司祭の委任状も持たないで、テファに異端云々言って裁く資格があるの？』

いくら彼女がエルフとはいえ、それだけで異端扱いして裁く事など不可能だったからです。

むしろ、何の許可も持たないベアトリス嬢が勝手にブリミル教関係者を名乗って彼女を裁こうとすれば、それこそ詐欺に等しい罪状となるでしょう。

何しろレコン・キスタのせいで、ロマリアは勝手に神の代弁者を名乗るような輩にえらく警戒するようになったのですから。

確かに聖地奪還は大儀としては有功なのでしょうが、それを達成するために始祖の血を引くアルビオン王家を一端滅ぼしてしまっただのは致命的でした。

彼らは、始祖の血を引く正当な王権を奪還するために、トリステインに力を貸す羽目になったのですから。

まあこれには、力を貸さないとロマリアに翡翠や水晶の柱などを相場よりも安く卸している私が、その値を吊り上げるかもという圧力も存在したのですが……。

彼らは自国の宗教設備だけではなくて、国内の職人達の技術レベルと収入を確保するために、過去の偉大な聖人達の像をハルケギニア中の金持ちに販売もしていたからです。

私から安く材料を購入して、それをロマリアの腕の良い工房の職人達が加工して、坊主が敬虔な信徒達に売る。

一種の産業の輪が完成していて、ロマリアの坊主達は私に親切な連中が非常に多かったです。

あんな貴族や王様以上の権力を持つ物騒な連中なので、私も保身のために仲良くしておくに越した事はありませんでしたし。

『覚えてなさい！』

ベアトリス嬢は、自分に反論してきた先輩がヴァリエール公爵の娘である事に気が付いて一端は静かになりました。

さすがに、トリステインで一番の大物貴族を何の策も無しに敵に

回すほど、彼女もバカではなかったようです。

とはいえ、小国ながらも名目上は独立国の姫様が、それで収まるとは思いません。

何しろ、彼女は今まで『蝶よ花よ』と周りからチャホヤされて生きて来たのですから。

テファはエルフとはいえ、そんな事には既に慣れた在校生徒達の間で人気者になっていました。

更に彼女は、あの二つの巨大な頂を持っているのですから。

どうやら、その世界でも巨乳は正義らしいのです。

私も、『妹とかがいるとこんな感じかも』と思いながら、彼女が世間に偏見に曝されないように何かと骨を折っていました。

まあ、私にはルイズがいるのであくまでも妹のような存在としてです。

決してルイズから邪な感情を指摘されて、それを必死に否定しているわけではないのです。

そして、そんなテファと私と同じくらい仲の良い人物がいました。

エルフに関する偏見など一切存在せず、むしろファンタジー世界の産物であるエルフに直接会えて喜んでいる才人その人だったのです。

彼は、テファへの攻撃姿勢を崩さないベアトリス嬢に、誰が見てもわかるほどに激怒していました。

「彼女は、小さいながらも独立国のお姫様でね。しかも、トリスティン貴族には彼女の実家から金を借りている者が多い。最近は、かなり減ったけどね」

「それで、あんな騎士連中まで護衛に連れて来ているのか」

「彼女は、一人娘で大切な跡取りだからね。クルデンホルフ大公も心配なのだと思う。それに、金持ちとは見栄を張るものなのさ」

「何だ、ギーシュと同じか……」

「同じとは失礼な！ 僕は、貴族としての矜持と格好良さの融合を目指しているだけだ！」

「いまいち意味は良くわかりませんが、ギーシュは才人にベアトリス嬢の実家の詳細を説明していました。」

「同類扱いされて、すぐに大声で反論していましたが……。」

「おかげで、我が俣一杯に育つてあの様か。あのツンツンツインテール、自分じゃなくてテファばかりチャホヤされているから気に入らないんだろ。まあ、あの貧弱な体じゃあな」

才人の言う通りに、確かにベアトリス嬢はテファと同学年とは思えないほどの大変にスレンダーな体型をしていました。

そこは数年後に期待という事なのかもしれませんが、才人はその発言を良く周りを見て言った方が良かったかもしれません。

才人の後方で、一人湧き上がる怒りに身を震わせている人物がいたからです。

やはり、少し？スレンダーなルイズでした。

「ありゃあ、きつと取った栄養が威張るためのエネルギーになっていて体に回っていないんだな。難儀なお姫様だぜ。その辺、アンリエッタ女王陛下とかはスタイル抜群だよなあ……」

止せば良いのに、才人の話は脱線して今度はアンリエッタ女王のスタイルの良さへと変化していました。

彼女の友人であるルイズは、才人の不敬発言に更に怒りの感情を増していきます。

「サイトぁー！ー！」

「ひっ！」

「口は災いの元だな……」

後ろから聞こえるルイズの唸るような低い声に、才人はようやく自分の犯した失態に気が付いていました。

さすがに、この件では傍にいたシエスタも彼を庇い立てする発言などはしなかったようです。

「このエロ犬使い魔！ クルデンホルフの娘はともかくとして、女王陛下をそんな目で見るな！」

「ひゃいー！」

結局その日は夕食無しの罰を受けてしまう才人でしたが、さすがに私も自分の身が可愛いので彼を庇う事は出来ませんでした。

「あのクルデンホルフの小娘、自分が危険な部分に首を突っ込んで
いる自覚があるのかね？」

「それを、僕に聞かないでくれよ……」

それから数日経ちましたが、相変わらずベアトリス嬢のテファへの嫌がらせは続いていました。

さすがに異端云々は引つ込めたようですが、彼女は自分の取り巻きを強化して、彼女達に影に日当に小さな嫌がらせを続けているよ
うなのです。

自分で直接手を下さない部分が如何にも我が侏お姫様なのでしょ
うが、彼女は自分の身分を本当に理解しているのでしょうか？

私は、ギーシュに溜息をつきながら自分の考えを吐露してしま
した。

「テファは、公表はされていないけどアルビオン王室と血縁がある
し、アンリエッタ女王陛下の従姉妹で、その庇護下にあるからな」

最初から、テファを異端扱いする事など不可能なのです。

彼女はエルフではありませんが、始祖ブリミルの血を継ぐアルビオ
ン王家の人間なのですから。

と言うか、その辺の問題は当然彼女がここに来る前にロマリア側
と協議を終えているので、ベアトリス嬢が何を叫んでも坊主達は何
も見なかった事にしてくれるでしょう。

政治とか世間とはそういう物なのですが、それがあのお姫様には

理解できていなかったようです。

「このままだと、クルデンホルフ大公国がトリステインに喧嘩を売っている構図になるだろうね」

「えっ！　そういう事になるのか？」

才人は私の発言に驚いているようでしたが、ベアトリス嬢はクルデンホルフ大公の一人娘で現在唯一の大公位継承者であり、テファも後にはトリステイン・アルビオン連合王国内でそれなりの地位を得る予定の王族なのでから。

「生まれが良いと得する事も多いけど、それなりに振る舞いとかに気も使わないと駄目なんだけどな」

正直に言っつて、私は父グラモン元帥のおかげで今の安定的な立場にいられるのですから。

功績に比べると報いられていないという人も多いですが、もし私が何の力も無いただの男爵家の息子だったりした場合、多分今頃はその力をただ利用されているだけの存在になっていたでしょう。

文句が無いとは言いませんが、人間常に完全に満たされるわけもないですし。

「父に頼んで、クルデンホルフ大公に釘を刺して貰うとか？」

「何か、子供の喧嘩に大人が出てくるようで嫌な感じだけどなあ…」

空中装甲騎士団という武力を振り回す可能性もある子供なのが問

題でしたが、彼女もそこまでバカではないであろう。

私は、信じたかったです……。。

「大変だ！　ベアトリス嬢がテファを異端審問にかけるって！　どこからか司祭の委任状まで手に入れているんだ！」

そこに血相を変えたレイナールが飛び込んで来て、事態は最終局面へと向かうのでした。

「ルイズ先輩、司祭の委任状ならここにありませんよ。さあ、エルフを異端にかけるわよ！」

学院の中庭には、多くの人が集まっていました。

数名の取り巻きの女子生徒達を従えたベアトリス嬢が、空中装甲騎士団を護衛にテファに詰問する様子を周囲の多くの生徒達が見学していたのです。

そしてそれにいち早く気が付いてテファの傍に近寄ったルイズに、ベアトリス嬢は自慢気に司祭からの委任状を見せていました。

どうやらこれを取り寄せるために、彼女は数日間テファへの本格的な攻撃を控えていたようです。

「才人！　ギーシュ！」

「ああっ！」

「任せたまえ！」

そこに私達が飛び込んで、才人はテファの前にデルフリンガーを引き抜きながら立ち、ギーシュ、レイナル、ギムリ、マリコルヌなどのいつもの面子が更にテファを囲みます。

そして私は、ルイズを庇うようにその隣に立ちます。

「ティーボ！」

「大丈夫だったか？」

「ええ」

私の姿を見てか？

ルイズは、安堵したような表情を浮かべていました。

「邪魔するつもり？」

「ですから、邪魔も何も、学院の庭で勝手に異端審問など困るので」

一体どこから持ち出したのかは不明でしたが、もし今の状況で勝手にテファを異端者として罰したら、その委任状に名前を書いている司祭の将来は考えるだけ可哀想なほど暗い物になるでしょう。

暗くても、あるだけマシという結果にもなりかねません。

多分、それが書かれた頃にはテファの存在など考慮の外だったのでしょうが、それでもそれが利用されてしまえば責任が発生する。

通信機もネットもない、ハルケギニアならではの事情でした。
緊急連絡とかは、かなり難しいでしょうから。

「何よ！ グラムモン家とはいえ五男程度の半端者の癖に！」

「あなた、本気で言っているの？ ティーボは侯爵の爵位を持つ大貴族なのよ」

「私は、クルデンホルフ大公国の正当な後継者よ！」

なぜか私の代わりにルイズがベアトリス嬢と言い争いを続けていましたが、議論は平行線を辿ったままで、遂に痺れを切らせたベアトリス嬢が強硬手段に訴えかけて来ます。

二十名ほどいる鎧姿の空中装甲騎士団員達に、テファの身柄を押さえるように命令したのです。

彼らの中にはこの命令に疑問を感じている人もいるのですが、そこは宮仕えの悲しさ。

無言でベアトリス嬢の前に出て、その威圧感を存分に周囲に振りまいていました。

空中装甲騎士団は数は少ないものの、アルビオンの竜騎士隊に匹敵するほどの精鋭揃いであり、現在アルビオンのそれがトリスティンの竜騎士隊と合併して再建途上にある今、ハルケギニア最強の竜騎士団という評価を受けていたのですから。

「ほほほっ！ 武の重鎮たるグラムモン家とはいえ、その息子程度ではね」

自分の圧倒的有利を悟って高笑いを続けるベアトリス嬢でしたが、

私もギーシュも特に彼らに恐怖を感じてはいませんでした。それと、ガンダールブたる才人もです。

ギーシュはすぐに五体のワルキューレを生成し、才人はデルフリンガーを構えたままで前に出ます。

他にも、レイナル、ギムリ、マリコル又などを含めた二十名のほどの男子生徒達が杖を構えながら彼らと対峙を始めました。

「何よ！ 学生如きが正規の騎士団に勝てると思っっているの？」

「まあ、負けないだろうな」

私がそう言っつてすぐに、ギーシュのワルキューレに攻撃を受けた二名の騎士が意識を失って倒れ、もう二名も立て続けに才人から攻撃を受けて脳震盪を起こして地面に倒れていました。

他にも、スリープ・クラウド（眠りの雲）で眠らされる者、落とし穴を作る魔法で穴に嵌って鎧の重さで抜け出せなくなる者など。時に数ヶ月の実戦は、数年間の訓練を凌駕する事があるようでした。

「ちよつと！ あんた達は正規の騎士団で！」

「空中装甲騎士団を竜から降ろして、しかも鎧は重装備のままだし。負けないようにするのは簡単なんだけどな」

確かに重武装で竜に乗れば彼らは最強の存在なのでしょうが、何十キロもある鎧姿のまま地面に立たせれば、彼らはだたの愚鈍な案山子でしかありませんでした。

せめて鎧を脱がせてあげれば、そこそこ使える護衛となったのでしょうが、ベアトリス嬢は彼らの見た目に拘ってかえってその機動力と戦闘力を殺してしまったようです。

「これで、これがトドメね」

最後に、私がある改良魔法を使います。

これも錬金の亜種のような魔法で、要するに空中装甲騎士団の鎧に、地面から採集した様々な金属やケイ素を原子単位で結合してあげただけです。

これによって、まるで力士の着ぐるみようになった彼らは、二百リールは軽く超える重量になった鎧のせいで全く動く事が出来なくなっていました。

「うーん、えげつない魔法だな」

「ギーシュ、頭を使っていると云ってくれ。でも、みんな新しい騎士団の団員に相応しい技量を見せてくれたね」

二十名の最強のはずの空中装甲騎士団が指すら動かさずに地面に突っ伏している状況にベアトリス嬢は呆然としていましたが、私はそれを無視してギーシュと話をしていました。

実は、先のアルビオン戦役で戦場に出た生徒を中心に、アンリエッタ女王陛下から新しい騎士団を作る許可を貰っていたのです。

許可というか、トリスティンではこんな感じで雑多な騎士団などが数年に一度から十数年に一度新設され、それと同じ頻度くらいで統合や廃止などがされていて、これら騎士団によって常時の兵力不足を解消していたのです。

多分、私の傍にトリスティン王家の意向を汲む護衛も行える戦力が必要だったのと、私に箔でも付けたかったのかもしれない。何しろ名目上だけの物とはいえ、この騎士団の団長は私だったのですから。

実際には私はお飾りで、実務は副団長のギーシュと才人に任せる予定でしたが。

「それで、騎士団の名前はどつする？」

「水精靈騎士隊オンディーヌという事で、実は最初から決まっているんだ」

「アンリエッタ女王陛下の命名かい？」

「そういう事。ところで、クルデンホフルのお姫様、まだ下らない争いを続けるかい？」

「いいえ……」

頼りにしていた空中装甲騎士団が戦闘不能となり、いつの間にか取り巻き連中まで逃げられていたベアトリス嬢は辛うじてその一言を搾り出すのが限界だったようです。

素直に敗北を認めて、逃げるようにその場から立ち去ったのでした。

「しかし、テファも大概お人好しというか」

翌日、ようやく学院内は落ち着いていました。

ベアトリス嬢が手にしていた司祭の委任状だったが、これは勝手に実家から持ち出していた物であり、しかもかなり古い物だったらしく。

それを使って自分の娘がテファを裁く可能性があるを知ったクルデンホルフ大公は、慌てて使いを学院へと寄越してその委任状を回収して行ったようです。

その際にお遣いである空中装甲騎士団員から何かを言付かったようですが、少なくとも褒められるという事はありません、多分父親であるクルデンホルフ大公から『余計な事はするな!』とでも言われたのでしよう。

まるで憑き物が落ちたかのように大人しくなった彼女は、なぜかテファと仲良さそうに話をしていました。

あそこまで嫌がらせをされた相手と仲良く出来るテファは、さすがはアルビオン王家の血を引く人間というか、元の人間としての器量が非常に素晴らしいのかもしれませんが。

才人は少し呆れていて、私もギーシュを見ながら感心してもいたのです。

「何か、居心地の悪い視線を感じるけど……」

「それは、自分に何か覚えがあるという事では？」

「君は？」

そして、ベアトリス嬢のお遣いと一緒に現れた竜に乗った人物が私達に話しかけてきます。

「ロマリアの助祭枢機卿で、教皇ヴィットーリオの側近で聖歌隊の指揮者も務める、ジュリオ・チェザーレオットアイという月目の美少年でした。

「始めまして、ジュリオ・チェザーレと申します。ティーボ殿のご高名はかねがね伺っております」

恭しく頭を下げて挨拶をするジュリオでしたが、その態度にどこかふてぶてしい物を感じる私でした。

「便利な錬金装置としてですか？」

「おや、これはなかなか僕と気が合いそうだ」

私とジュリオは、共に相手を値踏みするような笑みを浮かべます。

「ところで、教皇猊下の側近中の側近であるジュリオ殿がどのような用件でここに？」

「簡単に言うと、クルデンホルフのお姫様が勝手に実家から持ち出した委任状の後始末ですな」

レコン・キスタの影響で司祭の権力を振りかざす困った連中に警戒しているこの時に、よりもよってクルデンホルフ大公のお姫様がロマリアとトリステインの決定事項に逆らってまで余計な事をしてくれた。

だが、今の時点で事を公にも出来ないので、穏便に事件を処理するのとそれを見届けるために彼は学院に来たのだと説明します。

穩便に済ますとは言っても、多分クルデンホルフ大公はロマリアに貸しを作ってしまったって苦々しい思いをしているのでしょう。

娘の管理を怠った責任があるので、私は全く同情はしていませんでしたが。

「他にも細々と用事がありまして……。というわけで、暫く宜しく」

「（クルデンホルフのお姫様の件の方がオマケなんだろうな……）」

魔法学院に教皇の側近という更なる滞在者も現れ、どうやら私の願う平穏な日々はそう簡単には実現しないかもしれませんでした。

四十六話

「新しい騎士団ですか。これを新たに編成する権利を、アンリエッタ女王陛下から得たと？」

「権利ですか？ いや、これはトリステイン王国を守護するための義務ですよ。トリステイン貴族としての」

「なるほど、トリステイン貴族としての義務ですか」

テファとベアトリスの騒動から数日後の朝。

魔法学院に隣接する私の屋敷前の庭では、二十名ほどの男子生徒達が鍛錬に励んでいました。

私がアンリエッタ女王陛下から編成する許可というか権利を得た、オンディーヌ水精霊騎士隊の隊員に志願した男子学生達が、私の家臣達から訓練を受けていたのです。

何しろ騎士隊なので、彼らは戦争や実戦で役に立たないと意味が無いわけであって、我がグラモン家で実戦に揉まれた歴戦の家臣達からその手の事を中心に効率的な訓練を心がけていました。

学生との兼任で正規の騎士隊よりも訓練に時間が取れないので、余計に効率は重視されるべきでした。

レイナール、ギムリ、マリコル又などは少し息を切らせながら訓練に励んでいましたが、やはり実際に戦争に出たのが良かったのかもしれません。

本当の素人だと、うちの朝の基礎訓練だけでへばってしまいます

し。

そして才人とギーシュでしたが、ギーシュはあれでも子供の頃から自己鍛錬を怠っていませんでしたし、才人は既に何ヶ月も先輩なので副隊長として恥ずかしくない技量を誇っていました。

その中でも、僅か数ヶ月で指導役の教官を圧倒する剣技を身に付けようとしている才人には私も驚かざるを得ませんでした。そこはさすがは伝説のガンダールヴと言ったところなのかもしれません。

「ティーボ殿、あなたも相当にやると聞きましたが？」

私の隣で訓練の様子に興味深そうに見学するジュリオが、そっと囁くように質問をします。

「私のは、あくまでも万が一の際に少しでも逃げ延びられる確率を増やす程度の物ですから」

「なるほど、あなたが自分で杖を振るうような事態になったら由々しき事態であるか？」

「そういう事です」

私の答えに、ジュリオは納得したような表情をしていました。

しかし、ベアトリスの件でここに来たはずの彼でしたが、その後オスマン学院長と何か協議をしてからここを離れる気配がありません。

ここ数日、私の屋敷の居候となっていたのです。

彼の行動の裏にはあのロマリアの意図も存在するはずなのですが、今の私にそれを見抜く事は出来ませんでした。

「ですが……。さすがは、《錬金》殿が設立する騎士隊ですな」

彼が何を言おうとしているかは、私にも容易に理解できました。

いくら大貴族とはいえ、いきなり一から騎士隊を編成するとなると莫大な資金力と労力がかかるからです。

人を雇うと、それもある程度の資質を持つ人間を数十人も雇うとなるとお金がかかるのが普通です。

人件費は、これは学生なので卒業まではかかりませんが、彼らは私の騎士隊に志願してくれたのですら、お小遣い程度でも給料を払わないといけませんし。

それに、騎士隊ともなれば、それなりの装備も必要です。

今は訓練だけなので制服だけで対応していますが、まさかこの格好で実戦に参加させるわけにもいかず、当然家臣達に頼んで武器・防具・馬・その他装備品などの調達も行わせています。

勿論、これらの必要な経費はトリステイン王室が最終的には負担してくれるのですが、その額が確定するまでは完全に私の持ち出しとなります。

更に、この騎士隊を如何にして使うか？

いえ、正確にはどのような性格の部隊にするかですね。

いくら訓練を積ませて装備を整えても、たかが数十人規模の部隊ですから、いきなり前線に出せばたちどころに消耗してしまう事でしょう。

本当、戦争つてのは時間とお金がかかるものなのです。

高価な軍備が抑止で終わるようにと願う軍人が多いはずで、前世でいた軍人の暴走云々言う知識人の発言には首を捻らざるを得ませんでした。

なので私は、この戦力を宮廷内の派閥争いなどの犠牲にしないように、少し実験的な運用を行うとアンリエッタ女王陛下に提案していました。

「そういえば、専用の船を持つらしいですね？」

「ええ、新しい動力を装備した船なんです」

その船は、学院の元教師にして今はグラモン家で兵器の量産や新しい製鉄技術などの研究をしているミスタ・コルベールが、紫電改のエンジンを参考に石炭を燃やして動力とする水蒸気機関の試験船を提供してくれる事となりました。

「なるほど。少ない戦力ながらも、必要な時と場所に迅速に戦力を送り込むと」

前世で存在したアメリカの海兵隊のような考え方なのですが、勿論そこまでの戦闘能力を持っているはずもないですし、私としては訓練だけ行つて必要なデータをアンリエッタ女王陛下に提供する事で、この騎士隊を無駄な戦争から遠ざけようとしていたのです。

「皆は、あなたの錬金の能力ばかりに注目しますが、普通の貴族では考え付かないようなアイデアを多数お持ちのようですね」

「そうですね？ このくらいの事は少し軍に身を置けば誰でも

考え付くでしょう。それを実行するとすると、組織の論理とかで難しいのかもしれませんが」

まるで私を値踏みでもするかのようにつめるジユリオに、少し冷や汗の出してしまう私なのでした。

「朝の訓練は終了だ。朝食だぞ！」

「やったぁー！ー！」

「マリコル又は相変わらずだなあ……」

朝の訓練終了後、私は学院の食堂で食事を取りたい人を除いて、全ての隊員達に朝食を提供していました。

このような経費は王室には請求できないので、勿論これは私のポケットマネーでしたが。

それと、試作新型動力船とかもですね。

これは試験品を運用してデータを取り、その後の量産に生かせれば後で利益を回収できるという代物でしたから。

新しい水蒸気機関は、これは普通に水上を走る船にも地面ならば鉄道にも応用可能な技術です。

他にも様々な分野で応用が利きますし、これを作れる技術力があれば他国や他の貴族よりもかなり有利になるでしょう。

私はゲルマニアから技術導入をしてまで、これの完成に多額の金

をかけていました。

魔法重視のトリスティンからすれば、私の行動は奇行の類なのでしょうが、普段は錬金の魔法ばかり目立つ私なので、趣味の一環のような物だと考えられてあまり目立ってはいないようでしたが。

「ティーボ殿の屋敷で出る食事は、少し変わった物が多いですね。東方風とでも言いましょうか」

居候であるジュリオは、シエスタの給支する食事を毎日興味深そうに観察しながら食べていました。

「東方由来とされている書物を解析しましてね。それとも、これも教皇猊下は異端だと仰られているので？」

「まさか。教皇猊下は、食べ物如きでは何も言いません。人でも食べたのなら問題になるでしょうが」

「政治の世界などでは人を喰ったような話は存在するでしょうが、実際に人を喰うのは亜人くらいでしょうかね？」

「ティーボ殿も、なかなか例えが上手なようですね」

私は、『実はジュリオとヴィットーリオは、私の秘密を知っているのでは？』という疑念を隠せないまま、ここ数日互いに何かを含むような笑みを浮かべながら腹の探り合いに終始していたのでした。

「この二人、マジで怖いな」

「ええと、政治的な事は僕は知らないな」

「ティーボもそうだけど、あのジュリオも相当に挑発的に見えるわね……」

才人とギーシュとルイズは、少し心配そうに私とジュリオのやり取りを伺っているようでした。

「せえい！」

「これは、思ったよりもやるね」

オンディーヌ
水精霊騎士隊を設立して、最初の虚無の日。

私は、全員に休暇を出していました。

隊員達はそれぞれに休暇を楽しむ予定で、才人もこの日は私から軽トラを借りてトリスタニアに買い物に出かける予定となっていました。

アルビオン戦役の戦功で給料が増えたので、シエスタを連れて買い物に行くらしいのですが、どう考えてもデートですね。

ギーシュ達は、血の涙を流しながら『裏切り者！』と叫んでいましたから。

他にも、ギーシュは使い魔であるヴェルダンデに掘らせた宝石の加工を行うとかで部屋に籠っています。

どうやら、ようやくギーシュは自分の使い魔を一番得意な分野で使う事にしたようです。

実は、ギーシュの使い魔ほど巨大なジャイアントモールは、グラ

ンドワームよりも獲得してくる宝石の量では負けるものの、一度探し当てた宝石の匂いを覚える事が可能だったので、質の面ではそれに勝る成果を挙げる事が可能だったのです。

ダイヤモンドならダイヤモンド、サファイヤならサファイヤと。一度匂いを嗅がせれば、それらを選別して持って来る事が可能でした。

『ティーボ、僕には金が必要なんだ』

『モンモランシ伯爵は、お金が無いからなあ……』

ラグドリアン湖に接する領地は、過去の開拓の失敗で巨大な借金を背負い、今回の戦役でも思ったほどの戦果を挙げられずに収支がトントンで終わってしまった影響で、モンモランシ伯爵は急ぎ自分の領地を開発して税収を上げる必要性に駆られていました。

そこで彼は、広く開発債権という形で資金を集める事にしたのですが、やはり前回の大失敗が祟ってか？

債権を購入してくれる人が、ほとんどいないという現実に曝されていたのです。

『水の精霊の怒りも解けた現在、開拓は成功を約束されたような物なのに……』

『とは言ってもだな……』

債権の大半を購入する商人達からすれば、一度ミソの付いた開発

に命よりも大切なお金は使いたくないのが実情なのでしょう。

貴族は、モンモランシ伯爵を見るとわかる通りに、領地を持つ貴族としての信用によって、莫大な借金があってもそう簡単には潰れないようになっていきます。

普通の人ではあり得ない額の借金も可能で、魔法のみならずこれも貴族の特権と呼ぶに相応しいでしょう。

勿論限度があるので、破産してしまう者も多いのですが……。

ですが、商人には金しか武器が存在しないのです。

なので、そんな貴重なお金を半ば投機的と考えられている開発に出す道理ありませんでした。

それに、アルビオン併合の影響で他に開発債権を発行する貴族も多かったため、他にいくらかでも安全で利益を確保できる案件も多数存在しましたし。

『ならば、僕が金を作って債権を購入しよう！』

というわけで、彼はコツコツとヴェルダンテに集めさせた宝石を自分で加工する事にしたようです。

これ売って、債券を購入しようと考えているのでしょう。

そして話は戻りますが、シエスタとデートに出かける予定の才人でしたが、なぜかその前にジュリオにひと勝負申し込まれて剣で戦っていました。

私が見るに、ジュリオはかなりの手練れに見え、実際に剣の技で

は才人を完全に圧倒していました。
それでも互角なのは、やはりガンダールヴの能力補正の影響なの
かもしれません。

確かにここ最近の才人の努力は認めますが、剣の道というのは事
の他時間がかかるというのが常識でしたから。

「やるな！」

「君こそ！」

さすがにジュリオも、デート前の才人に怪我をさせるつもりはな
かったようです。

適当な所で切り上げて、勝負はまずは引き分けという結果に終わ
っていました。

「ティーボ、ジュリオって強いんだな」

「彼はメイジではないしな。その分、剣に力が入るのさ。それに、
才人も努力はしているのだろうが、やはり年季が違う」

あの若さで教皇の側近中の側近なのですから、それなりに秀でた
特技を持っているでしょうしね。

「だよなあ。まあ、それは時間が解決するんだろうけどな。シエ
スタ、早くトリスタニアに行こうぜ」

「はい。ティーボ様、行って来ますね」

あまり深く悩むような性格でもない才人は、支度を整えて出てき

たシエスタと一緒に借りた軽トラに乗ってトリスタニアへと出かけてしまいました。

「あれが、噂の鉄の牛かい？ 随分と便利な乗り物なんだね」

ジュリオは、才人の運転する軽トラを興味深そうに見ていました。

「僕でも動かせるのかな？」

「竜を操るのと、別の意味での訓練が必要だけど」

ジュリオは、剣の他にもアルビオンの竜騎士隊顔負けの竜使いとしての腕前も持っていました。

良く見ると、彼は自分の竜を完璧に慣らしているようですが、軽トラは生き物ではないので慣らすという行為は不可能です。

ただハンドル捌きと、ペダル操作を覚えるしかないのですから。

まあ、そんなに難しいものでもないのですが。

「今度、教わってみようかな。ところで、ティーボ殿の今日の予定は？」

「ええと……、まあ……」

本当は、私も今日は休暇の予定だったのです。

なので、才人と同じく婚約者であるルイズと一緒にトリスタニアで二人でデートなどをしようかと思ったのですが、昨日の夜に王城から緊急のフクロウ便が来て予定を台無しにしていました。

『明日は私もお休みなので、王城にてティーボ殿にお茶や食事など』

を振舞いたく』

アンリエッタ女王陛下からの誘いなのですが、これを見たルイズは機嫌を急降下させていました。

せつかくのデートを潰された拳句に、その相手が最近一番危険な女でもあったからです。

「文章は短い手紙だけど、これはある意味、意味深なのかな？」

ジュリオは、私が見せた手紙を読んで一人首を捻っていました。

「普通なら、ティーボ殿の婚約者でもあるミス・ヴァリエールも招待されるはずだね。女王陛下とミス・ヴァリエールは幼馴染にして親友同士でもあるから、わざわざ書かなかったという考えも出来るけど……」

「そこは親友なんだから、普通は一文、『ルイズもどうぞ』って書くだろう」

「うーん、女王陛下が治世の安定のために、ティーボ殿を一对でもてなす。貴殿はかなりの重要人物だからね」

私が錬金した金属・宝石や、それを売った財貨を借りる事によって、トリスティンは破産する事なく無事にアルビオンを吸収合併に成功していました。

戦後、功績が大き過ぎる私との関係を緊張状態をもって行きたくないせいでしょうか？

王城は、グラモン家からというか私からの借金を広大な領地と各地の鉱山などの利権などで全てチャラにしています。

『長い目で見ると、十分に元は取れると思うがな……』

父の言う通りで、これらの領地や権利が実際に金になり始めるには、少なくとも数年の年月とそれに見合う投資が必要ですし、それを行える貴族ともなるとトリステインでは五人と存在しないが現状です。

おかげで他の貴族達からは、『ティーボ殿は、その功績に見合う褒美が貰えたのか判断に悩む所だな』などと噂されているようでした。

私としては、学院卒業後に本格的な領地の開発や金属の精錬事業などを始めれば良いので特に気にならなかったのですが、アンリエッタ女王陛下の方は気にしているようです。

女王陛下自ら、休日に臣下を招待して君臣の仲の良さをアピールする。

休日まで政治に時間を費やす女王陛下というのも、なかなか大変なお仕事の様子です。

それに付き合わされる私も大概なのですが……。

「お茶と食事なら、お昼までには終わるだろう。その後でトリスタニアの町でも一緒に回ろうか？」

「そうね。女王陛下もティーボに気を使っているだけなのよね……。私は、午前中はトリスタニアのヴァリエール邸で待っているから」

「済まない」

ようやく心の中で折り合いを見付けたルイズは、私が運転するパジエロの助手席に座って急ぎトリスタニアへと出かけるのでした。

「本日は、ようこそお越しいただきました。グラモン侯爵」

「（普段はアルビオンにいるマザリーニ枢機卿が、どうしてここに？）」

ルイズをトリスタニアにあるヴァリエール別邸まで送った私は、急ぎ王城へと顔を出したのですが、そこで私を迎えたのは今はアルビオンでマリアンヌ女王を補佐する立場にあるマザリーニ枢機卿でした。

「今日は、たまたまトリスタニアで用事がありましたな」

「そうなのですか（何か変だなあ？）」

しかし、どう考えても今の時点で彼がトリステインに来ると思えません。

なぜなら、現在アルビオンに君臨するマリアンヌ女王陛下は、誰から見ても一人で国政の面倒を見れる人ではなかったからです。

あくまでも、アンリエッタ女王陛下にバトンタッチするためのお飾りで、それは本人が誰よりも重々承知しているでしょう。

正直、マザリーニ枢機卿は自分の身が二つ欲しいところでしょう

が、どちらに重点を置いて面倒を見るかと聞かれれば、いまだに国土が安定しておらず実務能力がほぼ皆無なマリアンヌ女王陛下の居るアルビオンの方だったからです。

私からすれば、アンリエッタ女王陛下も十分に危ういのですが、トリステインには父やヴァリエール公爵などの軍・政の実務能力に貴族も多いので、自然とこういう役割分担になっていました。

それに、アンリエッタ女王陛下は自分が何かをするというよりも、人の上手い使い方を覚える方が重要でしょうし。

「グラモン侯爵の新領地は、予想以上に安定しているようですね」

「私は何もしていませんからね。優秀な家臣に全部丸投げですし」

私の新領地であるヨークシャーは、北部にあったのでレコン・キスタによる被害が少なかったのと、私が特に何もしていないせいでもかなり安定していました。

普通、こういう新しい領地を得た時には、素人は早く成果を出そうと色々とし新しい事を無理に始めてしまうものです。

ですが、いまだに完全に状況を把握していない領地内で新しい事を焦って始めても、それに領民達が付いて来るはずがないのです。

まずは、住民の数や町や村の状態や領内の産業などの把握を行い、そのデータに合わせて改革を行うべきでしょう。

グラモン領に関しては、あの領地は何百年以上もグラモン家が統治していて完全に情報を把握していたので、手を入れるべき場所や改革すべき点が理解できていたのが大きかったです。

昔のグラモン家はお金が無かったので、それが行えなかったただけなのですから。

「戦乱で迷惑をかけたので、今年度は税金を免除。次年度は半分ですか……」

それで領民達の支持を最初にガツチリと掴みつつ、その間にアシルに領内の状況の把握と、家臣団の編成を任せて終えてしまう。

税収が無いのは問題でしたが、二、三年間くらいであれば私の稼ぎだけでも十分に領地の運営は可能でしたし、あの莫大な借金を免除してあげた代わりに、父や私や兄達が王国に払う上納金は十年間無料という事になっていたからです。

これが有るのと無いのでは随分と違うのですが、そこまでして貰ってもまだ王城側は私に大きな借りがある状態だったので、他の貴族達からは文句も出なかったようです。

『なら、貴殿が態度を硬化させたティーボ殿に、王国の代わりに借金を返してくれるのかね？』

こう言われるのが、誰の目から見ても明らかであったからでしょう。

「卒業後に、本格的に領地の開発に入ります。その頃には領地の状況も落ち着いているでしょうし」

「なるほど」

「それと、婚約中のルイズと結婚式を挙げないと駄目ですね。式は、学院を卒業してからで良いと思いますが」

前世では独身のまま死んでしまった私ですが、別に結婚に興味がないわけではないのです。

親同士で決めた婚約とはいえ、ルイズは滅多に存在しない美少女ですし、私としては文句どころか『これって、人生の勝ち組？』とか思っていましたし。

私も普通に俗物なので、時にテファのイケナイ二つの頂に興味を引かれる事も多いのですが、別にルイズに胸がないわけでもないのです。

彼女は背が低いので、胸があまり無いイメージを持たれる事が多いのですが、実はそこそこの胸はありましたし。

中世ヨーロッパ風な世界であるハルケギニアの住民達からすれば、小さいルイズは犯罪の匂いでも感じてしまうのかもしれませんが、私は前世は平成日本の住民です。

ルイズくらいの小さい女性の扱い？には、慣れていました。

「結婚ですか！」

「マザリーニ枢機卿は、如何なされたのですか？ そんな事は大分前に父達が決めて公表したではないですか」

トリスティン貴族でその事を知らない者などまず存在しないのに、一人驚きの声をあげるマザリーニ枢機卿に、私は思わず首を傾げてしまいます。

「ああ、そうでしたな。ティーボ殿は、ヴァリエール公爵のご令嬢と結婚なさるのでしたな。ところで、そろそろお時間なのでは？」

「はあ……」

私は、今さらのように昔に決まった私達の婚約について口にするマザリーニ枢機卿を置いて、一人アンリエッタ女王陛下の元へと向かうのでした。

「この前のお礼です。今日は、私がお茶を淹れましょう」

「女王陛下が自ら淹れてくれたお茶ですか。光栄でございます」

「あまり上手ではないのですが」

この日はアンリエッタ女王陛下も休日であつたらしく、私は普段の謁見の間ではなくて、彼女の私室に案内されていました。

『未婚の、それも女王陛下の部屋に男が入っても良いのかな？』
『思ってしまう私でしたが、まずはお互いに挨拶をしてから紅茶を淹れて貰います。』

考えるに、『女王陛下自らお茶を淹れて貰えるほどティーポ・ド・グラモン侯爵の功績は大きく、更に君臣の関係も非常に良好ですよ』
『というアピールに私は使われているのかもしれませんが。』

更に、彼女はトリスティンの国民達に非常に人気のある人物でしたし、しかもある重要な切り札を持っています。

それは、彼女はまだ未婚であるという事実でした。

確かに、トリステイン王国の財政と領土拡大にはグラモン家が大きく貢献しました。

だが、ここでもし自分の一族の者などが王配となる事が出来たら、貴族として、これほどの名誉と躍進のチャンスはないわけですが、アンリエッタ女王陛下側も十分にそれは承知しているのでしょう。

せめて、アンリエッタ女王陛下に休日呼び出されて、お茶を淹れて貰えるくらいの実績は示して貰わないとという、王城側などからの牽制である可能性も高かったからです。

未婚で、女王陛下という国で一番の権力者になってしまった。

特に女性の地位が低いハルケギニアでは、『これは、結婚への大きな妨げになってしまうのでは?』と私は心の中で考えていました。下手に大物貴族の子弟と結婚すれば、それは外戚の専横を許して国をおかしくしてしまうかもしれない。

昔に、王が妻を迎え入れる際に、妻の一族を皆殺しにしてから妻にしていた。

冗談とも、事実とも、断言できないような話を前世で聞いた事があったので、その点においては私は彼女に同情的な気持ちを抱いていました。

「母や宰相が、私に結婚をするべきだと言うのです」

私の心の中の考えを、知ってか? 知らずか?

アンリエッタ女王陛下は、私のカップに紅茶のお替りを注ぎながら憂いを帯びた表情で話しかけてきます。

「（こうして、客観的に見ると良い女ではあるのか。王家の女性としての高貴さと、たまにふと漏れる女としての艶か……）」

評論できるほど私も女性に詳しいわけでもないのですが、彼女に見つめられて私は少し体温を上げてしまいました。

「ティーボ殿は、どう思われますか？」

「して貰わないと困ります。女王陛下のお子こそが、連合王国となつたトリステインとアルビオンの王位を兼ねるのですから」

両国の王族と縁戚関係にあるアンリエッタ女王陛下の子供だからこそ、その地位の継承に正当性が出てくるのですから。下手に養子など入れようとすれば余計に貴族達が騒ぐでしょうし、それが原因で国が割れてしまう可能性もある。

私は、自分の考えを務めて冷静に彼女へと説明します。

「確かに、ティーボ殿の言う通りですね……」

「身分が低い、メイジとしては優秀な野心の低い人物。条件が厳しいですかね？」

「つまり、余計な口を出さない殿方を選べと？」

「そんなところです」

かなり極端に言えば、メイジとしての特に水の系統であればトリステイン王族にピッタリなので、夫本人と親族にはある程度の飴だ

け与えて政治に余計な口を出させない。

つまり、都合の良い種馬程度の旦那の方が良かろうという私の意見でした。

「身も蓋もない話ですね」

「政略結婚とは、そういう物ですよ」

「私の女性としての恋は、ウェールズ様で終わりなのですね……」

彼が変に王族としての意地でアルビオンに残らなければ、他にもっと有効な手があったのです。

ウェールズ皇太子をアルビオン王に即位させてから、アンリエッタ女王陛下と結婚して二人の子供に王位を継がせる。

物凄く簡単な手だったのですが、彼はそれを未来予想図に入れなかったようです。

自分の好きな女性に、迷惑をかけたくなかったからなのか？

多分、大半はその理由で説明できますが、『実は、死に逃げたのでは？』という説も私は持っていました。

このままアルビオンの皇太子として果てれば、少なくとも失敗して生き恥を曝す事もない。

一時の恥を偲んでアルビオンから逃げ出しても、もし祖国の奪還に失敗すれば？

一生、国を失った哀れな王族として世間から噂されるのに、精神が耐えられないと思ったのかもしれないませんでした。

私なら、主に中身の関係でそんなプライドなど無いので、素直にトリストインにでも亡命したのでしょうか。

いや、いつそうゲルマニアにでも亡命すればとか……。王位など放つぱり出して、金属でも作っている可能性の方が高いでしょう。

「しかも、私は薄情な女なのです。あれだけ想っていたウェールズ様なのに、最近では思い出す事も少なく……」

「それは、女王陛下としての責務のせいでは？」

私も前世では、物凄く可愛がつて貰っていた祖父を亡くした際にえらく悲しんだ記憶があります。

ですが、時が経てばその悲しみも薄れていくもの。

そうしないと、人は生きていけないのですから。

「人は、過去ばかりを振り返ってはいけません。歴史の教師以外は」

受けるかどうか不明なジョークも交えて彼女を励ましますが、『クスっ』と笑ってくれたので、私の策は一応は成功したようです。

「そうですね。せっかくの休日ですからね」

そう、せっかくの休日ですし、私としては早く切り上げてヴェリール別邸で待っているルイズとデートにでも行きたかったのです。最近、トリスタニアには新しいお店が幾つか出来たとかで、私も

場違いな工芸品の類を探したかったですし。

「そろそろお昼の時間ですね。実は少し変わった趣向を準備して
まして」

そう言いながら私に微笑みかける女王陛下に、私は心の奥で何か
嫌な予感を感じてしまつたのです。

「あの、ここは？」

「はい、ド・オルニエールの屋敷の中です」

「それって？」

「トリスタニアの西にある土地ですわ」

なぜ、私がそんな場所にある貴族の屋敷にまで飛んでしまったの
か？

昼食という事で、王城で雇っているコックの料理でも食べるのか
と思つた私なのですが、彼女は突然自分の部屋に置いていた鏡らし
き物の覆いを取ってから私の手を引きます。

その結果、マジックアイテムらしき鏡の前に立つた私達は、あっ
という間にどこかの薄暗い地下室へと移動していました。

目の前には、まるで対のように見える鏡が置かれています。

「私も、上の立場でティーボ殿から財貨を借りるだけでは良くないと思ひまして……」

アルビオン戦役で必要な金を少しでも自分達で抽出しようと、王城中を調べて不要でお金に換えられる物を探していた過程で、このマジックアイテムを見つけてしまったらしいのです。

それと、このド・オルニエールの領地は十年ほど前までは領主が存在したものの、今では後継者もなく、土地は廃れて若者が出稼ぎなどに行き、余計に荒廃と過疎化が進んでいるとの話でした。

「誰かに下賜するのですか？」

「いえ、ここは王国直轄地に組み込みます。その方が、再開発も容易いでしょうし」

実はそんな事はどうでも良いのですが、なぜ王城の女王陛下の私室にあった鏡を見ると、そのド・オルニエールの屋敷に移動してしまうのか？

むしろ、そちらの方が気になっていたのです。

「これを使って、ド・オルニエールの過去の領主が王城の誰かと密会でもしていたのでしょうか。今となっては、誰と誰かという確認も出来ませんが」

「その密会の道具を、女王陛下は……」

全てを言う前に、突然私はその口を塞がれてしまいます。

しかも、その柔らかな感触はどう考えてもアンリエッタ女王陛下

の唇だったのです。

まさか、そんな事をされるとは予想もしていなかった私は、心臓をバクバクさせていて、多分顔も真っ赤なのでしょう。

「ごめんなさい。ティーボ殿は……、いえ、ティーボは私をはしたない女だと思つてしょうね」

キスを終えた彼女は、私を潤んだ目で見上げていました。

私も半ば反射的に彼女の背中に手を回して支えていたのですが、自らキスをしてきた割には、彼女の体は細かく震えたままだったのです。

「女王陛下、震えるほどの覚悟までして、どうして私などに……」

「私が、ティーボを好きだと言つたら変ですか？」

どう考えても、私とウエールズ皇太子では男としての器に大きな差があると思つのです。

勿論、私の方が圧倒的に下だという認識でしたが。

「ティーボは、こんな我が侂で傲慢な私に優しいではないですか。それに、あの方は私を置いて死んでしまった。私のために生き残るという選択が出来なかった。いくらウエールズ様でも……」

何か色々勘違いというか誤解があるように感じるのですが、アソリエッタ女王陛下は私に抱き付いたまま、胸に顔を埋めてしまいません。

「女王陛下……」

「ここには誰もいません。アンと呼んでください」

「…………、ちよっ！ 何、この昼のメロドラマ！ 俺は、午後からルイズと！」

怒涛の如く訪れた衝撃に展開に、私は当事者なのに心の中で懸命に現実逃避を続けてしまっただけでした。

四十七話

「あの……」

「ミス・ヴァリエールではないですか。如何なされたのです?」

「午前中に、女王陛下と謁見をしていたティーボを迎えに来ました。予定では、もうとつくに謁見は終了しているはずなので」

「そうですか。すぐに担当者に聞いて来ますので……」

ティーボが、自分の社会的な立場や、男としての本能や、自分の意思を貫こうとする姿勢などを心の中で闘ぎ合わせていた頃。

約束のお昼になっても、ティーボがヴァリエール別邸に現れない事を心配したルイズは、一人王城に彼を迎えに来ていた。

王城を警備する衛兵達の指揮官は、その職務上有名な大物貴族やその家族達の顔を覚えている。

ましてや、ルイズはアンリエッタ女王の個人的な友人でもあり、あの有名な《錬金》のティーボ・ド・グラモンの婚約者でもあったので、すぐに城内へと迎え入れられていた。

「女王陛下とティーボで、そんなに話す事なんてあるのかしら?」

ルイズは、最近のアンリエッタ女王が、自分の婚約者に対して明らかにただのいち家臣とは違う、女としての視線を向けている事を知っている。

あの裏切り者であったリッシュモン伯爵が討たれた際に、ティー

ボは彼女の身を守るべくその身を抱きかかえていた。

ティーボからすれば、それはトリステイン貴族としての義務に従っただけなのであるが、その彼に対して自分の友人は潤んだような視線を向けていた。

同じ女だからこそわかるのだが、明らかに彼女は自分の婚約者に対して臣下や友人以上の感情を抱いているであろう。

だからこそ、彼女は自分の使い魔である才人に竜の羽衣を操作させて時間を作つてまで、良くティーボに会いに来ていたのだと。

あの竜の羽衣は、確かに竜よりも圧倒的に早く目的地に到着して時間の節約にはなるのだが、動かすのに燃料という油が必要で、しかもその値段はかなりの物であった。

アルビオン出兵に向けて一エキューでも惜しい財政状態での、才人への手当てや燃料代の負担。

確かに、戦費のかなりの部分を負担しているティーボの錬金作業の視察というのにも必要なのかもしれないが、それを短期間で複数回行うのはやはり変であり。

きつと、他の個人的な理由も存在していたのであろう。

つまり、ティーボに会いたかつたのだと。

だが、翻つて考えてみるに、自分の婚約者は明らかにアンリエッタ女王に興味がなかった。

家臣として、トリステイン貴族としては、満点以上の功績を見せていたが、その忠誠心はといえば、自分の父であるヴァリエール公爵に言わせると、『上手く装ってはいるが、社交辞令の域を一步も出ていないな。彼は自分が安全に錬金が出来れば、多少の上からの

無茶も仕方ないと考えているのだろう。ある意味、物凄く大人なのだ。な。もつとも、追い込まれば大胆な行動をする能力もあるのだが』との意見であった。

表面上は優秀で誠実な家臣として振舞うから、自分の事は普段はなるべく放つて置いて欲しい。

多分、これがティーボの本音なのであろう。

父はティーボのそういう性格を見抜いて、実際にそうならないようにグラモン侯爵と組んで、両家で王城からの理不尽な要求を少しでも緩和しようとしているのであろう。

『だからこそ、私が婚約者なのですか？』

『実際に、ティーボが一番好きな女性といえばルイズなのだからな。一番違和感が無い』

父の言葉に、私は思わず顔を真っ赤にさせていた。

確かに、ラグドリアン湖でのパーティーで初めて出合った時に、彼は私に水晶で作った薔薇の花をプレゼントしてくれた。

女王陛下には、自分で錬金した真珠のネックレスを贈ったらしいのだが、これは父に言わせると『王城側に気に入られるための必要経費だな。貴族は、何事も最初が肝心なのでな』との事であり、むしろ何の打算も無くプレゼントを貰えたルイズの方が、よほど彼に好かれているのだとも言っていた。

『私の小さなルイズよ。もっと自信を持って彼と接しなさい』

そう父に言われたルイズは、今まで言われた通りにティーボの婚約者として接してきた。

学院内には、大金を稼ぎ、爵位も侯爵まで上りつめたティーボに野心を燃やす女子生徒が増えていたし、あの恋愛狂のキュルケのように初志貫徹で全く諦めていない者も多かった。

それでも、ティーボの彼女達への態度はいつもと全く変わらなかった。

彼は優しいので彼女達と友人としての付き合いはしていたが、異性としては興味が無いというか、婚約者である自分に疑われるような行動を一切取らなかったのだ。

自分を除いて、ティーボが一番接している女性といえば専属メイドのシエスタであったが、彼女は自分の使い魔である才人と付き合い合っていた。

本人達は否定していたが、休日に二人きりでトリスタニアまでデパートに出かけているのだから、これはもう確定なのであろう。

それと、比較的付き合いの古いモンモランシーもいたが、どうやら二人はお互いに恋愛感情という物を一切持っていないようであった。

本当に、異性同士の友人という関係にしか見えなかったのだ。

それに、彼女はあのギーシュに気があるのであろう。

少し前にギーシュのティーボに対する態度に呆れつつも、彼を決して見捨てなかったのだから。

最後に、最近ティーボが物凄く可愛がっているテファであったが、これは妹のように感じているのかもしれない。

あの胸に視線が行くのは男の本能らしいのだが、その他の部分では末っ子で弟や妹がいないティーボが、自分に対して純粹に尊敬の視線を向けてくる彼女に保護欲を感じているのであろうと。

「(学院では、特に問題ないのよ)」

少し不安もないわけでもなかったが、自分とティーボとの関係は良好であった。

一緒に学院で授業を受け、試験勉強をしたり、食事やオヤツなども一緒に事が多かったし、定期的に宝石や水晶を使ってアクセサリや小物を作ってプレゼントもしてくれる。

そして何よりも、放課後に学院の隣にある錬金小屋に向かう時。二人で、自転車なる才人の世界ではポピュラーな乗り物に乗って行くのだが、ティーボは決して自分以外の人間を後ろに乗せなかった。

ルイズは、ティーボの見た目よりも広くて筋肉質な背中に安心して寄っかかっていたのだ。

ところが、その二人の関係を一気に崩壊させる可能性があるのが、ティーボの方は全く迷惑に感じているであろう、アンリツタ女王陛下の存在であった。

彼女は、自分の想い人であったウエールズ皇太子への恋文の回収を命じて対して時も経っていないのに、もう自分の婚約者に興味を移していた。

「(女王陛下は、子供の頃からそう！私がお父様から買って貰ったばかりの人形を気に入って取り上げるけど、すぐに飽きてしまうのよ！きつとティーボの事も、かき回すだけかき回してすぐに飽きてしまうはずよ！)」

そんな事を考えながら、ティーボの様子を探りに行った衛兵を待っているところに意外な人物が現れる。

それは、アルビオン戦役後はマリアン又女王を補佐するために主拠点をアルビオンへと移したマザリー二枢機卿だったのだ。

「宰相閣下」

「ミス・ヴァリエール殿、これはお久しぶりにございます」

連合王国の宰相にも任じられていたマザリー二枢機卿であったが、トリステインの虚無の担い手であり、あのティーボの婚約者でもあるルイズに非常に丁寧な口調で話しかけていた。

「こちらに、いらしていたのですね」

「たまたまトリステインに用事がありました」

そう言いつつも、マザリー二枢機卿は既に針の筵状態であった。なぜ自分が、ここでルイズと話をしながら時間を潰しているのか？

それは、まだトリステインがアルビオンへと攻め込む前、ある噂を耳に入れたからであった。

『アンリエッタ様は、ある男性に懸想しているらしい』

最初は、今頃になって亡くなられたウェールズ皇太子殿下との噂でも流れたのかと思ったのだが、試しに探りを入れるとんでもな

い事実が発覚してしまう。

『アンリエッタ様の懸想されている人物とは、ヴァリエール公爵令嬢と婚約されたばかりの《鍊金殿》らしい』

事実ならば心臓が止まってしまいそうな噂であったが、やはりその噂は事実でマザリーニ枢機卿の心臓は今にも止まる勢いであった。今のトリステインが、あの圧倒的な空軍力を持っていたレコン・キスタ軍を退け、逆に攻め込めるようになったのは誰のおかげか？

その最大の功労者である人物にはヴァリエール公爵の娘であるルイズという婚約者がいたし、その婚約に王城側が異議を唱えるのはおかしいのだが、それでも彼らは律儀にその婚約を報告して来ている。

しかも、自分もマリアンヌ大后も、アンリエッタ女王も当時はすぐに賛同してお祝いの言葉を述べていたではないか。

なのにここで横取りなどしたら、王城側が両家の仲を引き裂こうという良からぬ事を企んでいる風にしか取られかねなかった。

『マリアンヌ様……』

さすがに困ったマザリーニ枢機卿は、この事実を当時はまだ大后であったマリアンヌに相談する事にする。

事が恋愛だったので、聖職者の自分ではどうにも判断が難しかったからだ。

『困りましたわね。ティーボ殿に婚約者がいなければ、王配としてこれほど相応しい人物もいなかったのでしょうか……』

稼ぐのに、権力に全く興味がなくて、しかも年齢的にも釣り合っている。

何より、アンリエッタ本人に全く異議など存在しない。確かに、これほどの適任者は存在しないはずであった。

『その件については、死んだ子供の齢を数えるような物です。それよりも、噂がヴァリエール公爵とグラモン侯爵に漏れたら大変ですぞ』

『ですが、ここで変に注意すると、余計に大変な事になるでしょう』
恋は、障害が多いほど燃えあがる。

ウェールズ皇太子への恋文の件で苦勞したマザリー二枢機卿は、マリアンヌ大后の意見に全面的に賛同していた。

『とはいえ、このままだとアンリエッタ様から……』

遠くアルビオンに居て滅多に会えなかったウェールズ皇太子とは違い、今度の相手はその気になればいつでも会えるというのが性質が悪かった。

更に、彼女は女王に即位していたので、建前上はこの国の最高権力者であり、誰も彼女の行動に異を唱える事は出来なかったのだ。

『何事も起こらないでくれ……』

祈る思いのマザリー二枢機卿であったが、その間にもアンリエッタ女王は視察と称して、良くティーポの工房に見学に行くようになっていた。

マザリー二枢機卿は、そこで婚約者であるルイズを逆なでするような行動をするのではないかと思ってハラハラしていたのだが、取

りあえずは今の所は大丈夫なようであった。

そしてアルビオン戦役後、彼女の行動の重しとも言えた自分とマリアン又女王がアルビオンへと向かった今、やはり彼女は何か行動を起こそうとしている。

スパイというわけでもなかったが、マザリーニ枢機卿はマリアン又女王と協力して、城内の古いメイド頭や銃士隊のメンバーから情報が上がってくるような体制を作っていた。

せつかく増えた国土が、男と女の色恋沙汰が原因で崩壊でもしたら目が当てられない。

いくらティーボ・ド・グラモンが王配に相応しい人物とはいえ、既にヴァリエール公爵令嬢と婚約までしている彼を無理に奪い取れば、今度はヴァリエール・グラモン大貴族連合と内戦になってしまう可能性があったからだ。

そして、その成果であろう。

一人の銃士隊メンバーから、銃士隊になぜか半ば荒廃して無人となっているド・オルニエールの屋敷周辺を嚴重に警戒するようにと命令を受けたと報告が入って来ていた。

主に平民の女子から編成された銃士隊は、その性格上アンリエッタ女王の私兵に近い存在であり、彼女の意を受けて密かに行動を起こす事など特に珍しくもなかった。

それに彼女達の大半は、自分の主君であるアンリエッタ女王の密会を漏らす事などしないであろうから。

『密会ですね……』

『密会ですな……』

悲しい事に二人の意見は一致して、仕方なくマザリーニ枢機卿は
急ぎ船を飛ばしてトリスタニアの王城へと来ていた。

『何で宰相の私が、密会を止めるために……』

そうは思っても、実際に言った時点で空しくなるだけだと思った
マザリーニ枢機卿は、この密会を止めるべく、しかもヴァリエール
公爵家とグラモン侯爵家の関係者にバレないように静かに行動を開
始しようとしたのだが、目の前に現れたルイズによって胃に穴が開
くのではないかというストレスを改めて感じていた。

「若いお二人ですからな。友人同士、話も弾んでいるのかも……」

「では、私もそれに少し加わるとしましょう」

「それは、その……」

アンリエッタ女王とルイズの関係を知らない王城関係者は非常
に少ない。

なぜなら、二人は幼少の頃からいつも一緒に遊んでいたからであ
った。

なので、ルイズの自分も加わるという言葉におかしな点など何もなかった。

だが、ここで彼女をアンリエッタの部屋に入れてしまえば、その時点で全てが終わってしまう。

マザリーニ枢機卿は、アンリエッタの企みに気が付くのが遅れたというか、よくよく考えると自分に彼女の企みを止める直接的な手段など無い事に気が付いていた。

彼女が、功臣であるティーボ・ド・グラモンを自室に招いてお茶を振舞うという行動に、ケチを付けるというかそれに割り込む事など不可能であったからだ。

それに、まさか城内の彼女の自室で逢引きなど行えば、それは女王たる彼女の人気と威信を落とす事になり、自分の国民からの人気に武器である事に気が付いている彼女もそんな真似はしないであろう。

ド・オルニエールへと移動していないので、とりあえずは安堵の溜息をつくマザリーニ枢機卿であったが、ここに来て急に一人のメイドからおかしな報告が上がって来ていた。

『鏡だと?』

『はい、どこでお見付けになられたのか? いつもは布がかかって見られないばかりか、私が掃除をしようとすると、手を出さないで欲しいと仰られました……』

その一言で、マザリーニ枢機卿はアンリエッタ女王の意図に気が

付いてしまつ。

室内で和やかに世間話でもしていると見せかけて、実はそのマジックアイテムらしき鏡で既にド・オルニエールへと移動しているのではないかと？

そして、そこで密会が行われるのだと。

多分、トリステイン貴族の中でも分別においてはトップクラスにあるとマザリーニ枢機卿が考えているティーボなので、彼からアンリエッタ女王とどうにかなるとは思えなかった。

だが、彼も一人の男であり、他に誰もいない屋敷でアンリエッタ女王の方から誘惑されてしまえば？

今から衛兵をド・オルニエールに差し向けても、周囲は銃士隊に囲まれているであろう。

当然、すぐに中に入る事などは不可能に近い。

ならば、ここは不敬に当たるかもしれないし、良い歳をした自分が未婚の女性の部屋に押し入るといふのもかなり失礼な行動ではあったが、ここは国家の緊急事態という事で決断をしたその時。

そこに、未だ帰らぬ婚約者を迎えに来たヴァリエール公爵令嬢の姿があつたのだ。

『まずい！ 彼女にアンリエッタ様の策謀がバレると大変な事になる！』

彼女が父であるヴァリエール公爵に話してしまえば、それだけで大変な事になってしまうであろう。

『（ここは、上手く一旦ルイズ嬢をお返しして、それから私がそのマジックアイテムで移動して止めに入っ！）』

そんな事を考えつつ、冷や汗を流しながらマザリーニ枢機卿はルイズとの話を続けていた。

「女王陛下にご挨拶をしてから、ティーボと帰りますから」

「いや……、それは……」

「何か不都合な事でも？」

ルイズの一瞬刺すような視線に、マザリーニ枢機卿は彼女もアンリエッタ女王の不義に気が付いている事を悟ってしまう。

「（まずい！ アンリエッタ様は、どうしてこう隠すのが下手なのか！）」

普段の政治向きの話とは違って、色恋沙汰の話なので聖職者であるマザリーニ枢機卿にとっては苦手な分野ではあったが、そんな彼でもアンリエッタ女王の隠蔽策は下手としか言いようがなかった。

すぐに場内で噂になってしまっていたし、銃士隊を派手に動かした点も駄目であった。

聖職者であるマザリーニ枢機卿が、積極的に不義を勧める事はなかったが、それでも政治に携わる者としては、せめてやるならバれないでやって欲しいと思っていたのだ。

「（まずい……。ミス・ヴァリエールの機嫌は最悪だ。彼女がヴァリエール邸で公爵に不満を漏らせば……）」

そうでなくとも、ティーボ・ド・グラモンの件で彼は、『功績に報いているつもりらしいが、まだ足りないのではないか?』と公言していたし、この王城側のミスを公私共に親しいグラモン侯爵と謀って、何か過大な請求でもされたらせつかくの王権の強化策が後退してしまう事となる。

冷や汗が止まらないマザリーニ枢機卿であつたが、彼は躊躇う事なく即決で決断をして行動する事となる。

「急ぎ、女王陛下の部屋へ！ 鍵ですか？ そんな物は吹き飛ばせば良いのです！」

「はあ……」

今までに一度も見た事が無いマザリーニ枢機卿の鬼気迫る表情に、ルイズは半分押されながらも、やはり鍵の掛かっていたアンリエッタ女王陛下の扉を爆発の魔法で吹き飛ばし、部屋の奥にあるマジックアイテムと思われる鏡を発見していた。

「これは？」

「この鏡の先です！ 急いでください！」

「はあ……」

未だに鬼気迫った表情のままのマザリーニ枢機卿に引きながらも、ルイズは彼と一緒に急いで鏡へと飛び込むのであつた。

「女王陛下、お止めください」

アンリエッタ女王陛下に唇を塞がれ、同時に彼女に抱き付かれて告白までされた私でしたが、急いで彼女を強引に引き剥がします。

すいません、嘘です。

数分間、驚くフリをして彼女の唇の柔らかさとか、その着痩せしている豊満な胸の感触とか楽しんでいました。

いやだって、普通の男なら皆そうだと思うんですよ。

話は逸れましたが、私は彼女の想いを受け入れるつもりなどありませんでした。

ここで彼女と結ばれた所で、私には死亡フラグ満載なのは確かです。

父は仕方なしに受け入れるかもしれませんが、それをすると昔からの友人であるヴァリエール公爵と抜き差しならぬ関係になってしまう事は確かでしょう。

それに、今のこの時点でトリステイン王家の外戚になったところで、その立場は非常に不安定なのも確かです。

更には、グラモン家の富の源泉である私を王家に奪われてしまうので、将来的にはグラモン家はまた大きく力を落としてしまうでしょう。

訂正します。

やはり、父も大反対だと思います。

それに……。

「なぜです？ ティーボ」

「なぜって……。私はルイズと婚約していますし、普段から一緒にいて楽しいですし、彼女の事は愛しています。それを、なぜ女王陛下下にいきなり変更しなければならいのです？」

後ろの言葉は少し残酷で失礼かもしれませんが、私はアンリエッタ女王の態度に少し腹を立てていました。

それと彼女の唇と胸の感触を楽しんだのは別ですが、『ウェールズ皇太子との恋が駄目になったから、次には私』では、代替品扱いの私の浮かぶ瀬もありません。

一応、男の端くれとしてプライドの欠片くらいはありましたし。

「それに、あなたは私の何を欲しているのですか？ 錬金の能力ではないのですか？」

自分に優しかったとか、ウェールズ皇太子とは違って自分の前からいなくならないであろうとかピンと来ない理由ではなくて、彼女の女王としての保身が自分の身を欲しているのではないか？

私は、容赦なく自分が感じている疑問を彼女にぶつけます。

これで少し嫌われて、距離を置いた方が良くと思ったもので。

「それは否定しません。でも……」

再び彼女は、私に抱き付いて来ました。
振り払おうとは思ったのですが、その際に彼女の目に涙が溜まっているのを見てつい躊躇ってしまったのです。

男とは、どうしてこう女の涙に弱いのでしょうか？

「ウェールズ様の物であったアルビオンを併合して、トリステインを新しく活力のある国にしたい。私は、自分でそう思って堂々とそれを公言しています。ですが、私はいつも不安なのです……」

最初は、初恋の人の無念を晴らすためであった。

次は、自国に侵攻する敵を討つために自ら出陣した。

続けて、アルビオンへと兵を進めてレコン・キスタを討ってかの地の奪還に成功した。

世間のアンリエッタ女王への評価は鰻登りでしたが、実は彼女は普通の十七歳の少女でしかありませんでした。

もし今の自分が、王様という立場に置かれたら？

きっと好きな錬金どころではなく、日々大変な日々を送っていたでしょう。

「（彼女は、自分を支えてくれる人を欲しているのか……）」

それがわかると強く言うのも可哀想になったので、私は優しく諭すように彼女に話しかけます。

「今は大変だと思いますが、じきにあなたを心を支えてくれる男性も現れますよ。それに、結婚はもう少し先でも構わないではないですか」

「ティーボ……」

「今日の事は心の迷い。それで良いではないですか」

元平成日本人に相応しく、自分への印象を落とさず、一番大切なアンリエッタ女王の結婚相手の問題は先送りしつつ、今日の事は秘密にして騒ぎを大きしくないようにする。

上手く言ったなと思っていた私でしたが、そこに招かざる来客が現れます。

突然屋敷地下室の鏡が光ったかと思うと、すぐ傍に二人の男女が姿を現していました。

しかも、私とアンリエッタ女王もさほど移動をしていなかったの
で、私達と後から来た四人は、ぶつかって、こんがらがって、その
場に倒れてしまいます。

「（いきなり何なんだよ……）」

私は誰かに覆い被されていて、しかもまた唇に柔らかな感触を感じていました。

「（あれ？ また女王陛下の？ でも……）」

横目で周囲を見ると、アンリエッタ女王は桃色の髪の少女とこんがらがって倒れていて、しかもそれは私の良く知るルイズその人だったのです。

「（ルイズへの説得は後にして……。というか、俺って誰とキスを？」）

そんな事を考えていると、私に覆い被さっていた人物はようやく私から離れてくれました。

「いたた……。女王陛下、ティーボ殿はいけません……。って、ティーボ殿ではないですか。大丈夫でしたか？」

真剣な顔で聞いて来たのは、痩せた初老の人物でこの国の宰相であるマザリーニ枢機卿その人だったので。

そして私は、ある重大な事実に気が付いていました。

「という事は、さっき俺の口を塞いでいたのは……」

大変なアクシデントではあったものの、男としてはアンリエッタ女王陛下とキスをしたのは悪くないと思っていたのですが、それを塗り替えたのは『鳥の骨』と称される有能政治家マザリーニ枢機卿その人でした。

「まあ、これも洗礼の一種だと思っていただければ……」

「思えるか！」

マザリーニ枢機卿とキスをしてしまったという最悪の結末に、私は今の時点で山積みな課題を完全に忘れて、一人盛大に絶叫してしまっただけでした。

四十八話

「まあその……。この忌まわしき記憶はなかった事に……」

「そうですね……。聖職者ともなるとその手の噂のある人も多いですが、私は勿論興味がないので……」

アンリエッタ女王と私の、私個人としてはまるで希望していない密会現場に、同じくマジックアイテムの鏡を使って乱入してきたルイズとマザリーニ枢機卿でしたが、その結果はアンリエッタ女王の誘惑をかわせたという点では良かったのかもしれない。

乱入の際に纏れて、非常に不幸なアクシデントが発生していましたが……。

ここでマザリーニ枢機卿が顔を赤らめでもしたら私にとってはトラウマだったのですが、二人でとりあえず確認した事は『なかった事にしましょう』の一つだけでした。

そして、そんな私達の隣では……。

「姫様！ ティーボは私の婚約者です！ おかしな誘惑をしないでください！」

「婚約者という事は、まだ正式には結婚するわけでは……」

と反論しつつも、アンリエッタ女王の顔には気まずい物が浮かんでいました。

何しろ、一番知られたくない人物に密会の事実を知られてしまっ

たのですから。

「します！ 今は学生だからしませんけど、卒業後にはするんです！」

「本当にですか？」

「本当にです！ そもそも昔から姫様は、私の物を奪いたがる悪い癖があるんです！ しかも、すぐに飽きてしまうし！ 私が、買って貰ったばかりの新しい人形を何度奪われたか……」

以前にルイズから、アンリエッタ女王との子供の頃に遊んだ思い出という物を聞いた事があるのですが、どうもその時の話と現実とは色々違うようです。

二人は一緒に遊びながらも、良く口喧嘩していたのでしよう。

「ティーボは、人形とは違いますわ」

「ティーボを呼び捨てにする女性がまた増えてるし！」

その後も、不毛で実りの無い女性二人の言い争いは続いていましたが、それを止めたのは、私とキスしても顔を赤くしなかった冷静な男マザリーニ枢機卿でした。

「姫様」

「はい、いたのですね。宰相」

今回だけ、昔のようにアンリエッタ女王を敢えて『姫様』と呼んだマザリーニ枢機卿に、彼女は『少し拙かったかな？』と言った表

情をしていました。

「こんな事をして、もしヴァリエール公爵とグラモン侯爵に知られでもしたら」

「ですが、これは王権の強化にも繋がる良い策だと思つのです」

「それで両者に背かれでもしたら、かえってマイナスではないですか！ 特に愛娘の婚約を解消させられるヴァリエール公爵の顔に泥を塗る事になるのですぞ！ 傍流とはいえ、王家の血筋を引く大貴族にです！」

ド・オルニエールの屋敷の地下室で、マザリーニ枢機卿によるアンリエッタ女王への説教が始まりました。

そうだけでなく、アルビオンを併合して政治家としてはまるで役に立たないマリアンヌ女王の補佐が忙しいのに、たかが密会如きでトリステインに急遽呼び出されてストレスが溜まっているのかもしれない。

君臣の関係などまるで考慮しないで、アンリエッタ女王にクドクドと説教を続けていました。

「腹減つたし、帰ってトリスタニアの町に行くか……」

「そうね……。ティーボは、何も食べていないの？」

「紅茶しか飲んでいないな。こんな埃臭い地下室で食事は出ないだろうな……」

密会の準備が忙しくてどうやら食事を準備していなかったようで

すが、ここで出る食事に口を付けるのも危険でしょう。

変な薬でも入っていて、既成事実がどうのと言われても困るからです。

ハルケギニアでは惚れ薬は禁止ですが、他にも怪しげな精力剤とかも多数存在していましたし。

「行こうか？」

「ええ……」

私とルイズは、これ以上の事はマザリーニ枢機卿に任せて当初の予定であるデートを楽しむ事にします。

「でも、女王陛下とキスをしたのよね？」

「すまん、不意打ちだったので……」

男の本能としては嬉しくはあるが、私としてはルイズに申し訳ない。

ガツクリと頭を下げる私でした。

「不意打ちではありませんでしたが、私にとってはファーストキスですわ」

「女王陛下には、何も聞いていません！」

「私の話を聞いているのですか！」

静かにマザリーニ枢機卿から説教をされていると思ったのに、ここで余計な口を出して来たアンリエッタ女王に、ルイズも含めた双方から激しい口調でツッコミが入ります。

「でも、無かった事にするのよね？」

「俺の父やら、ヴァリエール公爵に知れても色々と面倒だしね。というか、これを無かった事にしないと……」

「宰相閣下ね……」

女王陛下とキスをした事実も危険ではありましたが、もしマザリーニ枢機卿とキスをした事実が世間に明るみになったら、私も彼も社会的に全て終わってしまうような気がしてなりませんでした。

とにかく私は、ド・オルニエールの屋敷になど足を踏み入れていなかったのです。

そんな記憶も残っているような気もしましたが、それは夢か幻覚だと思つて午後からの時間を楽しむ事にするのでした。

いまだにマザリーニ枢機卿に説教されているアンリエッタ女王を見なかった事にして……。

「新しいレストランは、星二つと言ったところかな？」

「ティーボは、意外と味にうるさいのよね」

再びマジックアイテムである鏡を抜けて王城内のアンリエッタ女王の私室に戻った私達は、そのまま城を出て少し遅めの昼食を取っ

てからそのままトリスタニアの町の探索に出かけていました。

持参した宝石を金に換えてから、ルイズの新しい服や化粧品や香水を注文したり、新しくオープンしたカフェで紅茶と新作ケーキを楽しんだり、怪しげな雑貨屋でどこから流れて来たのか不明とされる本を見てそれを購入してみたりと。

ちなみに、その東方由来の本とは漫画のセットと、主婦の友、オレンジクラブなど。

一体どうやってここに流れ着いて来るのか、その法則がいまだに理解できないような品揃えだったので。

「（漫画は、『斗の拳』全巻か。これは、俺も好きだった漫画だな）」

平成日本で買えばセットで数千円の物が、ハルケギニアでは100エキユー。

とはいえ、懐かしい前の世界の物なので、私は特に躊躇う事なく金を払います。

「貴族様は、昨今噂になっているグラモンの新侯爵様とかで」

雑貨屋の親父は、初めてこの店に来た私をお得意さんにするべく摺り手をしながら話しかけてきます。

「ティーボも有名になったわね」

「奥様、私達の扱う品物は東方だのハルケギニアの外から流れて来た品物も多く、その代価を払える方々には、特にお声をかけさせて頂いているのですよ」

「えっ！ 私が奥様？」

「はい、とてもお似合いのご夫婦に見えますです」

前世と合わせると既に四十歳を超えている私からすれば、雑貨屋の主人のお世辞は非常に見え透いた物に見えましたが、ルイズの方は顔を赤くさせながら嬉しそうな表情をしていました。

いくら私が金を払うとはいえ、そのツレであるルイズに気に入って貰えばまたお店に来てくれるかもしれない。

まあ、ルイズの方も既にその正体は知られているのでしようが。

何にしても、雑貨屋の主人は見た目よりも商売が上手なようでした。

「俺の事を知っているのなら、良い物が入ったら連絡をくれよ」

「それは、東方由来の物が宜しいので？」

「そうだな。変わった物が好ましいな」

「かしこまりました」

どうやら次の商売に繋ぎを付けられたと感じた雑貨屋の主人の安堵した顔を背に、私達はそのままデートを続けます。

「そろそろ夕方か」

「ねえ、あそこって何のお店なの？」

時間も時間なので、あとはお土産でも買って魔法学院に戻ろうかと思ったその時。

ルイズは、暗がりの街角の隅に一軒のお店を見つけます。

いえ、お店というのは変ですね。

彼女が見付けたのは、前世の日本ではラブホテルとか、古い表現で言うと『待合い』とか『ご休憩所』とか、そういった類の物だったのです。

トリステインの女性には基本的には控えめで、あまり結婚前にそういう事はしないのが一般的とされていましたが、それでもそういう施設が運営可能なくらいの例外は存在しているというわけです。

トリスタニアには、普通に娼館や綺麗なお姉さんのいる飲み屋などもありましたし。

「何か看板も薄暗いし、怪しげなお店よね」

訝しげにご休憩所の入り口を見るルイズでしたが、彼女はやはりヴァリエール家の娘として箱入りで育てられて来たので、こんな密会専用の宿があるなんて知りもしないのでしょう。

「ルイズ、あそこはね……」

教えないと余計に知りたくなるのが信条でしょうから、私は彼女に耳にそつとあの宿の使用方法を教えていました。

「そそつ！ 結婚する前にそんな事なんて！」

やっぱり箱入り娘なルイズは、頭から湯気でも出そうなほど顔を

真っ赤にして驚きの声をあげていました。

「大っぴらにというのも何だから、ああいう隅の暗い場所にあるんだよ」

「という事は、もしかして誰か知り合いでも？ ツエルプストーとかが使いそうね」

「キュルケが？ 彼女はある意味堂々としているからな」

こんな場所を使わないで、彼女ならば自分の部屋に堂々と男を呼ぶでしょう。

「でも、最近は誰も男性を部屋に入れていないという噂よ。ティーボを落すまでは、他の男はパスですって」

「そんなチャレンジ、止めて欲しいんだけどな……」

そのチャレンジで被害を受けるのは確実に私でしょうし、そうでなくてもまたアンリエッタ女王が何かを企まない保障もないのですから。

「ゲルマニアの女って下品よねえ……。でも、少し羨ましいかも……」

「えっ？」

ルイズは私の手を少し強く握ると、潤んだ目で私を見上げて来ます。

「（これって、もしかして？）」

アンリエッタ女王の件で、不安を感じたというのもあるのでしょう。

私達はまだ婚約中で式は挙げていないので、基本的には婚前交渉の類はあまり好ましい物ではありません。

それでも、今の状態で他所の女に余計なちょっかいを出されても不安にならないようにしたい。

ルイズは、かなりの覚悟を決めて私を誘っているのでしょう。

「（ルイズって、こういう部分が可愛いんだよな。キュルケとアンリエッタ女王は過剰過ぎるし……）」

自分が好きな女なので過大評価なのかもしれませんが、それでも私は前世と合わせても人生初のそれも女性からの誘いに、心臓をドキドキさせていました。

キュルケとアンリエッタ女王のは、基本的にノーカウントでお願いします。

「ええと、帰りは飛ばせば少し遅くなってもね。うん、色々あったから休憩だな」

とはいえ、前世のラブホテルのご休憩と同じで、本当に休んでいる男などほぼ皆無でしょう。

当然私も休むつもりなどはありませんでしたが、そこは先にこうして言っておけばルイズも一緒に入りやすいという、一種の男の方便というやつです。

何か大学生になって、初めて彼女が出来た時の事を思い出します。

「あんまり、ここで立ちっ放しなのもね」

「そうね」

二人で顔を見合わせながらお互いに覚悟を決めた私達は、その目立たない場所にある密会用の宿の入り口へと歩き始めます。

「他に、お客とかはいないわよね？」

「大丈夫だと思うけど……」

お互いに上の空で話を続ける二人でしたが、そこで思わぬ出来事が発生しました。

急にフロントがあると思われる一階のドアが開いて、そこから二人の男女が顔を出したのです。

しかも、その二人は私達の顔見知りでもありません。

「才人？」

「シエスタ？」

「えっ！ 何で二人がこんな所に！」

「あのですね、ミス・ヴァリエール！ 私達、は少し疲れたから休憩をですね！」

「そう、休憩なんだ！ これは！」

必死に言い訳をする二人でしたが、何かシエスタの歩き方はぎこちないですし、才人の『休憩』という単語の連呼は、過去の私を思い出させてくれる物がありました。

「安心しろ、才人」

「ティーボ……」

「明日のスレイプニールの舞踏会で、みんなに話してやるから」

「えーっ！」

「責任取らないとな。才人」

こうして、私とルイズで休憩所に入ろうとした件は完全に中止と
いうか有耶無耶になってしまい、代わりに才人とシエスタが密会し
ていたという格好のゴシップネタを手に入れてしまう私達なのでし
た。

「よっ、大人のサイトは何に変身するんだ？」

「そりゃあ、大人のサイトだ。我々の想像もつかないものさ」

「うるさいよ！ お前ら！」

才人とシエスタが、休みの日にトリスタニアでデートをしてついでに大人になってしまった話は、電光石火の速さで学院中に広まっています。

勿論広めたのは、大人気ない私とルイズです。

私達の、それも特にルイズの覚悟を最悪のタイミングで外してしまい、しかも自分達は先にそういう事をしていたので、彼女は特に内心腹を立てて主に学院中の女子生徒達の間で噂が広がっていました。

私は、『ちよつと可哀想かも』と少しだけ思ったのですが、意外にもシエスタは全く動揺する事もなく普通にメイドとして仕事をしていたのです。

ですが、休憩時間に実家のタルブ村に手紙を書いていたので、もはや逃げられないという意味では、実は才人の方が可哀想なのかもしれません。

「全く、人の事を何だと……」

「脱童貞を祝われたくらいで怒るなよ」

「ティーボもちょうど良いタイミングであそこに居たから……。あれ？ という事はティーボも？」

「だが、未遂だった。お前達に驚いて帳消しになってしまったからな。と、そこまで言えば理解できるか？」

「ああ……（特にルイズとか、物凄く怒っているわけね……）」

才人は、自分達に驚いて私達があゝの宿に入るのを止めてしまった事と、同時にその件でからかわれても何も言い返せなくなった事に気が付いたようです。

「では、次の者」

今夜は、スレイプニルの舞踏会という学院主催の行事が行われていました。

本当はもう少し前に行われる予定だったのですが、アルビオンへの出兵で大半の男子生徒がいなかったせいで、今夜まで日程が延びていたのです。

そしてこのスレイプニルの舞踏会の最大の特徴は、参加者が全員仮装するという物でした。

会場に入る前に『真実の鏡』の前に立ち、そこで自分の理想の姿となって舞踏会に参加する。

これが慣わしだったのです。

「じゃあ、お先に」

舞踏会に参加する予定の才人が、先に『真実の鏡』のある部屋に入って行きますが、誰が何に変身したのかはパーティーが始まるまでは秘密。

という事で、変身した才人は別の出口から出て行ったようです。

「次は、ミスタ・グラモン」

「はい」

私も急いで鏡の前に立ちますが、私の理想の姿って何なのでしょう？

背格好や顔については、正直前世よりも今世の方が上でしょう。

何しろ金髪ですし、『この容姿で前世にいたら女性にモテるかも』と考えた事も数度あります。

ですが、私の理想とする姿とも言い難い部分がありました。

「私の理想とする姿……」

暫し考え込んで後に『真実の鏡』が光を放ち、私はある中年男性へと姿を変えていました。

「おおっ！ チャールズ・マーティン・ホールか！」

彼は、ポール・ルイ・ツーサン・エルーと共に、アルミニウム精製方法であるホール・エール法を発見した偉大な科学者だったのです。

その顔は、前世で専門書に載っていた写真からでした。

確かに、これほどの偉業を達成した彼のようになってみたい。

理想の姿に満足した私は、急ぎ『真実の鏡』のある部屋から出ます。

「なあ、それ誰だ？」

すると、そこには妙に口の悪いテファがいて私に声をかけてきました。

「お前、才人だな？」

「一発でバレた！」

自他共に巨乳好きで、巨乳を愛している才人に相応しい姿だったのかもしれない。

ただ、顔をニヤニヤさせながら自分の胸を試しに何度も揉んでいく姿は不気味そのものです。

もしシエスタにバレたら、どうするのでしょうか？

その前に、テファ本人に見られたら確実に変態扱いされるでしょう。

まあ、私ではないので別に構わないのですが。

「物凄く予想の範囲だな」

「ティーボは、その中年オヤジ誰なんだよ？」

「知らんのか？ ホール・エール法の開発者であるチャールズ・マーチン・ホールだぞ」

「知るか！ というか、俺が知らないのにこの世界の人間が気が付くわけがねえ！」

私は才人を『学の無い奴』と思いながら、舞踏会の会場へと足を進めて行きます。

すると、私に声をかけてくる人物がいました。

それは、まだ『真実の鏡』を使っていないタバサが学院の制服姿のまま立っていたのです。

「あれ？ まだ変身していなかったのか？ タバサ」

「もう少し後で変身する。でも、その前に少し用事がある」

「用事？ 過剰な愛の告白とかは止めて欲しい」

「それは、自意識過剰」

「冗談だよ。それで、用事って？」

「すぐに終わるから」

私とタバサは、連れ立って会場の外にある裏庭へと歩き始めます。もし彼女が何かを企んでも、最近の私に対する警戒網では何も出れないと思っていたからです。

ところが……。

「うっっ……」

「手練れのメイジ十五名を含めた五十名が、僅かな時間で戦闘不能だと……」

「数さえ多ければというのは間違いだね。さて、トリスティンの金の成る木を我が主へと献上して差し上げないと。あの腐れ教皇を倒す新兵器の材料を沢山錬金して貰わないとね」

意識を失った最後の護衛を見下ろしながら、一人黒髪の美女が複数のガーゴイルをその傍にまた集め始めるのであった。

四十九話

「なあ、タバサ。俺に用事ってそういう事なのか？」

スレイプニールの舞踏会の行われる夜。

先に真実の鏡で、才人に『知っている奴がないじゃないか』と言われたチャールズ・マーティン・ホールへと変身した私でしたが、その後タバサに呼ばれて一緒に裏庭へと移動します。

すると、そこで背中からタバサに杖を付き付けられ、更に前方には倒れ伏す私の護衛達と、月明かり長い漆黒の黒髪を照らす妙齡の美女が立っていました。

しかもその周りには、数十体のガーゴイルと思わしき不気味な造作をした人間大の人形達まで立っていたのです。

「始めましてだね。《鍊金》殿」

「初めての挨拶にしては、いきなり失礼と言うか……」

私は前方の美女と話をしながら、背中からもタバサから杖を押し付けられたので自分の持っていた杖を地面へと放り投げます。

「その指輪も」

「やれやれ、見逃しは無しか……」

タバサに更に杖を押し付けられたので、私は予備の杖代わりにしている指輪も外して地面へと放り投げます。

「どうやら、タバサは今までは静かに私の動向を観察しつつ、こうする機会を伺っていたようです。」

それと、私の予備の杖である指輪も、彼女に情報を知られてしまっていたようでした。

「静かに慎重に時を待つか。故オルレアン公の娘が、今のガリアの犬になって俺を拉致しようとする。世の中とは、本当に世知辛いな」

「……………」

私の挑発に、タバサは無言で杖を突き付け続けるのみでした。

以前に聞いた病気の母を治すために、私の母に薬の提供を依頼した事もある彼女でしたが、私も母も昔の縁だけでタバサを助けようとするほどお人好しでも力があるわけでもなく。

そもそも、祖父をガリアから追放したガリア先代王や、それを助けなかった故オルレアン公に対して、恩など1スウ銅貨ほども感じなかったからなのですが。

その結果彼女は、現ガリア王の命を受けた、この目の前の妙齡の美女の手引きをして私を拉致しようとしていました。

アルビオン戦での戦後処理もひと段落して、ようやく学院に安寧の日々が戻ったこの時を狙って、私の拉致を試みるガリアの無能王ジヨゼフ。

思えば、彼は自分は無能なので謙遜しながらアルビオン封鎖などに素直に協力し、トリステインやゲルマニアから多くの利益を極めて自然な形で受け取っていました。

両国も、アルビオン封鎖で貿易がストップして損失が出るガリアに配慮したので、ガリアは今回の戦争で結構な利益を得ていたのです。

「そして止めに、俺をガリアに連れ去ってトリステインを混乱させ、時期を見て併合でもするのか？」

「それを私が素直に教えるだけでも？　とにかく、どこかは言えないけど私と来て貰うからね」

間違いなくガリアなのでしようが、私の拉致に成功したガリアがそれを他国に教えてあげなければいけない義理も存在しません。

それに、いくらトリステインが抗議してもガリア政府が『知らない』と言えばそれまでで、しかも私を奪い返すにはかなり強引な手段も必要となるでしょう。

つまり戦争しかないのですが、今のトリステインに戦争などまず不可能でした。

お金が無いという非常に現実的な理由からなのですが、同じく少数精鋭による奪還作戦などもこれはかなり成功率が怪しいものです。

何しろ目の前には、多数のガーゴイルを操るこんな女までいるのですから。

「とにかく、大人しく付いて来て貰うよ。……。新グラモン侯爵殿は、随分と大人しいんだね？」

目の前の女は、私が素直に杖を捨てて全く抵抗しない事に驚いているようでした。

「生憎と、戦闘向きではないのね」

「武のグラモンの一族だから、それなりにやると聞いたんだがね」

「俺が動く時は、それは最後だからね。それとお美しい人、無駄話が過ぎると思うけどね」

次の瞬間でした。

突然、その美女の隣に立っていたガーゴイルが数体木っ端微塵に吹き飛び、周囲にその破片を待ち散らして大量に撒き上がった埃でその美女の視界を奪っていました。

「何い！」

「人の婚約者を奪うな！」

「お前は、トリステインの虚無？」

その美女は、自分のガーゴイルを吹き飛ばした相手をすぐにルイズだと断定はしてしまいましたが、真実の鏡で姿を変えていたために絶対的な自信を持ってないようでした。

即爆発の魔法なんて使えるメイジはルイズだけなので、その予想は間違っではないのでしょうか。

ちなみに、ルイズは自分の姉であるカトレアに変身しているようです。

やはり普段は言わなくても、主に胸と背の方面で色々と渴望している物があるようでした。

「このっ！　いくら妙齡の美女でも、人の雇用主を奪うんじゃねえ！」

更に、テファの姿のままデルフリンガーを構えた才人が乱入して次々とガーゴイルを切り裂き。

「一応兄としては、弟が拉致されるのを看過できないね」

なぜかというか、多分自分に絶対の自信があるのでしょうか。

ギーシュらしき人物は、やはりギーシュのままで。

彼はワルキューレを複数生成して、ガーゴイルと競り合いを始めていました。

「隊長！」

「ティーボを攫わせるな！」

他にも、水精靈騎士隊オンディーヌに所属していると思われるレイナル、マリコルヌ、ギムリなども……。

間違いなく居るのでしようが、何か格好良い騎士の姿だったり、物凄い美女の姿だったりで、誰が誰やら良くわからない状態になっていました。

「これは……」

「不意を突いた点は良かったと思うけどね。護衛達も、数が多いからと油断していた点もあつたし」

余計な話などしないで私を急いで連れ去るべきだったのですが、

私の無駄話に付き合っただけで時間を消費した結果、舞踏会に参加している才人達に気が付かれてこんな結果となっていたのです。

「我が国の宝である《鍊金》殿を渡すわけにはいきません！」

更に最後には、なぜかルイズの格好をした人物がア二エス隊長以下十数名の銃士隊を伴って現れていました。

「あれって……」

「女王陛下だよな……」

どうやら彼女も、お忍びでスレイプニルの舞踏会に参加していたようです。

「バカな！ アンリエッタ女王だと！」

さすがにその美女も、アンリエッタ女王の登場に動揺を隠せない様子でした。

ここで、ガリア関与の決定的な証拠を残すわけにはいかなかったからなのでしょう。

いくらジョゼフ王でも、アンリエッタ女王が私に会いにここに来ているという裏の事情までは知らなかったでしょうし……。

「でもね、新グラモン侯爵殿は人質に取られているも同然でね……」

確かに彼女の言う通りで、私の背中にはいまだにタバサの杖が突き付けられている状態でした。

ですが、そのタバサに更に杖を突き付けた人物がいます。

「タバサ、お願いだから止めて」

「……」

それは、多分キュルケなはずの、フリフリのドレスにお姫様のよ
うな格好をした美少女だったのです。

なぜキュルケが、そんな正反対の清純派タイプの美少女に変身し
たのかは、今は問い質す余裕もなかったのですが。

「タバサ、ここは一旦退きなさい。そうしないと……」

ここで捕まれば、拉致監禁未遂容疑でアンリエッタ女王もタバサ
を投獄しなければならぬでしょう。

それを見越しての、キュルケによる撤退勧告だったのです。

「恩に着る……」

「最後まで希望を捨てないで」

二人は私にしか聞こえないような小さな声で会話を言い、その直
後にタバサは急ぎその場を後にしていました。

やはり彼女はかなりの修羅場を生き延びて来た、戦闘経験豊富な
メイジのようです。

逃げに徹したタバサのスピードには、置いてけぼりを喰らった妙
齢の美女までもが驚いていたのですから。

そして、哀れにも彼女は、一人私達の前に取り残されている状態
になっていました。

次第に騒ぎを聞き付けて駆け付けて来る、水精靈騎士隊の残りの隊員や学院の衛兵。

更には、一度気を失わされていた私の護衛までもがーゴイルとの戦闘に加わり、次第にガーゴイルはその数を減らしつつありました。

「あの女あー！」

「誰だって、自分の身が一番可愛いさ」

「今夜は時間をかけ過ぎたようだね。ここは一旦……、あれ？」

キュルケの忠告に従って一目散に逃走してしまったタバサ自身とは違って、まさか自分が命令する立場にいた格下の彼女がそんな行動をするとは思っていなかったのでしょうか。

その妙齡の美女は、表面上はさほどでもありませんでしたが、内心ではかなり動揺しているようでした。

当然、私への警戒が薄れて視線が私に向かない時間が増えていたので、その間にアンクレットの形にしていた予備の杖に意識を集中させ、ある呪文を気が付かれないように小さな声で唱えます。

これは、私が開発したかなり危険な魔法で、多分こういう機会がなければ永遠に使わなかったかもしれません。

その魔法とは、空気中の二酸化炭素濃度が高くなると人間は危険な状態に置かれ、濃度が3〜4%を超えると頭痛・めまい・吐き気などを催し、7%を超えると炭酸ガスナルコーシスのため数分で意識を失う。

つまり、呼吸困難を起こして意識を失ってしまうのです。

私は、彼女の周囲数メートルにある酸素を炭素とくっ付けて二酸化炭素を大量に生成し始めます。

材料の炭素は、そこに生えている草でも居る虫でも何でも良いのです。

体成分である炭素を奪われて次第に枯れていく草にその美女が気が付いた時には、既に彼女は体が動かない状態になりました。

しかもその魔法には、生成した二酸化炭素を直径数メートル範囲で固定する効果もありました。

「これは……」

彼女が何者かは知りませんが、今まではその能力と多くのガーゴイルに囲まれてピンチに陥った事などなかったのでしょうか。

更に、彼女には科学の知識など皆無なはずです。

自分が二酸化炭素中毒に陥ってる事にすら気が付かないまま、その場に倒れてしまいます。

何しろ、二酸化炭素は目視など出来ませんしね。

無味無臭なので、多分火山などで普通にある、毒ガスに対するような対応策も考えられなかったのでしょうか。

「どんな魔法かは知らないけど……」

「ギーシュ！ まだ近寄るな！」

倒れた彼女の周囲数メートルには、いまだに高濃度の二酸化炭素が漂ったままだったので、私はそこに近付こうとしたギーシュを制止してから、大量に空気中にある二酸化炭素から炭素を取り除いて酸

素に戻して行きます。

掌の中には木炭に似た物質が集まりましたが、やはり慣れない魔法はなるべく使わない方が良いでしょうね。

ゴツソリと魔法力が抜けたような感覚に襲われます。

「もう大丈夫だ」

「どんな魔法か知らないけど、死んだのかい？　彼女は？」

「多分、大丈夫なはずだ」

二酸化炭素中毒で気絶はしていましたが、その時間は極短い物ですぐに普通の空気に戻したので死ぬ事はないはずです。

「死んで貰っては困る。この女には、色々と話して貰わないと困るからな」

彼女の脈を見ていたギーシュを払いのけるようにして、アニエス隊長が数名の部下と共に彼女の身柄の確保に入ります。

ギーシュは『急に強引だな』という感じで、それでも相手は女性だと思ったのか？何とも言いませんでしたが、アニエス隊長はアルビオン戦役では勲功を挙げたものの、リツシュモン伯爵の件や今回の件のように私が絡む警備任務になるとミスを頻発させるらしく、慌てて襲撃者の確保を行っていたのでしよう。

別にアニエス隊長が無能という事もなく、ただ単に相性と運のせいのような気もしますが。

「一応は、これで事件は解決か？　まあ、おかげでスレイプニールの舞踏会は延期する事になりそうじゃが」

「中止ではないのですか？」

「えーと、ミスタ・グラモンか？ そなたは。貴族にとって舞踏会とは大切な物での。中止はあり得んのじゃよ」

貴族にとつての舞踏会とは、社交界での重要なイベントであり、人付き合い、お見合い、時には政治や外交の予備・極秘交渉の席として使われる事もあり、それに参加して慣れるというのは貴族の子弟として必要な義務でもあったのです。

オスマン学院長の発言には正当性があるのですが、問題はその格好にありました。

彼も真実の鏡を使っていて、しかもなかなかお目にかかれないような美女に変身していたからです。

「オスマン学院長は、本当に女性が好きなのですね」

「男の真理というやつじゃの。しかし、そなたのソレは何じゃ？ そんな冴えない中年男に変身して？」

どうせ、ホール・エール法の開発者であるチャールズ・マーチン・ホールに変身しましたと言っても誰からも理解されなれないと思った私なので、『こんな感じの学者然とした、落ち着いた中年になりたいからです』と答えて誤魔化す事にします。

「若いのに、変に老成しておるの……」

「オスマン学院長には言われたくないような……」

結局、スレイプニールの舞踏会は私を狙った拉致未遂のために来週に延期となり、舞踏会の参加者達はこの場で解散となったのですが、この真剣な話をしている時に一人だけ下らない事で叱責を受けている人物がいました。

「サイトさん！ 胸なんですか！ 男の人は、すべからく胸なんですか！」

「いや、これはその……。男のやんごとなき事情で……」

真実の鏡でテファに変身していた事がシエスタにバレた才人が、彼女から物凄い剣幕で怒られていたのです。

「えーっ！ 王城からも警備の人員を割くのですか！」

拉致未遂事件が解決した後。

私を拉致しようとして逆に囚われの身となったその美女は、二酸化炭素中毒による失神から回復はしたものの、おかしな真似が出来ないようにアニエス隊長指揮の元でトリスタニアへと移送されて行きました。

多分、容疑者の人権など考慮されない世界なので、物凄く容赦のない取調べが行われるのですが、それも自業自得なので私は特に可哀想とも思いませんでした。

もし私が、間違いなく彼女の所属先であるガリアに連れて行かれたら、私の方が酷い目に遭っていた可能性もあったからです。

それと、そのまだ名前も知らない彼女の額には使い魔のルーンが印されていて、その件からしても彼女の待遇は悲惨な物となるはずでした。

あの魔法アカデミーの連中が、こんな格好な実験材料を見逃すはずがないからです。

相手は犯罪者で、色々と非合法の実験を行っていると噂に上る連中が遠慮する必要すらないのですから。

私としては、『楽に死ねたらラッキーだろうな』くらいに思っていたのです。

他にも、まだ彼女はゲロしていませんでしたが、ガリアの弱みを握れたという事でマザリー二枢機卿なども大喜びでしょう。

聖職者としては善人である彼でしたが、政治家としての彼は大悪人な裏面を持つので、きつとあの女を上手くカードとして利用するでしょうし。

問題なのは、トリステイン側が有利なカードを持つ要因となった私達への恩賞が出ないという件でしょうか？

いや、正確には事件を公にしようとするカードの価値が落ちるので出せないというのが正しいのですが、ギーシユや水精靈騎士^{オンドレイ}隊で戦闘に参加した連中には、個人的に恩賞を出しておく事にします。

私も普通に自分の身が可愛い人間なので、私を守ってくれる人達に金をケチらない事にしたのです。

トリステイン王家へのあの莫大な借金を全て帳消しにされても、私の金庫やグラモン本邸の地下にある保管庫には大量の金貨や寶石

が眠っていましたので、特に懐を痛める事もなくそれを出す事が可能でした。

と、哀れな襲撃者の末路とかに関する事情はこんなものなのですが、それよりも問題なのは、舞踏会も中止となって参加者達もそれぞれに寮の部屋や帰途に着き、私も今日は学院の寮は危険という事で、学院の隣にある警備の厚い自分の屋敷へと戻っていたのです。

警備している家臣達も、『二度と不意打ちなど喰らうか！』と警戒は更に密になっていましたし、私の使い魔であるグラントが子供達を屋敷の敷地内の地下に交代で警備をさせて、外部から侵入する不審者の警戒に当たっていたからです。

グラントは喋れないだけで、実はかなり高度な知能を有していたのでした。

ただ、やはり普通のグラウンドフォームはここまで頭が良いわけではなく、グラントはかなり特殊なケースに当たるわけでしたが。

実は、屋敷の警備体制とか、今夜私がどこで寝るかとかは実は対して重要ではないのです。

それよりも、なぜかアンリエッタ女王と警備の銃士隊の面々までもが屋敷に押しかけ……。

トリステインの女王陛下を夜に移動させるわけにはいかないのです、これも良しとしましょう。

それよりも衝撃的だったのが、今まではほぼグラモン家単独で行っていた私の警備に王室も絡むと彼女が宣言した事にありました。

いくら王命でも、これは私の家臣達のプライドを傷付けないわけ

がないのです。

屋敷のリビングでは、銃士隊の女性兵士達とシプリアンを筆頭とした私の家臣達が睨み合うという状態になっていたのです。

シプリアンは、見た目は温和でどちらかと言うと文官などに見える家臣でしたが、若い頃には父と共に前線を駆け巡っていた人物で、人を睨めばその頃の迫力が滲み出てしまいます。

他にも、私の家臣は武闘派が多いので、銃士隊の女性兵士達はその迫力に少し押され気味のようでした。

「新しくティーボ様の護衛に加わる？ お嬢さん達は、町で可愛い小物やお菓子でも売っていたらどうかね？」

若い家臣の一人が発言し、その周辺では笑いが広がっていました。

「武のグラモンだか知りませんが、あれだけいて二人の襲撃者に完全に手玉に取られて。そんな失態をするから、私達に余計な仕事が回ってくるのですよ」

「失態なら、お前達の隊長も言えた義理か！」

あの襲撃犯の移送でなくなったアニス隊長の部下の一人が挑発には挑発で対応し、それによって双方に深刻な対立関係が広がっていきます。

私としては溜息の出る状態でしたが、確かに家臣達は独自の護衛任務に失敗しています。

助けに入ったギーシュはともかく、才人は実は王家からも給金が出ていた存在でしたし、他の水精靈騎士隊も形式上はトリスティン

王家が設立した騎士隊の一つでもあったからです。

「（拙い失態だったな……）」

そうでなくても色々五月蠅い女王陛下だったので、また余計な介入をされると先日の件もあってまた面倒だと思ってしまう私でした。

「シプリアン、変な騒動は御免被るぞ」

「申し訳ありません、ティーボ様。しかし……」

私は一言だけシプリアンに苦言を呈し、更にアンリエッタ女王も銃士隊の面々に小言を言ったので、双方の対立はすぐに収まってきました。

「今回の件で、私も色々とその身が危険である事を再確認しました。護衛は受け入れましょう」

「素内に受け入れて貰えて嬉しいですわ」

なぜか、そう言いながら私に抱き付こうとするルイズ？

いえ、これはまだ真実の鏡の効果が切れていないアンリエッタ女王陛下でした。

外見はともかく、話し方と声と付けている香水などですぐにわかったので、私は彼女の接近をひよいとかわします。

この前のような不意打ちは、一度目だからこそ通用するのですから。

それに、私は一応は鍛えているので、それをしていないアンリエ

ツタ女王より運動能力が下という事ありませんでしたし。

「それで、もう一つ大切な事があるな」

「はい、タバサと呼ばれるガリアからの留学生の件ですね」

誘拐未遂事件の手引きをしたガリアからの留学生と、結果的に彼女を逃がしてしまったゲルマニアからの留学生であるキュルケの存在。

キュルケは話があるという事でこの一室にいましたが、珍しく一言も発しないでソファーに座っていたのです。

「何とか言いなさいよ！ ツェルプストー！」

タバサを逃がしてしまったキュルケに、ルイズは怒っているようでした。

普通に考えて、犯人の逃走補助はなかなか重い罪でしたし。

「キュルケ、事情を話してくれないと困る。でないと今回の事件、オルレアン派の単独犯行という線でケリになる可能性があるぞ」

ほぼ間違いなく今回の犯行はジョゼフ王の命令によってでしょうが、その告発するに足る証拠はありませんでしたし、捕まった襲撃犯の女が自白する可能性もないのです。

いえ、自白しても証拠がなければ罪を問うのは難しいですし、もし証拠があつて外交筋から抗議しても、大国たるガリアなら無視してしまう可能性があります。

法とは重層構造こそが重要で、罪に対する罰を行使できる能力が

ないと意味が無いのですから。

それよりも怖いのは、ジョゼフ王が襲撃犯二人を見捨てて『この度の件に付いては、私を陥れるためのオルレアン公派の単独犯行であったという調査結果が出た。改めてお詫びをすると共に、今後二度とこのような事件が起こらないように迅速に対応したいと思う』。

このように言うてから、現在も何とか生き残っているオルレアン公派を完全に粛清し、己の権力強化に繋げるといふ可能性がかなり高かったのです。

私は、その可能性をキュルケに説明します。

「ガリア国内には言い訳が立つな。実際に俺が拉致されかけ、その犯人の一人がオルレアン公の一人娘であるシャルロット姫なんだからな」

「ティーボ！ タバサは、お母さんを人質に取られて仕方がなく」

「俺も、それは知っている」

結局、キュルケはタバサの置かれた環境について話をする事になります。

「あのタバサという名の少女が、故オルレアン公の娘……」

「そんな、自分の弟の妻を人質にするなんて……」

アンリエッタ女王も、ルイズも、ジョゼフ王が決して世間で言われている無能ではない事実に気が付きます。

というか、その十分の一の国力であるトリステインをあのマザリ
―二枢機卿が纏め切れなくて苦労していたのに、あの様々な思惑蠢
く大国ガリアを無難に治めているのですから、彼は決して無能では
ないのです。

『優秀な家臣に任せているのでは？』と考える人も多いのでしょ
うが、それだけではまずあの国は纏まらないでしょう。

「ティーボ、これからどうなると思いますか？」

もはや、私を呼び捨てて呼ぶ事に何の違和感もないアンリエッタ
女王でしたが、その彼女にルイズは密かに青筋を立てていました。

「私は政治家ではありませんからね。ただ言えるのは、あの捕まえ
た女は生かして確保しておいた方が良いでしょう。それと、これは
個人的な事ですが……」

私が狙われたとなると、次の心配なのは私の母の安全です。
父の事ですから早速に対処はしていると思うのですが、それでも
少し心配な要素ではありました。

「何にしても、これでまたフィールドワークはお預けか……」

「家臣としましては、ティーボ様の楽しみを奪うようで心苦しいの
ですが……」

「そこで誘拐でもされたら目も当てられないからな。暫くは、諦め
るわ……」

そして、その日はそれで解散となったのですが。

次の日の夕方に、父の領地から緊急を要するフクロウ便が届き、そこには衝撃的な内容が書かれていました。

『ティーボへ。お前の母であるクララが風竜に乗った小柄の蒼い髪の少女に誘拐された。私も家臣を総動員して捜索に当たっているが……』

「キュルケ。タバサは殺さないと駄目かもしれないな。恨んでくれても構わないが、その原因の一部に君の無分別な行動があった事も忘れないでくれ」

私は無表情のままキュルケに父からの手紙を見せると、急いで全家臣達を招集するのでした。

五十話

「とにかく、クララ様の捜索に我々も参加しようと思います」

「ですが、それでティーボ様への警備が薄くなれば本末転倒です」

「左様です、また襲撃が無いとも思えませんので……」

「お辛いとは思いますが、ここは大お館様の捜索に期待して待つしか……。あつ！ 勿論出来る限りの人手は出しますので！」

私への誘拐未遂を誘導したタバサが、その逃げ足のついでに私の母を誘拐して連れ去った。

急いで全家臣を集めて行った対策会議でしたが、出た意見は上の通りで、確かに母の捜索に人手を割いた隙にまた私への襲撃が行われれば意味が無いわけでした。

結局は、極少数の人手を父の応援に出すだけとなっていました。

前世の記憶がある私にとって、二度目の母であるクララは普通の世間で言われているような親子関係とは少し違うのかもしれないですが、母はある意味のん気というか大らかな性格をしていて、幼い頃から少し変わっている私に過分な愛情を注いでくれました。

若いしスタイルも良いので、抱きしめられると妙に恥ずかしかった記憶があるのですが、あくまでも母は私を血の繋がった息子だと思っただけ抱きしめているので、これは私の方の都合でしかありません。

他にも、子供の頃から金属などを大量に錬金して大金を稼いでい

た私なのに、自分も秘薬やポーションを作って絶対に子供の私に負担をかけようとしませんでした。

彼女は、あくまでも私の母として最高の存在であったのです。

なので、キュルケに暴言を吐いたと反省しつつも、それを撤回しようとは思いませんでした。

タバサは、自分の母親の身を守るために私の母を犠牲にする選択をした。

ならば、私は自分の母を助けるためにタバサとその母親を殺す事に何の躊躇いも見せない。

いえ、表面上は絶対に見せないように振舞う覚悟をしたのです。

あまり実りのない会議を終えて屋敷の自分の部屋へと戻る私でしたが、すぐにドアがノックされました。

「はい？」

「私よ、ティーボ」

ドアを開けるとルイズが立っていたので、私は笑みを浮かべながら彼女を自室へと迎え入れます。

「遅れたけど、昨晚はありがとう」

私は、今まで言いそびれていたお礼をルイズに伝えます。

爆発魔法を駆使して、私を襲う多くの、襲撃犯が操るガーゴイルを倒すのに貢献していたからです。

なお、その時のガーゴイルの破片と、襲撃犯が意識を失った時に

動きを止めた数体は、グラモン家で鹵獲して現在急ピッチで解析が進んでいました。

とはいえ、あれほどの魔法技術を駆使した一品です。

間違いなく、魔法技術大国であるガリアが絡んでいるのでしよう。それと材質ですが、一部重要な部分に明らかに私が錬金した物が混じっているようでした。

そちらは、ハルケギニアで素材を売っていない国が無かったので、決定的な証拠にはならなかったのですが。

「そんな事はいいの。でも、ティーボが攫われずに済んだと思ったら、今度はお義母様が……」

母は義娘になるルイズを非常に気に入っていましたし、ルイズもいつもは天然でほんわかとした母が好きになっていたようでした。その母が浚われてしまったので、その目には少し涙が浮かんでいたのです。

「大丈夫だよ、ルイズ」

実は全然大丈夫ではないのですが、ここでルイズを心配させるわけにはいきません。

私はベッドの上に座るルイズの肩をそっと抱き寄せてから、軽くキスをしていました。

何とも恥ずかしいシチュエーションですが、今は自然とそうする事が出来ていたのです。

「母は絶対に救出するさ」

「でも、タバサはかなり厄介なんじゃ……」

確かに、彼女は入学時はトッドメイジを自称していましたが、実際にはどう見てもトライアングルメイジで、しかもかなりスクウェア・アメイジに近い実力の持ち主です。

しかも、昨晚の動きで確信しましたが、実戦経験が相当に豊富なようで、使い魔である風竜と合わせて下手な人数では返り討ちに遭う可能性があったからです。

「なんの、こんな時の権力さ。まだタバサが国内を出たという報告はない。水精霊騎士隊で捜索を行うさ」
オンディーヌ

さすがに王城側も、このままタバサをガリアに逃がしたら危険だと考えているのでしょう。

全力でタバサの捜索を行っているらしく、彼女は現在トリスティンとの国境近くに潜伏している可能性が高いとのアンリエッタ女王からの報告でした。

私は、別の意味でアンリエッタ女王が仕事をしていたので驚いていました。

「私も手伝うわ」

「ありがとう、ルイズ」

二人の雰囲気は最高潮に盛り上がり、そのままベッドでというその瞬間にまたドアがノックされて、またタイミングを逸してしまいます。

「はい……」

私が少し不機嫌にドアを開けると、そこには申し訳なさそうな顔をしたキュルケが立っていました。

「ツエルプストー！ あんた、良く顔を出せたわね！」

昨晚の事件でのタバサを庇う行動は、それでも結局は私の行動を自由にするのに貢献していたので、下手に罰して彼女の祖国であるゲルマニアと、その実家であるツエルプストー辺境伯を怒らせて、領地が隣のヴァリエール公爵に迷惑をかけないようにという理由で、『罪も無ければ、功績も無し』という玉虫色の判定になっていたのです。

何とも複雑な政治状況が絡んだ決着となっていました。現在のトリステインは、それほど他国との紛争に過敏になっていたという事なのでしょう。

「それはについては、ただ申し訳ないとしか……。ティーボ、明日からタバサの捜索に出るんでしょう？」

「ああ」

「なら、私も連れて行って」

「無理だな。また友人であるタバサに情が沸いて、彼女を逃がす危険がある」

今度それをやられて逃げられたら、タバサは間違いなくガリアへの逃走に成功してしまうでしょう。

そしてそれが現実の物となったら、ガリアに囚われた母を取り戻すのはまず不可能に近くなるはずです。

「お願い、自分で起こした不始末のケリは自分で着けたいの。いくらタバサが友人でも、あなたのお母さんを誘拐したままガリアへ逃げるのならば、私は彼女を焼くわ！」

「ツエルプストー……」

珍しく真剣な表情のキュルケに、ルイズも驚いているようでした。当然、私もです。

「わかった。同行を許可する」

「ありがとう」

私の了承の返事に、キュルケは心から安堵した表情をします。そして……。

「最終的には私が奪うんだけど……。ティーボ、続きをしても良いわよ」

「出来るか！」

私の部屋のベッドの上にちょこんと座るルイズを見て、経験豊富なキュルケはすぐに状況を察したらしく、すぐにドアを閉じてしまいますが、完全にタイミングを外された私達は結局その晩は普通に寝てしまつたのでした。

「ティーボ様、お久しぶりですね」

「様とか付けられると、かなり違和感を感じるのですが……」

「そこは、雇用主と家臣の関係なので、ケジメはキッチリと付けな
いと」

翌日の朝、私とルイズとキュルケ。

それに、看護役としての水の魔法の使い手としてのモンモランシ
ーと、水精靈騎士隊オンデイナーヌの面々は、上空から飛来した新型の飛行船と、
その艦装委員長兼艦長を務めるミスタ・コルベールと再会していま
した。

暫くここには来なかった彼でしたが、その間にグラモン家で多く
の仕事をこなして、父からも兄達からも絶大な信頼を得るまでにな
っていました。

私も学院を卒業後には、領地で行う予定の大規模製鉄所の仕事を
任せる予定だったので。

なるべく魔法に頼らないで、多くの鉄を作って供給する。

この理想に、ミスタ・コルベールは諸手を挙げて賛成してくれま
した。

「タバサ君が、そんな事をしてしまうとは……」

昔に、上からの命令に無条件に従って後悔した彼らしく、ミスタ・
コルベールは純粹にタバサの事を心配しているようでした。

彼女の正体については、昔は暗部にいた彼なので髪の色等で気が付いていたのかもしれませんが。

ただ、そこまでガリア王家に近い人間だとは思っていなかったようです。

「捕らえて、罪を償って貰わないと」

「出来ればですけど……」

「そうだね。出来ればだね……」

それはきくと、ミスタ・コルベールも理解しているのでしょう。タバサが降伏しなければ、彼女を討つしかないのだという事に。

そこまで話すと、彼はハルケギニアで初めてとなる水蒸気機関搭載の新型飛行船の整備を指揮し始めます。

ちなみに、船の名前はオストラント東方号と言い、以前に才人と彼の故郷について話した際に、彼の故郷を東方だと誤解したミスタ・コルベールが自ら命名したとの話でした。

勿論、ハルケギニアの東方に日本があるわけではないのですが、もしかすると東方由来とされる一部産品を見るに、中世から近代日本に似た国が存在するかも知れず、私は船の名前に特に反対したりはしませんでした。

というか、船の名前に興味がなかったのです。

まさか、日本人的な発想で大和オヤマトとかにするのも変でしたし。

早くこの船が実用化されてトリステインの状況が落ち着けば、私

も東方の探索と貿易交渉などに支援をするのも吝かではありませんでした。

もしかしたら、もっと日本的な産物が沢山あるかもしれませんし。

「ところで、いつ船は出せますか？」

「そうですね。一時間ほどもあれば」

「人手が足りないのなら、水精靈騎士隊オンディーヌの連中を使っても構いませんよ」

「もう協力しているみたいですね」

そう発言するミスタ・コルベールの視線の先には、なぜかリーダーシップを取って他の隊員達を指揮するマリコルヌの姿がありました。

いえ、なぜかなんて嘘ですね。

彼が私の母に横恋慕している事情を知らない学院関係者は少ないので、ギーシュ達は何も言わずに、オストラント東方号の発進準備を手伝っていたのです。

「みんな、一秒でも早くだ！ ミス・サヴァン！ この僕マリコルヌ・ド・グランドプレが必ずあなたを助け出します！」

一人だけ物凄くハイテンションで動き、他の隊員達に指示を出すマリコルヌに、私は顔を引き攣らせていました。

その熱意はありがたくはあるのですが、かと言ってこのテンションで救出後に愛の告白とかされても、母の實の息子としては困るわ

けで……。

どう受け取って良いものか、実は真剣に悩んでいたのです。

「マリコルヌの頑張りがお義母さんの救出に大きく貢献するかもしれないけど、本当に複雑よね……」

先に出発の準備を終えて私の隣に来たルイズも、妙にハイテンションなマリコルヌと同じく顔を引き攣らせていました。

「マルコルヌ、あまり気張り過ぎると後が続かないぞ。それに……」

「ミス・サヴァンは、僕の気持ちに気が付いていないと言いたいのかい？ サイト」

明らかに頑張り過ぎなマリコルヌを才人がセーブしようとするのですが、彼はそれに冷静な口調で対応していました。

「気が付いていたのか」

「当然だろう。彼女はグラモン侯爵の奥さんで、彼女も子供な僕に恋愛感情なんて抱かない事も理解している。アルビオン戦では、彼女に相応しい男になるために懸命に努力はしたけど、それで彼女の気持ちが僕に向くわけもない」

「それにしても、妙に気合が入っているな」

「愛に代価なんて求めてはいけないのさ。僕はただミス・サヴァンが笑顔で安心して暮らせるようにその身を削るんだ。別にそれで彼女からの感謝の言葉なんていらぬ。これは、僕の自己満足でもあ

るのだから」

普段からは全く想像できないマリコルヌの言葉に、才人は衝撃のあまりその場に立ち尽くし、ギーシュは目に涙を浮かべながら彼の両肩をガツチリと両手で掴んでいました。

「このギーシュ・ド・グラモン。僕は、水精靈騎士隊小隊長マリコオンディーヌルヌ・ド・グランドプレに真の貴族道と騎士道を見た！ 僕も君の覚悟に力を貸すよ！」

「俺もだ！ 絶対にミス・サヴァンを救出しような！」

「俺も協力するぜ！」

ギーシュに続いて、才人やギムリヤレイナルまでもが感動の涙を流し、彼らはマリコルヌを中心にして感動の渦を形成し始めます。

「言っている事は、とても素晴らしいんだけど……」

「傍から見ていると、少し滑稽なような……」

「そこが男と女の違いだ！ 俺も非常に感動している！」

ルイズと、同じく私の隣に来たキュルケは、やはり女という事もあってマリコルヌの覚悟にいまいち反応が鈍かったのですが、私は素直に彼の無償の愛に感動していました。

普段とは違い、『珍しく良い事を言うじゃないか！ マリコルヌ！』と真剣に思っていたのです。

「でも……。そうやって頑張れば、お義母さんの気持ちが一番に向くかもって本能で計算しているかも……」

「こんちくしょう！ 俺の感動を返せ！」

このような下らない遣り取りの後、オストラント東方号は無事にトリスティン・ガリア国境間に向けて出発するのでした。

「父の手の者達や、トリスティン竜騎士隊の搜索範囲の手が届かないこの範囲こそが我々の担当だな」

数時間後、オストラント東方号は、タバサの父親である旧オルレアン公領のあるラグドリアン湖対岸、実は彼女の実家の元領地はモンモンシ伯領の対岸にあったのですが、そこは王室から命を受けたモンモンラシ伯爵が人手を出して警戒しているので、そこから少し離れた無人の森林地帯に到着していました。

ここならば、風竜ごと森林に身を隠して数日間待つて警戒が薄れた頃に国境を越えるという手も使えるので、最有力潜伏先の一つでもあったのです。

「だが、藪を突いて出た蛇が高速だと思っけどね」

「そのための、ジュリオ殿と違いますか？」

この搜索には、予想外の人物が参加していました。

私への誘拐未遂事件の時には、報告のために一時ロマリアに戻っていたというジュリオが竜を連れて探索に参加していたのです。

彼は、オストラント東方号の甲板に自分の竜を置いて、隣にいる私と話をしていました。

「僕の能力に期待ですか。これは、頑張らないと駄目ですね」

「タバサの風竜に追い付けるのは、ジュリオ殿の竜くらいですからね」

「サイト君の竜の羽衣はどうなのかな？」

確かにスピードでは紫電改が圧倒的でしたが、オストラント東方号から発進は不可能で、どこか離陸可能な地点から出すにしても燃料の関係で常に飛んでいるわけにもいかず、しかもある程度飛ばせば整備も必要と。

いつこの森を飛び出すかもしれないタバサと風竜に対抗するには、紫電改では色々と無理があったのです。

それにあのタバサならば、紫電改の弱点など既にお見通しでしょうし。

こうなると、ハリヤーとか戦闘用のヘリが欲しくなりますね。メンテナンス等の点で、非常に無理のある願望なのですが。

「なるほど、作戦持続時間の差ですか」

「離陸距離の関係もありますね」

「納得しました。ティーボ殿は、ロマリアでは敬虔なブリミルの信者であると評判になっていきますからね。僕もヴィットーリオ様からあなたに協力するようにと言われてるのです」

若い能力のある教皇ではあるヴィットーリオ・セレヴァレでしたが、その権力基盤は必ずしも強固とは言えません。

となれば、反発の強い保守派などに機嫌を取るために、ロマリアに利益を提供している私のピンチに手を貸す事もする。

ある意味マキャベリストな彼に、私は安心していません。

若くて、潔癖で、原理主義者であつたら、これは非常に付き合い難い教皇となっていたでしょうから。

「ついでに言うと、ガリアを以前から危険視していたと？」

「正確に言うと、ジョゼフ王ですかね。彼は世間で言われている無能王ではありませんし」

ジュリオは、ロマリアのジョゼフ王への警戒感は教えてくれましたが、それ以上の詳しい情報は教えてくれないようでした。

まあ、ハルケギニアでは情報は貴重なので仕方がないのですが。

平成の世でも情報は重要なんですが、日本人はなぜか情報の取り扱いが下手ですしね。

勿論、私もこの世界で十数年を過ごして少しはマシになったとはいえ、まだその辺ではかなり甘い部分もありましたし。

「ところで、どうやって探すのですか？」

「そうですね……。マリコルヌ、任せるよ」

「了解！」

私の命令を受けたマリコルヌが、自分の使い魔であるフクロウのクヴァーシルを森に向けて放ちます。

他にも数名の隊員達が、鳥系などの飛行可能な使い魔を放って森に潜んでいるかもしれないタバサの探索を開始したのです。

「見つかりますかね？」

「候補はあと数箇所ありますし、他を探しているトリスティン竜騎士隊や父の手勢からは報告もないですね」

ジュリオを話をしながら、私は搜索をマリコルヌ以下の隊員達に任せて東方号オストランドの甲板の上でハンバーガーやホットドッグを食べていました。

搜索で忙しいので、簡単に食べられる戦闘食を準備していたのです。

これに、揺れても中身がこぼれない容器に入れた蓋付きのコップに入れた温めの紅茶が今日のお昼ご飯となっていました。

「たまには、こういう下品なものも良いわね」

「下品じゃなくて合理的って言って欲しいな。モンモランシー、そちらの準備は整っているのかい？」

「大丈夫よ。スポンサーが強力だから、質の良いポーシオンを沢山

作れたし」

「自分で全部作ったのか？」

「特別難しい物以外はね。自分で作った方が、経費がかからないのよ」

モンモランシーは、水精靈騎士隊オンディーヌの隊員が負傷した時に備えて看護の責任者に任命されていました。

私がお願いしたのですが、彼女は他にも水系統の女子生徒数名を指揮して、普段は水精靈騎士隊オンディーヌで使う治療用の秘薬やポーションの製造・購入・備蓄・管理・治療魔法の訓練などを行っていたのです。

その際に、私はモンモランシーに、『收支報告はいらぬ』と薬の購入費用を渡していたのですが、どうやら上手く遣り繰りして相手にヘソクリを溜め込んでいるとの噂が聞こえていました。

私は知らんぷりしていたのですが、これは昔からの友人であるモンモランシーに対する私からの援助だったのです。

実家への仕送りにでもしてくれればという事なのですが、彼女の实家に対しては、最近ギーシュが気合を入れて使い魔のヴェルダンデに宝石を掘らせて金を稼いでいたので、あまり表立っての支援は行わないようにしていたのです。

「渡した経費で、必要数が揃っていれば問題ないけどな」

「ティーポ。でも、結構お金が……」

「ちょうど良かっただろう？ 町の秘薬屋でも、このくらいの単価だったと思うし」

「……。ありがとう、ティーボ」

モンモランシーは、私がギーシュに嫌われ・嫌味を言われていた頃から普通に友達付き合い合いくれる数少ない人物だったので、このくらいの援助ならばと言う事でした。

彼女の父親であるモンモランシ伯爵と私の父は友人同士であり、だからこそ露骨に支援をするのも難しいというのが現状でした。

父達は、今までは対等な友人関係だったのに、支援でその関係が崩れたらという心配をしていたようですから。

その点、彼女を将来的に妻に迎え入れたいギーシュが金を稼いで援助するのは、貴族としては特別おかしな事ではありません。

次期モンモランシ伯爵になるために、豪華な結納金を持参したくらいに考えられるでしょうから。

だから私は、こつそりと小額の援助で良かったわけです。

「でも、物凄い薬の在庫よね」

「ちゃんとティーボに言われた分なのよ」

オストラント
東方号と、学院内にある水精靈騎士隊オンディーヌの本部。

とは言っても、これは学院の空き教室をオスマン学院長にお願いして借りているのですが、その両方には他の騎士団とは比べ物にならない量の薬が置かれていました。

理由は、簡単です。

この隊の性格上、暫くは隊員を学院内からしか補充できないので、

損失を出すわけにはいかなかったからです。

生きてさえいれば、怪我を治せばすぐに復帰できますし。

「そんな、大量に薬を使う怪我をして欲しくないわね」

「とは言ってもなあ……。それは、彼に言ってくれないかな？」

「どうやら、一箇所目で目標にビンゴしたようです。」

マリコルヌの使い魔であるフクロウのクヴァーシルが、森のある地点から飛び出してひと鳴きすると、そこから物凄い勢いで青い風竜が飛び出てきます。

しかも、その上にはタバサの姿も確認できました。

「ジュリオ殿」

「任せてくれと言いたいところなんだが、一つ良いかな？」

「同乗者かな？」

ジュリオは魔法が使えないので、誰か一人メイジを乗せて彼女を追跡したいとの話でした。

「誰が良いのかな？」

「僕に決まっているじゃないか！ さあ、行こう！ ジュリオ！」

「でも、大丈夫かい？ 相手はトライアングルメイジで、君はようやくラインメイジになったばかりなんだろう？」

マリコルヌは、実は昨日まではドットクラスのメイジでしかあり

ませんでした。

ところが、自分で私の母を救うんだと無意味に気合を入れていた結果、メイジとして一皮向けてラインメイジへとなっていたのです。

『そんなバカな!』というのが才人の感想でしたが、思わぬ心境の変化によつて精神力の器が大きくなつてメイジとして成長するというのは、実はギーシュでも経験していました。

他にも、過去には失恋でとか、親が死んでとか。

魔法にあまり関係ない、ふとしたタイミングで急にメイジとして成長する事がたまにあるので、魔力と精神力の関連性を裏付けるような事実ではあつたのです。

「確かに、僕ではタバサに勝てないかもしれない。でも、ここで引くわけにはいかないんだ!」

「わかつたよ。僕も出来る限りフォローするから」

「ありがとう!」

以上のような遣り取りがあつて、ジュリオはタバサの魔法対策として、マリコルヌを竜に乗せて東方号を飛び出していきます。オストラント

すると彼女はジュリオ達を待ち受けていて、早速に二匹の竜は高速でデットヒートを続けます。

途中、タバサはジュリオ達に向けて魔法を連発しますが、それは竜を操るジュリオの巧みな回避と、マリコルヌのラインメイジに成り立てとは思えない奮戦によつて防がれていました。

「タバサ! ミス・サヴァンを返すんだ! 今降伏すれば、同学年

の誼で！」

「あなた、誰？」

「こんちくしょう！ もう三年生になったのに、僕の名前を覚えていない同級生がいる！ タバサだって、本ばかり読んでいて目立たなかった癖に！」

「えーと、マルコメ？」

「誰がマルコメだ！ このチビ！ 僕の優しさを返せ！」

あんまりにもあんまりな事実、マリコルヌは絶叫しながら魔法を連発していました。

ですが、ラインメイジのマリコルヌが、どうしてエア・ストームやライトニングクラウド、ウィンディ・アイシクル（氷の矢）などを使えるのでしょうか？

タバサも、この奇妙な成長を続けるマリコルヌに次第に恐怖を抱き始めたようです。

明らかに、彼と距離を置くようしていました。

「確かに、僕は今までは未熟なメイジだったさ！ でも、この僕のミス・サヴァンを助けたいと思う気持ち！ この気持ちが僕を急速に成長させる！」

遂に、マリコルヌはとんでもない魔法を繰り出しました。

その魔法とは、カッター・トルネード。

真空の層を間に挟んだ竜巻を発生させ、触る物を全て切る非常に

強力な魔法で、これはスクウェアアスペルでありました。
当然、スクウェアレベルのメイジしか使えません。

風のメイジを自称するマリコル又なので勉強はしていたのでしようが、まさか実際に使ってしまうとは誰も思わず、オストラント東方号の甲板の上で、私達は啞然としてしまいます。

「マリコル又、その報われぬ愛が奇跡を生んだんだね！」

ギーシュだけ、一人涙を流しながら感動していましたが……。

「凄いんだけど、マリコル又だしね」

「お義母様への邪な感情が鍵になったんでしょう。何か嫌」

「あんだ達も、大概酷いわね……」

モンモランシーとルイズはせつかく頑張っているマリコル又に毒を吐いて、それをキュルケに酷いと指摘されていました。

「タバサ！ 奇跡のせいで勝ち目が薄いから降伏しなさい！」

私が許可したので、キュルケはタバサのへ降伏勧告を続けていましたが、彼女は頑なにそれを拒否して戦いを続けていました。

ですが、あんまりな理由ではありませんが、いきなりスクウェアメイジに成長して、しかも母を助け出す気満々のマリコル又に今の時点でタバサ勝つのはかなり難しかったです。

「……………」

魔法の撃ち合いで魔法力が切れたのか？

タバサは風竜の上でグツタリとしてしまい、更に風竜も一瞬の油断で体や翼をカッター・トルネードで切られてそのまま森へと落下していきます。

「捕らえるんだ！」

私は、オストラント東方号を急いで墜落地点にまで移動するように命令します。タバサを乗せた風竜は森の開けた部分に落下していて、負傷しながらも気絶したタバサを庇いながらこちらを威嚇していました。

そして、その近くでは……。

「ティーボおー！ー！ こっちよおー！ー！」

「何か、物凄く元気そうね。お義母様……」

「こんな時でも天然なんだよなあ……。俺の母って……」

母は、こちらに元気そうに手を振りながら大声で私の名前を連呼していました。

やっぱり、家族って少し恥ずかしいですね？

結局、マリコルヌの奇跡の成長によつては母は救出されたのですが、私はこの気絶したタバサと、彼女を守りながらこちらを威嚇する傷付いた風竜をどう扱おうかと、その場で腕を組んで考え込んでしまうのでした。

五十一話

「さてと。母も無事に救出した事だし、誘拐犯であるタバサもマリコル又が……。マルコル又つてのは意外だったな」

「そうね……。賭けで言ったら、大穴も良い所よ」

「ルイズは、賭けをした事があるのか？」

「いいえ、ツエルプストーに聞いただけ」

「キュルケと賭け事。似合うような気がする……」

母を誘拐してトリスティン・ガリア国境沿いにある森に潜伏していたタバサは、マルコル又の使い魔であるフクロウによって発見され、更にマリコル又との魔法合戦に敗れて捕らえられるという、半ばマリコル又無双によって事件は決着していました。

これも、私の母に対する愛の奇跡というのがギーシュなどの意見だったのですが、肝心の救出された母は、誘拐されたというよりは一晩キャンプでもしていたかのようなん気さで、救援に来た私達に手を振っていたのです。

まあ、こういう天然な部分が、私の母なので仕方ないのですが……。

それでも、彼女は自分を助けてくれた人を理解していたようで、マリコル又に満面の笑みを見せながら、『ありがとう、マリコル又君。でも、凄い魔法が沢山使えるのね』お礼を言っていたのですが、

問題はその後だったのかもしれませんが。

オンディーヌ
水精靈騎士隊の他の隊員達から、急激な成長を見せたマリコルヌに、その成果を近くで見せて欲しいと言われたので、彼は得意気になってカッター・トルネードなどの呪文を唱えたのですが、その時には何も出ず。

結論から言えば、マリコルヌは母が絡まないとスクウェアアークラスの魔法が使えない事が判明していました。

『そんなバカな！』と言いたくなるような事実でしたが、実はピオンチになった時に今まで使えなかったような強力な魔法を一時的に使えたり、マリコルヌのように特殊な条件下の時だけ同じく強力な魔法を使えたりする人は、珍しくはあるものの全くいないわけでもなかったようです。

これは、後でミスタ・ギトーから聞いたのですが……。

それでも、実はオンディーヌ水精靈騎士隊でラインメイジという存在は貴重なので、それでも私は構わないと思ったのですが。

母がキーとなって作動するスクウェアアークラスの魔法つてのも、実の息子としては何か嫌ですしね。

話を戻しますが、私達はタバサを守って威嚇を続ける風竜を魔法で眠らせてから双方をオストラント東方号へと収容して、とりあえずはトリスタニアの王城を目指して進んでいました。

こちらとしても、誘拐未遂一件と誘拐一件の罪を犯した罪人を引き渡さないといけませんでしたし。

「あの……。タバサはどうなるのかしら？」

キュルケが心配そうに私に聞いてきますが、それは私の方が知りたいのが本音でありました。

普通に考えれば暫くは臭い飯でしょうが、彼女がガリアの謀略の生き証人という点で、普通の罪人と同じ扱いという可能性はかなり低かったのですから。

「そうだね。いきなり逮捕つてのも難しい」

「やれやれ、ジュリオ殿がそう言うとなると……」

ロマリアは、少なくとも教皇は、彼女を表立って罰するのには反対であるという事なのでしょう。

ジュリオも、これだけの大きな騒ぎを起こしたにも関わらず、トリスティンがタバサを罪人扱いの反対という見解を述べてたのですから。

彼がそう言うという事は、その後ろにいる教皇もタバサの処罰には反対なのでしょう。

「考えてみると、トリスティンがタバサを処罰しても何も良い事ないしな」

「ティーボ殿は、良くわかっていらっしやる」

いくら誘拐を企んだ罪人でも、それはどう考えても自分の意思で行ったはずもなく、多分これは、失敗したら外国が邪魔な親族を始末してくれると考えたジョゼフ王の謀略以外の何物でもないのです

よう。

「オルレアン公派の連中はそんなジョゼフ王は恨むけど、彼は自分が更に深く恨まれても何も感じないだろうしね」

「今更かあ。そんな事は」

「そういう事ですよ、ティーボ殿」

元から恨まれて国を割るかもしれない争いになっているのに、また深く恨まれても結果は同じという事なのでしようし、それに加えて実際にタバサに手を下したトリステインも恨まれるという、今回の件は、ジョゼフ王の嫌がらせにしか感じられない謀略でもあるようでした。

私も一時それに嵌ってタバサへの殺意を露にしましたが、今冷静に考えると、もし私が彼女を直接殺すと、余計にオルレアン派のガリア貴族達に恨みを買う事になるのです。

彼らからすれば、私はガリア貴族の血を引いているのに、その主君筋に当たるタバサを殺してしまったのですから。

祖父の追放の経緯や、私は生まれも育ちもトリステインなのだという事実は彼らには関係ないでしょう。

人間とは、自分の都合の良いように解釈して、それを事実だと思いつく生き物なのですから。

「というわけで、暫くその身柄を軟禁とついうのが妥当な線かな？」

その後、王城に到着した私達でしたが、やはりジュリオの予想通

りにタバサはその身柄をトリスティン王家が預かる事になったようです。

アニエス隊長がどこかへと連れて行きますが、牢屋に入れられるという事もなく、どこかで監視されながらの生活となるのでしょうか。

「この度の救出任務、ご苦労様でした」

アンリエッタ女王と、その隣になぜかまた居る少しまた痩せたように見えるマザリーニ枢機卿は、私達に恩賞である金貨とタバサを捕らえたマリコルヌに勲章を渡していました。

「いえ、我が母の救出なので褒められるような事は」

「発足間もない水精靈騎士隊オンディーヌが、他の隊を差し置いて一番手柄を挙げたのです。これは、後の大手柄の第一歩となる可能性が高いですから」

言われてみると確かに、王城に務めている兄から『学生の騎士ゴツコだなど噂されているぞ。あいつらも、人の事なんて言えないけどな』という評価がせいぜいの水精靈騎士隊オンディーヌが、父グラモン侯爵の手勢や王城に詰めている他の騎士団を差し置いて、母を発見・救出したのは手柄だったのかもしれない。

「これからの活躍にも期待します」

こういう時はちゃんと女王様らしく私達と接するので、私や才人やルイズを除く隊員達は、アンリエッタ女王自らお褒めを言葉を与った事に大感激しているようでした。

「暫く魔法学院に残るよ。正確には、ティーボ様の屋敷に常駐だね。」

オストラント
東方号の整備と運用試験があるからね。それと……」

オストラント
今回の探索で、就役したばかりの東方号を故障無しで運用していたミスタ・コルベルでしたが、やはり新しい水蒸気機関の安定性には色々と問題があり、それらの解決と正式な量産に向けてのデータ収集のために、暫く私達の元へ残る事になっていました。

それとこう見えても、ミスタ・コルベルはプロの戦闘技術を持つ凄腕のメイジであったので、父の方から私の護衛を頼まれたようです。

そして、もう一人……。

「私も一度誘拐されてしまったから、旦那様からティーボの警備体制に入るように言われてしまったのよ。暫く宜しくね」

私と母と一緒に警備した方が効率が良からうという事で、母も私の元へ来る事になっていました。

それと、今まで通りにグラモン家の仕事としての秘薬やポーシヨンの調合も行うが、また前のように非常勤講師として魔法学院で教鞭を取るとの話でした。

「オスマン学院長から、是非にって言われたのよ」

「母上の秘薬の調合技術が認められたのですよ（オスマン学院長も好きだよなあ……）」

彼の女好きはかなり有名であったので、手元になるべく綺麗な女性が居て欲しいという事なのかもしれませぬ。

まあ、手を出したら父が……。

恩師であり弱みも色々握られている父が、オスマン学院長に何か出来るのかは非常に興味があるのですが。

「ティーボ、少しお話があるのですが……」

「ええと、その……」

「勿論、ミス・ヴァリエール達も一緒に」

アンリエッタ女王からの褒章の儀も終わり、私達はあとは東方号オストラントに乗って学院へと戻るだけだったので、私だけが彼女に引き止められていたのです。

ですが、ここでまた私達を二人きりにして騒ぎでも起こされたらと、前回散々な目に遭ったマザリーニ枢機卿の計らいによって、ルイズ、才人、ギーシュなども残っていました。

それと、何かロマリアも絡む重要な話なのかもしれません。
ジュリオも、私達と一緒に話を聞く事になっていました。

「実は、非公式にガリアのジョゼフ陛下から人質の交換を行おうと……」

アンリエッタ女王の私室に私達が入った事を確認すると、彼女はいつものように盗聴避けサイレントの魔法を使い、その直後にマザリーニ枢機卿からとんでもない発言が飛び出します。

まさかこれほど早く言ってくるとは、老練なマザリーニ枢機卿でも想像が出来なかったようでした。

「何とも、面の皮が厚いというか……」

私の感想に、全員が納得したように首を縦に振ります。

「ですが、予想は出来た事なのです」

「ガリアが現在のトリステインの状況を正確に把握しているのと、その交換する人質に価値があるという事ですか？」

ある意味、これはガリアが自分達がハルケギニアの大国であると自覚しての、かなり強引な半ば恐喝に近い外交手段でもありません。

先に謀略を仕かけておいて、それが失敗すると非公式で取引を提案する。

多分、少し前の小国トリステインであつたら、そのまま戦争になつても不思議ではない提案だったので。

トリステインは小国で、歴史だけは古くて、数だけは沢山いる貴族達が昔の価値観を引き摺り続ける保守的な国です。

そんな名誉だけ多く感じているトリステイン貴族達が、大国とはいえガリアからの、人の国を小バカにしたような態度を許せるはずがありません。

ところが、それはつい最近までの事でした。

アルビオンを平定し、ガリアに匹敵するかそれを超える空軍と竜騎士隊を手に入れようとしているだけでなく、経済的にも将来の発展が約束されている。

逆に、それが彼らの足かせとなつて、一部の跳ね返りを除いてトリスティンは戦争を選べないはずでした。

貧しいから威勢良く戦争云々言えたという部分もあつたのですから。

逆に色々と手に入れると、それを戦争で失うのが惜しい。

少なくとも、今は戦争は控えて手に入れた物が馴染む時間を稼ぎたい。

そこまで読んで、ジョゼフ王は非公式で提案をして来たのでしよう。

「人質の交換つて、タバサとではないですよね？」

「はい。ティーボ殿が捕らえた、あの名前すら名乗らない女とです。マザリーニ枢機卿は、この状態を予想していたのかもしれませんが、私は、魔法アカデミーなどによって口で表現するのも辛い拷問にでも遭っているのかと思つたのですが、牢屋には入れられているものの、あまり酷い扱いは受けていないようでした。

「あの女と、もしかしてタバサの母親をですか？」

「そういう事になります」

正直なところ、それがトリスティンにとって何の利益になるのかすら不明でした。

キュルケから聞いた話によれば、タバサの母親は精神を病む薬の影響で狂人と呼ぶに相応しい状態で、娘のタバサと言えば自分の母親を救うためにはどんな無茶でもしてしまふ。

しかも、驚異的な戦闘能力を備えた危険なテロリストに近い存在なのですから。

それと、私を拉致しようとした有能で強かな女とでは、こちらに何の交換のメリットも存在しませんでした。

「ティーボは、どう思いますか？」

「……」

ですが、私は自分の見解を一切語りませんでした。

確かに私は、水精靈騎士隊オンディーヌの団長ではありませんでしたが、トリスティンの外交を担当する外交官ではありませんでしたし。

「（俺なんて呼ばないで、自分で考えるよ……）」

「あの女を捕らえたのはティーボですから、それを外交のカードとして使って良いものなのか聞いてみたのです」

「個人的には、とっとと処刑した方が良いと思いますが……」

「なぜ、そう考えるのです？」

アンリエッタ女王に誘導されて思わず自分の意見を言ってしまった私は、ただ自分の迂闊さを呪うしかありませんでした。

「ガリアの王様が直々に返してくれと言うのです。よほど有能なのでしょうね」

「だから、拒否して殺してしまうべきと？」

「ガリアからの提案を無視して、そのままという線もありますけど……」

無視すれば意外とガリアは焦るかもしれませんし、一旦待つて向こうの焦りを利用して、完全にガリア側に持つていかれている交渉のイニシアブチをトリステイン側に引き寄せるといふ狙いもあったからです。

向こうに提案されたから、ノコノコと良く考えもしないで受け入れたら、それでは秘密外交の意味はありませんし。

「引き伸ばしか……。でも、この場合は無意味な可能性もあるんだよね」

「ほう、ジュリオ殿は。いえ、ロマリアはこの交渉を受け入れると？」

ジュリオのいつも通りのふてぶてしい笑顔を見て、私は今回のこの奇妙な秘密交渉にロマリアも絡んでいる事に気が付きます。

「勿論、ロマリアが企んだわけではありませんよ。ただ現在の情勢を見るに、受け入れてくれた方が好ましいと」

ロマリアがというよりも、教皇猊下の意向としてはという事なのでしょうが、だからこそアンリエッタ女王は私を呼んだのでしょうか？

「我々としては、トリステインに今回の交渉を受け入れて貰って、出来るだけ時間を稼いで欲しいのですよ。ここまで話すのは、

これは教皇猊下の誠意だと思つて欲しいですね」

そう言いながらジュリオは話を始めますが、まずはガリアがロマリアに戦争を仕かけようとしている事実と、ジョゼフ王は魔法を使えない無能王ではなく、ルイズと同じようにガリアの虚無であるという事。

確かに彼は、少し前のルイズと同じように魔法が使えない王族として蔑まれていましたが、それが自分の系統を隠すための演技だったら？

あり得ない話ではないのかもしれませんが。

更に、私が捕らえたあの女の額には見た事もないルーンが刻まれています。

「人間が使い魔というのも、ミス・ヴァリエールと共通するよね。それと、今あの女を殺しても、ジョゼフ王は新しい使い魔を召喚して終わりなんだよね」

もしそれで、あの女よりも能力的に厄介な使い魔が召喚されたら？
ジュリオは、ならば一度捕らえて手の内もある程度理解しているあの女の方がマシという意見を述べていました。

「それとだ。ミス・タバサじゃなくて、シャルロット姫殿下と旧オルレアン公夫人の身柄。ロマリアとしては是非欲しいですよ」

将来的に対立するジョゼフ王を始末して、その後釜にタバサを据えるために、今はその身柄を確保しておきたい。

ロマリアの考えは理解できるのですが、なぜそれにトリスティンを巻き込むのでしょうか？

単独でガリアに勝つのは難しいからなのでしょうが、トリステイン側もいくら波風を立てたくないからと言って、それを受け入れるリスクを考えたのでしょうか？

ガリアは、これでロマリアとトリステインがほぼ同盟関係にあると認識してしまうのにはです。

「ヴァリエール公爵も、グラモン侯爵も、苦虫を噛み潰したような顔をしていました。受け入れざるを得ないという点では意見が一致いたしましたので」

今の時点では、戦争は絶対に避けたい。

その共通認識によって、今回の秘密交渉については目を瞑るとのマザリー二枢機卿からの話だったのです。

「こんな重要な秘密交渉を、わざわざ我々に知らせる必要があるのですか？」

「普通に考えると無いのですが、実はその席にティーボも呼ばれているのです。ジヨゼフ王自らの指名で」

「私ですか？」

「はい、間違いなくです」

私は、なぜ自分がガリアの王様に呼ばれたのか？

全く理解できないまま、アンリエッタ女王の前で間抜けな表情を曝してしまいます。

「ミス・ヴァリエールとサイト君もだね。これを受け入れてくれたら、自分は護衛を伴わないで交渉の席に出席すると言っただよね…」

ジュリオの、『敵ながら大胆な事で……』という表情を見ながら、私はまた厄介な騒動に巻き込まれたなと思ってしまっただけでした。

「なるほど。この船の上で、食事会を兼ねてですか」

それから三日後、私は、ルイズ、才人、アンリエッタ女王と、例のあの女を連れたアニエス隊長と共に、ラグドリアン湖に浮かぶ一艘の船の上にいきました。

極秘裏に両国のトップが会うために、トリスティンでもガリアでもない場所を使う。

これに合う最適な条件が、ラグドリアン湖の真ん中の位置だったのです。

ガリア側が提案したという事でガリアが船を準備して、その船の甲板上には、豪華なテーブル席と、その横に立つ数名のメイドと、それに負けない豪華なご馳走が並んでいました。

料理は、高級ガリア料理のようです。

「また襲撃でもされると厄介だな」

「ジョゼフ様がそんな卑怯な真似をするか！」

「やっと喋ったかと思ったら……」

アリエス隊長と例の女の口論を聞きながら、私も出来る限り魔法で周囲の様子を探りますが、確かに私には潜んでいるような怪しい連中の存在は確認できませんでした。

同じく魔法で周囲を探っていたアンリエッタ女王も、私と顔を合わせて目配せをしてくれます。

「もう少しで、ジョゼフ様は現れると思います。その前に、先に着席していただけると」

メイドの勧めによって席に座ると同時に、船室へと続くドアが開いてそこから一人の蒼い髪と髭のイケメンな男性が現れます。間違いなくジョゼフ王なのでしょうが、確か彼は四十五歳くらいのはずなのにどう見ても三十歳前後にしか見えませんでした。

「ようこそ、トリステインの客人達。まずは、用件を済ませてしまおうか」

ジョゼフ王が指を鳴らすと、そこには一人の蒼い髪の中年女性が立っていました。

「余の可愛いミューズと交換する重要な駒だよ。以前の心が壊れたままでは心象が悪かろうという事で、余が貴重な秘薬を手に入れて治療はしてある」

「……」

そのオルレアン公夫人らしき中年女性は、ジョゼフ王と一瞥してから私達の方へと歩いて来ます。

同時に、アニエス隊長もあの女の戒めを解いていて、二人の交換はこれで無事に終了していました。

「ひと波乱あると思ったのかな？ アンリエッタ女王陛下」

「いえ、あなたほどの方が、そんな狡い真似をするとは思えませんでしたので」

威風堂々としたジョゼフ王の問いに、アンリエッタ女王は気丈に答えていました。

そしてそんな遣り取りをしている間に、オルレアン公夫人はアニエス隊長に促されて船をあとにします。

「余の可愛いミューズには、この食事会に参加して貰おうと思うのだが……。宜しいかな？」

「はい、構いません」

無事に人質の交換を終えた私達は、その後は高級ガリア料理のフルコースを振舞われます。

ルイズは、最初は毒殺の危険を感じていたようですが、私は今回はそれはないと思い、そのまま無遠慮にスープを口にしていました。

「ティーボ、大丈夫か？」

「魔法系の秘薬やポーションなら、仕込んでみすぐにわかるしな。

他の毒物も銀食器だからな。それに、こんな大胆な席を用意するジ

ヨゼフ陛下がそんなセコい真似はしないだろう」

「ほう、ただ錬金が得意な男というわけでもないのだな。思っていたよりも胆が座っておる」

「私は、基本的に小心者ですから。もしこの席で我々を毒殺すると、それに激怒したトリスティンと全面戦争になりますし、となると後の目的のためには拙いでしょうから」

後の目的とは、勿論ロマリアとの戦争のはずです。

私は、それを敢えてボカして話をしていました。

「まずは、せつかくの料理を楽しもうではないか」

ジョゼフ王の提案によって、私達は高級ガリア料理のフルコースを楽しむ事にします。

「なあ、この沢山あるナイフとフォークって？」

「端から使っただよ」

「ああっ！ 以前に聞いた事があるわ！」

私は才人にテーブルマナーを教えながら、その料理を堪能していました。

さすがはガリア王室御用達の料理人達がつつたとあって、その味はなかなかの物だったのです。

全ての料理を食べ、デザートも食べてから、紅茶を飲みながら話に入るとします。

「トリステインの虚無に、その使い魔であるガンダールヴ。こちらにも興味はあつたのだがな」

ジョゼフ王の言葉に、ルイズと才人は一瞬その身をビクッとさせていました。

「だが、余も虚無で、神の頭脳・ミヨズニトニルンの使い魔もいるとなると、意外と共通する事実が多くて、より面白い話というのは難しいかもしれん」

「はあ……」

ルイズは、ジョゼフ王の発言の意図を掴めませんでした。ですが、私には彼の意図がわかっていました。

なぜなら、彼の視線はさっきからずっと私を向いていたのですから。

「我が父の薬師であつた元ガリア貴族の孫が、国の運命を左右する錬金の達人になるとは。我が亡くなった父も、シャルルも惜しい事をしたものよ」

「もし祖父がガリアに残つたままであれば、私は生まれていないのでは？」

「確かにそうであつたな。過去の事など振り返つても無駄か。となると、明日からの事を考えないと駄目かもしれぬな。ところで、テイボ・ド・グラモンよ」

「はい……」

ジョゼフ王が何を言い出すのか？

私は、心の中で身構えている状態でした。

「そなた、次期ガリア国王にならぬか？ それか、我が娘イザベラを女王にして、大公にでもなるか？ そういえば、そなたは鉱物が大好であったな。我がガリアには、まだ調査すらしていない鉱山候補が沢山あるぞ。好きだけ金属を作るが良い」

まさか突然のガリア王ジョゼフからの勧誘に、私はその場で目を点にしてしまうのでした。

五十二話

「ジヨゼフ王！ あなたは！」

「ふふつ、冗談だよ。アンリエッタ女王陛下殿。非公式の席で出た、論ずるに値しない下らない冗談だ」

ラグドリアン湖の真ん中で極秘裏に行われたガリア・トリステイン両国による外交交渉と会談の席で、『ガリアの王にならないか？』というジヨゼフ王からの突然のに驚く彼以外の全ての人間でしたが、冷静に考えればそんな事は実現するはずもありませんでした。

私はガリア王家の血を引いておらず、正確に言えば過去に少しは混じっているのかもしれませんが、それを言い始めるとガリアのほぼ全ての貴族が当てはまってしまいます。

大国とはいえ権力闘争が激しいガリアで、錬金にしか能が無い私は厳しい権力闘争をまず生き残れないでしょうし、それに参加するつもりなど更々ありません。

それに、無能王を自認するジヨゼフ王でしたが、本当に無能ならばとつくに故オルレアン公か、その派閥に属する貴族達に王位から追い落とされていたのでしょうか。

「なるほど、非公式の場が出た冗談ですか」

「そうだ。この場にいる人間しか聞けない駄法螺の類さ」

とは言いつつも、ジヨゼフ王の目には何かを企んでいるかのよう

な光が浮かんでいました。

口では冗談とは言いつつも、将来的には私の身柄が欲しいという気持ちに変わりは無いのかもしれませんが。

それと、私の自己保身に拘る性格に気が付いての事でしょうか？

政治的野心がゼロに近い、錬金魔法の名手であるテクノクラートとしての私は、所属している国や組織を豊かにする事が可能です。

ならば、私を好待遇で抱え込めば確実に利益になりますし、権力者という生き物は、私のような特技に優れて野心の低い人間を重宝する傾向があります。

どんなに有能な権力者でも、彼らから猜疑心という物を離しては考えられませんし、それを考えないで済む役に立つ人間を本能的に好むでしょうから。

「ならば、私からも。ティーボ殿は、トリステイン王家でも有数の名門であるグラモン侯爵家の出で、自身も分家の創設を許された大切な家臣でもあるのです。ガリア王家に渡すわけにはいきません」

「であろうな、アンリエッタ殿。余が同じ立場でも、絶対に拒絶したであろう」

ジョゼ王は、アンリエッタ女王からの刺すような視線をまるで気にする事なく、一人優雅に紅茶の香りを楽しんでいました。

「ところで、錬金殿は余に質問とかは無いのかな？」

「私ですか？」

錬金しか能が無い私にそんな事を聞かれても困るのですが、それでも何も言わないわけにはいかないので、この席での発言はオフレコという部分を利用して一つだけ質問をします。

「ジョゼフ陛下にとっては、血縁の故オルレアン公夫人とシャルロット姫殿下よりも、自身の使い魔である神の頭脳・ミヨズニトニルンの方がよっぽど重要なですね」

「そうだ。いくら血縁とはいえ、あの二人が存在するだけで籠の中の愚かな鳥達が騒ぐからな」

ジョゼフ王の言う『籠の中の鳥』とは、オルレアン派のガリア貴族達の事でしょう。

いや、彼らが騒げばジョゼフ派も騒ぐので、実は両方かもしれませんが。

「しかも、扱いに困る代物でな。シャルルが死んでも、家族をどこに軟禁しても、あいつらは今の体制をひっくり返そうと無駄な努力を続ける。余も、無駄な労力を使っただけだ」

「オルレアン公を暗殺した時に、ついでに殺せば良かったのでは？」

故オルレアン公の死因など、普段は外聞などを気にして表立っては誰も何も言いません。

ですが、彼が国を割ってしまう原因になると、ジョゼフ王が手を回したのは間違いないでしょう。

ただ、その暗殺も彼の夫人であるオルレアン公夫人と一人娘であるシャルロットを生かした時点で失敗だったのです。

薬を盛って心神喪失にしたのも、無駄な努力であったと私は考え

ます。

どうせ悪行を背負うなら、同時に皆殺しにしてしまえば厄介の種も減っていたはずですし。

彼らオルレアン公派がいまだにある程度の勢力を保持しているのは、オルレアン公の血を引く娘が生き残っているからです。

殺しても、その存在を教祖のように祭り上げて戦いを続ける者もいたでしょうが、大半は諦めて少なくとも中立派に鞍替えしてしまうでしょうから。

「そなた、意外と発言が大胆だな」

「アレを引き受ける、トリステイン側の面倒を考えて欲しかったですね。だから、生かして渡したとも考えられますが」

「正解だ。生きたまま余と対立する連中の象徴を隣国に渡す。さぞやトリステインは台風の目になるであろうな」

今さら、ガリア対トリステイン・ロマリア連合との対決は避けようもありません。

ならば、自身の大切な駒である神の頭脳・ミヨズニトニルンを返して貰い、自分で管理をすると面倒なオルレアン公夫人と姫の親子を敵に渡してしまう。

受け取ったトリステイン側は、嫌でもあの親子を厚遇しなければいけないでしょう。

ロマリア側としても、ジョゼフ王打倒後にガリアの王位を継ぐ貴重な存在なので、それを間違いなく希望するでしょうし。

そしてそんな彼女達に、ガリア国内外から多数の人間が集まります。

ジョゼフ王打倒と、シャルロット女王陛下即位のためにです。

彼らは間違いなく自分に逆らってくる敵勢力となるでしょうが、オルレアン公夫人親子がガリア国内に居ても逆らったと考えれば、むしろ倒す敵を纏めて監視できる点では、あの親子を国外に出したのは正解かもしれません。

それに、ジョゼフ王の対抗馬がまだ若い小娘という点も、彼には好都合でしょう。

タバサは魔法の腕は天才的でも、政治指導力は未知数であり、軍勢などを指揮する能力も不明です。

勿論、それはオルレアン公派の連中も知っているので、彼らは自分が少しでも内戦勝利後に良い立場に就こうと、取らぬタヌキの何とやらで下らない権力闘争を開始するはずです。

昔に聞いた、『規模の小さい組織ほど、割れて揉める』を地で行くでしょう。

他にも、大国ガリア貴族の意識がトリステインの足を引っ張る可能性もあり、むしろ敵にくれてやった方がジョゼフ王には好都合なのかもしれませんでした。

きっとジョゼフ王は、入念にロマリアとの開戦準備を進めるのでしょう。

一方トリステインは、いまだにアルビオン戦の後処理も完全には終わっておらず、念のために戦争の準備を始めてはいるものの、新たに加わるであろうガリア国外のオルレアン公派は暫くは援助ばか

りを求めてくる邪魔者でしかなく、ロマリアとトリステインの戦力を合わせても、ガリアの方が圧倒的に上で、この件でゲルマニアの援軍など望めるはずもなくと。

どう考えても、詰んでいるのはトリステインとロマリアの方でした。

戦争なんですから、戦力をより多く整えた方が勝つ可能性が高いのは事実です。

しかも総大将の力量でも、悪いですけどアンリエッタ女王は経験不足が目立ちます。

教皇ヴィトリオの方は、良くわかりませんが。

なので、出来れば早めに見切りを付けて、ロマリアを裏切った方が良いかもしれません。

どうせ、ロマリアは今の教皇が排除されて、ガリアに従順な傀儡に替わるだけでしょうし。

私は、今まで通りに水晶柱や翡翠柱が販売できるでしょう。

「（俺のその辺の考えが、全部読まれているんだろうな……）」

私は、こちらに満面の笑みを浮かべるジョゼフ王に、これからの対応の難しさを改めて実感するのです。

「今日は面白き良き日であったな。それと、こんなに高価な贈り物

を感謝する」

「あまり大した出来ではないのですが、自分で念を入れて作った物ですので」

「錬金殿も謙虚が過ぎるかもな。これほどの高品質の大粒黒真珠ネックレス。ガリア国内で作れる者などおらん」

人質交換と、食事会と、午後のティータイムを兼ねたオフレコ会谈の後に、本日の予定は無事に終了します。

私は、予てから準備していたプレゼントをジョゼフ王に渡ししました。

大粒黒真珠の二連ネックレスで、もし市場に流れれば五十万エキューは下らない逸品でした。

これを贈った理由は、『こちらが替わりに受け取るオルレアン親子には、相応の価値があるのだ』というトリステイン側の見栄と、極秘でも外交交渉では見栄を張りたいトリステイン政府の意向と、やはりトリステインから見栄を取るとさして何も残らないようでした。

私といえば、このネックレスを作るのにアンリエッタ女王陛下から雀の涙ほどのありがたい報酬を受け取っていて。

報酬の過多など今さらどうでも良いのですが、私としては、もしトリステインが駄目な時には、自分のグラモン分家と、グラモン本家と、出来ればヴァリエール公爵家も救いたいと今のうちにジョゼフ王に渡りをつけておいたというのが本音です。

私はトリステイン貴族ですが、別にトリステン王家に順ずる覚悟などありません。

王家と貴族との関係は一方的な主従関係を強いるだけではなく、王家が貴族の領地とその支配権を認めるからこそ、逆に貴族は分擔金の負担や戦時での戦力の派遣などを義務として行うのです。

もし我々の領地と支配をガリア王家が認めてくれるのなら、明日からはガリア王家の所属になればいい。

建前はともかく、本音では大半の貴族がそう思っているのです。う。

普段はプライドが邪魔をして、口が裂けても言えないでしょうが。

「それと、これはイザベラ様に……」

「ほう、随分と気を使うのだな」

私は、今のところジョゼフ王唯一の後継者であるイザベラ王女向けに、色取り取りのバラとカスミ草を、花瓶と共に水晶で作った実物大の飾り物を準備していました。

勿論、勝手に準備をしたわけではなく、アンリエッタ女王にも許可は取っています。

「昔に誰かが言ったそうです。『物を貰って喜ばない人はいない』と」

「くくくつ、随分と皮肉の混じった人間の本能を示す言葉だな。贈り物は、普通にイザベラが喜びそうな物なので渡しておく」

ジョゼフ王は、従えていたメイドに水晶細工を持たせながらその場を後にします。

その後姿を見送っていた私達でしたが、まず最初に溜息をついたのはつき合わされていた才人でした。

「物凄いプレッシャーだった。あの王様、絶対に無能なんかじゃねえ……」

才人は、私達が戦いを避け得ないであろう次の敵であるジョゼフ王の振る舞いと言動に、『これは、とんでもない奴が敵になるんだな』と言った感じの表情をしていました。

「才人のほぼ言う通りなんだけどな。俺達には、戦いまでに出来る事が限られているからな」

「後は、女王陛下に任せるしかないって事かしら？」

この会見中、ずっとジョゼフ王に圧倒されつつ放しでほとんど口を利かなかったルイズが、ようやく自分の意見を口にします。

いくら伝説の虚無の担い手でも、貴族の箱入り令嬢ではない彼女が、あの大国ガリアの凄惨な権力闘争を生き残り、ガリアを無難に治めているジョゼフ王に初対面で何か言えるはずもないのですから。

それに、下手に何かを言って問題にでもなったらと、ヴァリエール公爵から釘でも刺されていたのかもしれないませんでした。

「ああ。それと、ガリアの大軍勢が向かう先は、確実にロマリアだからな。そこは、教皇猊下やジュリオ殿が骨を折って貰う事としてですね」

「酷いな。ティーボ殿は」

「ですが、頑張らないと。戦争に負けて国を追われた、流浪の元教皇猊下とその側近とか。もしくは、敗戦で逮捕されて戦犯として処刑される元教皇猊下とその側近とか。そんな未来図が、容易に想像がつくんですけど……」

あくまでも主はロマリアで、従はトリステインの対ガリア軍事同盟でなくては意味が無いのです。

それにトリステインは、最悪ゲルマニアと正式に結んでいる軍事同盟を利用して、ロマリアを影響下に置いて肥大化したガリアに二ヶ国で対応するという選択肢も存在していました。

ヴィットーリオとジュリオに関しては、敗戦で死んでいればこの秘密同盟は無かった事に出来ますし、生き残って亡命でもしてきたら、生活でも保障してガリア影響下にあるロマリアを揺さぶるのに使えば良い。

最悪外交のカードとして、ガリアに差し出すという選択肢もあります。

酷い話ですが、国同士の関係なんてこんな物で、相手を利用して如何に自国の国益を確保するのが重要だったのですから。

「確かに、ティーボ殿の言う未来図になってしまふ可能性も高いかもしれないね。そうならないように、我々も懸命に動いているんだけどね」

ラグドリアン湖の真ん中に浮かんでいた船から、トリステイン側のモンモランシ伯爵領に到着した私達は、その場に待っていたモンモランシ伯爵が預かっていた馬車と、才人が運転してきたパジェロ

に分乗して、一路トリスタニアへと出発します。

「へえ。馬車よりも揺れないし、速いんだねえ」

「ジュリオ殿、いつもの竜は？」

「あの子は、僕が乗っていなくても僕にちゃんと付いて来るからね」

ちゃっかりとパジェロの助手席に座っていたジュリオは、その上空に行き自分が乗って来た飛竜が飛んでいるのを確認していました。

「どうやら、ちゃんと主人を認識して付いて来ているようです。」

「助手席は、出来れば女性の方が良かったな」

慣れた手付きでパジェロのハンドルを握りながら、才人は隣の助手席に男であるジュリオが座っている事実に不満を述べます。

「とはいえ、才人がジュリオを嫌いというわけではなく、あくまでも世間一般の男性としての意見でしたが。」

「無理だと思うよ。その役割は、彼が担当しているから」

「確かに……（息が詰まりそうで、全然うらやましくないけど）」

ジュリオの言う通りで、パジェロの後部座席は真ん中に私が座り、その両脇をルイズとアンリエッタ女王が固めるという状態になっていました。

しかもアンリエッタ女王は、やけに私に引っ付いて腕を組んで来るのです。

勿論、彼女のかなり豊かな胸の感触が男の本能を刺激しますが、その隣ではやはりルイズが私と腕を組み、同じく胸を押し付けて来ました。

ルイズは言うほど胸が無いわけでもないので、アンリエッタ女王ほどではないにしても胸の感触が腕に伝わって来ますし、実は彼女は毎日欠かさず手入れをしているピンクブロンドの髪や、その体からとても良い匂いがするのです。

これは、私が決して変態というわけではなく。

ただ純然たる事実で、このとても良い匂いも男の本能をくすぐる存在だったのです。

ただ、私を挟んで二人が火花を飛ばしていたので、そんなリビド―はすぐに萎えてしまいました。

というか、この二人って本当に親友同士なのでしょうか？

「おほほ、すいません。つい、馬車に乗っている時の癖で、ティーポに抱き付いてしまいました」

「女王陛下、この車という乗り物はあまり揺れないので、もう腕を離されても大丈夫ですわ」

「癖とは、なかなか改まらないもので困ってしまいますね。ところで、ルイズはティーポの手を離さないのですね」

「それはもう、婚約者同士ですから。それと女王陛下、女王陛下というお立場の方が、特定の家臣を呼び捨てにするのは如何なものかと。ティーポは男性ですので、周囲の誤解を受けてしまうかもしれ

「ませんし。それはとても煩わしい事だと思えますわ」

「大丈夫ですわ。こういう場所ではか言いませんので」

お互いに口調は丁寧でしたが、要するにルイズが『とつと腕を離せや！ それと、人の婚約者を呼び捨てにするなや！』と言っていて、アンリエッタ女王は、『初めて乗る乗り物だから、手が離せないんじゃない！ 呼び捨ての件は、プライベートな時間だから問題ないんじゃない！』と言っていたのです。

そのせいで、後ろから恐ろしいほどのプレッシャーを受けたジュリオと才人は、こちらを完全に無視して二人で現実逃避を始めました。

「へえ、観光スポットとしても有名なのか。ロマリアの大聖堂」

「学生の修学旅行でも大人気だし、君も一度ミス・シエスタでも連れて来ればいい」

「いいねえ、そういうのって」

「（お前ら、俺を助けるよ！）」

私は無意味な旅行談義を続ける二人に内心でキレていましたが、このままなのも時間が勿体無いというか、どうしてこの組み合わせで走行中のパジエロという密室にいるのかはとても簡単な事でした。アンリエッタ女王が、私に聞きたい事があるらしいのです。

「これから、ガリアとの戦争に向けてどう準備を行うかです」

そんな事を急に聞かれてもというか、私程度で思い付く事など、あまり大した物ではないと思うのです。

ひたすらトリステインと、併合したアルビオンの統治と貴族達の統制を行い、国内の開発と、ガリアと対抗するための軍備を出来るだけ整える。

他には、タバサことシャルロット姫殿下を利用しての、オルレアン公派によるガリア国内分断工作と、既にジョゼフ派によって亡命や逃走などで国外に出ているオルレアン派の貴族達による軍隊の整備など。

この程度の事は誰にでも思い付きますし、それは私の担当ではありません。

マザリーニ枢機卿、ヴァリエール公爵、父や兄などが担当すれば良いのですから。

私が自分で出来る事と言えば、アンリエッタ女王から預かった水^{ンディーヌ}精霊騎士隊の訓練と、装備の充実くらいしか思い付きませんでした
が……。

以上のような事を、私は彼女に伝えます。

「概ね、他の重臣達と同じですね」

「条件が同じなら、人が思い付く事なんてあまり変わりませんよ」

「それでも、ティーボに聞いておきたかったです。なぜだかわかりますか？」

「さあ？」

「あなたは、自分を過小評価する癖が抜けていないようですね。テイボは、現在のトリステインでは五本の指に入る重要人物なのですよ」

他のメイジでは使えない新しい錬金の魔法の名手で、それによって様々な高品質な金属や宝石を作り出し、それによって巨万の富を得ていて、アルビオン戦役における功労者で、グラモン一族に属してはいるものの、既に侯爵として半ば独立状態にあり、ヴァリエール公爵の娘を婚約者にしていて、マザリーニ枢機卿とも良好な関係を維持している。

思えば、遠くに来たものだと思う私でした。

出来るだけ早く平和になって、錬金だけの日々に戻りたいものです。

「なるほど、俺の動向は常に周囲の注目を集めていると？」

「はい」

「そうですか。ならば……」

私は、まだ自分と腕を組んでいるアンリエッタ女王から離れるために、ルイズを自分の膝の上に乗せてから、窓際の元ルイズが居た席に移動していました。

私のまさかの行動に、アンリエッタ女王は私の腕を掴んでいた手を思わず離してしまいます。

「ねえ、ティーボ。重くないの？」

「いいや、全然」

前に亡くなったワルド子爵が、『ルイズはまるで羽のように軽いと評していましたが、確かにルイズは一応毎日体を鍛えている私から見ればとても軽いように感じられました。』

同時に、ルイズから流れるフローラルな香りが増して嬉しかったのは秘密でしたが。

主に、私の面子的な理由ですが。

「ティーボは、つれないですね」

「婚約者のある身ですので。なるべく疑われる状態は看過したくありませんから」

それから約一時間後、パジエロは無事にトリスタニアへと到着したのですが、私達はすぐにそのまま魔法学院へと戻っていました。とにかく、ここのところ色々とあり過ぎましたし、最近碌に学院の授業を受けた記憶が無かったので、早く元の学生生活に戻りたかったです。

「でも、もう放課後よね」

「何の、明日から普通に授業に出ればいいのさ」

学院横にある私の屋敷の庭で訓練を続ける、オンディーヌ水精霊騎士隊の隊員達を視界に入れながらルイズと話をしていると、私達の姿を確認し

たギーシュが近付いて声をかけてきます。

「もう用事は済んだのかい？」

「どんな内容か聞きたいか？」

「遠慮しておく」

ギーシュは、最近国家機密に触れる事の多くなった私やルイズを警戒していて、あまり余計な話を耳に入れないようにしているようでした。

父や王宮から言われた、私の護衛や水精靈騎士隊オンディーヌの管理を行ってそれに見合う報酬を受け取る。

空いた時間に、使い魔であるジャイアントモールに宝石を捜させて金を貯める。

主に、そんな生活を送っていたのです。

「ティーボ、水精靈騎士隊オンディーヌに関して、女王陛下は何か言っていたかい？」

「このまま訓練を続けて練度を上げるくらいだろう。装備とか物資の確保は、ミスタ・コルベールとか俺の仕事だから」

いくらガリアとの戦争が確実とはいえ、いつ起こるかわからない戦争に備えて常に水精靈騎士隊オンディーヌを臨戦態勢にしても、それは必要な時にはぶっ壊れて使い物にならなくなっているでしょう。

今は出来る事だけをして、力を蓄えるしかないのです。

「ところで、マリコルヌの姿が見えないけど」

「ああ、彼はね……」

ギーシュは処置なしと言った表情をしていましたし、私のマリコルヌという声を聞いたギムリやレイナルも、何となくバツの悪そうな顔をしていました。

「屋敷に戻ればわかるよ」

そうギーシュに言われて私達は屋敷の中に入りますが、そこでは水精靈騎士隊オンディーヌで後方支援を担当する女子生徒達が、母の指導を受けてポーシヨンや秘薬などの製造を行っていました。

いくら資金力が豊富でも節約するに越した事はなく、母も護衛の関係で私と同居するようになったので、自分なりに出来る事やっけてくれているようなのでした。

「母上」

「あら、おかえりなさい、ティーボ。それに、ルイズさんも」

母は私達に挨拶をしながらも、モンモランシー達に細かな指導を続けていました。

普段は天然な母でしたが、薬剤を調合している時はまるで別人のように真面目だったのです。

「傷薬ですか？」

「そうよ。騎士団なんて、生傷が絶えなさそうなもの」

母の替わりに答えるモンモランシーでしたが、その視線は調査中の薬剤から離れていませんでした。

「ティーボ、秘薬の調査には集中力も必須なんだ。後にしてくれ。ですよ？ ミス・サヴァン」

実は、屋敷に入った時から気が付いていたのです。

気が付かないわけがないのですし、『水精靈騎士隊オンディーヌの正規隊員であるお前が、なぜ秘薬を調査しているのか？』というツツコミが全員喉から出掛かってもいたのですが、なぜかそれを聞いたら負けなような気がして、誰もそれを言わなかったのです。

なぜ、外のギーシユ達が微妙な顔をしていたのか。

それは、マルコルヌがご機嫌な表情で秘薬の調査に参加していたからなのでした。

「ミス・サヴァン。完成しましたよ」

「あら、とても良い出来ですね。ミスタ・グランドプレは、色々と器用なんですね」

「いやあ、それほどでも」

以前の母に対する『報われぬ愛』発言など忘れたかのように、彼女に引っ付いて秘薬の調査まで覚えてしまったマリコルヌに、私達はただ顔を引き攣らせてしまうのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2108m/>

ゼロ魔転生物一人称練習作品

2011年8月14日23時52分発行